

田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡 福島鹿鳴下遺跡・福島椿森遺跡

国道254号道路改築工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書 第1集

(本文編)

1998

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡 福島鹿鳴下遺跡・福島椿森遺跡

国道254号道路改築工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書 第1集

(本文編)

1998



1 全景(東から)



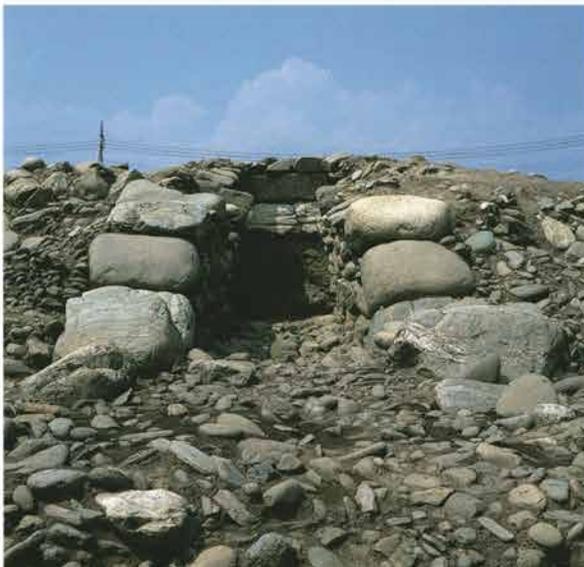
2 北側貼石(上から)



3 玄室正面(南から)



4 東側石室側壁

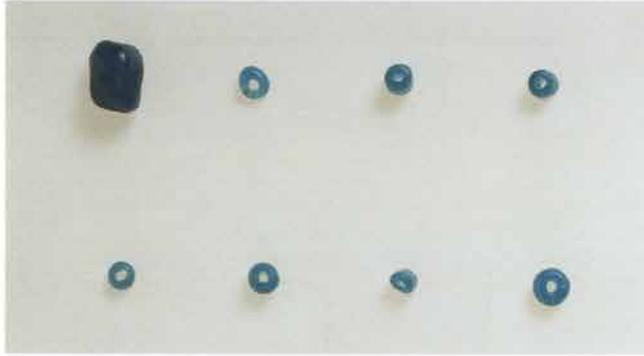


5 石室正面(南から)



6 東側墳丘内列石と墳丘断面

口絵2 出土遺物



1 田篠塚原遺跡出土ガラス玉



4 田篠塚原3号墳出土耳環



2 福島鹿嶋下遺跡出土土偶



5 田篠塚原4号墳出土耳環



3 福島鹿嶋下1号住出土滑石製品



6 田篠塚原3号墳出土髹灰金具



7 田篠塚原3号墳出土刀装金具

序

国道254号線バイパス（通称富岡バイパス）は、近年交通渋滞の著しい富岡市、甘楽町、吉井町の市街地を迂回する道路です。すでに開通している富岡市部分では、渋滞の解消のみならず、新しい町づくりの起点となって、地元の方々の期待に答えています。

今回本書で報告する田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡は鎚川から県道小幡線までの富岡市と甘楽町にまたがる部分です。

当事業団では平成6年9月から8年8月にかけての発掘調査を行い、平成9年4月から10年3月まで整理事業を行いました。

縄文時代から古墳時代にかけての集落、古墳群、畠跡など数多くの貴重な発見が相次ぎました。中でも、古墳時代の滑石工房跡は古代における地域の特産物との関わりを知る手がかりとなるものです。また、しの塚古墳は貼り石状の葺き石を持つ全国でも珍しい古墳であり、富岡市教育委員会によって移築保存されました。

発掘調査から報告書刊行まで群馬県道路建設課、富岡土木事務所、富岡市教育委員会、甘楽町教育委員会、地元関係者の皆様にはご指導、ご協力を賜りました。深く感謝申し上げます。併せてこれらの成果が地域の歴史を解明するために活用されることを願い、序といたします。

平成10年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**

例 言

- 1 本報告書は国道254号線道路改良事業（富岡バイパス建設）に伴い実地した、田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 田篠塚原遺跡は群馬県富岡市田篠、福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡は群馬県甘楽郡甘楽町に所在する。遺跡名は各遺跡所在地の大字・小字名を組み合わせた。
- 3 国道254号改良事業は群馬県土木部富岡土木事務所が事業主体であり、発掘調査および整理事業は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実地した。
- 4 発掘調査および整理事業の期間ならびに体制は下記のとおりである。

発掘調査 平成6年9月15日から平成8年8月31日（カッコ内は担当年度）

担当 石坂 茂(6) 杉山秀宏(6) 高井佳弘(6) 諏訪 晶(6・7) 飯田陽一(7・8)
松田 猛(7) 齋藤利昭(8) 長岡将之(8)

整理事業 平成9年4月1日から平成10年3月31日

担当 諏訪 晶 石坂 茂(4～9月) 飯田陽一(10～3月)

石関富美子 宇佐美征子 狩野弘子 岸 弘子 佐藤美代子 田村恭子 馬場信子 儘田澄子
茂木良子 吉澤照恵 柳沢有里子 横坂英美

事務局 菅野 清 原田恒弘 渡部 健 赤山容三 神保侑史 能登 健 真下高幸 小淵 淳

国定 均 笠原秀樹 須田朋子 宮崎忠司 井上 剛 吉田有光 柳岡良宏 岡島伸昌 大沢友治
吉田恵子 内山佳子 星野美智子 羽鳥京子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり
本地友美 松下次男 浅見宣記 吉田 茂

保存処理 関 邦一 土橋まり子 小材浩一 荻原妙子

遺物写真 佐藤元彦

機械実測 岩淵節子 小菅優子 富沢スミ江 長沼久美子 南雲富子 光安文子

他に職員の右島和夫、井上昌美、大西雅広、坂口 一、原 雅信、松村和男、山口逸弘の助力を得ている。

- 5 本文の執筆は1章1を真下高幸、3章2-1・4章1・2と8章2を杉山秀宏、6章を齋藤利昭に依頼し、1章から4章(依頼部分を除く)を諏訪が、5章・8章1・遺物観察表を飯田が行った。また、滑石製品の分類は石坂が行った。なお、各分析の報告は文頭に委託先を記した。
- 6 発掘調査、整理事業の期間に次の方の指導・助言を得ている。(敬称略)
伊藤雅文 梅沢重昭 大塚初重 加部二生 河上邦彦 小林三郎 坂本和俊 桜場一寿 鹿田雄三
志村 哲 杉山晋作 関 茂 外山和夫 土生田純之 村杜仁史 富岡市教育委員会 甘楽町教育委員会
- 7 鑑定・同定・分析を次の方に依頼した。(敬称略)
人骨・歯、獣骨 宮崎重雄(群馬県立大間々高校)
石室内の石材 陣内主一、高橋武夫(群馬県立自然史博物館)
石器石材・墳丘上の石材 飯島静男(群馬地質研究会)
- 8 その他、次の機関に業務委託を行った。
火山灰同定・プラント・オパール分析・樹種同定 等
株式会社 古環境研究所、株式会社 パレオ・ラボ
空中写真撮影、古墳平面測量 技研測量設計株式会社
田篠塚原4号墳石室側面・断面測量、石鏃・滑石未製品等の実測 株式会社 測研
- 9 本遺跡の出土遺物、写真、各種図面類は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 遺構図中方位記号はすべて座標上の北を示している。また、本文中の軸方向等の角度記載も座標北を元に計測したものである。
- 2 浅間山を給源とする3枚のテフラについては、As-A、As-B、As-Cと呼称した。
- 3 本文挿図中の縮率は以下を基本としたが、異なる縮率のものが同一図に記載された場合には※印を番号中に付し、併せてスケールを記した。

(遺構) 1/30→竈・貯蔵穴 1/40→土坑・墓坑 1/50→古墳石室図

1/60→竪穴住居・掘立柱建物・配石 1/80→溝 1/100→古墳墳丘図

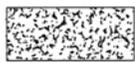
(遺物) 1/1→石鏃・石錐 石製装飾品 2/3→石匙・石槍 1/2→土偶・耳栓・石製装飾品

1/3→縄文土器(破片)・加工痕のある剝片・鉄製品・小型須恵器

1/4→縄文土器(復元)・土師器・須恵器類 1/8→石棒・石皿等の大型石製品

なお、遺構図の土層挿図には、平面図の2倍の縮率にしたものがある。

- 4 遺構面積は、1/30第2原図からデジタル・プランメーターによる3回計測の平均値を充てた。
- 5 遺構図においては下図のトーンや記号を用いた。



焼土



炭化物



土器

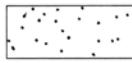


石器・石製品

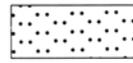
- 6 古墳の石材については下図のトーンを用いた。また、以下の略記号を使用した。



チャート



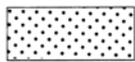
砂岩



凝灰岩



結晶片岩



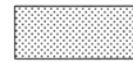
安山岩



その他の
堆積岩



その他の
変成岩



その他の
火成岩

駒形1墳、塚原2・3墳(陣内分類) A:安山岩 B:珪岩 C:チャート D:輝緑岩 E:流紋岩
F:砂岩 G:礫岩 H:輝岩 I:赤色珪質班岩 J:角閃岩 K:ひん岩 L:凝灰岩
M:紅簾絹雲母石墨緑泥片岩 M2:紅簾緑泥片岩 M3:点紋絹雲母石墨緑泥片岩
M4:点紋絹雲母石墨片岩 M5:点紋絹雲母緑泥片岩 M6:点紋石墨片岩 M7:点紋緑泥片岩
M8:絹雲母石墨緑泥片岩 M9:絹雲母石墨片岩 M10:絹雲母緑泥片岩 M11:石墨緑泥片岩
M12:緑泥片岩

塚原4・5・6墳(高橋分類) A:安山岩 Ac:粗粒安山岩 Af:細粒安山岩 Ab:黒色安山岩
Sm:雲母石英片岩 Sg:緑色片岩 Se:珪質準片岩 Pd:かんらん岩 Bm:変玄武岩
Ba:変質玄武岩 Ry:流紋岩 Po:ひん岩 Di:輝緑岩 Qp:石英班岩 T:凝灰岩
S:凝灰質砂岩 Ch:チャート Tw:白色凝灰岩 Ss:砂岩

- 7 石器類の表現にあたって、自然面は点描、節理面には実線の組み合わせを使用した。
- 8 土層説明、土器類の色調説明で『標準土色帖』を使用したものには色相・明度・彩度をすべて記し、相対的な色彩の観察でを使用した「～色」と区別した。
- 9 その他、遺物観察記載および写真図版については、分冊中の凡例に記した。

報告書抄録

ふりがな	たじのつかはらいせき・ふくしまこまがたいせき・ふくしまかしましたいせき・ふくしまつばきもりいせき
書名	田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡
副書名	一般国道254号線（富岡バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第1集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第244集
編著者名	石坂 茂・諏訪 晶・飯田陽一
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-0061 群馬県勢多郡北橘村下箱田784-2 TEL 0279-52-2511
発行年月日	平成10年3月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
田篠塚原	富岡市田篠	102105		36 15 16	951201	9,642	道路建設
	字塚原			138 54 22	～960331		
福島駒形	甘楽郡甘楽町	103845		36 15 16	940901	7,710	道路建設
	福島字駒形			138 54 35	～950228		
福島鹿嶋下	甘楽郡甘楽町	103845		36 15 18	960401	4,550	道路建設
	福島字鹿嶋下			138 54 57	～960815		
福島椿森	甘楽郡甘楽町	103845		38 15 22	960401	1,450	道路建設
	福島字椿森			138 55 08	～960531		

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
田篠塚原	墓	弥生～古墳	方形周溝墓	1基	ガラス玉、耳環、鉄鏃	しの塚古墳は富岡市教育委員会によって移築保存
	居住		古墳	7基	刀装具、弥生土器、土師器、須恵器	
	生産		竪穴住居	13軒		
	その他		畠	1面		
福島駒形	墓	弥生～古墳	古墳	1基	滑石模造品、土師器、須恵器	滑石工房跡
	居住		竪穴住居	34軒		
	その他		掘立柱建物柱	11棟		
福島鹿嶋下	居住	縄文～古墳	配石	5基	縄文土器、土偶、石棒	滑石工房跡
			竪穴住居	20軒	滑石模造品、土師器	
福島椿森	墓	中世～近世	墓坑	3基	宋銭、かわらけ、陶磁器	
	その他		土坑	61基		

目 次

口絵		6. 集石遺構	230
序		7. 遺構外出土遺物	231
例言・凡例・報告書抄録		第5章 福島鹿嶋下遺跡	
第1章 調査の経緯と方法		1. 遺跡の概要	233
1. 調査の経緯	1	2. 縄文時代の遺構と遺物	
2. 調査の方法	2	1. 配石遺構	234
3. 調査の経過	3	2. その他の遺構出土遺物	245
4. 基本土層	5	3. 遺構外出土遺物	245
第2章 地理的・歴史的環境		3. 弥生時代以降の遺構と遺物	
1. 地理的環境	6	1. 竪穴住居	261
2. 歴史的環境	7	2. 竪穴状遺構	305
第3章 田篠塚原遺跡		3. 土坑	307
1. 弥生時代の遺構	11	4. 掘立柱建物	310
1. 竪穴住居	12	5. 溝	312
2. 方形周溝墓・円形周溝状遺構	40	6. 方形周溝状遺構	319
3. 畠	42	7. 遺構外出土遺物	320
2. 古墳時代の遺構	43	第6章 福島椿森遺跡	
1. 古墳	43	遺跡の概要	321
2. 特殊土坑	115	1. 墓坑	322
3. その他の遺構		2. 土坑	324
1. 土坑	118	3. 溝	331
2. 墓坑	123	4. 掘立柱建物	334
3. 溝	124	第7章 自然科学分析	
4. 畠	126	1. 田篠塚原遺跡および福島駒形遺跡	
5. IV区遺構	128	の自然科学分析	336
6. 遺構外出土遺物	130	2. 田篠塚原遺跡6号住居出土炭化材	
第4章 福島駒形遺跡		樹種同定	344
1. 弥生・古墳時代の遺構	135	3. 田篠塚原・福島駒形・福島鹿嶋下遺跡	
1. 竪穴住居	136	出土炭化材樹種同定	345
2. 古墳	196	4. しの塚古墳の調査	349
2. その他の遺構		5. しの塚古墳の石材	363
1. 掘立柱建物	206	6. 田篠塚原遺跡の古墳出土の人骨類	
2. 土坑	217	と獣骨	367
3. 溝・畝状遺構	227	第8章 成果と問題点	
4. 井戸	229	1. 集落と出土遺物の性格	377
5. 柱列状遺構	229	2. 古墳について	378

第114図	土坑(4)	121
第115図	土坑出土遺物	122
第116図	1号墓	123
第117図	1号溝	124
第118図	2、3号溝	125
第119図	1、2号畠	126
第120図	3号畠及び出土遺物	127
第121図	IV区調査地点図及び土層断面	128
第122図	IV区A地点(上 As-A 軽石下面 下 As-B 軽石下面)	129
第123図	遺構外出土遺物(1)	130
第124図	遺構外出土遺物(2)	131
第125図	遺構外出土遺物(3)	132
第126図	遺構外出土遺物(4)	133
第127図	遺構外出土遺物(5)	134
福島駒形遺跡		
第128図	福島駒形遺跡 古墳時代の遺構	135
第129図	1号住居及び出土遺物	136
第130図	2号住居	137
第131図	2号住居出土遺物	138
第132図	3A、3B号住居模式図	138
第133図	3B号住居及び出土遺物	139
第134図	3A号住居及び出土遺物	140
第135図	4号住居及び出土遺物	141
第136図	5号住居	142
第137図	5号住居出土遺物	143
第138図	6号住居	144
第139図	6号住居竈及び出土遺物	145
第140図	6号住居出土遺物	146
第141図	7号住居	147
第142図	7号住居竈断面図及び出土遺物(1)	148
第143図	7号住居出土遺物(2)	149
第144図	8号住居	149
第145図	9号住居及び出土遺物	150
第146図	10号住居及び出土遺物	151
第147図	11号住居	152
第148図	11号住居出土遺物(1)	153
第149図	11号住居出土遺物(2)	154
第150図	12号住居及び出土遺物	155
第151図	13号住居	156
第152図	13号住居出土遺物(1)	157
第153図	13号住居出土遺物(2)	158
第154図	14号住居	159
第155図	14号住居出土遺物	160
第156図	15号住居	160
第157図	15号住居出土遺物	161
第158図	16号住居	162
第159図	16号住居出土遺物	163
第160図	17号住居	164
第161図	17号住居出土遺物	165
第162図	18号住居	165
第163図	19号住居	166
第164図	19号住居出土遺物	167
第165図	20号住居	167
第166図	20号住居出土遺物	168
第167図	21号住居	168
第168図	21号住居出土遺物	169
第169図	22号住居	170
第170図	22号住居出土遺物	171
第171図	23号住居	172
第172図	23号住居出土遺物	173
第173図	24号住居	173

第174図	25号住居	174
第175図	25号住居出土遺物	175
第176図	26号住居	176
第177図	26号住居出土遺物(1)	177
第178図	26号住居出土遺物(2)	178
第179図	27号住居	179
第180図	27号住居出土遺物	180
第181図	28号住居	181
第182図	28号住居出土遺物	182
第183図	29号住居	183
第184図	29号住居出土遺物(1)	184
第185図	29号住居出土遺物(2)	185
第186図	29号住居出土遺物(3)	186
第187図	30号住居	187
第188図	30号住居出土遺物	188
第189図	31号住居	189
第190図	31号住居出土遺物	190
第191図	32号住居	191
第192図	32号住居出土遺物	192
第193図	33号住居	193
第194図	33号住居出土遺物	194
第195図	34号住居	194
第196図	34号住居竈及び出土遺物	195
第197図	1号墳現況図	196
第198図	1号墳全体図	197
第199図	1号墳石室展開図	198
第200図	1号墳石室使用石材(1)	199
第201図	1号墳石室使用石材(2)	200
第202図	1号墳石室裏込め、列石平面 及び前庭断面図	201
第203図	1号墳墳丘、石室断面図 及び石敷き平面図	202
第204図	1号墳遺物出土状態	203
第205図	1号墳石室内遺物出土状態 及び出土遺物(1)	204
第206図	1号墳出土遺物(2)	205
第207図	1号掘立柱建物	206
第208図	2号掘立柱建物	207
第209図	3号掘立柱建物	208
第210図	4号掘立柱建物	209
第211図	5号掘立柱建物	210
第212図	6号掘立柱建物	211
第213図	7号掘立柱建物	212
第214図	8号掘立柱建物及び出土遺物	213
第215図	9号掘立柱建物	214
第216図	10号掘立柱建物	215
第217図	11号掘立柱建物	216
第218図	土坑(1)	217
第219図	土坑(2)	218
第220図	土坑(3)	219
第221図	土坑(4)	220
第222図	土坑(5)	221
第223図	土坑(6)	222
第224図	土坑(7)	223
第225図	土坑(8)	224
第226図	土坑出土遺物	226
第227図	1・2号溝及び畝状遺構	227
第228図	3・4・5号溝	228
第229図	1号井戸及び柱列状遺構	229
第230図	1号集石遺構出土遺物	230
第231図	遺構外出土遺物(1)	231
第232図	遺構外出土遺物(2)	232

福島鹿嶋下遺跡

第233図	福島鹿嶋下遺跡全体略図	233
第234図	1号配石	234
第235図	1号配石出土土器	235
第236図	1号配石出土土器	236
第237図	2号配石および出土土器(1)	237
第238図	2号配石出土土器(2)・石器	238
第239図	3号配石および出土土器(1)	239
第240図	3号配石出土土器(2)・石器(1)	240
第241図	3号配石出土土器(2)	241
第242図	4号配石	241
第243図	4号配石出土土器	242
第244図	4号配石出土土器	243
第245図	5号配石および出土遺物	244
第246図	その他遺構出土遺物	245
第247図	その他遺構出土の縄文時代石器	246
第248図	遺構外出土土器(1)	247
第249図	遺構外出土土器(2)	248
第250図	遺構外出土土器(3)	249
第251図	遺構外出土土器(4)	250
第252図	遺構外出土土器(5)	251
第253図	遺構外出土土器(6)	252
第254図	土偶	253
第255図	遺構外出土土器(1)	254
第256図	遺構外出土土器(2)	255
第257図	遺構外出土土器(3)	256
第258図	遺構外出土土器(4)	257
第259図	遺構外出土土器(5)	258
第260図	遺構外出土土器(6)	259
第261図	遺構外出土土器(7)	260
第262図	1号住居	261
第263図	1号住居断面	262
第264図	1号住居遺物出土状態	262
第265図	1号住居出土遺物	263
第266図	1号住居出土滑石製品(1)	264
第267図	1号住居出土滑石製品(2)	265
第268図	1号住居出土滑石製品(3)	266
第269図	1号住居出土滑石製品(4)	267
第270図	2号住居	268
第271図	2号住居断面	269
第272図	2号住居出土遺物	269
第273図	3号住居	270
第274図	3号住居断面および遺物出土状態	271
第275図	3号住居出土遺物	272
第276図	4号住居および出土遺物	273
第277図	5号住居	274
第278図	5号住居遺物出土状態および出土遺物	275
第279図	6号住居	276
第280図	6号住居出土遺物(1)	277
第281図	6号住居出土遺物(2)	278
第282図	7号住居	279
第283図	7号住居断面・掘り方・出土遺物	280
第284図	8号住居	281
第285図	8号住居出土遺物	282
第286図	9号住居	283
第287図	9号住居出土遺物	284
第288図	10号住居	285
第289図	10号住居出土遺物	286
第290図	11号住居	287
第291図	11号住居出土土器	288
第292図	11号住居滑石製品	289
第293図	12号住居	290
第294図	12号住居断面	291

第295図	12号住居出土遺物	291
第296図	13号住居および出土遺物	292
第297図	14号住居	293
第298図	14号住居出土遺物	294
第299図	15号住居および出土遺物	295
第300図	16号住居	296
第301図	16号住居出土土器	297
第302図	17号住居	298
第303図	17号住居出土土器	299
第304図	18号住居および出土遺物	300
第305図	19号住居	301
第306図	19号住居竈および遺物出土状態	302
第307図	19号住居出土遺物	303
第308図	20号住居および出土遺物	304
第309図	1号竪穴状遺構および出土遺物	305
第310図	2号竪穴状遺構および出土遺物	306
第311図	土坑(1)	307
第312図	土坑(2)	308
第313図	土坑出土遺物	309
第314図	1号掘立柱建物柱	310
第315図	2号掘立柱建物柱およびピット群	311
第316図	1号溝	312
第317図	2・3・4・6号溝	313
第318図	2・3・4・6号溝断面	314
第319図	2・3号溝出土遺物	315
第320図	4号溝出土遺物(1)	315
第321図	4号溝出土遺物(2)	316
第322図	4・6号溝出土遺物(3)	317
第323図	5・7号溝	318
第324図	方形周溝状遺構	319
第325図	遺構外出土遺物	320

福島椿森遺跡

第326図	福島椿森遺跡全体図	321
第327図	1号墓坑および出土遺物	322
第328図	2・3号墓坑および出土遺物	323
第329図	土坑(1)	324
第330図	土坑(2)	325
第331図	土坑(3)	326
第332図	土坑(4)	327
第333図	土坑(5)	328
第334図	土坑(6)および土坑出土遺物	329
第335図	1・2・6号溝	331
第336図	3・4号溝	332
第337図	5・7号溝	333
第338図	掘立柱建物	334
第339図	ピット列	335

第7章 挿図目次

福島駒形遺跡IV区の土層柱状図	338
福島駒形遺跡VI区の土層柱状図	338
田篠塚原遺跡II区の土層柱状図	339
田篠塚原遺跡第2地点の土層柱状図	339
田篠塚原遺跡VI区西壁における プラント・オパール分析結果	341
田篠塚原遺跡VI区西壁における 花粉組成図	343
しの塚古墳の調査	
簡易貫入試験位置図	350
石材破損詳細図	356
玄室・羨道変位断面図キープラン	358
玄室・羨道側壁断面図	359
羨道側壁変形断面図	360
石室構造モデル図	360
玄室・羨道石積み構成図	361
しの塚古墳の石材	
段丘礫の調査地点	363
段丘礫層の礫種	364
礫の形状	364
礫の長径の配列方向	365
古墳出土の人骨類と獣骨	
4号墳石室内 歯・骨出土状況図	368

表目次

周辺遺跡一覧	9・10
塚原古墳群番号対照表	43
田篠塚原2号墳石室石材一覧	57
田篠塚原3号墳石室石材一覧	65
田篠塚原4号墳石室石材一覧	81~83
田篠塚原5号墳石室石材一覧	96・97
田篠塚原6号墳石室石材一覧	106・107
田篠塚原遺跡特殊土坑一覧	117
田篠塚原遺跡土坑一覧	122
福島駒形1号墳石室石材一覧	199・200
福島駒形遺跡土坑一覧	225・226
福島鹿島下遺跡土坑一覧	309
福島椿森遺跡土坑一覧	330
自然科学分析	
福島駒形遺跡のテフラ検出分析結果	337
田篠塚原遺跡のテフラ検出分析結果	337
田篠塚原遺跡のプラント・オパール分析結果	341
田篠塚原遺跡出土炭化材の樹種同定結果	344
田篠塚原・福島駒形・福島鹿島下遺跡の 炭化材樹種同定結果	348
福島駒形遺跡の住居別出土樹種	348
しの塚古墳の調査	
墳丘盛土の試験結果	350
墳丘盛土の締め固め特性	351
簡易貫入試験結果	351
墳丘盛土の土質による区分	351
土質試験結果の要約	351
墳丘盛土の締め固めエネルギー	352
石室石材数	354
腰石寸法の平均値・最大値・最小値	354
積石寸法の平均値・最大値・最小値	355
古墳出土の人骨類と獣骨	
ヒトの歯の記録	371~374
田篠塚原4号墳骨片類一覧	375
その他骨片類の記録	376
田篠塚原4号墳出土イヌの歯計測値	376
福島駒形1号墳出土ウマの歯計測値	376

第1章 調査の経緯と方法

1 調査の経緯

本遺跡群の発掘調査の端緒は群馬県南部を東西に横断する一般国道254号線のうち富岡バイパス建設工事に起因する。バイパスは富岡市田島から甘楽郡甘楽町大字福島地内にかけての総延長7,890mを測る。富岡市分は昭和33年3月28日に甘楽町との境界付近の現254号線に接続する都市計画が決定された。その後、昭和60年4月16日に甘楽町「県道下高尾小幡線」まで計画が変更されたことにより遺跡群を通過することになった。バイパスの一部は富岡市街の北側を迂回し、すでに供用が開始されている。調査はバイパス東端の延長線上、鎭川右岸から甘楽町内に至る延長約1,400mが対象となった。本遺跡内に所在する「塚原古墳群」は以前から学術的に貴重な遺跡として周知されている。平成4年3月4日・12日の富岡土木事務所との協議で「篠塚古墳群」については、隣接する住宅団地の日照権や環境、景観等で線形の変更や高架橋での現状保存は困難とされ

た。今後の計画では用地買収を平成4年度に完了させ、平成5年度に発掘調査を、終了した後工事着工とされた。同年6月23日「しの塚古墳」の扱いについて、富岡土木事務所から富岡市教育委員会に協議書が提出された。これを受けて富岡市文化財調査員会議が行われ、同年8月20日「文化財保護の見地から、可能な限り各古墳を徹底調査した上で、移築保存の処置をとる」「発掘調査は埋蔵文化財調査事業団で実施する」との答申がなされた。同年9月16日、古墳の移築・説明版設置等は市教育委員会が行うことが決定された。本調査に先立ち富岡市田篠地区の試掘調査を平成5年度に県教育委員会文化財保護課が実施する予定であったが用地の一部が未解決のため計画は中断された。その後県教育委員会の調整により群馬県土木部（道路建設課）と当埋蔵文化財調査事業団と委託契約が締結され、平成6年9月1日福島駒形遺跡から調査を開始した。



第1図 遺跡位置図（国土地理院発行「長野」1：200,000 使用）

2 調査の方法

調査地は富岡市東端から甘楽町にかけての地域であり、四遺跡が対象となる。各遺跡共にグリットを設定し調査を行った。また、遺跡によっては道路等の分断により区分けをしている。以下、遺跡ごとに概略する。

田篠塚原遺跡

調査区に4m四方のメッシュをかぶせられるように、遺跡地の南西方向に原点A A、0(国家座標X=28500、Y=-82100)を設定した。グリットは南西が基準となり、南北軸をアルファベットで、東西軸を算用数字で表した。また、北方向は100mごとに大区画とし、同じアルファベットで表しているため、2桁になっている。(AA~AYと進み、次にBAとなる)

本遺跡では道に区切られている箇所では区割りをしているため、I~IV区に分けている。遺構番号等については、区を意識せずに通し番号を付けた。

福島駒形遺跡

田篠塚原遺跡同様に、調査区に4m四方のメッシュをかぶせられるように、遺跡地の南西方向に原点A、0(国家座標X=28600、Y=-81700)を設定した。ただし、大区画設定の必要がないため、南北軸もアルファベット1桁で表す。

本遺跡では、道に区切られている箇所、及び調査

手順の都合によりI~VI区に分けている。遺構番号等については、区を意識せずに通し番号を付けた。

福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡

他の遺跡と同様なグリット設定で、遺跡地南西方向に、原点A A、0(国家座標X=28600、Y=-81300)をとった。また、北方向へは100mごとの大区画を設定するため、アルファベットは2桁となる。両遺跡地ともに区分けはしていない。



第2図 遺跡位置図 (富岡市都市計画図 1:10,000 使用)

3 調査の経過

国道254号線道路改築工事に伴う4遺跡の発掘調査は、平成6年9月に福島駒形遺跡より始まり、平成8年8月に福島椿森遺跡の現場調査作業が終了した。以下、遺跡ごとに概略する。

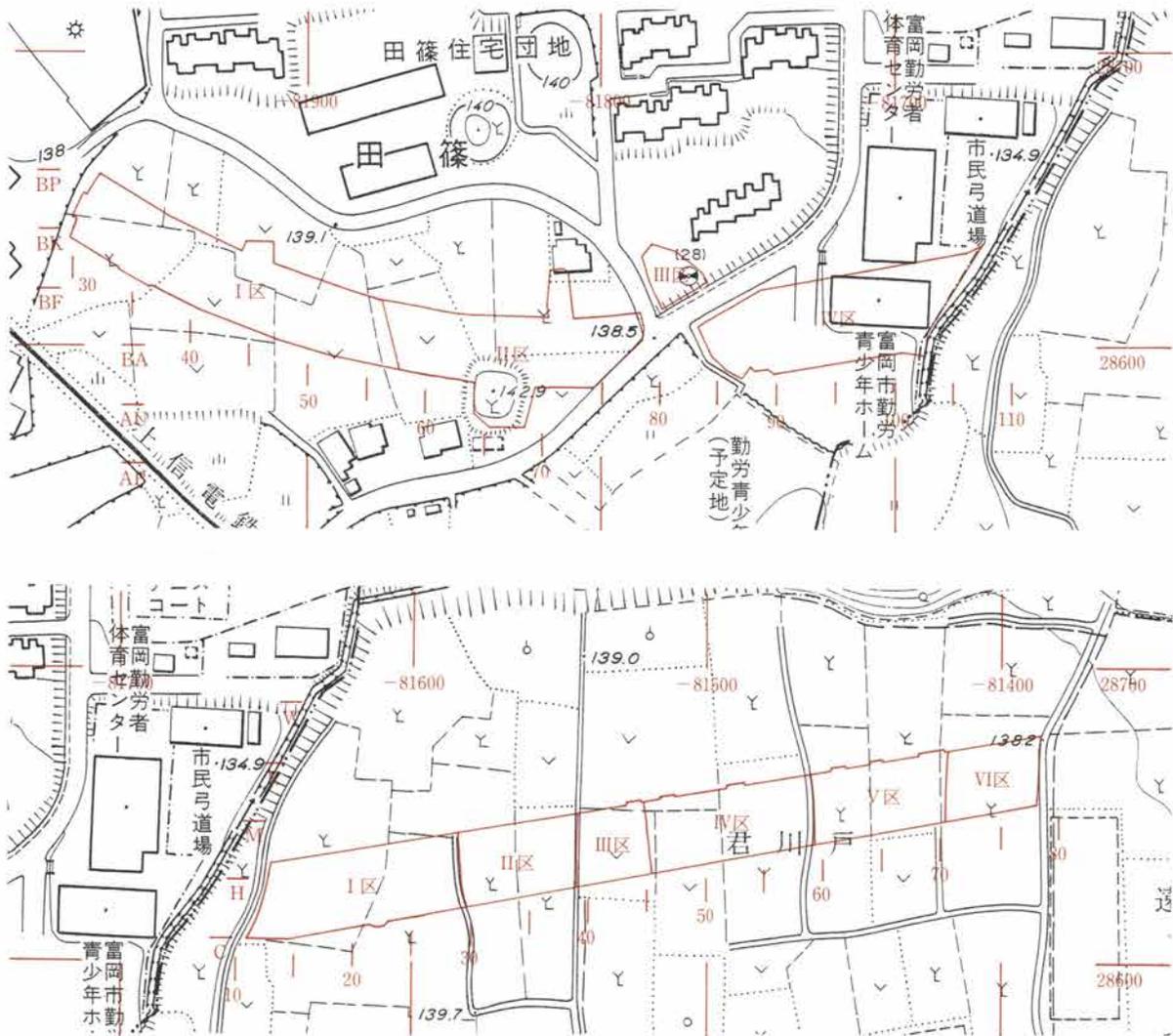
福島駒形遺跡

平成6年9月より区分けをしたI区より調査に入る。遺構確認作業終了後、それぞれの住居跡、土坑などを精査し、10月上旬にはII区へ移る。II区、III区も同様に調査を行い、11月上旬には終了。IからIII区までのバルーン使用の写真測量を行う。11月中旬、諸事情によりVI区を調査。遺構数は少なくV区へと続いて調査を行う。11月後半より12月上旬にかけてV区の精査を行い、並行してIV区の遺構確認作

業を行った。平成7年1月上旬にはIVからVI区までの遺構調査をほぼ終了。写真測量を行う。なお、農道部分は道を付け替え調査を行った。また、I区の1号古墳は平成6年9月の調査開始時より、他の遺構と並行して調査を行ってきた。10月後半には石室内の調査、12月から1月にかけては裏込め、前庭等の調査を行い、2月末にほぼ終了した。

田篠塚原遺跡

本遺跡の調査は、平成6年12月より準備を進め、福島駒形遺跡調査と並行して1月より調査に入った。I区の西側より遺構確認を行い、住居跡、土坑、畠跡等を順次精査した。IからIII区の前以外の遺構は、ほぼ12月までに終了。IV区は平成8年1、2月に調査を行った。7基の古墳の調査は他の遺構と並



第3図 グリット配置図 上・田篠塚原 下・福島駒形 (富岡市都市計画図 1:1,500 使用)

第1章 調査の経緯と方法

行して行い、塚原古墳群中、最大規模を誇るしの塚古墳(塚原14号墳)の調査は、平成7年3月に着手した。4月には上段部より貼石状の葺き石を確認。7月までに墳丘、石室、前庭等を確認し、空中写真撮影を行った。その後、墳丘断ち割り、裏込め調査、石室石材の計測、石室床面精査及び断ち割り等の調査を行い、平成8年3月にほぼ終了した。なお、平成7年6月25日に現地説明会を行い、396名の来訪者を集めた。

福島鹿嶋下遺跡

平成8年4月より調査に入った。4月から5月前半にかけて掘立柱建物等の調査を行い、5月中旬以降、竪穴住居跡、土坑等の調査に入った。6月上旬には周溝墓状遺構の調査、下旬には空中写真撮影を実施した。7月上旬には配石遺構の調査を行い、7

月後半、現場事務所のプレハブを解体・撤去し、その下の遺構確認を行う。竪穴住居、配石遺構を確認し、調査を行う。8月中旬には現場における作業を終了した。

福島椿森遺跡

平成8年4月より福島鹿嶋下遺跡と並行して調査に入る。遺構数は少なく、5月上旬には工事用道路部分を残して調査終了。全景写真撮影後、道路を付け替えて調査を行い、5月後半には調査を終了した。



第4図 グリッド配置図 上・福島鹿嶋下 下・福島椿森 (富岡市都市計画図 1:2,500 使用)

4 基本土層

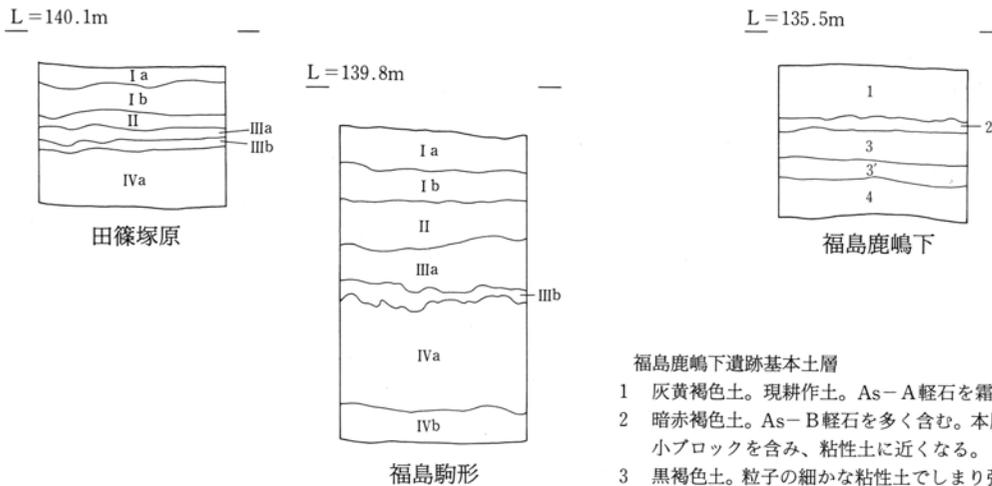
鐺川の段丘は上下2段があり、本遺跡はその下位段丘面上に位置する。上位段丘の堆積物には、基盤岩（主に富岡層群）の上に砂礫層、粘土層等がみられるが、下位段丘では基盤岩の上に砂礫層がみられるのみである。

田篠塚原遺跡では、I区の北西部において基本土層を設定した。現耕作土にはAs-A軽石が混入し、下層にはAs-B、C軽石を混入する層が確認できた。さらに下層では地山の黄褐色土となる。基本土層をとった地点とは異なるが、同じI区でさらに深掘したところ砂礫層が確認された。上述した基盤岩上層の砂礫層にあたるものと思われる。

福島駒形遺跡では、I区で基本土層を設定した。田篠塚原遺跡の基本土層とほぼ同様であった。本遺跡では古墳時代の住居跡が確認され、その住居の掘り込み面がIIIa層中にあると考えられるが、明確には判断できなかった。

福島鹿嶋下遺跡では、調査区の北西隅で基本土層を設定した。本遺跡でも浅間山噴火による軽石層（As-A～C軽石）が確認された。土器片等の混入は3層中に集中していた。

福島椿森遺跡では、攪乱が多く、遺跡を通しての基本土層を設定していない。As-B軽石層が遺跡北西側の低地部分で確認できた。



田篠塚原、福島駒形遺跡基本土層

- I a 暗灰黄色土。現在の畑耕作土。As-A軽石を多量に含む。
- I b 暗灰黄色土。現在の畑耕作による攪乱を受けない部分。
- II 黒褐色土。As-B軽石を含む。ややしまり弱い。
- IIIa 黒褐色土。As-C軽石を含む。しまり強く粘性あり。
- IIIb IIIa層とIVa層の漸移層。
- IVa におい黄褐色土。河川による堆積砂層。
- IVb におい黄褐色土。IVa層よりも色調明るく、粒径も細かい。

福島鹿嶋下遺跡基本土層

- 1 灰黄褐色土。現耕作土。As-A軽石を霜降状に含む。
- 2 暗赤褐色土。As-B軽石を多く含む。本層の下層では黄褐色土小ブロックを含み、粘性土に近くなる。
- 3 黒褐色土。粒子の細かな粘性土でしまり強い。As-C軽石と思われる白色粒を霜降状に含む。
- 3' 3層と4層の漸移層。
- 4 灰オリーブ色土。やや粒子の細かな粘性土。小礫を含む。

第5図 基本土層

第2章 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

本報告の遺跡は、鐮川と雄川の合流点近く、鐮川右岸に位置する田篠塚原遺跡、そして東へ福島駒形、福島鹿嶋下、福島椿森遺跡と続く四遺跡である。現在の富岡市から甘楽郡甘楽町にかけての地域である。

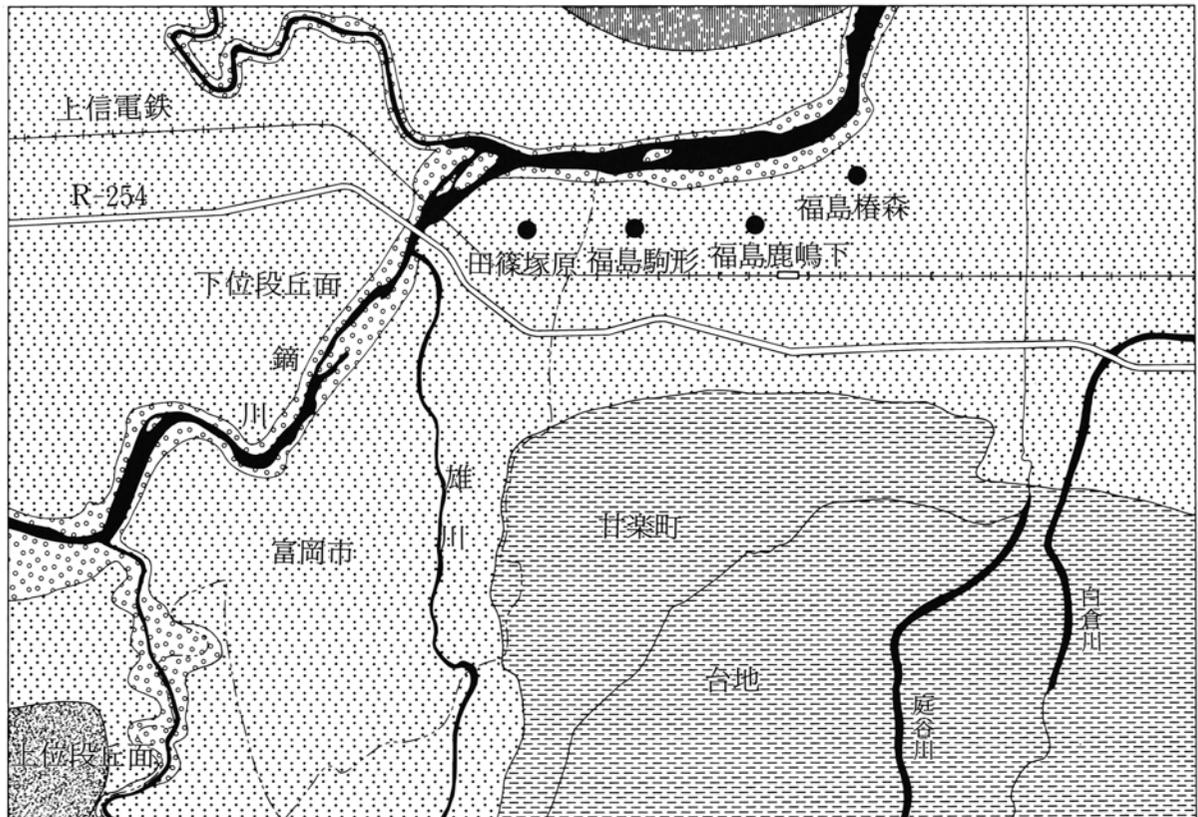
富岡、甘楽周辺の地形の原形は十数万年前に作られたものと考えられており、現在の姿は河川の影響を受けてのものと考えられている。鐮川流域は、下仁田町馬山から藤岡市上落合にかけて上下二段の河岸段丘が広がり、特に鐮川南側で顕著にみられる。これは傾動運動により鐮川が北へと流路を変えたことによるものとされる。上位段丘面の形成はおよそ数万年から十数万年前と考えられており、その後の浅間火山噴出物による上部ローム層が上位段丘面上に堆積する頃には、鐮川は下位段丘面を流れていたとされる。従って本遺跡が位置する下位段丘面には

ローム層の堆積はみられないとされている。また、この傾動運動による鐮川の北への流路移動により、南の多野山系から流れ下る河川はやがて上位段丘を侵食、分断して鐮川へ合流する。田篠塚原遺跡西方で鐮川へ合流する雄川は、甘楽町秋畑の山岳地を東北方向に流下し、小幡南部を扇頂とする扇状地形を野上川などとともに形成している。

この雄川の上流域は、三波川変成帯に属し、そこから運ばれてくるものには石墨片岩や緑色片岩など三波川結晶片岩と総称される変成岩類がみられる。また、鐮川本流ではその源流である南牧川が秩父古生層帯に属するため、秩父系の礫種である、チャートや輝緑凝灰岩などが多く流下する。よって、両河川の合流地点である本遺跡周辺では、両河川から流下した礫種が混在してみられる。

参考文献『富岡市史』自然、原始・古代・中世編 富岡市 1987

『善慶寺早道場遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994



第6図 遺跡周辺の地形

2 歴史的環境

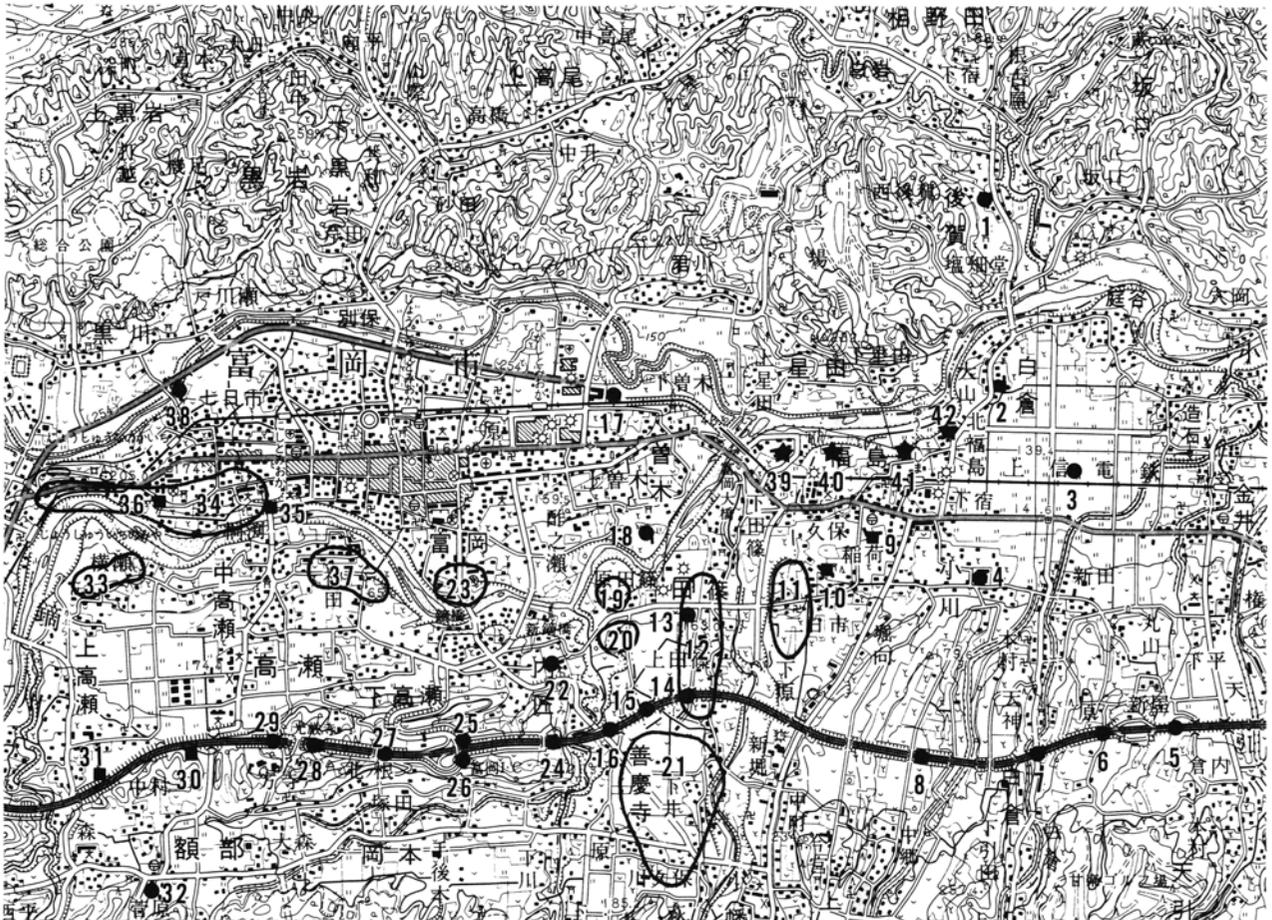
本報告書で扱う四遺跡は、富岡市と甘楽町の境界部分にあたり、東流する鑄川右岸下位段丘面上に位置する。この南側では、近年、関越自動車道上越線建設に伴い多くの発掘調査が行われており、すでに報告書が刊行されている。それらを参照し、本遺跡周辺の様相を概観したい。

旧石器時代 確認例は少ない。下高瀬寺山遺跡では、尖頭器、細石刃、細石核等が出土。天引向原、白倉下原遺跡では各種石器を含む環状ブロック群が出土している。

縄文時代 遺跡の分布は鑄川上位段丘面及び丘陵地にみられる。草創期、早期では松葉・慈学寺、内匠日影周地、下高瀬上之原、下高瀬寺山遺跡、などで押型文土器や石器が出土している。また、内匠

日向周地遺跡では住居状遺構とされる落ち込みが確認されている。前期では、白倉下原、曾木森裏、内匠日影周地、下高瀬上之原、下高瀬寺山、中高瀬観音山、庚申山遺跡などで遺構や遺物が確認されている。中期には確実に集落を形成ようになる。善慶寺早道場遺跡からは埋設土器や土坑、観音前遺跡からは住居跡などが、田篠中原遺跡では環状列石、柄鏡形敷石住居、竪穴住居、配石遺構などが確認されている。後期では白倉下原、内匠上之宿遺跡などで柄鏡形住居が確認されている。

弥生時代 弥生時代では、前期まで遡る遺構として内匠日影周地遺跡の土坑が確認されている。また、中期段階においても天引向原、白倉下原、内匠上之宿、内匠日影周地、下高瀬上之原遺跡や吉井町の遺跡などから土坑や採集遺物が確認されている。



第7図 周辺の遺跡（国土地理院発行「富岡」1：50,000 使用）

住居跡の確認例は少ないが、富岡市小塚遺跡や中高瀬観音山遺跡などで知られる。後期に入ると遺跡数は増加する。鎭川流域では、関越自動車道(上越線)関連の発掘調査において数多くの集落跡が調査されている。これらは上位段丘面に沿って連綿と続いている。また、同道関連調査以外においても、市町村により調査が行われている。これらの調査により知られているものを甘楽・富岡で挙げれば、天引狐崎、白倉白原・天引向原、松葉慈学寺、内匠上之宿、内匠日影周地、中高瀬観音山、中高瀬庚申山、南蛇井増光寺遺跡などがある。また、吉井町まで目を向ければ長根安坪、黒熊、川内遺跡などが知られる。これらの集落遺跡の中で、比較的規模の大きな拠点的集落と考えられるものが黒熊、白倉下原・天引向原、中高瀬観音山、南蛇井増光寺などである。白倉下原・天引向原では磨製石鏃の製作に関わる遺物が出土しており、2基の方形周溝墓も確認されている。中高瀬観音山遺跡では焼失家屋が多く、鉄鏃等の出土も確認されている。

弥生後期に上述の遺跡などから出土する土器は、波状文、簾状文の施文のみられるいわゆる樽式土器が中心である。しかし、後期も終末段階以降になると従来の樽式土器の他に、赤井戸式土器が各遺跡から出土するようになる。赤井戸式土器は、吉ヶ谷式土器と密接な関係を有する土器で、赤城山南麓地域を中心とし、利根川上流域まで分布すると考えられているものである。これらの土器の共伴は地域圏の枠組み等を考える上で注目される。なお、樽式、赤井戸式土器の共伴する時期は、弥生後期終末から古墳時代前期初頭の時期の地域の特徴であったことが明らかに成りつつある。これは弥生、古墳といった時代区分でいけば、二時期にまたがることになる。これは古墳文化が未だもたらされず、弥生文化を継承していた時期と考えられる。

古墳時代 鎭川流域での前期古墳は、北山茶白山古墳、北山茶白山西古墳があげられる。北山茶白山古墳は径40m程度の円墳で、現存する出土遺物に神人竜虎画像鏡がある。主体部は粘土槨が想定され

る。また、北山茶白山西古墳は茶白山古墳の西側に隣接する前方後方墳で、方格規矩鏡、獣形鏡鉄鉾等が出土している。前期に属する住居跡は天引向原、白倉下原、松葉・慈学寺、内匠日影周地、下高瀬上之原、中高瀬観音山遺跡などで確認されている。中期の古墳としては下高瀬上之原遺跡より7基の円墳、内匠日影周地遺跡より1基の円墳が確認されている。また、前方後円墳である天王塚古墳は、竪穴形の主体部が想定され、前期にまで遡る可能性がある。中期の住居跡は天引向原、白倉下原、松葉・慈学寺、中高瀬観音山遺跡などで確認されている。後期になると各所に古墳群が形成されるようになる。本報告遺跡地に位置する塚原古墳群の他、上田篠、二日市、善慶寺、原田篠、布和田、芝宮、横瀬、桐淵、七日市古墳群などがある。これら主要な古墳群は鎭川流域の下位段丘面に集中し、周辺には同時期の集落遺跡が存在している場合が多い。本報告遺跡である塚原古墳群南方には笹森稻荷塚古墳がある。甘楽地方最大規模の前方後円墳で五鈴鏡や金環などの出土が知られる。後期の集落遺跡は天引向原、白倉下原、松葉・慈学寺、善慶寺早道場、内匠日影周地、下高瀬上之原、中高瀬観音山遺跡等で確認されている。また、笹遺跡や原田篠遺跡等からは滑石製品工房跡が、久保遺跡からは滑石製品が多数出土し、祭祀に関わる遺構と考えられている。なお、下高瀬上之原遺跡では2基の埴輪窯が確認されている。

奈良・平安時代 集落は古墳時代後期より継続して営まれている場合が多い。奈良時代より始まる田篠上平遺跡の集落跡のように、下位段丘面でさらに多くの集落が営まれるようになると思われる。また、墨書、刻書の出土やAs-B降下以前の水田跡も内匠日向周地遺跡等で確認されている。

参考文献

- 『富岡市史』原始古代中世編 富岡市史編さん委員会 1987
- 『善慶寺早道場遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 『下高瀬上之原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 『白倉下原・天引向原遺跡III』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994

周辺遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	概要	備考
1	後賀遺跡	富岡市	縄文土器片(中期)、打製石斧。	『富岡市史』 1987
2	大山鬼塚古墳	甘楽郡甘楽町天引	現在は舟形石棺を残すのみ。明治年間に鏡、石製模造品、馬具等が出土し、現在の東博に寄贈されている。	『甘楽町史』 1979
3	甘楽糸里遺跡	甘楽郡甘楽町新屋	古墳前記・B軽石下・A軽石下の水田跡。古墳後期滑石製品工房跡。	
4	笹遺跡	甘楽郡甘楽町小川	弥生後期～古墳の集落跡。石製模造品多数出土。	
5	天引狐崎遺跡	甘楽郡甘楽町天引	旧石器。弥生～古墳住居跡。円形、方形周溝墓。古墳2基等。	
6	天引向原遺跡	甘楽郡甘楽町天引	旧石器。縄文～古墳集落跡。	『白倉下原・天引向原遺跡』(財)群埋文 1994
7	白倉下原遺跡	甘楽郡甘楽町下原	旧石器。縄文～平安集落跡。磨製石鏃工房跡。方形周溝墓。	『白倉下原・天引向原遺跡』(財)群埋文 1994
8	松葉・慈学寺遺跡	甘楽郡甘楽町上野	古墳～平安集落跡。暗文土器多数出土。表探遺物に縄文土器片(前～中期)、黒曜石製有舌尖頭器。	『松葉慈学寺遺跡他』甘楽町調査会 1994
9	天王塚古墳	甘楽郡甘楽町福島	稲荷塚古墳東方400mに位置する。竪穴系の主体部を有すると考えられる前方後円墳。	『甘楽町史』 1979
10	笹森稲荷塚古墳	甘楽郡甘楽町福島	甘楽地方最大規模の前方後円墳。横穴式石室を有する。現在稲荷社社室の五鈴鏡や金環、玉類の出土が知られる。	『甘楽町史』 1979
11	二日市古墳群	甘楽郡甘楽町福島	20基ほどの円墳が残る。5世紀後半頃からの築造。	
12	上田篠古墳群	富岡市田篠	後期の群集墳。現在30数基が存在している。	
13	原田篠遺跡	富岡市田篠	昭和57～58年の調査で古墳後期～平安の住居跡18軒確認されている鬼高期滑石製品工房跡1。	『上田篠古墳群・原田篠遺跡』富岡市教委 1984
14	田篠上平遺跡	富岡市田篠	古墳3基。(1基は周堀のみの調査)横穴式両袖型石室を有する。7世紀代。奈良・平安の住居跡、掘立柱建物跡。	『田篠上平遺跡』(財)群埋文 1988
15	田篠中原遺跡	富岡市田篠	縄文中期集落跡。環状列石1。敷石住居跡11。竪穴住居跡2。配石遺構36等。	『田篠中原遺跡』(財)群埋文 1990
16	善慶寺早道場遺跡	甘楽郡甘楽町善慶寺	縄文土坑、埋設土器(中期)。古墳後期～奈良・平安住居跡、掘立柱建物(奈良・平安)古墳1基(周堀のみ)。	『善慶寺早道場遺跡』(財)群埋文 1994
17	曾木森裏遺跡	富岡市曾木森裏	縄文～平安集落跡。住居跡は縄文前期2、奈良1、平安1。古墳前期方形周溝墓と考えられる溝が確認されている。	『曾木森裏遺跡』富岡市教委 1996
18	久保遺跡	富岡市	古墳時代祭祀遺跡。滑石製模造品等多数出土。	『富岡市史』 1987
19	布和田古墳群	富岡市	原田篠古墳群に隣接。10基程から成るが、石寄場的なものもある。	
20	原田篠古墳群	富岡市	6世紀代からの築造、およそ7基が確認されている。	『上田篠古墳群・原田篠遺跡』富岡市教委 1984
21	善慶寺古墳群	甘楽郡甘楽町善慶寺	古墳後期群集墳。かつては50基以上の存在が知られるが、現在ではおよそ20基程である。	
22	内匠遺跡	富岡市内匠	古墳～平安集落跡。住居跡27。	『富岡市史』 1987

第3章 田篠塚原遺跡

No	遺跡名	所在地	概要	備考
23	芝宮古墳群	富岡市富岡	鑄川流域最大級の古墳群。100基以上が確認されている。築造は6～7世紀と考えられる。	『芝宮古墳群』 富岡市教委 1992
24	内匠上之宿遺跡	富岡市内匠	縄文～古墳住居跡。縄文配石遺構5、埋設土器10。中世城郭。	『内匠上之宿遺跡』 (財)群埋文 1993
25	内匠日向周地遺跡	富岡市内匠	縄文～中世。古墳前～後期住居跡8軒。水田3面(平安・中世・近世)。古代木簡出土。	『内匠日向周地遺跡他』 (財)群埋文 1995
26	内匠日影周地遺跡	富岡市内匠	縄文～近世。縄文前期住居1、弥生住居14、古墳住居12、方形周溝墓1、古墳1等。	『内匠日影周地遺跡他』 (財)群埋文 1992
27	下高瀬上之原遺跡	富岡市下高瀬	縄文～近世の複合遺跡。古墳時代中期の古墳7基。埴輪窯2基。平安期の刻書、墨書土器出土。	『下高瀬上之原遺跡』 (財)群埋文 1994
28	中高瀬観音山遺跡	富岡市中高瀬	弥生後期の大集落(竪穴住居跡96軒。掘立柱建物10軒等)。他に縄文古代の竪穴住居跡等。	『中高瀬観音山遺跡』 (財)群埋文 1995
29	中高瀬庚申山遺跡	富岡市中高瀬	縄文～平安住居跡。中高瀬観音山遺跡の南西に位置する。	
30	北山茶白山古墳	富岡市南後箇	径40mの円墳と推定される。主体部は粘土郭と想定。神人竜虎画像鏡出土。4世紀後半築造と考えられる。	『富岡市史』 1987
31	北山茶白山西古墳	富岡市南後箇	前方後円墳。耕地拡大の際に変形四獣鏡、調査時に方格規矩鏡が出土。4世紀後半築造と考えられる。	『北山茶白山西古墳他』 (財)群埋文 1988
32	菅原遺跡	富岡市南後箇	縄文土器片(後期)。古墳前期の台付甕。	『富岡市史』 1987
33	横瀬古墳群	富岡市高瀬	横穴式石室を有する27基の円墳から成る。7世紀代の築造が考えられる。	『富岡市史』 1987
34	七日市古墳群	富岡市七日市	横穴式石室を有する26基から成る。御三社のみ前方後円墳で他は円墳。6世紀中頃から7世紀にかけての築造。	『富岡市史』 1987
35	富岡5号古墳	富岡市七日市	七日市古墳群に属する。径30mの円墳で主体部は両軸型横穴式石室。円筒、人物埴輪出土。6世紀後半。中頃?	『富岡市史』 1987
36	御三社古墳	富岡市七日市	七日市古墳群に属する。両軸型横穴式石室を有する前方後円墳。埴輪、金銅製三輪玉等が出土。6世紀中頃。	『富岡市史』 1987
37	桐瀬古墳群	富岡市高瀬	3基の前方後円墳を含む群集墳。6世紀から7世紀にかけての築造。	『富岡市史』 1987
38	観音前遺跡	富岡市七日市	縄文中期住居跡2、古墳後期住居跡5、奈良・平安住居跡30等。	『七日市観音前遺跡』 富岡市教委 1994
39	田篠塚原遺跡	富岡市田篠	本報告遺跡	『年報14・15』 (財)群埋文 1995・96
40	福島駒形遺跡	甘楽郡甘楽町福島	本報告遺跡	『年報14』 (財)群埋文 1995
41	福島鹿嶋下遺跡	甘楽郡甘楽町福島	本報告遺跡	『年報16』 (財)群埋文 1997
42	福島椿森遺跡	甘楽郡甘楽町福島	本報告遺跡	『年報16』 (財)群埋文 1997

第3章 田篠塚原遺跡

1. 弥生時代の遺構

本遺跡の弥生時代の遺構には、13軒の竪穴住居跡、方形周溝墓1基、円形周溝状遺構1基などがある。

竪穴住居はI、II区から確認されているが、すべて後期に属するものである。波状文、連状文を有する樽式土器と輪積痕、縄文がみられる赤井戸系の土器が同一住居から混在して出土している。重複関係にある住居は少なく、3号住居と4号住居がみられるのみである。

方形周溝墓は調査区の西隅に位置する。四隅の切れるタイプのもので、墳丘盛土、主体部は確認できなかった。また、方形周溝墓の南東には円形に巡ると考えられる溝が確認でき、円形周溝墓の可能性を残すが不明瞭である。

2号古墳下からは、耕作痕が確認された。これは古墳築造以前ということで弥生時代の項に入れておくが、古墳築造に際し放棄されたなど、古墳時代の遺構の可能性を残す。

なお、竪穴住居跡の土層注記は以下に示したものとする。

田篠塚原住居土層注記

- 1 黒褐色土。As-A軽石を混入する。
- 2 暗褐色土。As-C軽石を混入する。
- 3 黒褐色土。粒子の細かな土。
- 4 黒褐色土。黄褐色土が混入する。
- 5 にぶい黄褐色土。黒褐色土が混入する。
- 6 黄褐色土。IV層に類似。

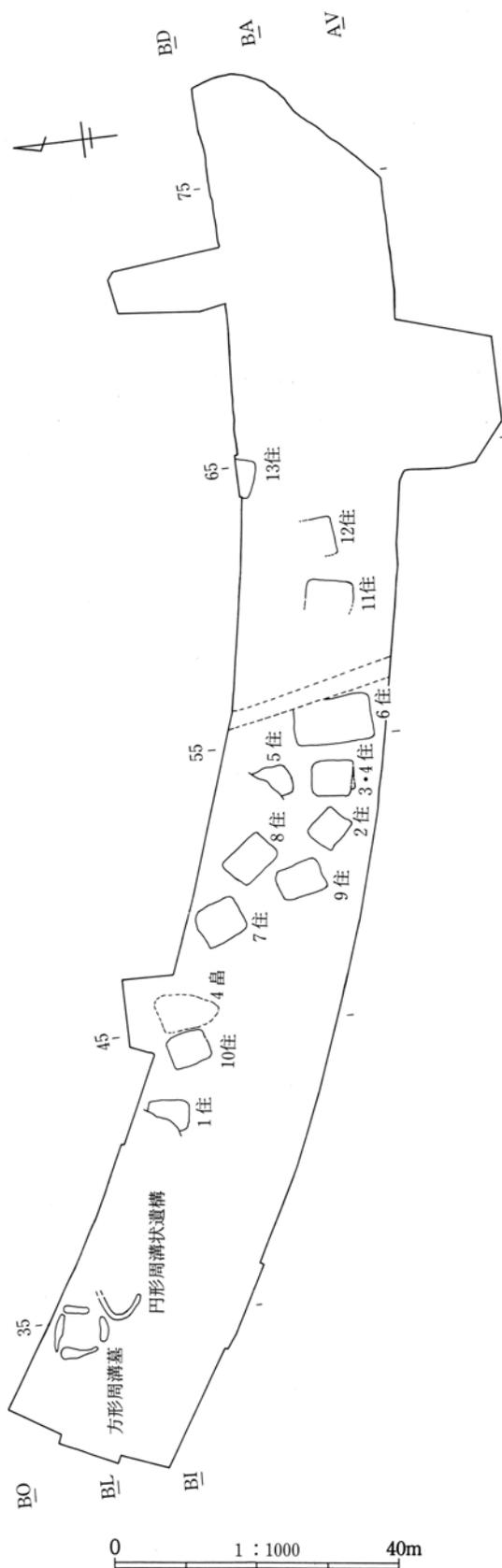
田篠塚原住居貯蔵穴土層注記

- 10 暗褐色土。黄褐色土が混入する。
- 11 黒褐色土。
- 12 黒褐色土。黄褐色土が混入する。
- 13 黄褐色土。IV層に類似。

*番号にダッシュ(‘)のついたものは炭化物の混入を示す。
また、Aは色調が明るく、Bは暗いことを示す。

田篠塚原住居炉土層注記

- 20 焼土。
- 21 焼土。灰、炭化物が混入する。
- 22 黄褐色土。焼土、炭化物が混入する。



第8図 田篠塚原遺跡 弥生時代の遺構

1. 竪穴住居

1号住居 写真 PL-3、33

位置 BI-42G

重複 1号墳周堀に先行する。

形状 北西部の壁が一部不明であるが、南北に長軸を取る隅丸長方形を呈している。周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 不明 方位 N-6°-E

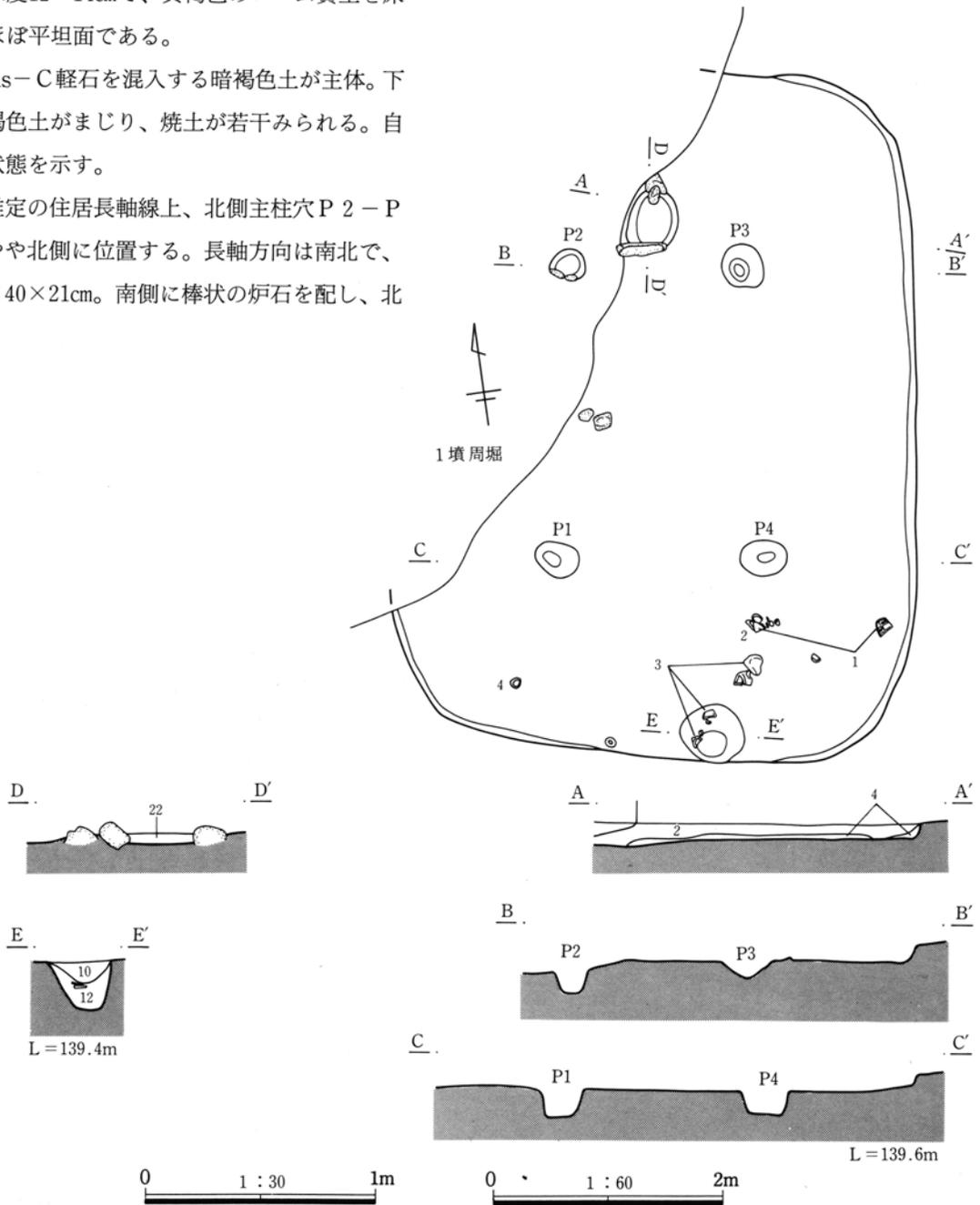
床面 深度12~14cmで、黄褐色のローム質土を床面とし、ほぼ平坦面である。

埋没土 As-C軽石を混入する暗褐色土が主体。下層には黄褐色土がまじり、焼土が若干みられる。自然埋没の状態を示す。

炉 推定の住居長軸線上、北側支柱穴P2-P3ラインやや北側に位置する。長軸方向は南北で、規模は80×40×21cm。南側に棒状の炉石を配し、北

側にも小柄な石を2石置いている。覆土には焼土が多量に混入している。

貯蔵穴 南壁際の中央やや東よりに位置する。規模は54×52×43cmで、円形を呈する。遺物の出土状態より埋没時には使用されていなかった可能性がある。



1-1 竪穴住居

柱 穴 支柱穴4本を確認した。ただし、P2は1号墳周堀により斬られた面での確認である。各柱穴の規模(径×深)、及び心々間の距離は以下の通りである。

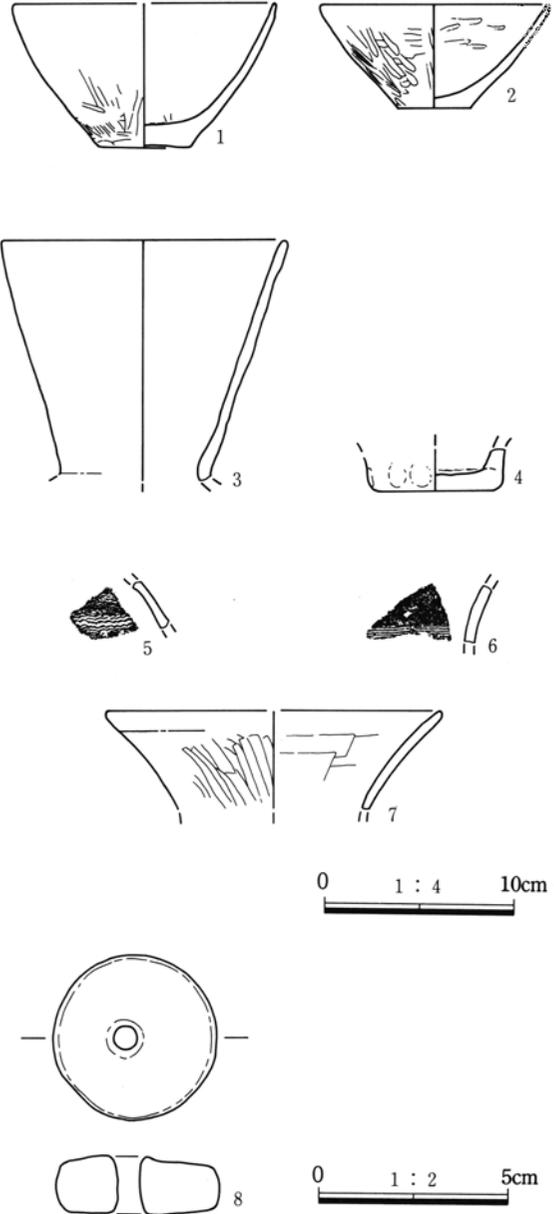
P1 : 40×22cm P1～P2 : 2.54m

P2 : 34×19cm P2～P3 : 1.56m

P3 : 39×13cm P3～P4 : 2.54m

P4 : 40×18cm P4～P1 : 1.84m

遺 物 出土遺物は比較的少なく、7点の土器と1点の土製紡錘車を図示した。1から4の遺物は住居南側の床直上からの出土である。3の壺口縁部は散乱していた13片が接合したものであるが、数片が貯蔵穴埋没土上、残りが床直上からの出土で、全てほぼ同レベルであった。図示した遺物以外には、いづれも小破片であるが、壺・甕類が80片、337g、赤彩された土器片が2片、6g出土している。



第10図 1号住居出土遺物

2号住居 写真 PL-3、33

位置 BB-52G

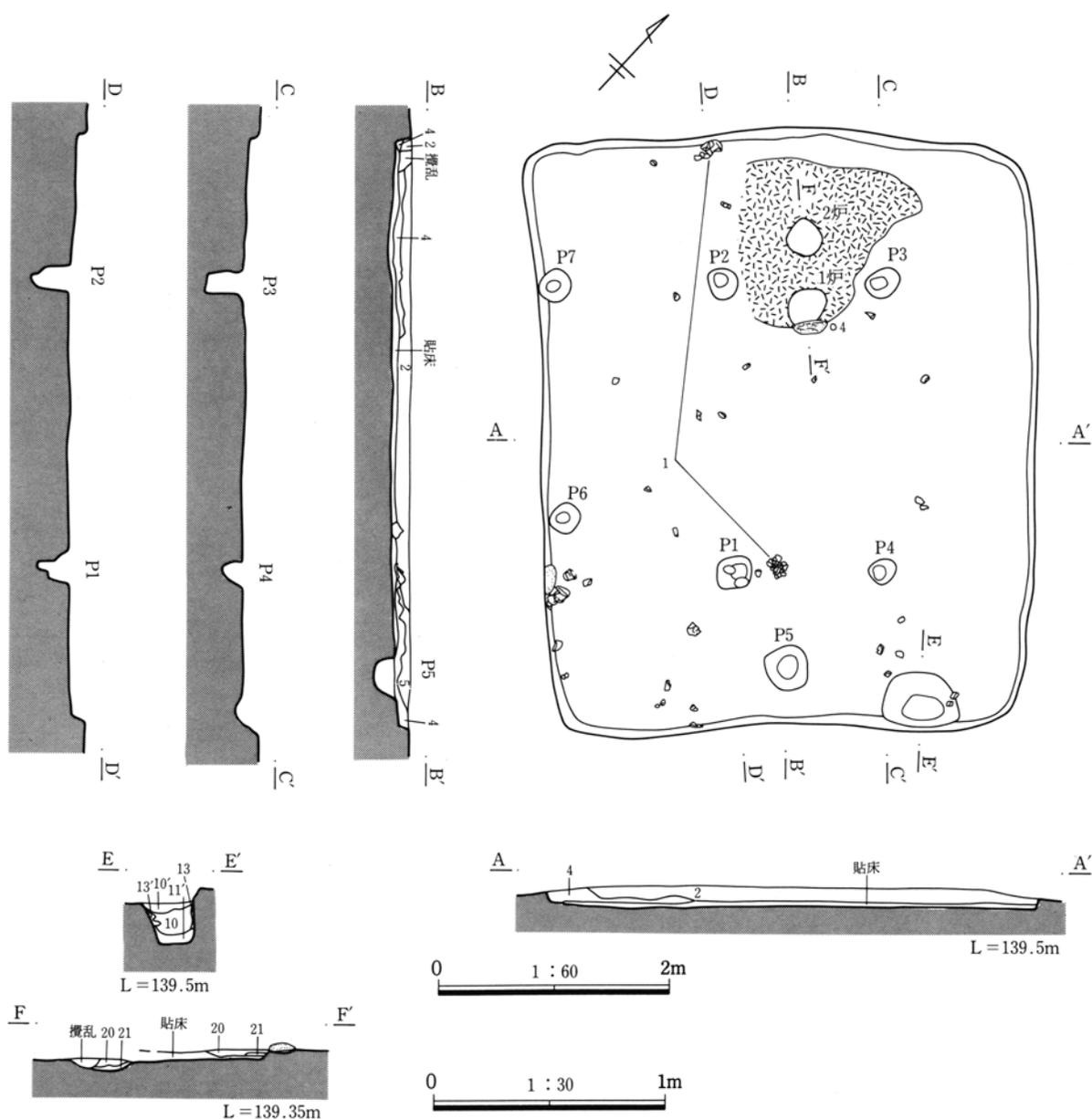
形状 東西に長軸を取る隅丸長方形を呈している。周壁は、ほぼ直線的に掘り込まれている。規模は5.19m×4.30mである。

面積 20.73m² 方位 N-44°-W

床面 掘り方までは深度9~17cmだが、床面として6cm前後の厚さで、貼り床がみられた。貼り床は、黒色土を中心につき固められたようで、互層をなしていた。

埋没土 上層にはAs-C軽石を混入する暗褐色土が、下層には上層土に黄褐色土が混入する土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

炉 住居中軸線やや東、北側支柱穴P2-P3ライン内側より1号炉、外側よりの2号炉が検出された。1号炉は貼り床面より掘り込まれており、40×30×4cmの規模で、焼土とローム質土が堆積していた。また、片岩系の炉石が設置されており、29×10×4cm・1.7kg(長×幅×厚・重 炉石の規模は以下もこの順序で示す)で、一部に赤色味がみられた。



第11図 2号住居

2号炉は掘り方の面より掘り込まれており、貼り床によって覆われていたため、1号炉以前に使用されていたものと考えられる。規模は30×30×6cm。焼土とローム質土が堆積していたが、かなりのしまりがあった。また、1号炉より北側にかけてのかなりの範囲で炭化物の散布がみられた。

貯蔵穴 南壁際の東よりに位置する。規模は68×43×36cmである。

柱 穴 支柱穴4本（P1～P4）と入り口施設に伴うと考えられるピット1本（P5）、西壁際に2本のピットを確認した。このピットは壁柱穴になる可能性がある。各柱穴の規模、及び支柱穴の心々間の距離は以下の通りである。

P1：30×29cm P1～P2：2.54m

P2：25×36cm P2～P3：1.40m

P3：31×32cm P3～P4：2.56m

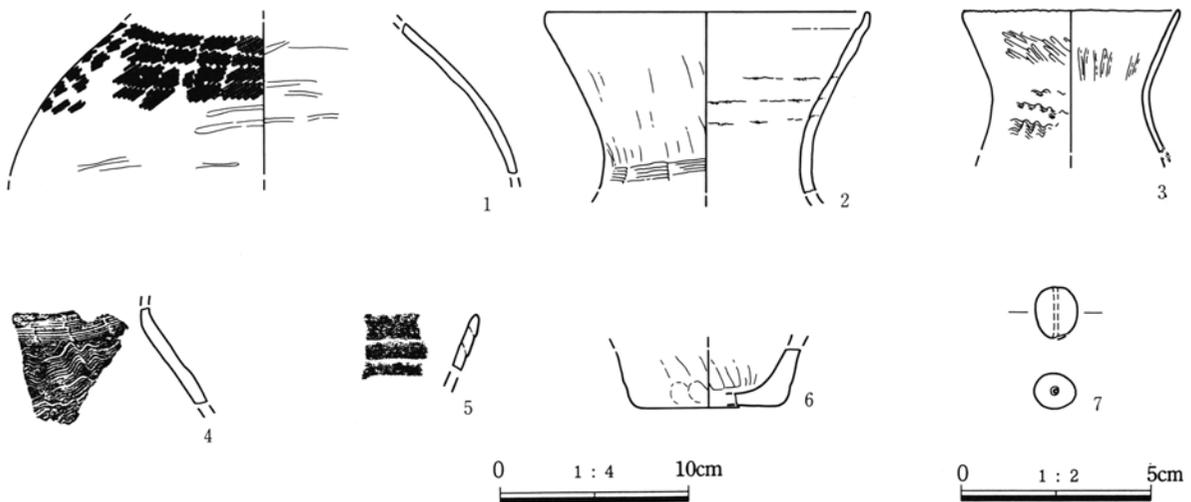
P4：24×18cm P4～P1：1.29m

P5：39×20cm

P6：25×24cm

P7：28×22cm

遺 物 6点の土器と1点の土玉を図示した。土器は、住居の全体に散乱していた。図示したもので床直上のもは1と4であるが、1は住居北西部と南東部の遺物が接合している。7の土玉は埋没土からであるが完形で出土している。図示したものの以外にも坏類の出土はほとんどなく、壺・甕類を中心に247片、1,546g出土している。



第12図 2号住居出土遺物

3号住居 写真 PL-3、33

位置 BA-54G

重複 4号住居に後出すると考えられる。

形状 東壁が不明瞭であるが、長軸を南北にとる長方形と考えられる。規模は5.44m×(4.3)mである。

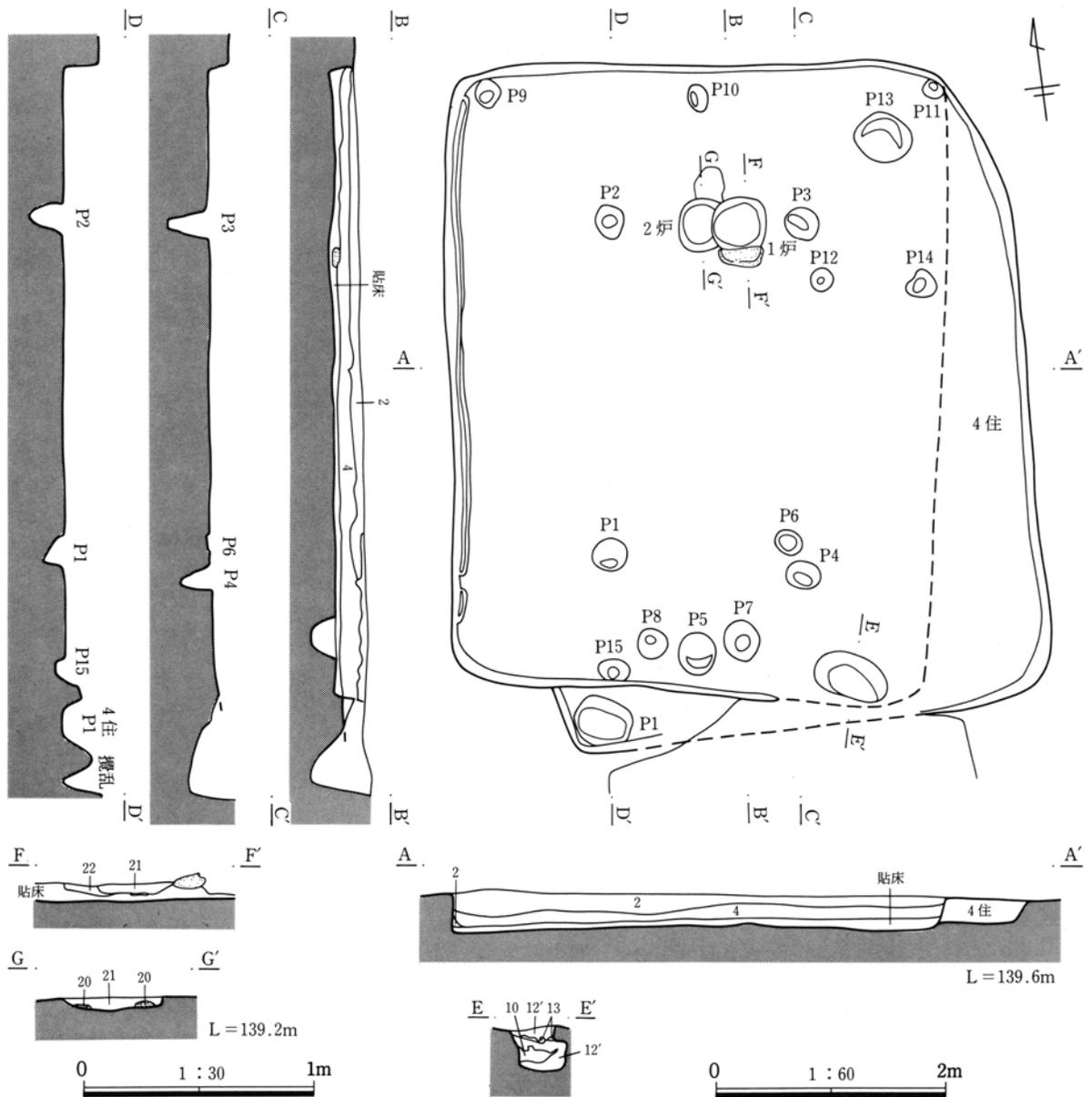
面積 (21.92) m² 方位 N-8°-E

床面 深度18~37cmで、床面には黒褐色土を中心とした貼り床が確認できた。南東隅より北西隅にかけて比高差7cmの傾斜がみられた。

周溝 西壁際に深さ2~3cm、幅6cm前後の周溝が確認できた。

埋没土 上層にはAs-C軽石を混入する暗褐色土が、下層には上層土に黄褐色土が混入し堆積する。また、北側の一部に炭化粒を多く混入する灰黄褐色土の堆積がみられた。

炉 北側支柱穴P2-P3ラインの中央東側に1号炉、ほぼ中央に2号炉が確認できた。重複しているが、1号炉の方が後出のものである。1号炉は64×48×24cmの規模で、貼り床より掘り込んでいる。



第13図 3・4号住居

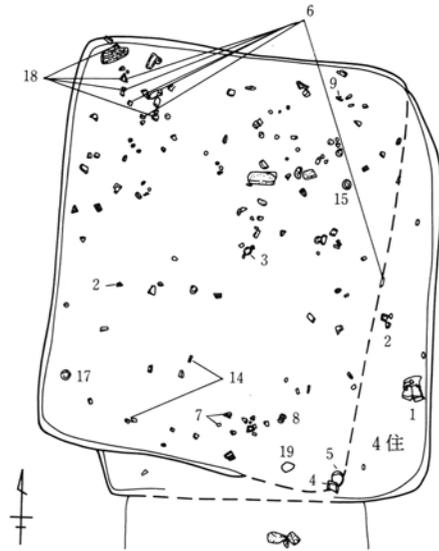
また、南側には39×12×7cm・5.0kgの片岩系の炉石が設置されていた。2号炉周辺では貼り床が確認できなかったが、掘り方の面からの掘り込みのようで、規模は46×(46)×19cmである。なお、北側には焼土の散布がみられた。

貯蔵穴 推定される南壁際の東壁よりに位置する。規模は64×40×38cmで、南壁を少し掘り込んでいる。埋没土は下層はしまりが無いが、上層はしまり強い。

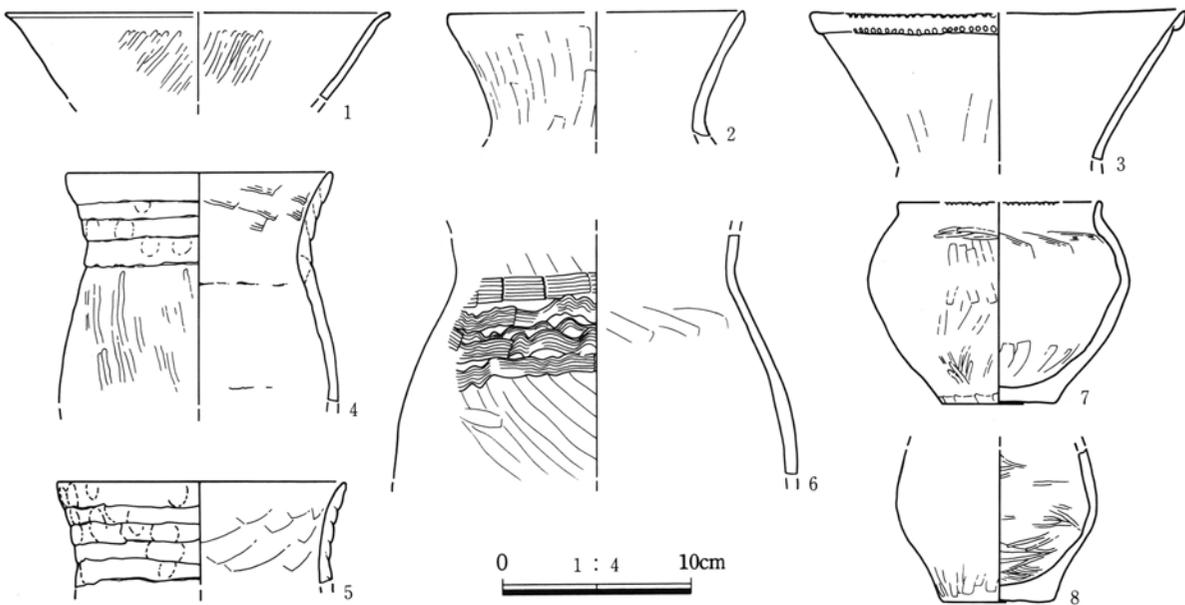
柱 穴 ピットを15本検出した。そのうち4本は支柱穴(P1～P4)、1本は入り口施設に伴うもの(P5)と考えられる。また、4号住に伴うピットの可能性も考えられるが、区別ができなかったため、3号住にしておく。

- P 1 : 30×19cm P 1～P 2 : 2.92m
- P 2 : 29×31cm P 2～P 3 : 1.70m
- P 3 : 32×25cm P 3～P 4 : 3.10m
- P 4 : 29×28cm P 4～P 1 : 1.68m
- P 5 : 34×39cm
- P 6 : 24×21cm P 11 : 18×13cm
- P 7 : 36×14cm P 12 : 18×33cm
- P 8 : 26×29cm P 13 : 32× 9cm
- P 9 : 23× 8cm P 14 : 26× 6cm
- P 10 : 20×10cm P 15 : 28×10cm

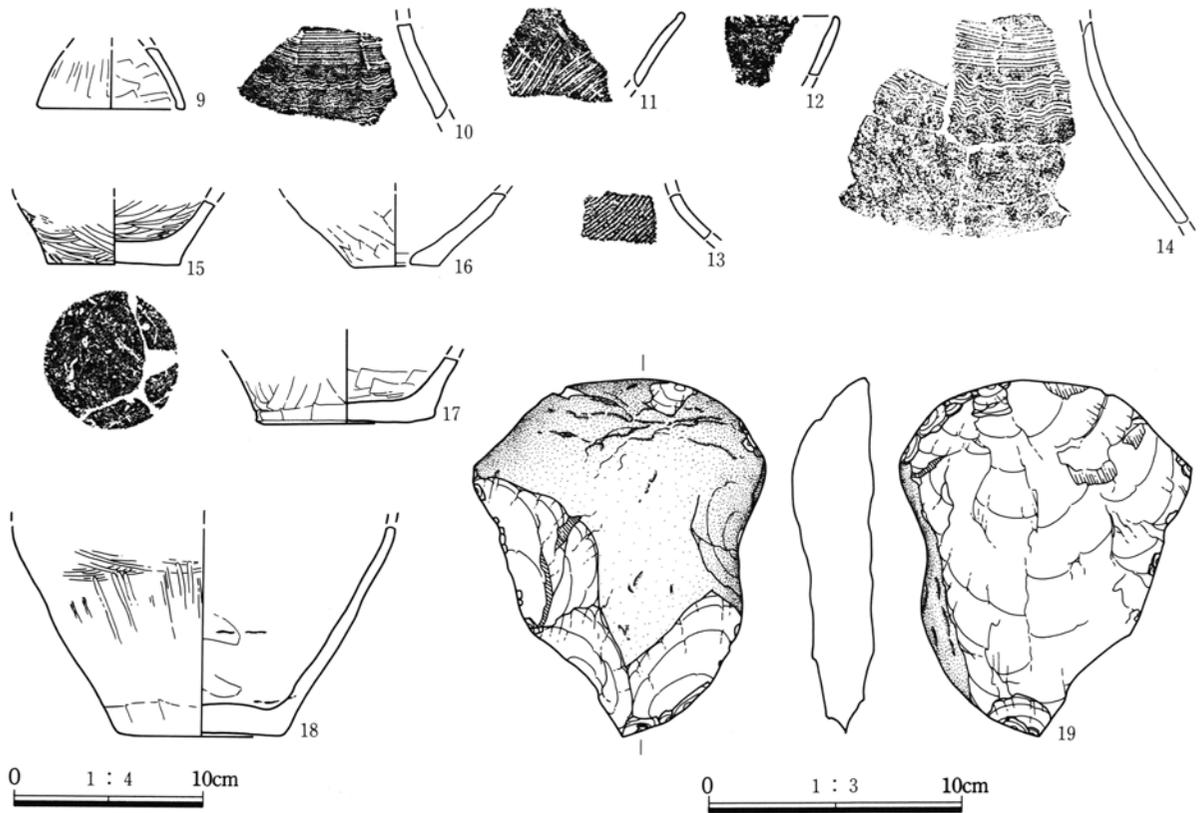
遺 物 土器を中心に19点を図示した。遺物は住居全体に散乱していた。15の壺と思われる外底部にはモミ状・植物繊維状の圧痕がみられる。図示したもの以外には壺・甕類10,683g、鉢27g、高坏14gが出土している。



第14図 3、4号住居遺物出土状態



第15図 3号住居出土遺物(1)



第16図 3号住居出土遺物(2)

4号住居 写真 PL-3、34

位置 BA-54G

重複 3号住居に先行すると考えられる。

形状 南壁が攪乱により、北壁、西壁のほとんどが3号住居との重複により不明だが、南北に長軸をとる隅丸長方形と考えられる。ただ、一部に残る西壁が、東壁に対しやや外を向くようである。

面積不明 方位不明

床面 東側と南西側の一部に床面が残るのみである。3号住居よりもわずかに高い。

埋没土 ほぼ3号住居と同じ埋没土であった。

柱穴 前述したとおり、3号住居で上げたピットに、4号住居のものも含まれる可能性がある。南東隅にP1を検出したが、この住居に確実に伴うかは不明。

P1: 51×16cm

遺物 図示した2点はほぼ床直上からの出土である。他に140gの破片が出土している。



第17図 4号住居出土遺物

5号住居 写真 PL-4、34、35

位置 BD-54G

重複 5号特殊土坑に先行する。

形状 北壁及び東壁の一部が不明だが、長軸を南北にとる隅丸長方形と考えられる。

面積 不明 方位 N-9°-W

床面 深度10~25cmで、黄褐色のローム質土を床面とする。住居の東よりには、炭化物、焼土の散布する部分が見られた。

埋没土 上層にローム質土粒子を霜降り状に混入した暗オリーブ褐色土が、下層には炭化物を混入する黒褐色土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

貯蔵穴 南壁際の東よりに位置する。規模は68×43×36cmで、埋没土には、住居埋没土で見られた炭化物の混入はみられなかった。また、南壁より貯蔵穴を巡るように、高さ7cm前後、幅31~52cmの土盛りが見られた。

柱穴 主柱穴と思われる3本のピット(P1~P3)、入り口施設に伴うと考えられるもの1本(P4)、他1本を確認した。以下にその規模を示す。

P1 : 29×30cm P1~P3 : 1.26m

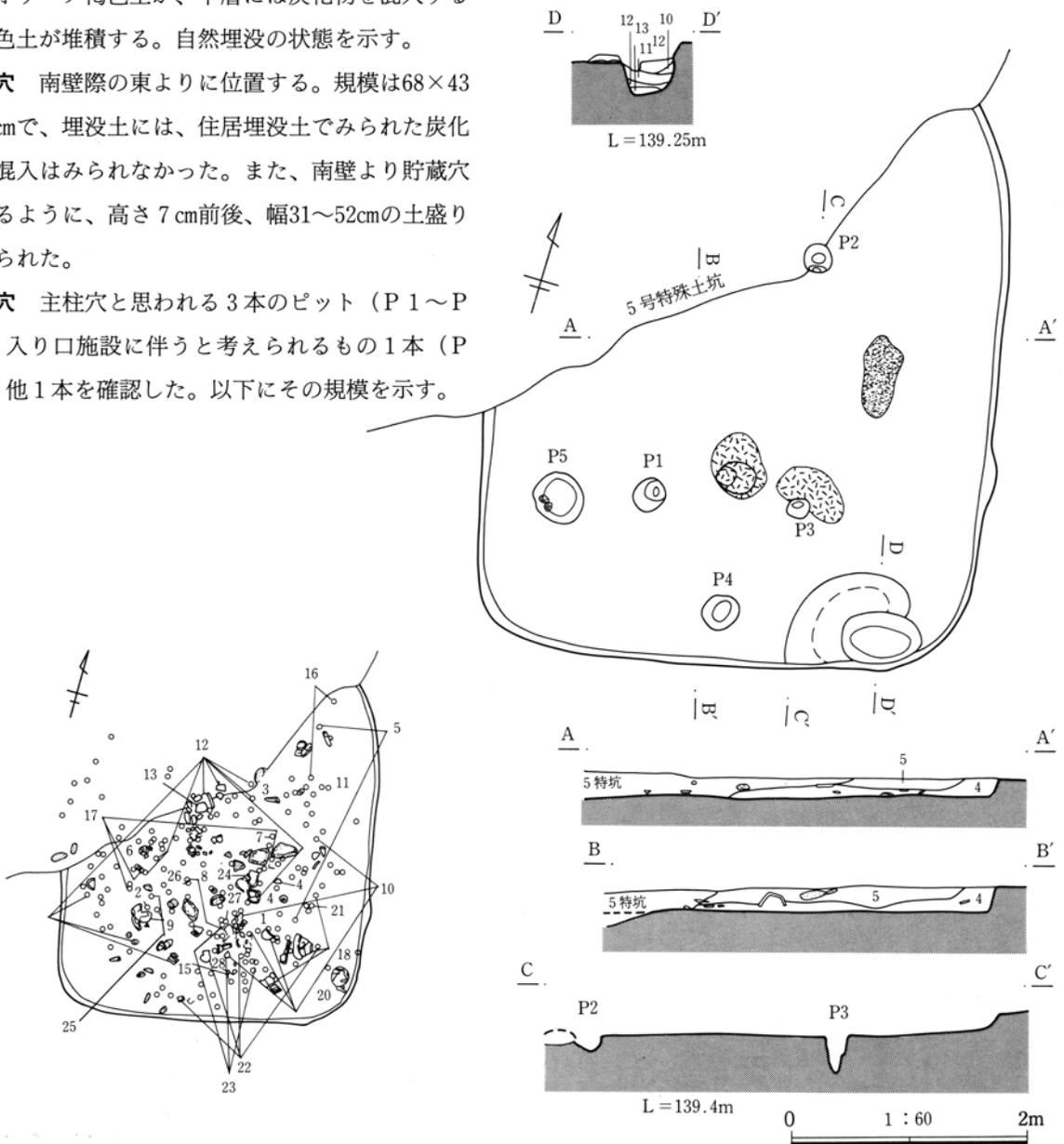
P2 : 26×22cm P2~P3 : 2.16m

P3 : 20×33cm

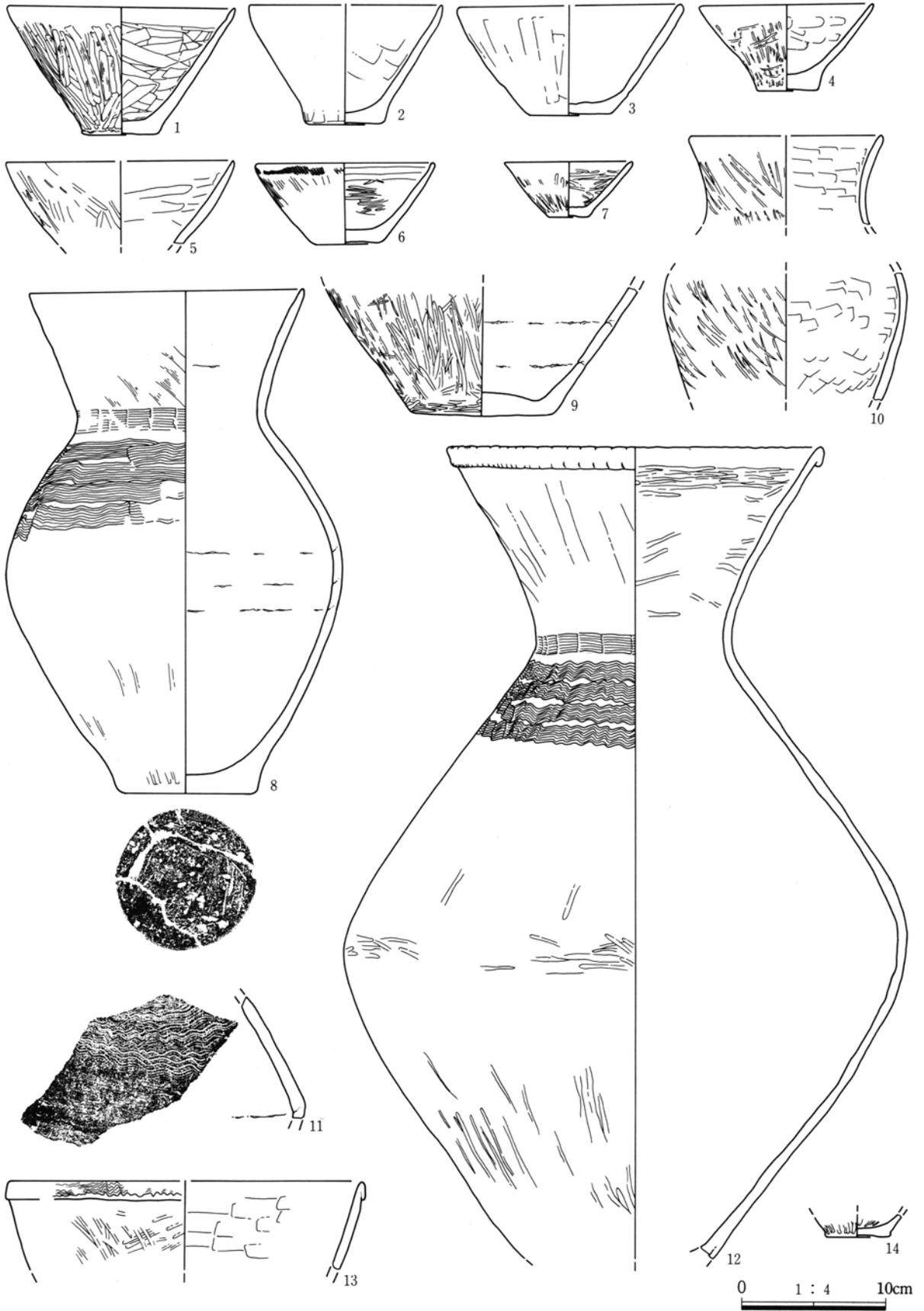
P4 : 32×24cm

P5 : 44×19cm

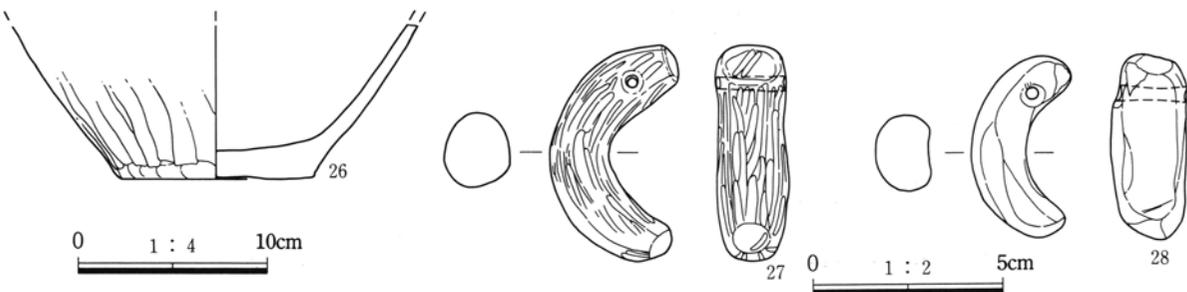
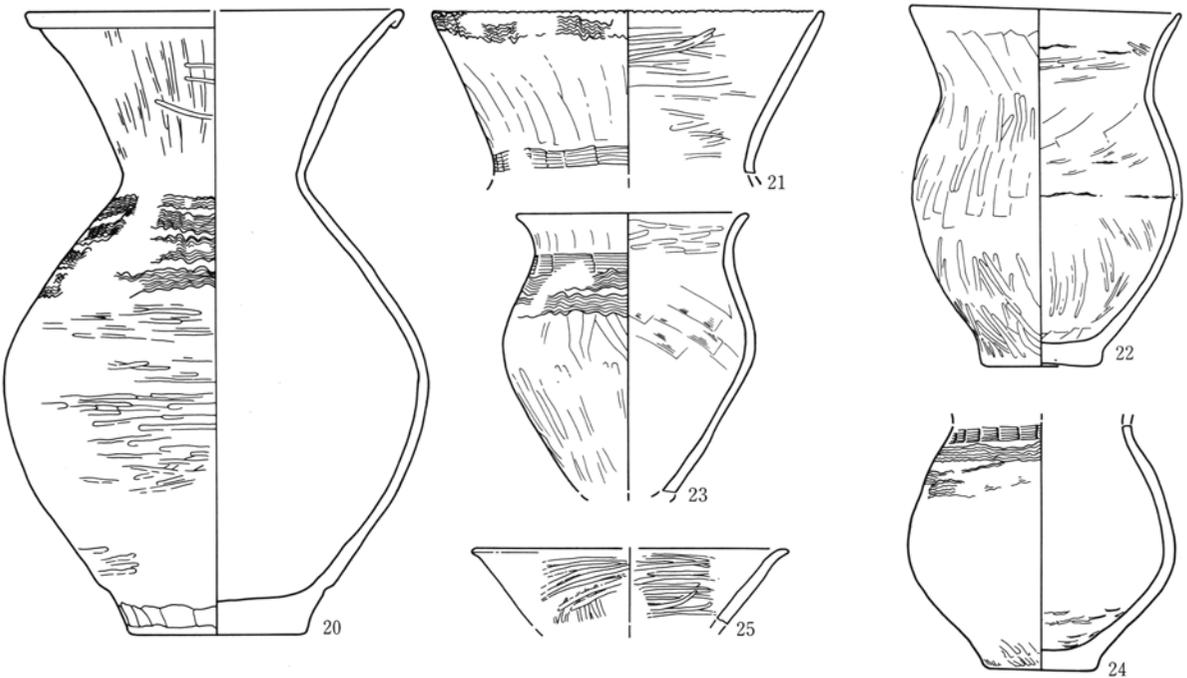
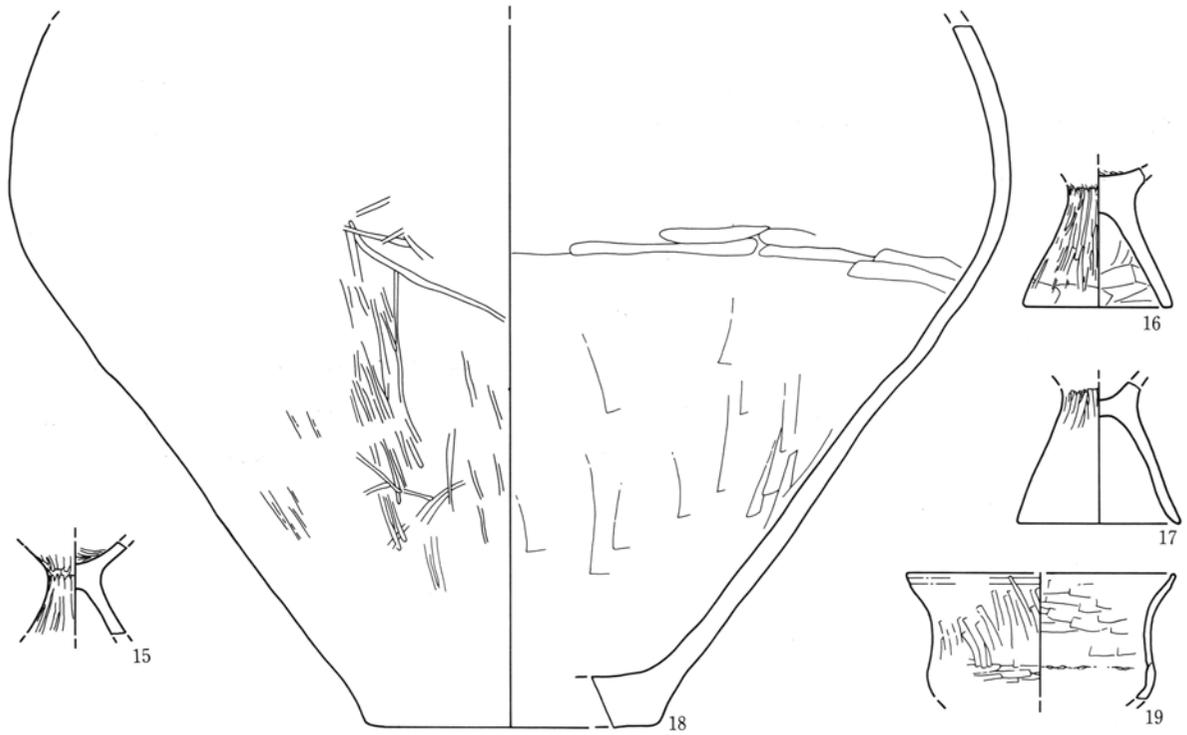
遺物 多量の遺物が散在していたが、壁際からの出土は少なめである。8の甕外底部には粘状圧痕が見られる。図示した以外にも、約25kgの土器片が出土している。



第18図 5号住居及び遺物出土状態



第19図 5号住居出土遺物(1)



0 1 : 4 10cm

0 1 : 2 5cm

第20图 5号住居出土遺物(2)

6号住居 写真 PL-4、5、36

位置 BA-56G

形状 北東隅が攪乱などにより不明であるが、長軸を南北にとる隅丸長方形と考えられる。規模は11.10m×6.50mで、周囲の住居跡に比べてかなり大きい。

面積 (67.90m²) 方位 N-3°-W

床面 深度13cm~42cmで、やや北側に向かって傾斜している。

埋没土 黒褐色土が主体に堆積している。下層ほど炭化粒子の割合が増える。また、床面上の一部にローム質の黄褐色土の堆積がみられた。自然埋没の状態を示す。

炉 この住居に伴って5基の炉が検出された。1号炉は65×45×8cmの規模で、住居中央やや北側に位置する。炉の南側には片岩系で、36×7×7cm・3.6kgの炉石を置き、燃焼面には赤色味がみられた。2号炉は1号炉の北東に位置し、規模は85×40×6cmである。炉石は2石置かれていたが、この炉を南北に分けるように中央に置かれていた。また、この炉石は焼土、炭化物を含んだ土の上に置かれていた。3号炉は1号炉の南東に位置し、規模は54×54×7cmである。4号炉は住居中央の南西側に位置し、規模は42×26×10cmである。南東側に片岩系で、19×5×3cm・0.4kgの炉石が置かれていた。5号炉は住居南西に位置し、規模は50×44×6cmである。

貯蔵穴 南壁際の中央やや東よりに位置する。規模

は86×65×25cm。鉢の底部が出土している。

柱穴 P1からP5までを検出した。主柱穴と思われるP1からP4は、それぞれ東西に隣接して2本のピットがあると思われるが、確認できるものはP2とP4であり、新旧関係まで明確に判断できたのはP4のみで、東側のP4-1の方が新しい。東西のピットが、それぞれどのように対応するかは定かではない。なお、規模についてはP1、P3は2本に明確に分けられないため1つのものとして、P2、P4は2本に分けて記すものとし、心々間の距離は対応が定かでないため省略する。また、本住居のみ、長軸×短軸×深とする。

P1 : 154×56×26cm

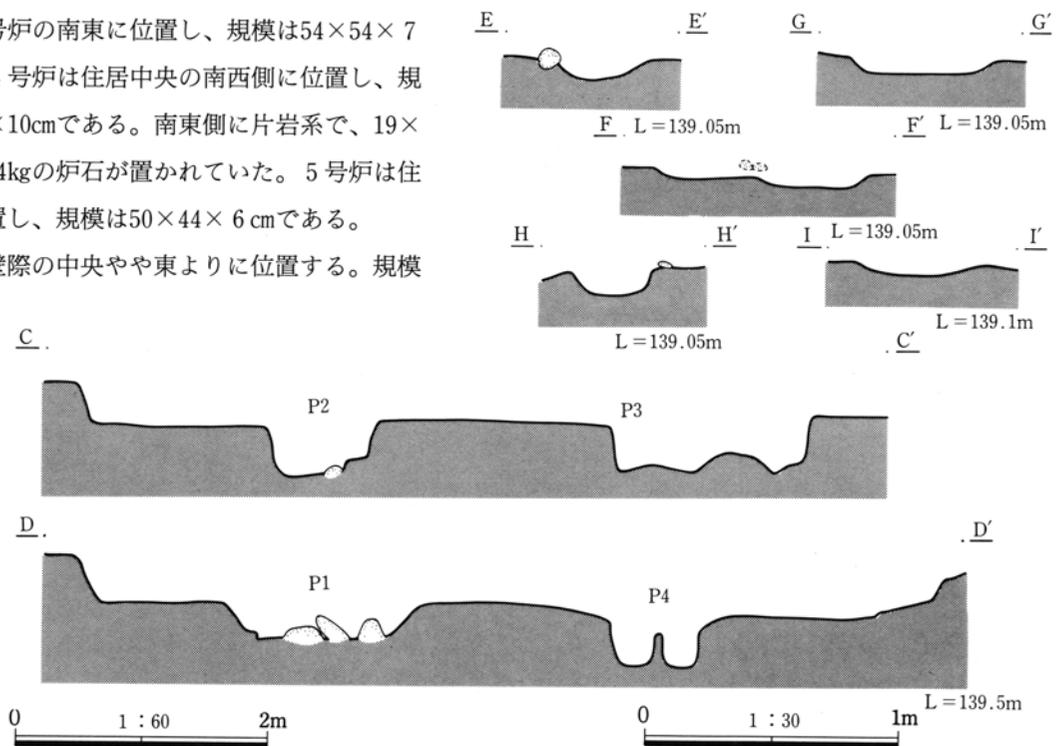
P2-1 : (90)×62×38cm (長軸区別できず)

P2-2 : (90)×28×29cm

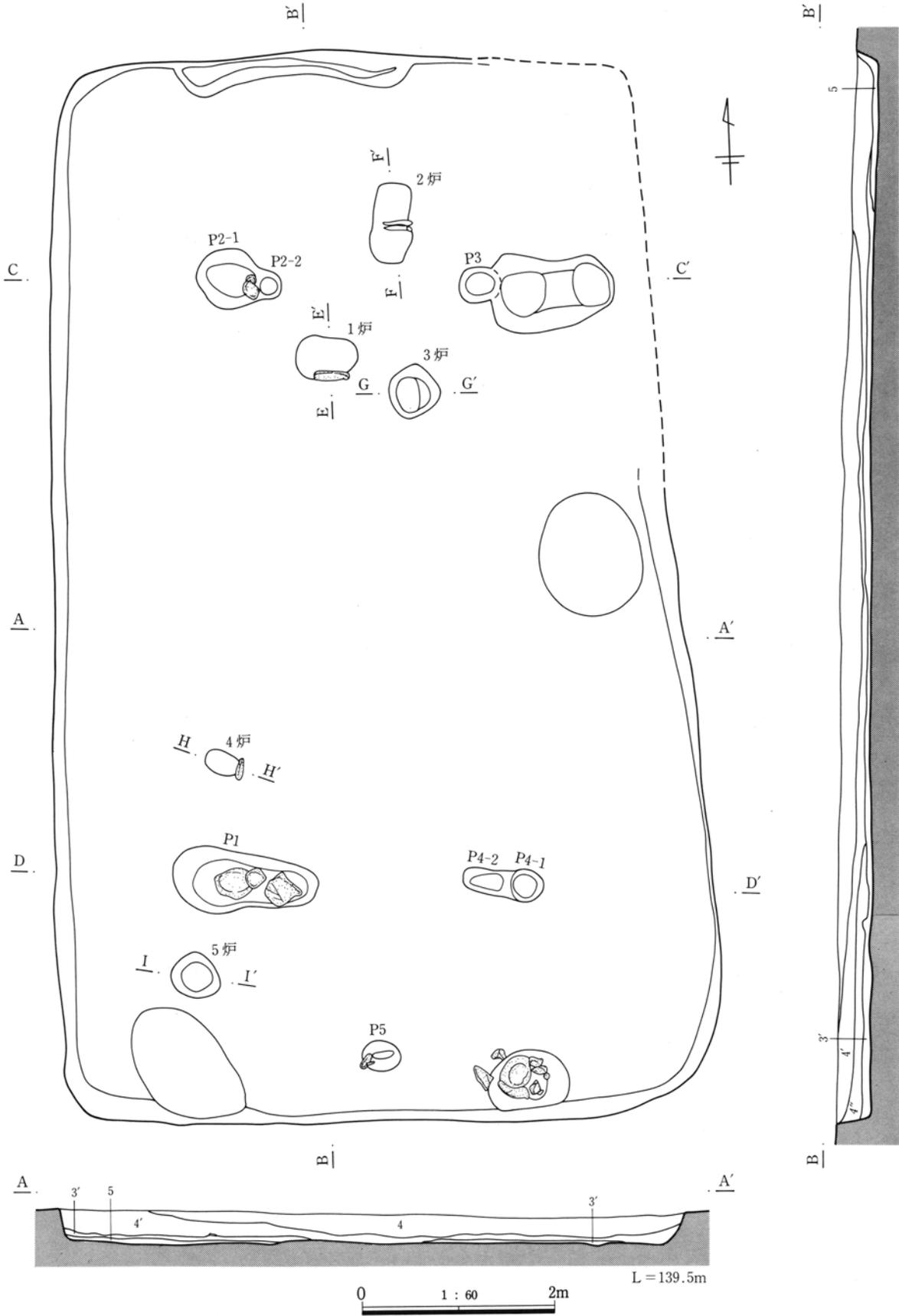
P3 : 44×32×35cm (東側含まず)

P4-1 : 46×25×38cm

P4-2 : (56)×36×40cm



第21図 6号住居断面図

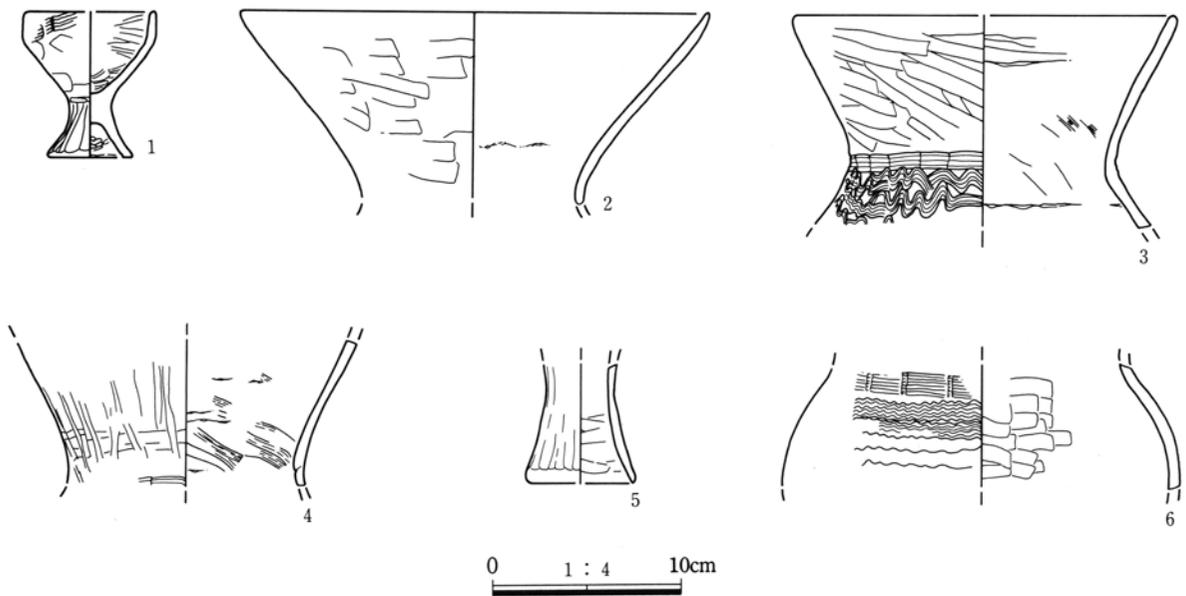


第22图 6号住居

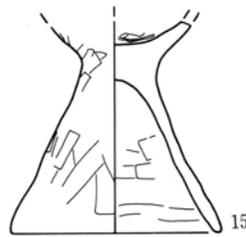
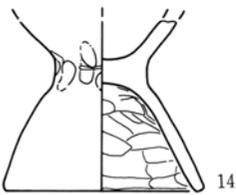
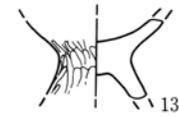
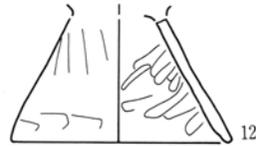
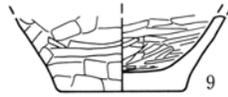
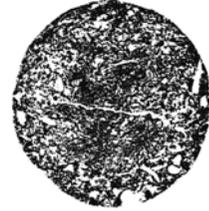
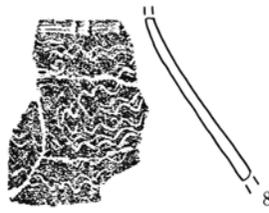
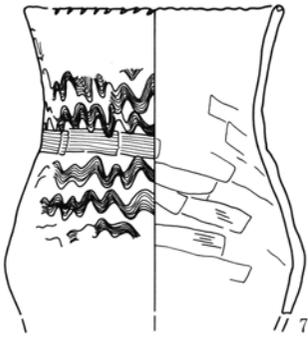


遺物 遺物は住居全体に散乱しているものの、やや北側に偏在している傾向がみられた。土器類を中心に18点の遺物を図示したが、床直上から出土したものは1、9、10、14のみで、他は床上5cm~12cm及び埋没土中である。また、3の甕は床直上破片と床上14cmの破片が接合している。6の壺の、13の高坏には赤彩がみられ、10の壺外底部には小豆大の圧痕がみられる。また、16は杓子状の土製品である。図示した遺物以外には壺・甕類を中心に2,109片、21,942gが出土している。

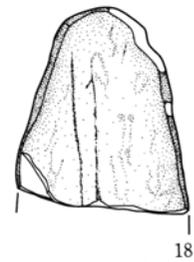
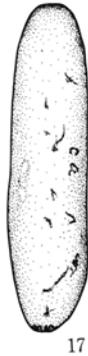
備考 本住居跡の床面には、多量の炭化材がみられた。樹種同定の結果では、クリ材であることがわかった。



第23図 6号住居遺物出土状態及び出土遺物(1)



0 1 : 4 10cm



0 1 : 3 10cm

第24图 6号住居出土遗物(2)

7号住居 写真 PL-5、36~39

位置 BF-49G

形状 東壁が不明瞭であるが、隅丸長方形を呈する。規模は6.50×(5.4)mである。

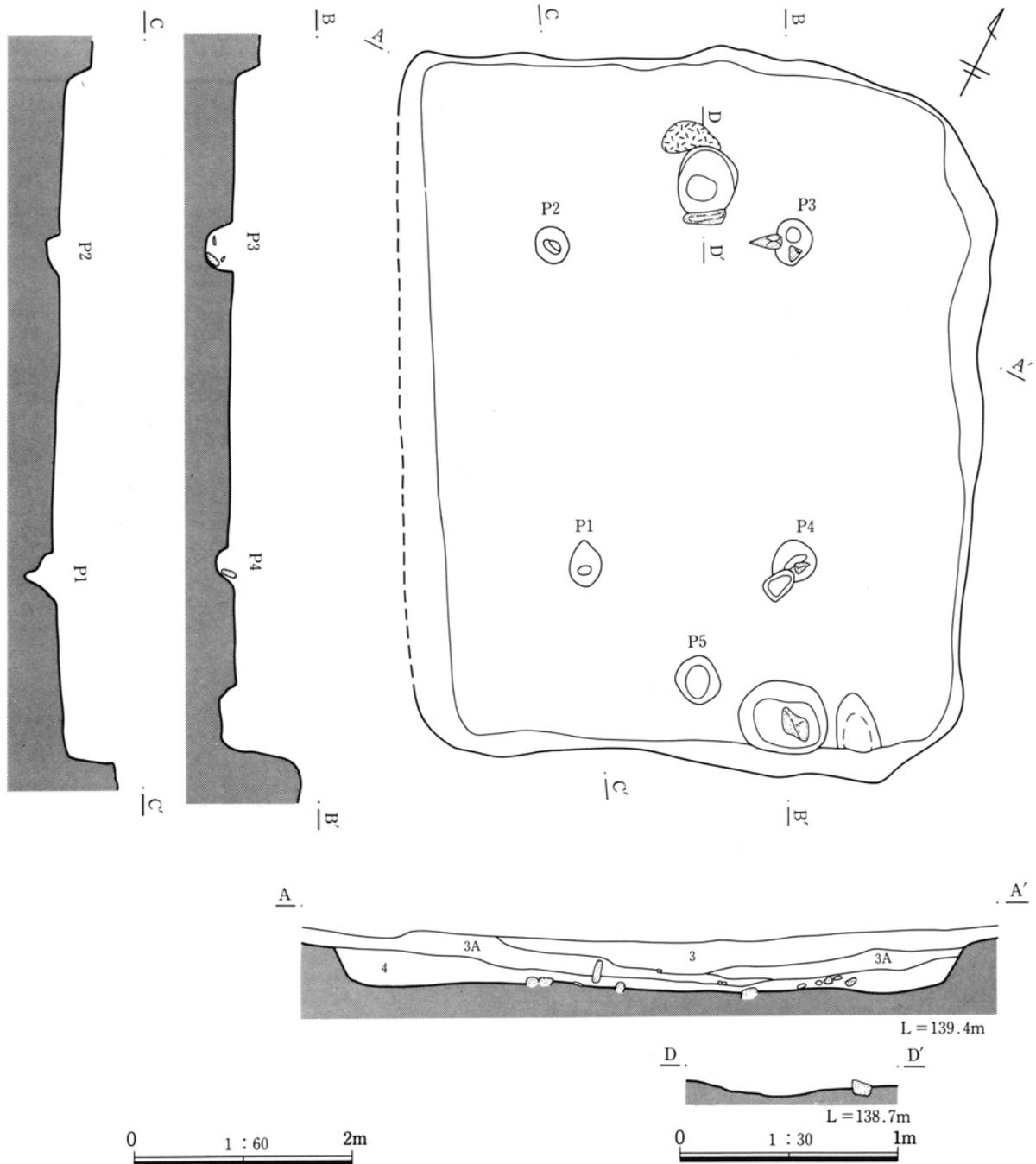
面積 28.12㎡ 方位 N-26°-W

床面 深度29~57cmで、住居中央へ向かって若干の傾斜がみられる。

埋没土 黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

炉 住居中軸線上の北方に位置する。規模は70×48×4cmで、南側には炉石が置かれていた。炉面及び覆土には焼土がみられ、また、炉の北側には炭化粒が散布していた。

貯蔵穴 南壁際の東よりに位置する。半円形を呈し、規模は80×62×19である。



第25図 7号住居

柱 穴 支柱穴4本(P1~P4)を含む計5本のピットを確認した。P5は入り口施設に関連するものと考えられる。各柱穴の規模、及び心々間の距離は以下の通りである。

P1 : 42×13cm P1~P2 : 3.60m

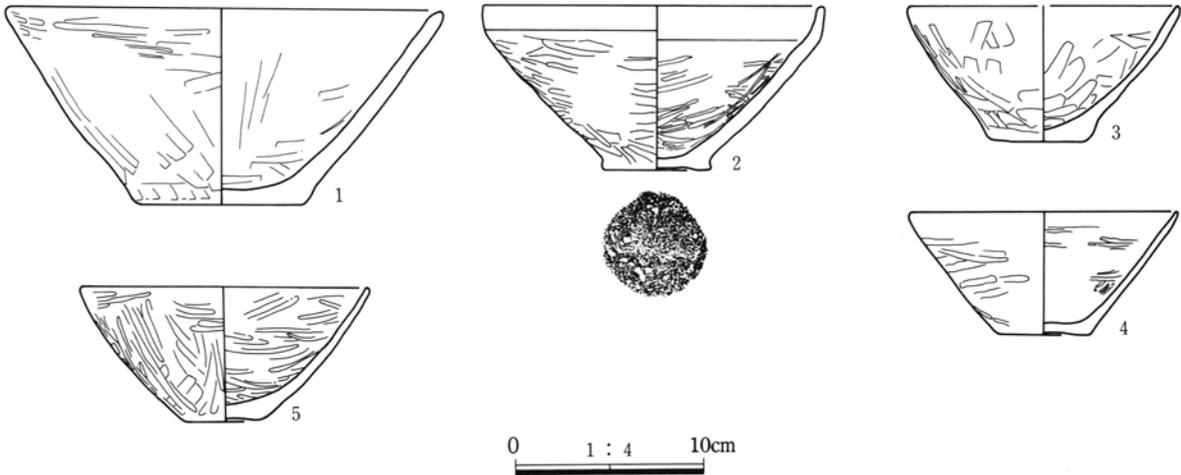
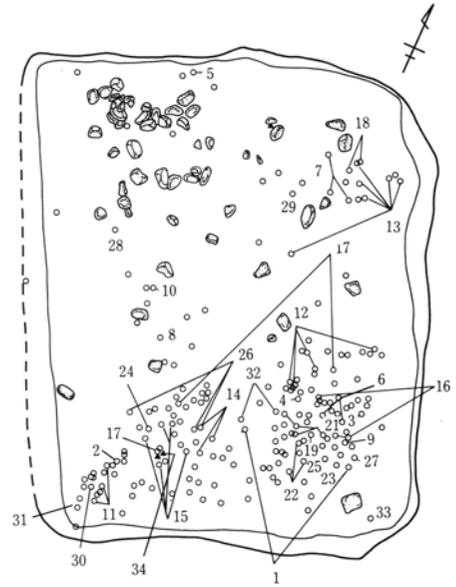
P2 : 34×12cm P2~P3 : 2.15m

P3 : 40×21cm P3~P4 : 3.00m

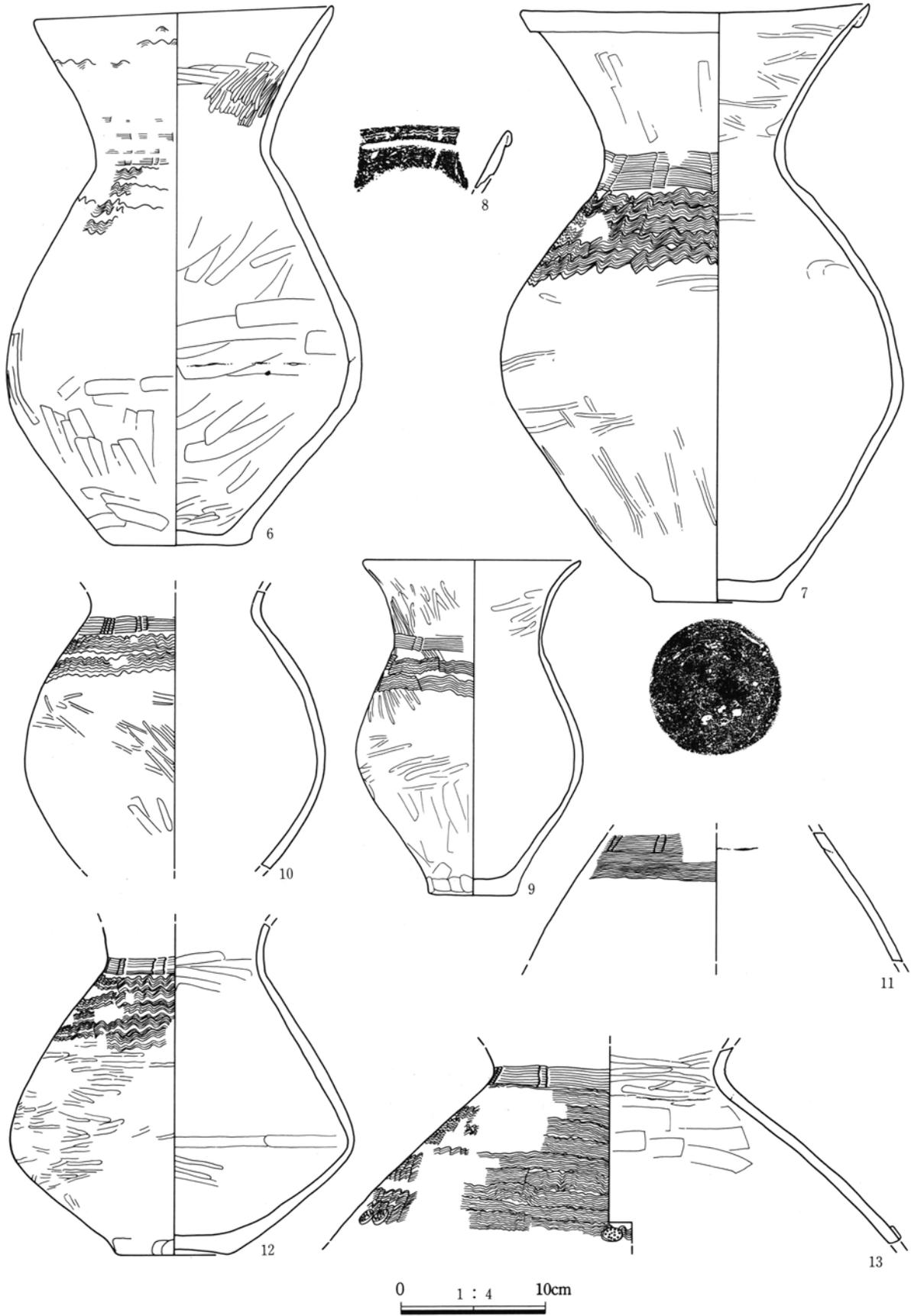
P4 : 38×18cm P4~P1 : 1.92m

P5 : 42×12cm

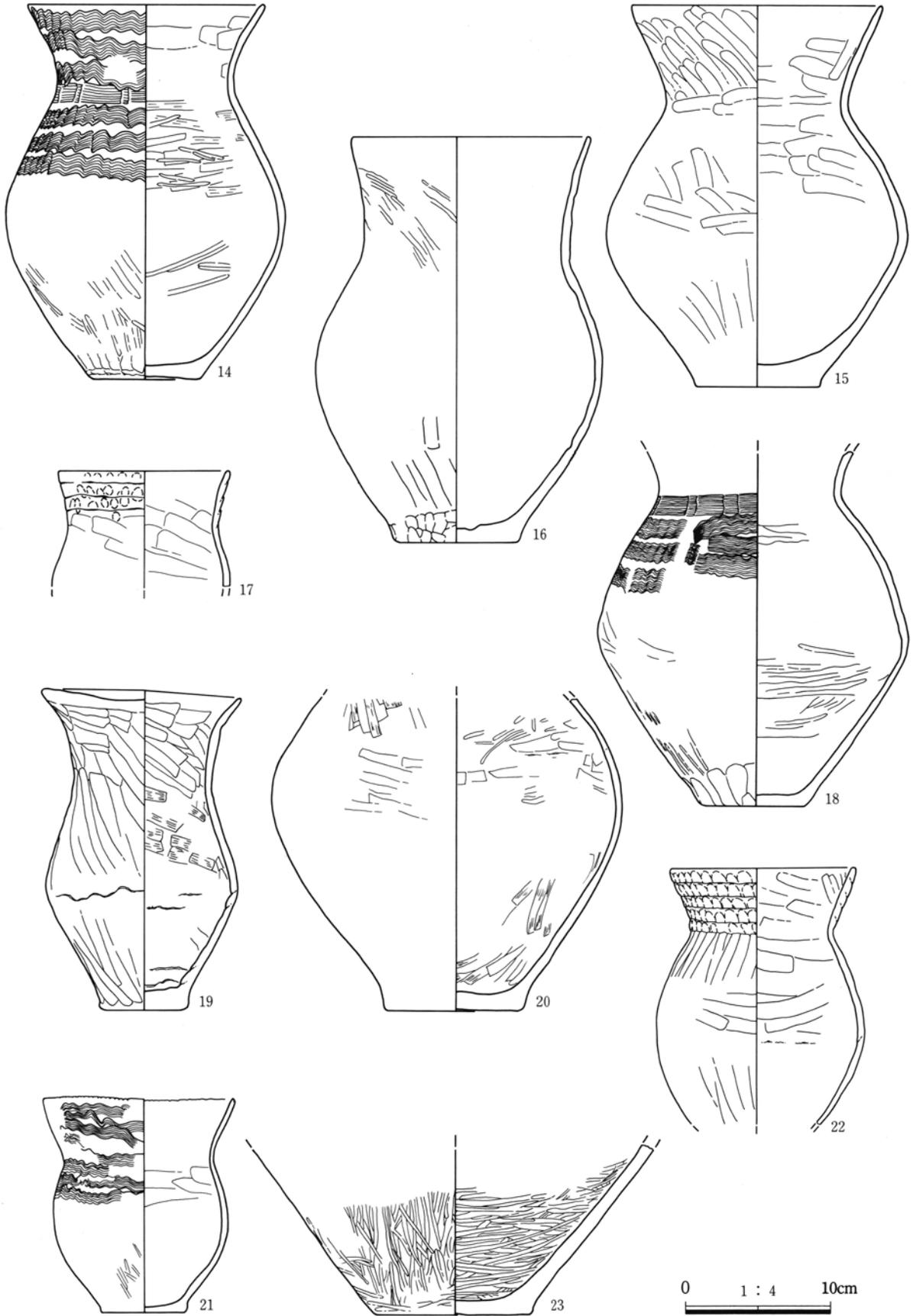
遺 物 多量の遺物が出土し、33点の土器と1点の石器を図示した。遺物は住居南側に多く偏在しており、北側には地山の礫が多くみられた。2の鉢外底部には靱状の、7の壺外底部には小豆大の圧痕がそれぞれみられた。赤色塗彩は、5、28の鉢、11の壺、30、31の高坏にそれぞれみられ、3の鉢にもその痕跡がみられるが不明瞭である。11の壺は文様下からの塗彩である。図示した遺物以外には壺・甕類を中心に36,853gの土器破片が出土している。



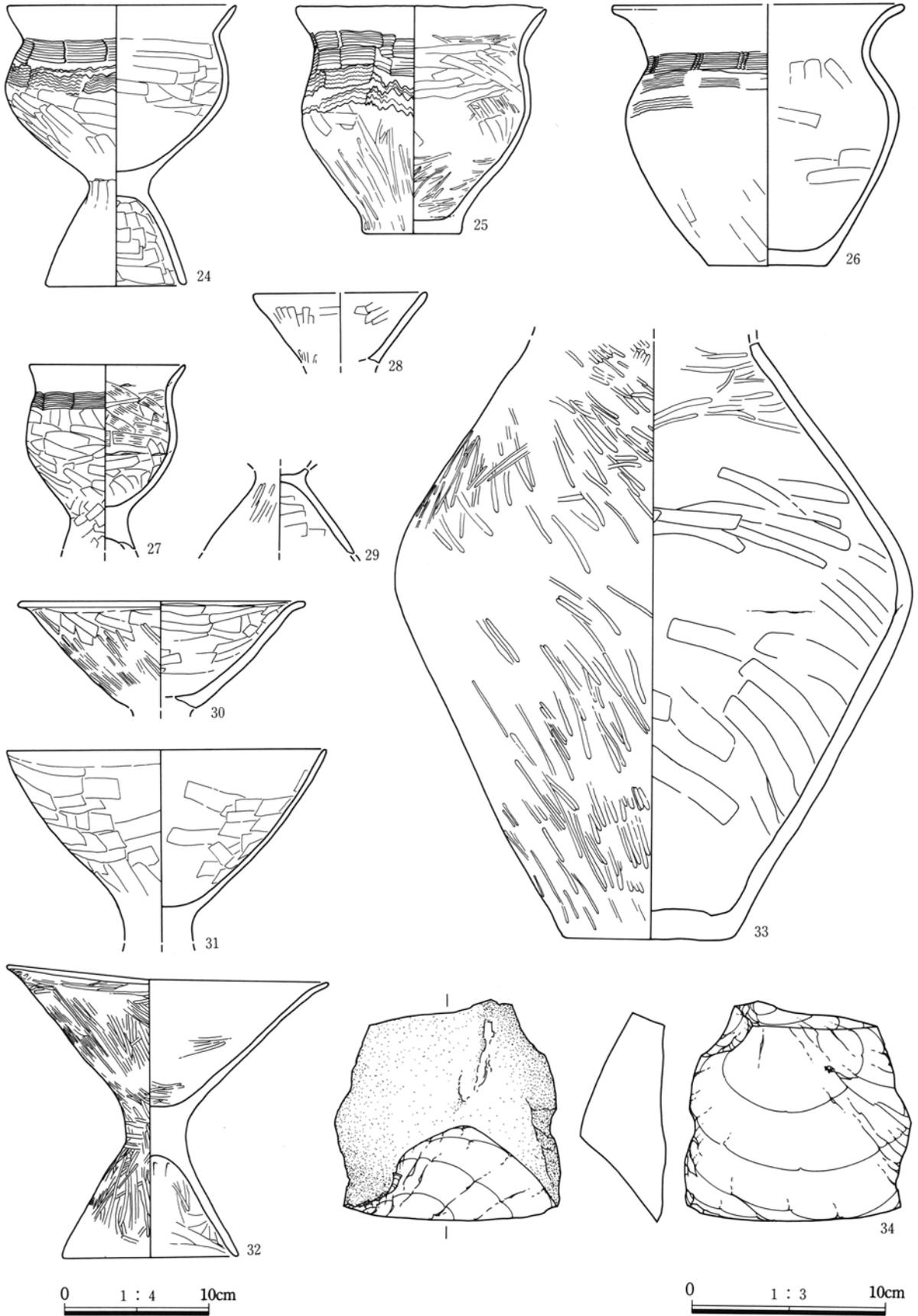
第26図 7号住居遺物出土状態及び出土遺物(1)



第27図 7号住居出土遺物(2)



第28图 7号住居出土遺物(3)



第29図 7号住居出土遺物(4)

8号住居 写真 PL-5、6、40

位置 BE-51G

重複 4号特殊土坑に先行する。

形状 攪乱と重複により西壁と北東部の一部不明瞭だが、隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は7.12×4.80mである。

面積 (33.42㎡) 方位 N-37°-W

床面 深度10~36cmで、やや東から西へ傾斜している。

埋没土 上層と下層には黒色土が、中層にはオリブ褐色土が堆積する。中層以下は炭化粒の混入が多い。攪乱により不明瞭であるが自然堆積の状態を示すと考えられる。

炉 住居中軸線上の北方に位置する。炉面は焼土となっており、また、その北側には炭化物が広がっている。規模は40×38×3cmである。

貯蔵穴 南壁際の東よりに位置する。半円形を呈し、規模は68×42×18cmである。また、周囲を巡るような高まりが、高さ5cm、幅10~25cmでみられた。

柱穴 支柱穴4本(P1~P4)を含む計12本のピットを確認した。そのうち、P6~P8は入り口施設に関連するものと考えられる。各柱穴の規模、及び心々間の距離は以下の通りである。

P1 : 28×32cm P1~P2 : 2.90m

P2 : 28×26cm P2~P3 : 2.16m

P3 : 32×25cm P3~P4 : 3.02m



第30図 8号住居

第3章 田篠塚原遺跡

P 4 : 31×33cm P 4～P 1 : 2.15m

P 5 : 36×19cm

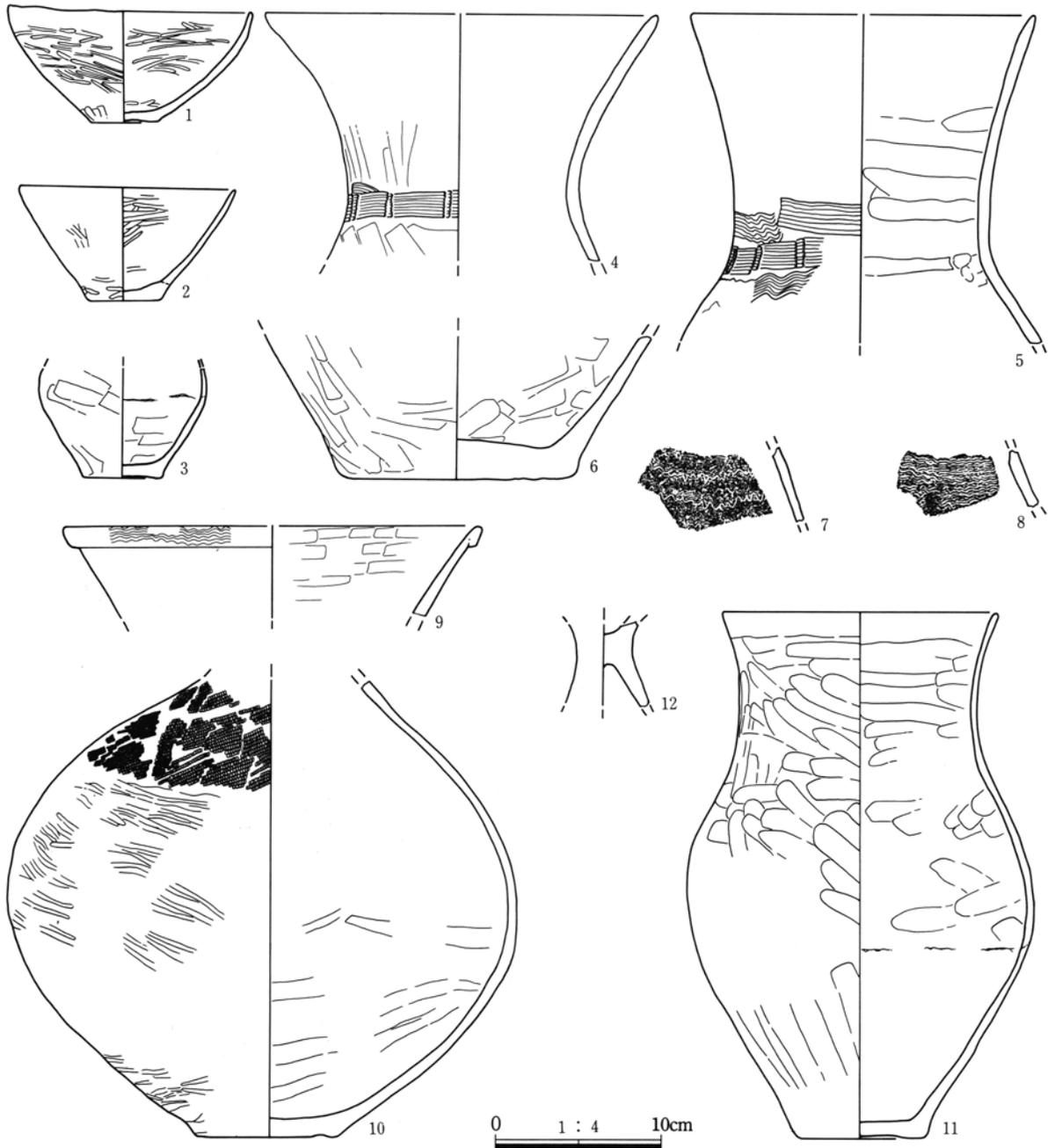
P 6 : 42×22cm P 10 : 27×15cm

P 7 : 37×18cm P 11 : 31×25cm

P 8 : 40×10cm P 12 : 25×18cm

P 9 : 22×20cm

遺物 攪乱等により不明瞭ではあるが、住居南東部に遺物の出土は多い。12点の遺物を図示したが、7、8以外は床直上からの出土である。図示した遺物以外には、壺・甕類を中心に10,298g出土している。また、重複している4号特殊土坑からも約10kg以上の弥生土器片が出土している。



第31図 8号住居出土遺物

9号住居 写真 PL-6、41

位置 BC-50G

形状 長軸を南北にとる隅丸長方形を呈する。規模は6.34m×4.80mである。

面積 27.26㎡ 方位 N-14°-W

床面 深度12~57cmで、ほぼ平坦面である。南壁際から中央にかけて、及び南西部に堅く踏み固められた部分がみられた。

埋没土 黒褐色土に続いてオリブ褐色土が堆積した様子を示す。自然埋没と考えられる。

炉 長軸線上の北よりの位置に、88×30cmの不定形に焼土を確認したが、掘り込み等は確認できなかった。

貯蔵穴 南壁際東よりに位置する。規模は48×36×30cmで楕円形を呈する。

柱穴 支柱穴4本(P1~P4)を含む計8本のピットを検出した。そのうち、P5は入り口施設に伴うものと考えられる。各柱穴の規模と心々間の距離は以下のとおりである。

P1 : 34×15cm P1~P2 : 2.66m

P2 : 26×19cm P2~P3 : 1.34m

P3 : 38×16cm P3~P4 : 2.60m

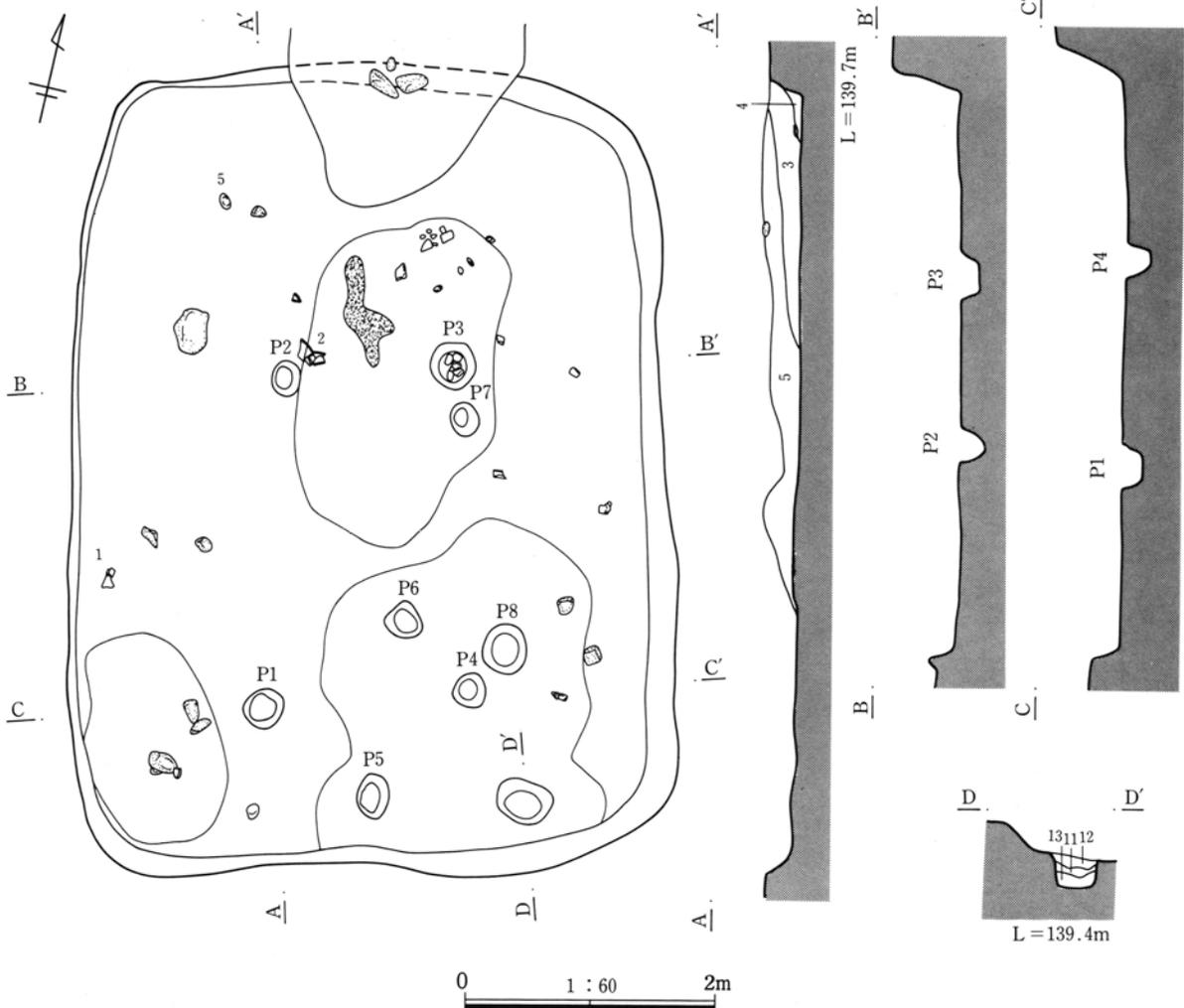
P4 : 28×20cm P4~P1 : 1.64m

P5 : 37×27cm

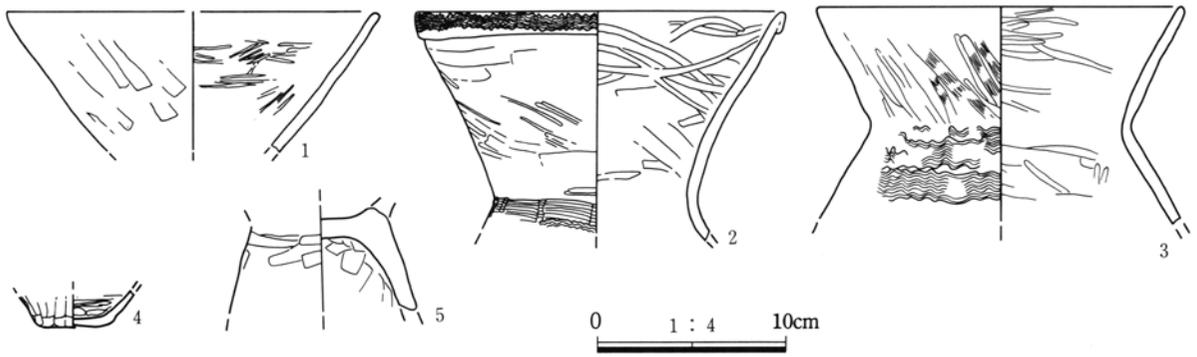
P6 : 32×28cm P8 : 38×20cm

P7 : 24×25cm

遺物 5点を図示した。他に小破片であるが、2,623gの土器片が出土している。



第32図 9号住居



第33図 9号住居出土遺物

10号住居 写真 PL-6、41

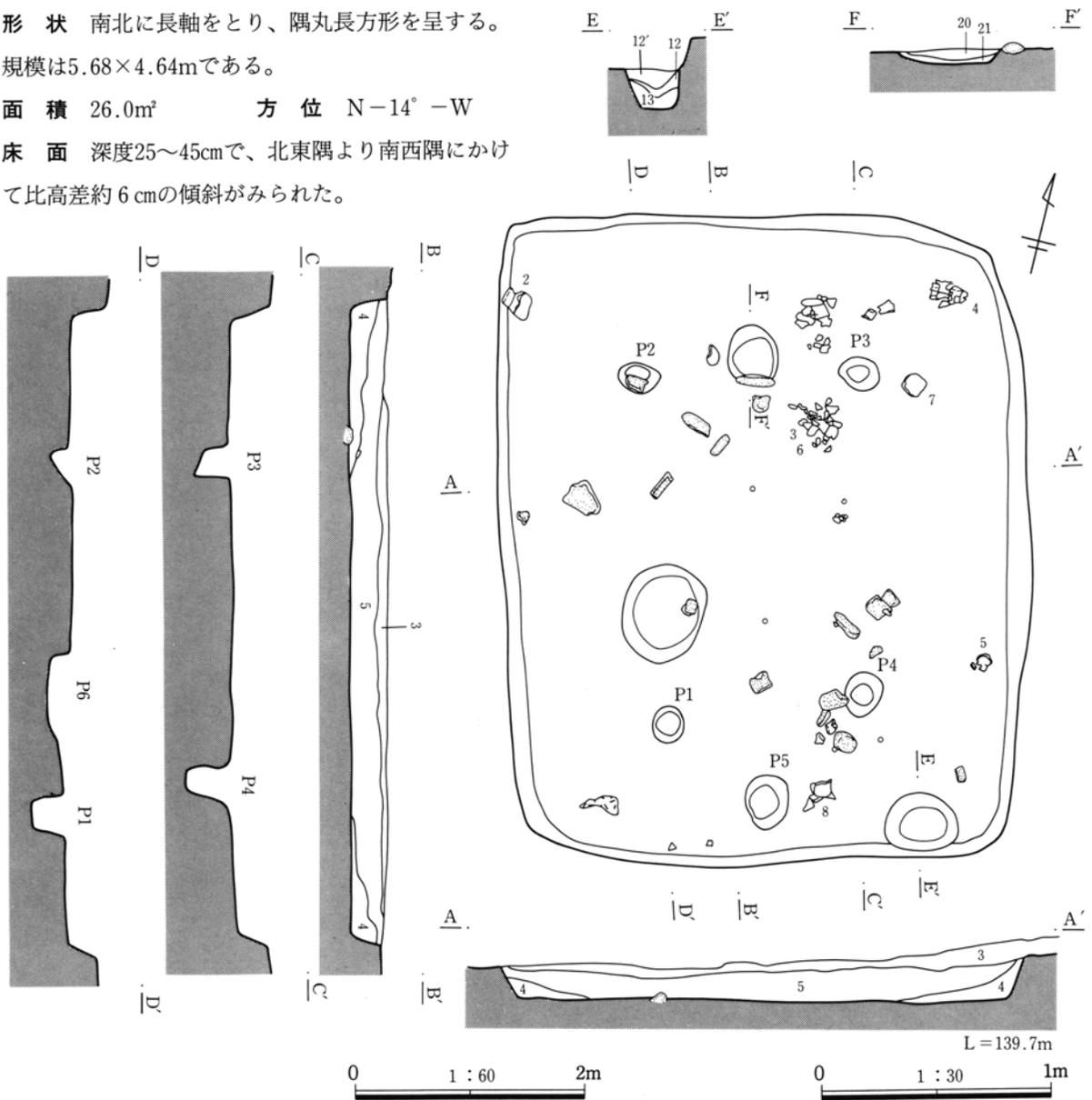
位置 BH-44G

形状 南北に長軸をとり、隅丸長方形を呈する。

規模は5.68×4.64mである。

面積 26.0m² 方位 N-14° -W

床面 深度25~45cmで、北東隅より南西隅にかけて比高差約6cmの傾斜がみられた。



第34図 10号住居

埋没土 暗褐色土の堆積後、黄褐色土、褐色土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

炉 長軸線上の北よりに位置し、規模は56×44×5cmである。南側には片岩系の炉石(32×8×6cm・2.8kg)が置かれていた。また、燃烧面側には赤色味がみられた。

貯蔵穴 南壁際の東よりに位置する。規模は66×50×35cmで楕円形を呈する。

柱穴 主柱穴4本(P1~P4)を含む、6本のピットを検出した。そのうち、P5は入り口施設に伴うものと考えられる。各柱穴の規模と心々間の距離は以下のとおりである。

P1 : 30×29cm P1~P2 : 3.06m

P2 : 36×18cm P2~P3 : 1.90m

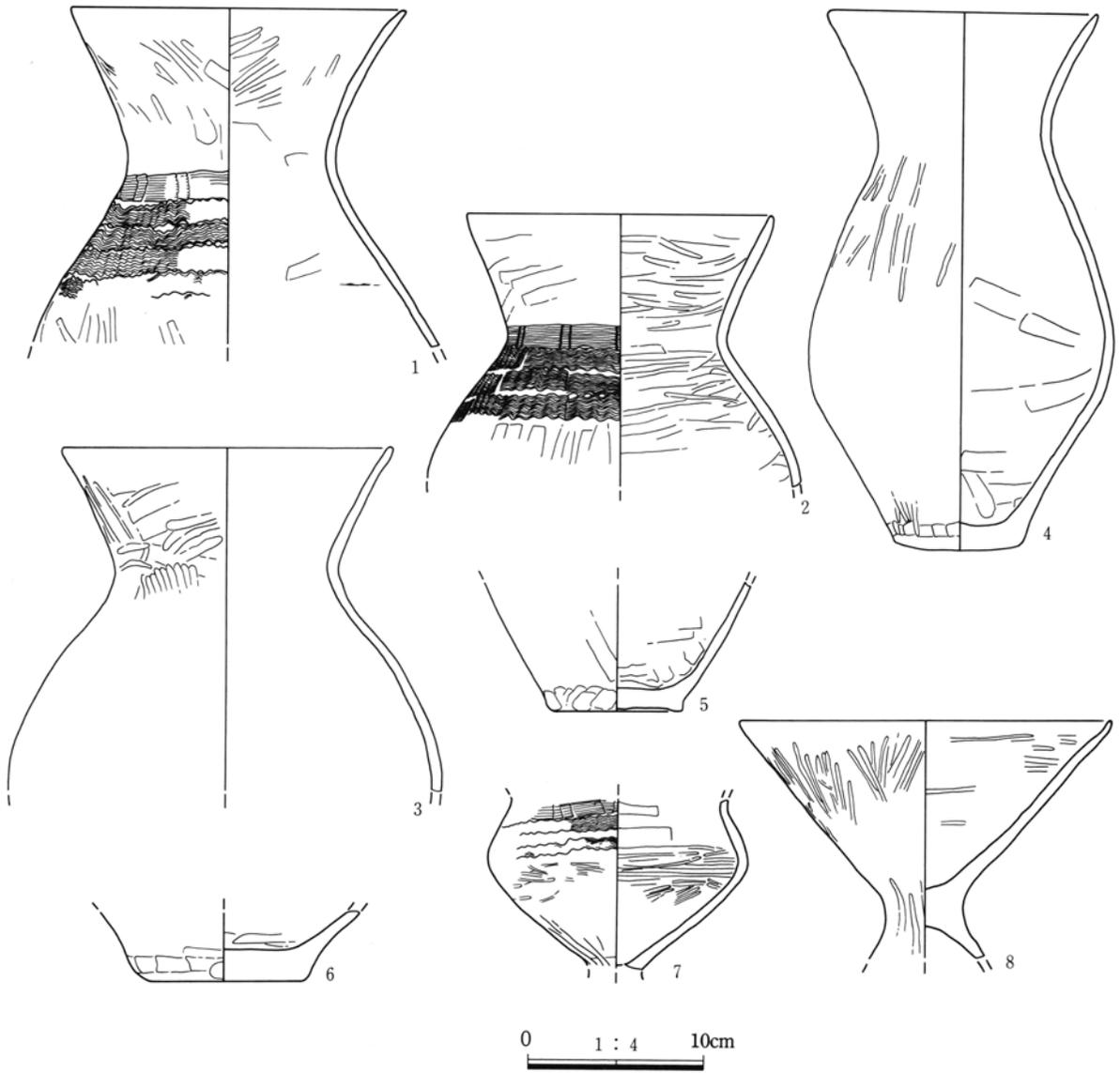
P3 : 36×29cm P3~P4 : 2.82m

P4 : 40×45cm P4~P1 : 1.74m

P5 : 47×47cm

P6 : 87×16cm

遺物 遺物は炉の東側にやや多くみられた。図示した遺物は壺・甕を中心に8点であるが、その他に5,682gの土器片が出土。また、赤彩された土器片も289g出土している。



第35図 10号住居出土遺物

11号住居 写真 PL-7、42

位置 BA-60G

形状 隅丸長方形を呈すると考えられる。西壁は検出できなかったが、地山の礫が現れるあたりかと考えられる。規模は6.70m×(4.6)mである。

面積 (28.6)m² 方位 N-70°-W

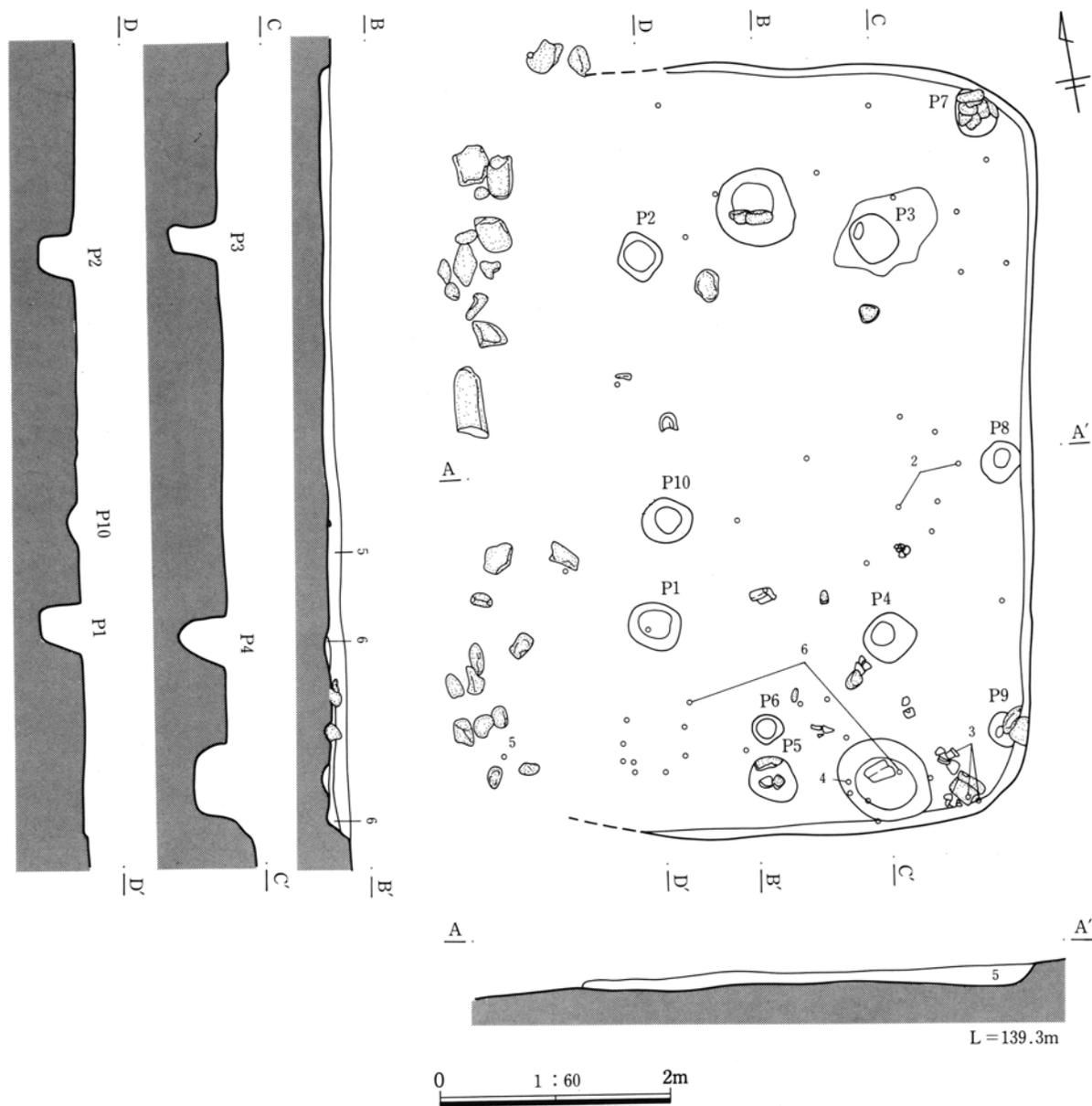
床面 深度4~30cmで、南東から北西にかけて若干の傾斜が見られる。

埋没土 黄褐色の砂質土が堆積する。自然埋没と考えられる。

炉 長軸線上北よりに位置する。規模は68×64×5cmで、片岩系の炉石(34×10×5cm・3.1kg)が置かれていた。炉石北側には焼土が確認でき、炉石の燃焼面側には赤色味が見られた。

貯蔵穴 南壁際の東よりに位置する。楕円形を呈し、規模は90×70×27cmである。

柱穴 支柱穴4本(P1~P4)を含む10本のピットを確認した。そのうちP5は入り口施設に伴うものと考えられる。



第36図 11号住居

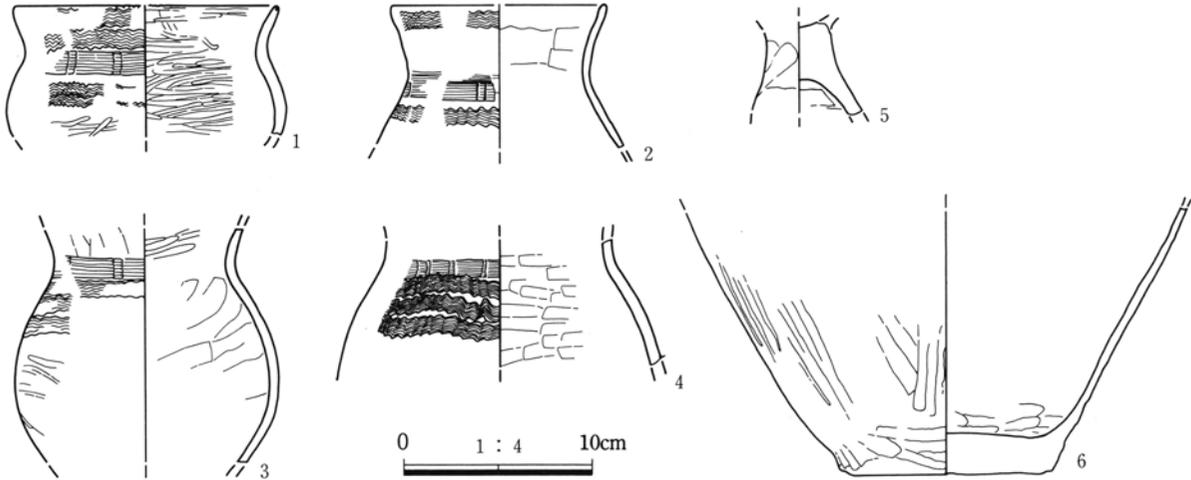
各柱穴の規模と心々間の距離は以下のとおりである。

P 1 : 44×42cm P 1～P 2 : 3.20m
 P 2 : 42×35cm P 2～P 3 : 2.02m
 P 3 : 42×57cm P 3～P 4 : 3.46m
 P 4 : 42×47cm P 4～P 1 : 2.02m
 P 5 : 40×25cm
 P 6 : 24×17cm

P 7 : 40×30cm P 9 : 31×40cm

P 8 : 36×31cm P 10 : 44×17cm

遺物 6の甕は貯蔵穴内と床直上遺物が接合したもので、住居廃絶時に貯蔵穴が開口していたことがわかる。その他にも二次被熱した土器が多い。図示したもの以外には約5kgの土器片が出土している。



第37図 11号住居出土遺物

12号住居 写真 PL-7、42

位置 BA-62G

形状 北側の大部分が不明瞭なため確定できないが、隅丸長方形を呈すると考えられる。

面積 不明 **方位** N-5°-W

床面 深度13~23cm。北側は不明瞭。一部に焼土がみられた。

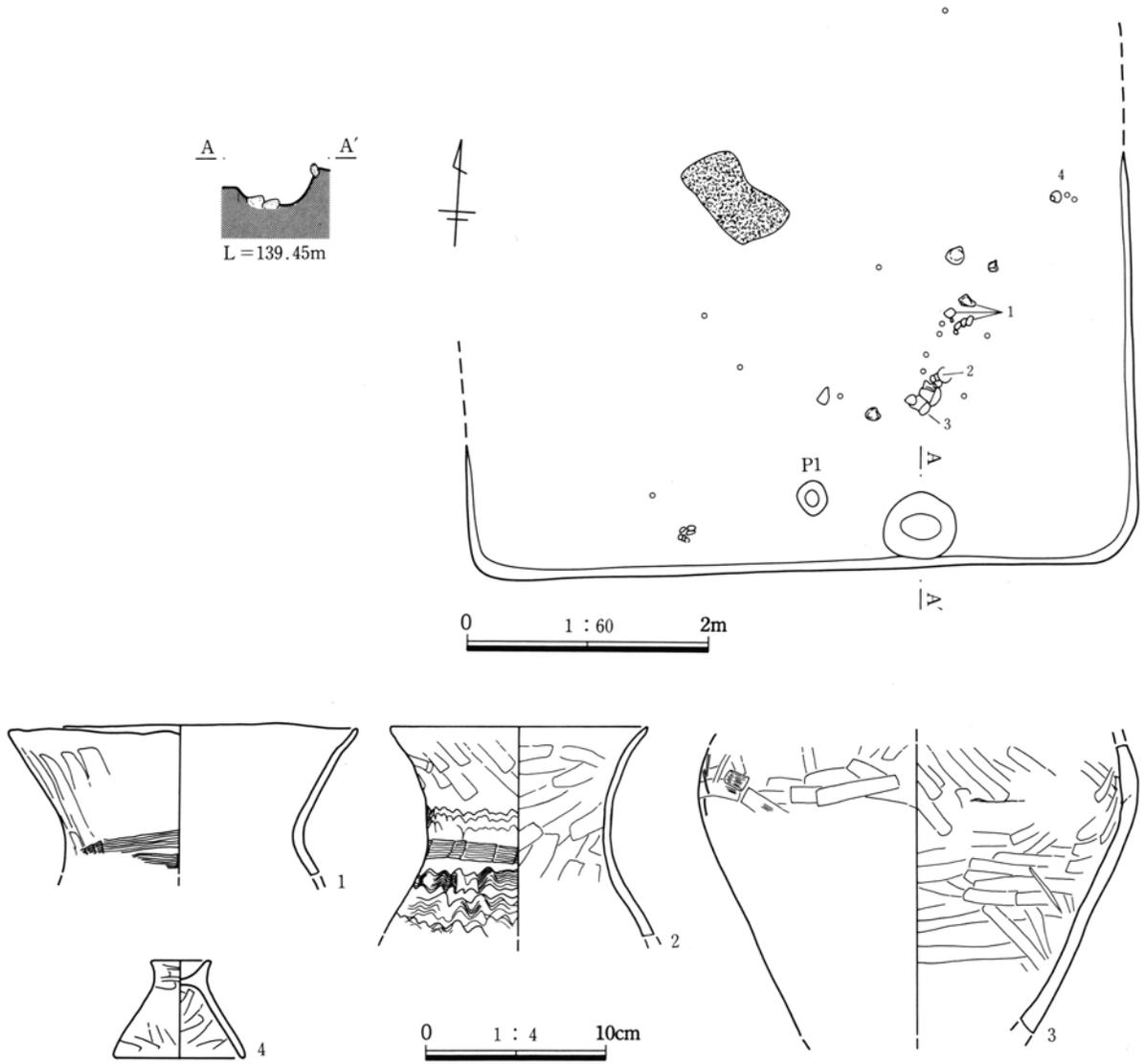
埋没土 黄褐色土の堆積がみられた。

貯蔵穴 南壁際の東側に位置する。円形を呈し、規模は62×58×30cmである。

柱穴 入り口施設に伴うと考えられるピット1本を確認した。

P 1 : 28×14cm

遺物 遺物の量はやや少ないが、確認された住居範囲内に全体的に散乱していた。図示したものは甕3点が床直上からの出土、蓋1点は床上5cmからでほぼ完形である。図示したもの以外に2,186gの土器小破片が出土しているが、赤彩されたものなどもあり、高坏、鉢等の存在がわかる。



第38図 12号住居及び出土遺物

13号住居 写真 PL-7、42

位置 BA-60G

形状 北側が調査区外のため確定しがたいが、隅丸長方形と考えられる。規模は短軸で4.85m程と想定できる。

面積 不明 方位 N-18°-E

床面 深度5~20cmで、東から西にかけて若干の傾斜がみられる。西側の壁の立ち上がりは不明瞭であるが、住居内の床はある程度のしまりをもち、推定ライン外はしまりのない土になる。また、南壁中央付近には焼土がみられた。

埋没土 灰黄褐色土、黒褐色土が中心であるが、南側には黒褐色土の堆積はない。北側より黒褐色土が堆積し、その後灰黄褐色土が堆積したものと考えられる。自然埋没と考えられる。

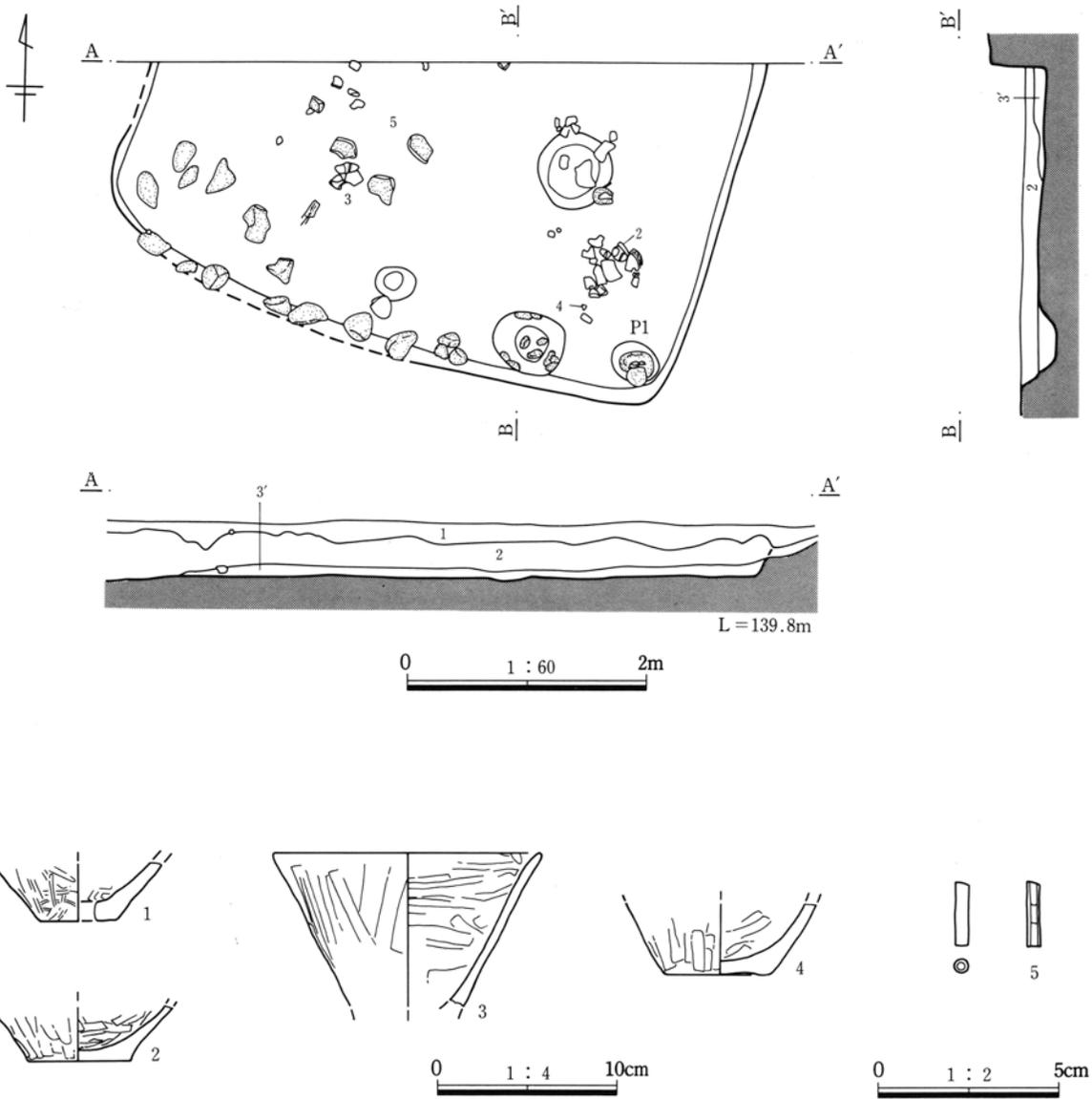
貯蔵穴 南壁際の東側に位置する。楕円形を呈し、規模は62×54×28cmである。

柱穴 3本のピットを確認した。P3は支柱穴の1本、P2は入り口施設に伴うものと考えられる。各柱穴の規模は以下のとおりである。

P1: 42×16cm

P2: 32×20cm

P3: 68×9cm



第39図 13号住居及び出土遺物

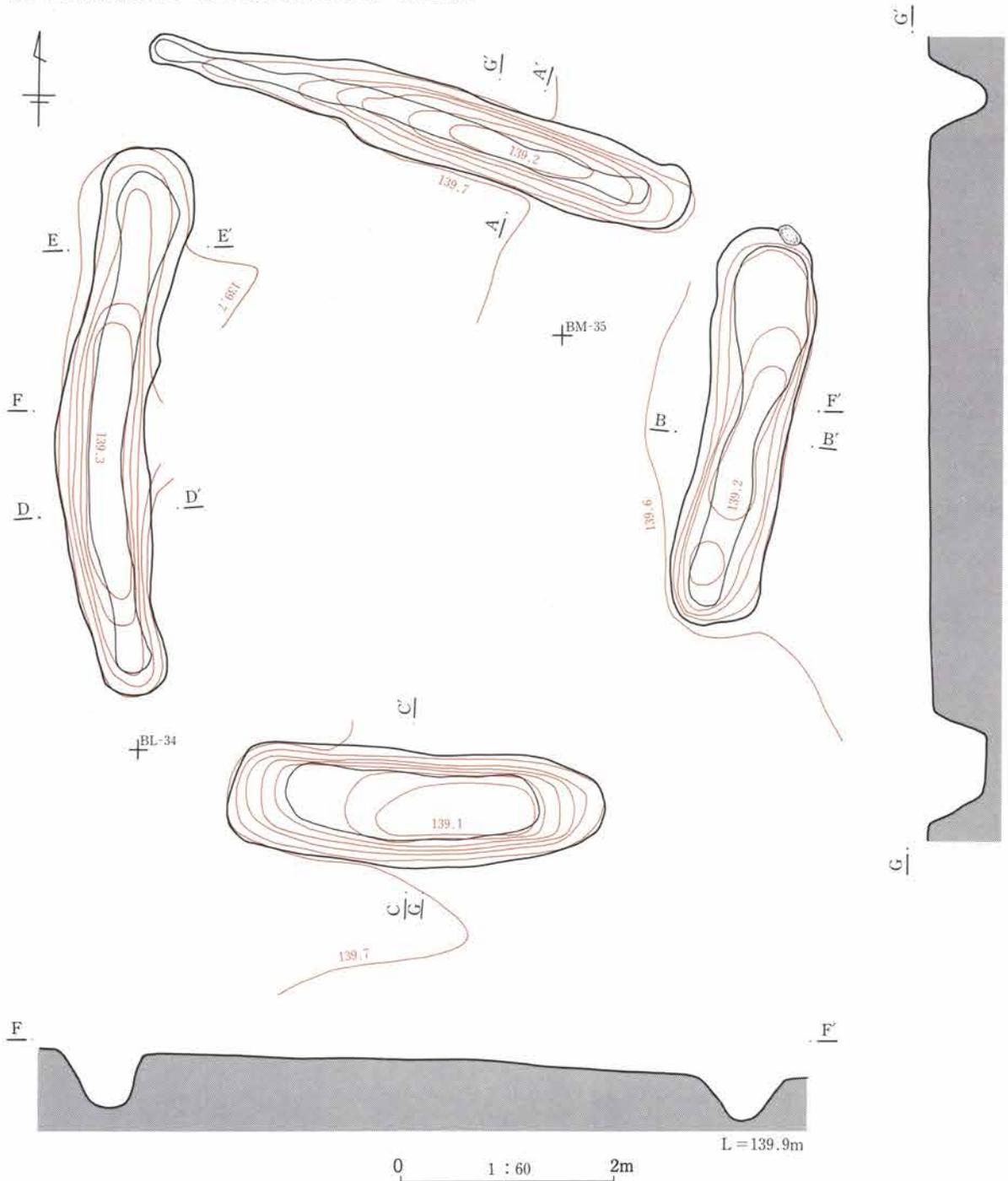
遺物 出土遺物は少なく五点を図示したが、土器類はいづれも小破片である。床直上出土の遺物には2、4がある。その他に5の完形管玉が床直上から出土している。図示したもの以外には、壺・甕類を中心に4,111gの小破片が出土している。

2. 方形周溝墓・円形周溝状遺構

方形周溝墓 写真 PL-8

本遺構はBL-34・35、BM-34・35グリットにほぼ位置する。四隅が切れるタイプのもので、東西の溝はほぼ南北に、南溝はほぼ東西に長軸をとるが、北溝は、北に向いて南北方向から西へ78°振れている。遺構確認面は、地山の黄褐色土面で、墳丘盛土

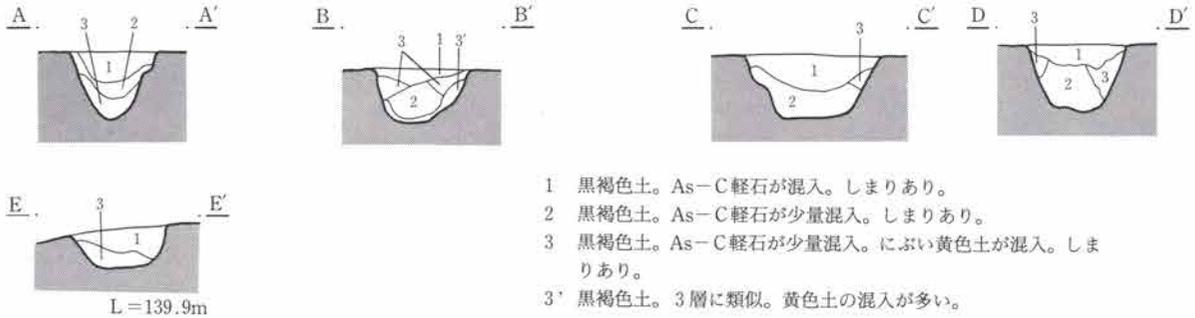
は確認できなかった。各溝の立ち上がりは、内側の方が、やや傾斜が厳しく、外側の方がなだらかである。ただし、北溝だけは外側の方が傾斜が厳しい。東西に向かい合う2つの溝は、その両端を内側に湾曲させ、やや弧状を呈し向かい合う。規模はそれぞれ



第40図 方形周溝墓

れ長軸×短軸×深さで、北溝：530×77×54cm、東溝：378×98×42cm、南溝：350×112×50cm、西溝：

536×90×53cmになる。遺物は、溝埋没土中より弥生土器片が6片、87g出土している。

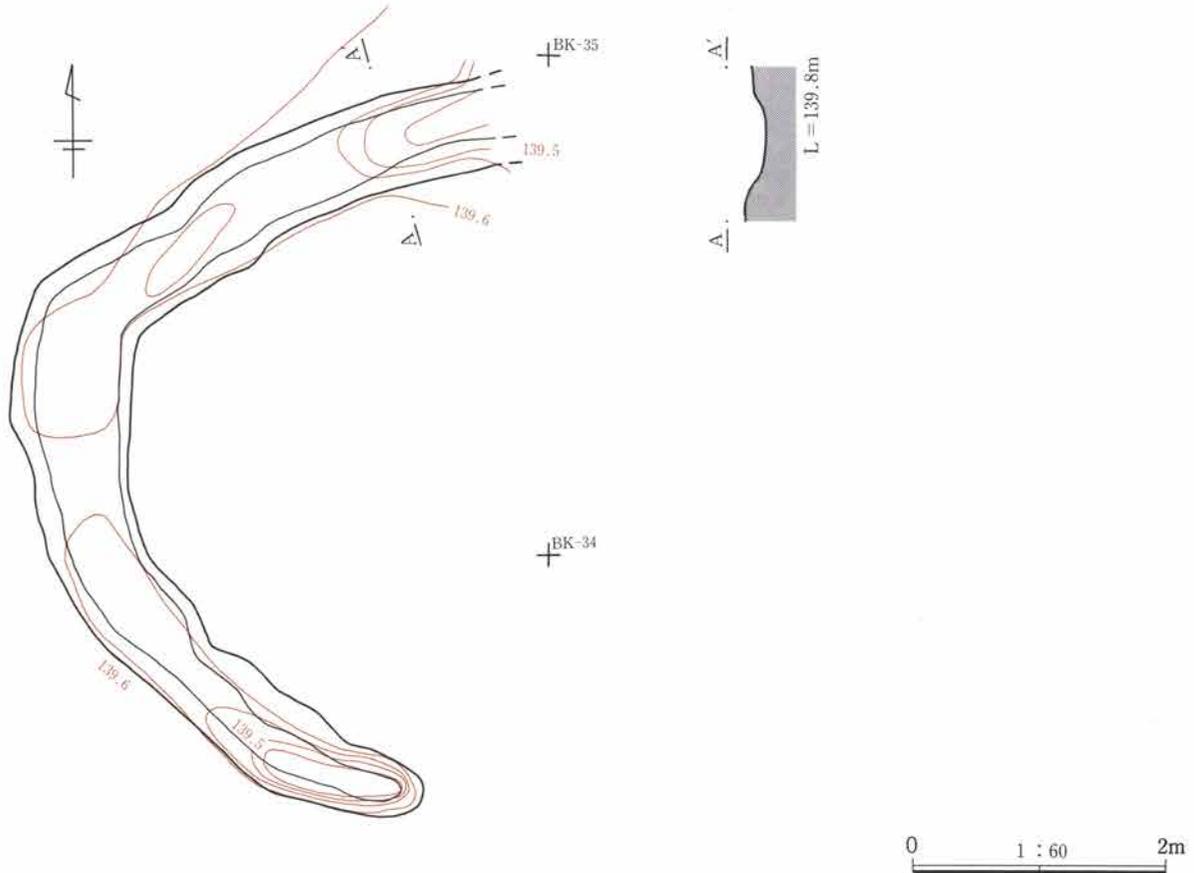


第41図 方形周溝墓土層断面図

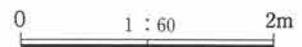
円形周溝状遺構 写真 PL-8

本遺構は、方形周溝墓の南東で、BK-35グリットを中心に位置する。形状は円形と考えられるが、確認できたものは南北を軸にした西側半分ほどである。溝の規模は幅52~95cm、深さは最深部で20cmほどで、円形の半径は約3mになる。西側がやや高く

なっており、南に向かい落ち込んでいき、やや傾斜をもって立ち上がる。逆側も北に向かい落ち込んでいくが、その先は継続する感はあるが確認できなかった。確認面は黄褐色土面で、溝の内側からは何も確認できなかった。また、溝覆土内からの遺物の出土もなかった。



第42図 円形周溝状遺構



3. 畝

4号畝 写真 PL-8

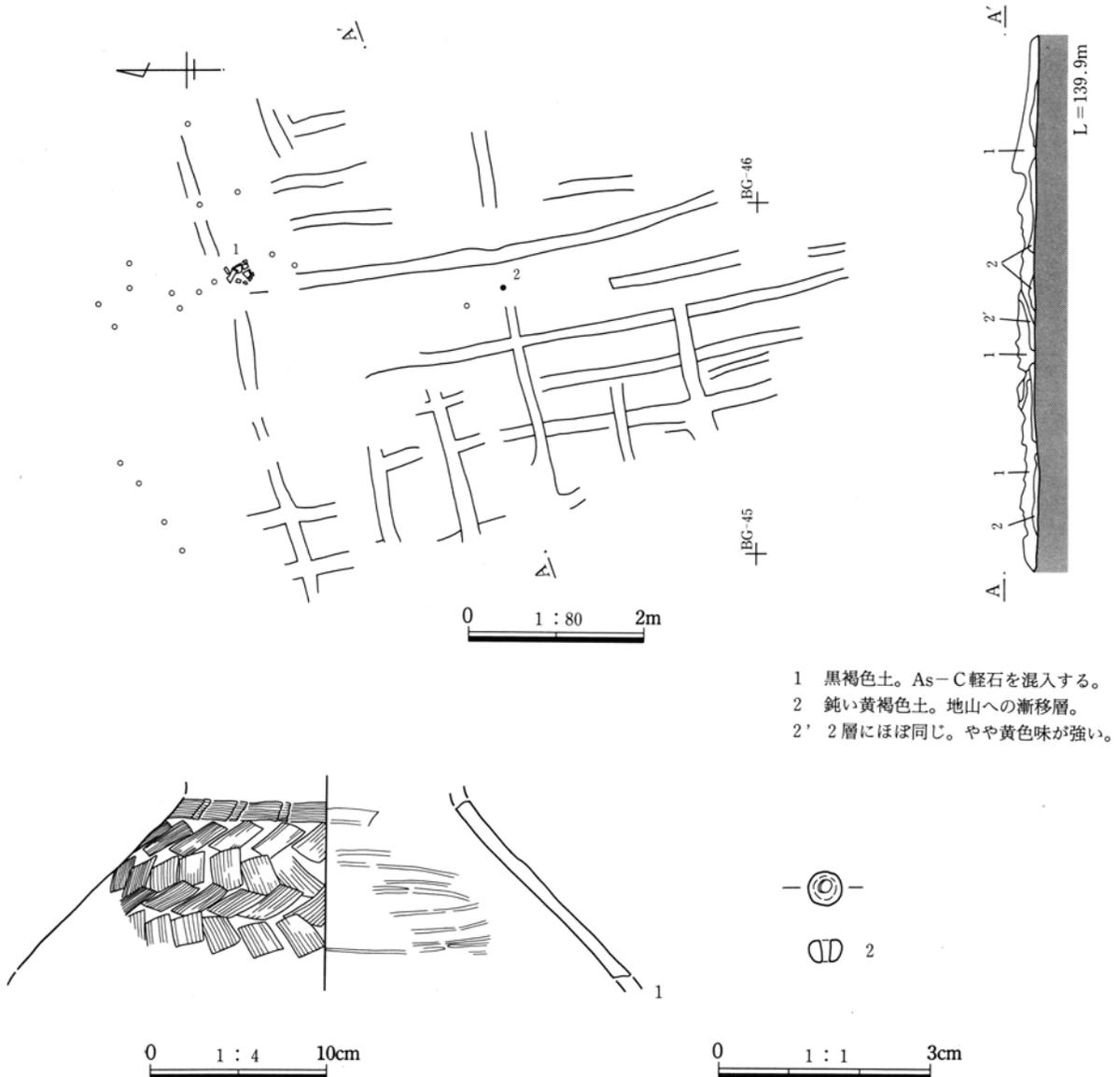
この遺構はBG-45グリット周辺に位置し、これは2号古墳残存部(石室及び裏込め)下部にあたる。古墳築造面を掘り下げていった状態で本遺構は確認された。この面は古墳が残存した部分でしか確認できず、他の調査区域には残っていなかった。また、他の古墳下部の調査では畝跡は確認されなかった。

畝は北を向いて西に11°振れる走向のもの(以下南北走向)と、東へ78°振れるもの(以下東西走向)が確認できた。2走向の新旧関係は、一部での確認であるが、東西走向の畝が南北走向のものを切っている

ことから、南北走向のものが先行すると考えられる。畝間の間隔は、南北走向のものが52~56cm、東西走向のものが92~102cm程で差がみられる。また、畝間には耕具痕と思われる、三日月もしくは半月状の痕跡が確認できた。

遺物は弥生の壺とガラス玉、弥生土器片が出土した。ガラス玉は、同様なものが1号古墳下集石遺構からも出土している。

本遺構の時期は、確認面より古墳築造以前であることは確かで、便宜上弥生時代の遺構の項に記載したが、古墳の造成に際し放棄された可能性がある。



- 1 黒褐色土。As-C軽石を混入する。
- 2 鈍い黄褐色土。地山への漸移層。
- 2' 2層にほぼ同じ。やや黄色味が強い。

第43図 4号畝及び出土遺物

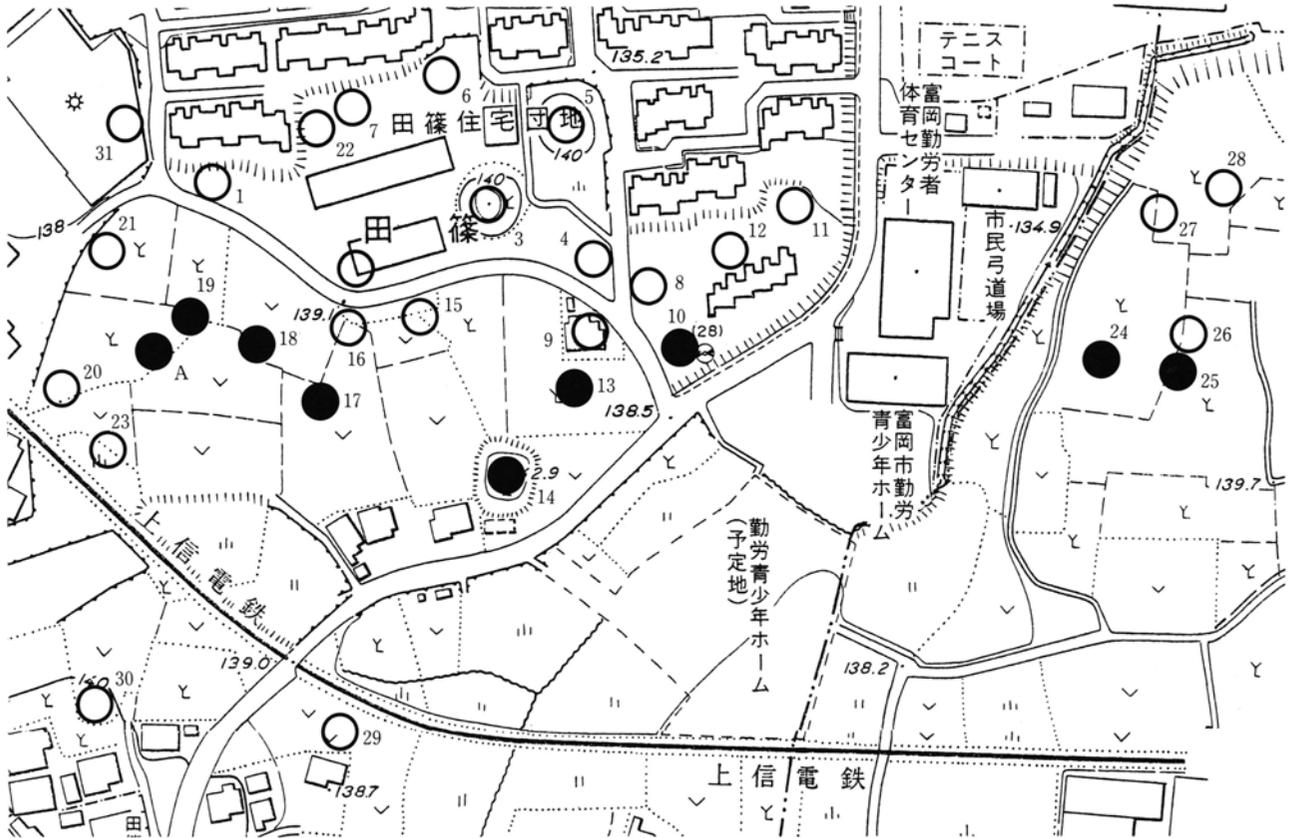
2 古墳時代の遺構

1 古墳

田篠塚原古墳群について

田篠塚原古墳群は、鏡川の支流の南から来る雄川と、北から来る高田川が合流している地点の鏡川右岸及び、雄川右岸の低段丘上に位置する。古墳群は大きく3つの支群に区分され、現在、富岡市勤労青

少年ホームの所が、南西から北東にかけて延びてくる小谷の谷地となっており、この斜めに入る谷を隔てて東に5基が集まる。谷の西側の段丘面に25基が集中しこの支群が当古墳群の中心となる。さらに南西に延びる小谷の南側に2基が確認されている。それぞれを東・西・南支群と仮称したい。



富岡市番号	上毛古墳総覧番号	備考
1	49	
2		
3	44	
4		
5	43	
6	45	
7	46	
8		
9	42	
10	41	田篠塚原6号墳
11		
12	40	
13	39	田篠塚原5号墳
14	38	田篠塚原4号墳・しの塚古墳
15		
16		

富岡市番号	上毛古墳総覧番号	調査時番号及び備考
17		田篠塚原3号墳
18		田篠塚原2号墳
19	50	田篠塚原1号墳
20		
21		
22	47	
23		
24		調査の結果、福島駒形1号集石
25		福島駒形1号墳
26		
27		
28		
29	52	
30	51	
31	48	
		田篠塚原7号墳(地図上のA)

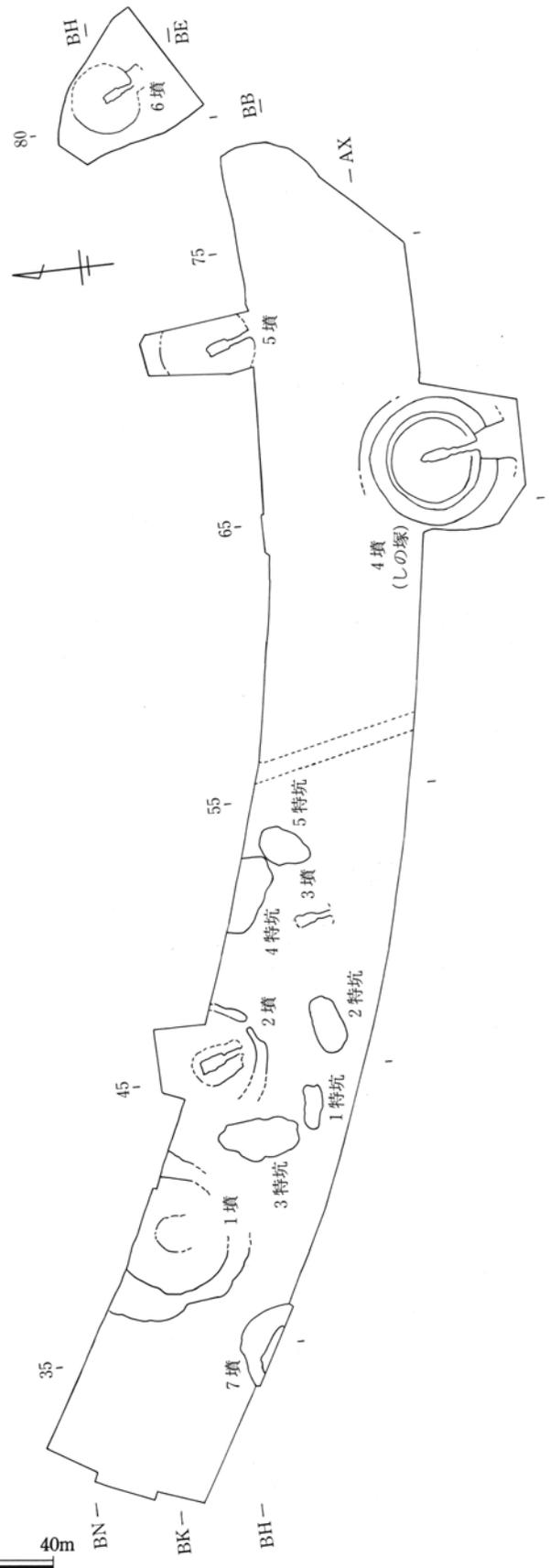
第44図 塚原古墳群古墳分布図

第3章 田篠塚原遺跡

今回の調査で、谷を隔てた東側の東支群の5基中2基を調査したが、この小谷を挟んだ東側は行政区画上甘楽町分に入るため、本報告では福島駒形遺跡の中で便宜上取り扱ったが、本来は田篠塚原古墳群に含まれるものである。東支群のうち、24号墳に関しては、後世の畑の耕作に伴い、周辺の小石を積み上げたものと調査の結果判明した。25号墳は福島駒形遺跡第1号古墳として報告した。西部の25基群集している西支群は、今回7基の調査を行った。

今回調査をした田篠塚原古墳群の西支群について詳しく述べてみる。当古墳群の中で目立つのは3号、5号、14号（本報告4号墳）で、いずれも径15m以上を有し、この古墳群中では中心的存在となる古墳である。いずれも埴輪の出土は現在の所認められず、7世紀代に入る可能性がかなり高い。周辺の古墳が径10m未満のものがほとんどであることからしても、これら3基の古墳の重要性が伺える。今回の調査ではこの北西区の古墳群のほぼ真中を通る道路建設のために古墳群中最大規模を有する14号墳（本報告4号墳・しの塚古墳）をはじめ、計7基の古墳を調査した。調査の関係上、調査順に古墳番号を付けていったため、富岡市教育委員会が付けた古墳番号と相違してしまったが、調査時の古墳番号を尊重し、富岡市との番号との関係は、一覧表を参照してもらいたい。

今回の調査での1～6号墳までは、すでに富岡市の分布調査でも存在が分かっていた古墳であるが、7号墳は完全に墳丘が削平されていた為、その存在が確認されていなかったものである。また7号墳からは形像・円筒埴輪が出土し、この古墳群中では最古になる可能性が高い古墳である事が分かった。これ以外の古墳は全て埴輪を持たない古墳で、埴輪消滅後の7世紀代に入る古墳と考えられる。いずれも南から南西方向に開口する敷石を有する横穴式石室と前庭を持つものである。



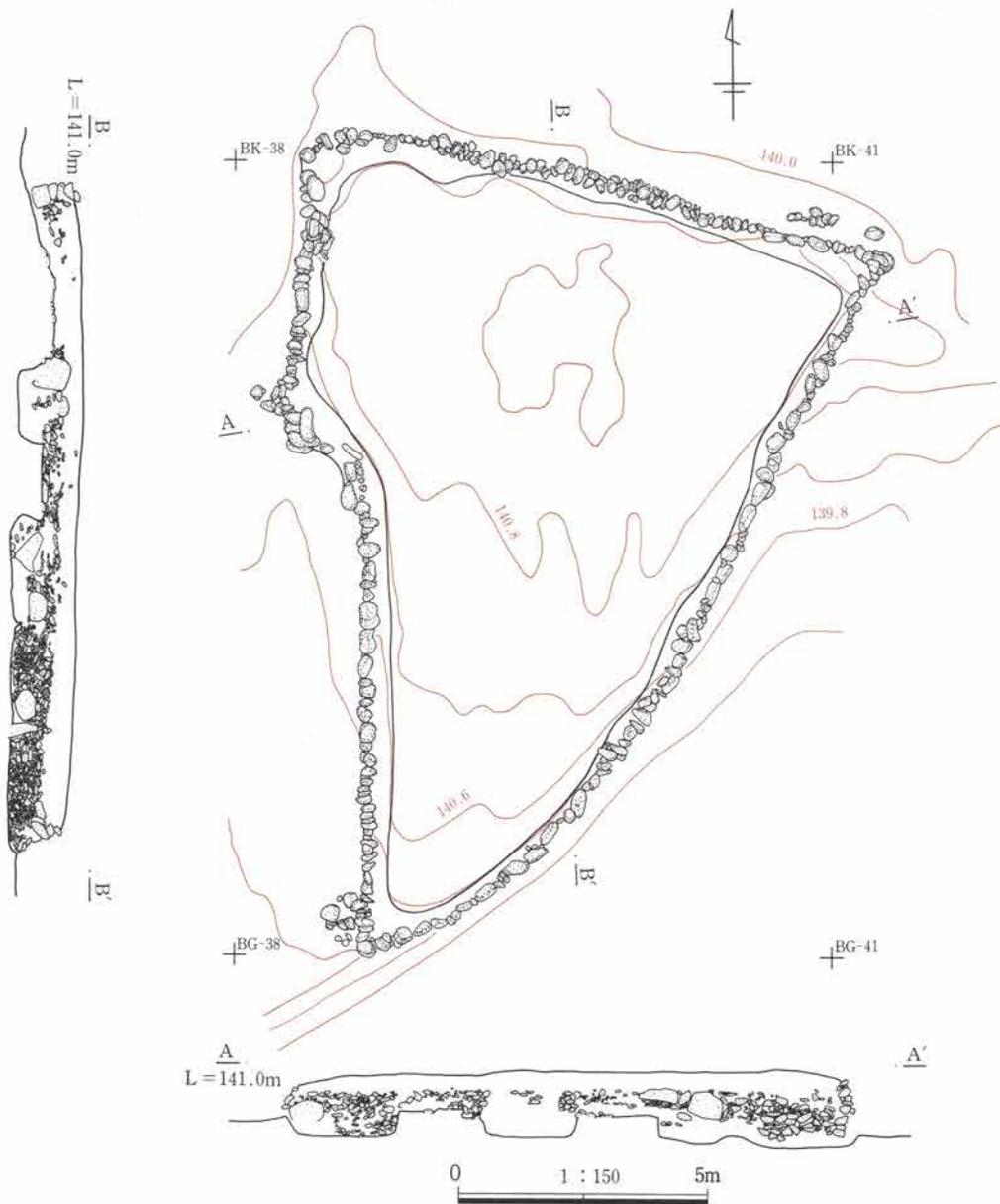
第45図 田篠塚原遺跡 古墳時代の遺構

1号古墳（富岡市第19号墳）

調査前の現状と調査経過（第46図）

本古墳は、西支群中でも、西端に近い地点に位置し、現状はかなりの変形を受けていた。平面図をみると分かるように、三角形形状を呈しており、畑の耕作に伴い古墳周辺をかなり削り込む中で土を寄せ、また古墳を崩していく過程で出てきた葺石や盗掘時の石などをこの変形した古墳の周りに石垣状に築き上げている。断面図をみるとこの古墳がいかにか徹底的に破壊されているかが分かる。第46図のA・B断面共に、断面図上に出ている石はすべて動かされて

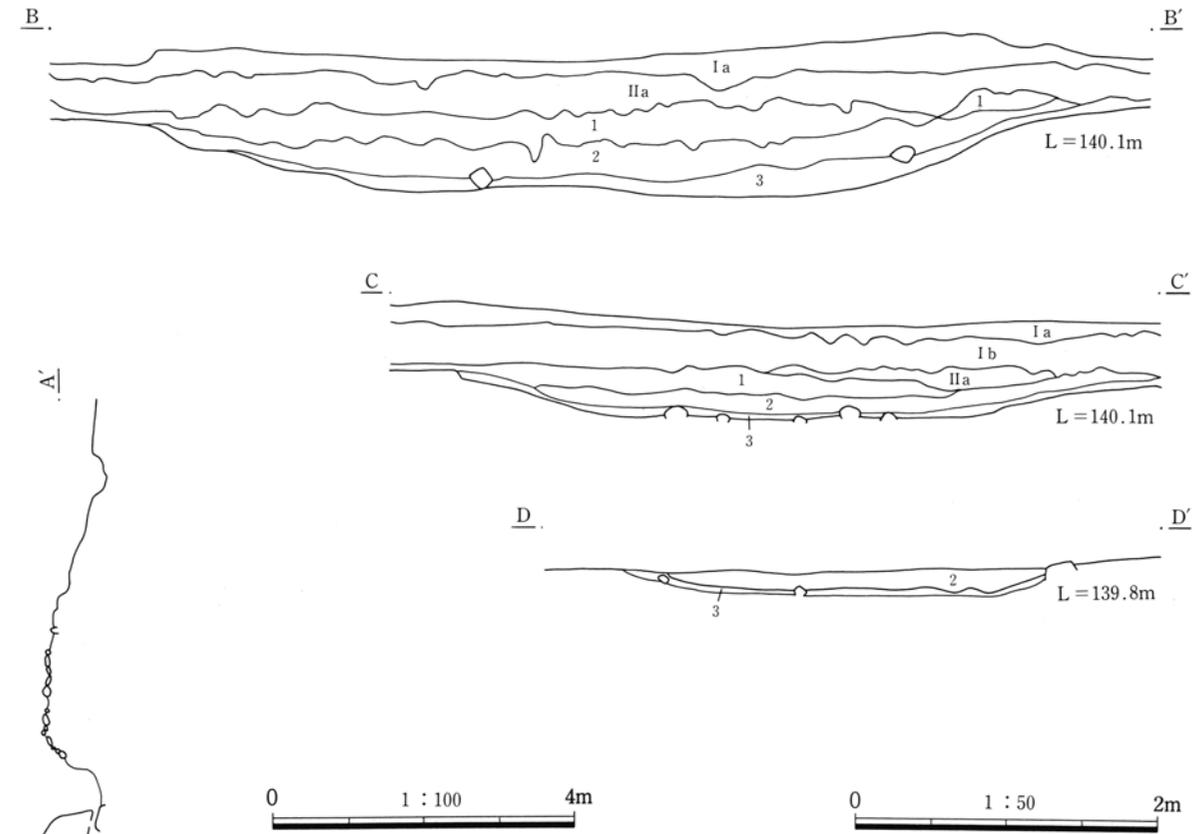
いる石で、ほとんど石室・墳丘含めて徹底的な破壊がなされた。古墳の調査は、取りあえず動かされた石・土を取り除くことから始め、南北・東西断面を残しながら掘り進んでいったが、ほとんど墳丘は残っていないことが確認された。結果、石室も、完全に破壊され、側壁等の石はすべて持ち去られるか、破碎されて、穴を掘ってこの地点に埋められている状況であった。石室のごく一部の基壇面が残るとともに、周堀の一部及びとそれに伴う葺石の一部が残っていた。



第46図 1号墳現況図



第47図 1号墳全体図



第48図 1号墳断面図

- 1 黒褐色土。As-B軽石を混入する締めりある土。
- 2 黒褐色土。As-B、C軽石、小礫が混入する。
- 3 黒褐色土。As-C軽石を混入する。

周堀 (第47・48図)

墳丘は前述したようにほとんど残っていなかったが、周堀はかなりの削平を受けながらも、調査区外に出てしまった北部と削平・攪乱が激しかった南西部を除いて残っていた。周堀は一番残存状況の良好な北部で、西側の堀は堀幅5.8m、深さは浅く約0.4mである。東側の堀は堀幅4.1m、深さ約0.3mである。堀は西側から見ていくとかなり堀幅を有した北西部から、急激に窄まり、さらに浅くなった後、また少し広がりを見せながら、深さは非常に浅くなって0.05~0.1mほどで南側を巡る。堀幅も広く

て約3mほどである。南東部で削平・攪乱のため周堀は確認できなくなり、また堀が確認できるのは、調査区ぎりぎりの北東部付近であり、前述したように堀幅は、西側より多少狭くなっている。

堀の掘りかたは現状では浅く緩やかで堀底部は平坦面を有するものである。ただ、堀の上面・立ち上がりに関しては本来どの程度まであったのか復元することは現在の削平状況からみて不可能であり、本来の堀の掘りかたも今のところ判明していない。ただし、堀の底面の状況を見るにその広狭がかなり極端に変化することからすると、本来の堀の形状もかなり場所により広狭の差が大きく不定形を呈していたことが、想定される。このような例は7世紀代の古墳にはよく認められる所で、古墳の墳丘に必要な盛り土分を周りから採取するとその時点で、周堀をあまり整形することなく仕上げてしまうということ



第49図 1号墳残存基壇

あろうと考える。

周堀の墳丘側、つまり内側の立ち上がりの緩傾斜面のごく一部（北西部）に石が葺かれており、第47図の左下にその拡大図を載せた。周堀の底部から立ち上がる傾斜面全体に渡って雑然とした積みかたではあるが、横長の小石を積み上げている。特に、現状の立ち上がり面にはやや大き目の横長の石を置いている。この立ち上がり面の横長の石の配置は、古

墳の墳丘部の平坦面から堀に移行する地点に良く置かれるもので、福島駒形1号墳例でもこのような石の配置が認められた。周堀の南部と東側の一部にも認められ、削平は受けながらも、本来の堀の立ち上がり現在のこの面で良いのではないかと考えられる根拠の一つとなっている。

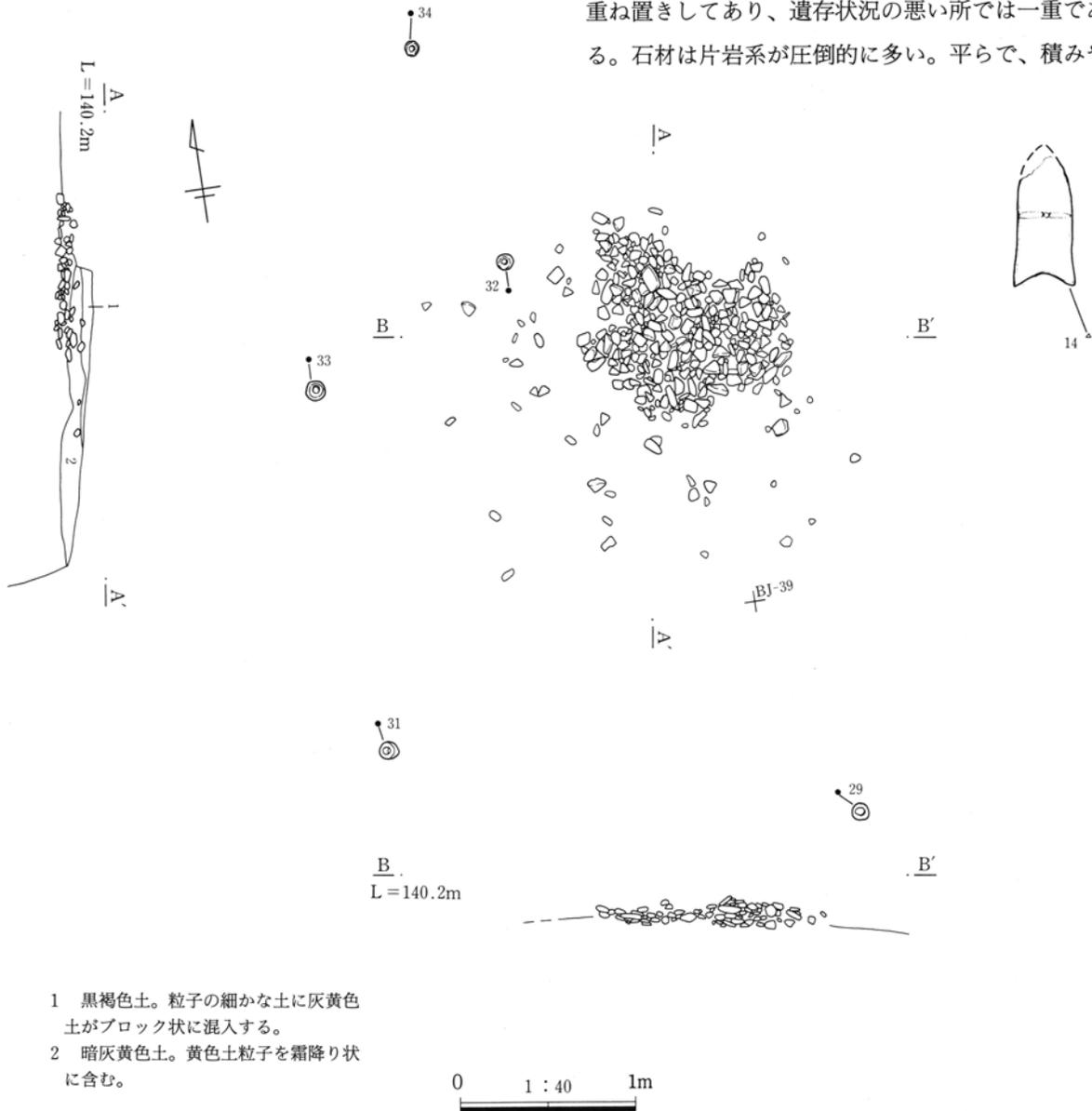
墳丘が全く残存していないが、周堀の内径から想定される当古墳の径は約16.5mとなる。

石室 (第49図)

石室は、前述したように徹底的な破壊を受け、石室の石は、持ち去られたり、破碎して、しかも、畑に影響の出ないように、石室付近に穴を深く掘ってその中に放り込んだりしてあり、全く、本来の状況を知り得る情報は得られなかった。ただし、奥壁の用材と考えられる石が原位置からやはずれて穴を掘られてその中に落とし込まれていたが、砂岩系の幅1.5m、高さ1.1m、厚み1.1mの石材である。その他、穴に投げ込まれていた石材のうち側壁の用材と考えられるような大きさの石材はほとんどすべてが片岩

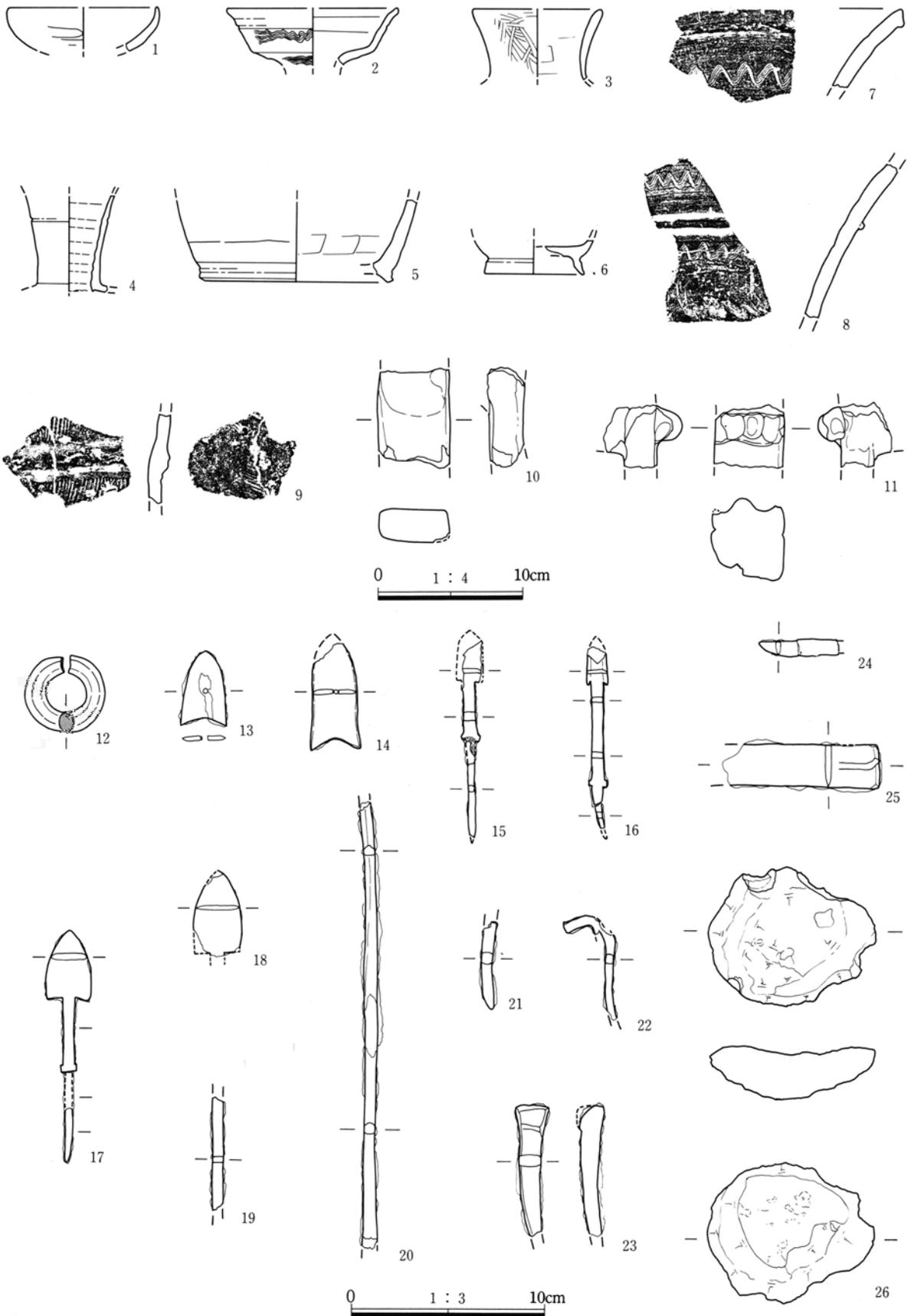
系であった。

石室の中で現状で残存していたのは、石室を構築する段階の地山の整形の後、石を敷いて石室の石の重さに耐えられるような敷石を行う基壇の敷石の一部である。主に北部の敷石が残っており、全体の約3分の1程度であろう。敷石は奥壁の石材を埋める為に掘った部分を除いてはかなり遺存状況は良好で、特に北側は当時の敷石をそのまま残しており、とくに敷石と盛土面との境界線上の石は上から見ると円弧状にカーブしてきれいに区画しているのが分かる。敷石の厚みは残りの良いところで2~3石が重ね置きしてあり、遺存状況の悪い所では一重である。石材は片岩系が圧倒的に多い。平らで、積みや

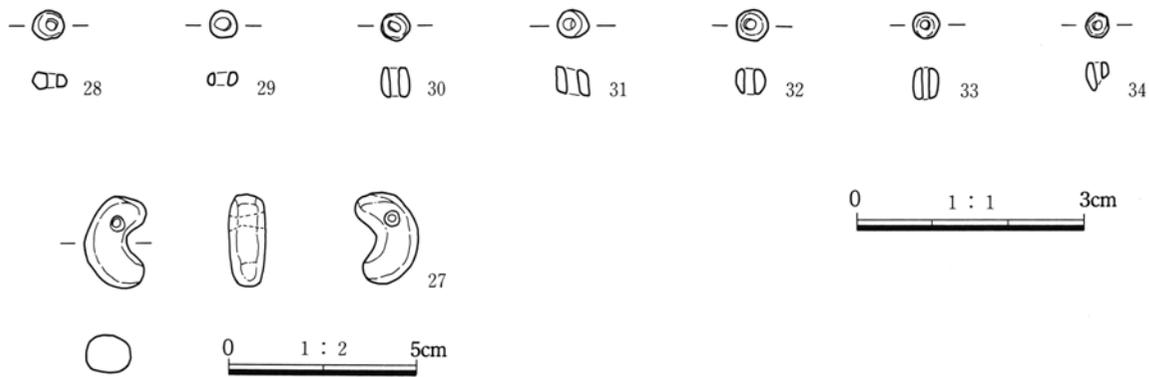


第50図 1号墳下集石状遺構

第3章 田篠塚原遺跡



第51図 1号墳出土遺物(1)



第52図 1号墳出土遺物(2)

すい石材をある程度選んで使用しているのが観察された。

集石状遺構 (第50図)

上述した、敷石をはずしていった段階で、その敷石下の面から確認された遺構である。第50図のA断面からも分かるように上の敷石を配置する前の段階での遺構であることは敷石面の下に2層の間層を挟んでおりしかも敷石により遺構が影響を受けていないことから、明らかである。この集石状遺構は主軸を東南東に向け、長軸1.3m、短軸0.8mのやや外形が長楕円形に近い形状である。ただ、小石はばらけた状態で西南部に散在しているものがある。しかし、あくまで集中区は上述した範囲に収まる。石は大きくても10cmほどの小石が中心で、安山岩と片岩が中心であった。この地点ですぐ採取できる石である。石は集積部では2~4重に積み上げている。また、この集石の中には遺物は全く発見されなかったが、集石の西側一帯及び東南部から青色のガラス小玉が5個、レベル的にはほぼ同レベルかやや低い位置から出土した。他にこの周辺からの土をフルイにかけてみた所、さらに同色の2点のガラス小玉が確認された。このように、集石の内部ではないがきわめて近い地点から計7点のガラス小玉が出土した。また、集石の東側1.6m程の所から無茎の有腸扶長三角形鉄鏃が出土している。この出土レベルも集石とほぼ同一レベルと考えられる。これら、小玉や鉄鏃は出土状況から考えて、集石状遺構と同時期のものと考えられる。時期的には、この古墳が築造される時期

の前段階で良いと考えられるが、具体的にはこの古墳の築造直前と考えている。つまりこの集石の性格とも関係するのであるが、この古墳が築造される前段階に地鎮祭的な意図を持って、玉と武器である鉄鏃を埋置し、小石を積み上げたのではないかと想定している。

出土遺物 (第51・52図)

徹底的に破壊された古墳の為、原位置での出土は前述した集石状遺構周辺の遺物に限られるが、発掘調査中に動かされた状況でかなりの遺物が出土している。須恵器はいずれも7世紀代に比定されるもので、高坏・長頸壺・甕などが出土している。埴輪の破片(51図9~11)も出土しているが、この古墳に伴うものではないだろう。鉄器類は鉄鏃の出土がかなり多く、集石状遺構出土のものも含めれば、合計7点の出土を見た。内訳は無茎鏃(51図13・14)が2点、長頸鏃(51図15・16)2点、有頸三角形鏃(51図17・18)が2点、形式不明(51図19)1点である。釘も数点出土している。(51図21・22・23)特に注目したいのは、ミニチュア鉄製農工具の一つのミニチュア刀子(51図24)が出土したことである。ミニチュア農工具は前期末から出現し、後期後半段階まで出土するが、7世紀代に入る例はほとんど知られておらず、時期的に最後の段階のものと考えてよいだろう。他に、農工具の鉄鎌(51図25)も貴重である。鉄さし(51図26)はこの古墳に伴うかは微妙である。装身具として金銅製の耳環(51図12)と石製の勾玉(52図27)が出土している。

2号古墳 (富岡市18号墳)

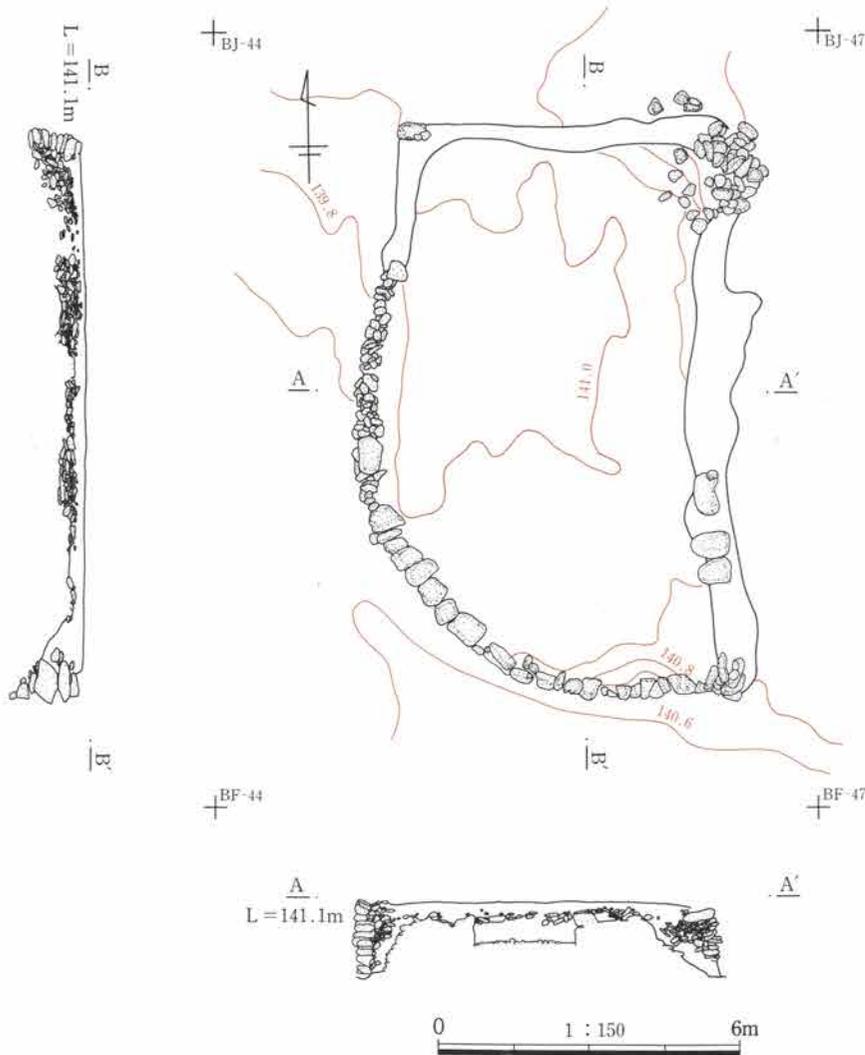
調査前の現状と調査経過 (第53図)

古墳は、かなり改変されており、平面図で見ると、現状で、南北約11m、東西約7.5mの東南部のコーナーがやや円弧状を呈する長形状である。墳丘の外側は、畑の耕作に伴い、徐々に崩され、その過程で、出てきた葺石や、石室の盗掘後、掘り出された側壁などに使用された石材も周りの石垣として積み上げられている。この古墳も1号墳同様かなり徹底した盗掘を受けている。そのことは53図のA・B断面をみると分かる。現状の墳丘の周りの石垣全々と内部の大量に積み上げられた石はほとんどすべてが、後に動かされたものである。

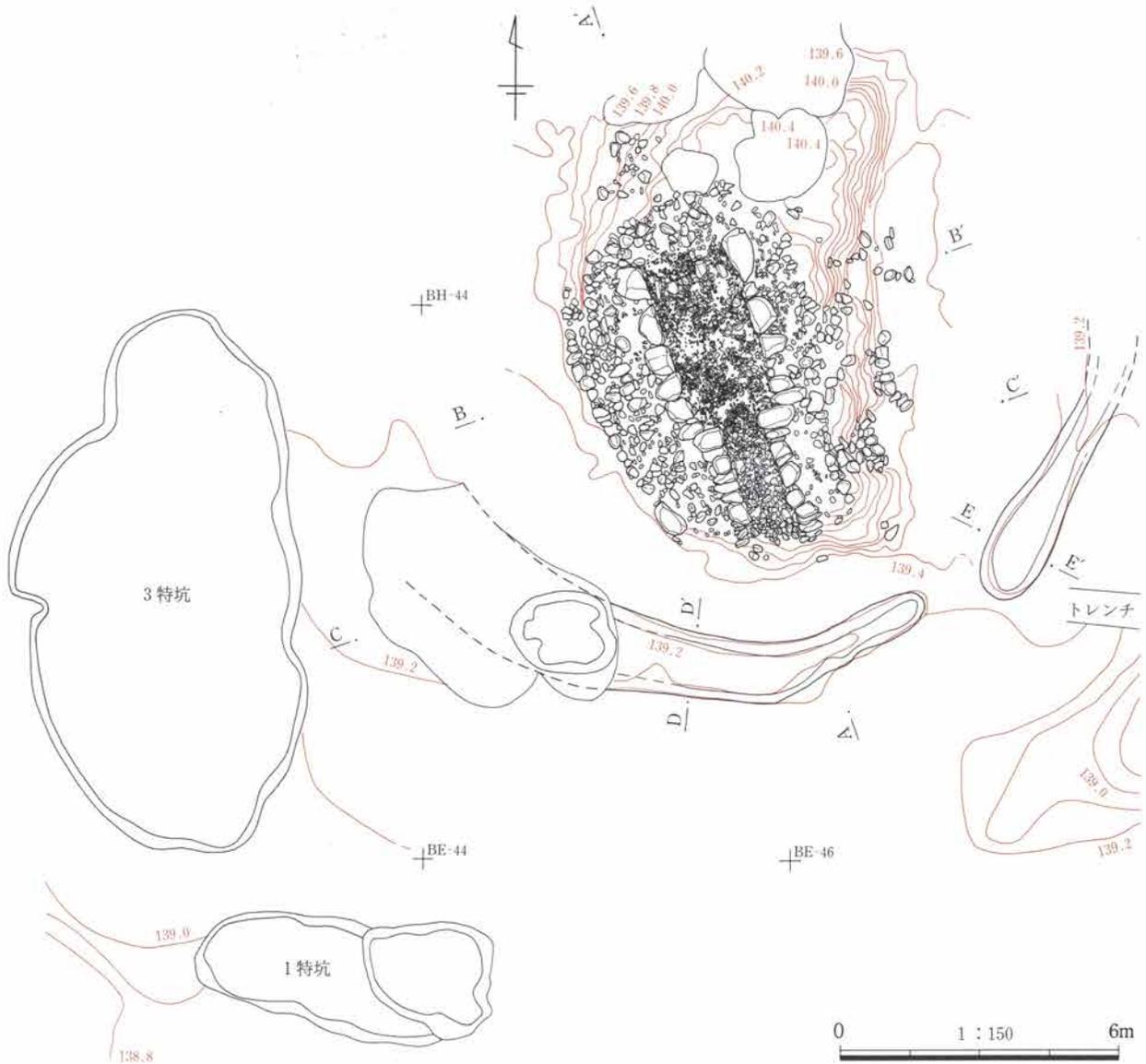
調査は、まず最初に東西・南北の断面を残しながら、動かされた石・土を排除して行き、生きた面を出していく作業を行い、石室の軸をまず最初に確認して、その軸を基準とした横断・縦断の断面を注意しながら調査を進めて行った。

墳丘 (第54・55図)

墳丘は、1号墳同様、ほとんど残っておらず、55図B断面に見られるように玄室東側のごく一部と、55図A断面に見られるように玄室北側のごく一部に墳丘が残存していた。この2ヶ所の断面から、墳丘は、黒褐色土と、黄褐色土の互層に、土を積み上げていっているのが分かった。この黄褐色土は地山を掘り下げると出てくるローム土層である。墳丘に関しては、これ以外情報が無く不明であるが、墳丘の径は周堀が一部残っていることから周堀の内径を測



第53図 2号墳現況図



第54図 2号墳全体図

定してそれを墳丘径とすると、径約13.5mほどの円墳であった可能性が高い。第60図をみるとよく分かるのだが、この古墳の周りは石室とその周辺を除いてかなり削り込まれており、墳丘・葺石・平坦面・前庭などはすべて削平されてしまっている。

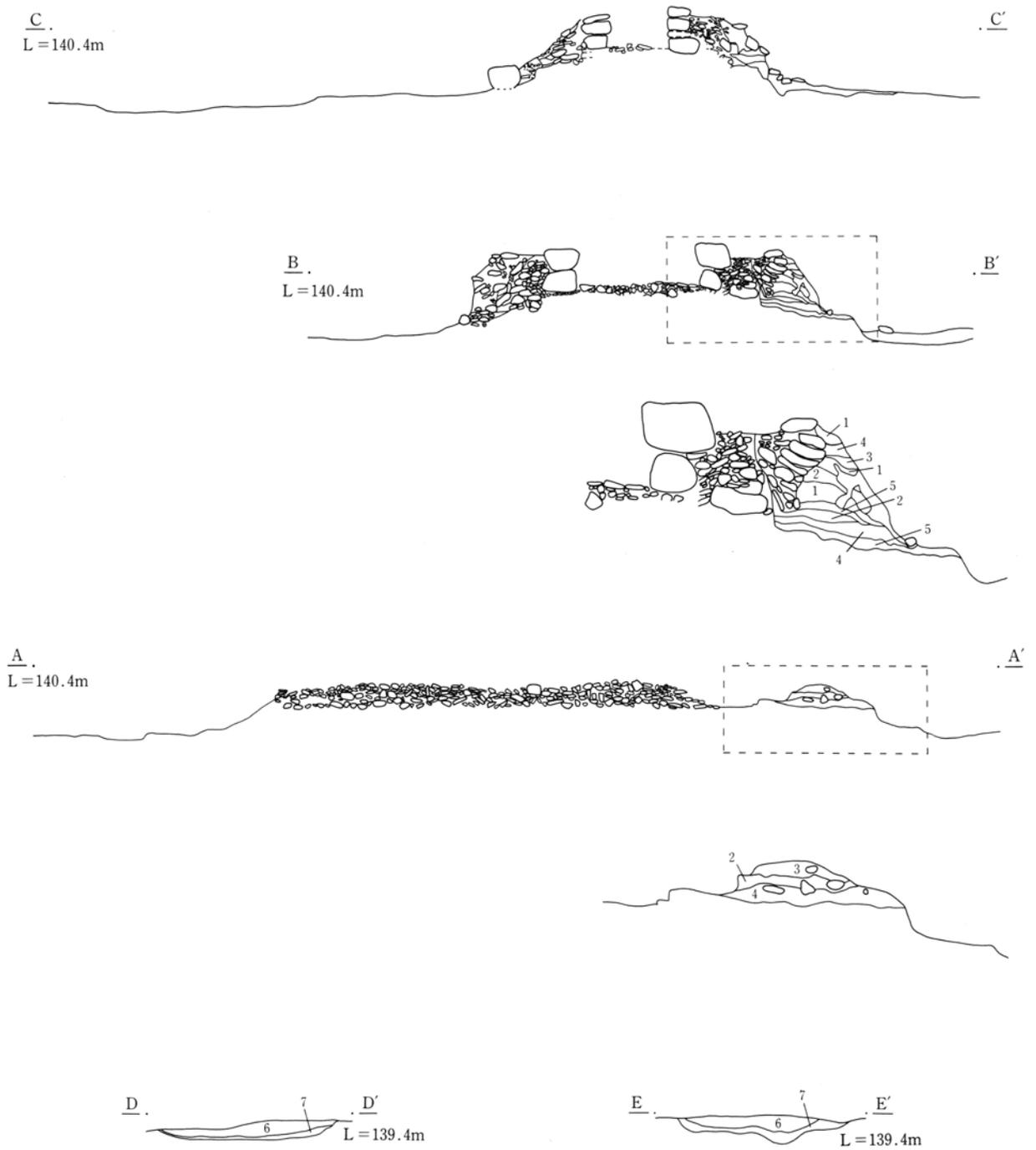
周堀 (第54・55図)

周堀は南側に遺存しているが、北側は畑の耕作等の削平により消失してしまっている。現状では南側に西側と東側に別れて周堀がある。ただ、この2つに分かれた堀は本来1つにつながっていた可能性が高い。この部分も後世の耕作等による削平で周堀底の浅い部分がカットされて堀が切れてしまったよう

に見えるものと考えている。とりあえず、現状の堀は堀幅の大きい所で幅0.8m、深さ0.2mである。普通、前庭を持つ7世紀代の古墳では前庭のある南側は周堀が切れるのだが、この古墳では周堀が圍繞している。

また、この周堀の他に古墳の南西側に、1号特殊土坑・3号特殊土坑といった偏楕円形状の明らかに人工的に掘られた土坑がある。深さも0.3mとある程度あるもので、中には弥生土器を中心とした遺物が流れ込んだ形で出土している。この土坑の性格について、現地でいろいろ検討したが、古墳の墳丘に必要な盛土を供給するために採掘した穴の跡と考え

第3章 田篠塚原遺跡

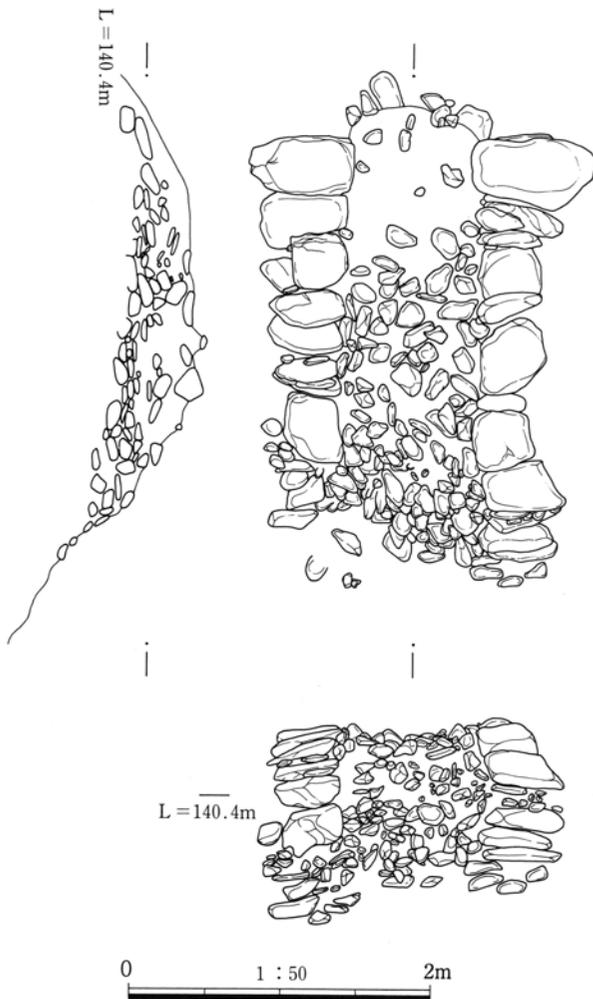


- 1 黒褐色土。黄褐色土が少量混入する。
- 2 黒褐色土。黄褐色土が混入する。
- 3 黒褐色土と黄褐色土が1：1の割合で混ざり合う。
- 4 黄褐色土。黒褐色土が混入する。
- 5 黄褐色土。黒褐色土が少量混入する。
- 6 黒褐色土。灰黄褐色土ブロックが少量混入する。
- 7 黒褐色土。6層土に比して灰黄褐色土の混入が多い。

0 1 : 100 4m

0 1 : 50 2m

第55図 2号墳断面図



第56図 2号墳羨道閉塞状況図

たい。それ以外にこの土坑の性格を説明できるものが見当たらないからである。土坑の中に入っている土器はこの地区が古墳築造前に弥生時代の集落地であったことから、古墳の墳丘の盛土の中や堆積土の中に弥生土器が含まれているのと同じ混入・流れ込みと考えられる。7世紀代の古墳の周堀が墳丘の盛土を間に合わせる為、ある程度自由に周堀を掘っていく過程で、堀の形が円形ではなく、不整円形のものも多く、堀底も高低の差が大きく、適当に掘られているものが多い事を考えれば、古墳の近くに、不定形のこのような土坑を掘り、古墳の墳丘の築造に間に合わせたということも十分に考えられる事態であろう。

石室 (第55～60図)

石室は墳丘がかなり削平されていたのに比べて残りは良かった。玄室・羨道共に1～2段の石室が残っていた。また、羨道は盗掘時の被害が少なく、羨道の閉塞部分はかなり良好な状況で残存していた。

石室のデータを最初に提示する。

石室長 (推定) 6.8m

玄室長 (推定) 3.9m

玄室幅 (中央最大部) 2.05m (玄門部) 1.7m

羨道長 (左側壁) 2.9m

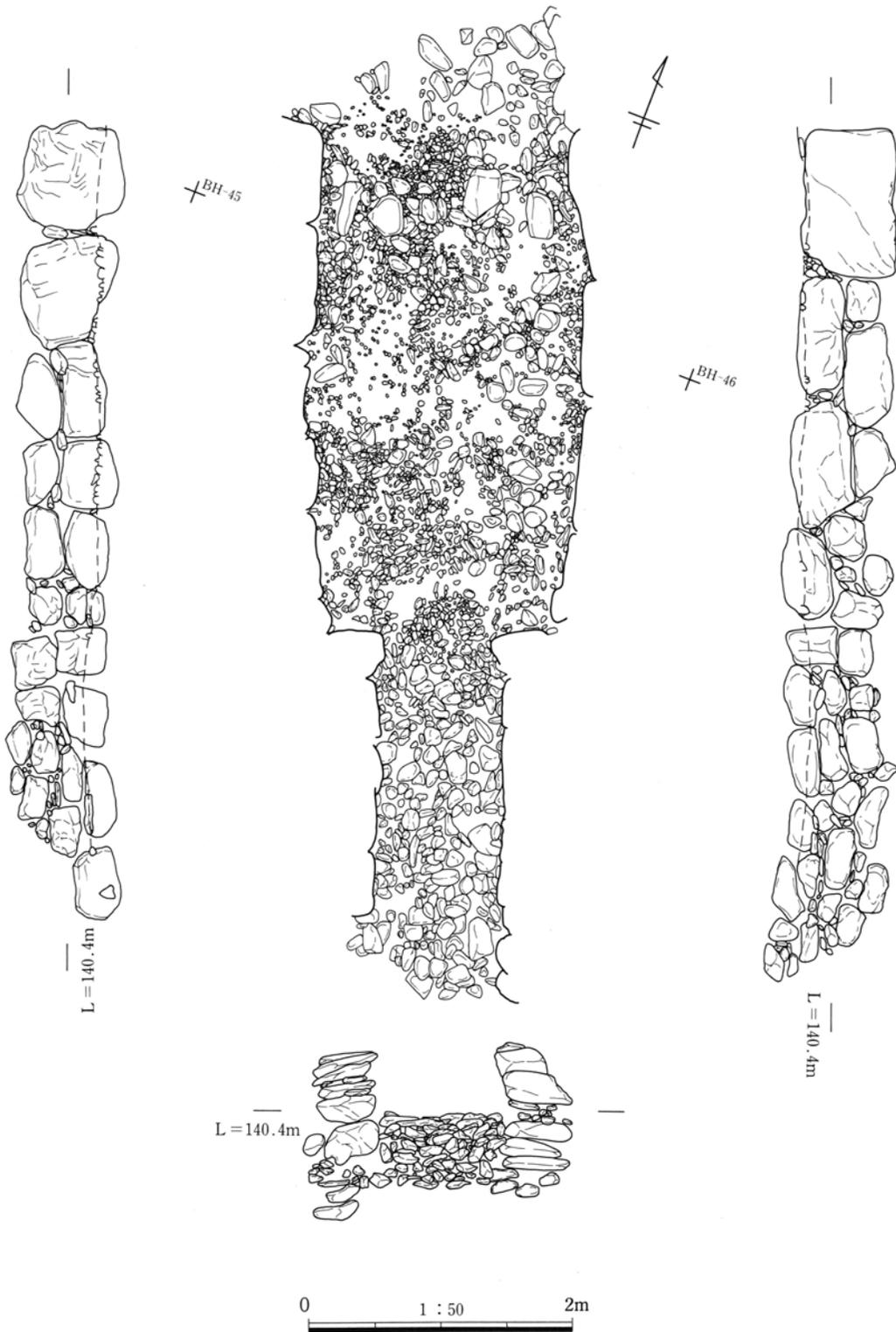
羨道幅 (玄門部) 0.8m

(中央部最大幅) 1.0m

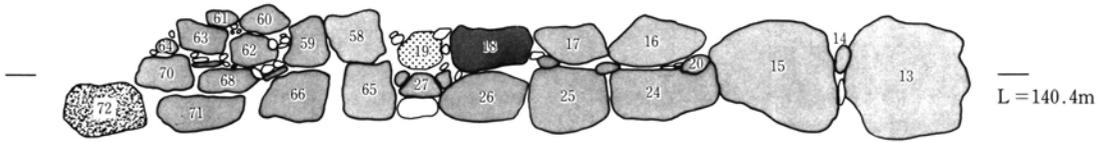
石室開口方向 N-19°-W

まず、羨道の閉塞状況 (第56図) であるが、羨道部も完全に遺存している訳では無いので上部の閉塞状況は不明だが、残存している閉塞部の様子は、土混じりの小石で閉塞した様子が分かる。袖部付近はすでに、閉塞の小石や土が斜めに下がっている状況から、閉塞に際しては、羨門から羨道部中央にかけて閉塞を集中的に行っており、袖部までびっちり閉塞する事は無かった事が想定される。

石室の構築方法であるが、57図を見てみると、奥壁は無いが、現状の玄室の最奥部が奥壁に接する側壁と考えてよい。とすると、左右両側壁のどちらを先に構築したかは不明だが、いずれも奥壁に接する側壁が巨石を使用している事及び袖部の石が小石であることから、奥壁を設置し、その後奥壁に接して側壁を置石していったことが伺える。特に右壁は袖石の前の石は長さを合わせる調整石である合石である。羨道は左側の羨門が遺存しているのみで右側の羨門が遺存していないので、その構築の過程は今一つ明らかにできないが、左側壁に関しては羨門の石の小ささとその構築の状況からみて玄門から構築していった可能性が高い。玄室の床面の石は長径30cm程の石も混じるが、基本的に拳大からさらにそれより小さ目の小石が中心である。床面奥壁寄りに大き目の石が石室主軸に直行するように据え置かれており、この古墳の築造の契機となった被葬者をこの

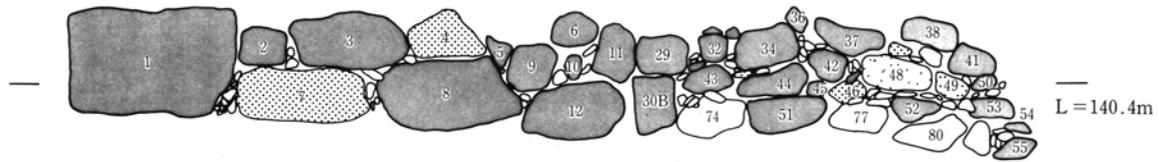


第57図 2号墳石室展開図



番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
13	M10	76.0	80.0	70.0	810.0	
14	M12	43.0	11.0	16.0	11.5	
15	M11	60.0	89.0	68.0	530.0	
16	M7	57.0	61.0	35.0		
17	M1	63.0	51.0	29.0	120.5	
18	C	54.0	55.0	30.0	151.7	
19	A	65.0	31.0	23.0		
20	M9	34.0	13.0	6.0	4.8	
21	M9	26.0	14.0	5.0	4.0	16左下
22	M9	24.0	13.0	4.0		25左上
23	M7	44.0	10.0	13.0	10.5	26左上
24	M6	48.0	60.0	36.0	230.0	
25	M7	53.0	53.0	40.0	200.0	
26	M5	47.0	44.0	33.0	170.0	
27	M11	62.0	27.0	14.0		

28	M3	23.0	7.0	10.0	5.0	27左
58	M3	72.0	37.0	33.0		
59	M3	58.0	26.0	32.0		
60	M4					
61	M9					
62	M9	68.0	34.0	18.0	95.0	
63	M9	57.0	33.0	18.0	91.0	
64	M12					
65	M9	99.0	29.0	53.0	280.0	
66	M10	55.0	48.0	34.0	205.0	
67	M9	43.0	17.0	5.0	7.4	66左上
68	M1	56.0	39.0	15.0	66.4	
69	M9	32.0	14.0	6.0	5.5	68左上
70	M9	48.0	37.0	24.0	75.6	
71	M10	41.0	53.0	20.0	88.0	
72	H	44.0	52.0	34.0	180.0	

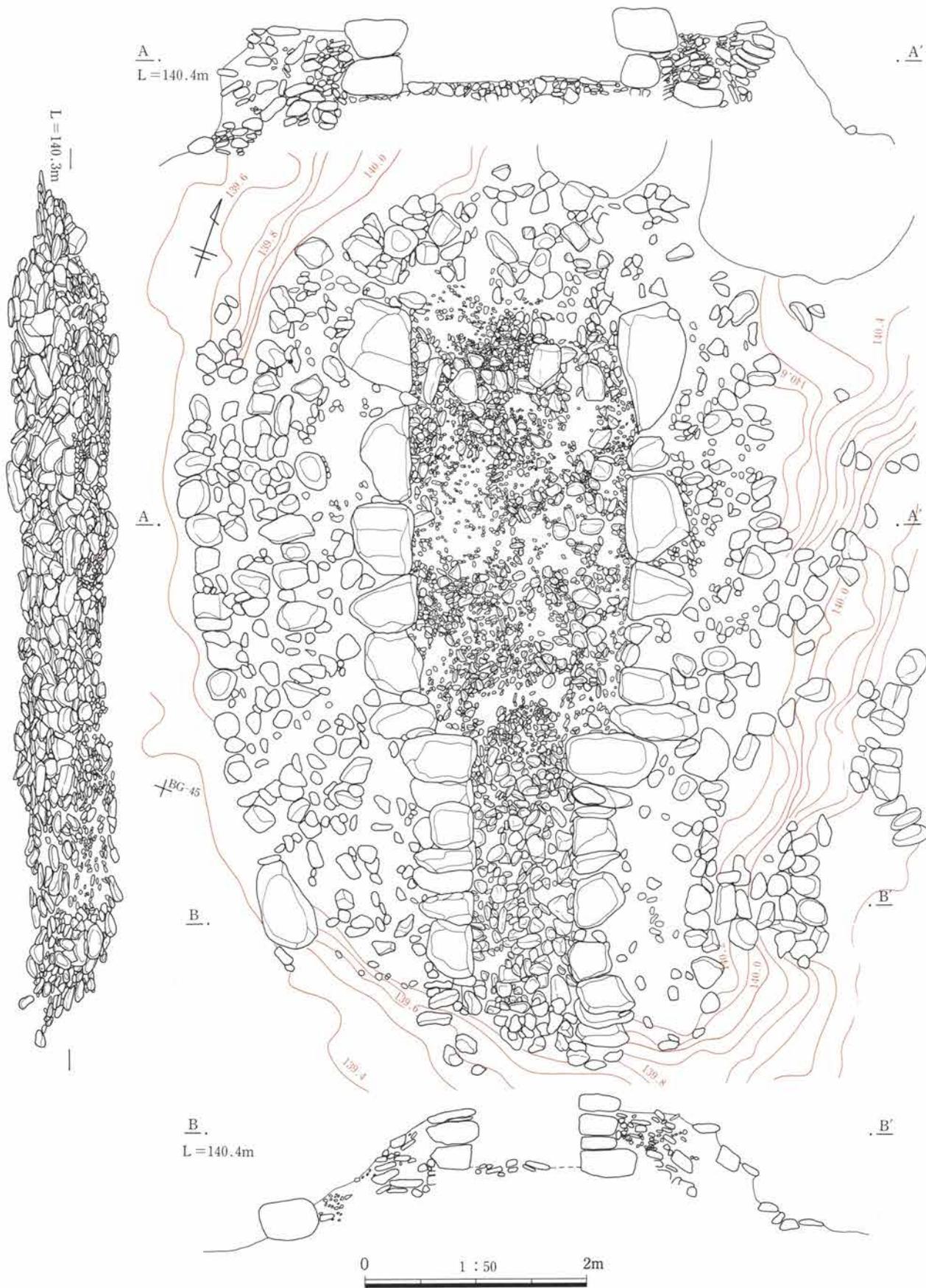


番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	M6	56.0	120.0	77.0	820.0	
2	M11	67.0	31.0	22.0	93.7	
3	M11	60.0	80.0	40.0	280.0	
4	A	57.0	52.0	39.0	132.5	
5	M11	48.0	21.0	16.0	22.8	
6	M9	54.0	33.0	23.0	77.6	
7	A	58.0	90.0	35.0	520.0	
8	M9	46.0	96.0	50.0	410.0	
9	M8	71.0	33.0	32.0	136.1	
10	M1	59.0	13.0	19.0	26.4	
11	M11	75.0	25.0	38.0	146.6	
12	M10	58.0	70.0	36.0	205.0	
29	M4	82.0	34.0	23.0	37.8	
30	M12					32上
30B	M3	65.0	31.0	39.0	195.0	
31	M12					
32	M1	55.0	23.0	14.0	32.2	34左上
33	M11	43.0	9.0	4.5		43上
34	M1	44.0	44.0	27.0	88.5	
36	M5	27.0	7.0	8.0		
37	M9	45.0	41.0	17.0	70.6	
38	M9				180.0	

39	A					48上
41	M8	52.0	34.0	21.0		
42	M7	68.0	27.0	20.0	72.3	
43	M9	59.0	34.0	19.0	74.5	
44	M9	47.0	48.0	20.0	65.5	
45	M7	34.0	11.0	9.0	6.5	
46	A	55.0	23.0	16.0	44.0	
47	M4	13.0	8.0	4.0	0.5	46上
48	F	44.0	49.0	22.0	86.4	
49	L	46.0	20.0	17.0	27.1	
50	M7	46.0	14.0	7.0	11.0	
51	M10	35.0	49.0	25.0	95.8	
52	M8	36.0	34.0	17.0	37.0	
53	M8	58.0	31.0	11.0	51.5	
54	M8	46.0	18.0	9.0	16.5	
55	M8	53.0	24.0	19.0	44.4	
74		53.0	52.0	25.0	106.2	
76		28.0	13.0	3.0	3.2	77右上
77		50.0	36.0	22.0	89.6	
78		48.0	13.0	6.0	9.5	49下
79		30.0	10.0	4.0	2.2	53上
80		50.0	38.0	24.0	72.0	

単位 cm、重さはkg

第58図 2号墳石室石材使用状況図



第59図 2号墳石室平面・断面図



第60図 2号墳基壇敷石平面・断面図

石の奥に東西方向に安置した可能性が高い。羨道部の床面の石は玄室部よりやや大きめで長径10cm前後の小石を中心にして床に敷いている。下に敷く石の大きさでも玄室と羨道を区別している様子が分かる。

石室の石材だが、58図を見ると分かるが石材は片岩系を中心に使用し、ごく一部だが、安山岩系の石とチャート・かんらん岩などの使用が伺える。奥壁や天井石の石材は、破碎された石片から、砂岩の可能性が高い。

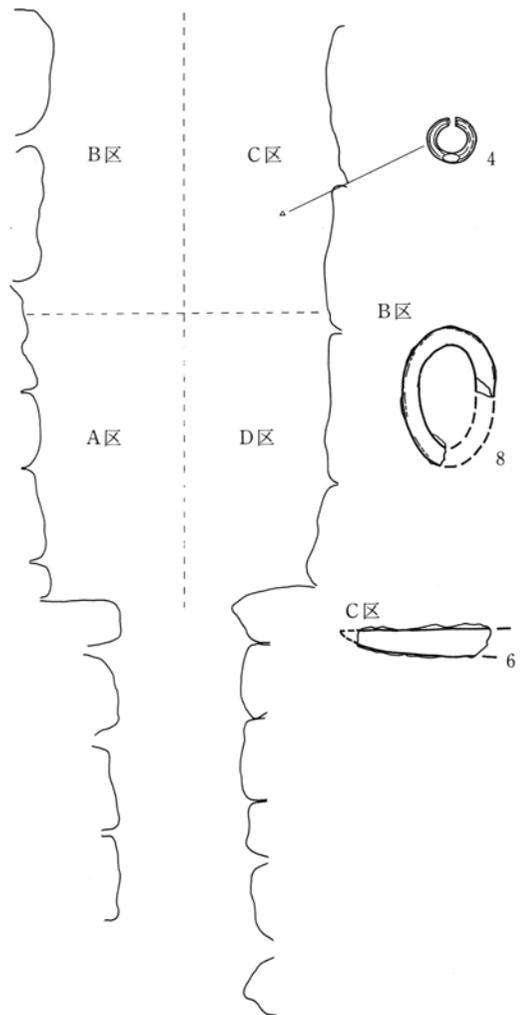
59図には、敷石基壇上に載った石室の状況を図示した。この図のA・B断面から分かることは、側壁の裏に裏込めの石をかなり充填していることと裏込めを押さえる裏込被覆がなされていることである。また、玄室・羨道部の側壁共に、第1段から2段めということから石の配置は内側に傾斜を持たせず、ほぼ、水平に石を据えている状況も読みとれる。裏込被覆の西側側面の立面図を同じ59図に示した。東側は攪乱が激しく被覆の状況は不明瞭であったが西側はよく依存していた。側壁の石が内傾する3段めになると裏込め被覆も少し崩れてくるが、1～2段めに対応する裏込め被覆はきちんと石を組み上げて側壁を安定させる役割を果たしている。

60図は古墳の石室基壇の敷石の状況を示した平面図と断面図である。小石を、厚さ30～40cm程に石室の石をしっかりと支えるように敷き詰めている。敷石の範囲は石室の石を置く地点より約50cm程余分に敷いて、石室の石の重みを全体に均等に受けるように工夫している。特に、北側に大きめの長径50cm程の平たい石（片岩系中心）を敷いているが、羨道部を中心とする南側は小振りの小石を敷いており、石の重さのかかる違いにより下に敷く敷石の種類を変えている事が分かる。

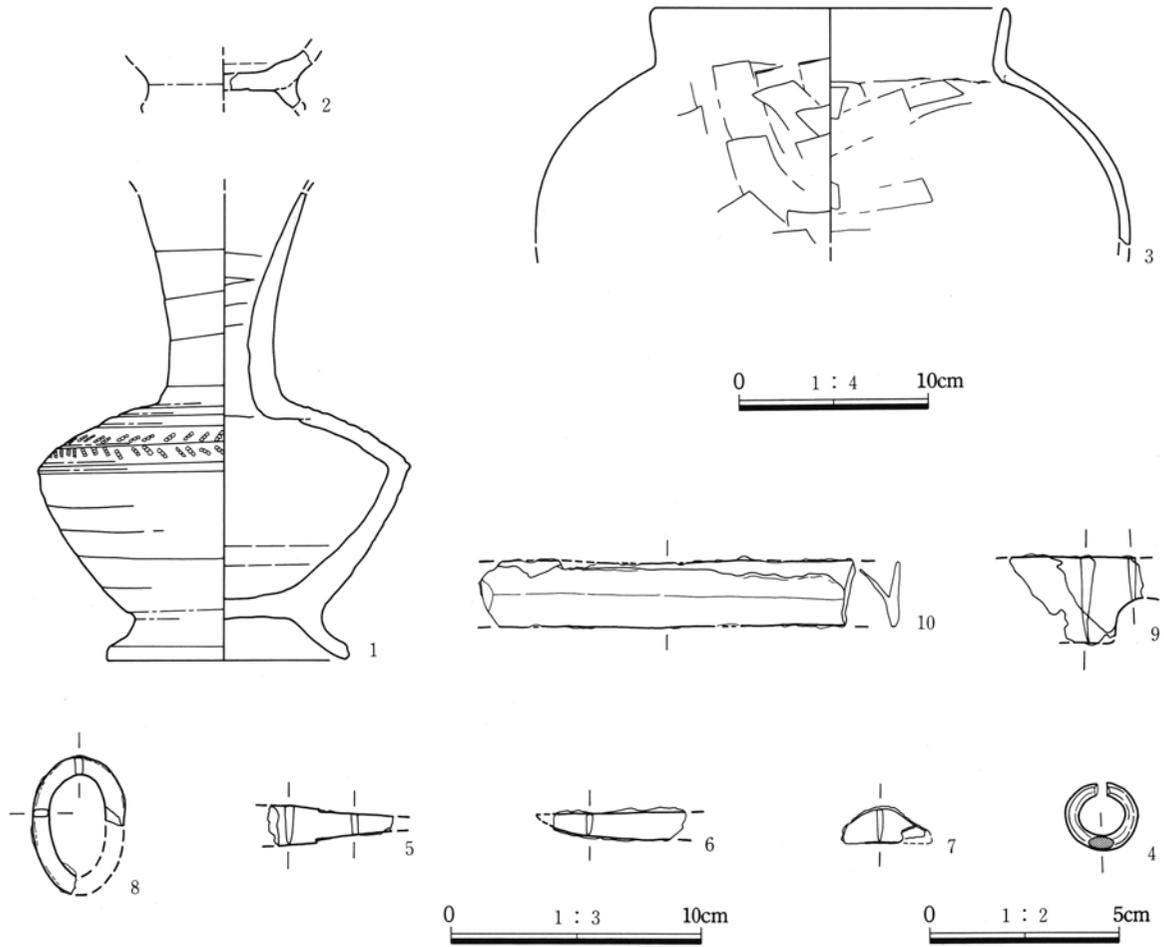
遺物出土状況（第61・62図）

2号墳よりの出土遺物はごく少量で玄室内からは、金銅製の耳環（62図4）が玄室中央やや北よりの左側壁に近い箇所から出ている。（第61図）原位置の可能性が高いが、先述したように、この古墳の築

造の契機となった被葬者は境界石の関係から、主軸に直行した奥壁よりに置かれていたと考えられるので追葬時の遺体に伴うものと考えられる。その場合、頭を北にした石室主軸方向に平行に遺体を置いた可能性が高い。なお、後章で寄稿していただいた、宮崎氏による鑑定結果では、この石室より位置ははっきりとしないが、2個体分の歯、合計5個が出土しており、性別不明ながら少なくとも少年期と青年期の2人の遺体がこの石室内に納められていたことが分かっている。遺物は耳環以外に、B区より刀装具（62図8）が、C区より刀子破片（62図6）が出土している。（第61図）これ以外に出土位置がはっきりしないものとして刀破片（62図9）や刀子破片（62図5）も出土しており、少なくともこの石室中に、武



第61図 2号墳遺物出土状態



第62図 2号墳出土遺物

器・工具が納められていたことが分かる。他に、土師器・須恵器が出土した。特に台付長頸壺（62図1）は羨門部やや東南部より出土したもので、時代も7世紀後半に比定できるもので、この古墳の年代を示す一資料となるであろう。

まとめ

本古墳は、径約13.5mの円墳で、周堀を南側に有するものである。また、古墳の近くに土坑があり、これも古墳の盛り土を採取するために掘ったものと考えられる。墳丘はほとんど残っていないが、石室は側壁が1～2段残っており、石室長は推定で6.8mである。片岩を主体とした石材を使用する。出土遺物は耳環・刀・刀子があり、歯の鑑定から少なくとも2人の被葬者が葬られたと考えられている。

3号古墳（富岡市第17号墳）

調査前の現状と調査経過（第63図）

3号墳も他の古墳同様かなり改変されていた。2号墳と同様に南北に細長い南北約10.5m、東西約6mの長方形の平面形になっている。元の墳丘の外側は後世の耕作等による削平で崩され、やはり他の古墳同様、削平時に出た葺石・石室の石等は石垣状に四周に積み上げられていた。

調査は、東西・南北の断面を残しながら生きている面を追っていき、石室の軸方向が分かった段階で石室の横断・縦断の断面を注意しながら進めていった。墳丘はほとんど削平され、石室がかろうじて残っているような状況であった。特に、石室北側と西側の削平が激しく第64図にあるようにかなり広範

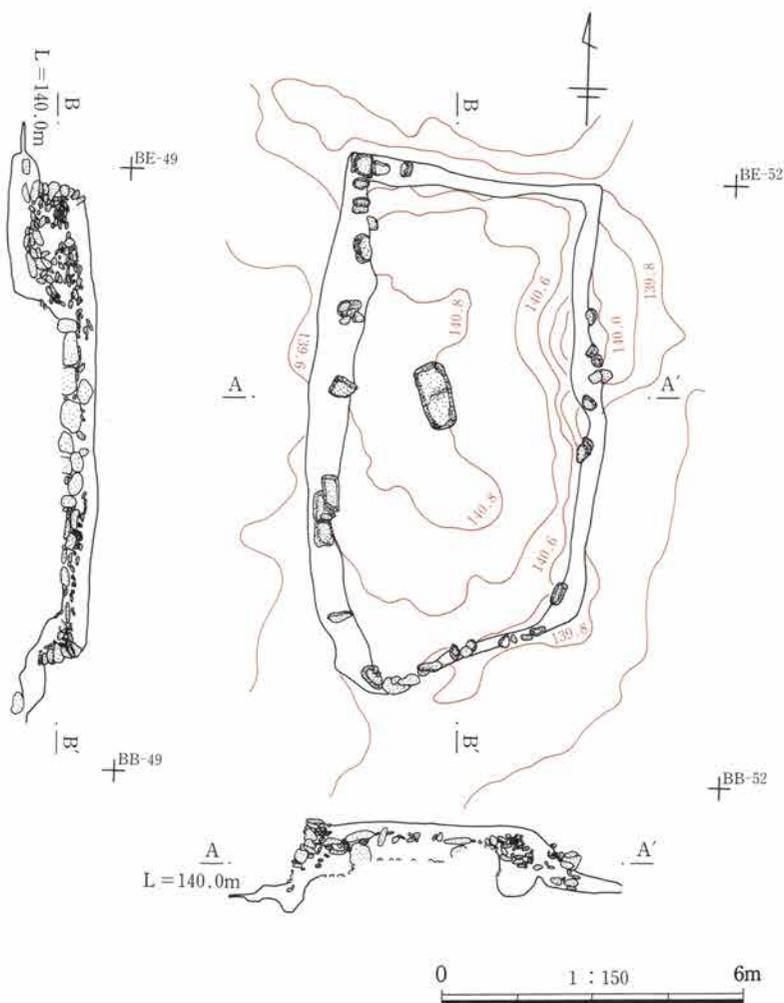
囲に穴が掘られている。

墳丘（第64図）

墳丘は削平の為、ほとんど残っていなかったが、断面Aの箇所でごく一部残っていた。この断面を見ると2号墳同様に、黒褐色土と黄褐色土が互層に積まれている。この部分にのみ墳丘が残っていたのみで、他は完全に削平されていた。周堀も削平が激しく確認されなかった。

石室（第65～68図）

石室の残りも、石室を発掘した6基中では、1号墳に次いで状況が悪かった。奥壁は完全にはずされ、側壁も玄室部分は最下段の1段めのごく一部2段めが残っているという状況であった。奥壁は無いが、下の基壇面等から考えると、左側壁は奥壁に接する



第63図 3号墳現況図

側壁と考えられ、石室のデータは想定ながら提示できる。

石室長（推定・左側壁）	5.4m
玄室長（推定・左側壁）	3.3m
玄室幅（推定・奥壁付近）	1.9m
（玄門部）	1.1m
羨道長（推定・左側壁）	2.1m
羨道幅（玄門部）	0.7m
（推定・羨門付近）	0.8m

石室開口方向 N-13°-W

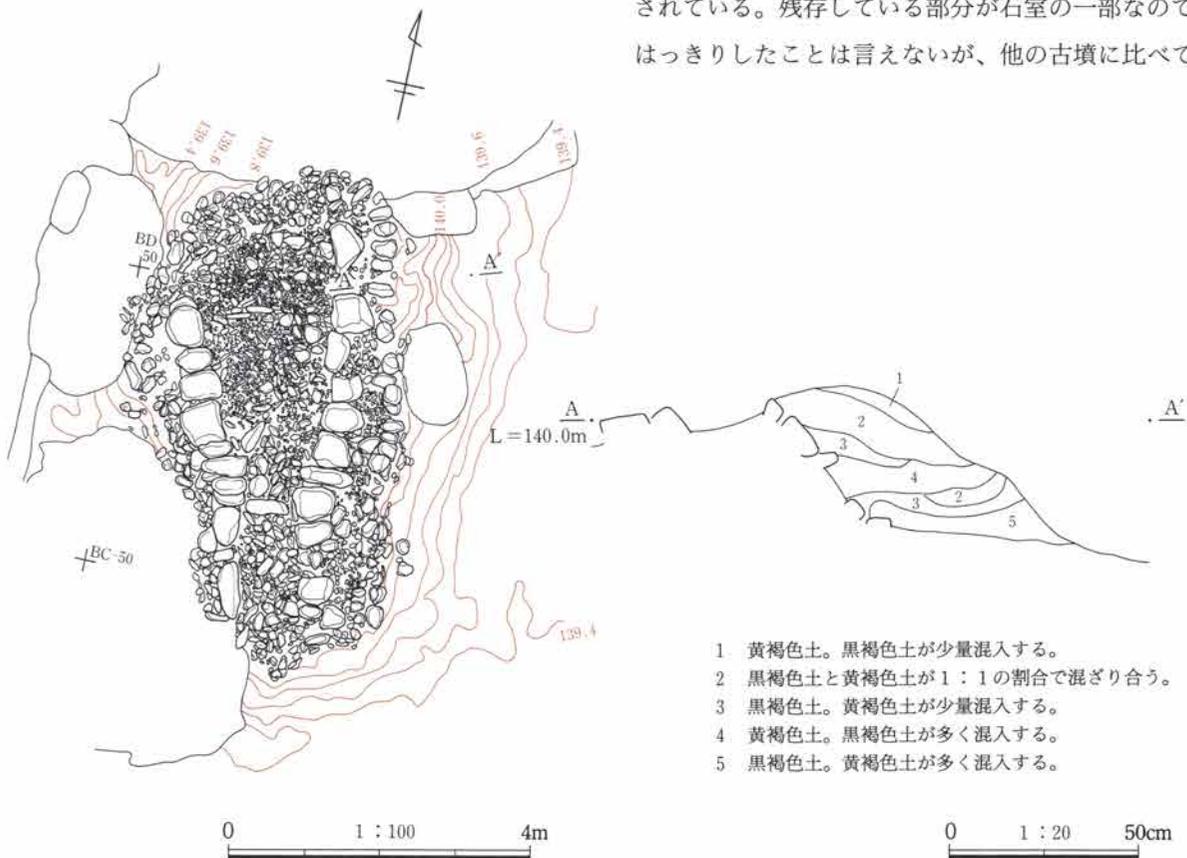
石室の平面形は袖部から奥壁に向かって開く形で、通例、羽子板式と呼ばれる形態である。羨道はほぼ同じ幅で羨門に達する。

石室の構築方法であるが、第65図をみて分かるように奥壁に近い側壁に大きな石を持ってきており、袖部に近い所には明らかに長さを調整することを目的とした調整石である合石があり、他の古墳同様奥

壁を据えた後、側壁を奥壁に接して構築し袖部にいたったものとする。羨道の構築は左側壁を見ると袖部より大きな横長の石を置いており、袖部から羨門に向かって置石したものと考えられるが、右側壁は羨門側に近い方に大きな石を置いておりあるいは羨門から配置していった可能性もある。袖部は左右ともに小石を袖石として積み上げていったものであるが、左側壁の袖石は今1石しか残っていない。右側壁は3石の小石を積み上げたものである。

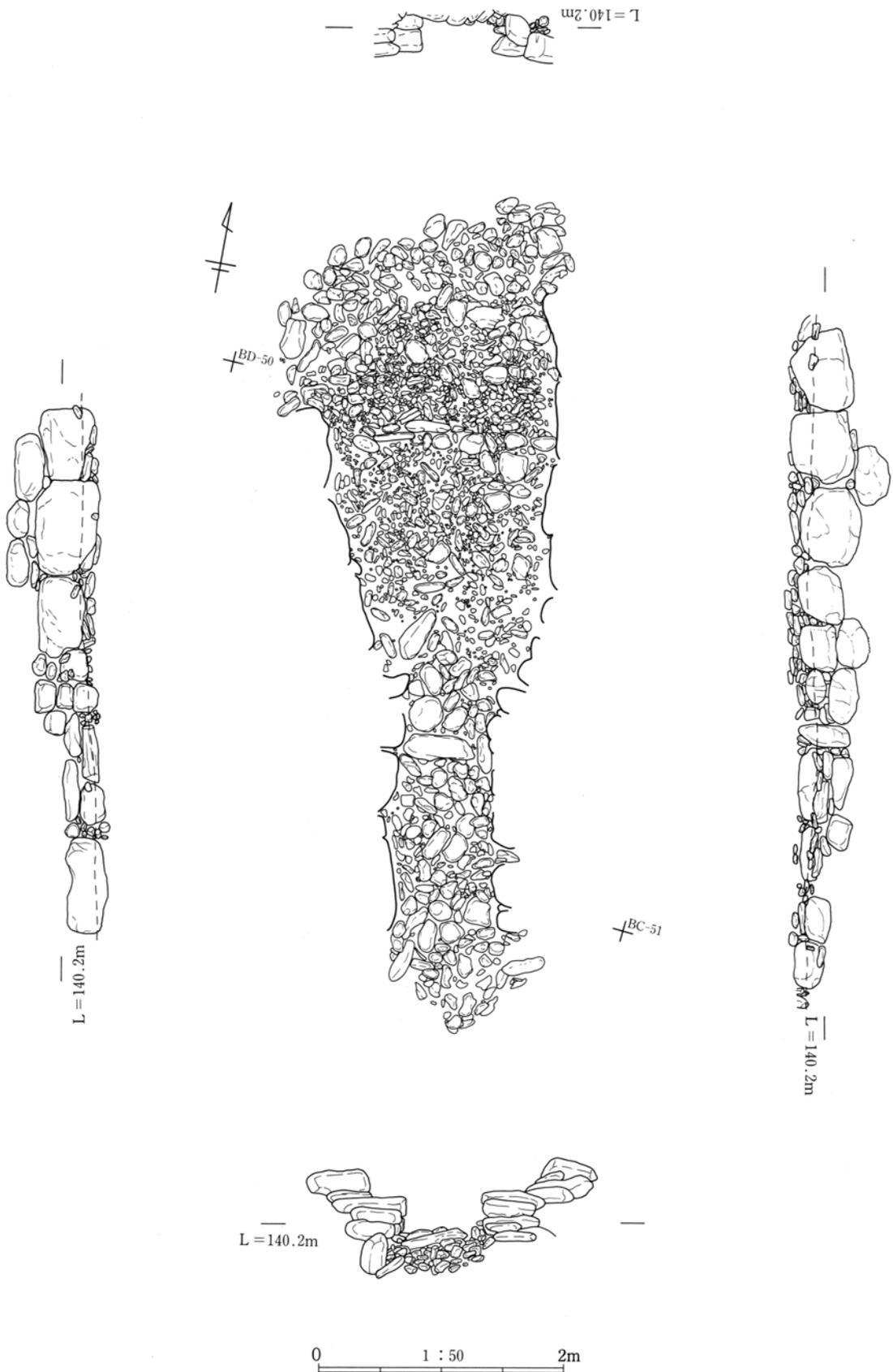
玄室は奥壁近くに2号墳同様横長の小石の境石を置いて、当古墳の築造の契機となった被葬者を奥壁に直行した東西方向に置いたものである。床面の石は拳大の小石を中心に敷き詰めている。羨道部には袖部から40cm程羨門側に入った所に羨道と玄室の境を示す横長のしきみ石を置いている。羨道の床面の石は玄室よりも大きく10~20cm大の石を敷いている。

石材であるが、第66図を見て分かるように、片岩系の石材と安山岩系の石材がほぼ等分の割合で使用されている。残存している部分が石室の一部なのではっきりしたことは言えないが、他の古墳に比べて



1. 黄褐色土。黒褐色土が少量混入する。
2. 黒褐色土と黄褐色土が1:1の割合で混ざり合う。
3. 黒褐色土。黄褐色土が少量混入する。
4. 黄褐色土。黒褐色土が多く混入する。
5. 黒褐色土。黄褐色土が多く混入する。

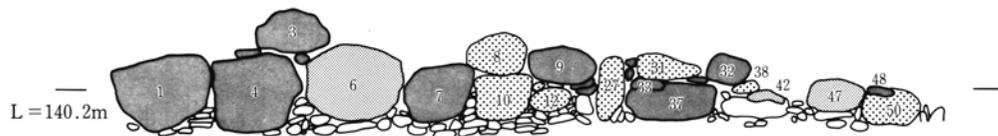
第64図 3号墳全体図



第65図 3号墳石室展開図



番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
15	A	51.0	47.0	22.0	104.8	
16	A	51.0	26.0	14.0	46.4	
17	A	55.0	40.0	24.0	84.3	
18	A	20.0	31.0	8.0	4.5	17右下
19	A	37.0	17.0	8.0	6.5	17左下
20	M12	27.0	10.0	3.0	1.8	15下
21	M 4	37.0	64.0	37.0	190.0	
22	M 9	40.0	72.0	56.0	270.0	
23	M 9	56.0	66.0	37.0	240.0	
24	M 3	47.0	19.0	10.0	18.0	
25	A	47.0	17.0	11.0	16.8	24下
51	M10	24.0	64.0	17.0	43.5	
52	M 5					
53	M 9	58.0	37.0	24.0	92.6	
54	D	35.0	41.0	15.0	38.4	
55	A	39.0	51.0	14.0	47.9	
56	M 8	31.0	14.0	13.0	10.3	
57	A	78.0	46.0	28.5	150.0	



番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	M 3	41.0	69.0	55.0	210.0	
2	M 3	29.0	16.0	5.0	4.5	4 上
3	M 4	48.0	54.0	36.0	128.7	
4	M 3	37.0	62.0	50.0	180.0	
5	M10	39.0	7.0	4.0	4.9	3 下
6	B	35.0	66.0	53.0	170.0	
7	M 5	47.0	43.0	38.0	121.3	
8	A	40.0	50.0	22.0	97.9	
9	M 9	48.0	45.0	26.0	99.0	
10	A	55.0	40.0	31.0	121.0	
11	A	22.0	9.5	5.0	2.2	12左上
12	A	60.0	30.0	17.0	72.5	
13	M 9	24.0	12.0	5.0	2.2	9 右下
14	M 9	26.0	9.0	16.0	5.4	13下
27	A	70.0	41.0	26.0	117.0	
28	M 7					
29	M 7					
31	A	58.0	35.0	17.0	72.5	
32	M 8	30.0	26.0	16.0	49.6	
33	M 4					

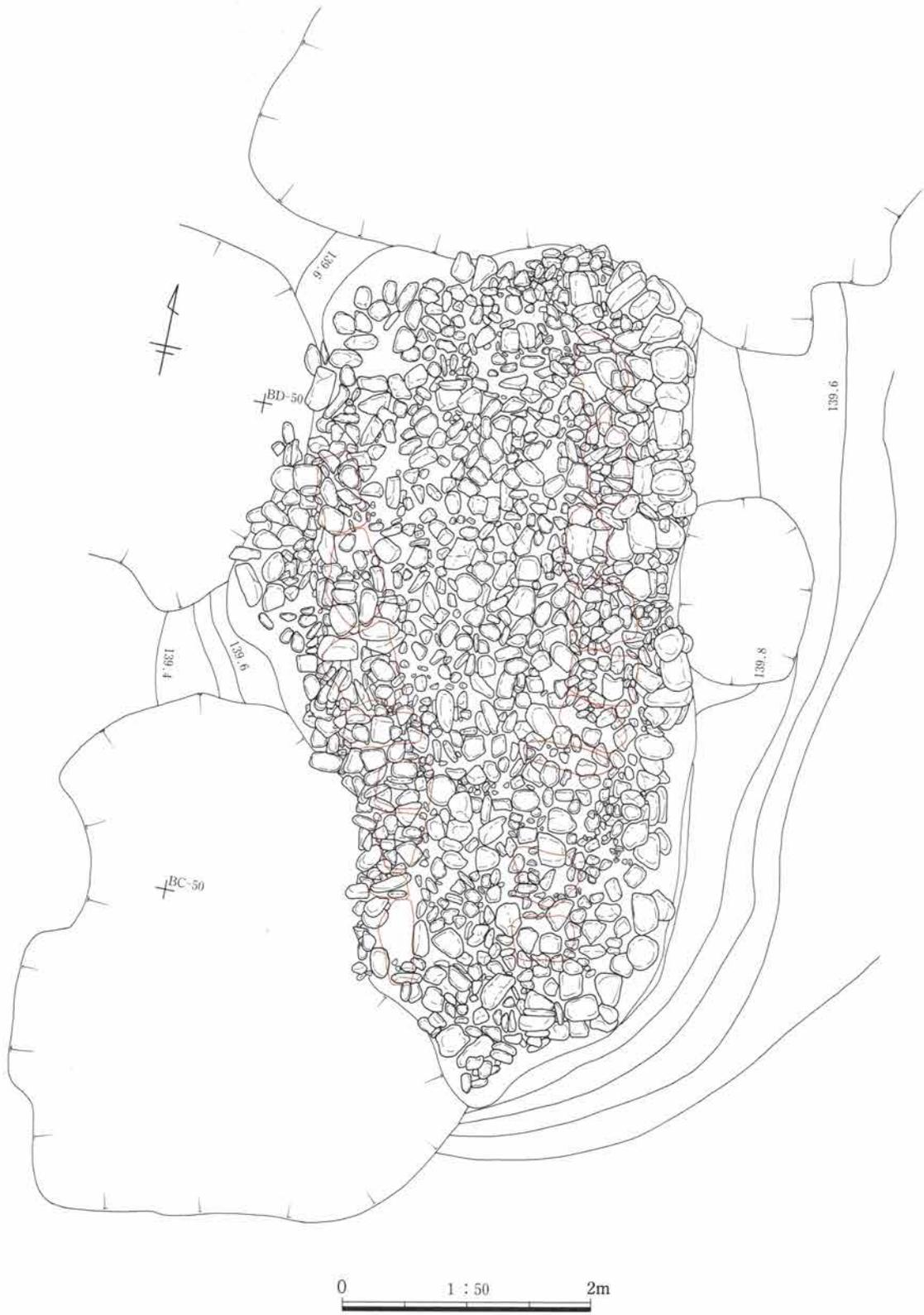
36	M 8					31右下
37	M 9					
38	A					
42	B					
47	G	50.0	30.0	17.0	73.0	
48	M 4					
50	A					

単位cm、重さはkg

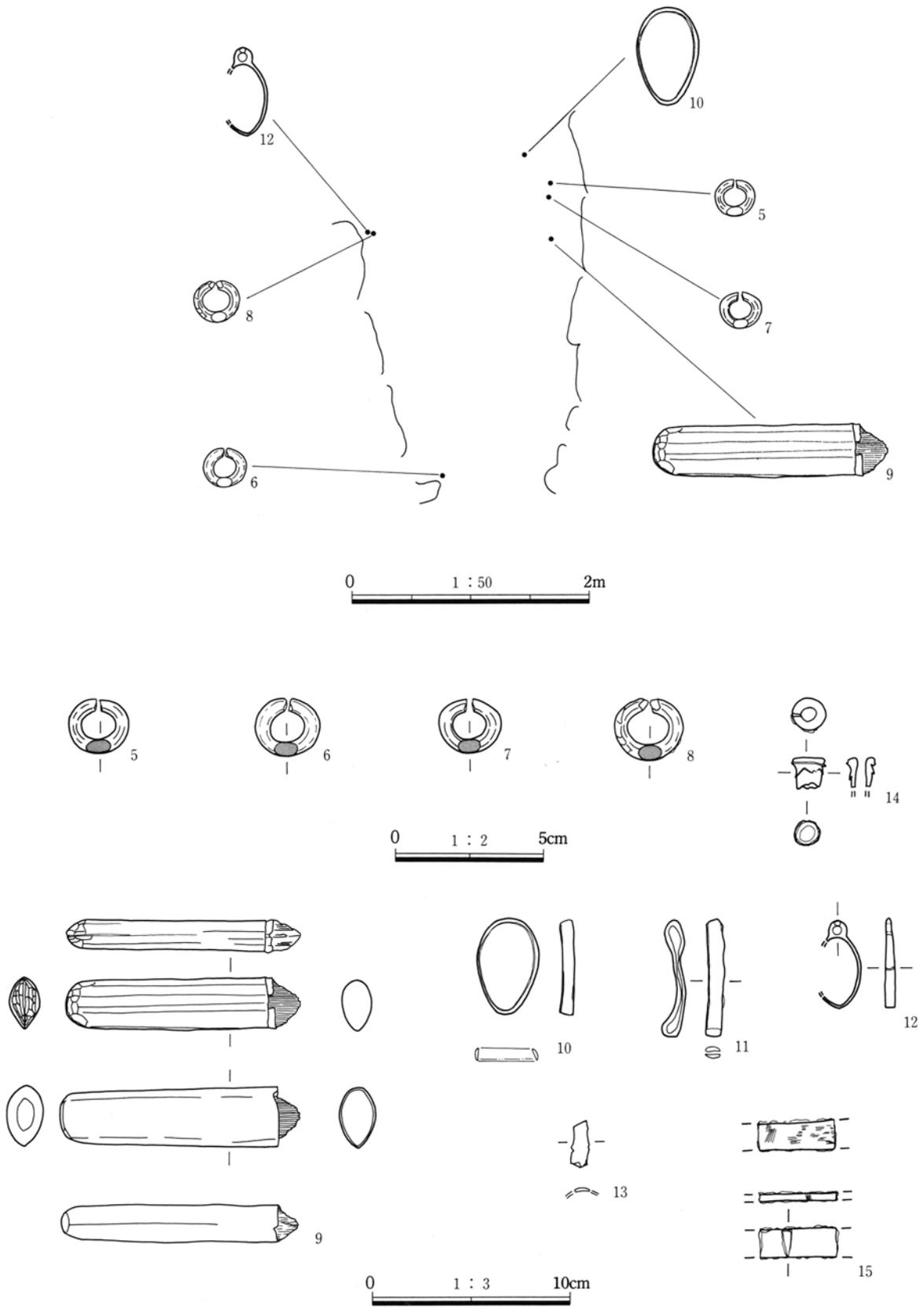
第66図 3号墳石室石材使用状況図



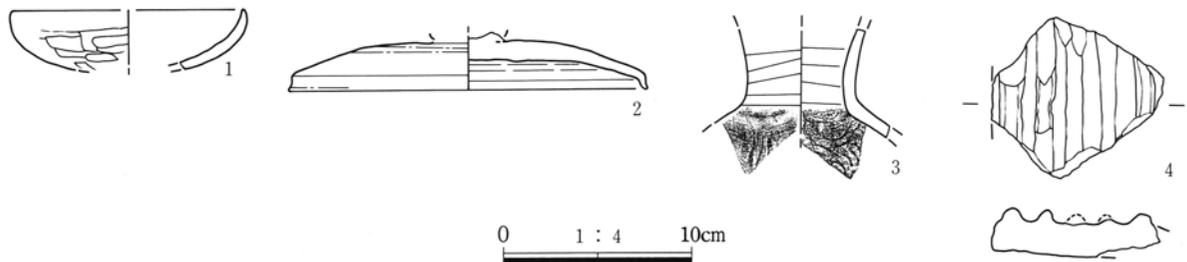
第67図 3号墳石室平面・断面図



第68图 3号墳基壇敷石平面图



第69図 3号墳遺物出土状態及び出土遺物(1)



第70図 3号墳出土遺物(2)

安山岩の使用率が高い可能性がある。

石室は第67・68図を見ると分かるが、石室の下に石室のラインから50cm程多めにとった基壇を設けそこに敷石を構築している。敷石は厚さ30cm前後に平らな片岩系の石を中心に敷き詰めている。その上に側壁・奥壁の石を置いて安定させている。

遺物出土状況 (第69・70図)

玄室から計4点の耳環が出土した。位置は第69-5・7図の耳環が、奥壁近く左側壁下から出土し、これは前述した、境石との関連からも明らかに、頭を東に向けたこの古墳の構築の契機となった被葬者の耳環である。この被葬者に伴う遺物としては第69図-9及び10の金銅装の鞆尻金具や刀装具が共伴するものとなる。この被葬者は飾り大刀を佩用していたものと思われる。耳環の奥壁、右側壁近くから出土した第69-8図のものは、追葬時のもので、恐らく頭を北に向けた被葬者のものであり、もう1点の耳環は袖部付近、右側壁下から出土した第69-6図のもので、これは頭を南に置いて埋葬されたものと考えられる。出土位置がはっきりしないが、刀装具が3点程(69図11~14)出土しており、先ほどの飾り大刀の刀装具もあると思うが、他の追葬時の被葬者が佩用していた刀もあった可能性もある。他に、刀子の破片(69図15)も出土している。被葬者に関してだが8章-6の宮崎氏の鑑定により当古墳から出土した11本の歯から少なくとも少年期と青年期前半及び青年期後半から壮年期の3体が確認されている。耳環も3種類あり、歯の鑑定結果から導き出された3体の遺体埋葬数と一致し、この古墳では少な

くとも3体の人物が埋葬されたものと考えられる。

土器は須恵器や土師器の破片(第70図)が出土しているが、第70図-2の須恵器皿蓋などは、7世紀後半に比定できるものである。

まとめ

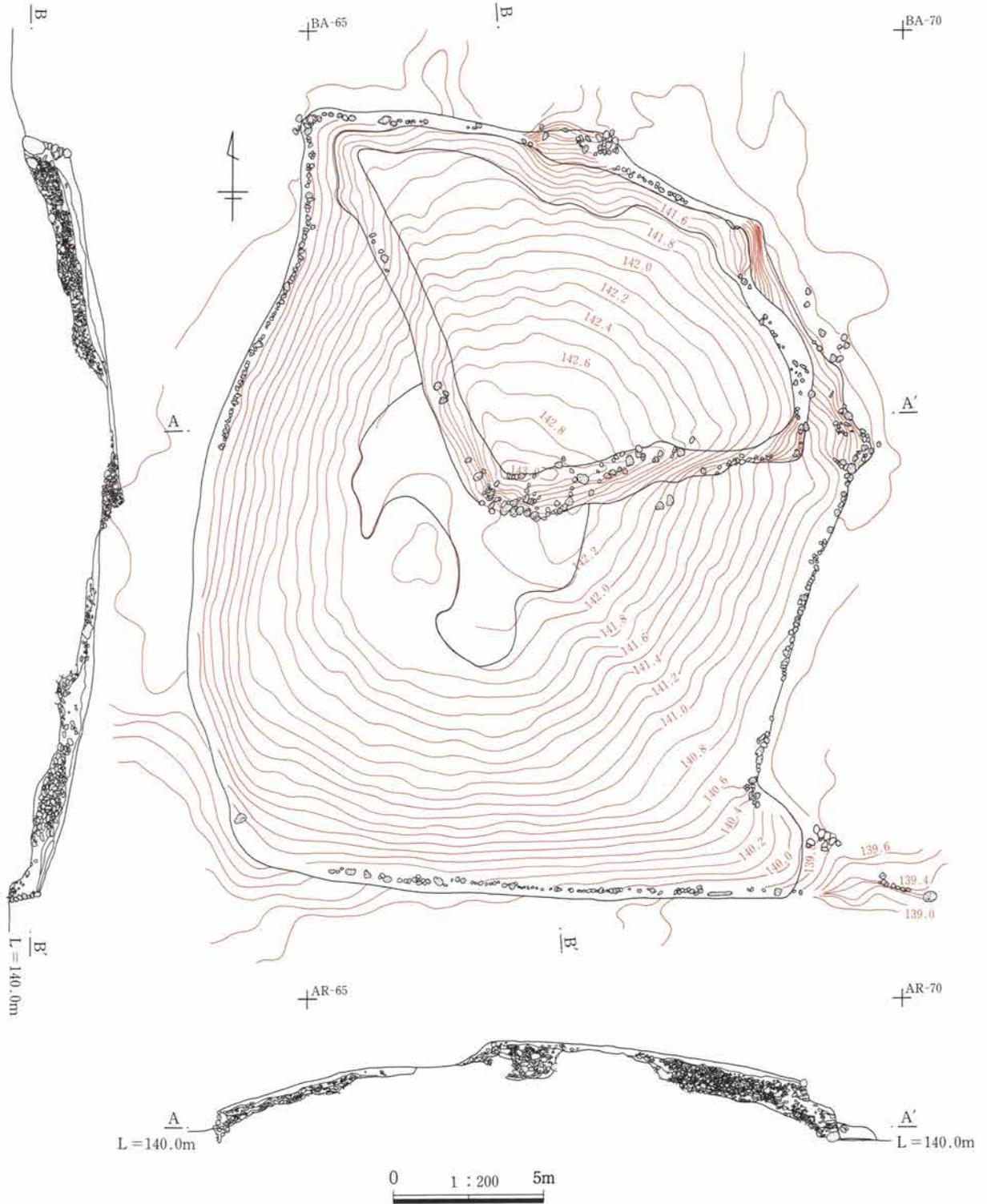
本古墳は、墳丘は完全に削平され、周堀も残っていないので墳丘径の復元は不可能である。石室の残りもあまり良くないが、羽子板型の横穴式石室全長約5.4mと推定できた。石材は安山岩を多用している点に特徴がある。副葬品では、飾り大刀が特筆される。少なくとも3体の遺体の埋葬があったことが、出土歯と耳環の検討から分かった。

4号墳 (しの塚古墳・富岡市14号墳)

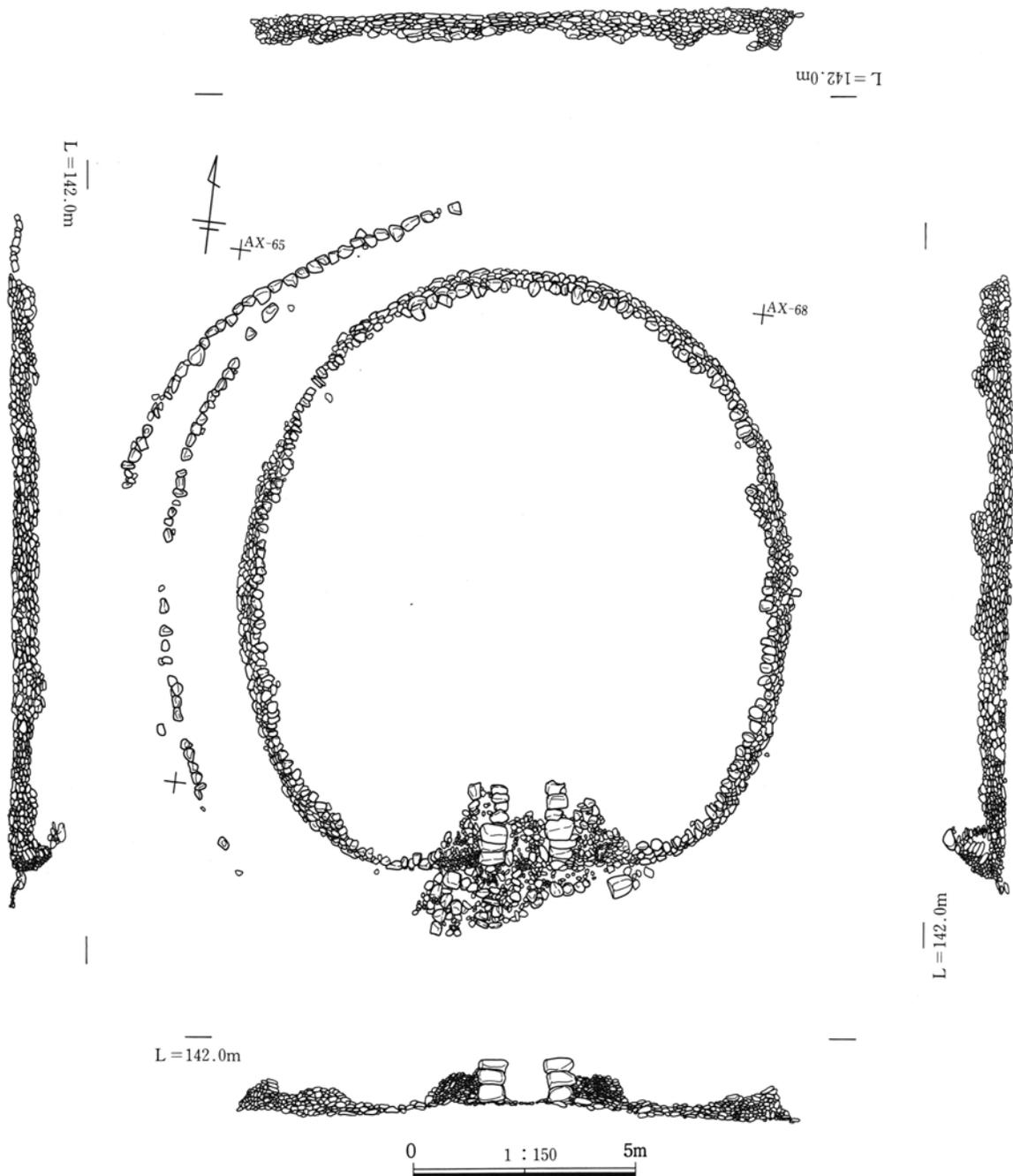
調査前状況 (第71図)

4号墳は、塚原古墳群中、最大の規模を有する円墳である。調査前の状況 (第71図) では、東西南北

の四方向共に削平を受けている。特に、東・北・西面は、畑の耕作によりかなり削平がなされている状況が推定された。南方は地形状況から見て細い谷に面した緩傾斜面であり、多少削平は受けながらもあ



第71図 4号墳現況図



第72図 4号墳墳丘内石組

る程度の旧状を示していると考えられる。古墳の墳丘上も桑の木などが植えられており、葺石と考えられる石が墳丘上各所に散乱していた。また、東西辺には、畑との境界に葺石と考えられる小石が積み上げられており、かなりの変形が想定された。現状での墳丘の高さは3.7m、東西長22m、南北長25.7mである。調査は取りあえず、方位に沿って東西南北に直行するトレンチを設定して掘り進めていった。そ

の結果、かなりの量の天明年間噴出の浅間A軽石が周りから寄せられたものが積み上げられていた。江戸時代以降、畑に降り積もった軽石を古墳の周りや墳丘上に寄せたり積み上げたりしたものであろう。薄い所で50cmから厚い所で1m近く軽石や葺石が動いた結果と考えられる小石が充満しており、生きている石の確認がなかなか困難な状況であった。しかし、上段の貼石が確認できたこと、石室の側壁の一

部と考えられる大石が確認できたことで、現状の古墳の墳丘部分の確認が行えた。71図の断面図に認められる集石以下の部分が盗掘や破壊の被害からまぬがれた古墳の墳丘部分である。いずれにしても、天井井石はすべて外されている状況であり、石室と考えられる部分からは大量の破砕された砂岩系や片岩系の石が出てきており、南側には特に崩された小石や破砕された石が大量に検出され、石室の盗掘はかなり徹底的に行われたことが予想された。

調査経過

調査は、現状の墳丘図を航空測量により行ってから、前述したように東西南北に直行するトレンチを設定し、遺存している墳丘面、及び石室の主軸方向を確認してから石室主軸に合わせた調査区やトレンチを設定して本格的な調査を開始した。古墳からは前述したように崩落した葺石・列石等が大量に検出され、生きている石の確認は困難を極めた。上段の墳丘の貼石を確認できたことで、ようやくきっかけがつかめ、そこを中心に墳丘の確認を全面にわたって行った。

併行して石室の調査を行い、取りあえず石室内に崩落した天井石の破片、上部側壁の大石を取り除いてゆき、床面の確認まで精査していった。墳丘のトレンチは主軸方向に石室縦断部分に1本（B断面・付図5-2）、左右側壁のすぐ横に同じく縦断のトレンチを1本づつ（A・C断面・付図5-1・4）の計3本を設定した。石室主軸の直行方向には玄室中央部（F断面、付図5-7）、羨門部（G断面、付図5-8）、奥壁裏（E断面、付図5-6）に各1本づつ計3本設定した。また、奥壁の隅に向かって斜め方向に2本（J・K断面、付図5-11・12）、玄門に向かって斜め方向に2本（H・I断面、付図5-9・10）を設定し、合計10本の断面を設定した。石室の石を1石づつ取り上げながら併行して墳丘も下げていく形を取ったのでかなりの時間を費やすことになった。石室石材・葺石石材についても検討を行い、石材種の確認や法量・重さなどの測定も行って、古墳築造の労働力を算定するデータを取った。最終的に

は墳丘下の石敷面まで完全に掘り下げ、その石敷をはずして古墳築造時の地形まで復元することが可能になった。

墳丘（付図4）

墳丘の調査はなるべく多くのトレンチを設定することでその構築過程の復元を目指した。調査の結果円墳であることが確認された。以下、調査で得た墳丘のデータを記す。

墳丘径（現状）	第一段径	24m	
	第二段径	18m	第三段径 14m
	第四段径	8m	
墳丘高（現状）	第一段高	1m	
	第二段高	1m	第三段高 0.5m
	第四段高	1m+	

以上のように、墳丘は大きく四段構成になっている。以下、外見上の墳丘の各段の特徴を簡単に述べてから墳丘構築の順序にしたがって説明する。

第一段は古墳の墳丘の裾を構成するもので、現在の所、削平が著しく、古墳築造時の姿を完全に残している箇所は無い。それでも、残りの比較的良好な北部と南部を見ると、緩やかな傾斜を有して墳丘裾に至る緩傾斜面を呈していた可能性が高い。特に北部の第1段の断面（付図5-2・3・4）を見て分かるようになら削平は受けているが、特に残りの良い付図5-2をみると30°~40°の傾斜を持つ葺石が施されている。ただし、削平が激しい為、本来は外護列石状のものを構築していた可能性もある。他の部分と同様、全面石が葺かれていたと想定される。

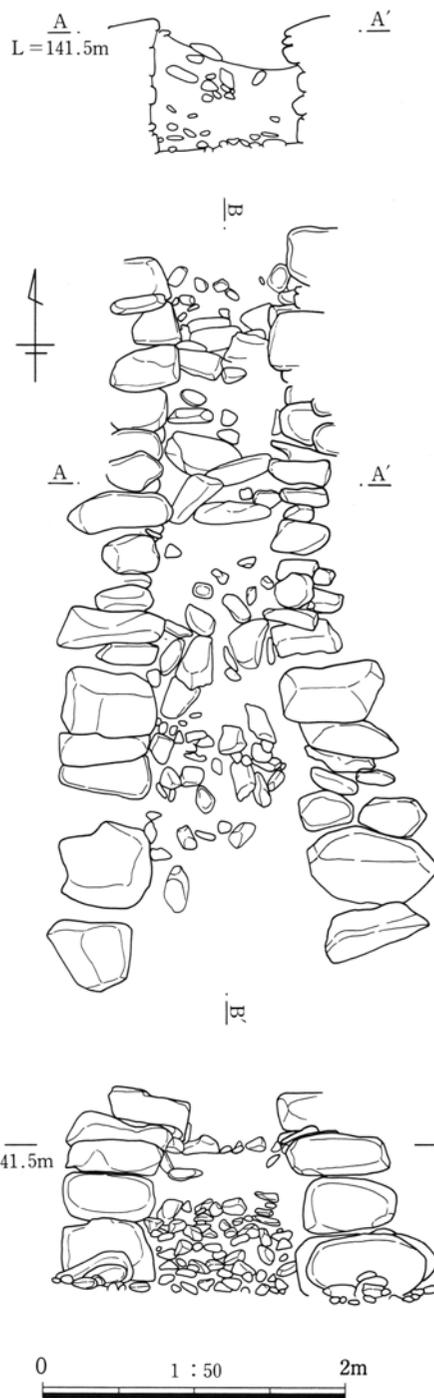
第二段は第一段から外護列石（第2外護列石）がほぼ垂直に現状で最も残りの良いところで約1m程立ち上がり、この列石の上端から平坦面が形成される。平坦面巾は約1.5~2mと場所により広狭がある。この平坦面にも石をびっちり敷いている可能性がある。

第三段は第二段からやはり外護列石（第1外護列石）がほぼ垂直に立ち上がる（付図5-3）。現状でこの立ち上がりが残っているのは北西部のごく一部でそこは約50cm程の高さを有する。しかし、他の箇

所でほとんど確認ができない状況であり、その復元は困難である。第三段の立ち上がりは石室の前面の前庭立石まで続いており、この立石の高さが30~50cm位で、この石の高さに合わせて立ち上がりがあったとすれば、約50cm程の高さを考えてよい。そうすると、北西部で確認した列石の高さもほぼ、本来の高さを示していることになる。第三段もその立ち上がり上面から平坦面を有していたはずであり、幅は想定で1m位であったろう。

第四段は、傾斜角40°を有する貼石状の葺石を有する段である。今までの、ほぼ垂直に立ち上がる葺石とは明らかに異なる、平たい面を有する石を選んで、平たい面を表に出して墳丘面に貼り付けるように葺いたものである。石室前面も含めてすべてこの貼石で化粧が施されている。ただ、石室前面は直線状になって石が小型化していく。この貼石は羨道の中央部あたりに連結される。この第四段の平坦面は、つまり墳頂部になるわけだが、削平されており、墳頂部の広さなどははっきりしない。なお、各段の構築状況の詳細については後述する。

周堀は調査では全く確認できなかった。周辺の地形は石がたくさん入ったローム質土で、古墳の墳丘の盛土にはあまり良い土ではないので、古墳の墳丘の周りを広範囲に良質な土をさらっていったのではないかと考えている。他の古墳の項目で説明したが、何個かの不明土坑があり、それが盛土の土を採取するための土坑の可能性が考えられる。しの塚の墳丘の盛土にはかなり大量の土が必要とされるが、現状では周堀は無く、その土の採取地は古墳の南面の傾斜面地があるいは自然の谷地というより人工的に開削して掘り下げたものでその土を墳丘の土として利用した可能性がある。そうすれば、石室の開口する南側から見れば、視覚的に高く見せる効果



第73図 4号墳羨道閉塞状況

もある。

石室の位置だが、墳丘の全体の形から見ると約2m程東に寄っている。調査当初はこのずれは、もう一つ小横穴式石室が同一墳丘内の西に1基あった可能性を考えさせた。そこで、西側の攪乱坑を小石室が破壊されたものと考え、精査したが、全く石室の

痕跡らしきものも確認できなかった。そこで、この攪乱坑は、地元の人による所の粘土採取の土坑であると断定した。すると、この石室の墳丘中心より東側のずれの要因であるが、後述するように、このずれは天井石を西側から載せるために緩傾斜のスロープを造るために意識的に少し東にずらしたものであることがわかった。

以下、墳丘の構築過程について詳しく見てみる。付図5の墳丘各断面を見ながら説明したい。まず、石室の位置は古墳構築の上で最も重要であり、その位置はあらかじめ決定されている。

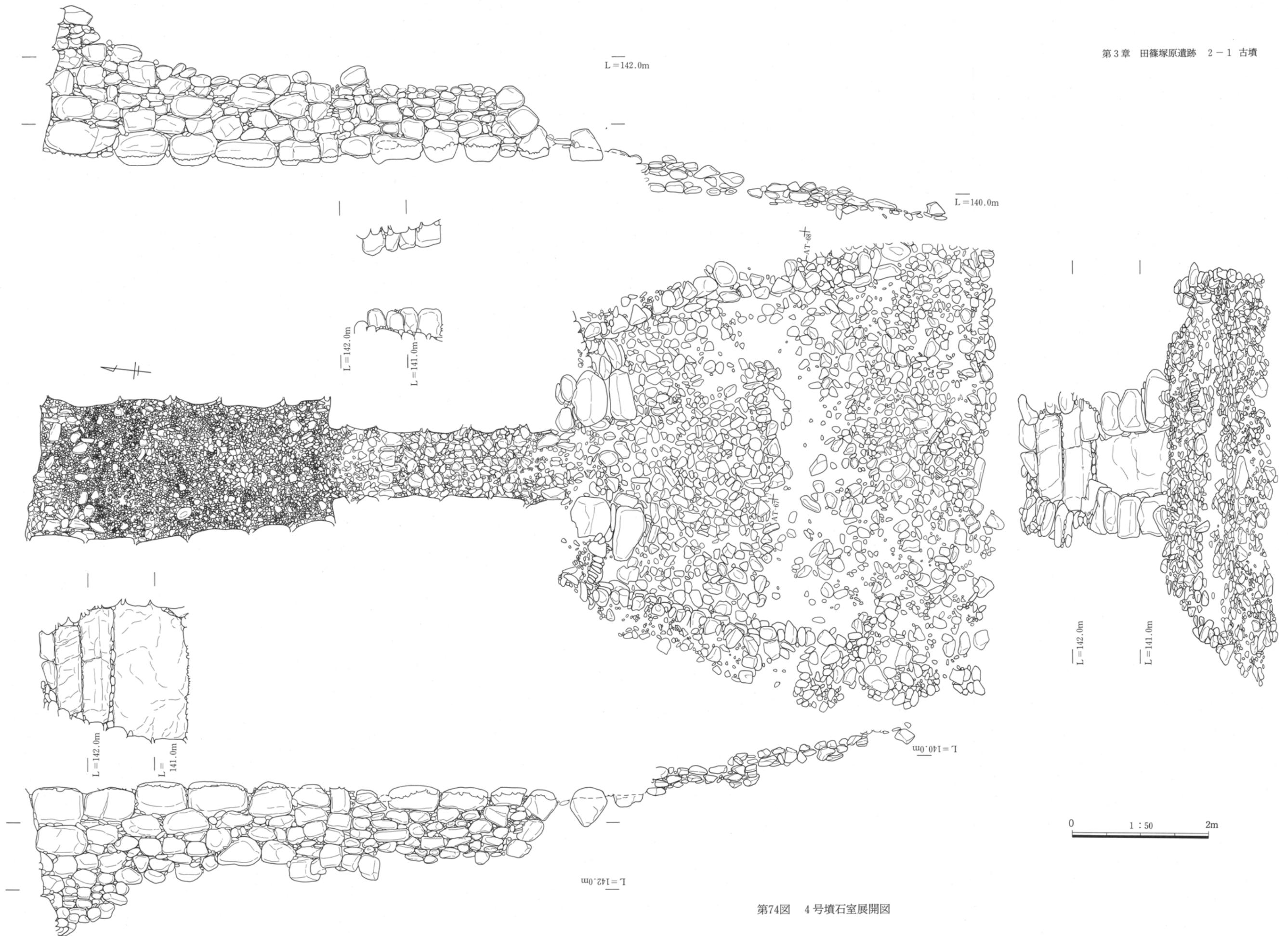
第1工程は地山をある程度整形して整える工程である。これを第1工程としたい。墳丘の最下段の第1段は地山を整形してやや傾斜を持たせており、石室が設置される中央部はほぼ平坦に整形している。

第2工程は石室の土台の基礎の構築である。石室を構築する範囲に石室の形と相似形をなし、石室の各基底石より50cm程幅広く小石を厚さ40~60cm程敷き詰める(第79図、付図5-3・7)。また、羨門前面に置かれることになる計4個の立石もこの石敷の上に載っている。石敷の下部はやや大きめの30~40cm大の片岩を敷き詰めて構築している。他の古墳の例と比べてもこの石敷はしっかりとした造りをしてきた。以上でこの石室の土台の工事が完了する。

次に、石室の構築である。まず、石室の基礎となる下段の構築が第3工程となる。石室の詳細な構築過程については後述するが、玄室と羨道をほぼ並行して造っている。墳丘の盛土と石室の構築との関連であるが、付図5-7・8の断面でよく分かるように、石室の基底石に対応して黄褐色土と黒褐色土を互層に積み上げて、裏込めとその被覆をしっかりと押え込んでいる。また、奥壁は基底石の巨石の裏も裏込めとその被覆をやはり背後からしっかりと補強するように盛り土をしている(付図5-3)。奥壁第一段の設置後、奥壁から袖石に向かって側壁を積み上げ、さらに羨道も羨門の基底石を置き、羨道の長さを決定後、袖石から羨門に向かって側壁を積み上げていくが、ちょうど奥壁の第一段の高さのレベル

である標高141.7m付近まで、一気に側壁の積み上げと裏込め及び被覆と盛土を連続して行い、奥壁第一段、玄室側壁3~4段、羨道側壁5~6段が構築される。この段階の石室の側壁は持ち送りがなされず、ほぼ垂直に構築されている。この石積みと裏込め、そしてそれを押さえる被覆の石とそれを包みこむ盛土によってこの古墳の中核となる部分が出来上がる。付図5-6・7・8の石室周りを囲む、石室に向かって傾斜を持つ盛土の積み上げがこの石室中核部を構成する盛土である。盛土の範囲は石室の主軸方向である南北方向の奥壁方向は、6m程の緩やかな傾斜を有して盛土し、羨門方向は付図5-2に明瞭に出ているように羨門前の立石のさらに前方1m位まで盛土している。石室主軸に直向する東西方向は東側で3m50cm程、西側で4m程であり、かなり西側に延びており、傾斜も緩やかになっている。この盛土の東西の中と傾斜の相違の原因は、天井石を西側から持ち運ぶ事を考えてあらかじめ西側の傾斜が緩やかになるように幅を広げている事が考えられる(付図5-7・8)。天井石の搬入については後述する。

次の第4工程であるが、墳丘内にある3つの列石の内側の列石がポイントとなる(第79図)。最も内側で全周するものを墳丘内第1列石、中央に位置し、西側一部に円弧状を呈するものを第2列石、一番外側の北西部に円弧状を呈するものを第3列石とする。第1列石は第72図を見ると分かるが、墳丘全体を一周している。径は南北径13.6m、東西径12.8mで石室を南北に長い楕円形で取り囲むように構築しており、墳丘の構築過程の中の土留めの役割を果たすものと考えている。第1列石は、その積み上げは丁寧なものではなく、また、場所により高低があり、高いところで70cmほどあり、低い所では1石のみ積んだものもあった。特に羨門に近づくにつれ低くなり、直線状を呈するようになり、羨門のすぐ横では石も極めて小振りになり羨門の周りを押さえるよう小口積みにして築きあげられている。この第1列石に伴う盛土は水平に積み上げていくもので(付図5-7)先述した第一工程の中心に向かい斜めに盛土



第74図 4号墳石室展開図

していく形とは異なっている。ここまでを第4工程とする。

次は、天井石設置までの工程となる。第1列石の外側に中心に向かって傾斜を有して互層に盛土を積み上げていき、この段階で墳丘第2段の立ち上がりまでの盛土を築く。さらに、外側の周囲の土盛りをして古墳の墳丘の裾を決定する。この時、西側を東側より1~2mほど伸ばして、天井石を運び上げる準備をする。また、この西側には第1列石の外側に、途中で切れてしまう別の列石を2列(第2・3列石)並べる。この列石は1~2段のごく簡単な列石であるが、この列石を設けることで、西側は完全に東側の墳丘より延びることになり、石室の位置が墳丘全体の中で、東に寄った形をとることになる。この2列の列石の機能は天井石を運び込む側として、巨石の重さに耐えられるように土留めの強化のために設置されたと考えている。この段階で石室も側壁を持ち送りしながらほぼ完成する。天井石はこの後に運び込まれたものと考えられる。以上が第5工程である。

天井石の設置が第6工程となる。西側から天井石を載せる為には、さらに盛土を水平方向に積み上げてスロープを完成して天井石を引き上げたものと考ええる。(付図5-4・6・7) それに対し、北部や東部では墳丘内第1列石を積み上げながら盛土した段階の傾斜面のままで、それ以降の盛土はほとんど行わない。もちろん墳丘裾部の盛土は北・東側ともに第5工程で行っている。

最期の第7工程は墳丘外表面の仕上げである。天井石の設置後天井石は被覆されたと思われるが、天井石は完全に破壊されていたためその被覆の工程は不明である。

墳丘の外表面の仕上げは基本的に下部から仕上げていったと考えられる。まず、墳丘部の第1段は地山整形と一部盛土の上に、30~40°の傾斜で、その上に20~30cm大の小石を中心とした石を敷いている。緩傾斜ということもあり、葺石は積み上げているというより敷いた形であるが、削平がかなり激しい為、

あるいは列石状に造られていたものが破壊・流失して現状のようになった可能性もある。また、前庭の第1段も同時に造られたと考えられる。

次は第2段の構築である。墳丘の外護列石(第1外護列石)を、第3段の基部より外側へ約2mの地点から組む。残りの良い所で高さ1m程あり、傾斜角は80°を有する。長径30~40cmの平石を中心に小口積みで構築する。この列石の内側は小石と黒色土を裏込めとして詰めている。現状ではこの第1外護列石は東~東北部を除いてはかなり崩落が激しく第1段の平坦面がどのようにになっていたのかははっきりしない。前述したように幅は約1.5mから2mあったと想定している。なお前庭の第2段に相当する部分の構築はこの段階で同時併行で行われたと考えられる。

次は、墳頂部から仕上げていく。黒色土を中心とした土を基礎の土として置く。この後、傾斜角40°の長径30~50cm程の平石を墳頂部端から貼っていく。貼石は標高141.6~7m付近まで貼られる。これが第4段の傾斜面の貼石となる。使用した石は多様な石種であるがいずれも平石であった。この平石は第3段の基部まで貼られている。

その後第3段の列石(第2外護列石)を貼石の最下端部から外側1~1.3m程の所から積み上げていく。積み上げの高さは前述したように約50cm程と考えられ、長径30~40cm程の石で平石を小口積みに積み上げていく。石室開口部両脇付近になると、直線状をなし、しかもかなり小形の石を小口積みに積み上げて羨門前の前庭に繋がると考えられる。現状ではほとんど残っておらずどのような外見であったのか今一つははっきりしない。いずれにしても場所により列石で使用する石の大きさや外見が変化する。第2外護列石の内側は小石を中心とした裏込めを行う。この裏込めの内に第4段の傾斜面の貼石の下部が隠れることになる。つまり、第3段の第2外護列石の内側には貼石があり、二重構造になる。現状ではほとんどこの第2外護列石は崩落して残っておらず、第3段の平坦面幅は想定で50cm程であったと想定している。

以上が墳丘の構築過程である。

石室

石室は今回調査した塚原古墳群中では最大の規模を有するものである。石室形態は両袖型横穴式石室で、その法量のデータは以下の通りである。

石室長（中央）7.7m（左）7.6m（右）7.85m
玄室長（中央）4.3m（左）4.2m（右）4.5m
玄室幅（奥壁）2.1m（中央）1.9m（袖石）1.8m
玄室高（推定）2.2m
羨道長（中央）3.4m（左）3.4m（右）3.35m
羨道幅（袖石・中央・羨門）1.0m
石室開口方向 N-7°-W

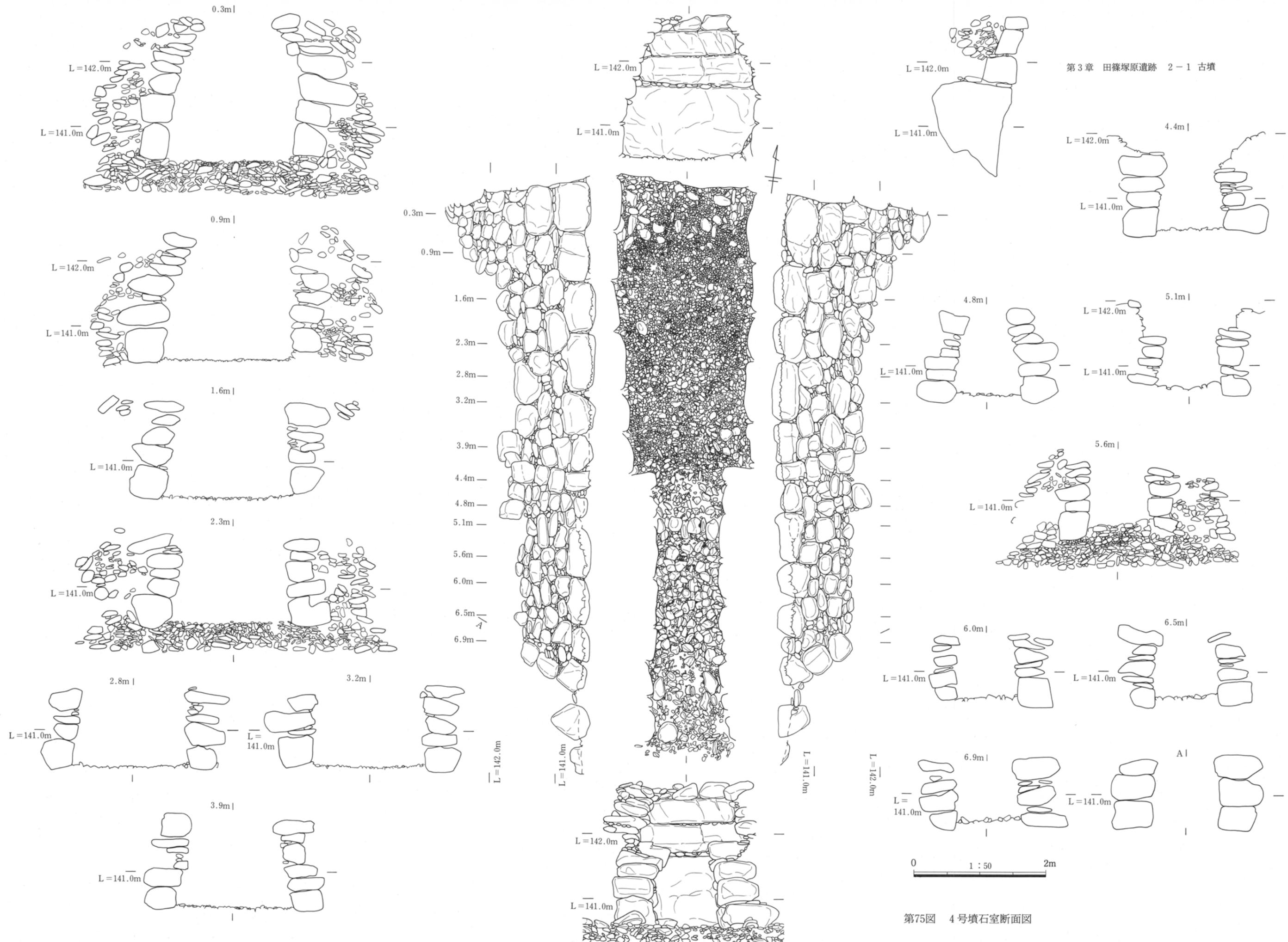
石室の構築は玄室と羨道の構築を考える必要があるが、4号墳の場合、並行して行われたと考えられる。石の配置は石の大きさを調整する合石の存在からすると、奥壁を設置した後に、奥壁よりから袖部方向に石を据えていき袖部を構築するという工程をとる。羨道は、決定された袖石に向かって、羨門から構築するという工程をとる。袖石に向けて奥壁と羨門の2方向から石室全体を構築していったものと考えられる。ただし、第2段以降の羨門は羨道側壁がある程度出来た段階で、基礎の第1段の石の上に斜めの傾斜角度を考慮しながら、仕上げている。天井石は、既に墳丘の所で述べたように、墳丘の盛土の傾斜が西側が緩やかにする配慮がなされている点から、西から天井石を運び上げたものとする。以上が石室構築のアウトラインであるが、以下、詳しく石室の構築工程を見ていきたい。

石室の構築はまず玄室の決定から始まる。この古墳の場合は奥壁をまず設置した。奥壁は長さ2m、高さ1.4m、厚さ1.2mもある砂岩製の巨石である。その据え方は、第79図を見ると良く分かるが、かなり不安定な置き方をしている。最も面積を有する平坦な面を玄室面にもってきたため無理をしたためと思われるが、栗石を奥壁の石の下に詰め込む事と奥壁の自重で安定させたものと考えられる。

奥壁を設置した後、第1段の側壁の設置に入る。

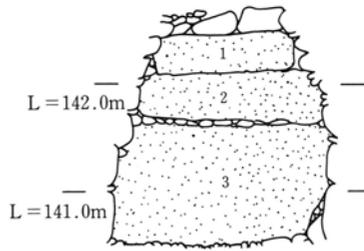
左右どちらを先に設置したかは不明である。左右両側壁ともに、袖石に接して置かれた石の大きさなどから第1段は別にして2～3段目は調整石であり合石と考えられる。つまり、奥壁側から側壁を置いていって、袖石はその位置を決めてあるのでそれに合わせて石を配置したと考えられる。つまり、側壁は奥壁2段目に対応する5～6段目までは、奥壁から袖部に向けて構築していった過程が伺える。荒井研究所の玄室石積構成図（361頁）も参考にしながら左右両側壁の構築について述べてみる。両側ともに、基礎石となる第1段はいずれも石室の用材中、奥壁を除いては最大級の石を使用している。また、その石の材質は第76、77図にあるように奥壁に接する側壁第1段の最初に置かれた石は安山岩系の石を使用し、その後の第1段目の石は玄室・羨道ともに雲母石英片岩を使用しているが、その片岩の中でも硬質のものを使用しているとの石材の鑑定者からご教示いただいております。この点、石室の部位により部材の選定を考慮している状況が伺える。袖石は長めの石を使用して、小口積みにしており、他の部分よりはより安定するように、石材の形と置き方を工夫している。第2段目になると、奥壁に接する石は大きいですがそれ以外の石はそれほど大きな石を使用していない。その点で石の大きさがかなりバラツキを持ち、結果として石が揃わず、3～4段目の構築が左右両壁ともかなり変則的になっている。次に奥壁の第2段を持ち送り状に構築してその第2段目の石の高さに合わせて荒井研究所の構成図では東側壁は6段目、西側壁は5段目の構築が同じく持ち送り状に構築された（第75図）。特に持ち送りが激しいのは奥壁寄りである。奥壁の3・4段目と側壁7段目以降は持ち送りをする材であると同時に玄室の高さの調節用と天井石の底面に合わせた調整材である。いずれにせよ、この部分は奥壁寄りしか残っておらず、詳しい状況は分からない。

羨道は、玄室と並行して構築された。羨道も基礎石の第1段は大きな石を使用している。まず、右側壁を見ると、羨門の石の基底石を置いて、羨道の長



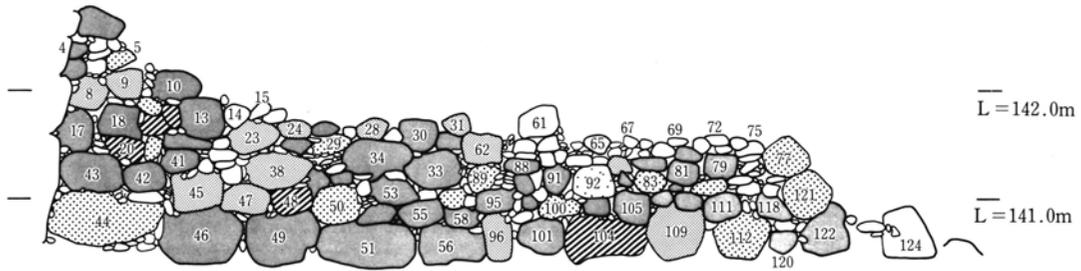
第75図 4号墳石室断面図

2-1 古墳



番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	S	146	42	39	227.5	
2	S	169	53	52	602.6	
3	Ss	243	117	138	3,750.0	

単位cm、重さはkg



番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
4	Sg	63	34	19	55.8	
5	Ac	56	29	15	39.0	
6	Sm	57	31	20	60.6	4下
7		72	28	14	46.1	6右
8	Ch	92	49	35	250.0	
9	Ch	78	42	37	160.0	
10	Sm	95	51	28	200.0	
11	Ac	58	26	13	31.0	9右下
12	Bm	53	24	17	31.8	13左
13	Sm	81	48	36	185.0	
14		63	27	17	42.6	
15		56	19	13	21.0	
16		50	24	11	25.6	15右
17	Sm	102	45	42	300.0	
18	Sm	66	47	28	185.0	
19	Bm	73	28	19	55.7	18右
20	Ba	59	42	25	94.0	
21	Af	49	26	17	32.6	20右
22	Sm	48	52	14	59.6	41上
23	Ch	83	51	35	200.0	
24	Ch	54	34	21	48.7	
25	Sm	54	30	15	32.0	24下
26	Sg	58	28	19	42.6	24右
27	Af	68	38	26	100.4	
28	Ch	63	43	2	69.3	
29		29	14	12	6.5	28右
30	Sm	69	38	35	129.8	
31	Ch	63	32	20	50.4	
32	Pd	45	29	17	34.3	31下
33	Sm	63	49	39	180.0	
34	Sm	66	55	33	157.5	
35		24	19	5	4.3	34左下
36	Sm	53	24	15	33.5	35下
37	Sg	66	24	23	58.0	50左上

38	Ch	66	40	38	153.7	
39		59	34	21	59.4	47左上
40		33	14	13	11.7	41右
41	Sm	60	39	25	97.4	
42	Sm	59	42	27	92.7	
43	Sm	56	70	31	260.0	
44	Ac	96	59	58	460.0	
45	Ch	69	49	34	200.0	
46	Sm	84	70	57	370.0	
47	Ch	65	45	31	127.0	
48	Bm	55	36	22	94.5	
49	Sg	70	76	51	300.0	
50	A	73	52	37	160.0	
51	Sm	57	97	41	290.0	
52	Sm	55	38	19	54.0	50右
53	Sm	57	43	31	91.8	
54		41	15	4	5.8	55上
55	Sm	51	40	22	99.3	
56	Sm	56	62	42	230.0	
57	Af	51	32	22	52.0	58左上
58	Sm	61	34	20	73.4	
59		46	15	11	11.8	58右上
60		38	16	5	6.6	56右上
61		46	42	25	86.8	
62	Ch	58	44	31	120.4	
63		35	23	14	19.1	62左下
64		43	25	16	25.5	62右上
65		57	31	18	40.7	
66		50	14	6	7.4	65右
67		41	17	8	9.6	
68		40	15	8	8.3	67右
69		39	20	8	11.9	
70		44	24	10	17.0	69左下
71		50	20	13	18.1	72左下
72		26	22	5	6.5	

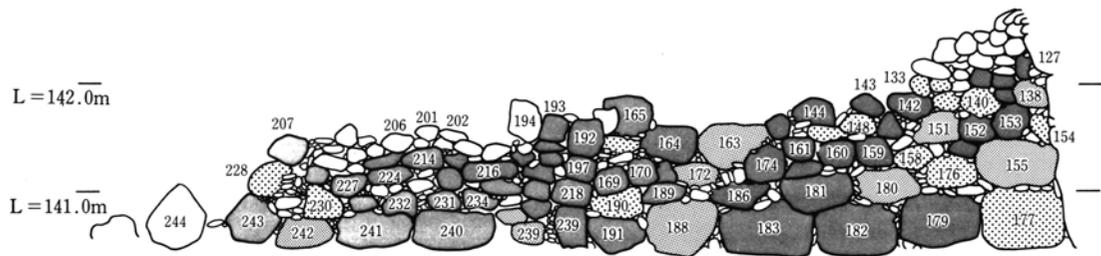
第76図 4号墳石室石材使用状況(1)

第3章 田篠塚原遺跡

番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
73		36	14	6	5.0	72右
74		47	20	8	16.8	73左下
75		46	32	8	21.3	
76		38	24	6	11.2	75下
77	A	68	46	34	170.0	
78		41	21	8	12.2	76下
79	Sm	50	31	23	68.2	
80	Sm	51	25	14	24.7	81上
81		51	30	20	44.5	
82	Sm	37	34	16	28.9	
83	A	61	36	22	79.1	
84		46	18	9	14.2	82左上
85		40	15	8	9.0	92右上
86		46	12	9	8.2	96右上
87		50	31	16	31.1	96左上
88	Sm	52	33	16	45.3	
89	A	71	41	27	123.8	
90	Sm	70	21	21	51.6	89下
91	Sm	68	32	26	91.8	
92	Ss					
93	Ch	43	22	18	26.4	92右横上
94	Sg	47	17	10	15.5	93下
95	Sm	52	33	23	87.0	
96	Ch	78	36	39	225.0	
97		23	13	3	2.0	95右
98	Sm	12	17	14	26.3	97右
99		45	12	11	10.2	91左横下
100	A	55	36	24	783.0	
101	Se	60	45	41	150.0	
102		45	20	11	19.2	101左上
103	Sm	50	22	15	33.5	92下
104	Bm	45	70	46	250.0	
105	Sm	41	33	28	69.0	

106	Sm	48	23	12	24.2	109左上
107	Sm	43	20	9	12.6	81下
108	Sm	44	27	16	31.5	109右上
109	Ch	48	51	52	250.0	
110	A	15	27	51	41.0	111左上
111	Sm	52	32	25	61.8	
112	A	54	56	43	200.0	
113		41	23	6	10.6	79右下
114		51	23	13	24.0	113下
115		42	14	10	9.0	111右
116		22	18	7	4.0	77下
117		36	16	7	7.9	118上
118	Sm	93	33	30	98.8	
119		47	23	9	17.0	120上
120	Sm	73	24	20	68.1	
121	A	66	43	43	210.0	
122	Sg	54	64	52	250.0	
123		41	26	9	18.3	124左
124		65	50	53	185.0	

単位cm、重さはkg



番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
125		65	24	16	44.7	127上
126		55	33	15	36.4	125左横
127	Sm	79	46	25	150.0	
128		43	18	8	10.7	127左横上
129		48	26	9	17.2	128下
130		43	26	14	26.6	136上
131		46	15	9	10.4	132上
132		47	26	13	18.7	135上

133	A	44	20	15	24.7	
134	A	45	19	14	21.8	133上
135		53	27	11	20.3	134右
136	Se	54	21	18	37.7	140上
137	Sg	57	22	16	28.7	136右
138	Ch	67	38	25	101.3	
139	Sm	52	25	12	23.7	138左
140	A	65	38	29	89.1	
141	A	67	27	18	45.1	140左

第77図 4号墳石室石材使用状況(2)

番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
142	Sm	71	45	25	122.1	
143	Sg	63	31	15	71.2	
144	S	106	54	14	160.5	
145		29	12	5	4.2	144左下
146		16	9	3	0.8	145下
147	A	49	36	13	35.1	144右下
148	A	56	37	21	61.0	
149	Sm	66	28	26	66.8	148右
150	A	49	23	10	22.2	149右下
151	Ch	73	47	33	180.0	
152	Sm	49	39	23	81.5	
153	Sm	62	41	35	101.8	
154	A	73	42	32	120.0	
155	Ch	85	73	47	420.0	
156	Sm	64	38	16	58.0	176右上
157		52	18	14	19.7	176左上
158	A	59	36	21	55.8	
159	Sm	69	42	32	111.0	
160	Sm	68	35	23	88.0	
161	Sm	55	40	22	80.5	
162	Sm	53	25	22	41.5	161左上
163	Ch	64	51	43	210.0	
164	Sm	52	49	34	200.0	
165	Sm	51	51	39	150.0	
166		46	26	14	25.4	165左
167	A	63	45	19	70.0	165下
168	Sm	44	27	7	16.2	167下
169	Sm	48	30	24	62.0	
170	Sm	60	32	29	80.7	
171	Sm	53	22	14	30.0	170右
172	Ch	83	47	35	185.0	
173		45	15	13	14.2	174左
174	Sm					
175	Sm	51	36	19	45.8	161下
176	A	79	55	35	200.0	
177	Af	83	43	63	400.0	
178		52	30	9	26.0	176右下
179	Sm	72	64	54	400.0	
180	礫岩	66	54	41	200.0	
181	Sm	70	56	36	200.0	
182	Sm	82	57	53	400.0	
183	Sm	60	90	56	410.0	
184		28	15	4	3.3	181左
185		45	19	5	7.3	186右下
186	Sm	57	37	26	89.2	
187		43	20	9	13.0	186左
188	Ch	52	66	50	250.0	
189	Sm	53	39	18	52.0	
190	A	68	54	31	150.0	
191	Sm	45	66	42	190.0	
192	Sm	77	35	35	147.5	

さを決定し、袖石に向けて石を順次、配置していく様子が伺える。ただ、左側壁の状況を見ると、調整石である合石が羨門基底石に隣接してあるので、羨道は右側壁を最初に羨門から第1段目の基底石を袖石にむけて構築し、左側壁は、基底石を袖石から、

193	Sm	37	29	20	39.2	
194		57	38	24	79.7	
195	Sg	37	31	11	23.2	193下
196		38	15	6	8.2	194下
197	Sm	65	41	22	97.7	
198	Sg	57	22	14	27.3	195下
199	Sg	45	23	18	27.5	196下
200		41	27	14	25.5	216上
201		71	23	20	40.7	
202		45	26	8	15.0	
203		50	28	1.3	27.1	202右下
204		42	22	10	17.6	202左下
205		45	19	11	13.8	201左下
206		44	30	9	27.6	
207	Sm	63	42	28	105.0	
208		44	31	13	22.7	227左上
209	Sm	53	24	16	44.7	230左上
210		38	20	16	20.1	208右横上
211		48	18	7	14.3	208右横下
212		40	21	11	12.0	206左下
213	Sm	37	43	17	42.5	214左
214	Sm	37	36	20	45.5	
215	Sm	39	25	14	18.3	216左横上
216	Sm	54	34	18	53.5	
217	Sm	33	33	16	32.7	218左横上
218	Sm	57	33	25	105.5	
219	Sm	59	33	19	55.2	218左
220	Sm	37	38	11	32.8	216下
221	Sm	54	30	25	58.2	216左横下
222		31	16	6	5.7	214下
223	Sm	39	27	13	23.4	232右上
224	Sm	46	36	15	43.8	
225		42	13	10	8.7	224右下
226		57	28	12	31.0	225左下
227	Sm	51	36	23	72.2	
228	A	45	66	38	200.0	
229		40	26	15	25.4	230左
230	A	58	40	32	127.3	
231	Sm	49	32	16	37.6	241左上
232	Sm	41	33	24	57.0	
233	Sm	35	34	17	37.7	
234	Sm	62	36	24	71.0	
235		48	24	11	18.0	234右
236	Sm	47	31	17	41.7	237左横上
237	Sm	64	45	30	180.0	
238	Ch	51	25	18	37.6	239左上
239	Ch	72	43	36	158.6	
240	Sm	60	55	55	260.0	
241	Sm	77	53	40	200.0	
242	Ch	51	40	31	94.2	
243	Se	63	47	45	240.0	
244		80	54	47	285.0	

羨門に向けて配置していった可能性が高い。第2段以降は袖石部と羨門部両方に調整石である合石があり、構築の順序を想定するのが困難であるが、基本的に、袖石から羨門に向けて配置されている可能性が高い。羨門第2段目から第3段目に接しては調整

用の合石が多数積み込まれており、以上の想定を可能とする。袖石の第2段目の石と高さを揃えて羨道の2～3段目が構築された段階で羨門の第2段の石が下の第1段の基底石の上に入口を意識した傾斜面を考慮して形造りながら据え置かれ、羨道の側壁との間には長さを調節する合石を詰め込んでいる。また、袖石の第3・4段に合わせて、羨道の4～6段目が築かれ、羨門の3段目の石もこの最後に構築された。なお、天井石のことを考えるともう一段、羨門の石が置かれていたものと考えられる。側壁は現状での最終段の6段目の上には天井石との高低の調整を役割とする段があるのみで、この上に天井石を置いたものと考えられる。羨道の構築は玄室で言うと、奥壁2段目、側壁で言うと、4段目に相当する段階にあたり、ここまでは、玄室は袖石に向けて羨道は袖石から羨門に向けて並行して構築していったものである。また、羨道は第75図を見るとよく分かるが2～3段目までは持ち送りが無くほぼ垂直に壁面を構成しており、4段目以降、弱い持ち送りをしている。

石室の裏込めは、第75図を見ると明瞭に分かるが、第1段の基底石の裏込め及びその被覆はしっかりと構築しているが、第2段以降は裏込めや被覆、特に被覆の部分が、きちんと控え積みをせずに石を積み上げており、基底石とその裏込め・被覆とそれ以後の裏込め・被覆の差を感じる。

床面の状況であるが、玄室と羨道ではかなり床面に敷かれた石の大きさが異なっている。玄室は拳大以下の玉石を中心に厚さ10cmにわたり基壇面の石敷の上に敷かれている。奥壁に直行した幅1m程の空間は人体埋葬を意識してかやや大振りの20cm大の石を中心に石が敷き詰められていた。おそらく、この空間にこの古墳を築造する契機となった被葬者が葬られていたと考えられる。袖石部までは小石を敷き詰め、袖部を境にやや大振りの石を敷くが、框石は玄門より約50cmはいった所に20～30cm大の石を7個、羨道と直角方向に連続して置き、区画している。この框石により区画された以降の羨門までの床面敷石

は10～20cm大の大振りの石が敷き詰められており明らかに、玄室空間と異なった空間を意識していたことが分かる。また、羨門部にはやはり境界石と考えられるような石が側壁に接して置いてあり、あるいは羨道全体にわたって置いてあったものを気づかずに取り上げてしまった可能性がある。

羨道の閉塞状況がかなり良好な状況で残っていた。(第73図) 現状の羨道の側壁上部まで、土と石が混じりあった閉塞がなされていた。羨門の石は閉塞されてはいなく、古墳時代当時は羨門の石は外部からも確認できた。あくまで、羨道に入れないように羨道の入り口部分内部から袖石の付近まで閉塞されていた。

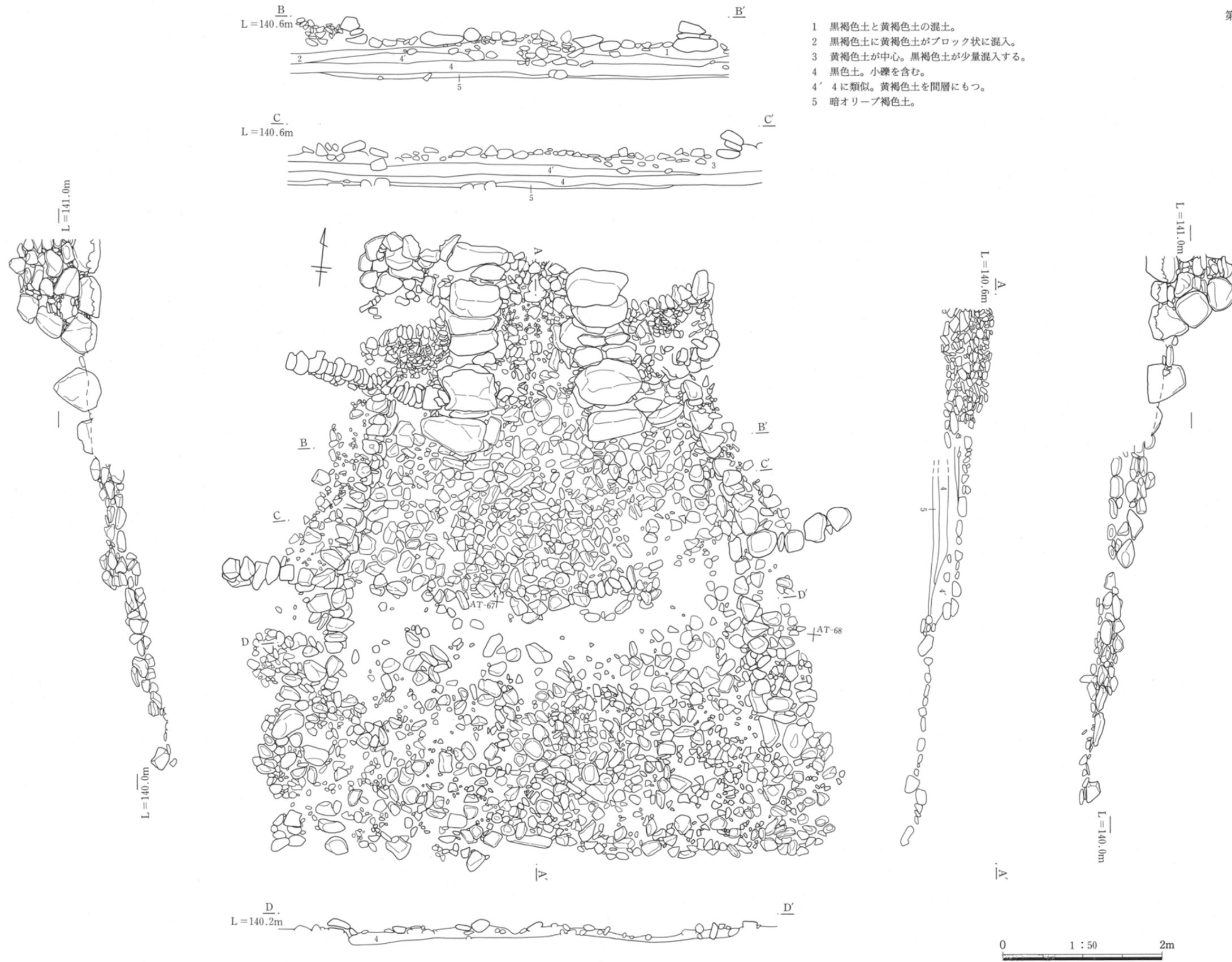
前庭 (第74・78図)

塚原古墳群のほとんどが、古墳の周りを削平されて、その過程で前庭が破壊されてしまい残っていない。今回の調査でも福島駒形遺跡1号墳にてわずかに痕跡が確認できた程度であった。しかし、この4号墳では極めて残りの良い状況で前庭が検出された。前庭は羨門前の羨道に連なって羨門前に置かれた左右2個ずつの巨石を基点にしてその巨石から50cm程左右に開いたポイントから扇形に開き、墳丘の端まで至るものである。前庭の法量を以下に記す。

前庭長 (現存長) 6.2m、

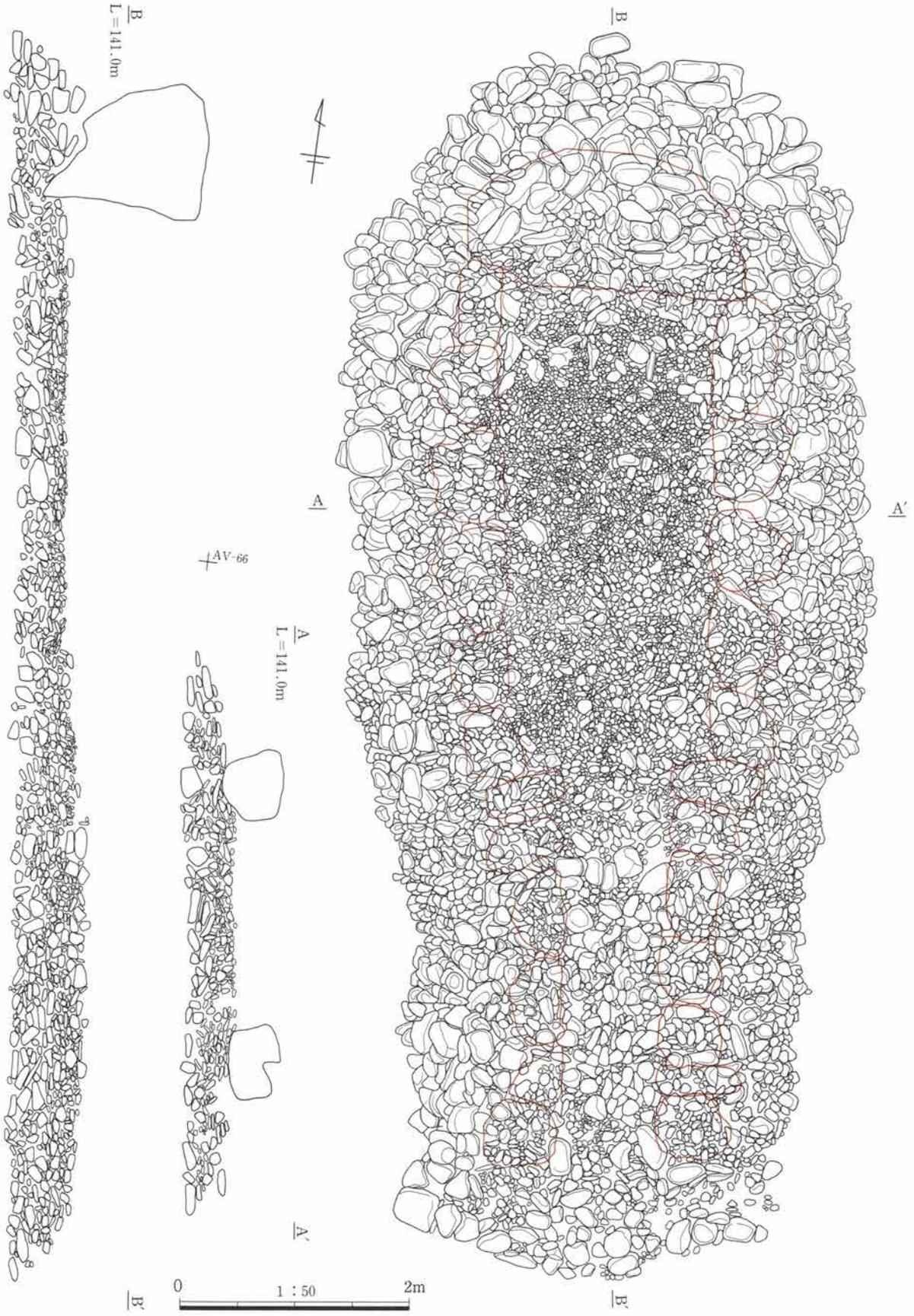
前庭幅 (基部) 3.7m (中央) 4.9m (端部) 6.3m

羨門の前に天井石を架構しない、巨石を羨道の延長線上に置いている。左右ともに2石ずつ置いており、羨門寄りの石は立てて置いてある。その手前の石はそのほとんどを土の中に埋もれた状況で置いてある。そしてこの羨門寄りの立石状の石は墳丘第3段の葦石のラインに乗っている。立石から左右に50cmの所、先ほどの葦石ラインに接して前庭側壁が扇形に開くように築かれている。側壁は2～3石の長20～30cmほどの石を横積にしたもので、造りはかなり雑である。2.3m程の所で、墳丘2段目の葦石のラインとクロスし、前庭もこの葦石ラインで大きく2分される。前庭の中にも一部石をラインに沿って円弧状に石を置いて区画し、さらに、約30cm程の段差



- 1 黒褐色土と黄褐色土の混土。
- 2 黒褐色土に黄褐色土がブロック状に混入。
- 3 黄褐色土が中心。黒褐色土が少量混入する。
- 4 黒色土。小礫を含む。
- 4' 4に類似。黄褐色土を間層にもつ。
- 5 暗オリーブ褐色土。

第78図 4号墳前庭



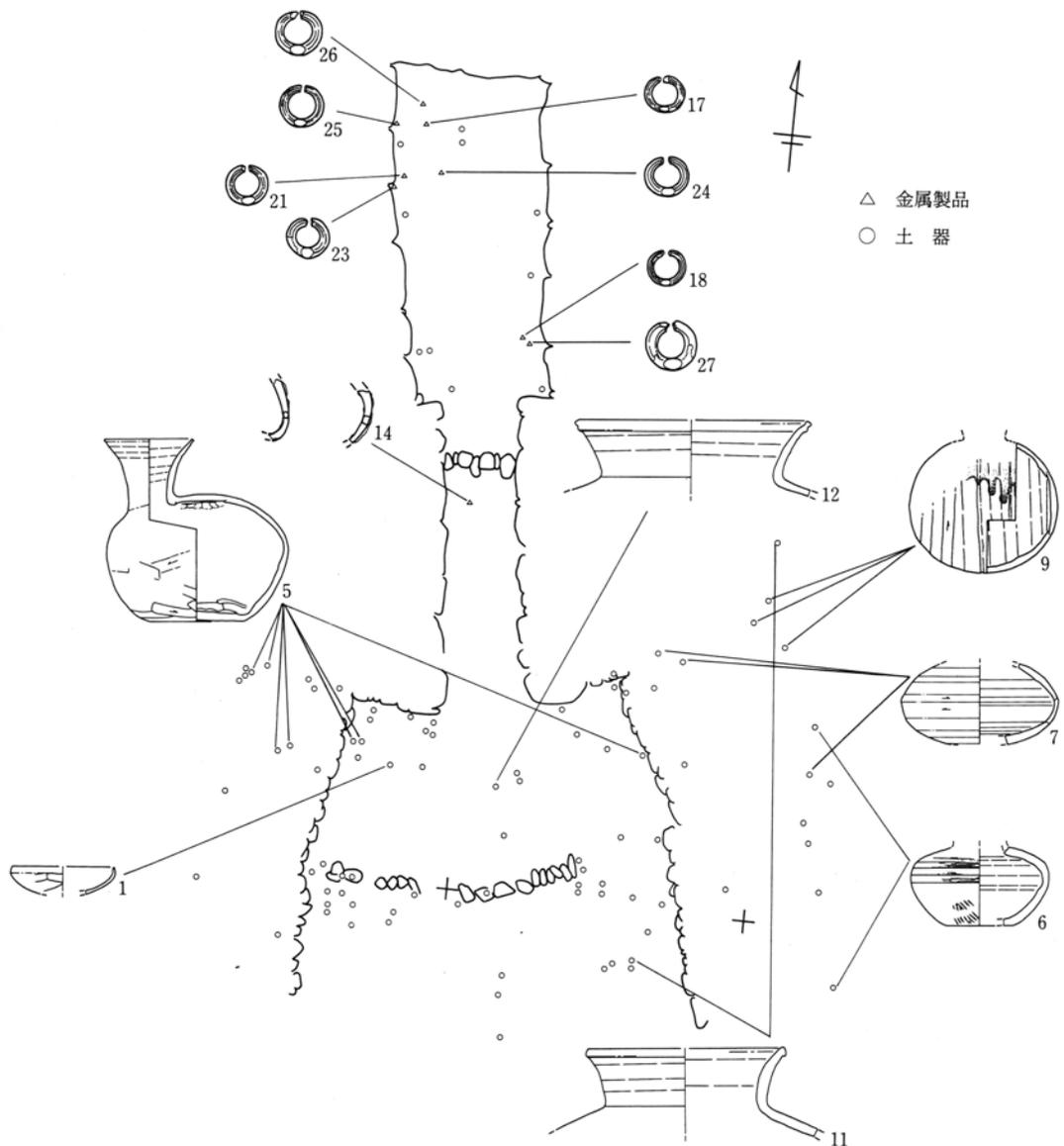
第79图 4号墳石敷平面・断面図

もつけて区別している。前庭床面は石を敷くが、この区画を境に上部では敷石が密集し、下部にはやや間隔のあいた石敷きをしている。前庭側壁はさらに続くが、先端部に近い方にくると明瞭でなくなる。図での先端部と考えた地点は、ちょうど地形が下がるポイントで、この地点より自然の谷地の地形を生かしての古墳の墳丘裾で、前庭も側壁は消えているがここまで来ているものと考えたい。

遺物出土状況 (第80~83図)

玄室内は盗掘が激しく、副葬品もごく一部を除い

て、ほとんどが盗掘されていた。副葬品の中で一番良く残っていたのは耳環であり、計13点が出土した。耳環は、径が小さいこともあり、床の玉石の間から下に入り込んだような状況で出土したものが多く、その点では原位置に近いものが多いと考えられる。耳環で出土位置が確認できたのは8点あり、特に玄室奥、右壁に接するような位置に6個が集中している。ただ、集中している割に、セット関係を有するものは少なく、21と23が大きさ等からセットと考えやすいもので、他は明瞭なセット関係を持たないも



第80図 4号墳遺物出土状態

のであり、出土位置の分からない耳環とのセット関係を持っている(17-18、19-20、24-25、27-28)。このように明らかなセット関係を持つものが5つあり、セットが確認されないが、これ以外の耳環の存在も考えると、この古墳に葬られた被葬者も5体以上あった可能性が高い。実際、宮崎氏の出土歯の報告によれば、105本の人の歯が出土し、分析の結果6個体分が検出されている。出土歯の位置は耳輪の集中地区の玄室奥壁寄りから中央にかけての右壁寄りと、耳環が出なかった玄室中央左壁に集中している。歯は散乱した状態で、どの位置にこの個体を置いたという確定が困難である。ただ、今までの田篠塚原古墳群の調査例からすると、奥壁に接して主軸に直行する形で、古墳築造の契機となった者を埋葬し、その後は順次、石室主軸に平行に側壁に沿って追葬した可能性が高い。耳環の出土状況・歯の同定個体から考えると、頭を西に置いて、石室主軸に直行して奥壁に沿って、古墳築造の契機となった青年期の埋葬者が据えられた後、右側壁には、幼年の遺体を

含む3個体を石室主軸に平行に、側壁に沿って置くとともに、左側壁にも奥壁に近いほうから、壮年・青年前期・少年の遺体が同じく、石室主軸と平行に側壁沿いに据え置かれたと考えられる。また、その少年の南、やはり左側壁寄りにイヌの歯が出土し、小型のイヌをこの玄門近くの左側壁寄りに埋置した可能性も高い。またこの古墳も玄門位置より羨道寄りに長さ70cmほどの地点にしきみ石が置かれるおり、そのしきみ石と袖部との間から多量の人骨が出ており、ここにも遺体が置かれていた可能性が高い。このように見てくるとこの石室には多くて8体の遺体と1体の犬の埋葬がなされたと考える事ができる。

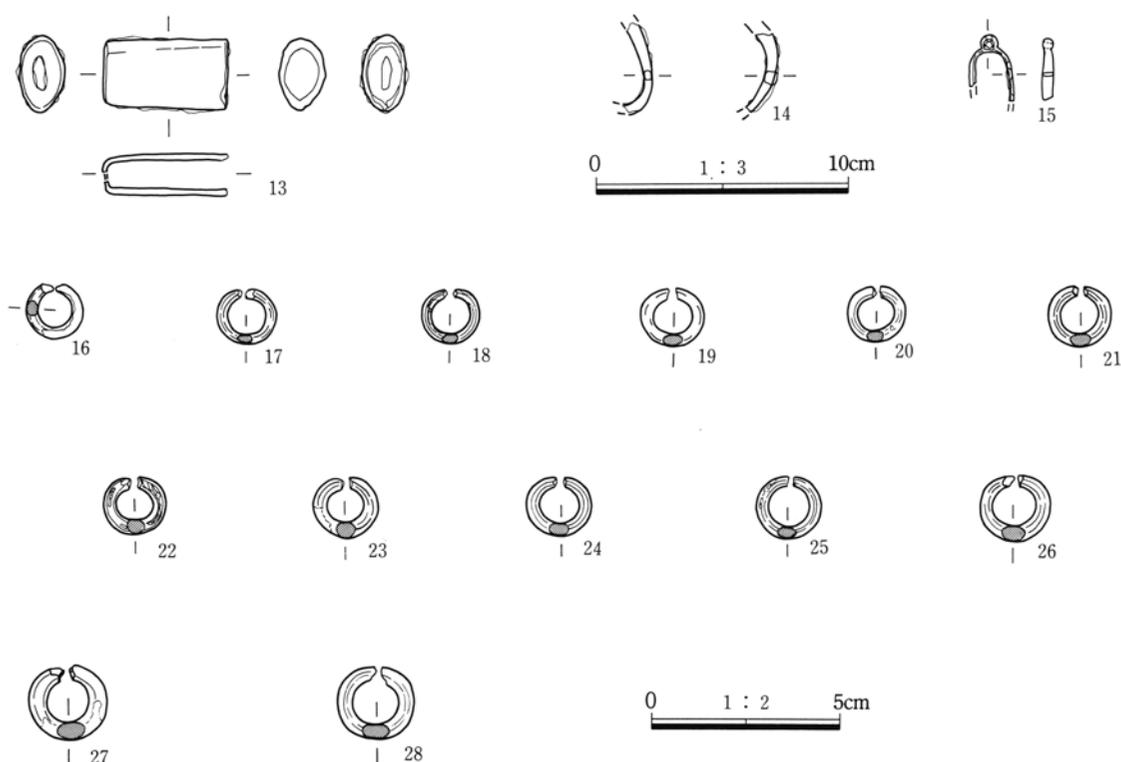
耳環以外には鉄製品では、鞆尻金具(82-13)と足金物(82-15)といった刀装具が恐らく玄室内より出土している。また、普通ほとんど出土例が無い、羨道部より棒状の鉄製品(82-14)が出土した。これ以外にも豊富な副葬品があったはずだが残念ながら盗掘により全く出土しなかった。現時点では鉄製の刀の存在のみわかり、それ以外の武器・馬具・装身具(耳環を除く)・金銅製品などこの時期の古墳に副葬される確率の高いものの情報は全く出なかった。また、羨道部での鉄製品の出土に注目したい。

土器類は前庭を中心にその周辺からも出土している。土師器は計73片が出土している。皿類が中心で(83-1・2)、他に小壺(83-3)がある。須恵器類と同じ前庭に置かれていた。

須恵器類は計171片が出土し、多種類の土器が出土している。出土地点の明瞭な代表的な土器を見ていく。前庭の出土例として甕(83-11・12)が前庭前部と後部の両方から出土している。ただし、平瓶(83-5)など他の須恵器にも見られるように前庭と墳丘の両方から出土しているもの(80図)もあり、本来どちらにあったのか分からない。また、土器の破砕行為をした後、前庭とその周辺に撒いた可能性もある。前庭ではなく前庭の周辺の墳丘にも、特に前庭左側に多数の須恵器が出土した。横瓶(83-9)や壺・長頸壺(83-6・7)などがある。出土地点の明瞭でないものの中に長頸壺(83-8)や高台(83-10)



第81図 4号墳骨・歯出土状態



第82図 4号墳出土遺物(1)

や甕(83-4)が出土している。この前庭部もかなりいじられた跡があるので、これらの遺物の原位置が正確なものかどうかは、微妙な所があるが、いずれにしても前庭とその両横付近に集中して土器類が置かれて、あるいは破碎されて撒かれたことが想定される。土器はいずれも7世紀代後半段階のものである。古墳の築造時期がこの土器の年代と同時期かは今のところはっきりしない。追葬及び、その後の再利用も考える必要があるからである。

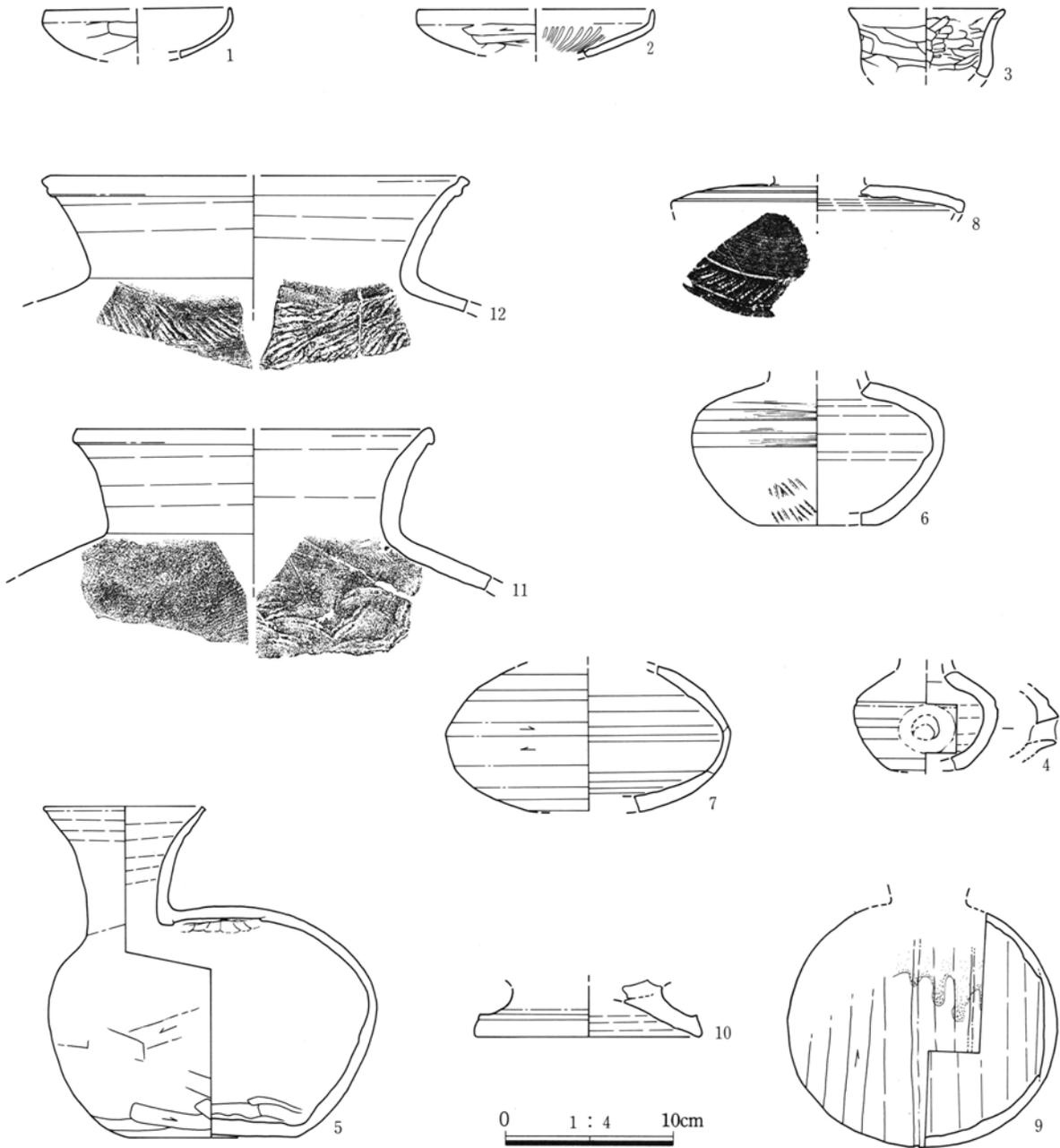
まとめ

しの塚古墳は塚原古墳群中の最大規模の4段築成の円墳として、この古墳群の主墳となるものである。古墳群中では初めての墳丘内列石が確認されるとともに、古墳の墳丘・石室の構築過程がかなりの部分まで復元できた。古墳の石室下部とそれを取り巻く核の部分を造り安定させる工程があり、次には墳丘内第1列石により土留めを行いながら核の部分の周りをさらに盛土していく。この段階で石室もほとんど完成し、さらに周りの墳丘裾までの盛土をして、

傾斜を意識的に緩やかにした西側より天井石を運び込み敷設する。天井石を覆い盛土した後に古墳の外面の仕上げに入る。下段から作業を行ったと考えているが、上段からの作業でも可能でこの外面の仕上げの作業の順序はいまだ不確定の部分がある。

石室の構築は、上部の持ち送りを有する石室部分がほとんど崩落してしまっており途中までの復元しかできなかった。石室の下にはこの古墳群で共通する石敷を行っており、玄室と羨道はその上に並行して築かれている。奥壁構築後、原則として玄室は奥壁から袖石に向かって築かれている。羨道は羨門の基底石を置いて羨門の位置を決定した後、右側壁の基底石は羨門から袖石へ、左側壁の基底石は袖石から羨門に向けて構築している可能性が高い。羨道の第2段以降は袖石から羨門に向けて積み上げていっている。

前庭は墳丘の第1段まで達する大きなもので、墳丘の構築の最後の工程の墳丘の外護列石や葺石を施すときに併せて造られている。



第83図 4号墳出土遺物(2)

石室の中の遺体配置は、人骨・歯・残存遺物等からかなり復元できた。奥壁に頭を西にして石室主軸に直行して青年期の古墳築造契機となった人物がまず納められる。その後は石室の主軸に併行に右側壁には3遺体、左側壁にも3遺体が置かれ、袖石付近にはイヌの歯が出土し、イヌの遺体かその一部が埋

葬されていた。さらに羨道部に一部入って約70cmの所にしきみ石があり、この石の手前にもう一体置かれていた可能性がある。合計、多くて8体の遺体と1匹のイヌの埋葬がされていたと想定できた。副葬品については盗掘が激しく、刀装具以外は耳環が出土したのみで本来の副葬品の内容は不明である。

5号古墳 (富岡市第13号墳)

調査前の現状と調査経過 (第84図)

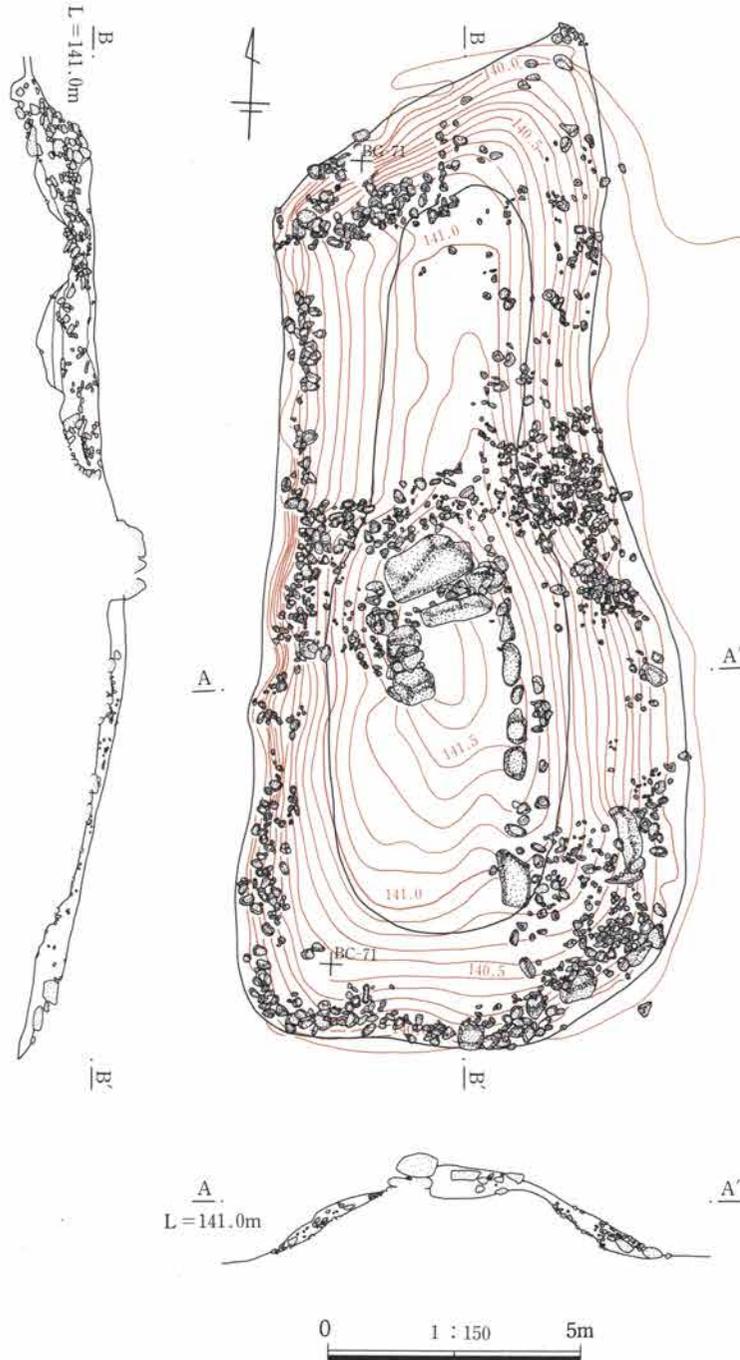
古墳は、かなり変形していて、図にあるように南北に異様に長く伸びた南北長約21m、東西長約8.5mの長方形状を呈している。現状でも奥壁と側壁の一部が露出しており確認できた。84図のA・B断面を見るとこの古墳の特に北部に関しては、後世の盛土

で築いたものであることが分かる。古墳の墳丘を耕作などにより削平した土をこの北側に集めて盛土したものであろう。東西は後世の盛土はほとんど無く、すぐに破壊された状況の石室とその裏込めが検出できた。調査は断面を取った後、すぐに石室の主軸方向が確認できたので、それを基準に横断・縦断の断面を取りながら調査を行った。

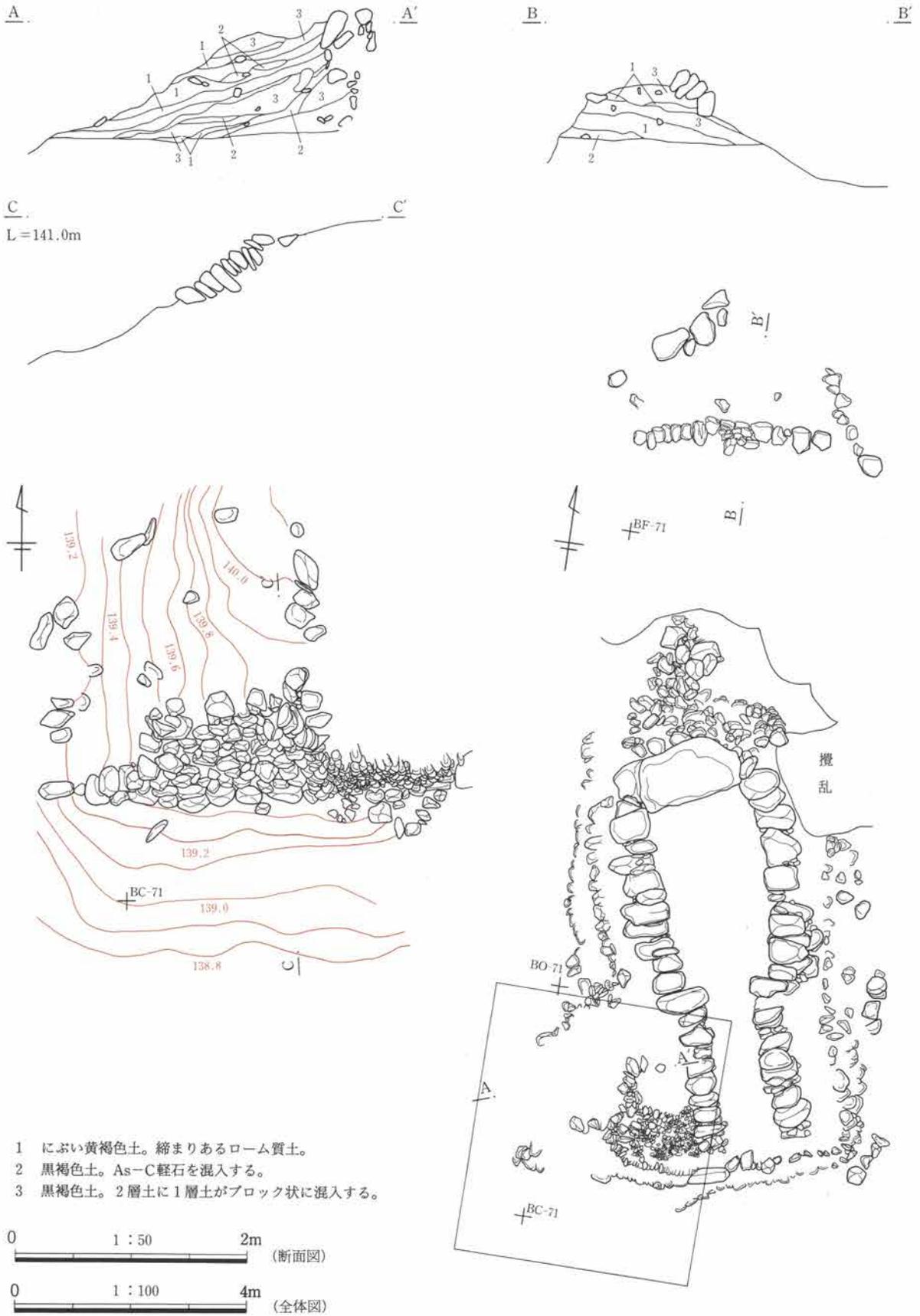
墳丘 (第85図)

墳丘の残りは、石室北側と南西側が良く、その2地点でそれぞれ断面を取った。(A・B断面) 他の墳丘の残っている古墳と同様、黒褐色土と黄褐色土とが互層になって盛土をしている。また、この古墳では、墳丘と共に葺石がごく一部残っており、北側の墳丘の葺石は円弧状を呈して3~4重に積み重なった状況で葺かれていた。葺石は盛土に斜めに突き立てるようになっている(B図)。また、南西部の墳丘部には羨門から横に続いて葺石が施されており、羨門のすぐ横は垂直に立てるように片岩の小石を小口積みに積み上げていくように石室の入り口を意識しての装飾的要素を考えた積みかたをしている(拡大図)。少し羨門から離れると一般の葺石の葺きかたの一種である、北側の葺石の葺きかたと同じような斜めに小石を突き立てるような葺きかたをしている(C図)。

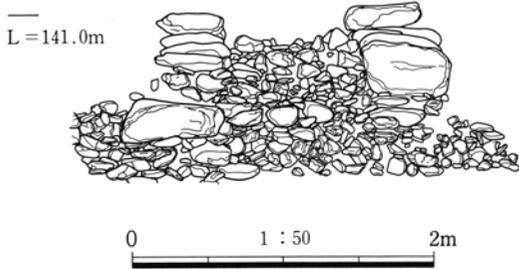
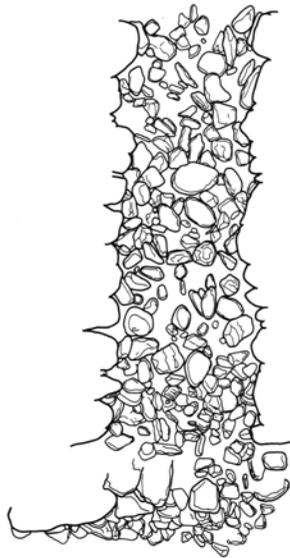
墳丘径は周堀が確認できなく、また北側の墳丘裾は葺石により確認できたが、7世紀型の古墳に通常ある平坦面及び、前庭が確認できなかったので墳丘径の外径は不明である。ただし、平坦面の内側の盛土している内径部分はこの調査により、羨門



第84図 5号墳現況図



第85図 5号墳全体図・断面図



第86図 5号墳羨道閉塞状況

から北側盛土ラインまでの約13mと知る事ができた。

石室 (第86～91図)

石室は墳丘の削平がかなりすすんでいたにもかかわらず、良好な遺存状況を示していた。以下に石室のデータを提示する。

石室長 (中央部)	6.2m
玄室長 (中央部)	3.6m
(左側壁)	3.7m (右側壁) 3.5m
玄室幅 (中央最大幅)	2.2m
(奥壁部)	2.0m (玄門部) 1.9m
羨道長 (中央部)	2.6m
(左側壁)	2.7m (右側壁) 2.5m
石室開口方向	S-19°-E

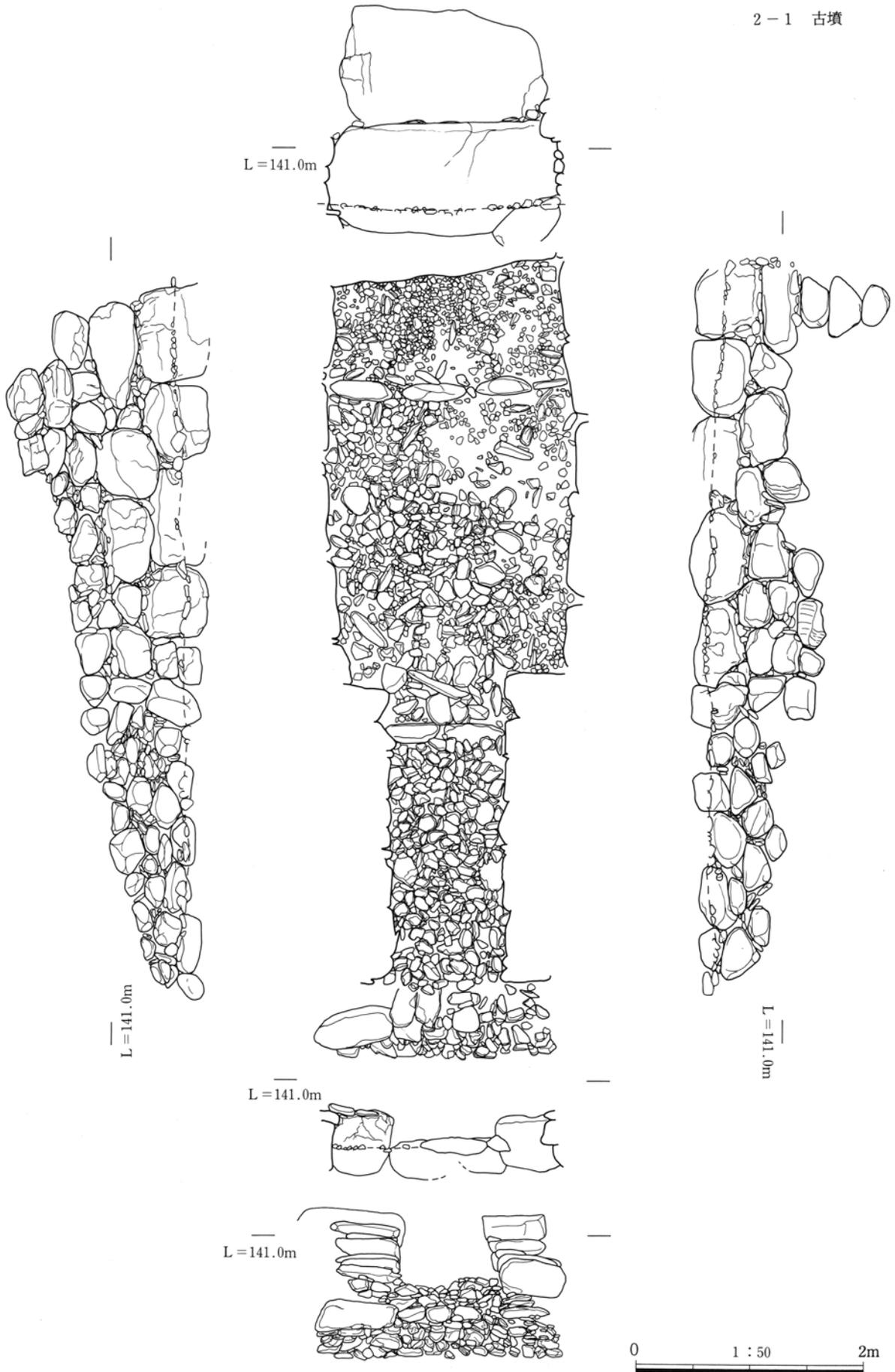
奥壁に砂岩の巨石を2石置いてまず玄室の位置を決定し、その後、奥壁に近い側壁から袖部に向かって玄室を構築したものと考えられる。その根拠は袖部

に使用された袖石が小石を積み上げたものでここを基点にして玄室の構築が行われたとは考えにくいこと、さらに右側壁では袖石に接する側壁が小石で明らかに奥壁方向から側壁を築いた場合に長さを調整する調整石として使用した合石であることである。さらに言うと、この右側壁の合石の存在から、側壁第一段目に関しては、左側壁の奥壁から石を置き、玄門を左側壁で決定した後、右側壁を同じく奥壁から構築し、左側壁に合わせた袖石を合石を使って長さを調整して構築したと考えられる。二段目以降も石の配置状況からすると奥壁側から据え置いていった可能性が高い。羨道は側壁の状況から見ると、玄門近くの側壁に使用された石がいずれも小型の石で反対に羨門付近の石がしっかりとした石を配置していることを勘案すると羨門側から袖部側に石を置いていった可能性がある。

石材は第88・89図を見ると、片岩系を中心に使用し、それ以外ではかんらん岩・チャート・玄武岩などを使用している。奥壁は前述したように砂岩である。

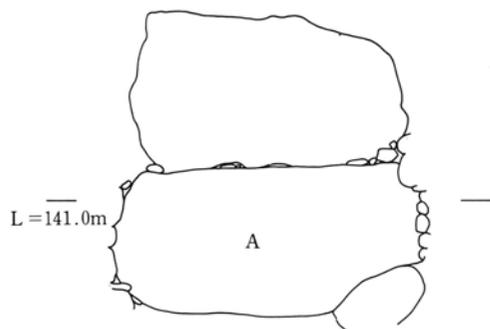
玄室床面は奥壁近く、主軸に直行方向に横長の境石を4石置いて、この古墳の築造の契機となった被葬者を安置する空間を確保している。東側がやや開き気味でこちらに頭を置いたことが想定される。この空間の床の敷石は拳大以下の小石を使用している。玄室の残りの空間の床の敷石はやや大きめで、長径20～30cmの片岩系の石も含めた小石を使用し、明らかに、境石を境界にして床の敷石を区別している。羨道部の床も、袖部の袖石から羨門方向に30cm程入った所に横長のしきみ石を2石置いて羨道と玄室の区分けをしている。羨道の床の敷石は、拳大の小石を使用している。羨門の前に長さ60cm程の小空間があり円弧状になって墳丘に続く様であり、これが墳丘の内径の立ち上がりになると考えられる。前庭との関係が削平を受けていて、今一つ判明しない。

石室の基壇は第90図にあるように、50cmから1m程、石室の基底石のラインより外に敷石を厚さ約40～50cm程敷いている。平たい石を選んでいますが中

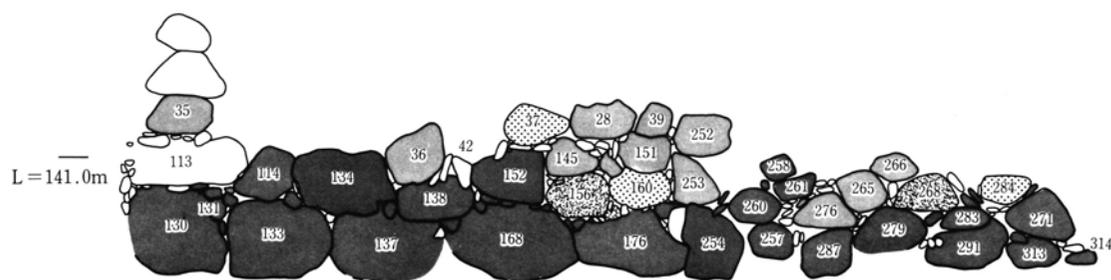


第87図 5号墳石室展開図

第3章 田篠塚原遺跡



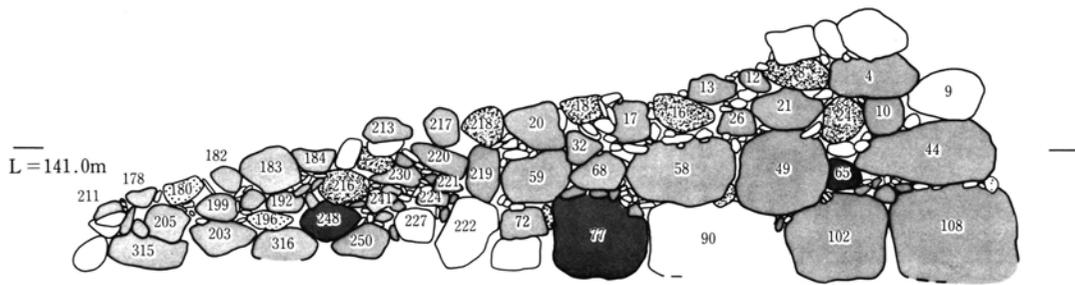
番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
A		84.0	238.0	114.0	2440.0	



第88図 5号墳石室石材使用状況(1)

番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
35	Sm	67.0	41.0	27.0	125.4	
36	Sm	60.0	39.0	35.0	132.9	
37	Ab	62.0	38.0	28.0	100.5	
38	Sm	68.0	42.0	23.0	94.5	
39	Sg	50.0	23.0	26.0	30.0	
40		32.0	12.0	14.0	7.0	42左
41		28.0	10.0	6.0	2.8	40左
42		26.0	8.0	4.0	1.9	
43		33.0	9.0	6.0	4.9	35右下
113		84.0	60.0	40.0	250.0	
114	Sm	69.0	49.0	38.0	190.0	
116	Sm	28.0	12.0	9.0	4.2	133上
126	Sg	26.0	12.0	4.0	2.2	127左上
127	Sm	38.0	13.0	9.0	7.6	131上
128	Sg	26.0	5.0	5.0	1.0	129上
129	Sg	40.0	11.0	5.0	4.1	133左上
130	Sm	60.0	76.0	55.0	520.0	
131	Sm	40.0	18.0	7.0	10.2	
132	Sg	26.0	7.0	4.0	1.3	131下
133	Sm	75.0	58.0	60.0	400.0	
134	Ch	79.0	64.0	47.0	230.0	
136	Sm	29.0	8.0	5.0	1.9	137上
137	Sm	115.0	73.0	47.0	450.0	
138	Sm	57.0	53.0	37.0	190.0	
139	Sm	37.0	11.0	9.0	6.5	138下
145	Sm	64.0	35.0	23.0	80.0	
151	Sm	59.0	36.0	23.0	130.0	
152	Ch	68.0	57.0	45.0	220.0	
156	Po	77.0	46.0	38.0	210.0	
158	Sm	45.0	19.0	11.0	17.0	160左上
160	Ab	65.0	41.0	29.0	190.0	
168	Sm	90.0	65.0	46.0	350.0	
170	Sm	20.0	10.0	3.0	1.0	176左上

171	Bm	17.0	7.0	3.0	0.6	170右
173	Pp	30.0	12.0	8.0	4.1	171右
174		18.0	7.0	5.0	0.6	173右
175	Sm	48.0	20.0	13.0	19.0	160右下
176	Sm	72.0	50.0	42.0	250.0	
252	Sg	65.0	33.0	29.0	96.0	
253	Sm	76.0	40.0	30.0	190.0	
254	Ch	78.0	45.0	61.0	250.0	
255	Sm	26.0	10.0	4.0	2.0	253右
256	Sm	33.0	17.0	6.0	5.1	255下
257	Sg					
258	Sg	54.0	20.0	16.0	24.7	
359	Sg	32.0	7.0	8.0	3.4	258下
260	Sm	61.0	36.0	27.0	120.0	
261	Sm	47.0	25.0	22.0	37.5	
265	Sm	59.0	33.0	28.0	70.4	
266	Sm	53.0	34.0	14.0	45.5	
268	Pd	60.0	44.0	23.0	81.7	
270	Sm	26.0	12.0	3.0	2.0	284右
271	Sm	60.0	55.0	36.0	190.0	
274	Sm	19.0	8.0	3.0	1.0	261下
276	Sm	63.0	42.0	24.0	86.0	
279	Sm	60.0	52.0	32.0	114.9	
280	Sg	27.0	11.0	5.0	2.8	283左
281	Sm					282右上
282	Sm	40.0	16.0	6.0	7.4	283上
283	Sm	49.0	38.0	22.0	53.5	
284	Ac	53.0	36.0	20.0	51.4	
287	Sm	42.0	35.0	32.0	88.0	
291	Sm	55.0	41.0	31.0	107.3	
292	Sg	23.0	12.0	6.0	3.0	313左上
313	Sm	51.0	38.0	24.0	60.8	
314		50.0	24.0	16.0	26.8	



第89図 5号墳石室石材使用状況(2)

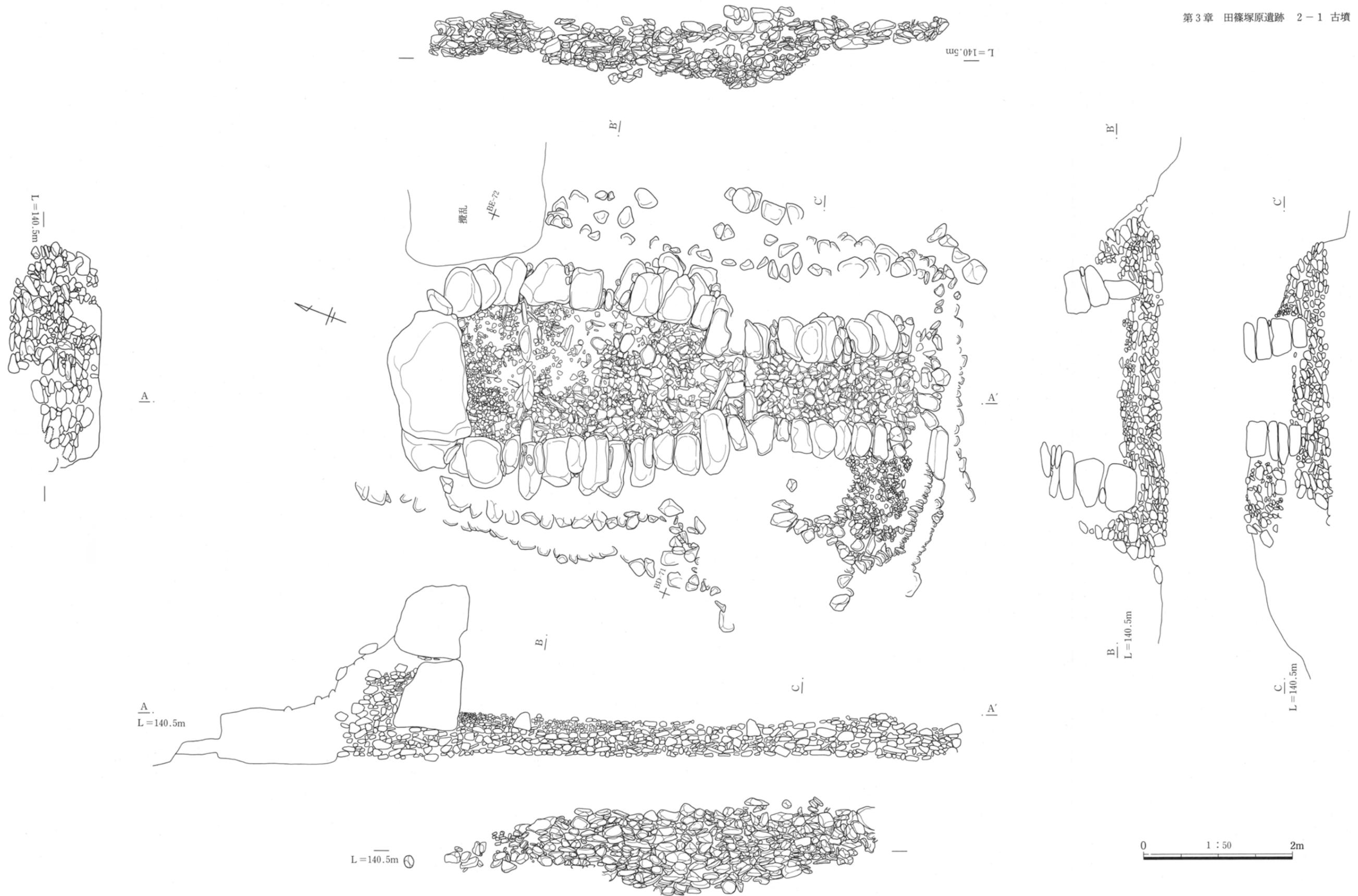
番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
4	Sm	60.0	51.0	27.0	170.0	
8	Po	66.0	29.0	23.0	85.6	
9		67.0	54.0	32.0	160.0	
10	Sm	51.0	24.0	25.0	55.5	
12	Sg	50.0	21.0	12.0	27.1	
13	Sm	80.0	33.0	20.0	86.0	
16	Pd	74.0	38.0	24.0	122.7	
17	Sm	65.0	23.0	30.0	105.8	
18	Pd	47.0	26.0	18.0	38.7	
20	Sm	57.0	34.0	29.0	95.4	
21	Sm	66.0	40.0	30.0	135.7	
22		28.0	8.0	7.0	2.5	12下
23		31.0	7.0	11.0	3.6	22下
24	Pd	71.0	36.0	37.0	132.2	
25		29.0	12.0	4.0	3.4	21右下
26	Sm	42.0	60.0	24.0	73.8	
28		28.0	11.0	8.0	4.4	17右
29		39.0	12.0	11.0	8.5	18右下
30		21.0	9.0	5.0	1.4	20右
31		24.0	13.0	5.0	2.7	18下
32	Sm	63.0	27.0	30.0	69.2	
44	Sm	64.0	95.0	48.0	380.0	
45		39.0	10.0	7.0	3.9	44上
47		25.0	11.0	7.0	3.2	48右
48		26.0	10.0	20.0	7.6	24下
49	Sm	52.0	77.0	60.0	320.0	
53		34.0	12.0	7.0	4.1	58右上
54		25.0	23.0	4.0	4.2	58左上
55		23.0	15.0	4.0	2.9	17下
57		32.0	36.0	18.0	4.5	55下
58	Sm	57.0	80.0	53.0	300.0	
59	Sm	53.0	60.0	39.0	190.0	
61		44.0	13.0	6.0	5.8	63上
63		37.0	19.0	6.0	7.2	59左上
65	Ch	68.0	33.0	27.0	130.0	
68	Sm	53.0	38.0	24.0	120.0	
72	Sm	61.0	40.0	21.0	120.0	
73	Di	25.0	15.0	4.0	3.6	72右
74	Sm	27.0	17.0	4.0	3.6	77左上
75	Sm	6.0	19.0	5.0	0.7	74右
76	Sg	21.0	10.0	5.0	1.6	75右
77	Ch	60.0	93.0	57.0	400.0	
87	Sm	36.0	15.0	10.0	6.2	77右上
89	Qp	52.0	18.0	13.0	20.3	58右下
90		79.0	97.0	52.0	550.0	
91	Sg	34.0	12.0	3.0	3.3	90右
93	Bm	24.0	8.0	5.0	1.6	49右下
95	Sg	33.0	7.0	6.0	2.5	98左上
97	Sg	45.0	12.0	8.0	7.6	65右下

98	Sm	40.0	12.0	10.0	8.8	102右上
100	Sg	28.0	11.0	6.0	3.1	98右
102	Sm	63.0	70.0	67.0	500.0	
107	Ss	28.0	14.0	10.0	4.7	108右上
108	Sm	69.0	75.0	70.0	450.0	
178	Sm	55.0	23.0	11.0	21.2	
180	Af	48.0	27.0	17.0	38.3	
182	Sg	50.0	27.0	16.0	31.5	
183	Sm	50.0	40.0	30.0	87.1	
184	Sm	49.0	30.0	19.0	35.5	
186	Sg	31.0	12.0	5.0	3.5	216左
189	Sm	42.0	11.0	5.0	4.9	192右上
190	Sm	30.0	10.0	7.0	3.2	248左上
192	Sm	51.0	26.0	20.0	36.0	
195	Sg	54.0	18.0	20.0	22.3	192左
196	Sf	58.0	35.0	16.0	55.5	
199	Sm	56.0	34.0	22.0	52.0	
203	Sm	44.0	47.0	24.0	80.0	
205	Sm	56.0	43.0	29.0	71.1	
206	Sm	12.0	10.0	4.0	0.8	205左
207	Sm	34.0	13.0	4.0	4.5	206左
210	Bm	18.0	9.0	4.0	1.3	178左
211	Sm	21.0	21.0	8.0	4.9	
213	Sm	53.0	33.0	9.0	23.0	
215	Ry	43.0	22.0	11.0	19.8	216右上
216	Pd	65.0	34.0	28.0	135.0	
217	Sm	47.0	21.0	20.0	33.4	
218	Pd	90.0	37.0	24.0	185.0	
219	Sm	82.0	38.0	36.0	160.0	
220	Sm	55.0	39.0	18.0	63.8	
221	Sm	54.0	28.0	12.0	22.8	
222		80.0	56.0	32.0	240.0	
223	Sm	24.0	7.0	5.0	1.1	224右
224	Sm	51.0	25.0	8.0	22.2	
225	Sm	26.0	11.0	5.0	2.7	224下
227		67.0	33.0	27.0	76.8	
229	Sg	31.0	13.0	10.0	6.2	230上
230	Sm	64.0	37.0	24.0	77.3	
232	Sg	24.0	7.0	8.0	2.3	221左
238	Sm	18.0	15.0	6.0	1.7	230下
241	Sm	45.0	24.0	13.0	25.0	
242	Sg	41.0	16.0	8.0	9.4	241下
243	Sm	18.0	9.0	4.0	1.2	227左上
247	Sm	19.0	7.0	2.0	0.5	216右下
248	Ch	55.0	43.0	26.0	80.5	
250	Sm	50.0	43.0	25.0	84.4	
251	Sm	22.0	10.0	4.0	1.4	250右
315	Sm	40.0	50.0	20.0	130.0	
316	Sm	53.0	44.0	19.0	140.0	

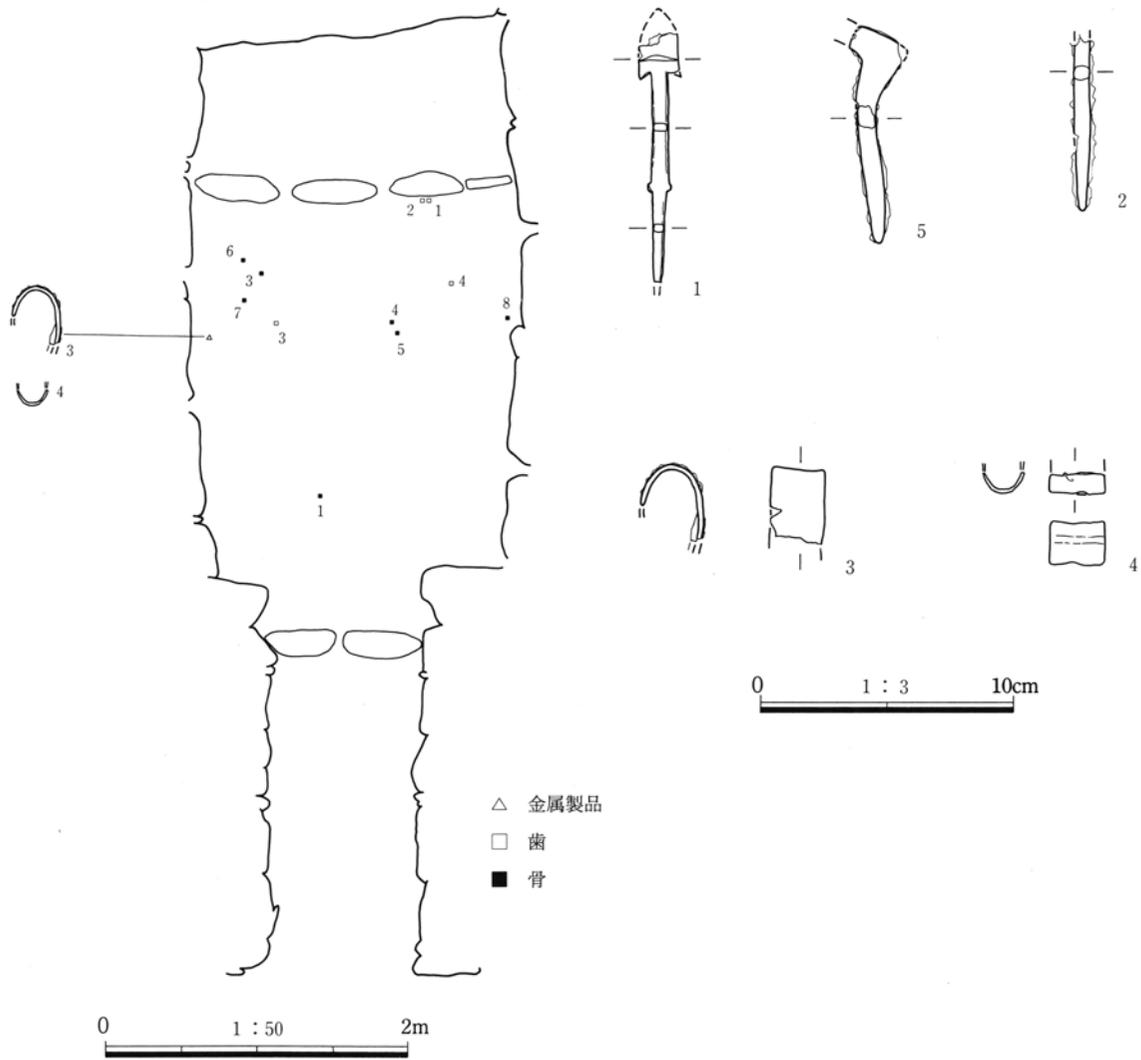
単位cm、重さはkg



第90図 5号墳基壇敷石平面図



第91図 5号墳石室平面・断面図及び裏込め立面図



第92図 5号墳遺物出土状態及び出土遺物

には棒状の片岩系の石も混じっている。この敷石の上に石室を築くのだが、第91図を見ると、側壁の断面図を見ても分かるように最下段の側壁を除いて2段目からはやや内傾して構築している。裏込めであるが、最下段の石の裏込めとその被覆はしっかりとしているが、2段目からは簡単な造りになっている。ただ、裏込め被覆に関しては、2・3段目に当たる被覆が崩壊している所が多く、断定はできない。

遺物出土状況 (第92図)

遺物は原位置で確認できたのは刀装具 (92図3) が一点、右側壁下中央寄りで確認されたのみである。他に遺物としては同じ刀装具 (92図4)、長頸鎌 (92

図1)、釘 (92図2・5) である。それと歯・人骨が出土し、宮崎氏の鑑定・報告によれば、歯は同一個体と考えられるもので青年期前半の男性人物が想定されている。人骨は細片で同定はしていない。いずれにせよ、歯・人骨とも残念ながら奥壁下の埋葬空間内では無く、玄室中央部に散乱した状況で出土した。あるいは、動かされた可能性があるかもしれないが、少なくとも一体は埋葬者が確認できた。

6号墳 (富岡市第10号墳)

調査前の現状と調査経過 (第93図)

5号墳の西側、県営住宅の脇に保存される形で残存していた。高さ約2m程の不定形であり、石室側壁と思われる石が一部露出していた。断ち割っていくと、As-A軽石や地山の小石などが積み上げられ

ており、これらを取り除くと、石室、葺石などが確認できた。

墳丘 (第94・95図)

墳丘は後世における攪乱を受けており、天井石は残存せず、盛土も一部が残るのみである。墳丘の構築は、古墳築造面である旧地表面の石室部分に、約

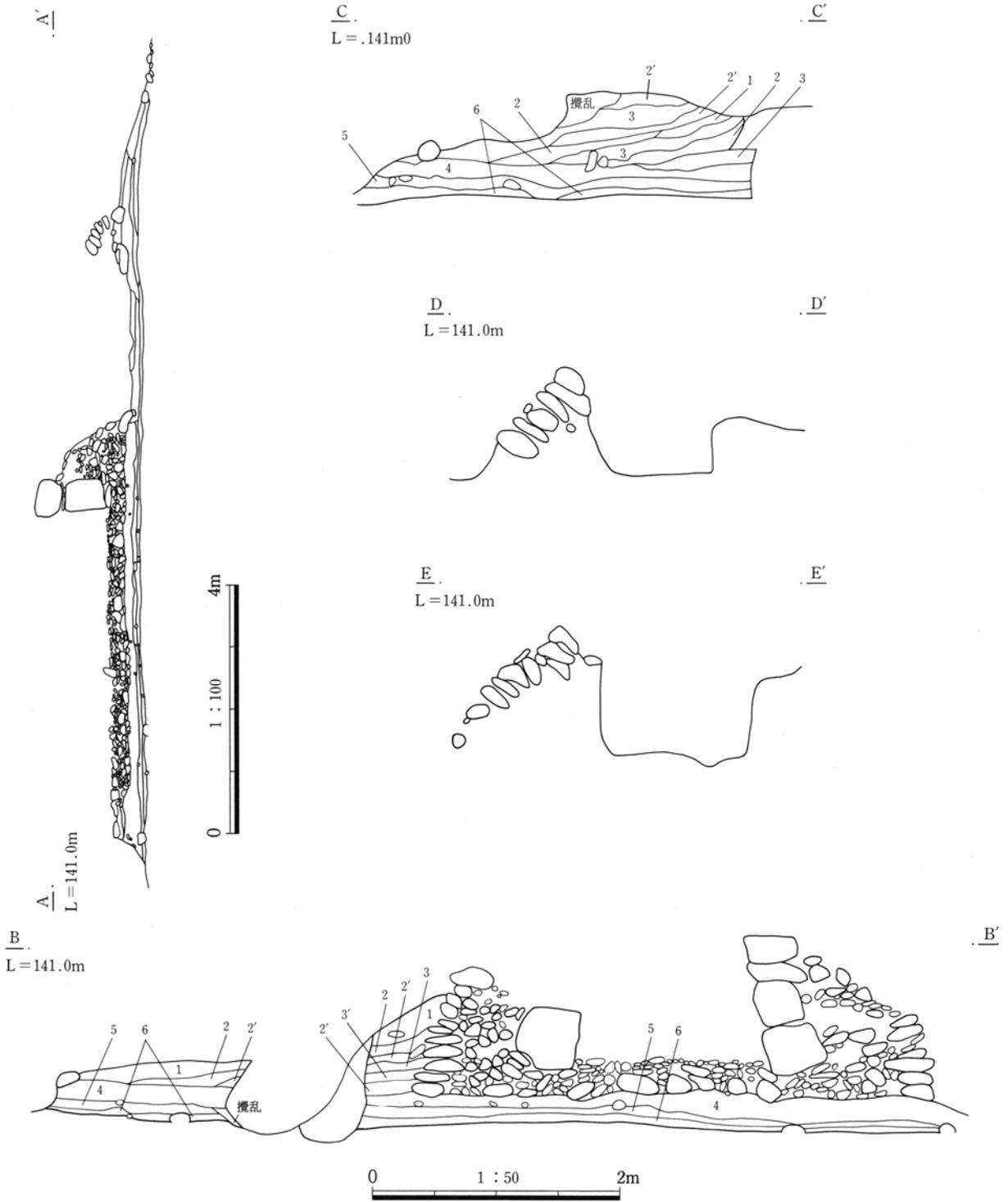


第93図 6号墳現況図

2-1 古墳



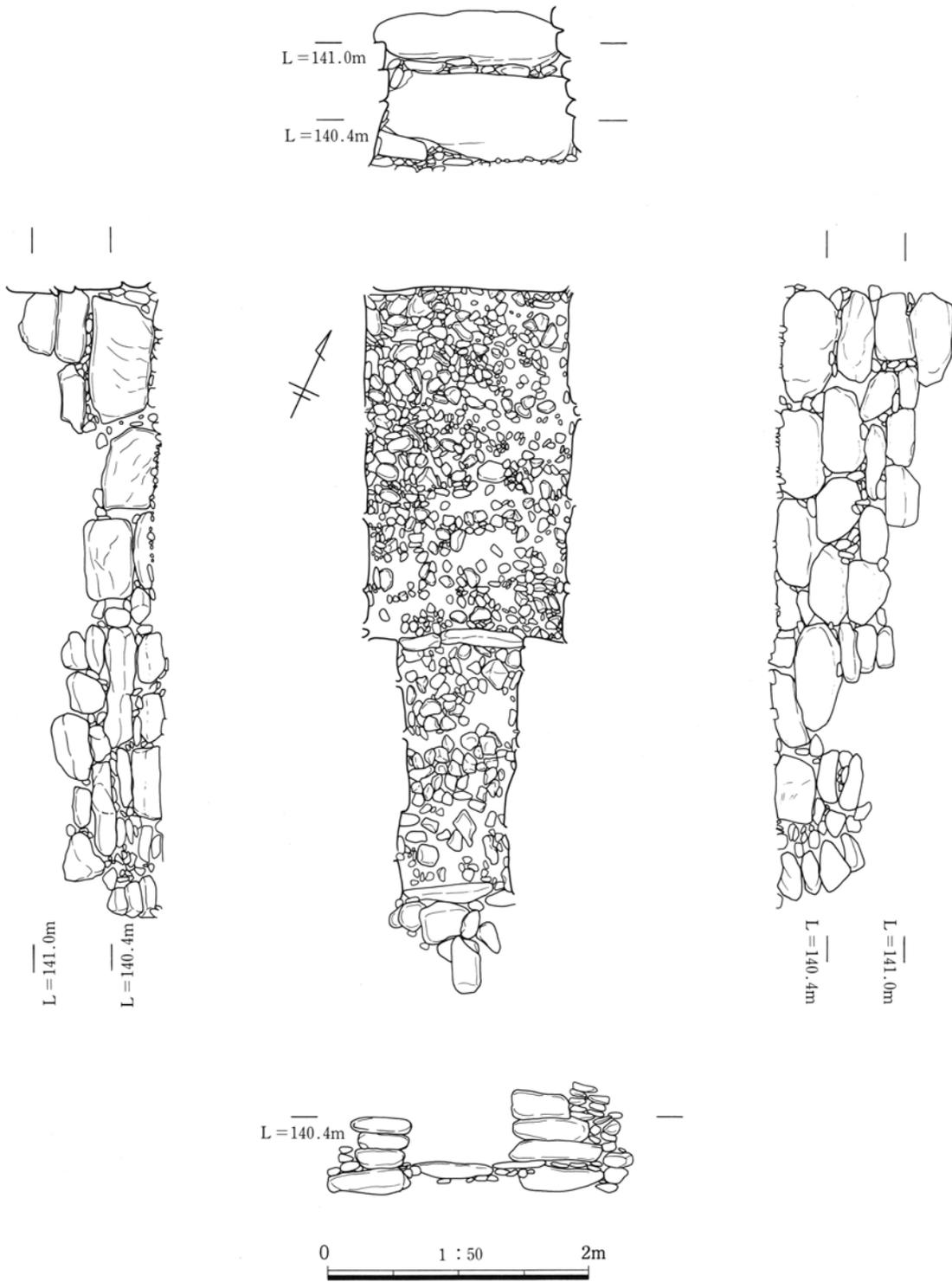
第94図 6号墳全体図



第95図 6号墳墳丘断面図

- 1 黒褐色土。非粘性土。
- 2 にぶい黄褐色土。
- 2' 2層に比して色調やや暗い。
- 3 黒褐色土。As-C軽石混入。非粘性土。
- 3' 3層に比して色調やや暗い。
- 4 黒褐色土。古墳築造面。
- 5 灰黄褐色土。シルト質土。
- 6 黄褐色土。ローム質土。

20cmの礫を敷き詰め、基礎としている。旧地表面を整地しているかは不明瞭であった。そして、この基礎の上に石室の石を乗せ、小石で裏込めをし、やや大きめの石で裏込めを支援、盛土をしていく。盛土は黒褐色土と黄褐色土(ローム質土)が互層に積み上



第96図 6号墳石室展開図

げられていた。墳丘規模は、径約12mと推定される円墳であり、葺石が羨門やや西側の位置より約半周する形で残存していた。周堀は確認できず、存在しなかったか、掘り込みが浅く残存していないかと思われるが不明瞭である。

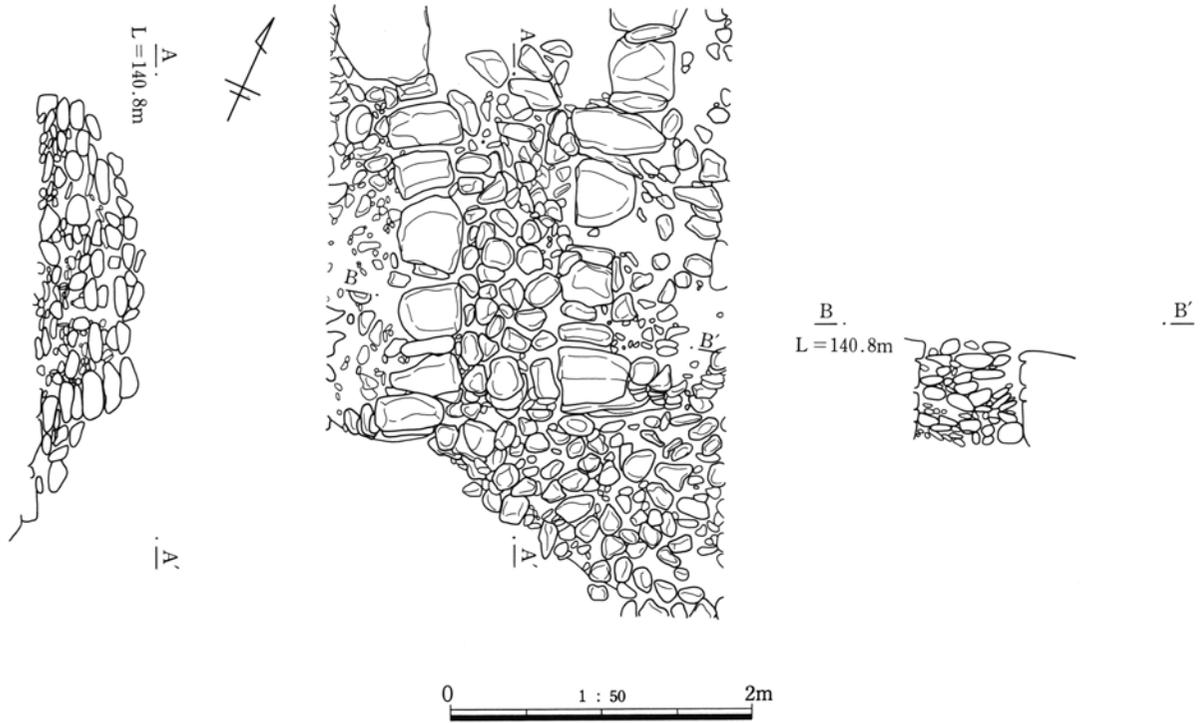
石室 (第96~101・103図)

石室は奥壁・側壁ともにある程度遺存している。以下、石室のデータを提示する。

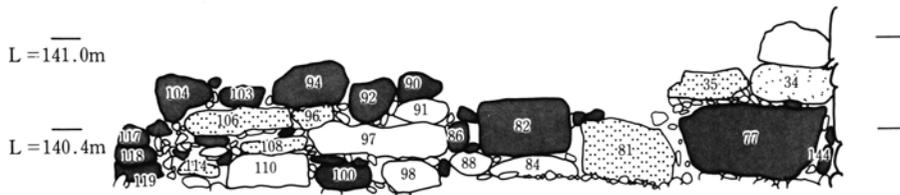
石室長 (中央部) 4.7m

玄室長 (中央部) 2.65m (左右壁) 2.7m

第3章 田篠塚原遺跡



第97図 6号墳羨道閉塞状況

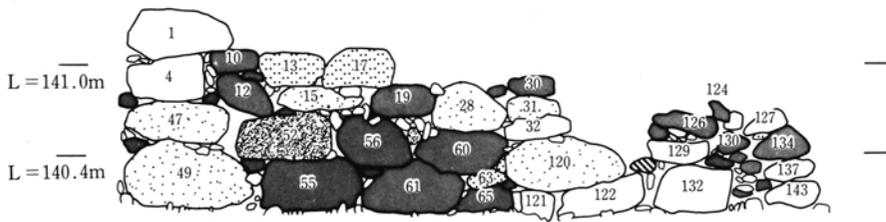


第98図 6号墳石室石材使用状況(1)

番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
34	Ss	72.0	60.0	22.0	200.0	
35	Tw	57.0	45.0	20.0	110.0	
67	Sm	10.0	6.0	4.0	0.5	34中下
77	Sm	42.0	112.0	50.0	385.0	
79	Sm	16.0	13.0	3.0	0.9	81左上
80	Se	29.0	10.0	7.0	3.2	82右
81	Tw	51.0	73.0	56.0	250.0	
82	Sm	73.0	68.0	37.0	250.0	
84		49.0	63.0	32.0	195.0	
85	Sm	28.0	14.0	9.0	6.7	86上
86	Sm	53.0	18.0	17.0	35.7	
87	Sm	22.0	10.0	3.0	1.3	86右下
88		72.0	31.0	16.0	64.8	
89	Sm	48.0	22.0	8.0	17.0	88左
90	Sm	52.0	26.0	14.0	30.5	
91		79.0	31.0	16.0	120.0	
92	Sm	48.0	38.0	26.0	110.0	
94	Sm	56.0	45.0	17.0	78.7	
96	Tw	54.0	33.0	12.0	35.8	
97		90.0	41.0	21.0	115.6	
98		84.0	39.0	34.0	185.0	

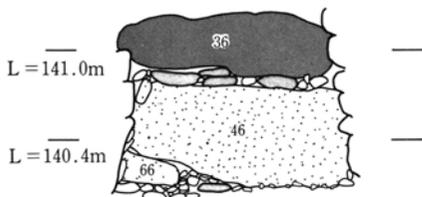
99	Sm	23.0	8.0	4.0	1.3	100右上
100	Sm	61.0	39.0	32.0	120.7	
101	Sm	22.0	22.0	5.0	3.8	100左上
102	Sg	36.0	11.0	6.0	4.2	104右上
103	Sm	44.0	35.0	14.0	41.2	
104	Sm	50.0	35.0	17.0	41.0	
105	Sg	35.0	16.0	11.0	10.9	104左下
106	Tw	73.0	50.0	22.0	150.0	
107	Sm	23.0	11.0	4.0	1.7	106左下
108	Tw	47.0	44.0	9.0	29.5	
109	Sm	15.0	10.0	5.0	1.4	108右上
110		57.0	49.0	33.0	91.1	
112		45.0	23.0	9.0	15.9	107下
113	Sm	16.0	6.0	5.0	1.0	110左上
114	Tw	53.0	32.0	11.0	29.8	
117	Sm	45.0	24.0	10.0	24.8	
118	Sm	43.0	26.0	11.0	25.1	
119	Sm	41.0	29.0	18.0	35.6	
144	Sm	54.0	25.0	10.0	17.3	
145	Sm	43.0	13.0	12.0	9.3	144上

単位cm、重さはkg



番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1		78.0	45.0	35.0	85.0	
4		52.0	52.0	27.0	99.0	
8	Sm	18.0	9.0	8.0	1.9	4右下
10	Sm	51.0	36.0	12.0	37.8	
11	Sm	13.0	11.0	5.0	0.9	
12	Sm	50.0	46.0	29.0	107.7	10右下
13	Tw	45.0	49.0	22.0	67.5	
15	Ss	49.0	60.0	17.0	64.3	
16	Sg	14.0	13.0	3.0	1.1	15左下
17	Tw	38.0	46.0	17.0	41.2	
18		16.0	12.0	3.0	1.2	17下
19	Sm	44.0	55.0	24.0	84.7	
21		25.0	11.0	6.0	2.6	15中下
22		14.0	11.0	6.0	1.4	19中下
23	Pd	41.0	18.0	16.0	14.0	56右
27		34.0	10.0	7.0	3.2	19右上
28	S	42.0	50.0	30.0	87.8	
29	Sm	38.0	12.0	5.0	4.2	28右上
30	Sm	64.0	31.0	22.0	48.6	
31	Ss	30.0	51.0	17.0	34.8	
32		80.0	47.0	12.0	110.0	
45	Sm					4
47	Ss	78.0	76.0	28.0	250.0	左下
48	Sm	51.0	17.0	13.0	20.0	
49	S	100.0	65.0	55.0	303.0	47左下
52	Po	69.0	51.0	35.0	200.0	
53	Sm	31.0	18.0	10.0	8.0	
54		22.0	10.0	6.0	2.0	52左下
55	Sm	73.0	61.0	42.0	235.0	53下

56	Sm	54.0	44.0	35.0	160.0	
58	Sg	46.0	18.0	4.0	9.1	56下
60	Sm	44.0	63.0	32.0	180.0	
61	Sm	78.0	54.0	36.0	235.0	
62	Af	30.0	10.0	6.0	3.1	60右
63	Af	55.0	30.0	7.0	20.5	
64	Sm	14.0	14.0	3.0	1.0	63右下
65	Sm	63.0	45.0	27.0	121.0	
120	Ss	85.0	45.0	32.0	100.0	
121		71.0	36.0	27.0	123.3	
122		57.0	63.0	38.0	195.0	
123	Ba	52.0	22.0	17.0	27.5	122右上
124	Sm	23.0	14.0	4.0	2.7	
125		38.0	16.0	8.0	7.5	124右下
126	Sm	42.0	38.0	14.0	32.0	
127		46.0	27.0	11.0	29.4	
128	Sm	35.0	15.0	7.0	5.4	126左下
129		45.0	36.0	19.0	42.2	
130	Sm	38.0	20.0	13.0	12.2	
131	Sm	23.0	21.0	6.0	5.1	130左下
132		50.0	52.0	45.0	157.8	
133	Tw	23.0	13.0	2.0	1.5	127下
134	Sm	46.0	34.0	20.0	59.1	
135	Sm	40.0	15.0	6.0	7.5	130右下
136	Sm	44.0	14.0	10.0	7.4	134左下
137		64.0	33.0	13.0	57.3	
139	Sm	22.0	11.0	7.0	3.4	137左下
141	Sg	26.0	11.0	4.0	2.1	
143		72.0	39.0	22.0	84.3	



番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
36	Ch	160.0	68.0	48.0	500.0	
38	Ss	38.0	15.0	6.0	7.2	46左上
39	Sm	37.0	20.0	7.0	11.6	38右
40	Sm	22.0	12.0	3.0	2.1	41上
41	Sm	24.0	30.0	4.0	6.1	39右
43	Sm	27.0	8.0	7.0	3.0	
46	S	154.0	79.0	50.0	650.0	
66	S	42.0	28.0	20.0	28.2	
158	Sm	43.0	28.0	12.0	19.5	66右

第99図 6号墳石室石材使用状況(2)

第3章 田篠塚原遺跡

玄室幅(中央・奥壁) 2.6m (玄門) 1.5m
 羨道長(中央部) 2.05m (左右壁) 2.1m
 羨道幅(玄門) 0.95m (羨門) 0.85m
 石室開口方向 N-22°-W

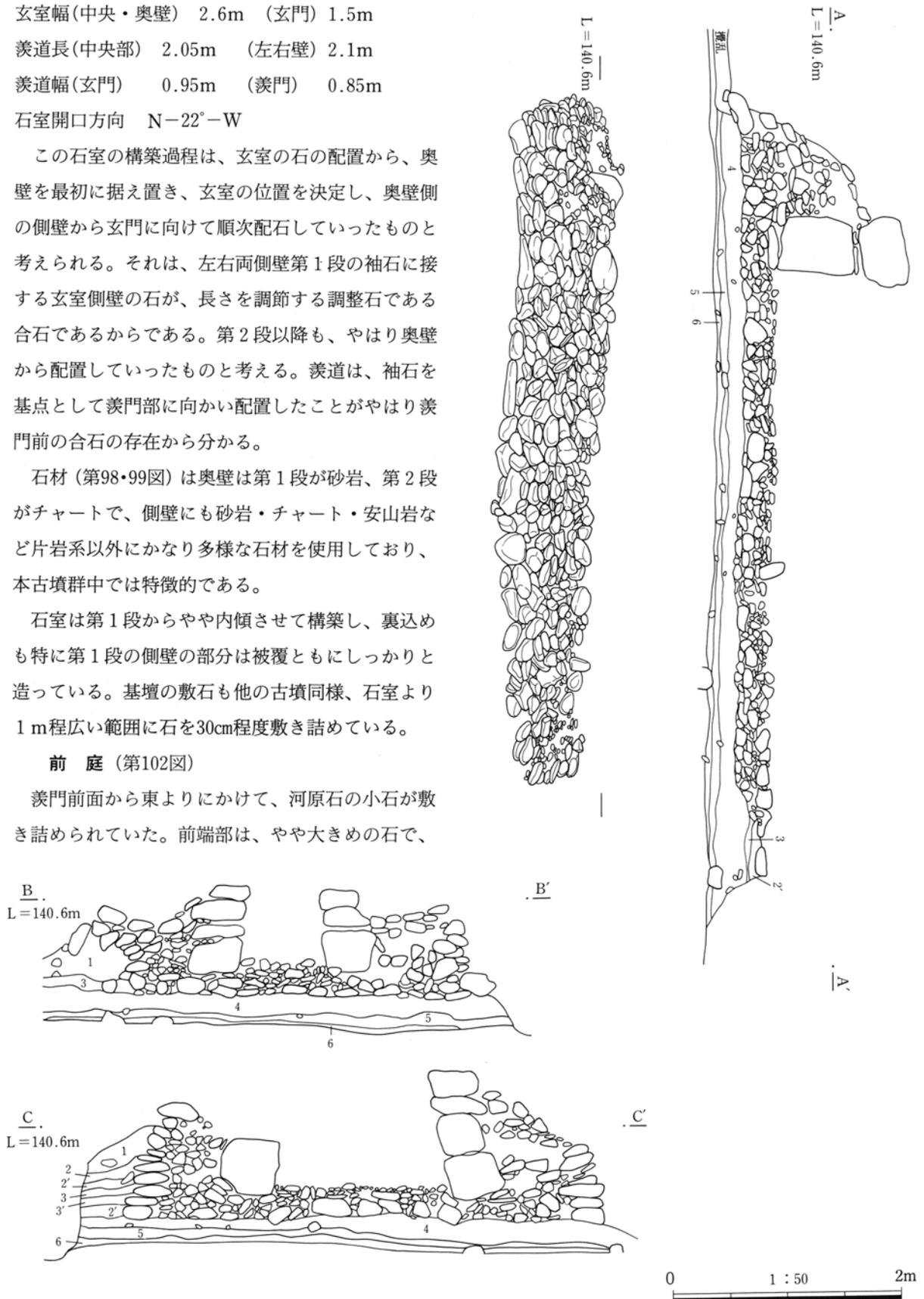
この石室の構築過程は、玄室の石の配置から、奥壁を最初に据え置き、玄室の位置を決定し、奥壁側の側壁から玄門に向けて順次配石していったものと考えられる。それは、左右両側壁第1段の袖石に接する玄室側壁の石が、長さを調節する調整石である合石であるからである。第2段以降も、やはり奥壁から配置していったものとする。羨道は、袖石を基点として羨門部に向かい配置したことがやはり羨門前の合石の存在から分かる。

石材(第98・99図)は奥壁は第1段が砂岩、第2段がチャートで、側壁にも砂岩・チャート・安山岩など片岩系以外にかなり多様な石材を使用しており、本古墳群中では特徴的である。

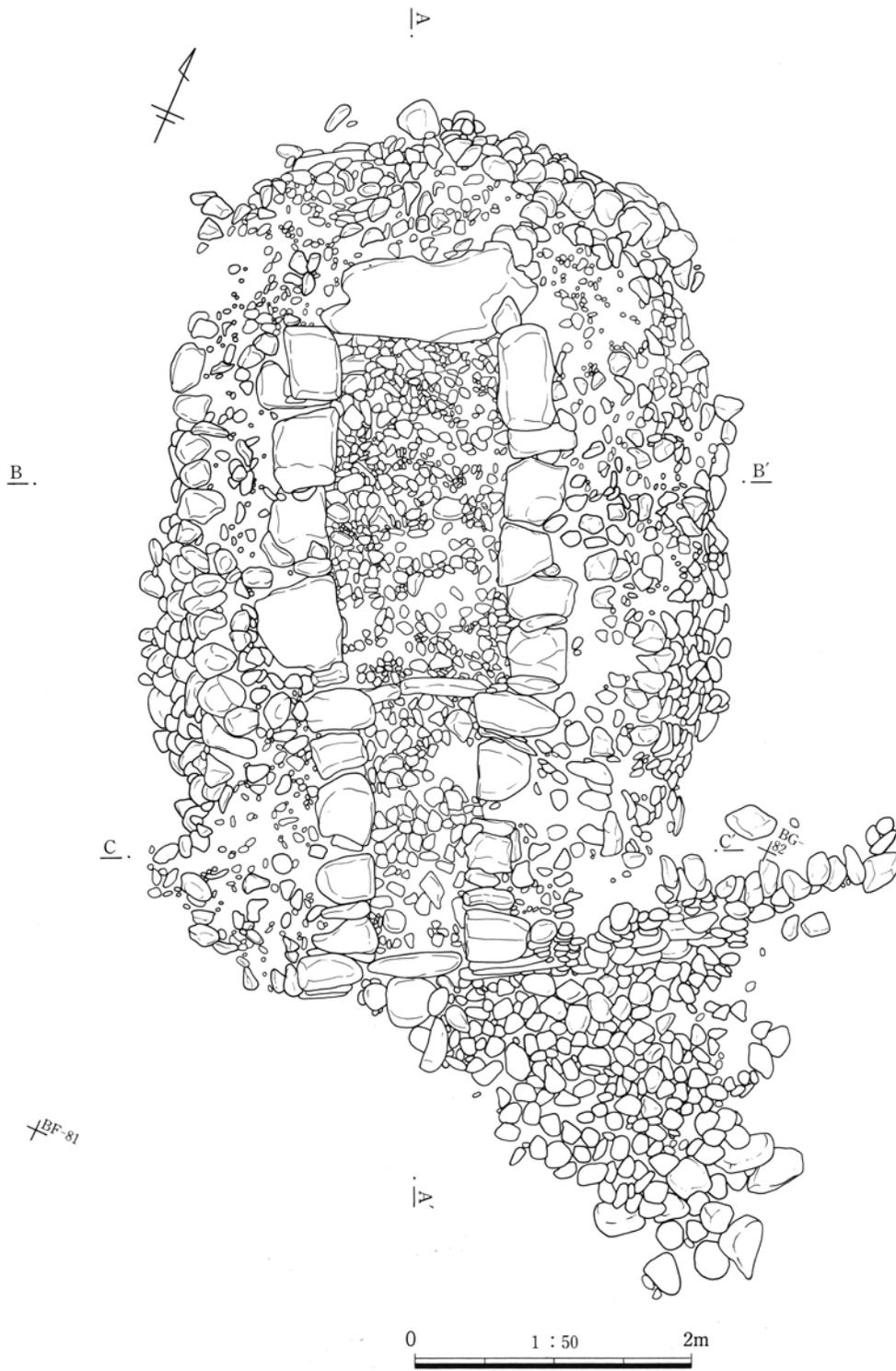
石室は第1段からやや内傾させて構築し、裏込めも特に第1段の側壁の部分は被覆ともにしっかりと造っている。基壇の敷石も他の古墳同様、石室より1m程広い範囲に石を30cm程度敷き詰めている。

前庭(第102図)

羨門前面から東よりにかけて、河原石の小石が敷き詰められていた。前端部は、やや大きめの石で、



第100図 6号墳石室断面図及び裏込め立面図



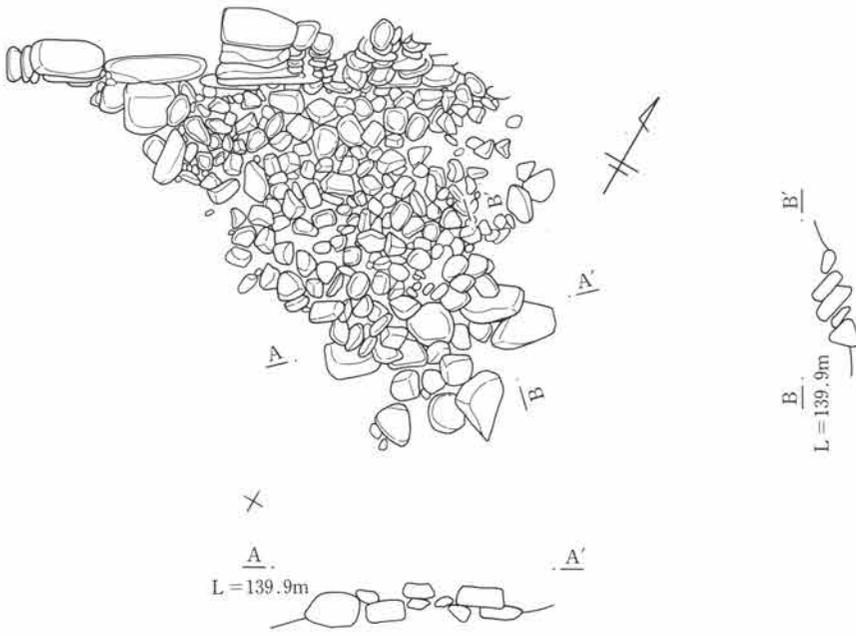
第101図 6号墳石室平面図

墳丘に向けて斜めに突き刺す形で配置されていた。

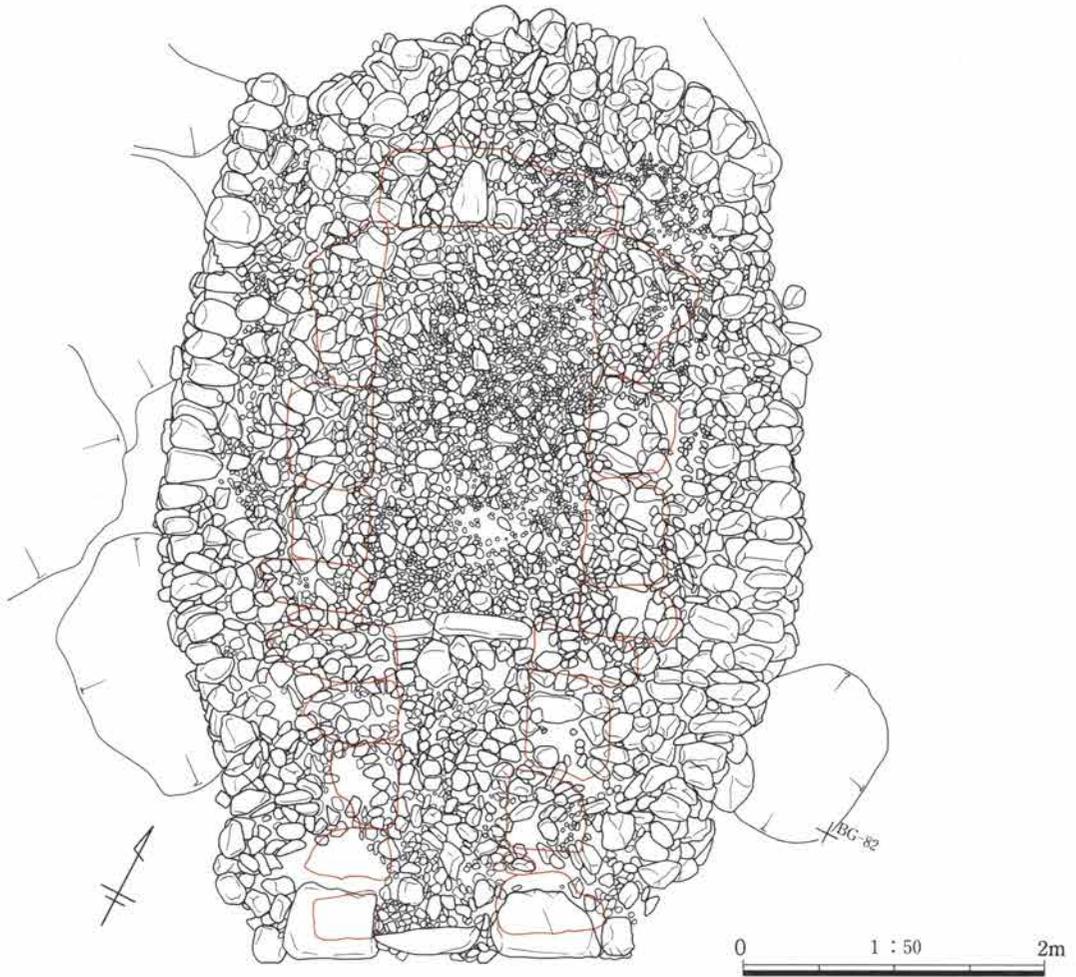
遺物出土状況 (第104図)

玄室内からは人骨片、耳環、刀子、大刀片などが出土している。人骨片は玄室中央部よりやや北側に

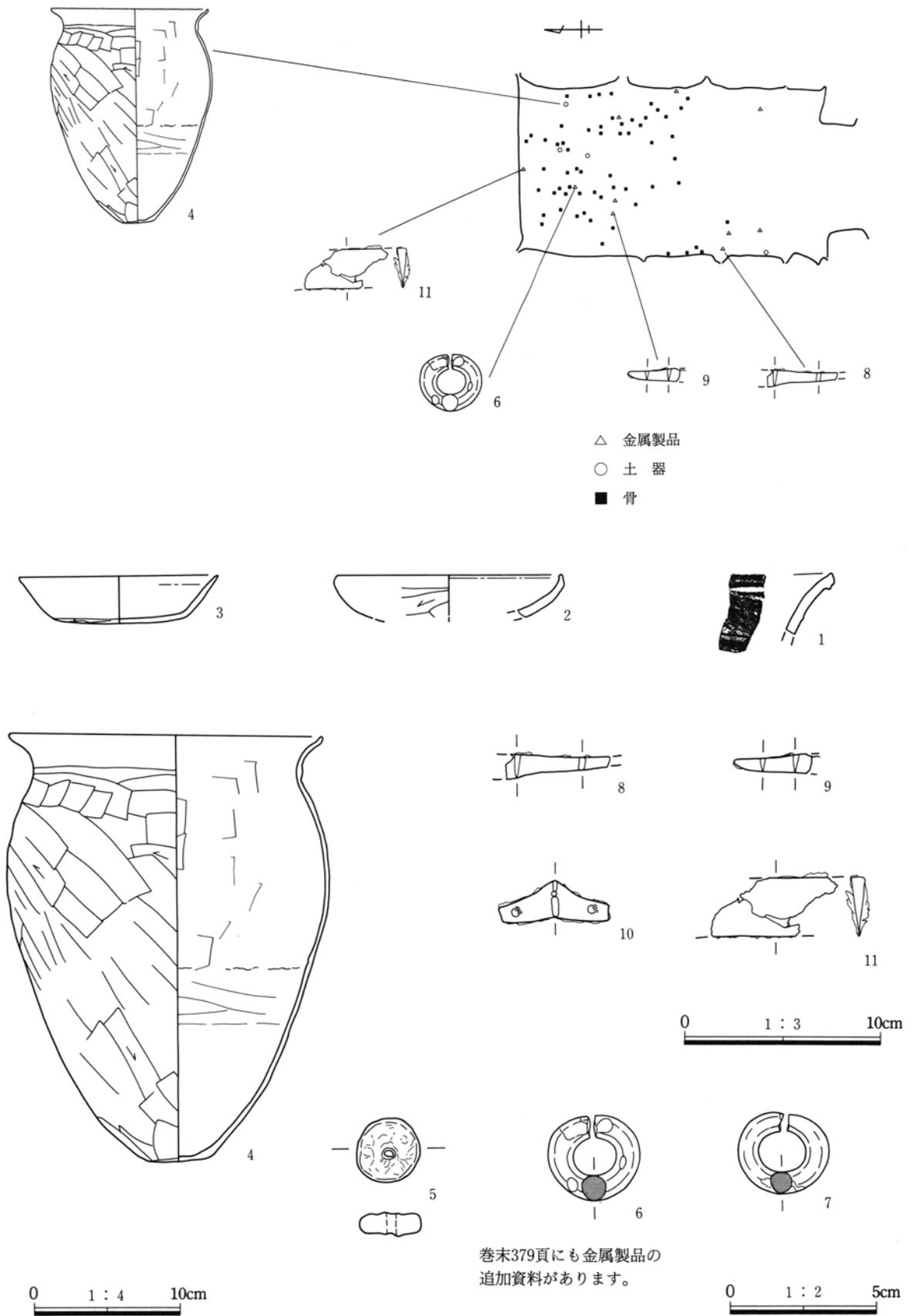
かけて多く出土し、若い個体の焼骨である。歯は未成年のもので出ている。4の甕は8～9世紀代のものであり、石室の再利用に伴う遺物と考えられ、先の焼骨との関係が想定される。



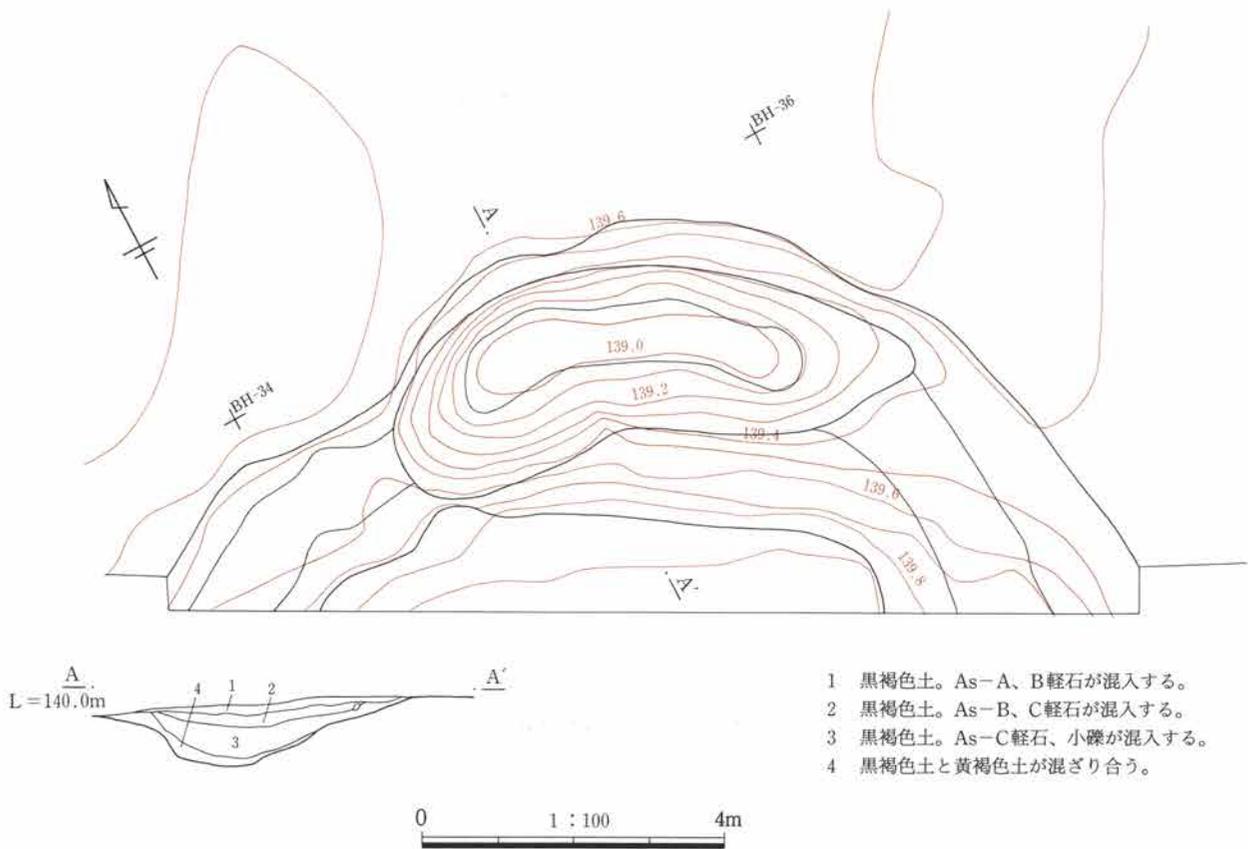
第102図 6号墳前庭



第103図 6号墳基壇敷石平面図



第104図 6号墳遺物出土状態及び出土遺物



- 1 黒褐色土。As-A、B軽石が混入する。
- 2 黒褐色土。As-B、C軽石が混入する。
- 3 黒褐色土。As-C軽石、小礫が混入する。
- 4 黒褐色土と黄褐色土が混ざり合う。

第105図 7号墳全体図

7号古墳 (富岡市無記載古墳)

調査前の現状と調査経過

調査前は、ほとんど、目につく程の土地の盛り上がりも無く、古墳があるとは全く想定できなかった。表土剥ぎをしている段階で埴輪の集中出土をみたので、精査すると円弧状の堀跡と考えられる黒色帯が出たので、埴輪を有する古墳として調査をすることになった。

調査は、調査区の南端にかかってしまうので、その地点と、主軸に直行する地点で堀の横断面をとることにして掘り下げ始めた。埴輪とともに須恵器も出土したが、いずれもかなり、堀底からは高い地点から出土した。堀底まで掘り上げ、遺物の位置を記録してから取り上げた。墳丘は、ほとんど削平されてあまり確認できなかった。

墳丘

墳丘は前述の通り、残念ながらほとんど確認できなかった。おそらく、後世の畑等の開墾・耕作に伴う作業で削平されてしまったものと考えられる。そしてその時、表土掘削時に出土した埴輪等が耕作等で動かされたものと考えられる。

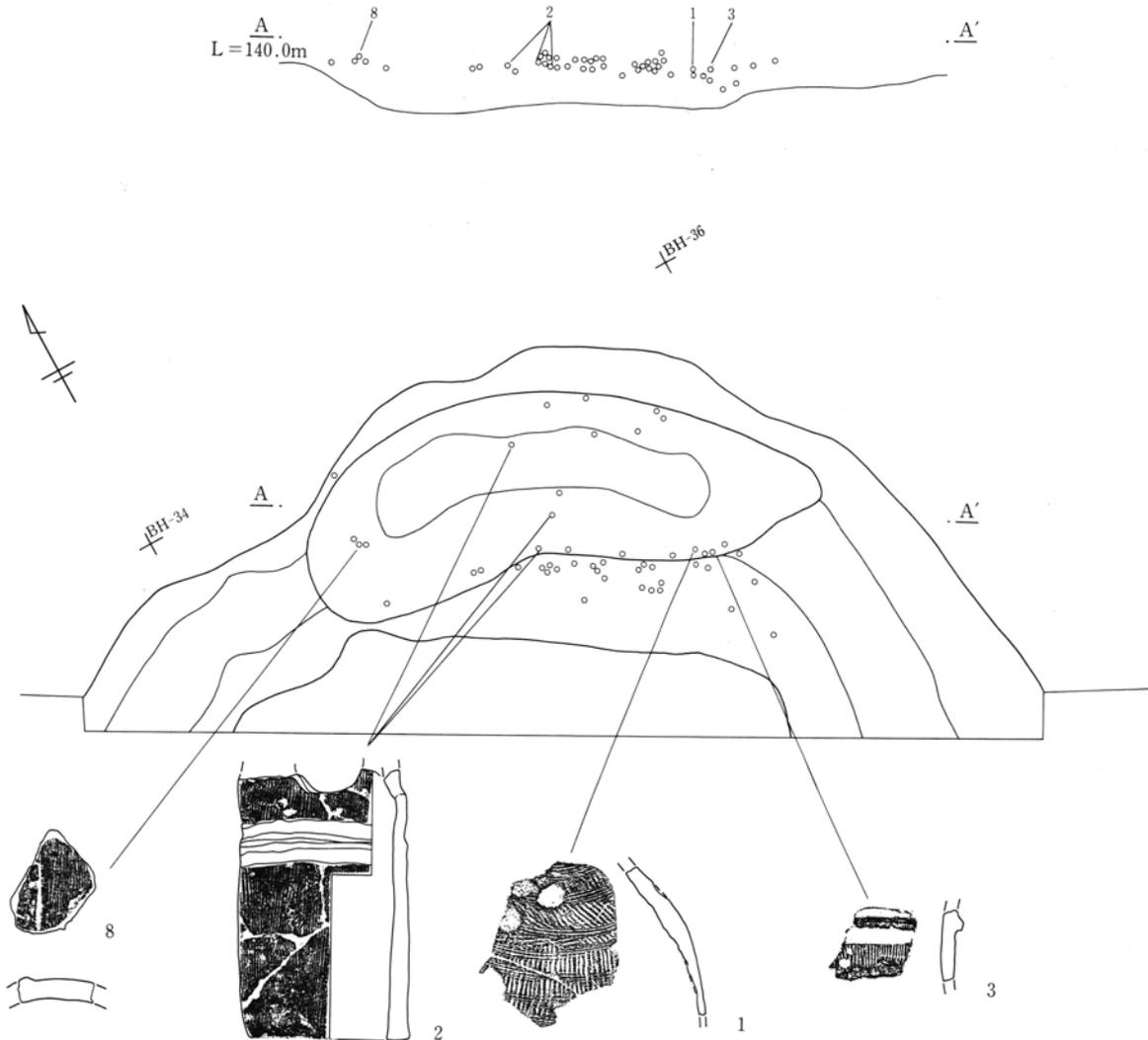
周堀 (第105図)

周堀は、平面形は円弧状を呈しており、おそらく円墳の堀であろう。堀は幅が広がっている所と狭くなっている所があり、堀幅の広い所で4m、狭い所で2mで、かなり変化がある。堀底も北側に一部深くなっている所があり、その深い所で、現状の確認面からすると1mあり、浅い所だと30cmほどでこれもかなり差がある。堀の内径は現状で7m、外径は14mある。ただし、中心で計測していないのでこれより径が大きくなる可能性が高い。

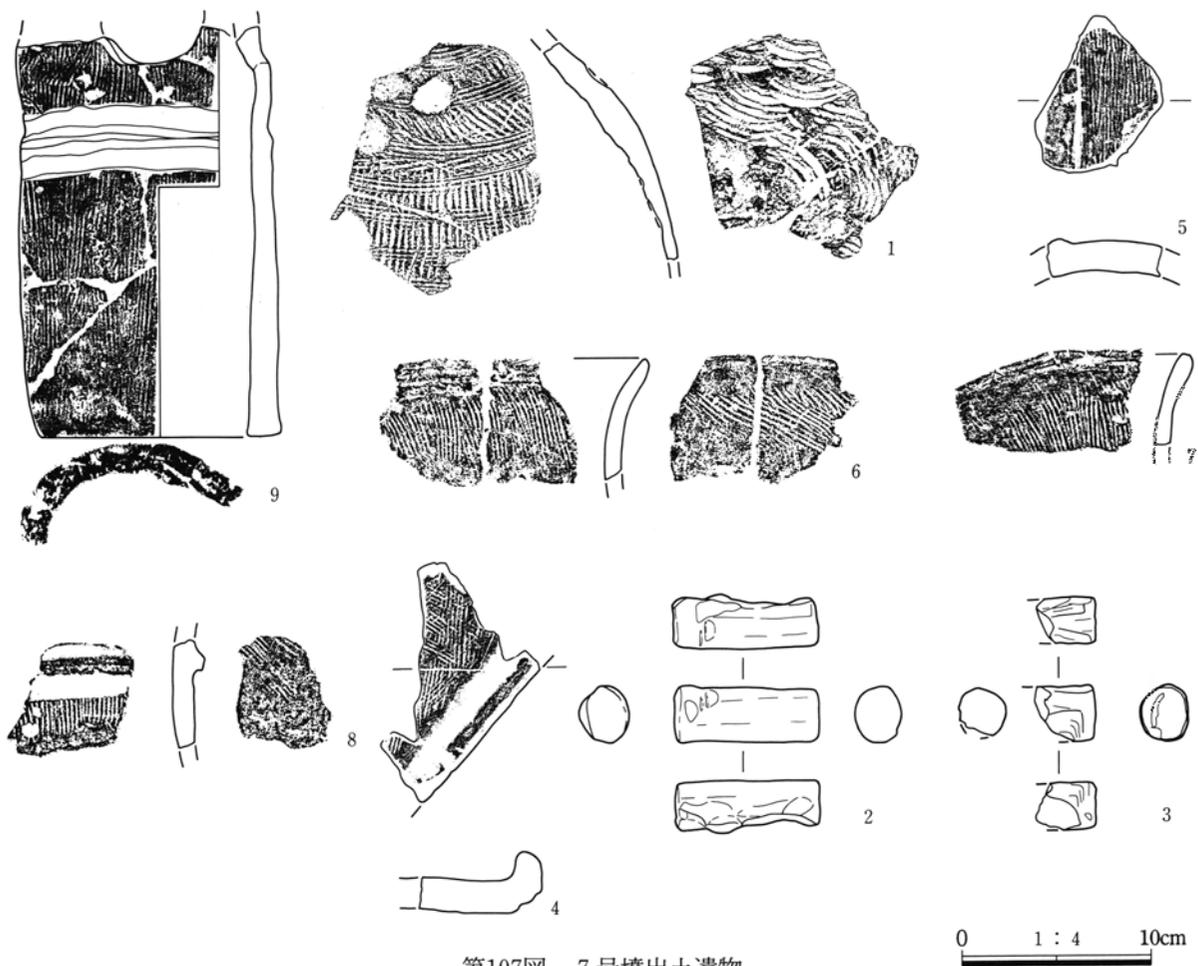
遺物の出土状況 (第106・107図)

遺物は埴輪と須恵器である。遺物の出土は前述したように、堀底からするとかなり高い地点からの出土をみる。おそらく、埴輪設置後、ある一定期間を経た段階で埴輪が崩落したため、少し堀底から浮いた状況で出土したのであろう。埴輪は円筒埴輪がほとんどであり(107図6~9)、第一段の長い一次タテハケ調整を施したものであり、透しは、円形である。他に形象埴輪があり(107図2~5)、2・3は家形埴輪の堅魚木を表現したものであり、家形埴輪があったことがわかる。また、4は盾形埴輪の一部と考えられ、5は今一つはっきりしないが形象埴輪の一部であり、この古墳に円筒埴輪以外に家・盾な

どの器材埴輪が置かれていたことがわかる。須恵器は甕の肩部の破片である(107図-1)。須恵器と埴輪からみた古墳の年代は6世紀後半と考えられる。現在、田篠塚原古墳群は、分布調査の段階及び、団地造成に伴う調査では埴輪の出土は認められておらず、7世紀代の古墳群と考えられてきたが、今回の調査で確実に6世紀後半の埴輪を伴う古墳が確認されたこと、及び、他の古墳の調査や表土掘削の際に数十点の埴輪の出土をみており、この7号墳以外にも6世紀代に入る可能性のある古墳があるものと想定される。今後、さらに詳細な分布調査などを通して田篠塚原古墳群の群形成の過程が明らかになることを期待する。



第106図 7号墳遺物出土状態



第107図 7号墳出土遺物

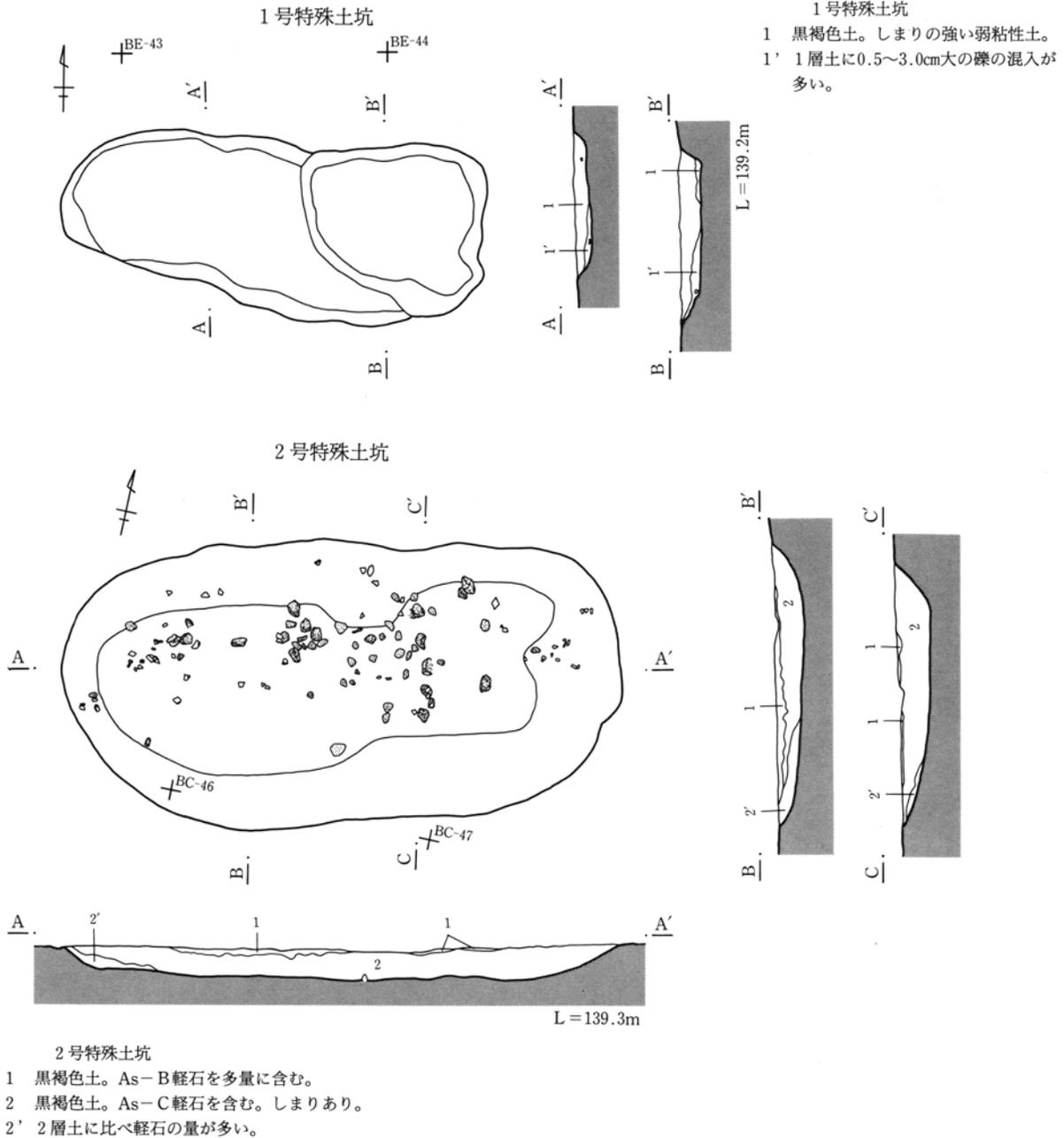
まとめ

本古墳は田篠塚原古墳群では現在の所最古に比定される6世紀後半の古墳である。周堀しか残っておらず、墳丘はすべて削平されている。周堀から円筒埴輪・家、盾などの器材埴輪及び須恵器が出土した。

2 特殊土坑 写真 PL-28

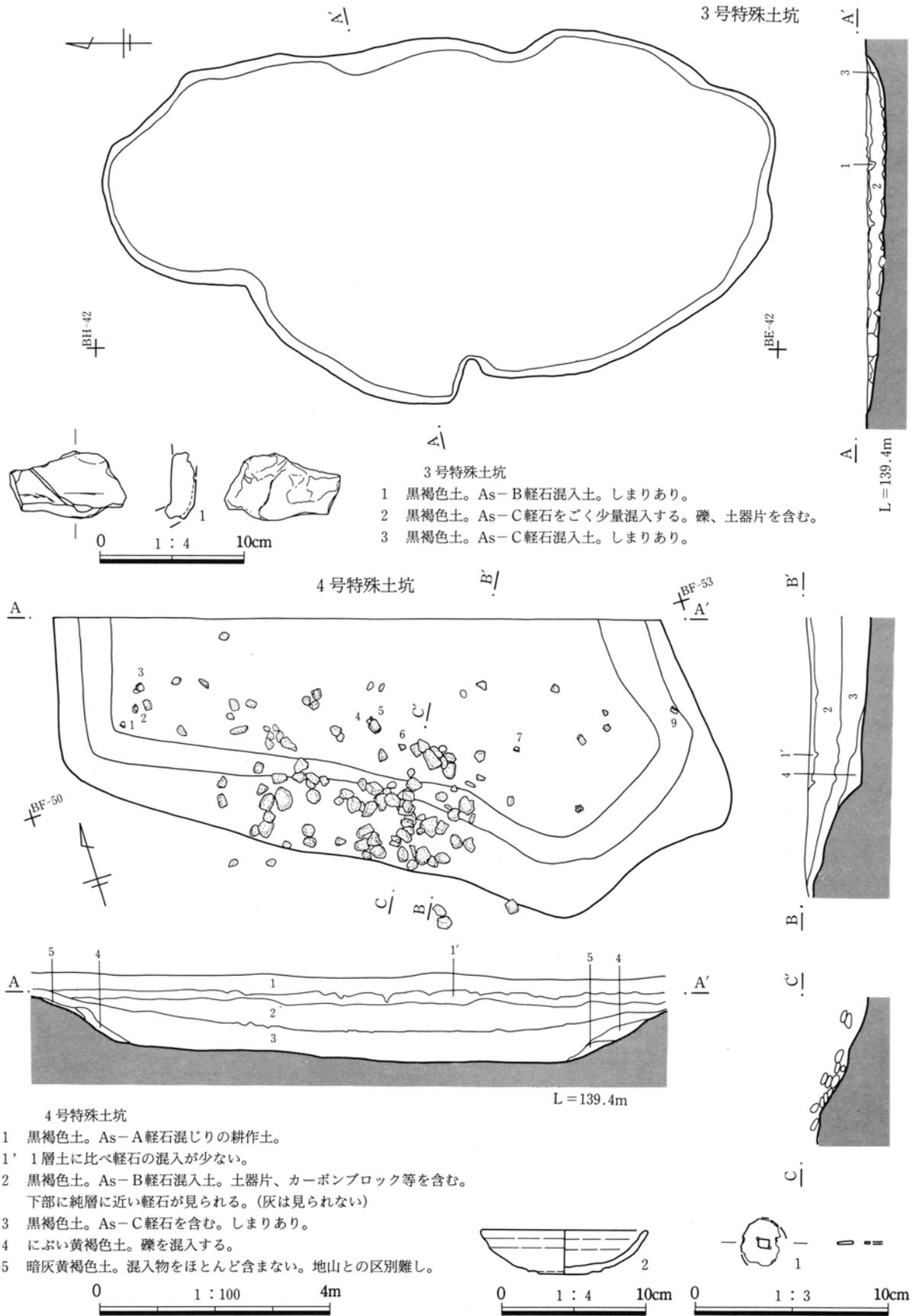
本遺跡で確認された土坑の中で、5基の土坑を特殊土坑とした。特殊土坑は、かなりの規模を持ち、長軸で6~11m以上、短軸でも2.5~6m以上ある。また、古墳周辺にある程度集中し位置している。

本遺跡で調査した古墳では、1号、7号墳はある程度の周堀を有するが、2号墳は僅かに確認できる程度、他の古墳は持たなかったのではないかと考えられる。これらのことから、特殊土坑は古墳築造時の盛土用採掘坑かつ採石坑とも考えられる。

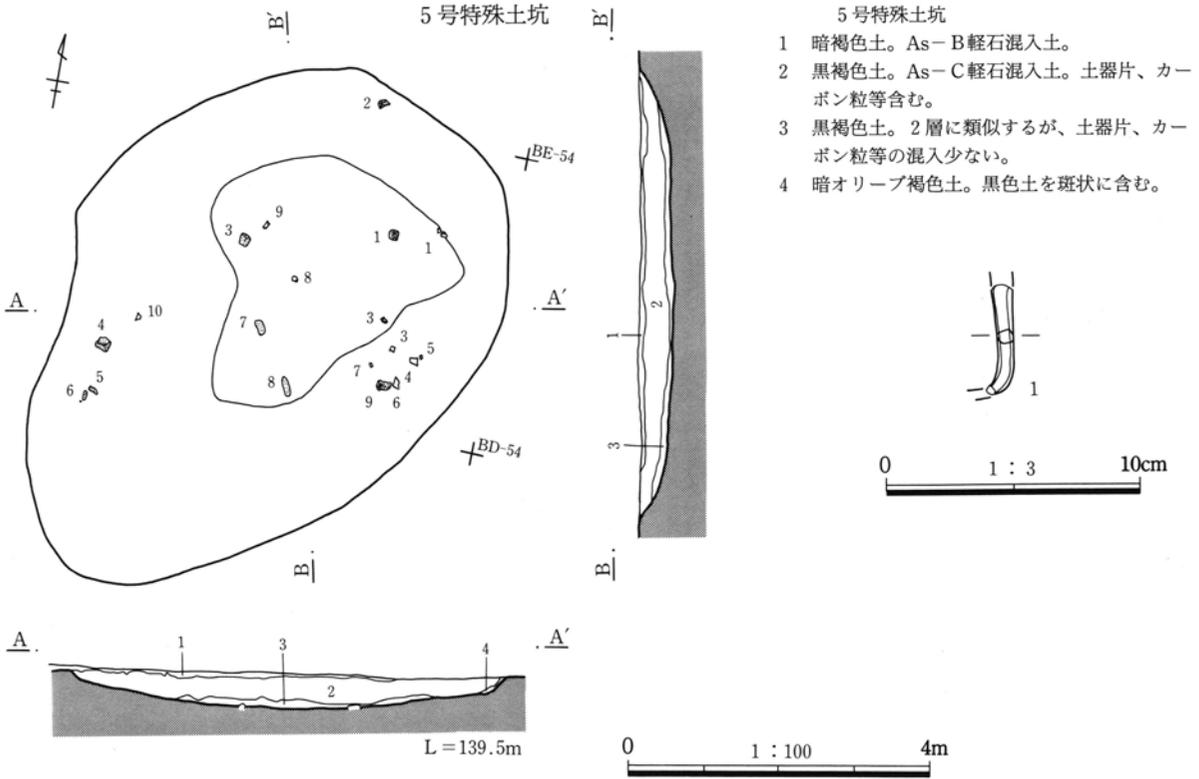


0 1 : 100 4m

第108図 特殊土坑(1)



第109図 特殊土坑(2)



第110図 特殊土坑(3)

田篠塚原 特殊土坑一覧

No.	グリッド	平面形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	長軸方向	遺物 (破片重量、単位はg) [] は掲載遺物			
							弥生	土師器	須恵器	他
1	BD-43	不整長方形	634	264	31	N-83°-W	412			
2	BC-46	隅丸長方形	846	424	42	N-76°-W	23912			
3	BF-42	不整楕円形	1162	628	32	N-6°-W	420	67		
4	BE-51	不整長方形	1168	(450)	88	N-64°-W	9072	[坏2] 51	190	[鉄製品1]、陶磁器片 4
5	BD-53	不整楕円形	773	546	48	N-30°-W	10537	126	38	[鉄製品1]、埴輪片 19

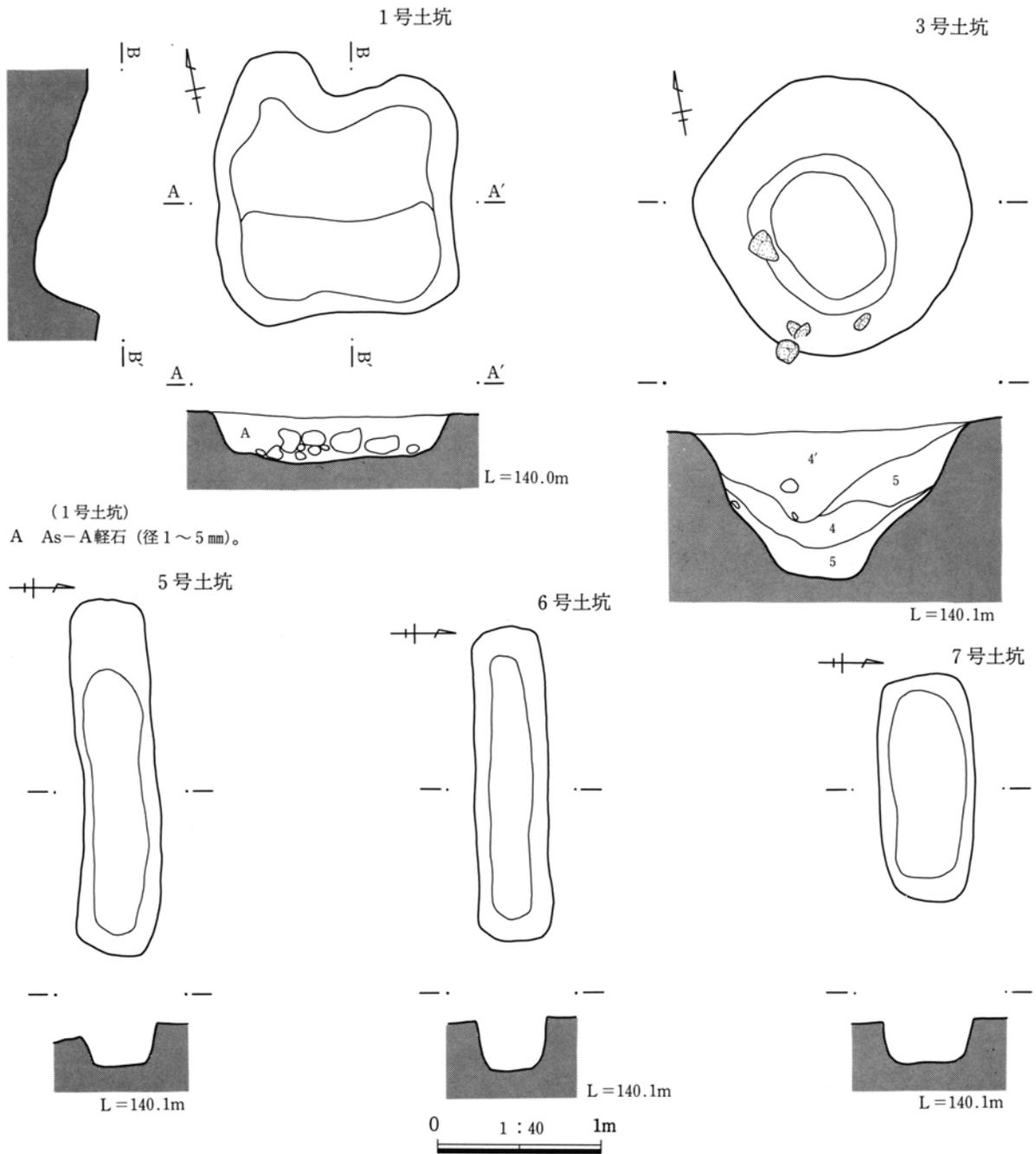
3 その他の遺構

1 土坑 写真 PL-29~31

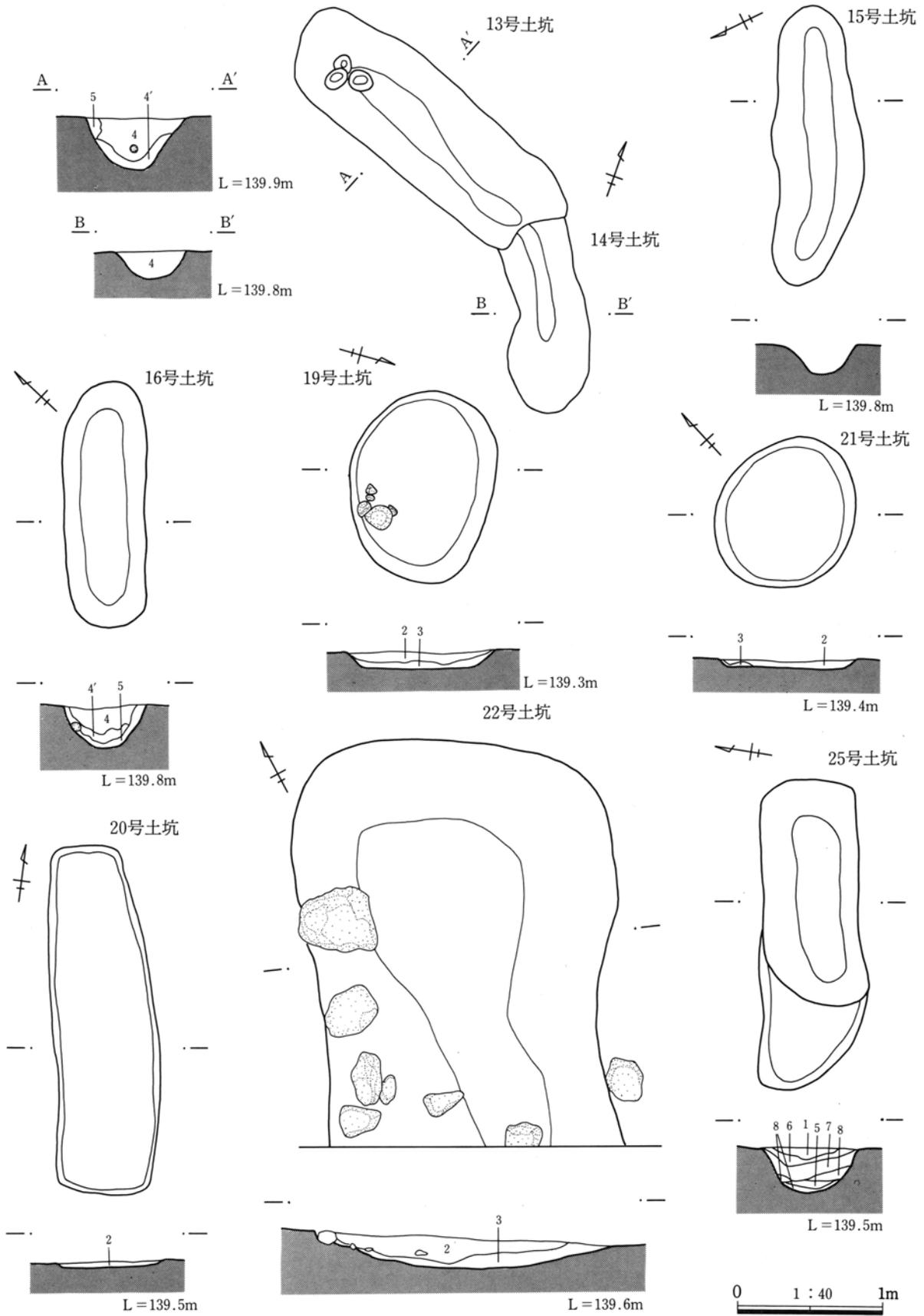
本遺跡では総数26基の土坑（灰かき穴含）を確認した。なお、土坑番号は調査時のものを使用しているため、土坑以外となったものは欠番とした。

土層注記は以下に示すものとし、当てはまらないものについては各土坑ごとに記すこととする。ローマ数字は基本土層である。

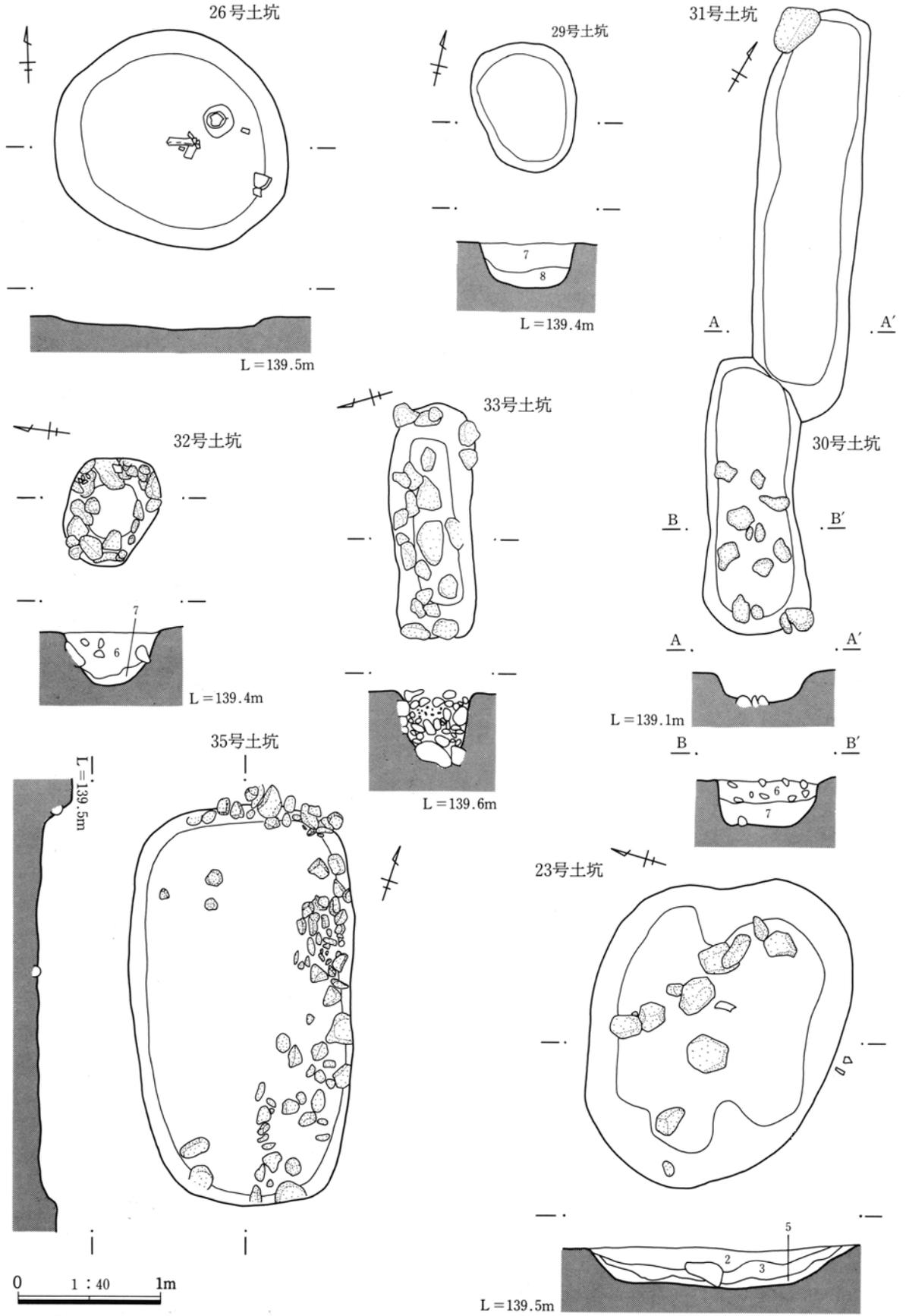
- 1 黒褐色土。As-A軽石及び小礫を混入する。
- 2 黒褐色土。As-B軽石を混入する。
- 3 暗褐色土。As-B軽石及び黄褐色土を混入。
- 4 黒褐色土。As-C軽石を混入する。
- 4' 黒褐色土。As-C軽石を少量混入する。
- 5 暗褐色土。As-C軽石及び黄褐色土を混入。
- 6 黒褐色土。小礫を混入する。
- 7 黒褐色土。非粘性土。
- 8 にぶい黄褐色土。



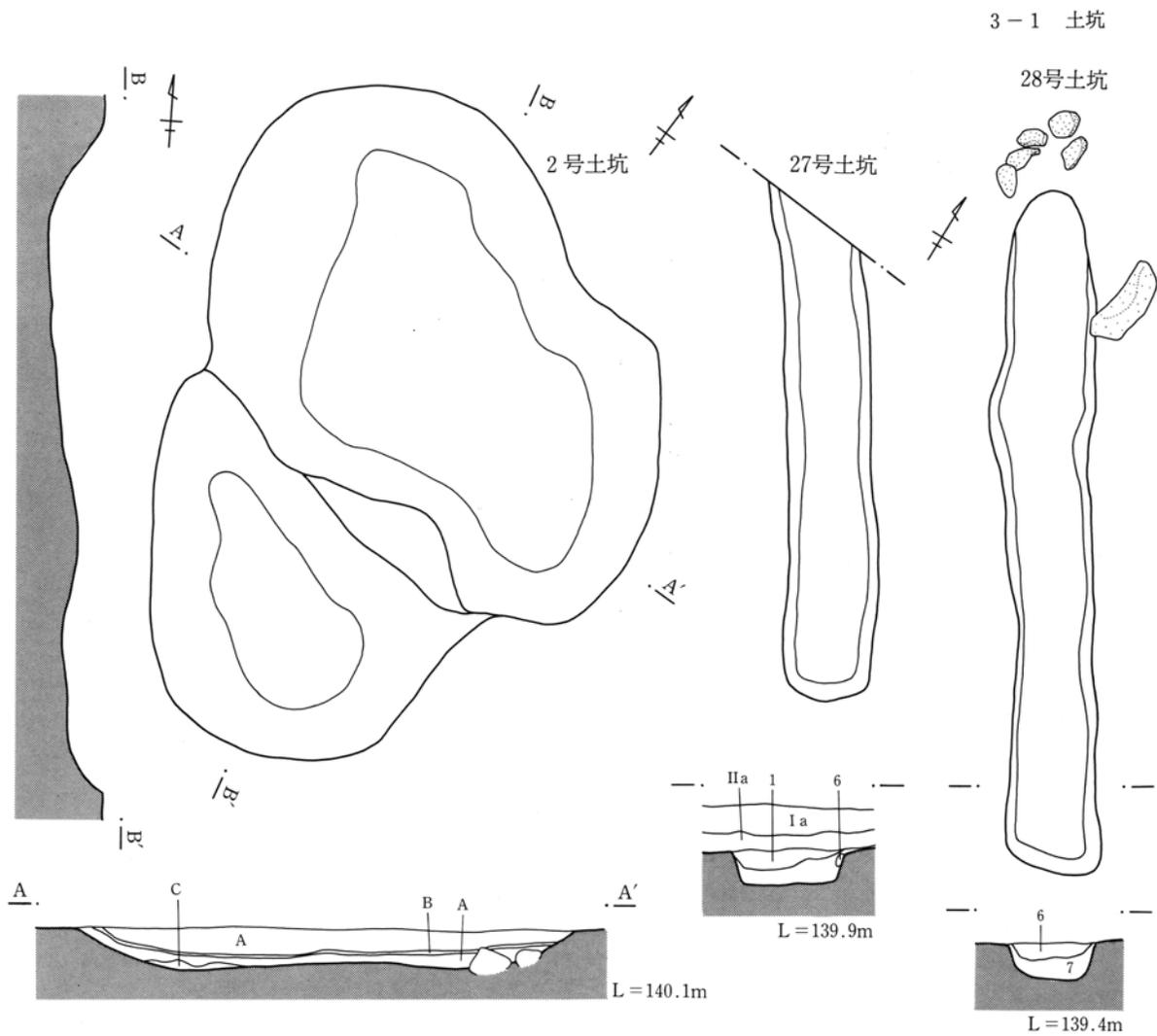
第111図 土坑(1)



第112图 土坑(2)

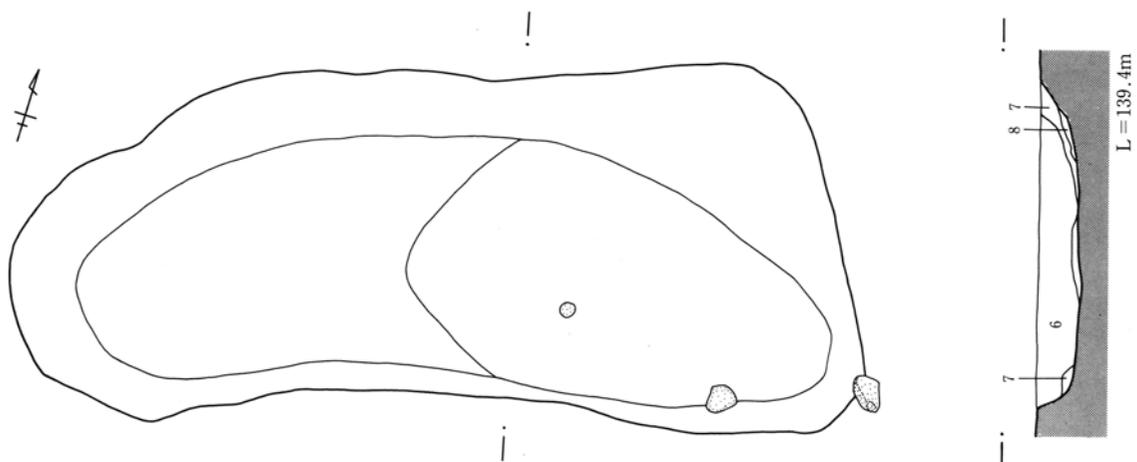


第113図 土坑(3)



- A As-A軽石 (径1~5mm)。
- B 灰色の砂状の軽石。
- C 暗褐色土。ローム質。As-Aが少量混入。

24号土坑



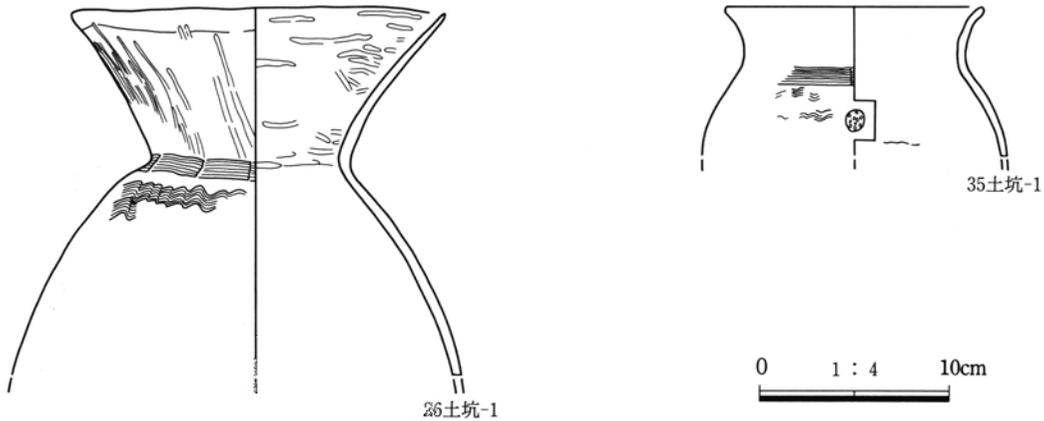
0 1 : 60 2m

第114図 土坑(4)

第3章 田篠塚原遺跡

田篠塚原 土坑一覽

No.	グリッド	平面形	長軸	短軸	深さ	長軸方向	遺物	備考
			cm	cm				
1	BN-31	隅丸方形	170	144	23	N-17°-E		灰かき穴
2	BN-32	不整楕円形	539	416	33	N-25°-E		灰かき穴
3	BL-31	円形	170	170	90	N-18°-E		
5	BL-31	長方形	218	47	22	N-87°-E		
6	BL-32	長方形	193	48	32	N-88°-E		
7	BL-32	長方形	140	58	27	N-87°-E		
13	BL-34	隅丸長方形	216	72	37	N-70°-W		
14	BK-34	隅丸長方形	123	56	20	N-28°-W		
15	BJ-35	隅丸長方形	188	62	19	N-63°-W		
16	BI-36	隅丸長方形	170	58	30	N-49°-E		
19	BE-43	楕円形	132	100	11	N-83°-E		
20	BG-43	長方形	242	73	4	N-16°-W		
21	BF-43	楕円形	109	93	5	N-60°-E		
22	BF-36	長方形	(285)	204	32	N-25°-E	弥生土器破片12片251g	特殊土坑の可能性有
23	BF-44	楕円形	236	178	28	N-80°-W	弥生土器破片1片17g	
24	BC-55	隅丸長方形	646	253	38	N-70°-E	弥生土器破片136片1169g、陶磁器1片4g	特殊土坑の可能性有
25	BB-52	隅丸長方形	213	67	31	N-79°-E		
26	BG-46	円形	170	150	10	N-58°-W	[弥生壺]、弥生土器破片10片75g	
27	BC-68	長方形	(388)	70	28	N-37°-W	弥生土器破片5片47g	
28	BB-63	長方形	538	86	31	N-31°-W	弥生土器破片2片8g	
29	BB-76	楕円形	92	71	31	N-25°-W	弥生土器破片22片399g	
30	BA-62	隅丸長方形	195	64	21	N-29°-W		31土坑に先行する
31	BB-62	隅丸長方形	287	74	31	N-22°-W		
32	BA-77	楕円形	78	60	37	N-55°-W	弥生土器破片13片67g	
33	BA-71	隅丸長方形	165	56	50	N-77°-W		
35	BB-71	隅丸長方形	278	158	19	N-19°-W	[弥生甕]	



26土坑-1

35土坑-1

第115図 土坑出土遺物

2 墓坑

1号墓

本遺構はB I-35グリット、7号古墳の北側に位置する。形状は隅丸長方形を呈し、規模は掘り方で218×135×24cmになる。方位は長軸方向が、北を向いて16°西へ振れる。

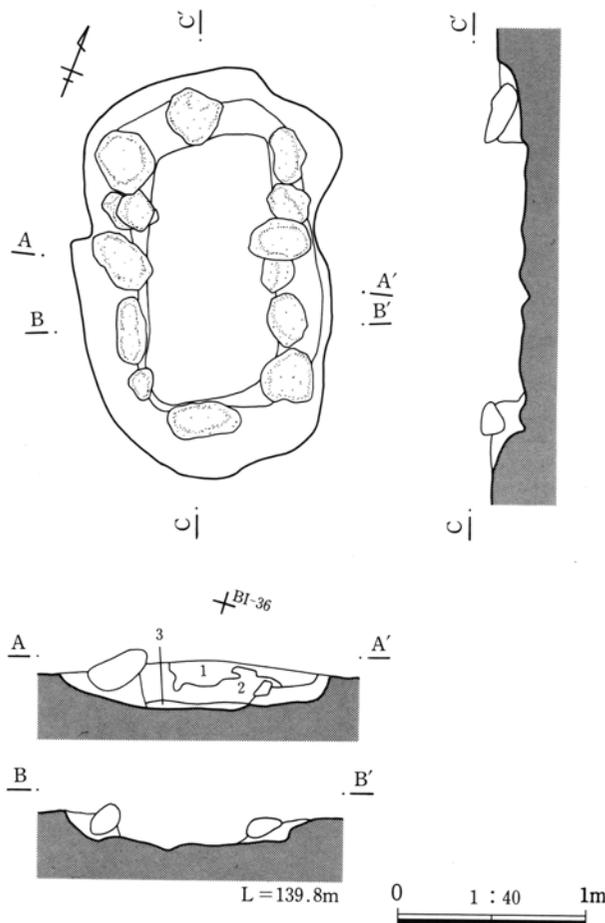
この墓坑は、不整楕円形状に荒掘りし、隅丸長方形形状に整形しながら石を配置したようである。石は基本的には一石ずつを周囲に配置してあり、一部を除いては段を成さない。石の大きさは、大きいもので長さ40cm前後のものが使われており、石材はすべて安山岩が使用されている。この周辺では、安山岩の他に片岩系の石材も容易に入手できるが、安山岩を選んで使用したらしい。また、北東隅や東側中央

部分などは、本来は石が配置されていた可能性が高い。

覆土には、As-A軽石混じりの灰黄褐色土、As-C軽石混じりの黒褐色土がみられる。灰黄褐色土は、しまりも弱く、後世の耕作又は攪乱などによるものと思われ、Aセクション上の灰黄褐色土が入り込んできている部分には、上述のように石が配置されていたものと思われる。

床面は凹凸があるものの、傾斜はなく、ほぼ平坦状である。床面からの各辺の立ち上がりは、ほぼ垂直に石に向かって立ち上がるように整形されている。

遺物は弥生土器片3片、土師器片1片、磁器片1片がそれぞれ小破片で出土している。遺構そのものの時代は、決定資料に欠け不明である。



第116図 1号墓

1号墓

- 1 灰黄褐色土。As-A軽石の混入が多く、しまり弱い。
- 2 黒褐色土。As-C軽石、小礫を混入する。しまりあり。
- 3 明黄褐色土。地山との区別難しい。

3 溝

1号溝 写真 PL-31

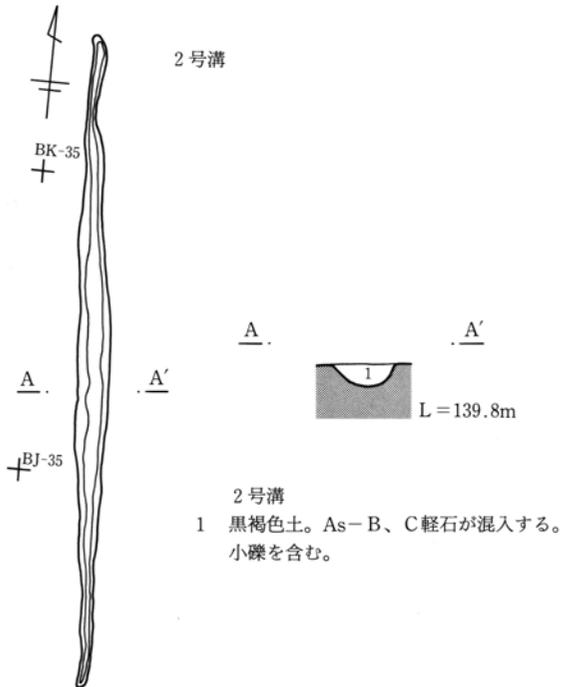
本遺構はBL-30グリットからBK-34グリットにかけて位置する。北西から南東にかけて走向し、やや東に向きを変え、緩やかに立ち上がる。規模は最大幅で5.90m、最深部で48cmを測る。溝際は、南側のほうがやや緩やかで、北側の方が立ち上がりは急である。覆土は主に軽石を混入する黒褐色土で、底面には礫がみられた。遺物は弥生土器片が最も多い(35片、176g)が、他にも、土師器片(9片)、須恵器片(1片)、円筒埴輪片(1片)、磁器片(1片)、石核(1片)が出土している。



第117図 1号溝

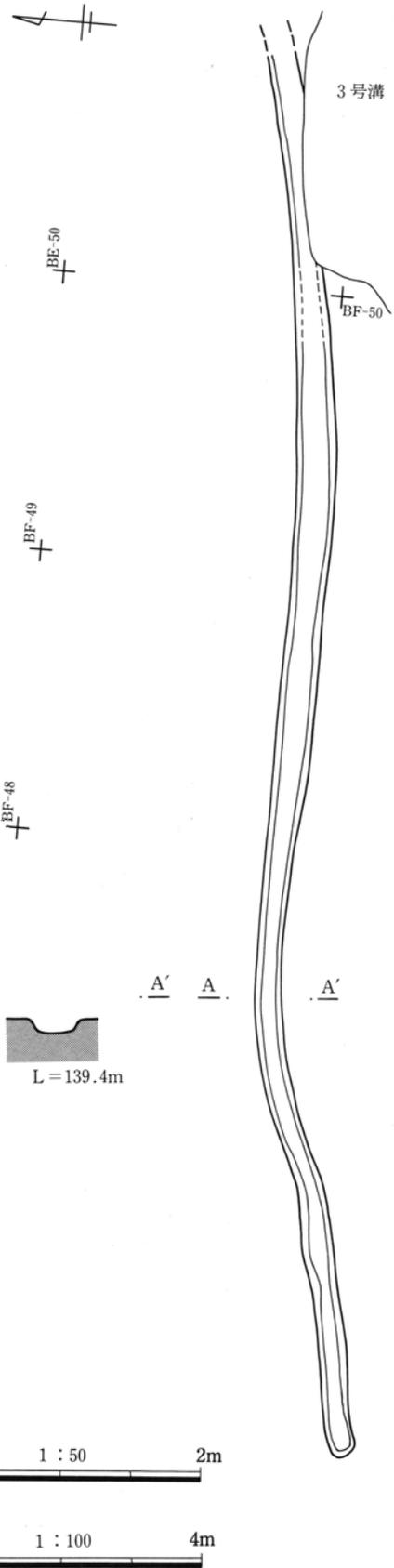
2号溝 写真 PL-31

本遺構はBI-35グリットからBK-35グリットにかけて位置し、ほぼ南北に走向する。規模は全長で8.72m、幅は10~42cm、深さは5~15cmを測る。両端から中央にかけて緩やかに傾斜していき、ほぼ中央部で最深部となる。両端での比高差は5cmで南の方が高い。遺物の出土はなかった。重複関係は円形周溝状遺構に後出する。



3号溝 写真 PL-31

本遺構はBE-46グリットからBE-51グリットにかけて位置し、ほぼ東西に走向する。東端は確認できず、その先にある4号特殊土坑との重複関係も定かではない。規模は幅32~56cm、最深部で10cmほどである。東西の比高差は8cmあり、東側の方が高い。遺物は、弥生土器片が28片、360g出土している。重複関係は1号畠跡に先行し、また、東側では8号住居を切る攪乱により一部を切られ、一部は8号住居覆土を切っている。



第118図 2・3号溝

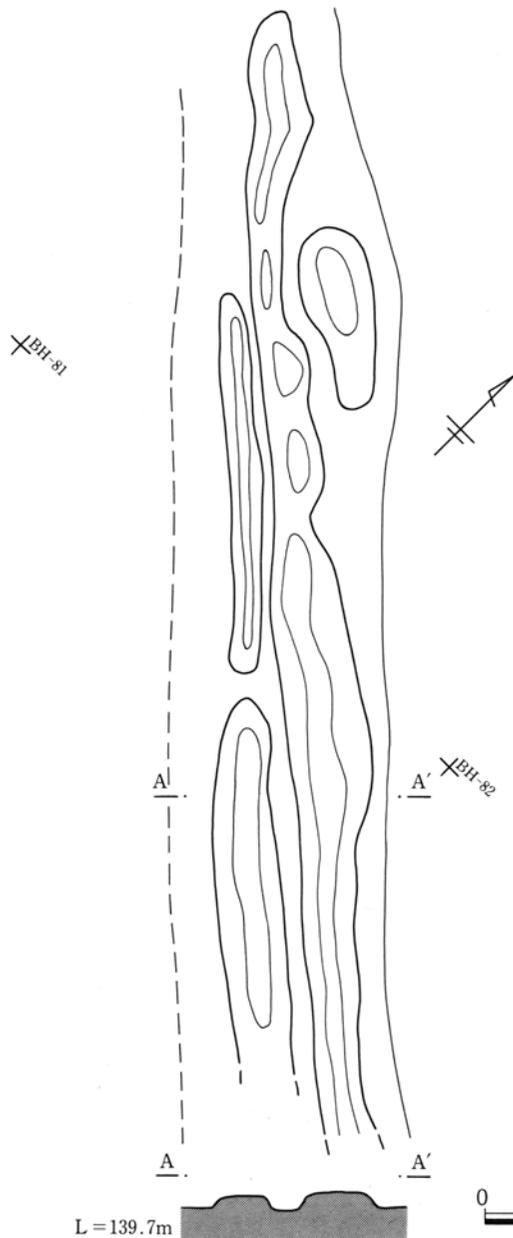
4 畝

1号畝

この遺構はBG、H-81グリッド、6号古墳の東側に位置する。この畝は、本来ならば6号古墳の墳丘部にあたるはずだが、後世に削平され開墾されたものである。

畝の走向方向は、北に向いて西に47°振れる。また、畝の頂部間は35~50cmである。畝間は、ほぼAs-A軽石で覆われ、若干の黒色土が混入していた。灰もみられないため、純層とは考え難い。

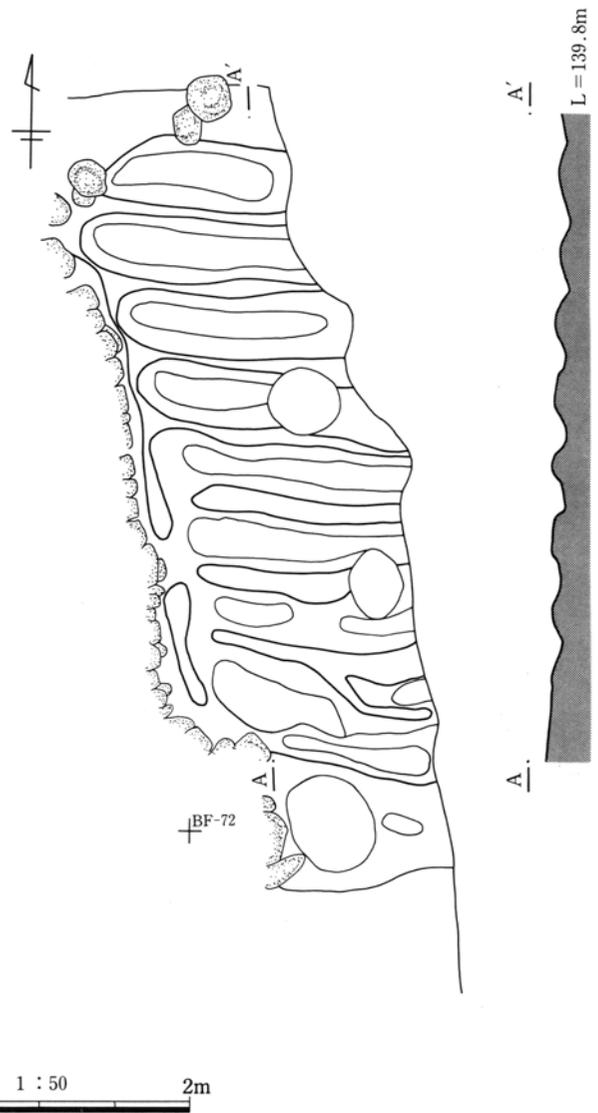
遺物の出土はなかった。



2号畝 写真 PL-32

この遺構はBF-72グリッド、5号古墳の東脇に位置する。1号畝と同様に、5号墳墳丘部を後世に削平し開墾されたものである。残存した古墳部分には、礫や軽石などがかけ集められており、畝部分との境には石垣が築かれていた。

畝の畝間は、As-A軽石で覆われており、畝直上には火山灰がみられた。このため、この畝は天明3年の浅間山噴火の際に放棄されたものと考えられる。遺物の出土はなかった。



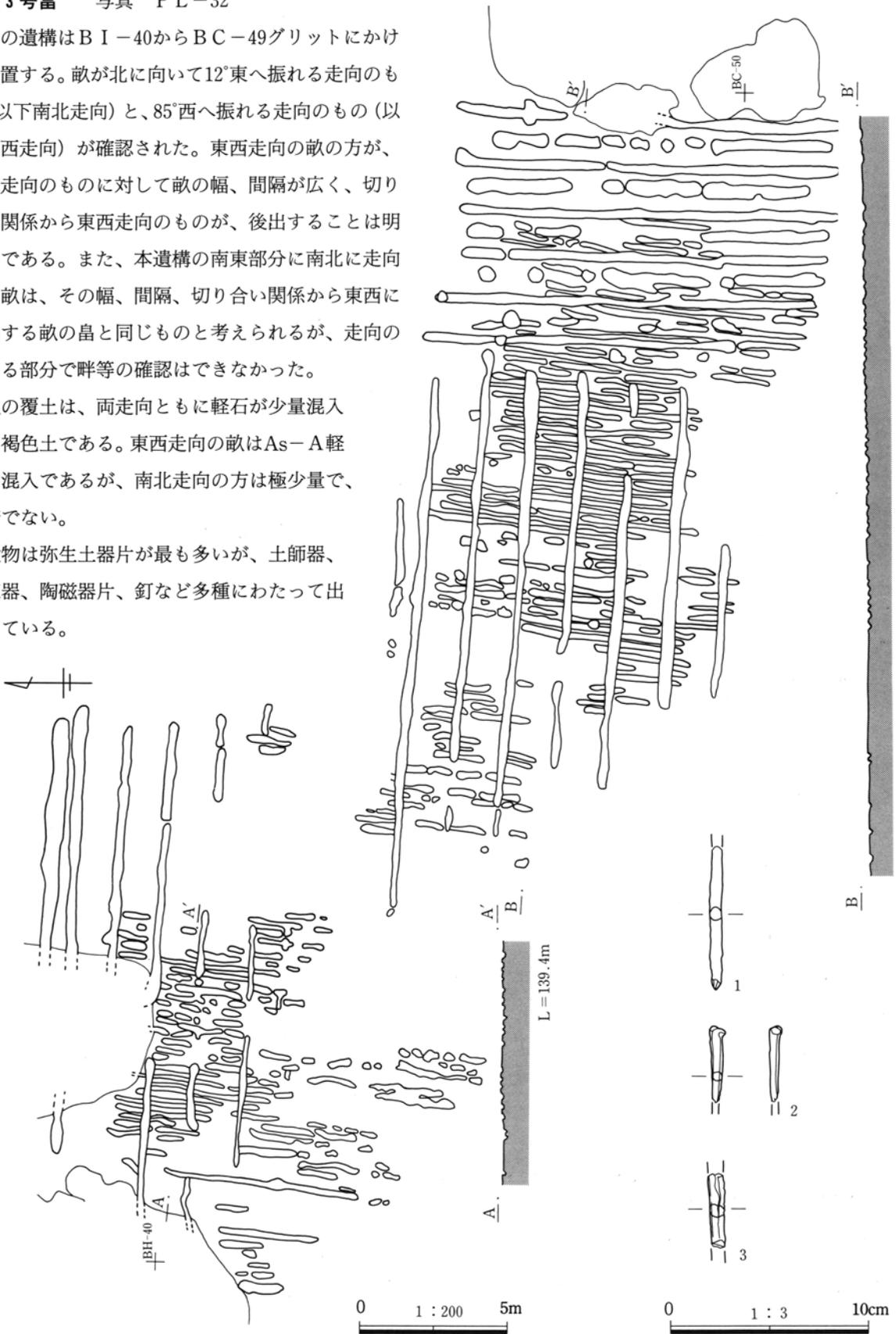
第119図 1・2号畝

3号畠 写真 PL-32

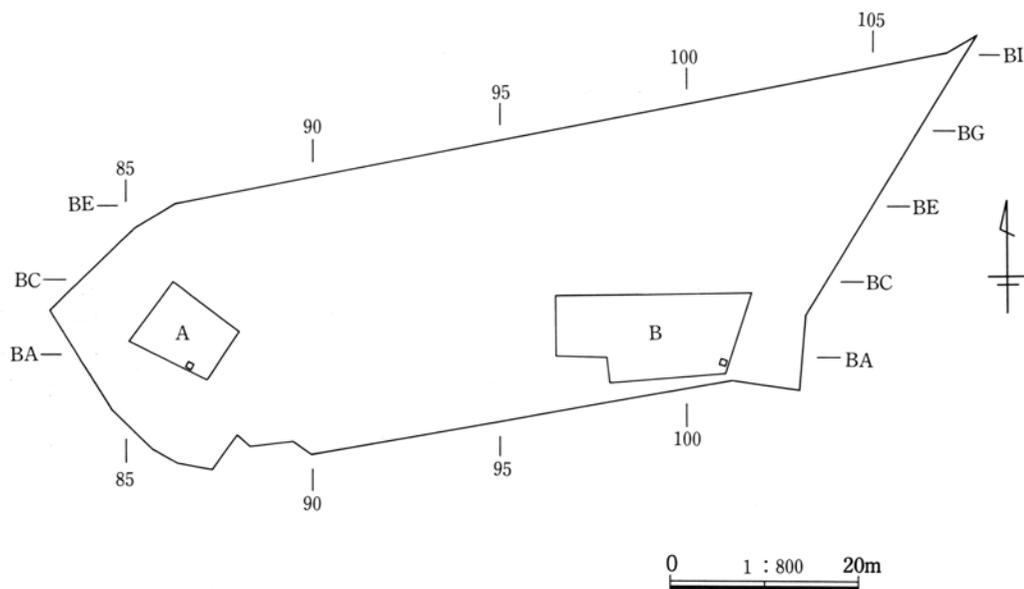
この遺構はBI-40からBC-49グリットにかけて位置する。畠が北に向いて12°東へ振れる走向のもの(以下南北走向)と、85°西へ振れる走向のもの(以下東西走向)が確認された。東西走向の畠の方が、南北走向のものに対して畠の幅、間隔が広く、切り合い関係から東西走向のものが、後出することは明らかである。また、本遺構の南東部分に南北に走向する畠は、その幅、間隔、切り合い関係から東西に走向する畠の畠と同じものと考えられるが、走向の変わる部分で畔等の確認はできなかった。

畠の覆土は、両走向ともに軽石が少量混入する褐色土である。東西走向の畠はAs-A軽石の混入であるが、南北走向の方は極少量で、明瞭でない。

遺物は弥生土器片が最も多いが、土師器、須恵器、陶磁器片、釘など多種にわたって出土している。



第120図 3号畠及び出土遺物



5 IV区の遺構

IV区は富岡市勤労青少年ホームの敷地内にあたり、地形的にはIII区までの地点より一段低くなっている。トレンチ等により、西側のA地点と東側のB地点を掘り下げて調査することとなった。

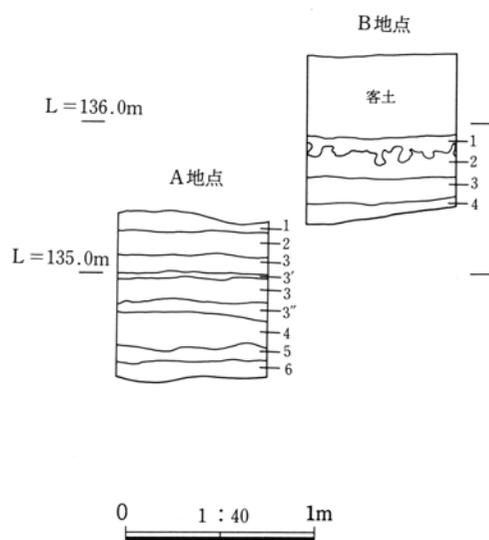
A地点 写真 PL-32

A地点からはAs-A軽石層及びAs-B軽石層が確認され、暗渠及び水田跡と考えられる遺構が確認された。

暗渠は、As-A軽石層およびその下面を掘り込み造られていた。幅60cm、深さ22cm程の規模で、走行は北を向いて29°東へ振れる。

As-A軽石層は、一部では純層に近い状態で確認され、その直下面の黒褐色土は、畦畔等は確認されなかったが水田面と考えられる。プラント・オパー

ル分析の結果からは、密度としては低いもののイネが検出されている。



A地点

- 1 黒褐色土。As-A軽石を若干混入する。
- 2 暗灰黄褐色土。密度の高いAs-A軽石層。部分的に純層に近い状態がみられる。
- 3 黒褐色土。やや粗い粒子の弱粘性土。
- 3' 3層に斑状に黄褐色土のブロックが混入。
- 3'' 3層に比してやや黒色味が強く、しまりあり。
- 4 黒色土。泥炭混じりの比粘性土。
- 5 As-B軽石層。ほぼ純層に近い状態と思われる。
- 6 黒色土。泥炭質土。

B地点

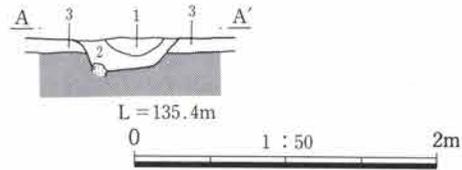
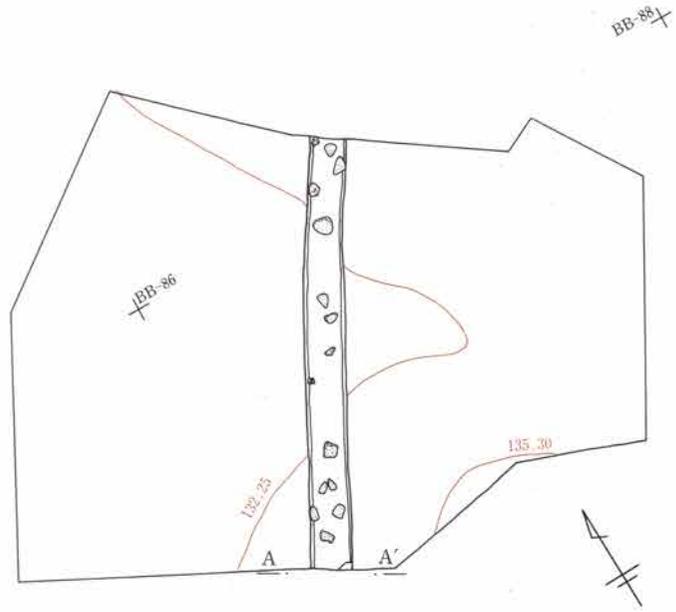
- 1 黒褐色土。As-B軽石を多量に混入し、しまりはない。
- 2 灰黄褐色土。粘性が強い。
- 3 暗褐色土。粘性土。
- 4 灰黄褐色土。明黄褐色土のブロック、礫を混入する。

第121図 IV区調査地点図及び土層断面

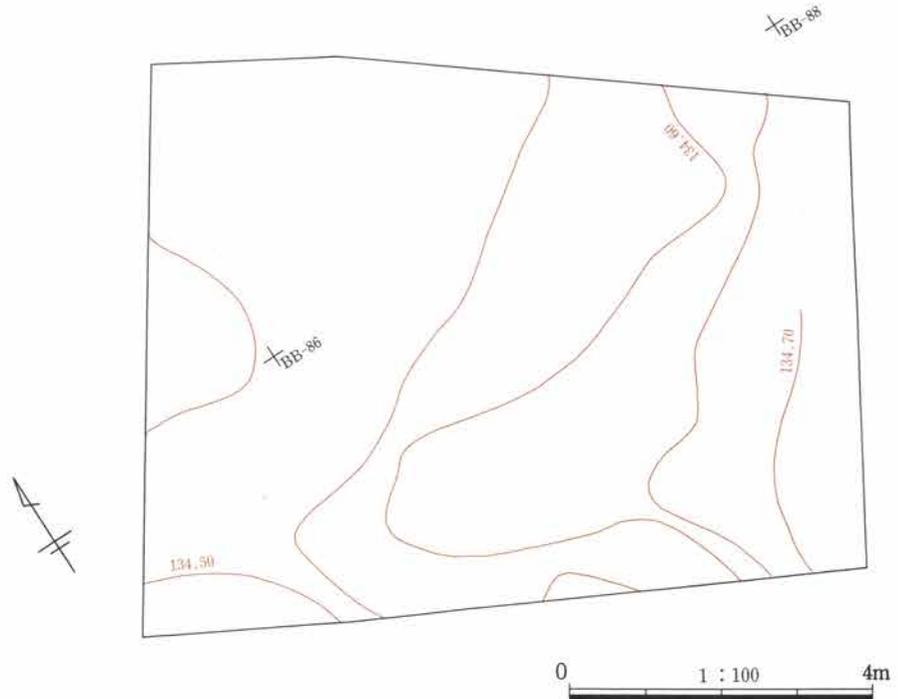
As-B軽石層も純層に近い状態で確認でき、その直下面の黒色土もやはり水田面と考えられる。畦畔等は確認できなかった。プラント・オパール分析の結果からは、密度としては低いもののイネが検出されている。また、ヨシ属の繁茂する湿地的な状況が推定され、そこを利用した稲作であった可能性もある。

B地点

As-B軽石を混入する層において、かなりの凹凸がみられ、畠作等による耕作痕かとも考えられるが不明瞭である。



- 1 黒褐色土。As-A軽石を霜降り状に混入する。
- 2 黒褐色土。粒子の細かな1、3層土の混土層。
- 3 暗褐色土。As-A軽石を多量に混入する。下位ほどその密度は高い。



第122図 IV区A地点(上 As-A軽石下面 下 As-B軽石下面)

6 遺構外出土遺物

遺構外の遺物は遺構の見つかっていない時期のものを中心この項で一括して扱う。

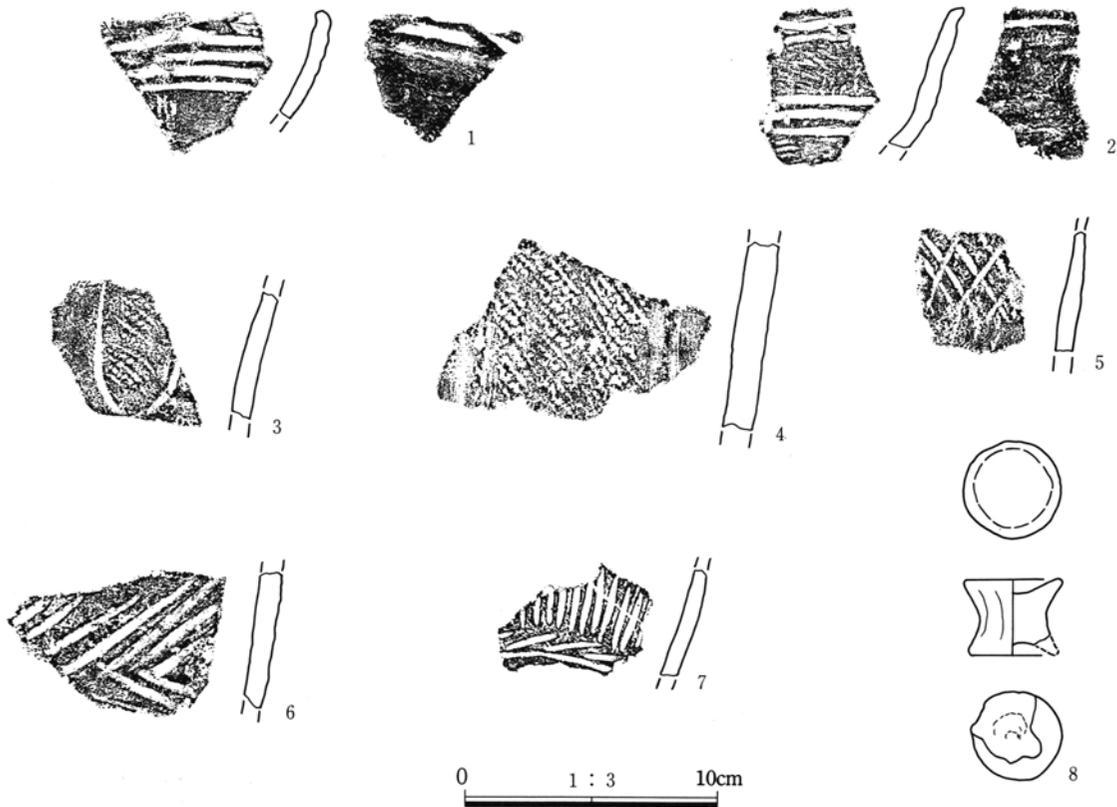
縄文時代の遺物は1から20で、古墳の墳丘から出土したものが多。1～7は縄文土器で中期から後期にかけてのものである。縄文土器の出土はあまり多くない。8は耳栓で無文無孔の臼状のものである。縄文土器の年代との齟齬はないと考える。定形的な石器は極力図示した。9は凹基無茎の石鏃である。打製石斧の出土は多く、10～20の11点を図示した。11・13以外は完形である。図示した以外には打製石斧片1、石核2、スクレーパー類7等である。

弥生時代の石器には21・22の石鏃、23・24の石包丁がある。どちらも住居跡からは出土していない石器である。

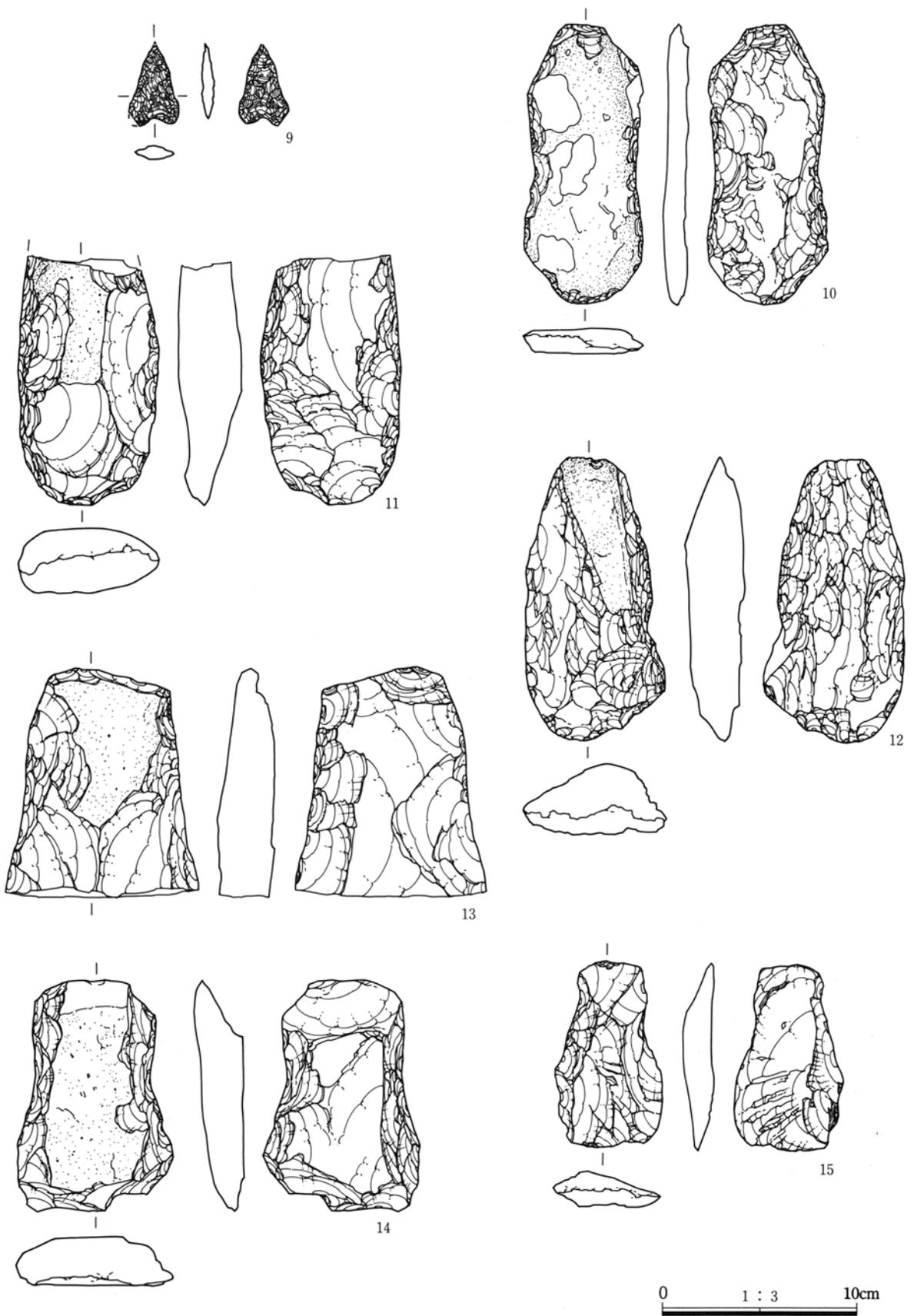
その他に26の布目瓦、28～30の中世舶載青磁片など、付近での出土例の少ない特殊遺物が古墳墳丘か

ら出土している。また39～41の土製紡錘車の出土も目立つ。

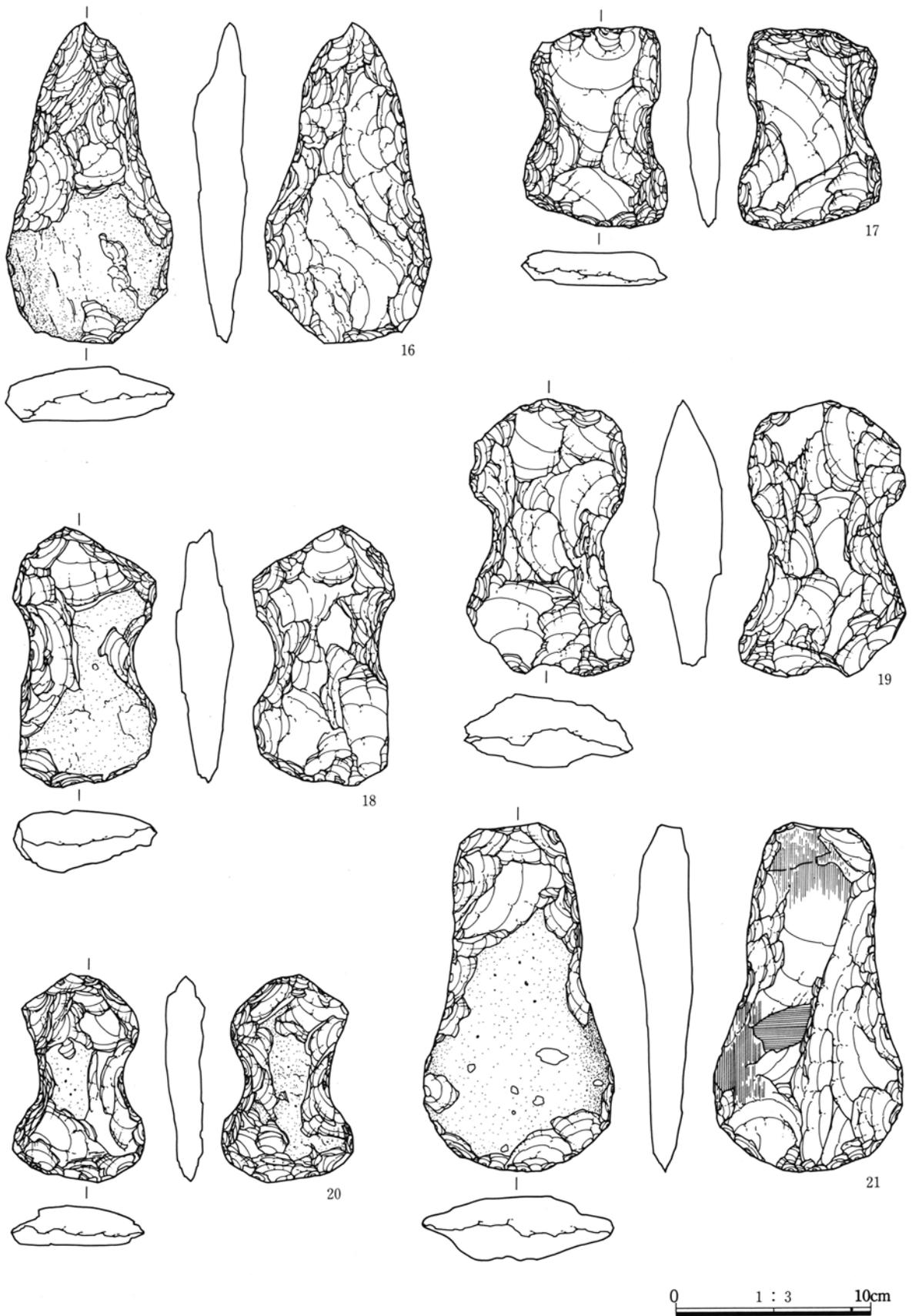
図示できなかったその他の遺物は弥生時代の土器がほとんどで、土師器・中世土器類は少量である。



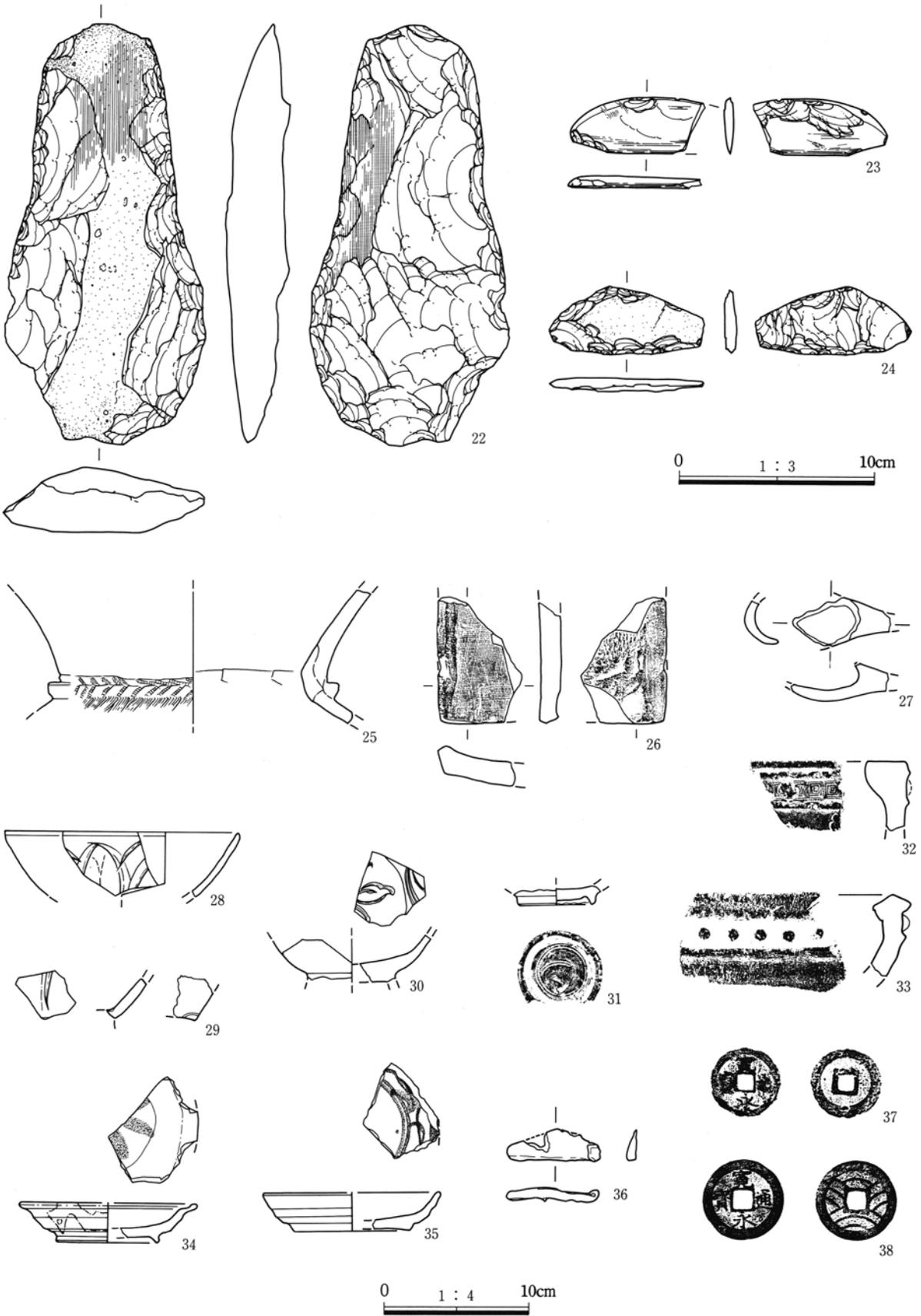
第123図 遺構外出土遺物(1)



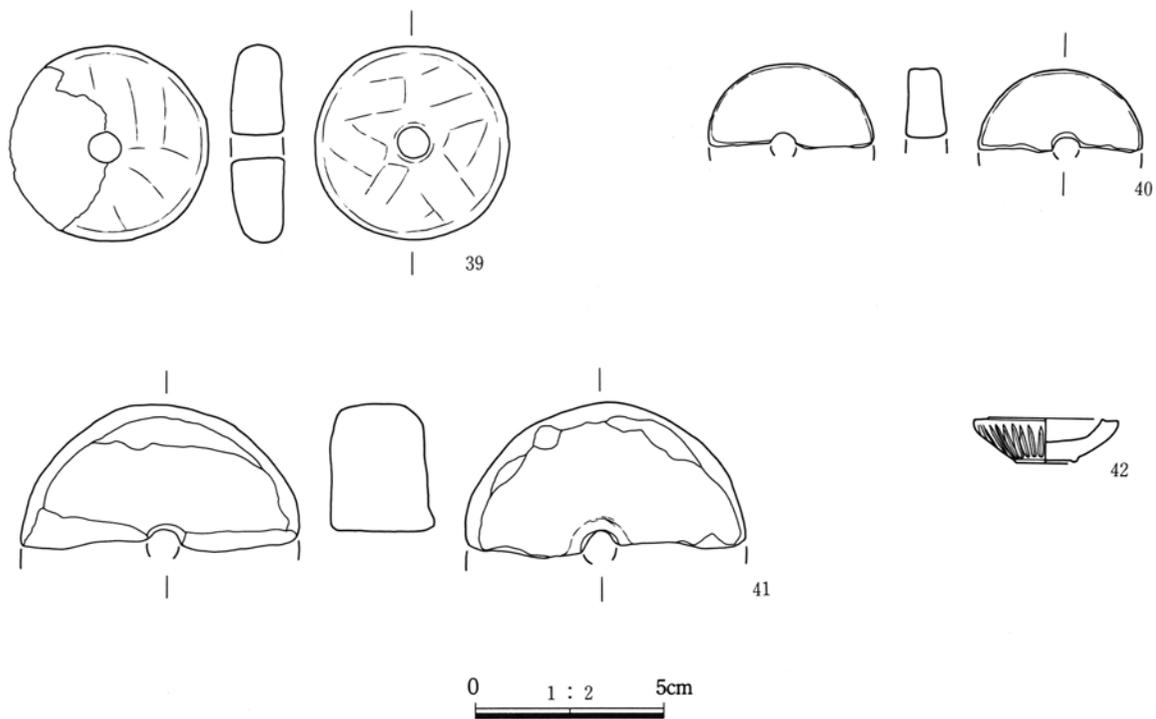
第124図 遺構外出土遺物(2)



第125図 遺構外出土遺物(3)



第126図 遺構外出土遺物(4)



第127図 遺構外出土遺物(5)

第4章 福島駒形遺跡

1. 弥生・古墳時代の遺構

本遺跡の古墳時代の遺構には33軒の竪穴住居と古墳1基がある。

竪穴住居は、その形態や出土遺物から前期と考えられるもの12軒、中期3軒、後期16軒、不明2軒とに区分される。26号住居、29号住居からは白玉やその未製品などが出土し、滑石製品工房跡と考えられる。なお、28号住居は弥生時代後期と考えられるが、便宜上本項で扱う。

1号古墳は塚原古墳群に属する古墳で、両袖型横穴式石室を有する。

なお、竪穴住居の土層注記は以下に記すものとし、該当しないものはその都度別記することとする。

住居土層注記

- 1 黒褐色土。As-B軽石、礫を混入する。しまりあり。
- 2 黒褐色土。礫、多量のAs-C軽石を混入する。しまりあり。
- 3 黒褐色土。As-C軽石、黄褐色土を少量に混入する。
- 4 黒褐色土。As-C軽石、黄褐色土を多量に混入する。
- 5 黄褐色土。地山の崩落土。

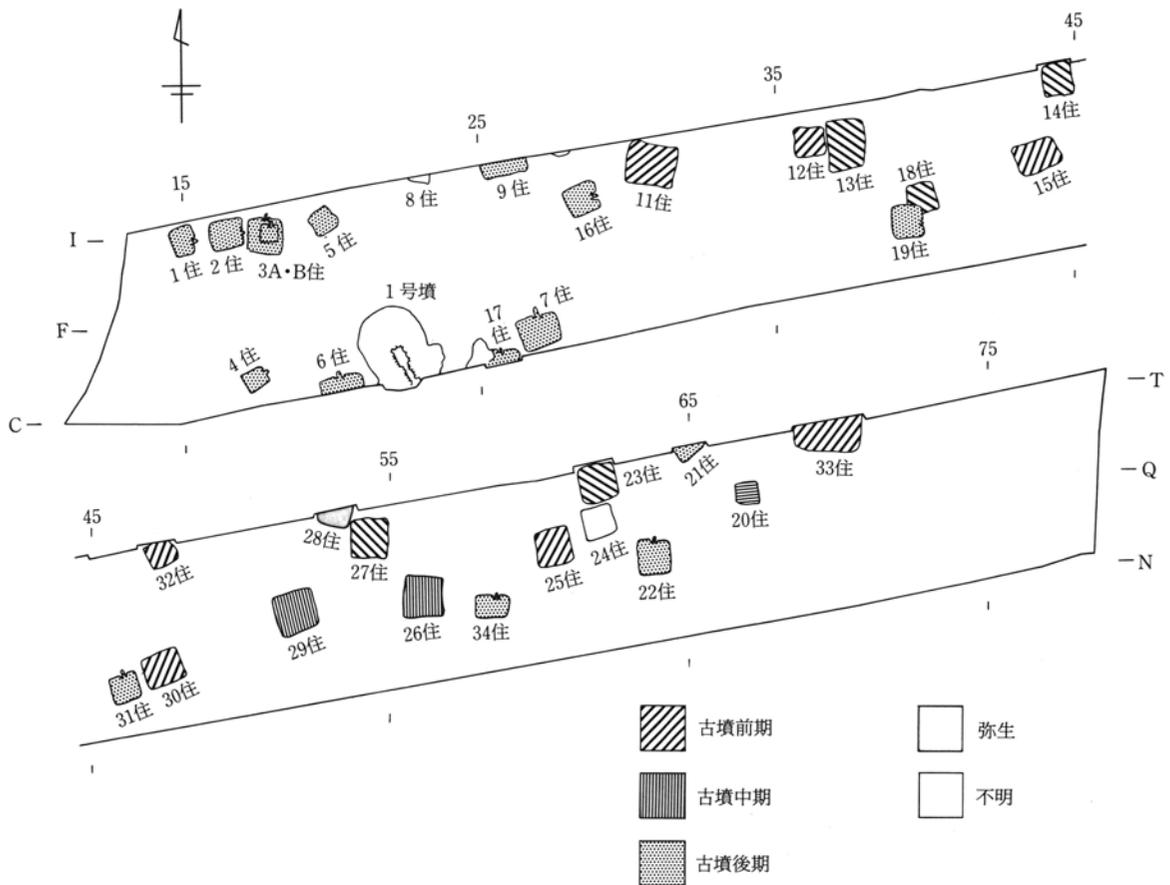
なお、土層番号にダッシュ(‘)が付いた場合は、その土層に焼土粒や炭化物粒が混入する。

竪土層注記

- 10 黒褐色土。焼土等を含まない。
- 11 黒褐色土。炭化物粒、焼土粒を少量混入する。
- 12 黒褐色土。炭化物粒、焼土粒を多量に混入する。
- 13 黒褐色土。炭化物、焼土をブロック状に混入する。
- 14 暗灰黄褐色土。焼土粒、焼土ブロック、竪材の崩落土等を混入する。

炉土層注記

- 20 黒褐色土。焼土等を含まない。
- 21 黒褐色土。焼土が少量混入する。
- 22 黒褐色土。焼土が多量に混入する。
- 23 黄褐色土。黒褐色土が混入する。炉石設置の掘り方。
- 24 黄褐色土が被熱により赤色化部分。



第128図 福島駒形遺跡 古墳時代の遺構

1. 竪穴住居

1号住居 写真 PL-47、67

位置 H-14G

形状 ほぼ東西に主軸をとる方形を呈するが、南東及び南西の角は緩やかに湾曲する。規模は長軸×短軸で3.68×3.20mである。

面積 9.86㎡ 方位 N-71°-E

床面 礫混じりの土を22~37cmで掘り込んで床面としている。北西部に向かって若干の傾斜がみられる。

埋没土 砂礫を多量に含む黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

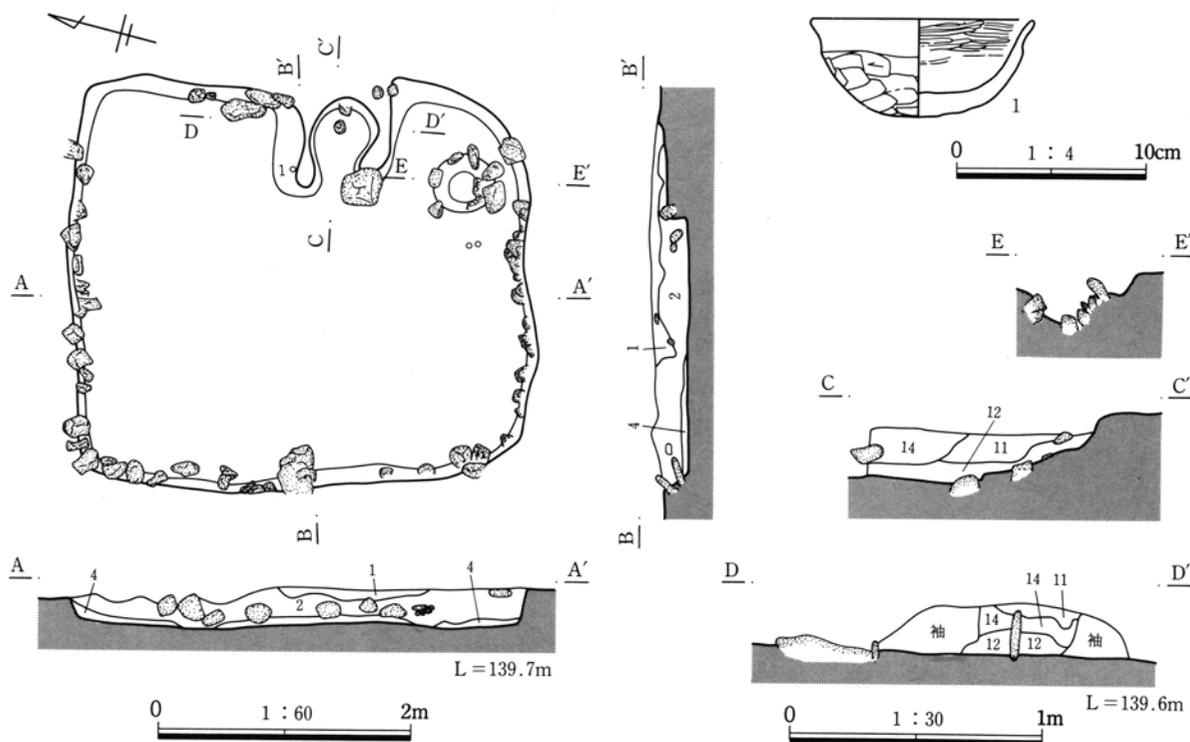
竈 東壁のやや南よりに住居内に燃焼部を有する竈が付設されていた。右袖部分及び焚き口部分には動いた形跡はあるが、30cm前後の礫があり、それぞれ袖部材、焚き口天井部材と考えられる。燃焼部には炭化粒、焼土粒を含む土の上に竈崩落土が落ち込んでいた。また、22×6×5cm(縦×横×厚)の支脚石

が立石の状態出土した。下半部8cm程を残し燃焼の痕跡があり、位置的にも使用時の状況に近いものと考えられる。燃焼部底面は奥側で緩やかに立ち上がり、煙道部へ続くと考えられるが、煙道部は不明瞭であった。

貯蔵穴 竈の南側に位置する。円形を呈し、規模は54×47×24cm(長軸×短軸×深さ)である。

柱穴 確認できなかった。

遺物 遺物の出土量は少なく、竈脇の床面直上より出土した坏1点を図示した。図示したもの以外には、甕類と思われる土師器片が101片・677g、杯類の破片が42片・221g、甑の破片が2片・66g出土している。



第129図 1号住居及び出土遺物

2号住居 写真 PL-47、67

位置 I-16G

形状 ほぼ東西に主軸をとる隅丸長方形を呈するが、北東隅より東壁中央にかけて、外側に膨らみをもつ。規模は4.86×3.88mである。

面積 14.84m² 方位 N-84°-E

床面 礫混じりの土を11~25cmで掘り込んで床面としている。南東部から北西部にかけて若干の傾斜がみられる。

埋没土 砂礫を多量に含む黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央で住居内に燃焼部を有する竈が付設されていた。残存状況が悪く、袖などの痕跡を留めるのみだった。

貯蔵穴 南東の隅に位置する。円形を呈し、規模は72×66×23cmである。

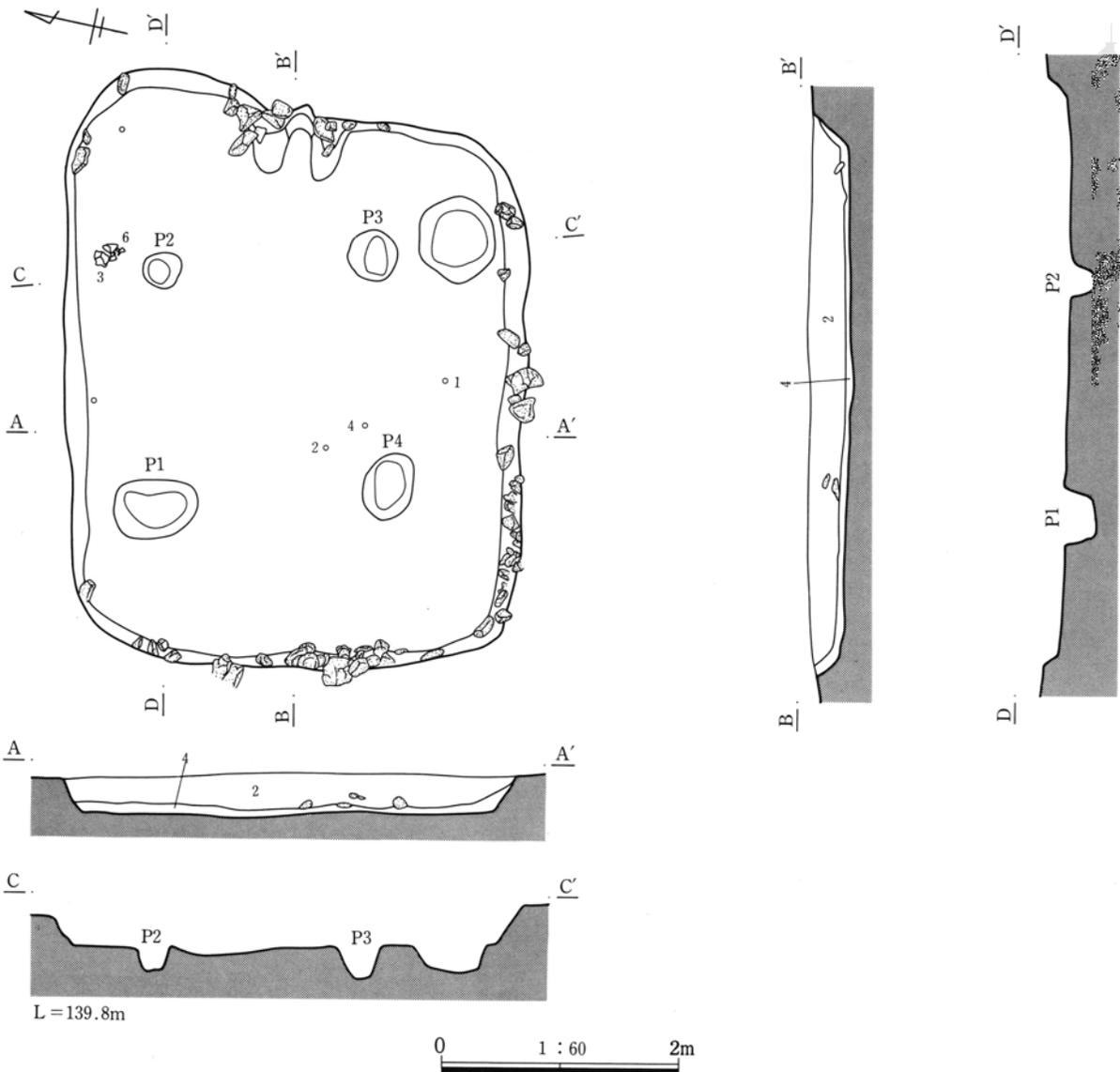
柱穴 支柱穴4本を確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

P1 : 72×31cm P1~P2 : 2.00m

P2 : 32×29cm P2~P3 : 1.86m

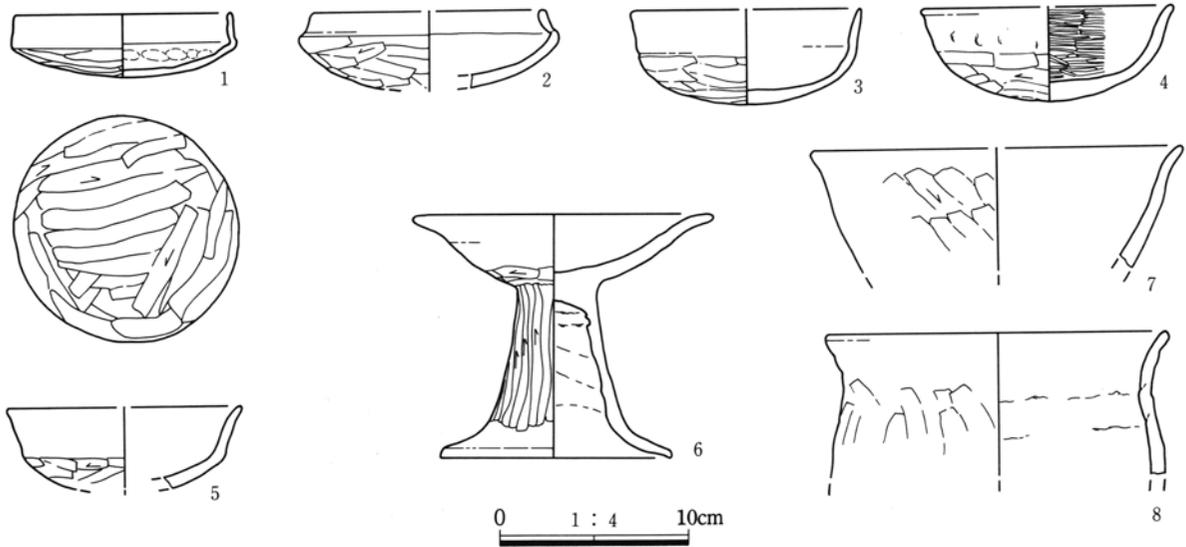
P3 : 42×28cm P3~P4 : 1.96m

P4 : 58×25cm P4~P1 : 2.04m



第130図 2号住居

第4章 福島駒形遺跡



第131図 2号住居出土遺物

遺物 8点の土器を図示した。6の高坏はP2周囲の床面直上より出土。他に坏が床上4~26cmの高

さより出土している。図示したもの以外に甕類を中心に2,420g出土している。

3B号住居 写真 PL-47、67

位置 I-18G

重複 3A号住居に先行する。

形状 隅丸方形を呈し、規模は4.86×4.66mである。

面積 17.45㎡ **方位** N-7°-E

床面 礫混じりの土を23~57cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 砂礫混じりの黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

竈 北壁の若干東よりに住居内に燃焼部を有する竈が付設されていた。両袖の焚き口に近い部分は3A住居により切られている。覆土の黒褐色土には炭化物、焼土粒がみられた。燃焼部底面は奥側で立ち上がり、ごく緩やかな傾斜をもつ煙道部へと続いている。袖部材や支脚石となり得る礫などは出土しなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。

柱穴 5本のピットを確認した。P1~P3が主柱穴の4本柱に対応するものと考えられる。また、P4、5はそれぞれP2、3よりやや中央よりに位

置し、主柱穴より規模が小さいことからその補助的なものなどが考えられる。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

P1 : 43×38cm P1~P2 : 3.08m

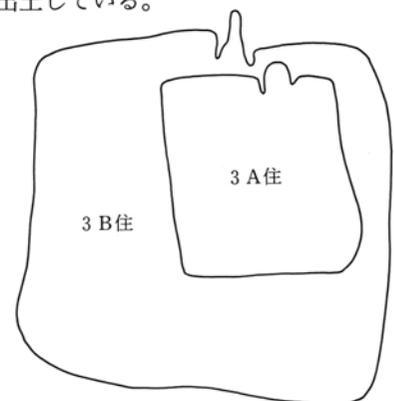
P2 : 55×24cm P2~P3 : 3.00m

P3 : 46×11cm P4~P5 : 2.25m

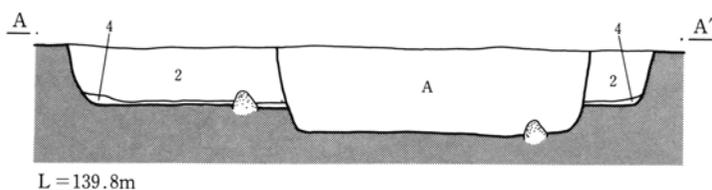
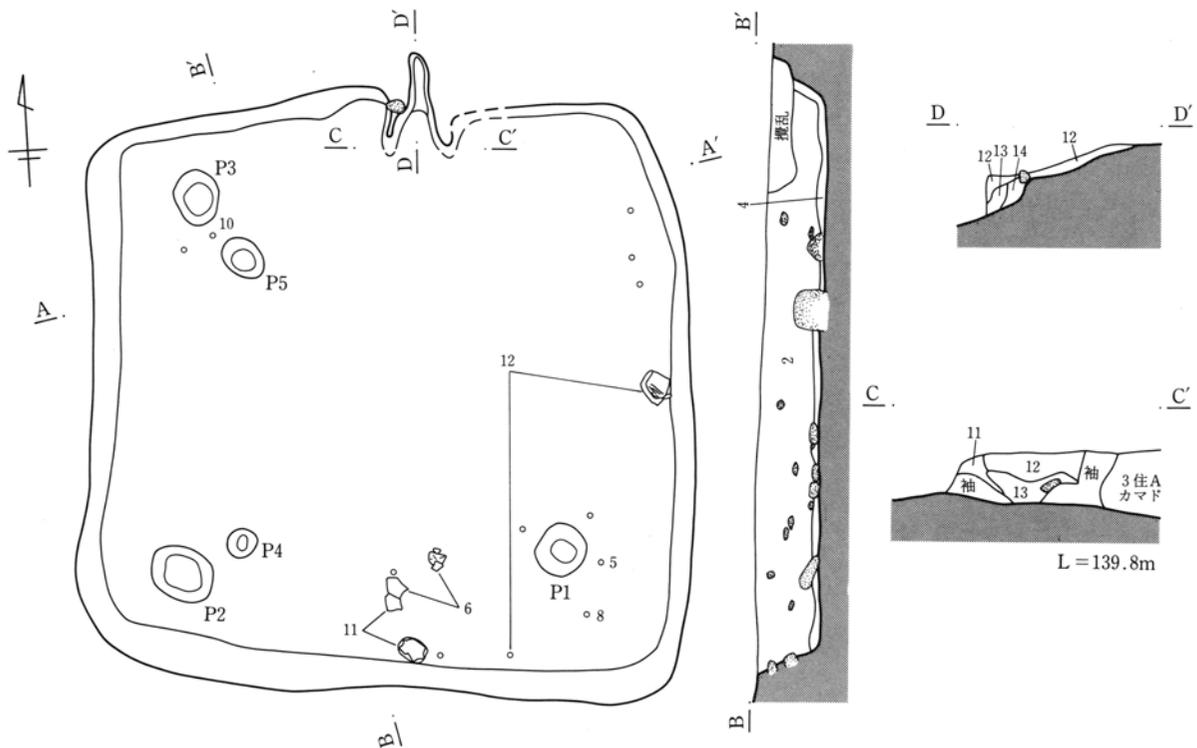
P4 : 22×26cm

P5 : 38×23cm

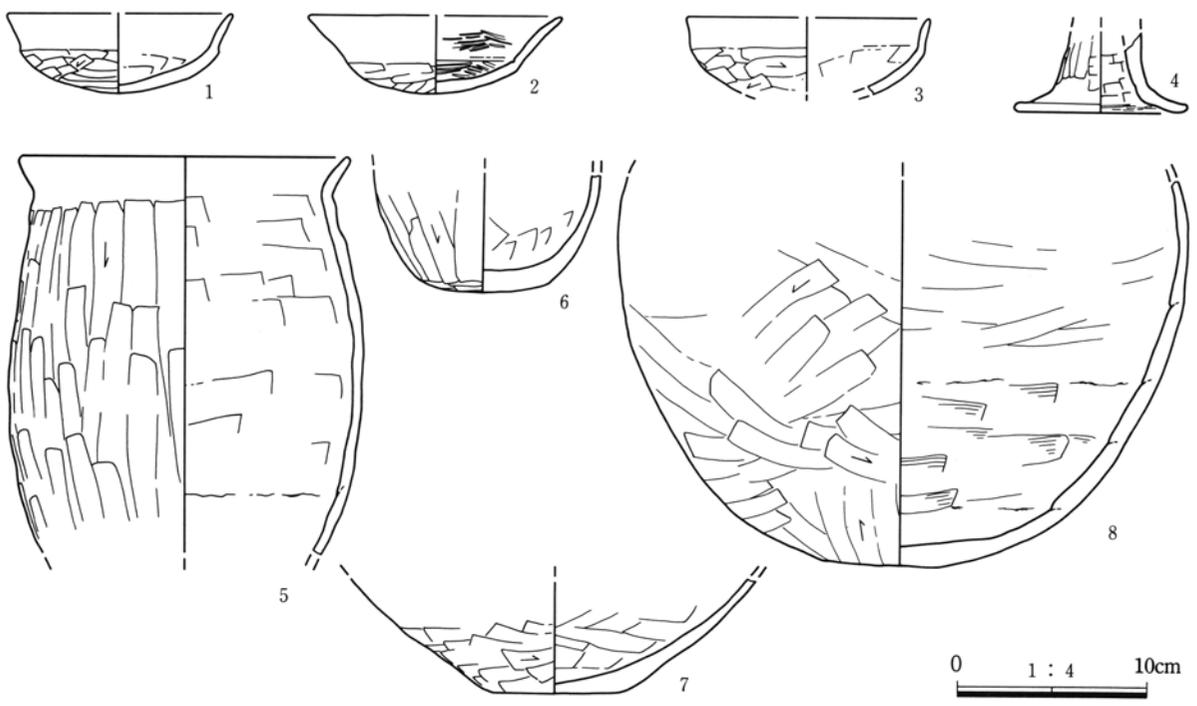
遺物 8点の遺物を図示した。住居南東部の床面直上より坏、高坏、甕が出土している。図示したもの以外に覆土中から土師器片が杯4片・40g、甕23片・910gが出土している。



第132図 3A・3B号住居模式図



A 2層に類似。やや礫の混入が多い。
3 A住の覆土。



第133図 3 B号住居及び出土遺物

3 A号住居 写真 PL-47、67

位置 Ⅱ-14G

重複 3 B号住居に後出する。

形状 ほぼ南北に主軸をとる方形を呈するが、東壁が若干蛇行する。また、北壁の一部が不明瞭であった。規模は2.48×2.21mである。

面積 5.24m² 方位 N-4°-E

床面 3 B号住居の床面より8~21cm下層を床面とし、ほぼ平坦である。

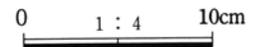
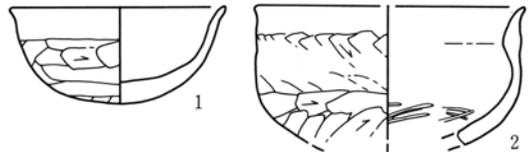
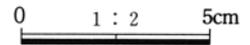
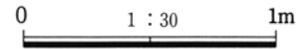
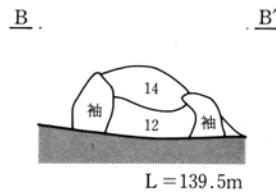
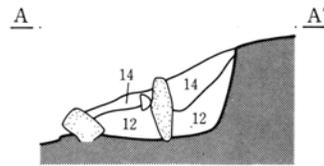
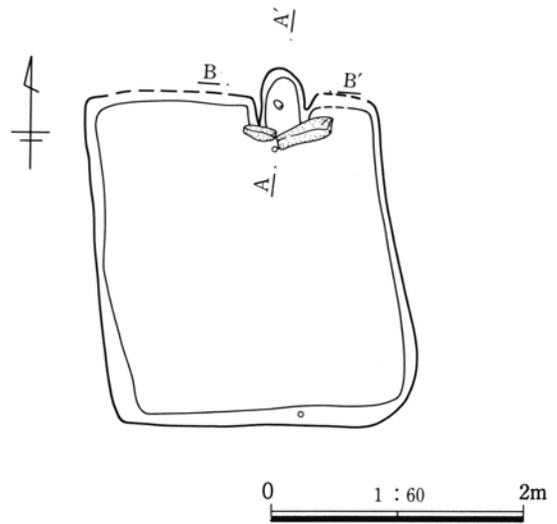
埋没土 黒褐色土が中心で、3 B住居の埋没土に比して、やや礫の混入が多い。

竈 北壁のやや東よりに位置する。袖部は左右ともに10~16cm幅で残存しており、黒褐色土にオレンジ褐色土が混入する土で構築されていた。焚き口部には、それぞれの規模が48×16×8cm、29×9×6cmの片岩系の礫が2石確認された。大きめの方は焚き口天井部材と考えられ、一面が赤色化する面が燃焼部に向いていたと思われる。もう一石は左袖部材と考えられ、一部に赤色味がみられた。また、24×9×5cmの支脚石が燃焼部より立石状に出土した。下端より8cmの所に、幅3cmほどの黒く燃焼を受けた痕跡がみられ、使用時の状況に近いと考えられる。

貯蔵穴 確認できなかった。

柱穴 確認できなかった。

遺物 出土した遺物は小破片が多く、4点の遺物を図示した。埋没土よりミニチュア土器が1点出土している。また、3の甕は9世紀後半のものと思われ、混入品と考えられる。図示したもの以外には、土師器片が坏類70片・400g、甕類が65片・680g出土している。



第134図 3 A号住居及び出土遺物

4号住居 写真 PL-47、67

位置 D-17G

形状 長方形を呈する。主軸は北を向いて59°東へ振れる。規模は3.28×2.55mである。

面積 6.75㎡ 方位 N-59°-E

床面 礫混じりの土を16~30cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。壁際及び壁には地山の礫が確認できた。

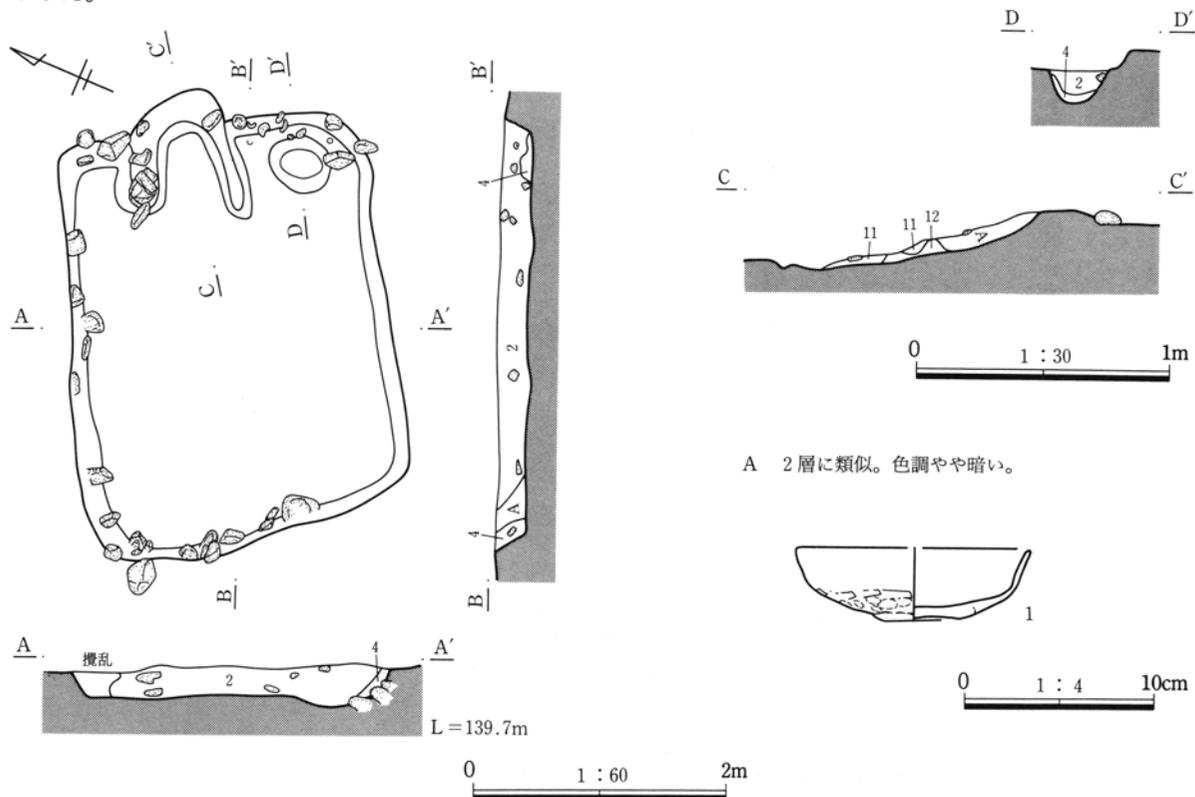
埋没土 砂礫を多量に含む黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

竈 北東の壁のほぼ中央に住居内に燃烧部を有する竈が付設されていた。残存の状態は、袖部が幅24~41cm、高さが床面より2~10cmほど残る程度であった。左袖部には部材と考えられる礫が出土したが、先端部より出土した棒状の礫(18×7×6cm)は、その半分に燃烧による赤色化がみられ、形状等からも支脚石の可能性はある。覆土には燃烧部中央に竈の崩落土があり、天井部のものと考えられる。燃烧部は奥側で緩やかに立ち上がる。煙道部は確認できなかった。

貯蔵穴 竈の南側に位置し、やや楕円形を呈する。規模は51×42×25cmである。

柱穴 確認できなかった。

遺物 遺物の出土は少なく、東壁際の床直上より出土の坏1点を図示した。これは貯蔵穴内より出土の破片と接合した。図示したもの以外に、土師器片が坏7片・60g、甕30片・370gが出土している。



第135図 4号住居及び出土遺物

5号住居 写真 PL-47、67

位置 I-19G

形状 隅丸方形を呈し、主軸は北を向いて西へ振れる。壁際には地山の礫がみられる。規模は3.35×3.31mである。

面積 7.64m² 方位 N-38°-W

床面 礫混じりの土を17~29cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

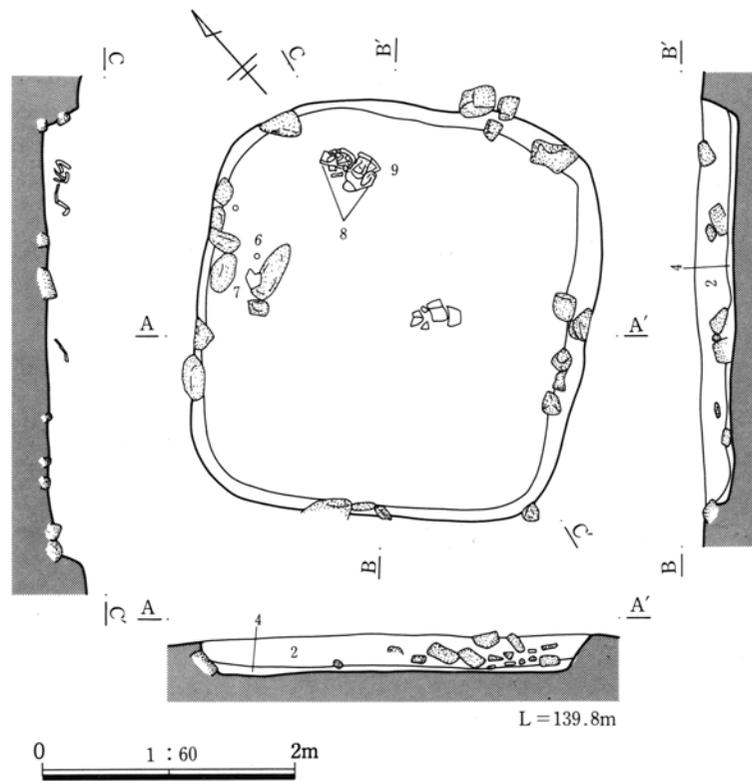
埋没土 砂礫を多量に含む黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

竈 北西壁の中央付近に付設されていたと考えられる。この部分には一部に焼土がみられ、また、構築部材と考えられる片岩系の礫がみられる。壁際にある32×12×8cmの片岩系の礫には扁平な面に火を受けた痕跡がみられ、天井部材と考えられる。

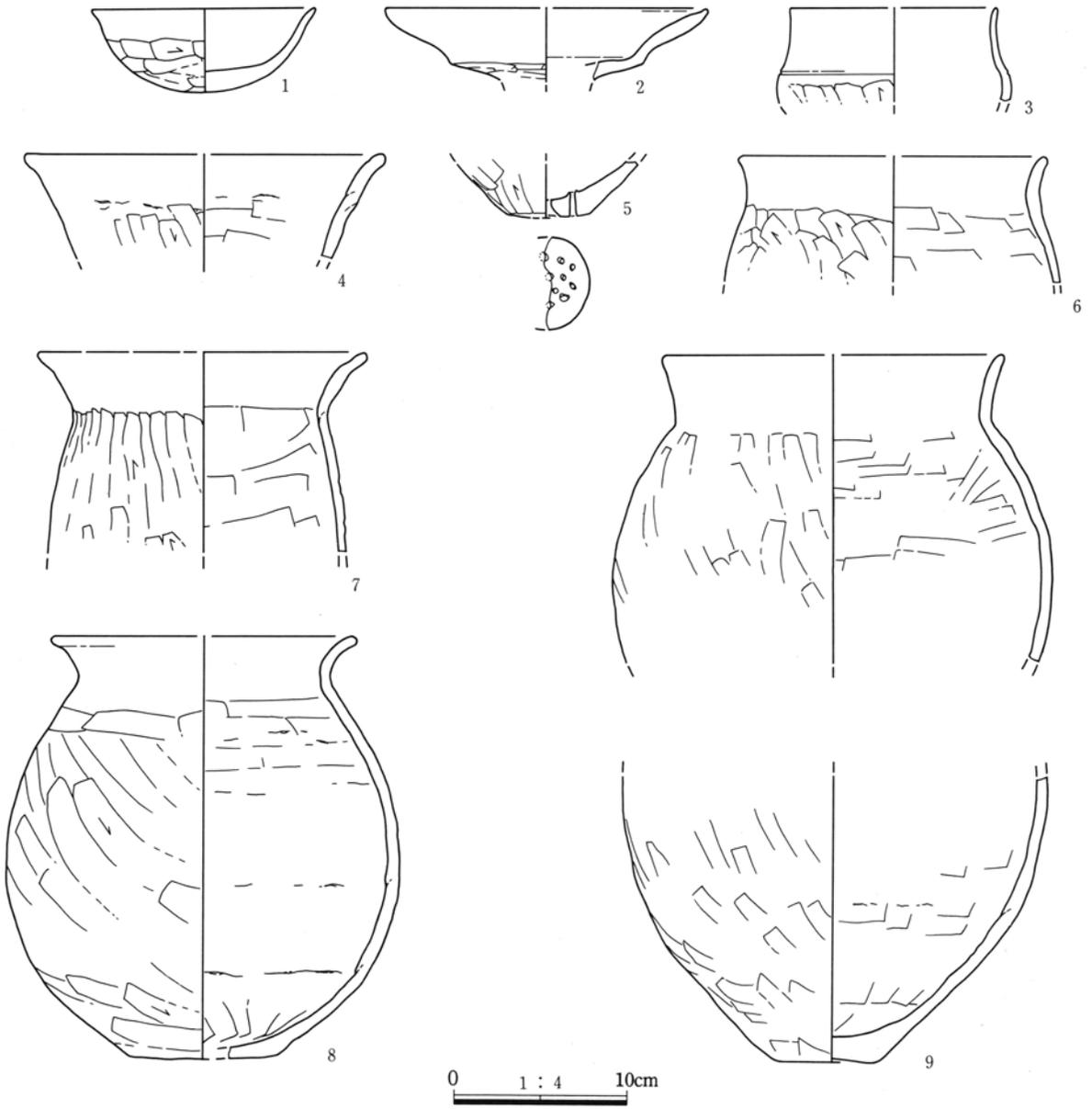
貯蔵穴 確認できなかった。

柱穴 確認できなかった。

遺物 遺物は住居北側にやや偏在している傾向がある。9点を図示したが、6から9の甕4点は床直上から出土している。5の甕は整形後に外面より底部を穿孔している。9の甕は上半部と下半部で接合する面がなかったが、同一個体である。図示したもの以外に土師器片が、坏20片・200g、甕類320片・3,560g出土している。



第136図 5号住居



第137图 5号住居出土遺物

6号住居 写真 PL-48、68

位置 D-20G 写

形状 状居の南側は調査区外になるが、主軸をほぼ南北にとる方形を呈すると考えられる。規模は計測できる主軸に直交する部分で5.88mである。

面積 不明 方位 N-21°-W

床面 礫混じりの黒褐色土を27~44cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である

埋没土 砂礫を多量に含む黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

竈 北壁のほぼ中央で住居内に燃烧部を有する竈が付設されていた。比較的良好な状態で残存しており、左右袖ともに部材となった石材が一部残っていた。特に左袖中央付近には、50×22×9cmの礫が立石状に残っており、その燃烧部側の面は火を受けた痕跡を残していた。また、焚き口部には焚き口天井石と考えられる59×12×6cmの礫が2つに割れた状態であり、一面に火を受けた跡がみられた。燃烧

部には、ほぼ完形の甕があり、使用時に近い位置にあると推測できる。また、この甕の下、燃烧部床面には、倒れてはいるが使用時には支脚石として使われたと思われる、火を受けている礫が出土している。燃烧部床面は、ほぼ住居壁の辺りで立ち上がり、煙道へと続いていく。

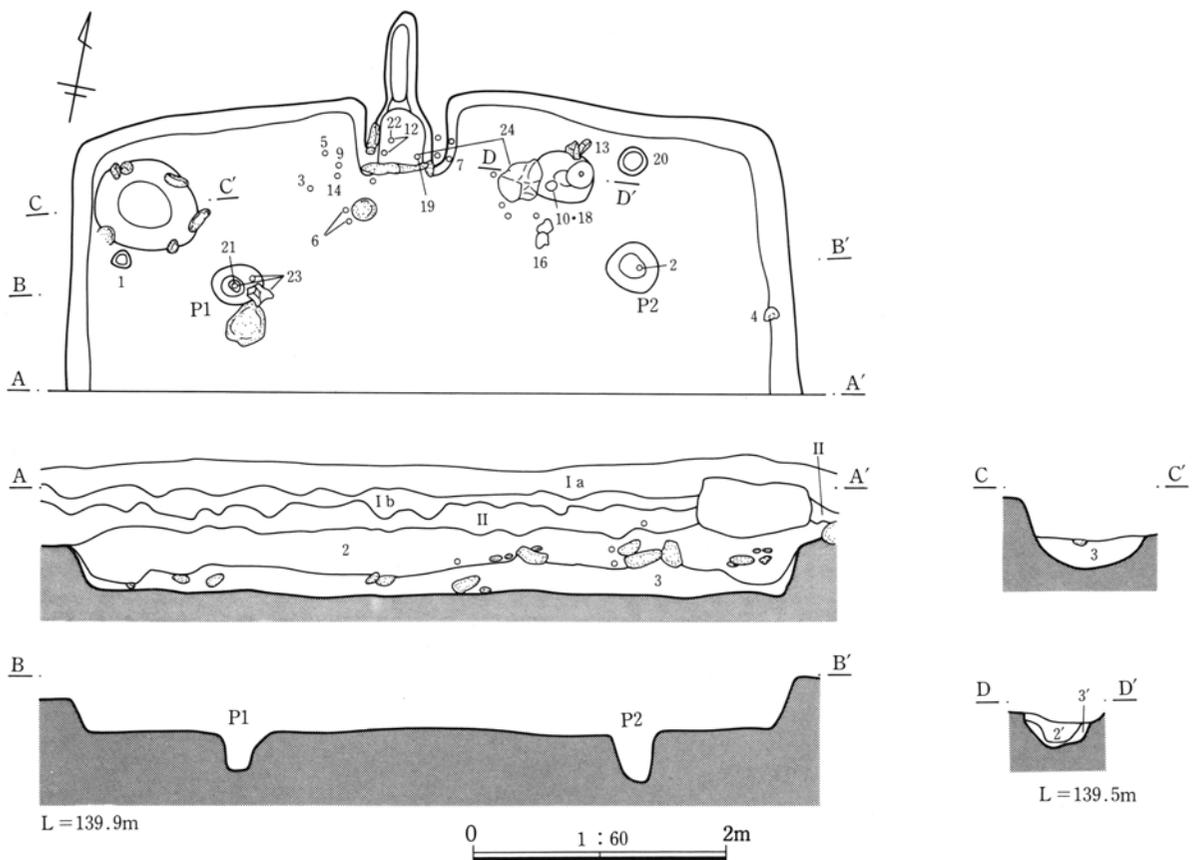
貯蔵穴 北西隅にある1号貯蔵穴、竈の東脇にある2号貯蔵穴を確認した。1号、2号共に楕円形を呈し、規模はそれぞれ87×74×34cm、54×42×28cmである。2号貯蔵穴の覆土には焼土粒、炭化物粒がみられた。

柱穴 2本のピットを確認した。規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

P1 : 42×30cm P1~P2 : 3.20m

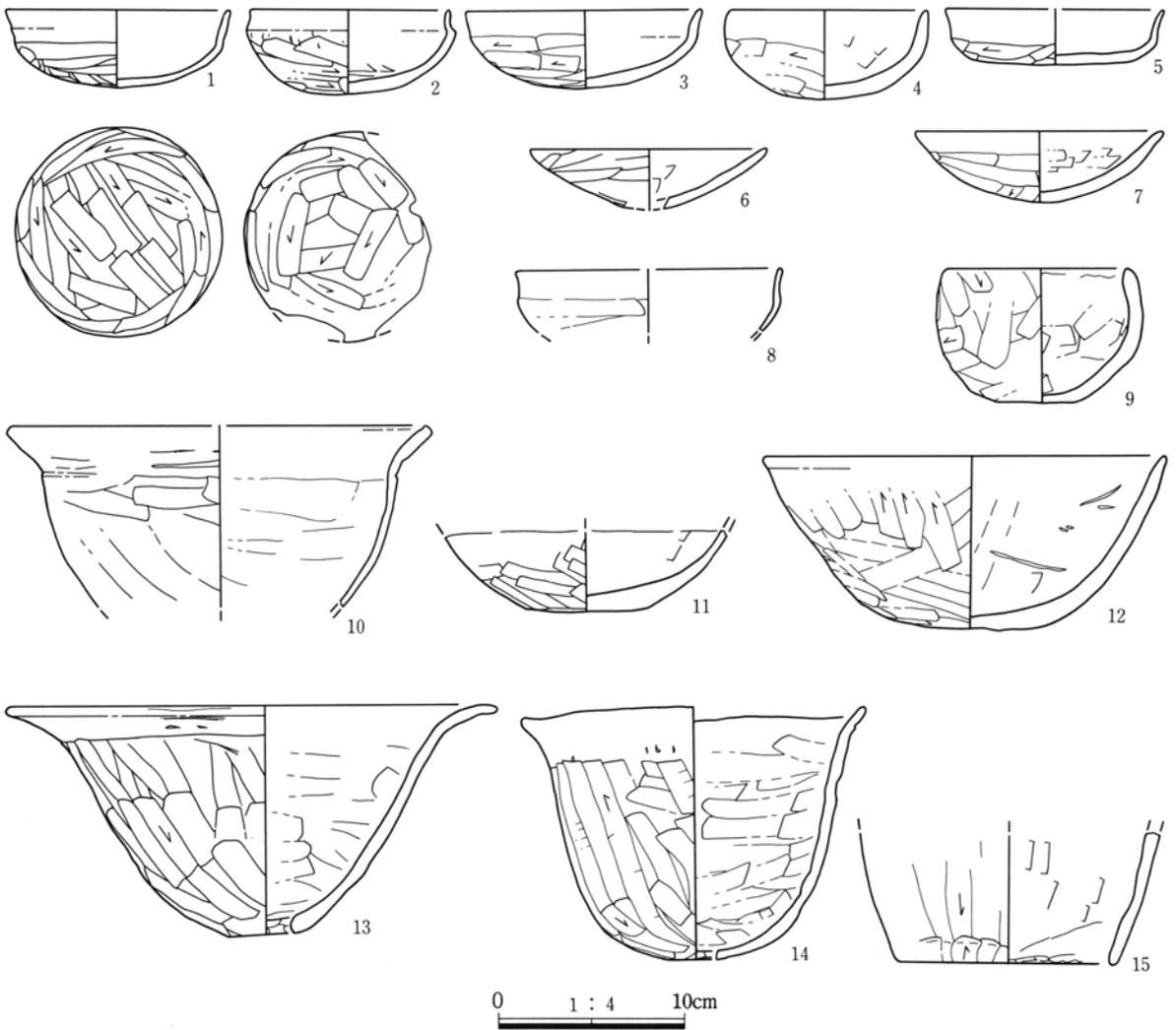
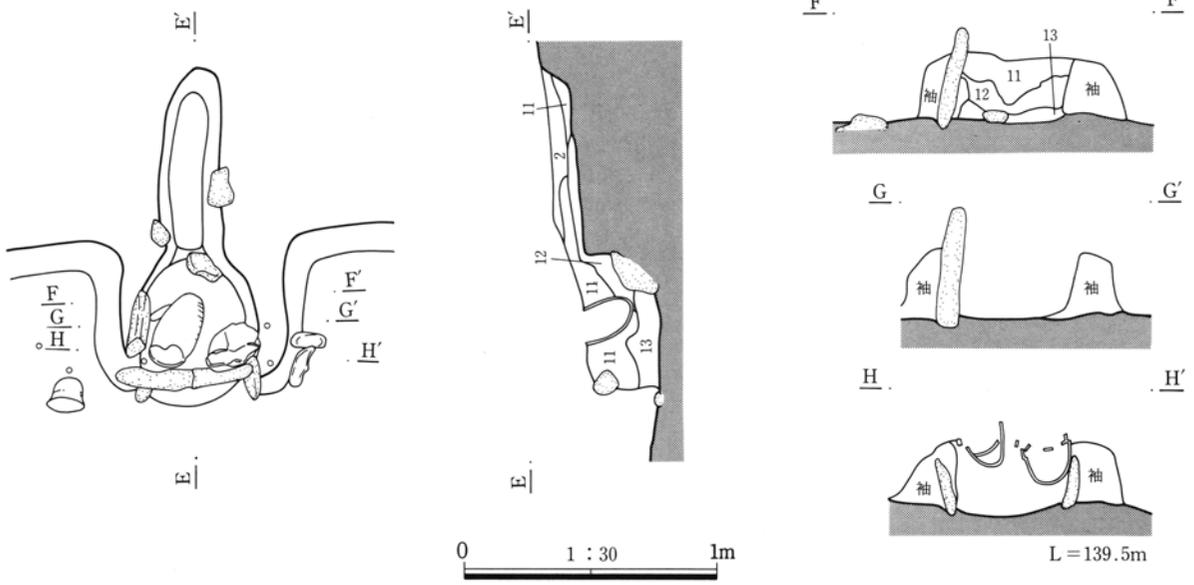
P2 : 43×42cm

遺物 竈周辺、及び竈内より多数の土器が出土した。また、図示したもの以外にも、およそ5,900gの土師器片が出土している。

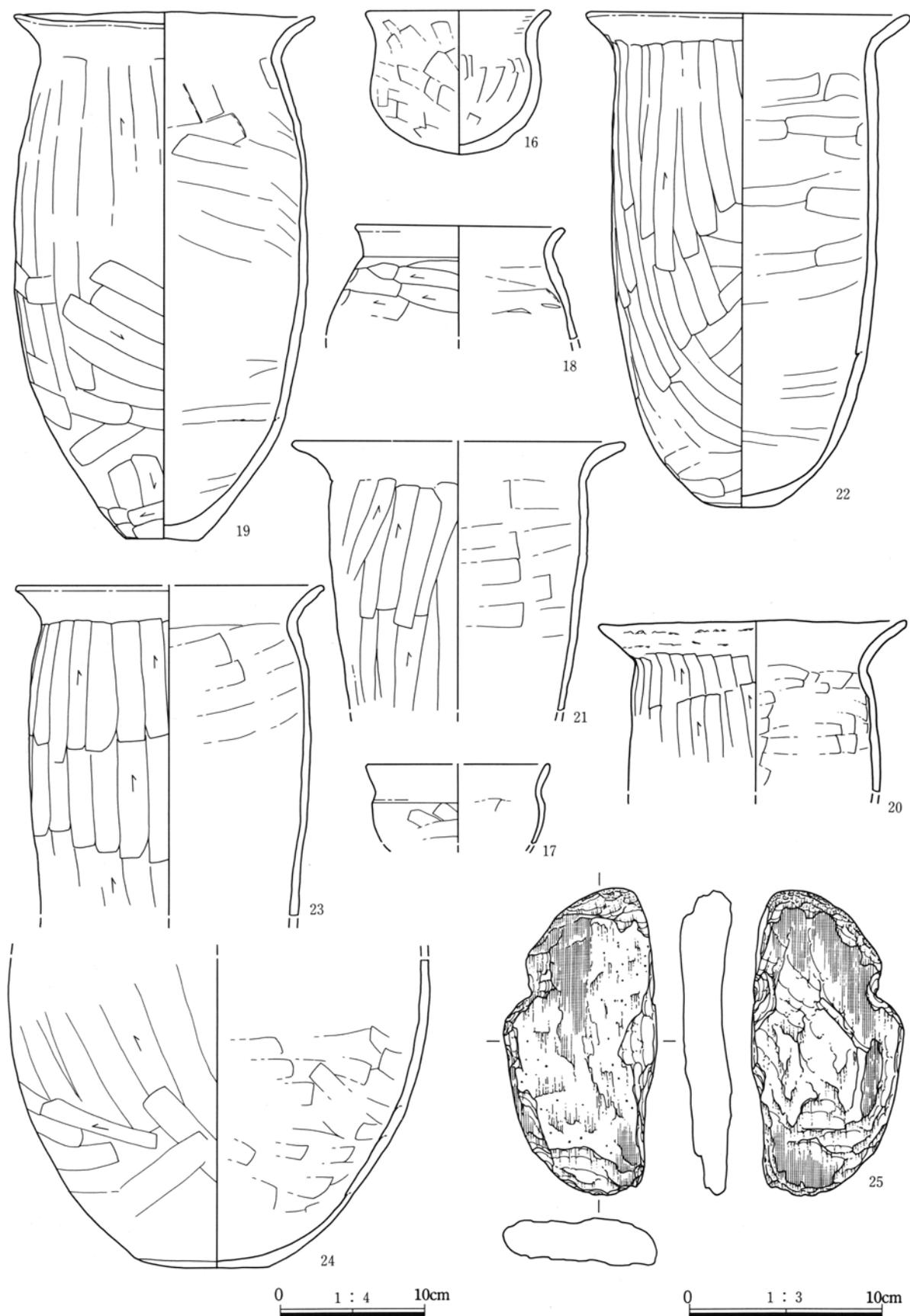


第138図 6号住居

1-1 竖穴住居



第139图 6号住居竈及び出土遺物



第140図 6号住居出土遺物

7号住居 写真 PL-48、69

位置 E-26G

重複 1号土坑に先出する。

形状 ほぼ南北に主軸をとる長方形を呈するが、西壁に対して東壁がやや短い。規模は5.10×4.13mである。

面積 16.82㎡ 方位 N-29°-W

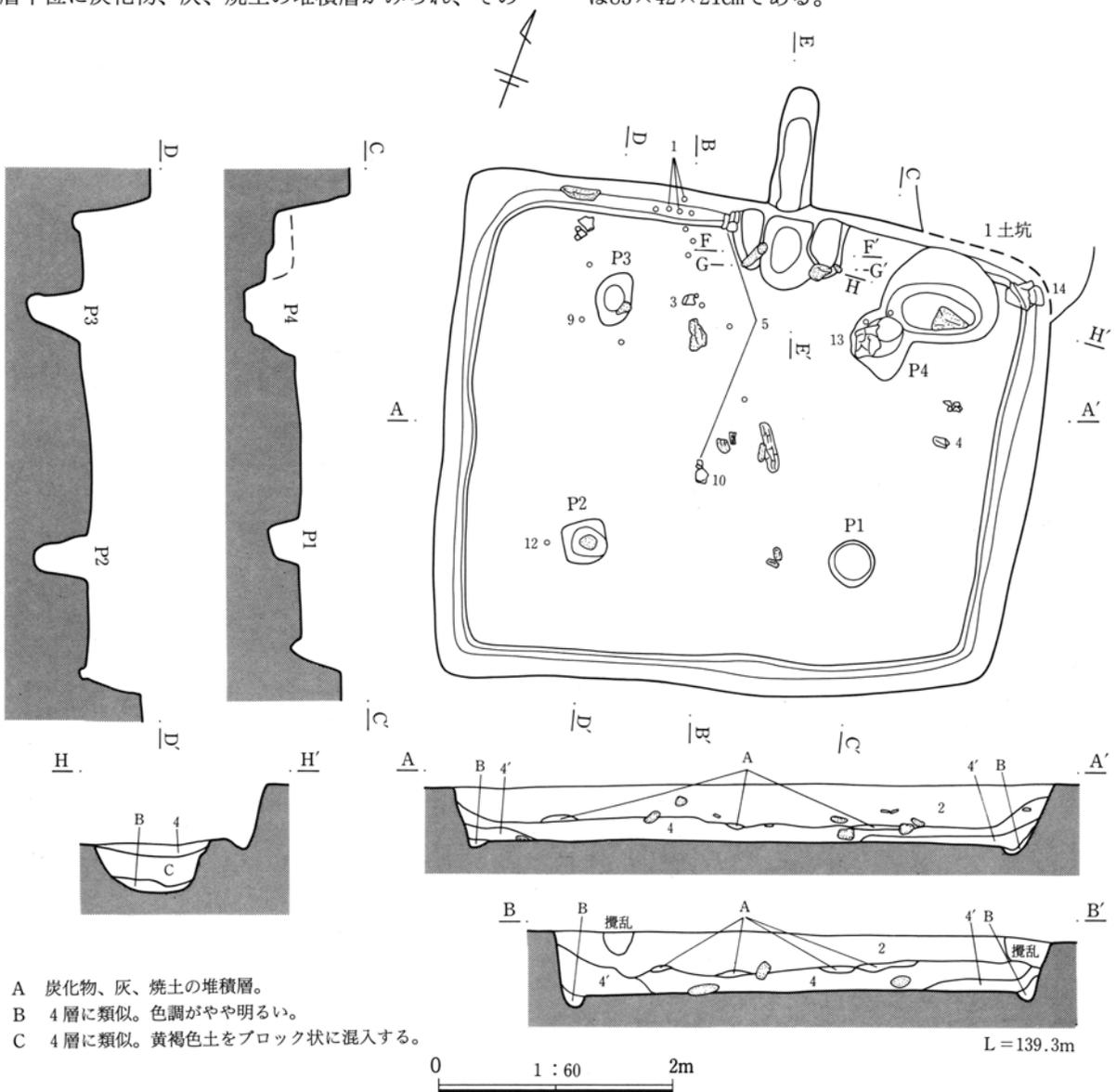
床面 礫混じりの土を55~70cmほど掘り込み、暗灰黄色土を中心に貼床を施して床面としている。北西部に向かって若干の傾斜がみられる。

埋没土 砂礫を多量に含む黒褐色土が中心。埋没土層中に炭化物、灰、焼土の堆積層がみられ、その

上面より、若干の炭化材等が出土した。しかし、これは本住居に関係する物ではなく、埋没途中に窪地化した住居内において、焚き火等があったものと考えられる。

竈 北壁のやや東よりで住居内に燃焼部を有する竈が付設されていた。左右の袖部には袖部材として使われたと考えられる礫が出土した。燃焼部床面は、住居床面（貼床面）より24cm程深く掘り込まれており、住居壁のラインで立ち上がり、煙道が75cm程水平に延びて、緩やかに立ち上がる。

貯蔵穴 竈の東側に位置する。楕円形を呈し、規模は83×42×21cmである。



- A 炭化物、灰、焼土の堆積層。
- B 4層に類似。色調がやや明るい。
- C 4層に類似。黄褐色土をブロック状に混入する。

第141図 7号住居

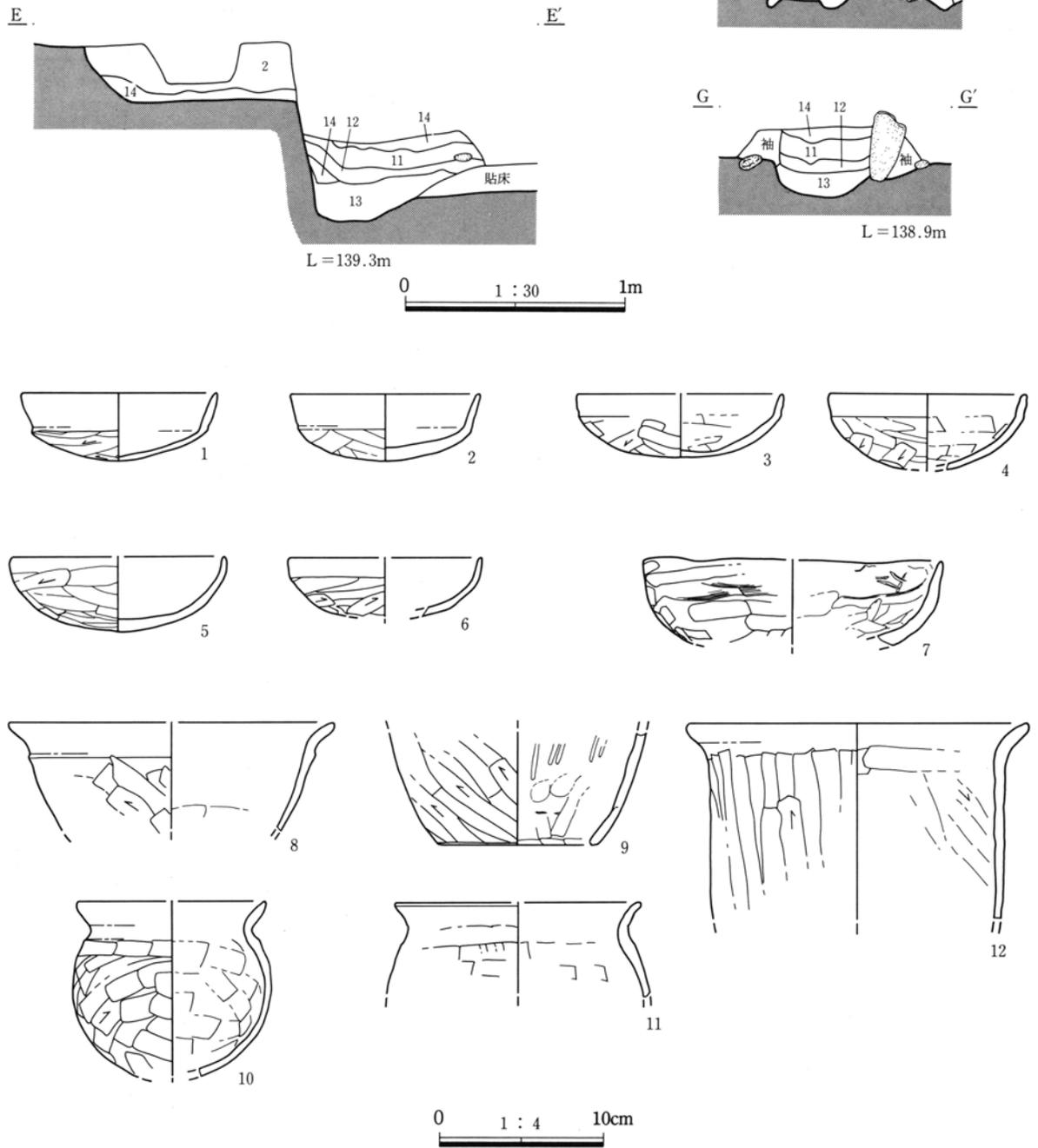
第4章 福島駒形遺跡

柱 穴 支柱穴4本を確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

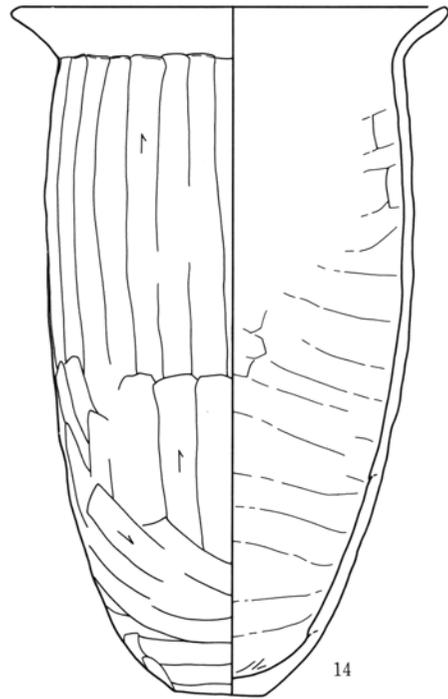
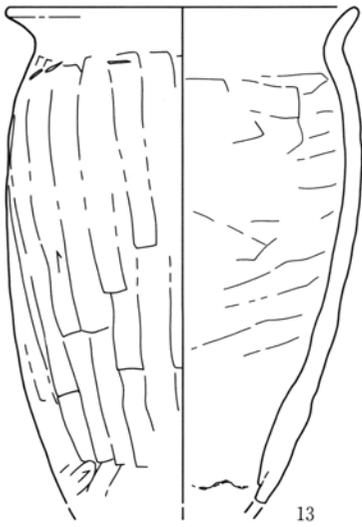
- P 1 : 38×25cm P 1～P 2 : 2.30m
- P 2 : 36×50cm P 2～P 3 : 2.10m
- P 3 : 49×44cm P 3～P 4 : 2.36m
- P 4 : 50×41cm P 4～P 1 : 2.06m

周 溝 右袖から貯蔵穴までの間を除き、壁面に沿って幅5～17cm、深さ3～9cmの規模で巡る。

遺 物 遺物は住居全体に散在していたが、竈及び貯蔵穴周辺にやや偏在する傾向があった。図示したもの以外には、土師器片が甕764片・8,680g、坏163片・1,020g、その他470gが出土。また、須恵器甕片が7片出土している。



第142図 7号住居竈断面及び出土遺物(1)



0 1 : 4 10cm

第143図 7号住居出土遺物(2)

8号住居 写真 PL-48、69

位置 J-23G

形状 方形又は長方形と思われるが、ほとんどが調査区外にあたるため不明瞭である。

面積 不明 **方位** 不明

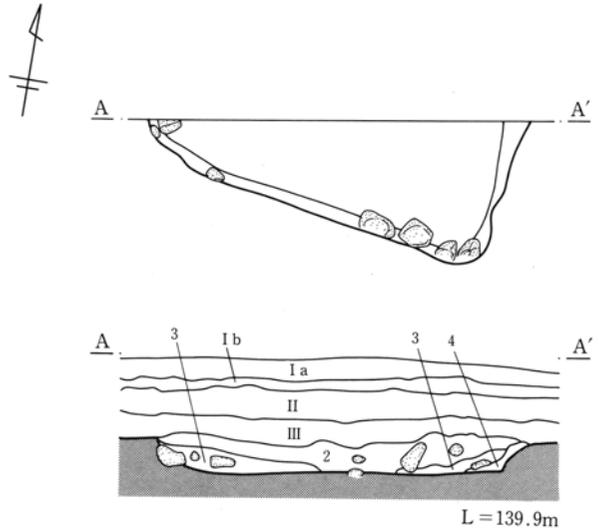
床面 礫混じりの土を18~25cm掘り込んで床面としている。確認できた部分はほぼ平坦である。

埋没土 砂礫混じりの黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

貯蔵穴 確認できなかった。

柱穴 確認できなかった。

遺物 小破片のみの出土であった。土師器甕と思われる破片が20片・178g、坏と思われる破片が19片・86g出土した。



0 1 : 60 2m

第144図 8号住居

9号住居 写真 PL-48、69

位置 K-26G

形状 ほとんどが調査区外のため不明瞭であるが、方形と考えられる。規模は確認できた南側の辺で5.19mである。

面積 不明 方位 不明

床面 礫混じりの土を32~46cm掘り込み、暗灰黄色土で貼床を施し床面としている。ただし、貼床は住居南側から東側にかけての部分でのみ確認できた。また、中央部には焼土がみられた。

埋没土 砂礫混じりの黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

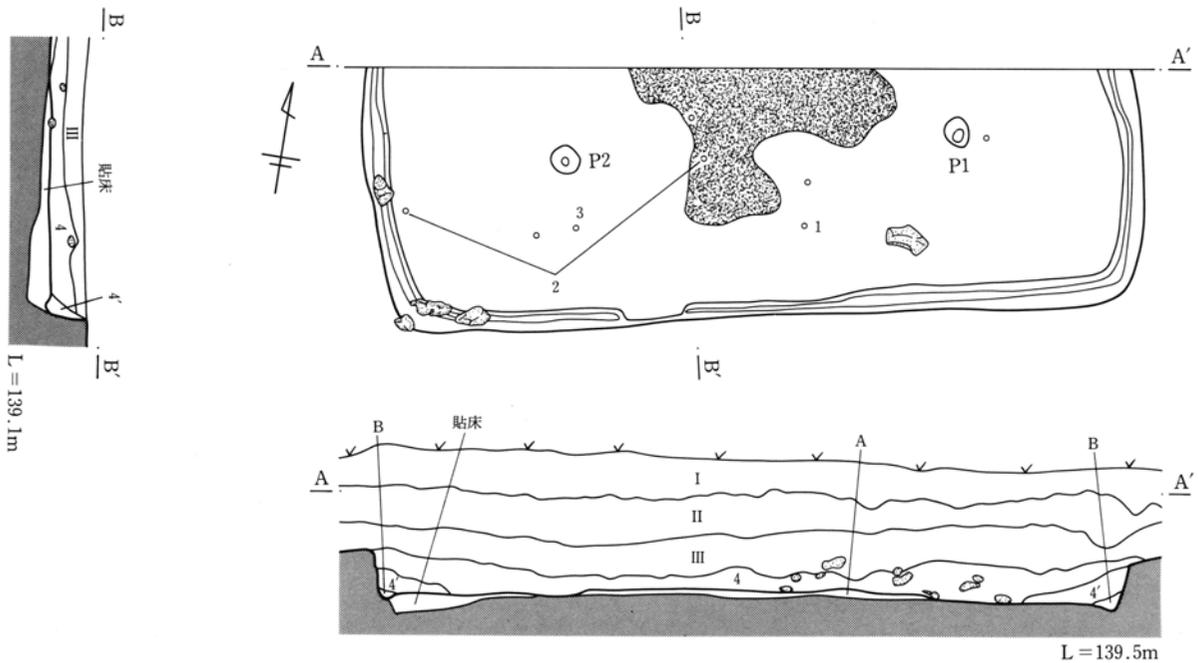
貯蔵穴 確認できなかった。

柱穴 2本のピットを確認した。規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

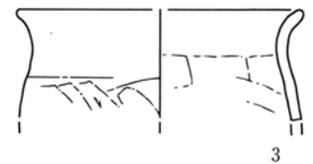
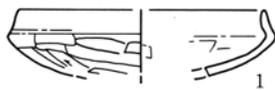
P1 : 24×35cm P1~P2 : 3.15m

P2 : 22×30cm

遺物 坏2点、甕1点を図示した。図示したもの以外には土師器片が82片・585gが出土した。また、弥生土器片が数片出土している。



A 4'層に類似。焼土粒の混入が多い。
B 4層に類似。色調がやや明るい。



0 1 : 4 10cm

第145図 9号住居及び出土遺物

10号住居 写真 PL-48、69

位置 K-27G

重複 3号土坑に先行する。

形状 住居南壁際のごく一部以外は調査区外となるため不明瞭である。

面積 不明 方位 不明

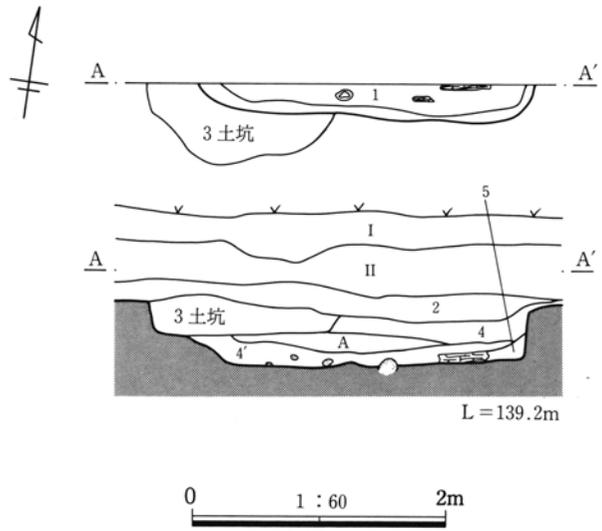
床面 礫混じりの土を掘り込んで床面としている。南東隅で深度は42cmである。

埋没土 上層には砂礫混じりの黒褐色土が、下層には焼土粒や炭化物を含む層が堆積する。自然埋没の状態を示す。

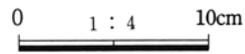
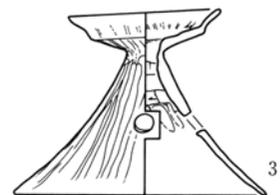
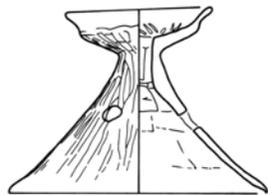
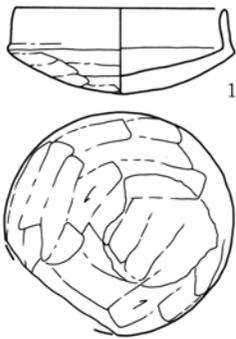
貯蔵穴 確認できなかった。

柱穴 確認できなかった。

遺物 上層より古墳前期の器台がほぼ完形で2点、床上12cmの高さより後期の坏が出土している。その他図示したもの以外にはS字状口縁台付甕4片、土師器甕36片、坏1片が出土している。



A 4層に類似。焼土粒の混入やや少ない。



第146図 10号住居及び出土遺物

11号住居 写真 PL-49、69、70

位置 K-30G

形状 長軸をほぼ東西にとる長方形を呈する。規模は6.77×5.34mである。

面積 30.27㎡ 方位 N-7°-E

床面 礫混じりの土を47~74cm掘り込んで床面とし、東に向かって若干の傾斜がみられる。

埋没土 上層にはAs-B及びAs-C軽石を含む黒褐色土が、下層には黄褐色土を含む黒褐色土が堆積する。また、埋没土層中位には多量の炭化材が確認されたが、本住居に伴うものとは考え難い。

炉 西壁よりの中央部に位置する。規模は長軸×短軸×深さで45×42×4cmとなる。東側には31×

7×6cmの棒状の炉石が配されており、一部に火を受けた痕跡がみられた。

貯蔵穴 東壁際の南よりに位置する。規模は61×60×20cmで円形を呈する。

柱穴 主柱穴4本を含む6本のピットを確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

P1 : 45×9cm P1~P2 : 2.65m

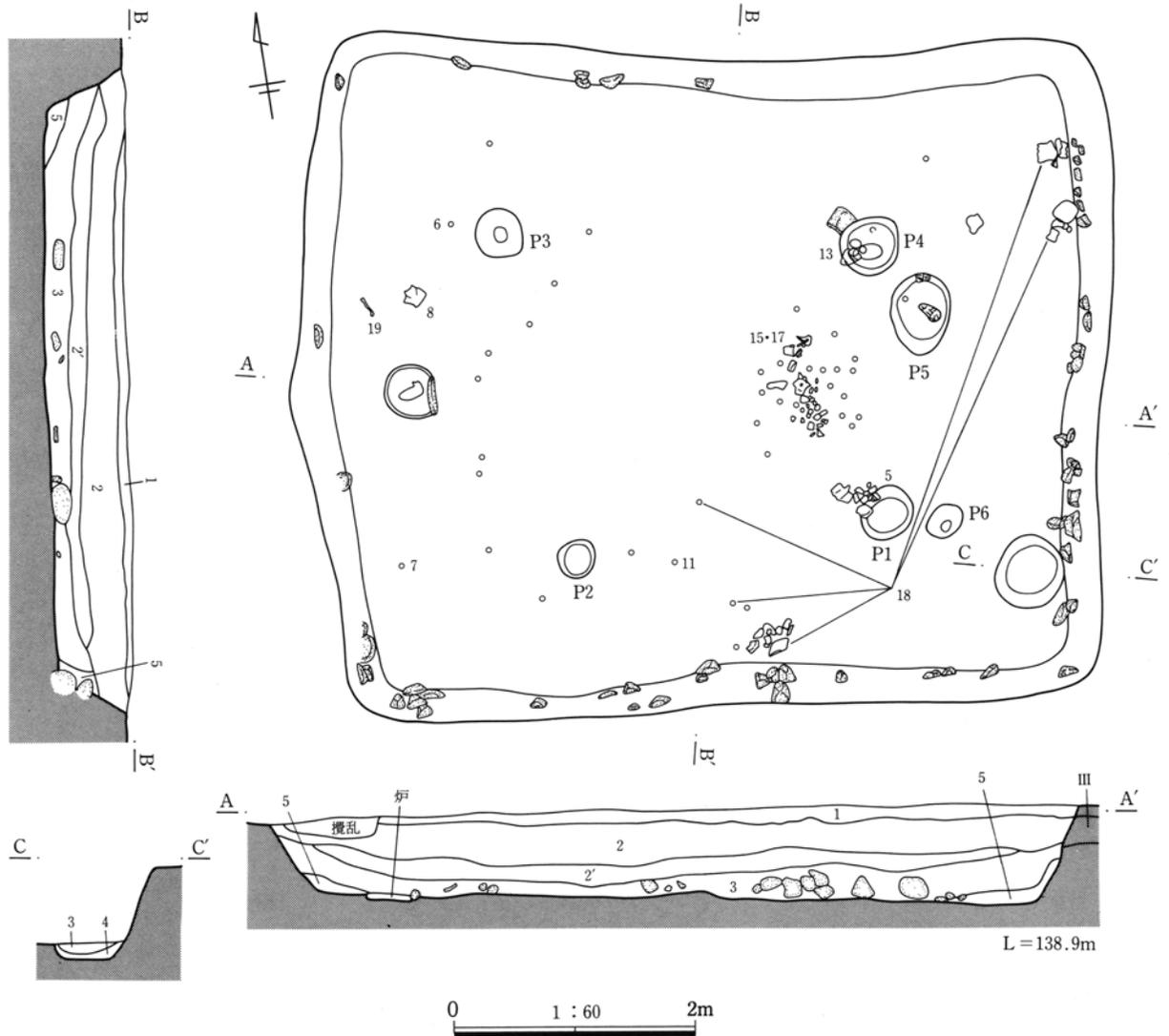
P2 : 32×4cm P2~P3 : 2.78m

P3 : 43×10cm P3~P4 : 3.10m

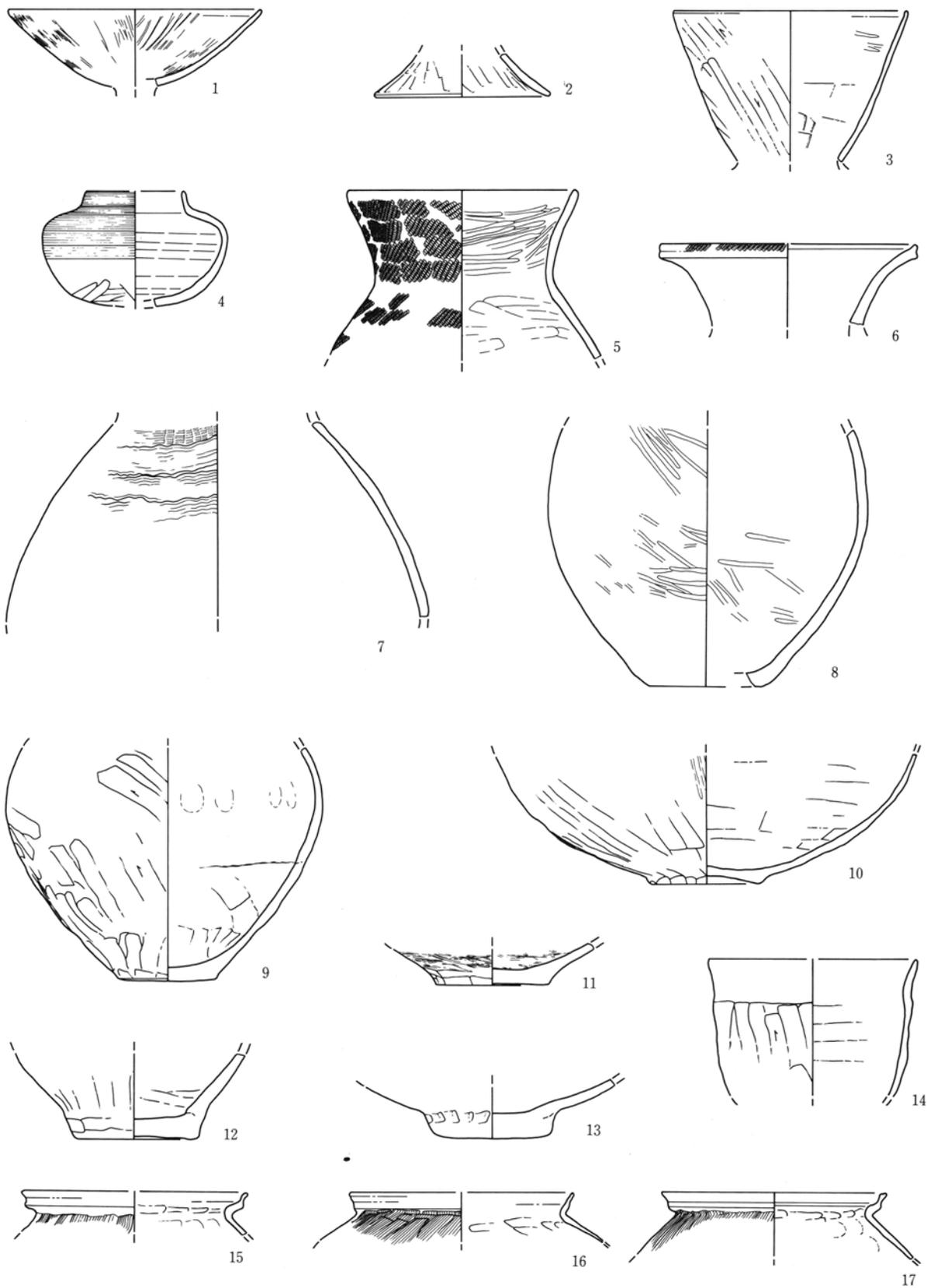
P4 : 50×14cm P4~P1 : 2.20m

P5 : 68×7cm

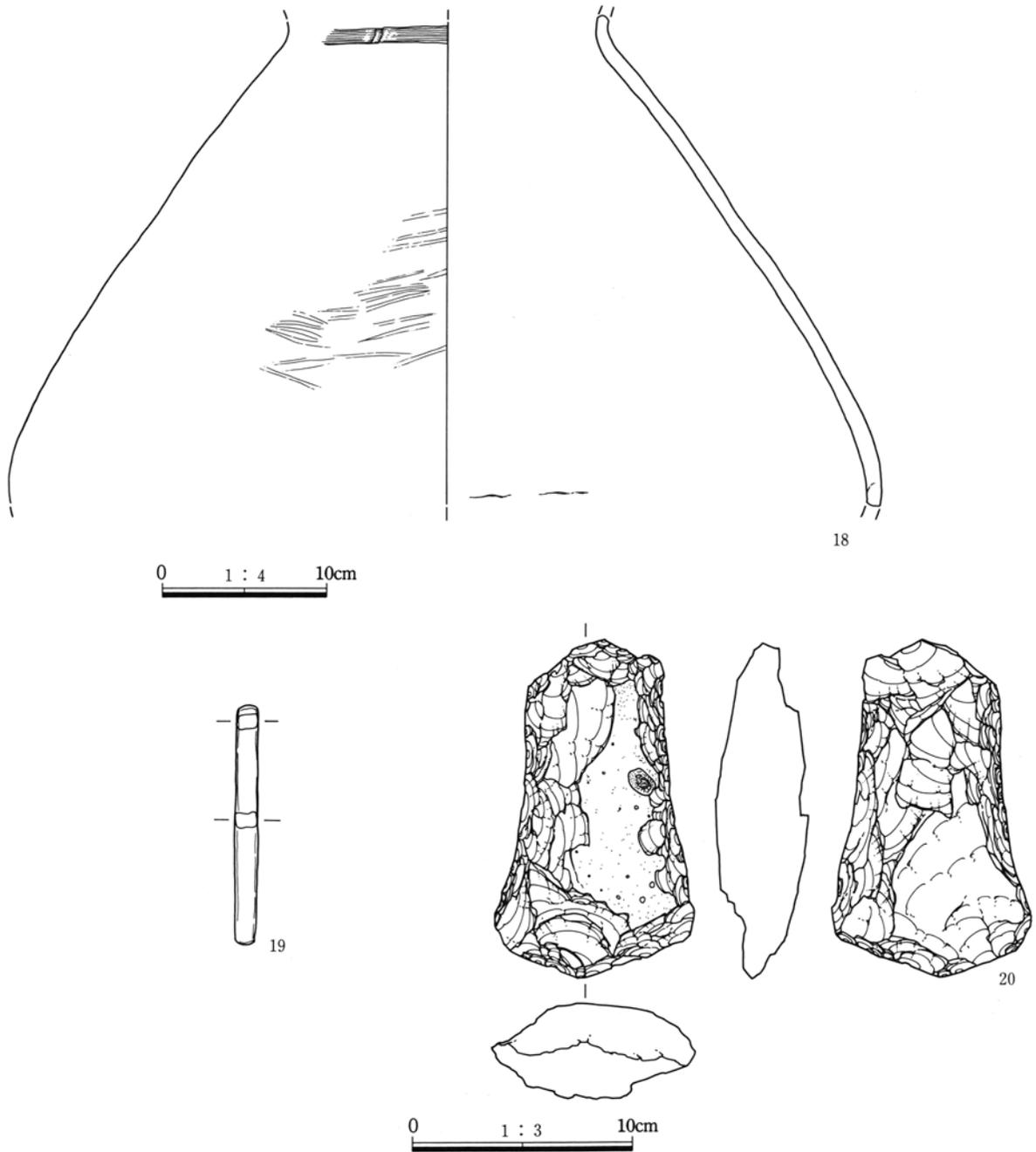
P6 : 32×13cm



第147図 11号住居



第148图 11号住居出土遺物(1)



第149図 11号住居出土遺物(2)

遺物 土器を中心に20点の遺物を図示した。樽式、赤井戸式の壺、S字状口縁台付甕などが出土している。遺物の出土状況は住居中央東寄りやや集中してみられる。図示したもの以外にはS字状口縁台付甕片315片・1,920g、土師器片2,340片・15,510gなどが出土。また、4の短頸壺は須恵器であり、混入品と考えられる。

12号住居 写真 PL-49、70

位置 K-36G

形状 長軸を東西にとる正方形を呈し、規模は4.13×3.90mである。

面積 12.08㎡ 方位 N-3°-W

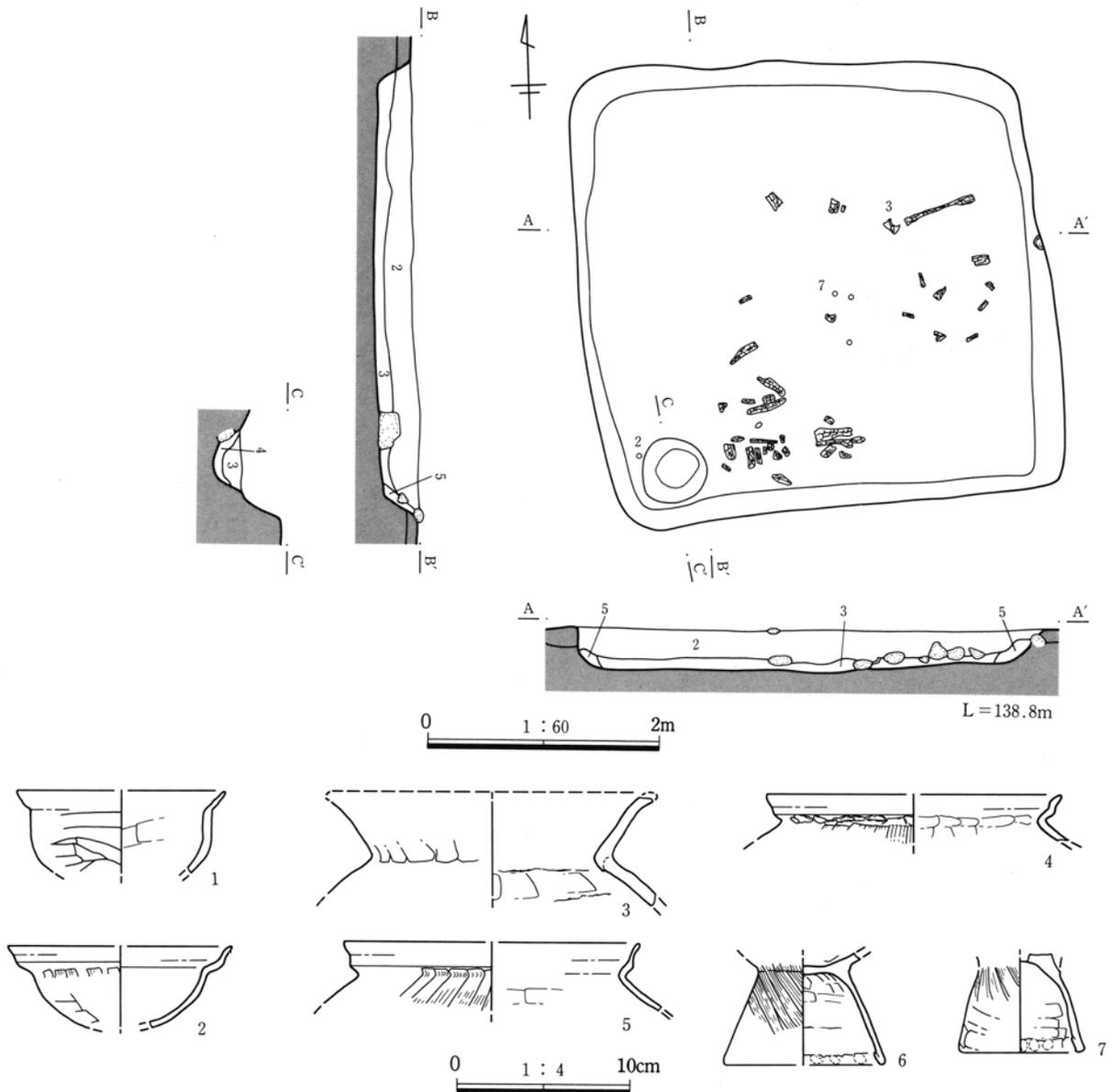
床面 礫混じりの土を25~36cm掘り込み床面としている。

埋没土 上層にAs-B及びAs-C軽石を含む黒褐色土が、下層には黄褐色土を含む黒褐色土が堆積する。また、この層中より炭化材が出土している。自然埋没の状態を示す。

貯蔵穴 南西隅に位置する。規模は60×58×26cmで円形を呈する。

柱穴 確認できなかった。

遺物 遺物の出土は小破片が多く、7点を図示したが、床直上のものはない。図示したもの以外には、4,831gの土器小破片が出土しているが、この中には樽式、赤井戸式の破片も含まれている。



第150図 12号住居及び出土遺物

13号住居 写真 PL-49、70、71

である。

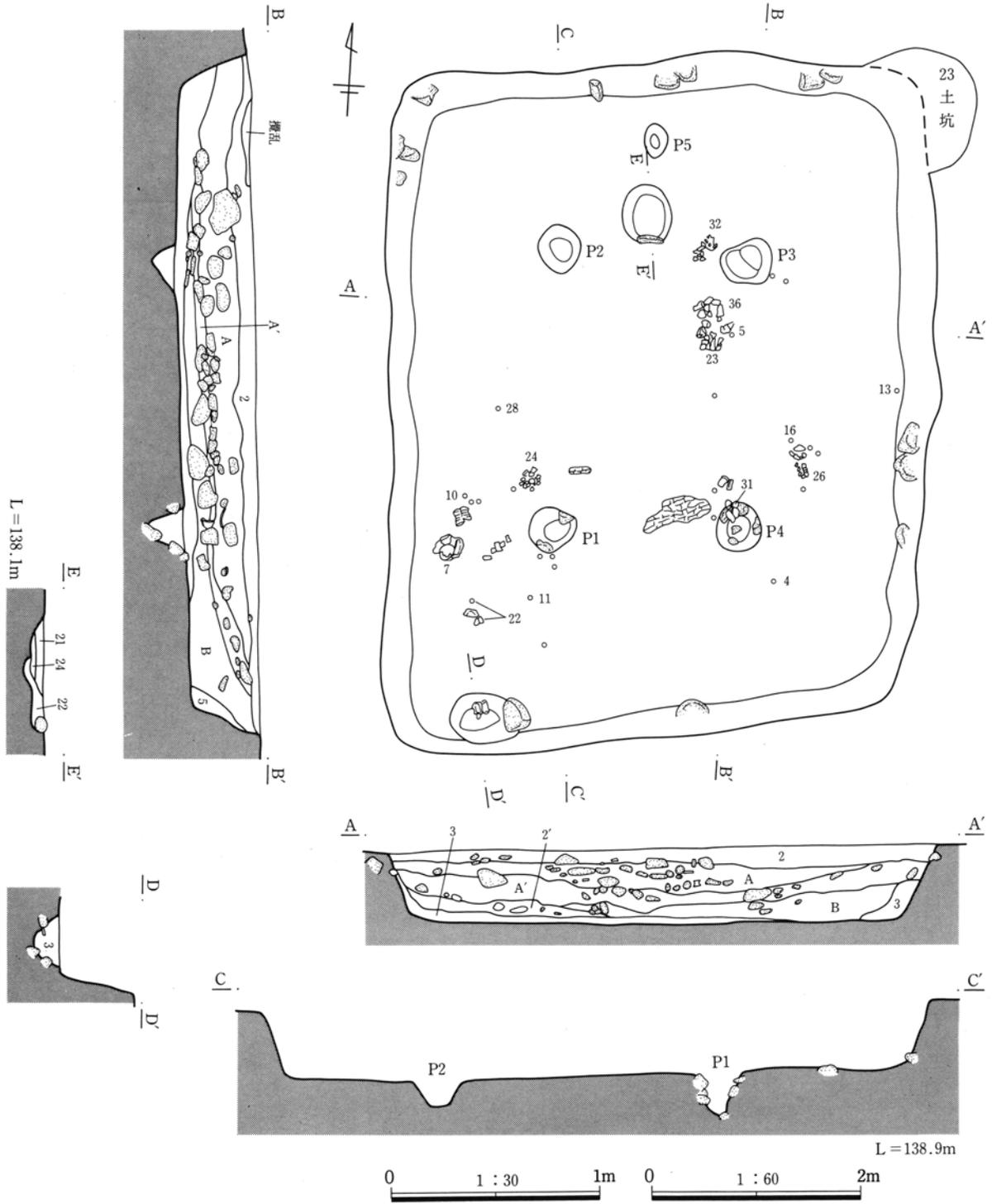
位置 K-37G

面積 25.30m² 方位 N-5°-E

重複 23号土坑に後出する。

床面 礫混じりの土を55~67cm掘り込んで床面とし、南から北にかけて若干の傾斜がみられる。

形状 長軸を南北にとる長方形を呈するが、西壁に対して東壁はやや短くなる。規模は6.54×5.29m



- A 2層に類似。やや明るく、礫が多量に混入。
- B 2'層に類似。やや明るく、しまり弱い。

第151図 13号住居

埋没土 礫混じりの黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。また、埋没土層中からは炭化材が出土したが、住居床面の焼土化はみられず、本住居埋没途中に何らかの火入れがあったものと考えられる。

炉 西壁よりの中央部に位置する。楕円形を呈し、規模は56×49×4cmである。南側には片岩系の炉石を配しており、その燃焼面側には、火を受けた痕跡がみられた。

貯蔵穴 北壁際の西よりに位置する。楕円形を呈し、

規模は68×49×4cmである。

柱 穴 支柱穴4本を含む5本のピットを確認した。

P 1 : 50×41cm P 1～P 2 : 2.70m

P 2 : 47×22cm P 2～P 3 : 1.84m

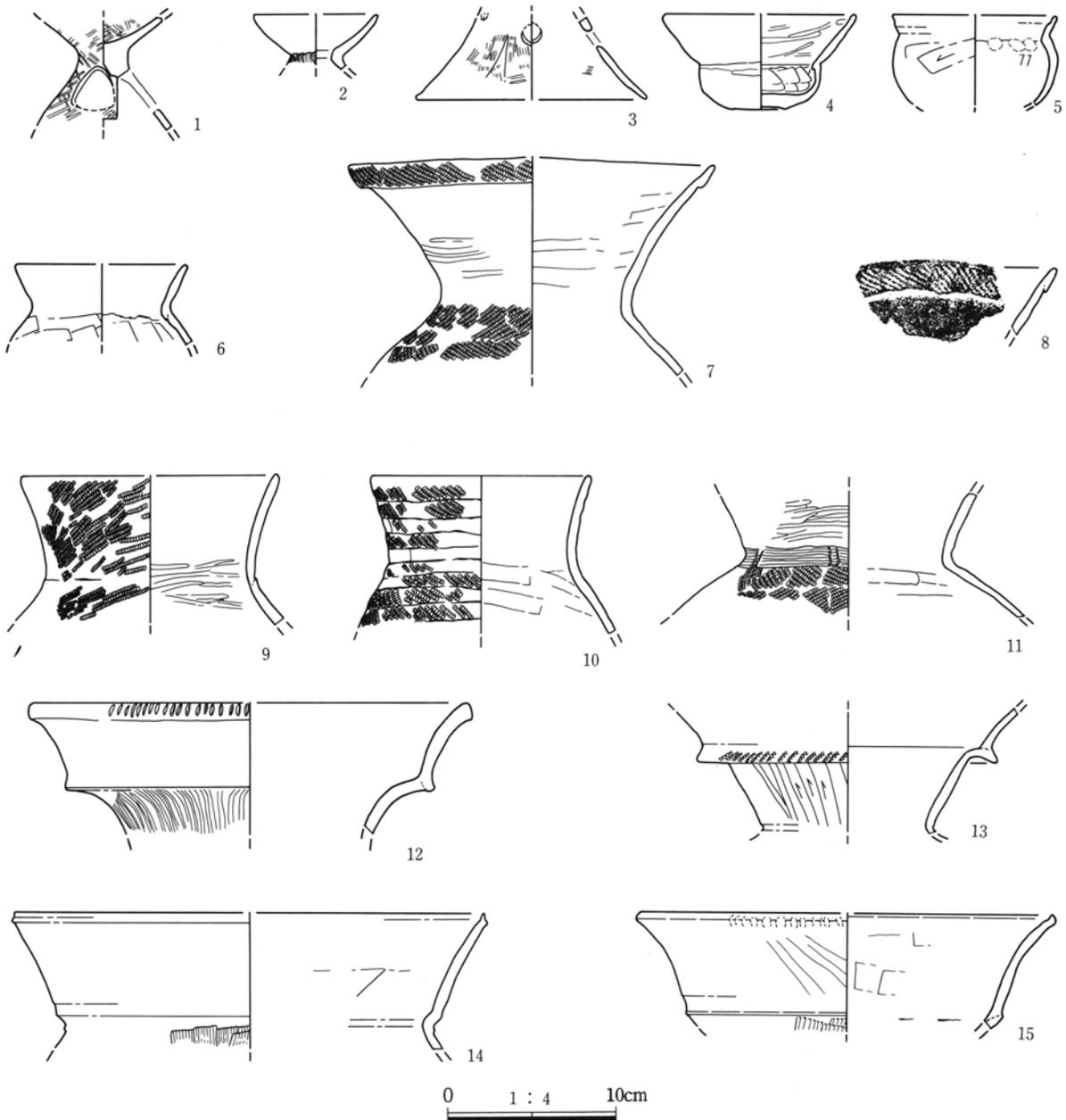
P 3 : 50×20cm P 3～P 4 : 2.60m

P 4 : 46×38cm P 4～P 1 : 1.80m

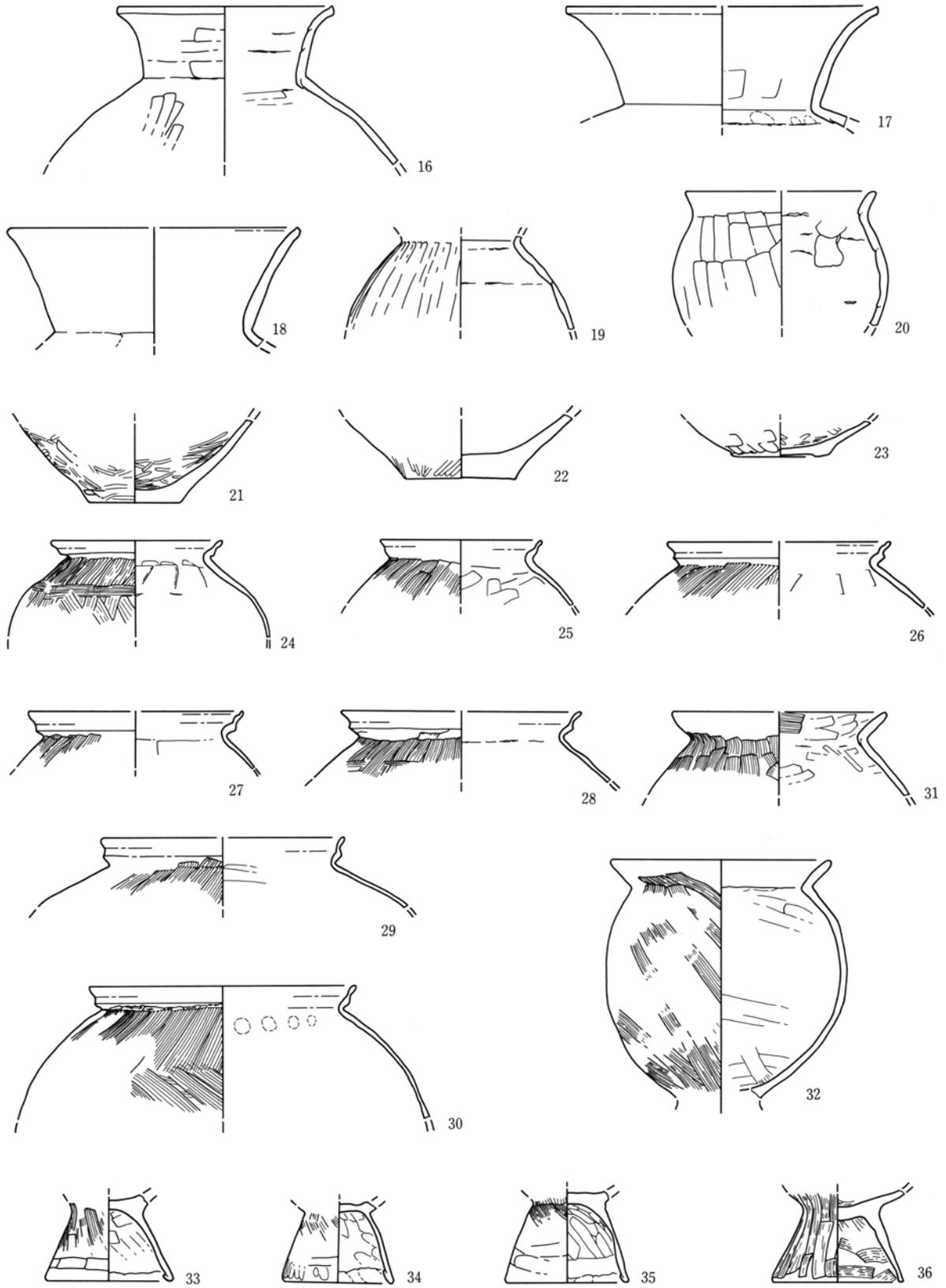
P 5 : 32×28cm

遺 物 遺物量は多く、住居全体に散在していた。

図示したもの以外にも約13kgの土器片が出土した。



第152図 13号住居出土遺物(1)



0 1 : 4 10cm

第153图 13号住居出土遺物(2)

14号住居 写真 PL-49、71

位置 M-44G

形状 ほぼ正方形を呈するが、北東角がやや湾曲する。規模は4.29×3.99mである。

面積 13.24m² 方位 N-9°-W

床面 礫混じりの土を15~24cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 As-C軽石を含む礫混じり黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

炉 中央やや東よりに位置する。楕円形を呈し、規模は62×33×1cmで、炉の北側には焼土粒が広がっていた。また、炉内にある礫は、出土状況及び被熱面等から炉石とは考え難い。

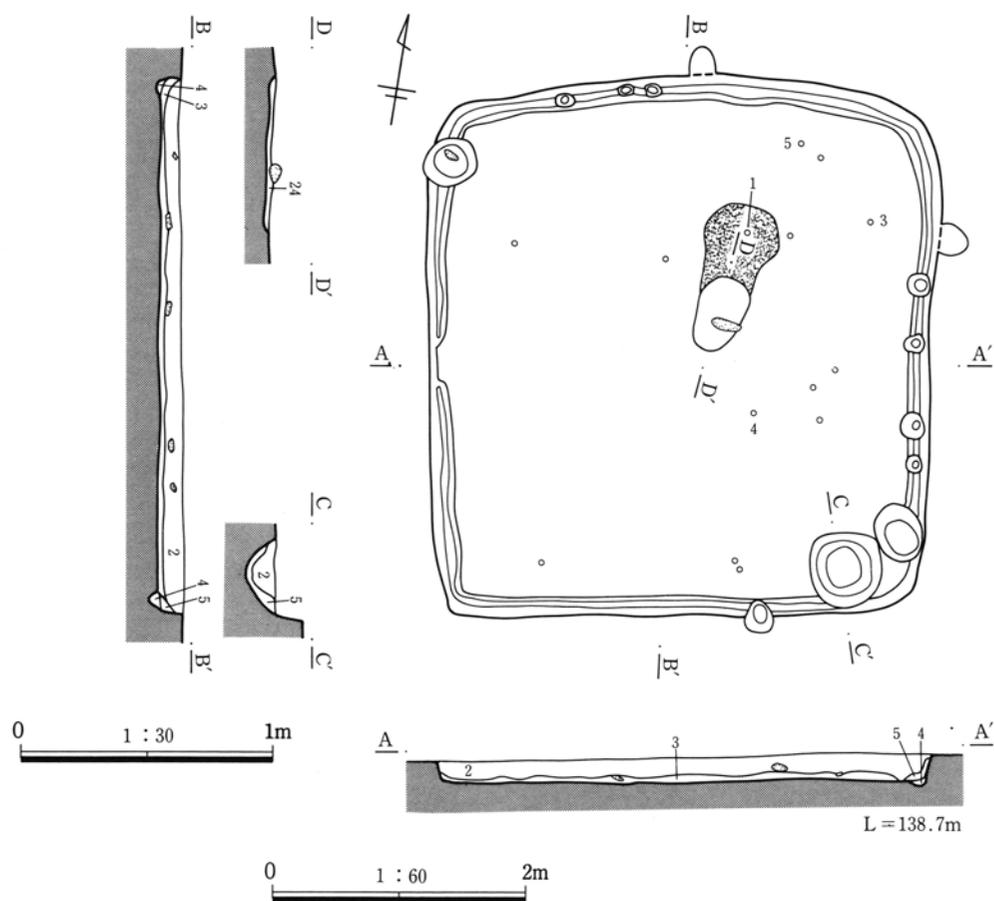
貯蔵穴 南壁際の東よりに位置する。形状は方形であるが、底面では楕円形となる。規模は62×58×27cmである。

柱穴 東壁際及び北壁際に7本の壁柱穴を確認し

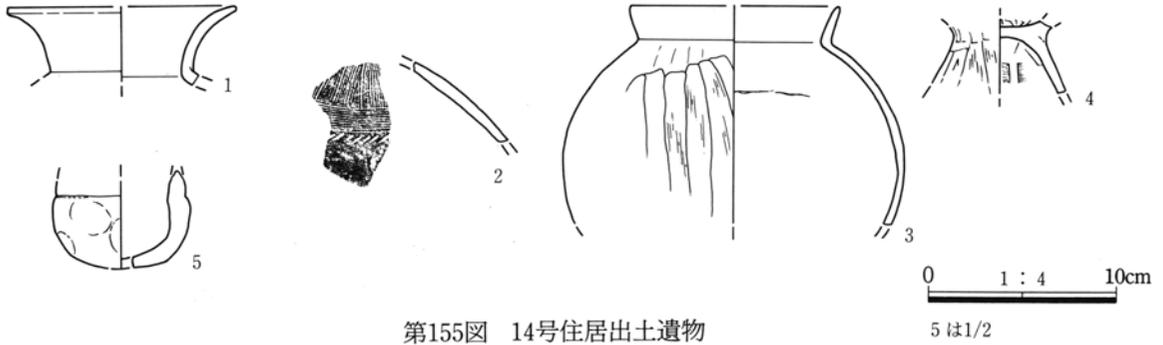
た。また、本住居内外に数本のピットが確認されたが、本遺構に伴うものとは考え難い。

周溝 壁面に沿って、幅5~15cm、深さ2~6cmで巡る。西壁中央部に、28cm程の周溝の切れる部分を確認された。

遺物 遺物は住居全体に散在していたが、量は比較的少ない。図示した5点の内、床直上のもものは1と5である。5はミニチュア土器で壺を意識したものと考えられる。また、3の壺の下半部にはスズ状の付着物がみられる。図示したもの以外には2,109gの土器片が出土している。



第154図 14号住居



第155図 14号住居出土遺物

15号住居 写真 PL-49、71

位置 K-44G

形状 長軸をほぼ東西にとる長方形を呈し、規模は5.69×3.77mである。

面積 17.96㎡ 方位 N-68°-E

床面 礫混じりの土を43~55cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 礫混じりの黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

貯蔵穴 南壁際の中央からやや西よりに位置するも

のを貯蔵穴としたが、作業用ピット等の可能性も考えられる。遺物として底面より粘土塊が出土した。規模は48×40×9cmである。

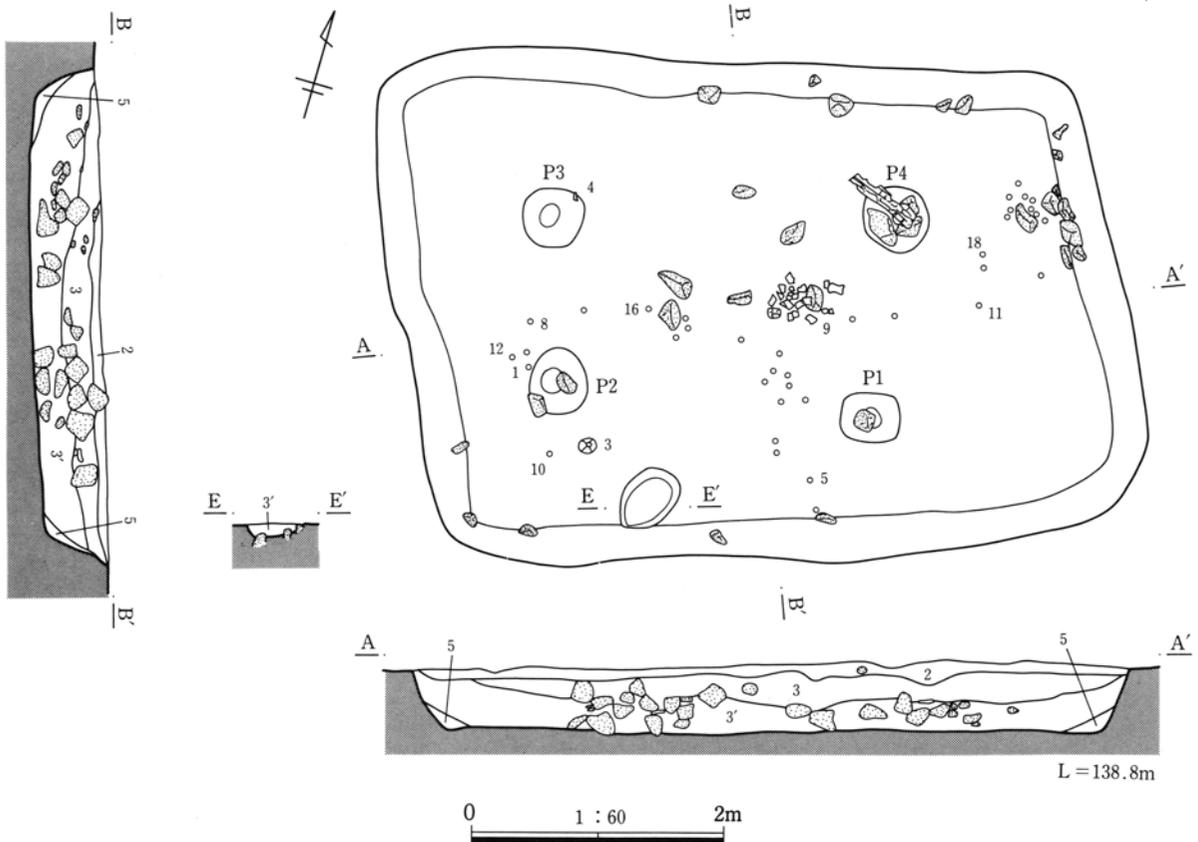
柱穴 支柱穴4本を確認したが、住居プランと柱穴プランにずれがみられる。各柱穴の規模と心々間の距離は以下のとおりである。

P1 : 47×29cm P1~P2 : 2.62m

P2 : 50×32cm P2~P3 : 1.34m

P3 : 47×37cm P3~P4 : 2.80m

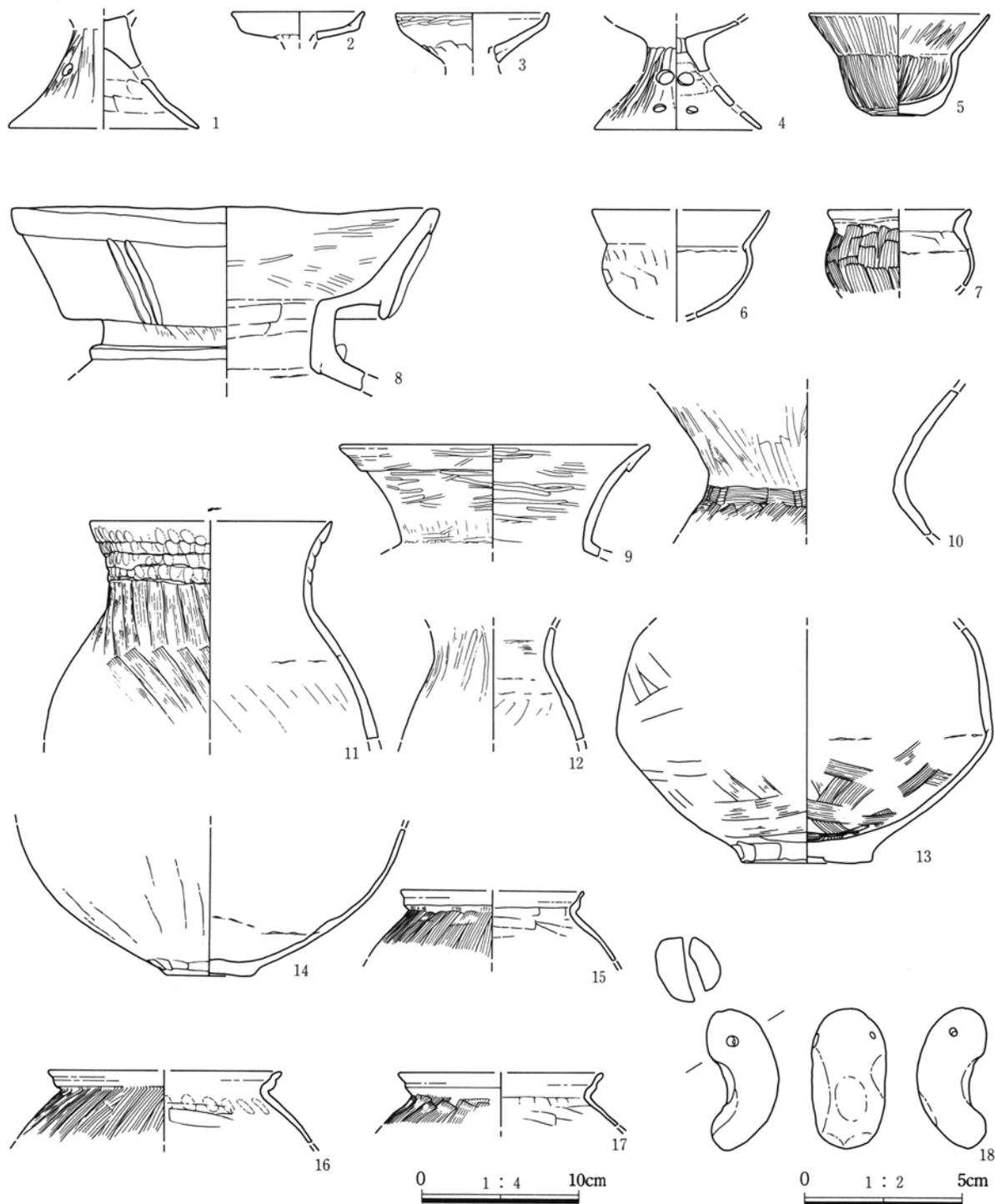
P4 : 57×46cm P4~P1 : 1.56m



第156図 15号住居

遺物 土器17点、土製勾玉1点を図示した。遺物は住居全体にみられたが、中央部にやや偏在している傾向があった。床直上のもは9の壺のみである。18の土製勾玉は、床上38cmの位置からであるが完形で出土している。図示したもの以外には土器片

13,390gが出土している。また、赤彩された土器片や縄文を有する赤井戸式土器片なども少量であるが含まれていた。



第157図 15号住居出土遺物

16号住居 写真 PL-50、72

位置 J-28G

形状 主軸を東西にとる長方形を呈するが、南西角はやや湾曲する。規模は4.22×3.80mである。

面積 13.91m² 方位 N-75°-E

床面 礫混じりの土を21~31cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

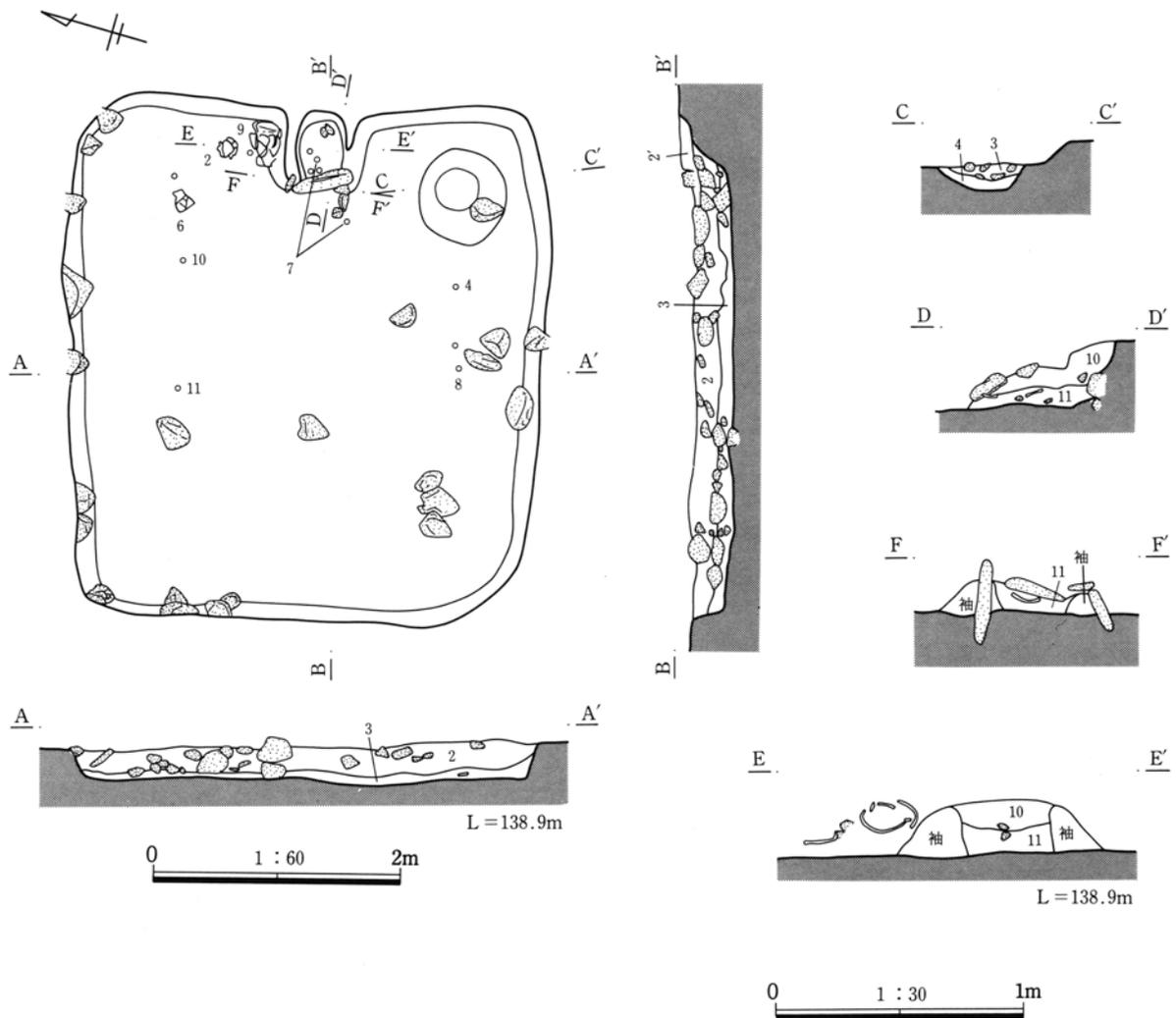
埋没土 礫を多量に含む黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁のほぼ中央に住居内に燃烧部を有する竈が付設されていた。両袖口部には部材として使われた礫がほぼ使用時の状況で出土した。また、焚き

口天井部の材と考えられる49×12×7cmの礫も出土し、それぞれ火を受けた痕跡がみられた。覆土には焼土混じりの黒褐色土、竈崩落土がみられた。燃烧部奥部は住居壁とほぼ同位置で緩やかに立ち上がる。煙道へ続くと考えられるが、確認できなかった。
貯蔵穴 竈の南側、住居南東隅に位置する。円形を呈し、規模は78×74×28cmである。

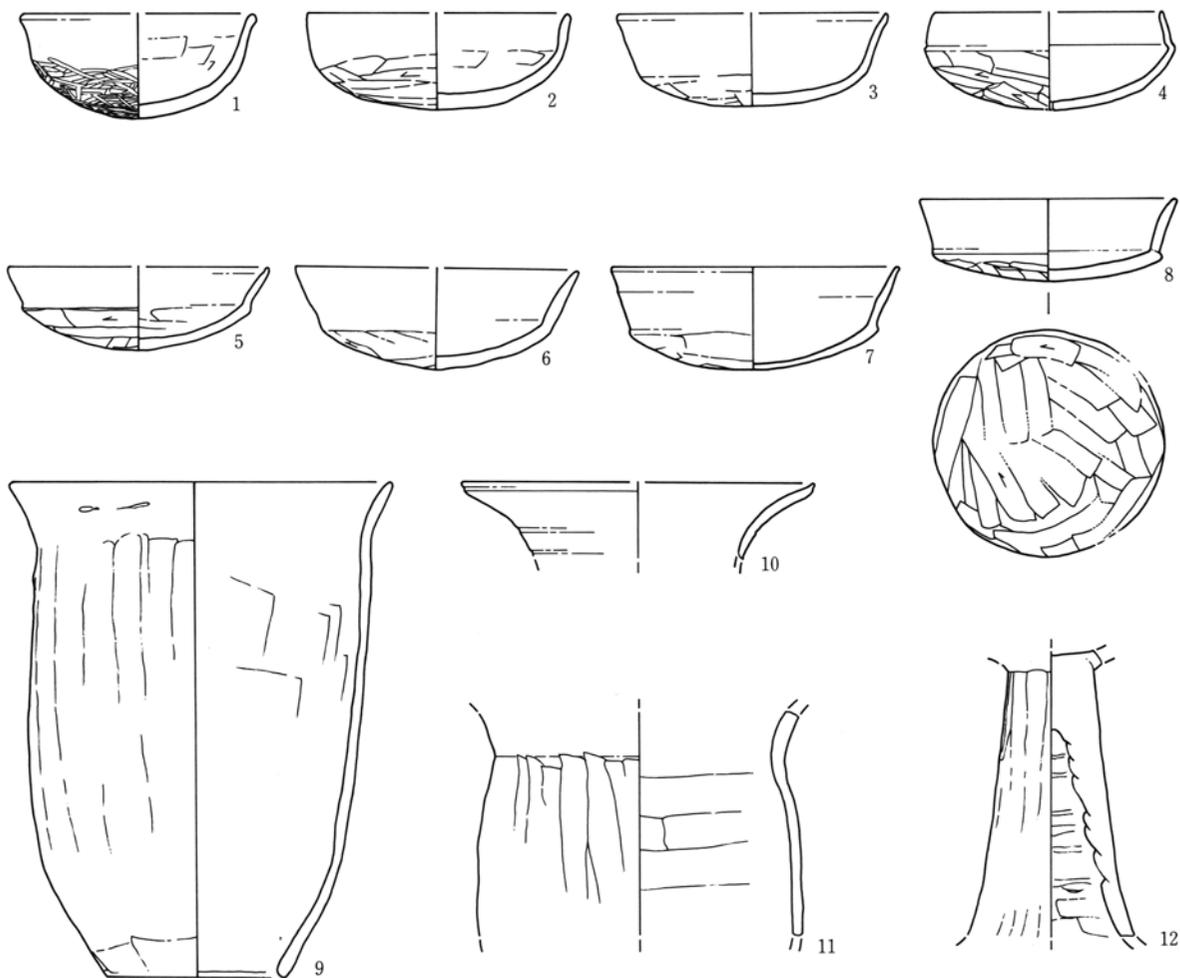
柱穴 確認できなかった。

遺物 遺物は竈周辺に偏在してみられた。図示した12点の内、杯が8点を占めるが図示した以外にも約500gほどの杯破片が出土している。その他、図示した以外には1,650gの土器片が出土している。



第158図 16号住居

1-1 竖穴住居



第159图 16号住居出土遗物

17号住居 写真 PL-50、72

位置 E-26G

重複 1号墳周堀に先行する。

形状 大半が調査区外となるため不明瞭であるが、主軸を南北にとる正方形を呈すると考えられる。

面積 不明 方位 N-5°-E

床面 礫混じりの土を18~24cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 砂礫を含む黒褐色土が中心。

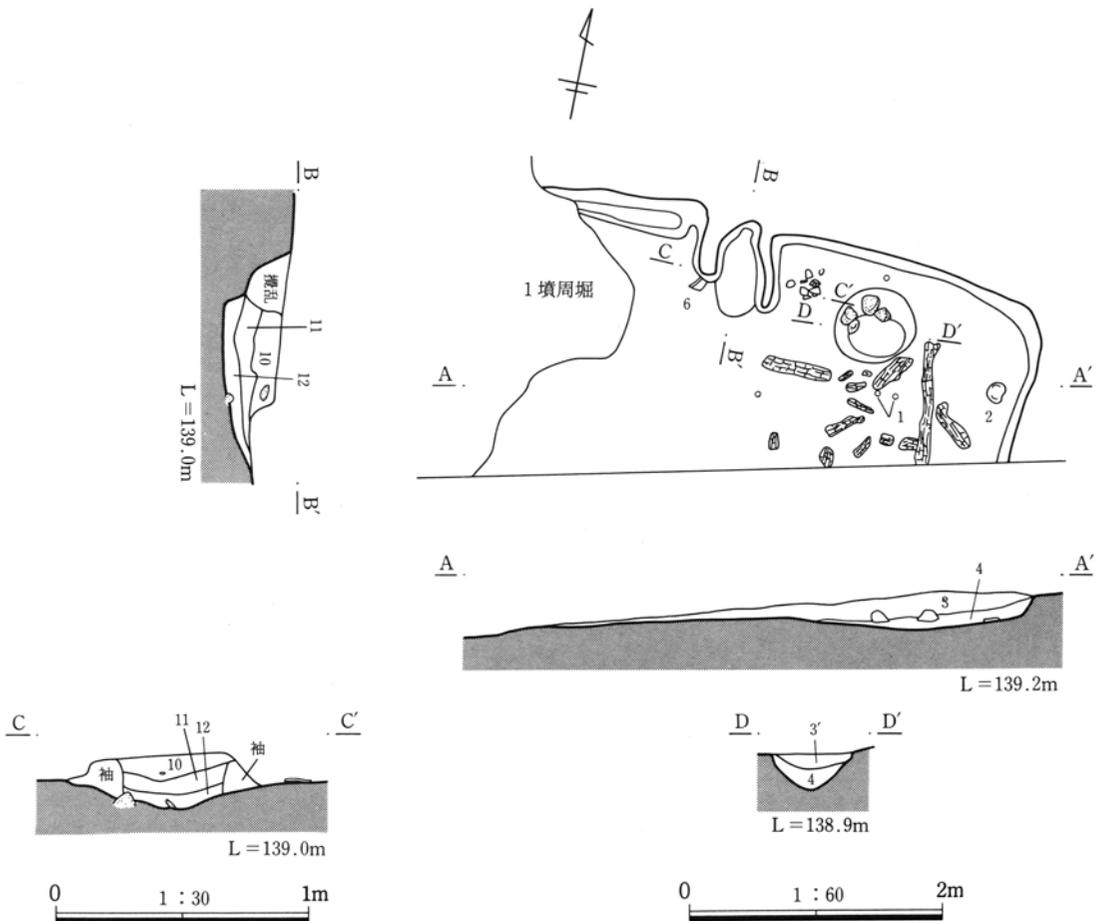
竈 北壁のほぼ中央付近に考えられる位置に、住居内に燃焼部を有する竈が付設されていた。左右袖部に構築部材と思われる礫が出土した。また、燃焼部床面から煙道にかけての部分は攪乱により不明瞭であった。

貯蔵穴 竈の東側に位置する。円形を呈し、規模は66×60×30cmである。

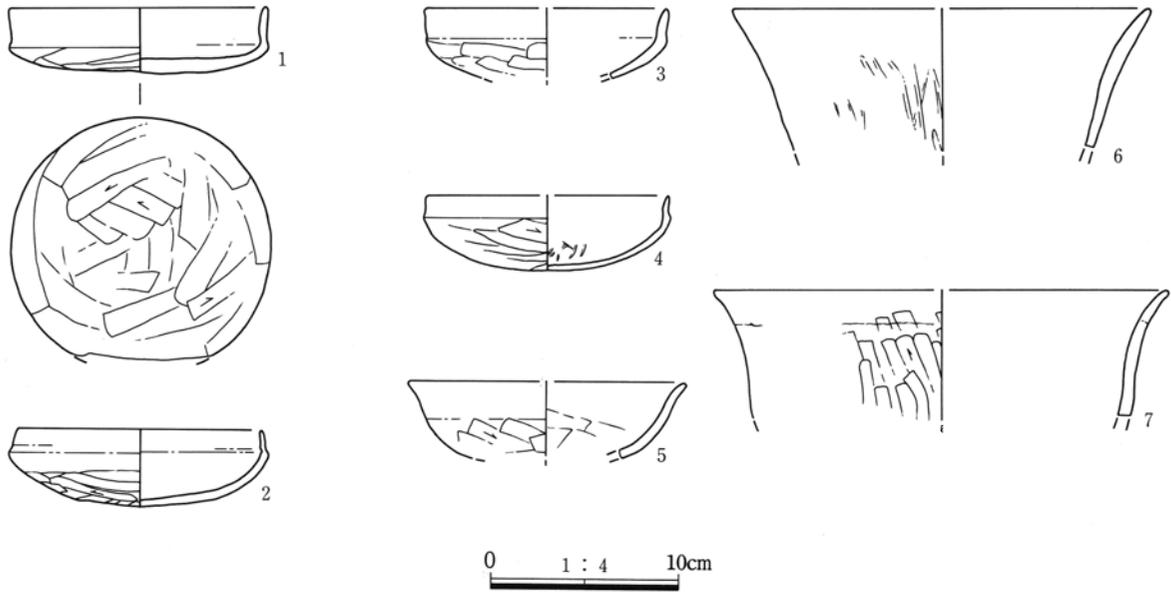
柱穴 確認できなかった。

遺物 遺物量は少なく、7点の土器を図示した。

4の杯の内面にはスズ状の付着物がみられた。図示した以外には、主に壺・甕類と思われる土器片が1,344g出土している。



第160図 17号住居



第161図 17号住居出土遺物

18号住居 写真 PL-50、72

位置 J-40G

重複 19号住居に先行する。

形状 長軸を南北にとる長方形を呈するが、南辺が北辺に比して広がると考えられる。規模は3.88×3.54mである。

面積 (12.3)m² 方位 N-11°-W

床面 礫混じりの土を20~26cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 砂礫を含む黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

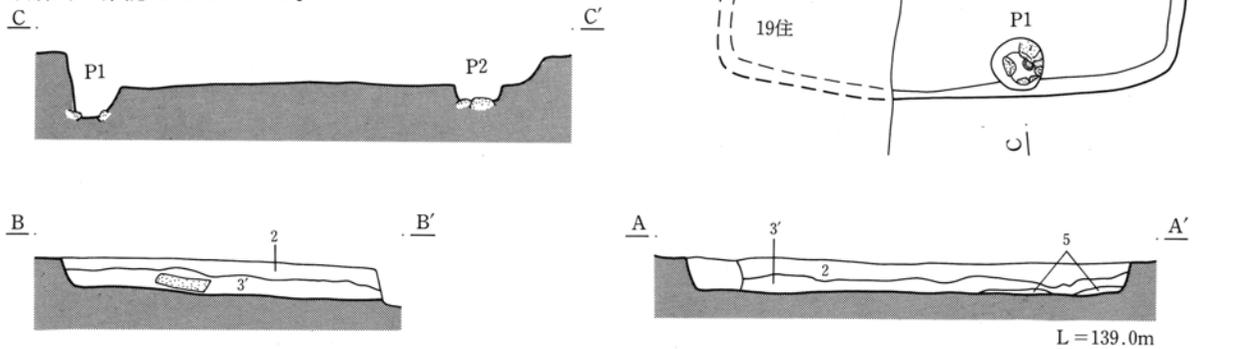
炉 西壁よりに焼土が一部確認されたのみで、炉等は確認できなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。

柱穴 2本のピットを確認した。

P1 : 41×28cm P2 : 37×10cm

遺物 土器小破片180gが出土した。



第162図 18号住居

19号住居 写真 PL-50、72

位置 I-39G

重複 18号住居に後出する。

形状 東西に主軸をとる正方形を呈する。規模は4.25×3.84mである。

面積 13.41m² 方位 N-87°-W

床面 礫混じりに土を28~44cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 砂礫を多量に含む黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁の中央やや南よりに住居内に combustion 部を有する竈が付設されていた。両袖焚き口部には、部材としての礫が赤色味を帯びて立石状で出土した。また、焚き口天井部材と考えられる礫が、やはり赤

色味を帯びた状態で焚き口部前方より出土した。燃焼部からは、13×6×5cmの支脚石が立石状に出土し、焚き口部などと合わせ、かなり使用時に近い状況にあると考えられる。燃焼部床面はほぼ平坦で、奥部では住居壁と同様に立ち上がる。煙道部は確認できなかった。

貯蔵穴 竈の南側、住居南東隅に位置する。楕円形を呈し、規模は74×68×27cmである。

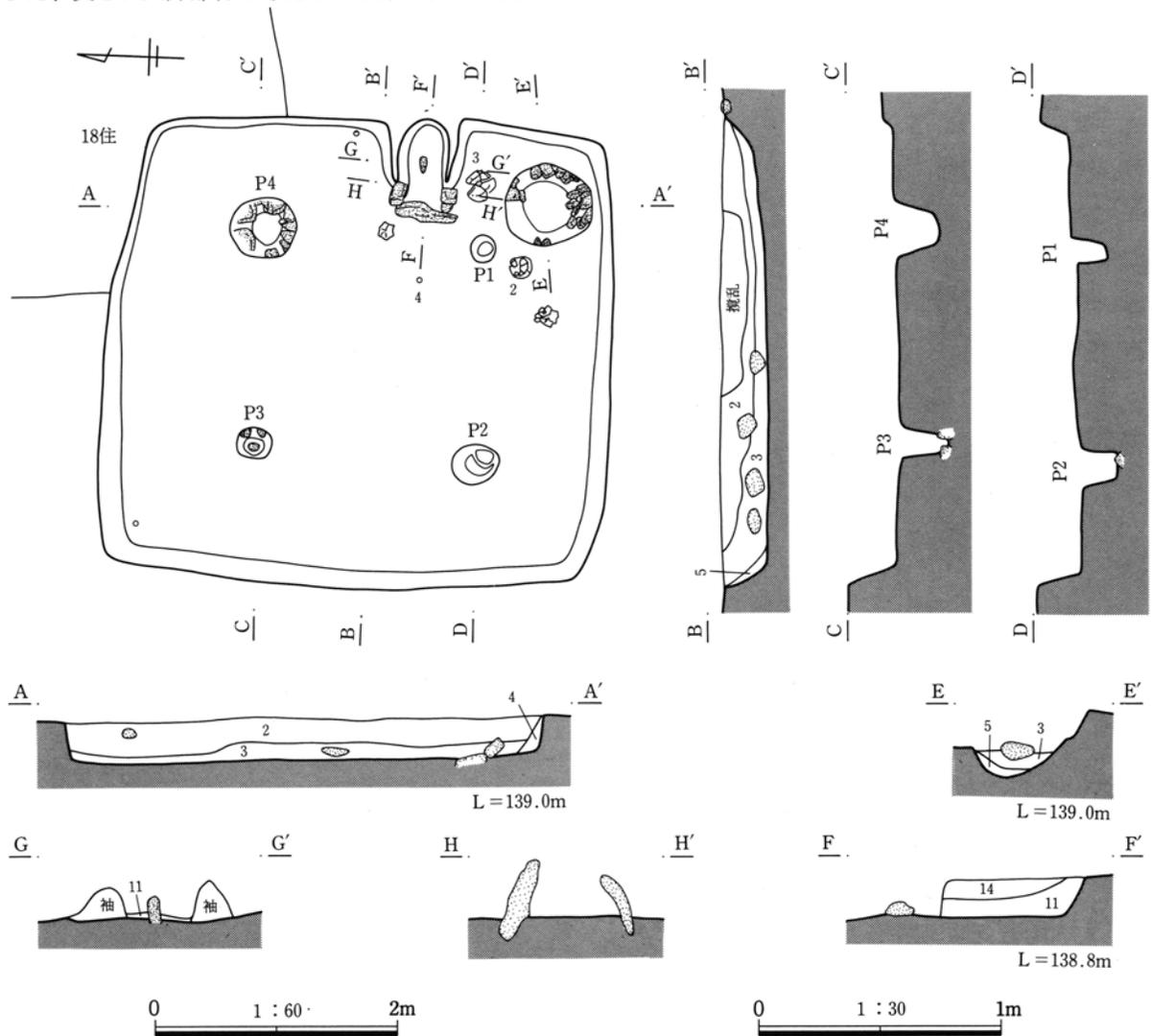
柱穴 支柱穴4本を確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

P1 : 23×25cm P1~P2 : 1.78m

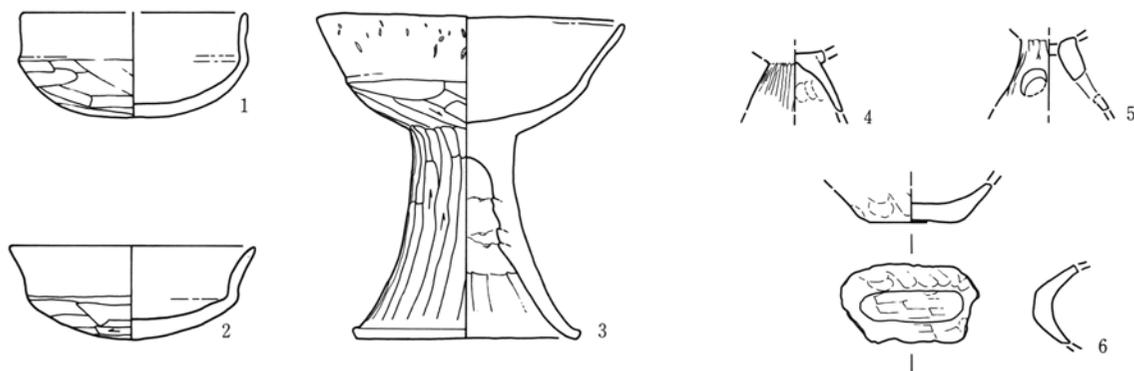
P2 : 40×32cm P2~P3 : 1.90m

P3 : 31×41cm P3~P4 : 1.82m

P4 : 56×37cm P4~P1 : 1.82m



第163図 19号住居



第164図 19号住居出土遺物

遺物 遺物は小破片が多く、竈および貯蔵穴周辺に偏在していた。図示した6点の内、2から4は床

直上からの出土である。図示した以外には5,093gの土器片が出土している。

20号住居 写真 PL-50、72

位置 P-67G

重複 32号土坑に先行し、33号土坑に後出する。

形状 東西に長軸をとる長方形を呈する。規模は3.12×2.80mである。

面積 7.03m² **方位** N-88°-E

床面 礫混じりの土を6~11cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

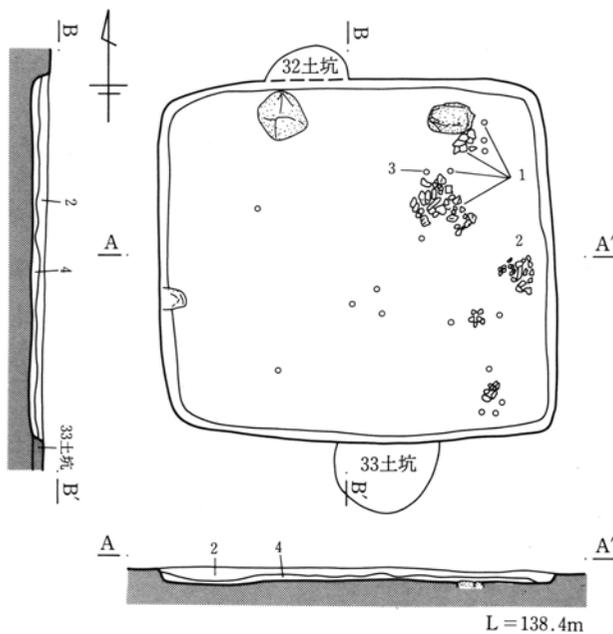
埋没土 As-C軽石を含む黒褐色土が中心。下層には黄褐色土が混入している。自然埋没の状態を示す。

炉 確認できなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。

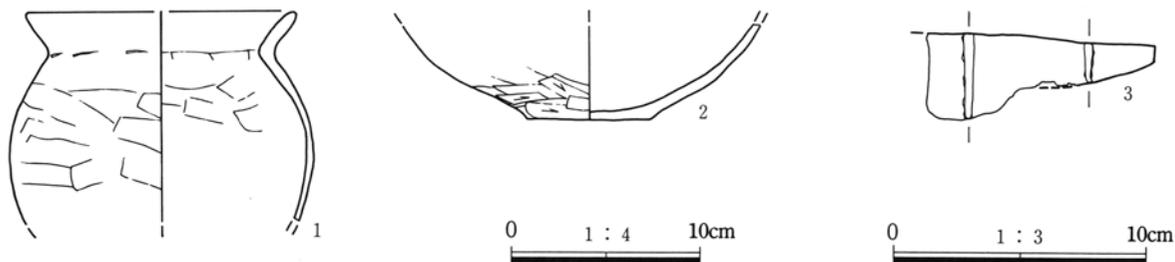
柱穴 確認できなかった。

遺物 遺物の出土状況は東側にやや偏在している傾向があった。量的には少なく、土器2点、刀子1点を図示した。3の刀子は床直上からの出土である。図示した以外に1,172gの土器片が出土している。



第165図 20号住居

第4章 福島駒形遺跡



第166図 20号住居出土遺物

21号住居 写真 PL-51、72
位置 Q-65G

重複 52号土坑に先行する。
形状 大半が調査区外となるので不明瞭であるが、ほぼ正方形を呈すると考えられる。規模は確認できる南辺で3.88mである。

面積 不明 **方位** 不明
床面 礫混じりの土を18~24cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。
埋没土 砂礫を含む黒褐色土が中心。下層にはAs-C軽石の混入がみられる。また、床面近くには多量の焼土粒、炭化物粒が含まれていた。

竈 確認できなかった。

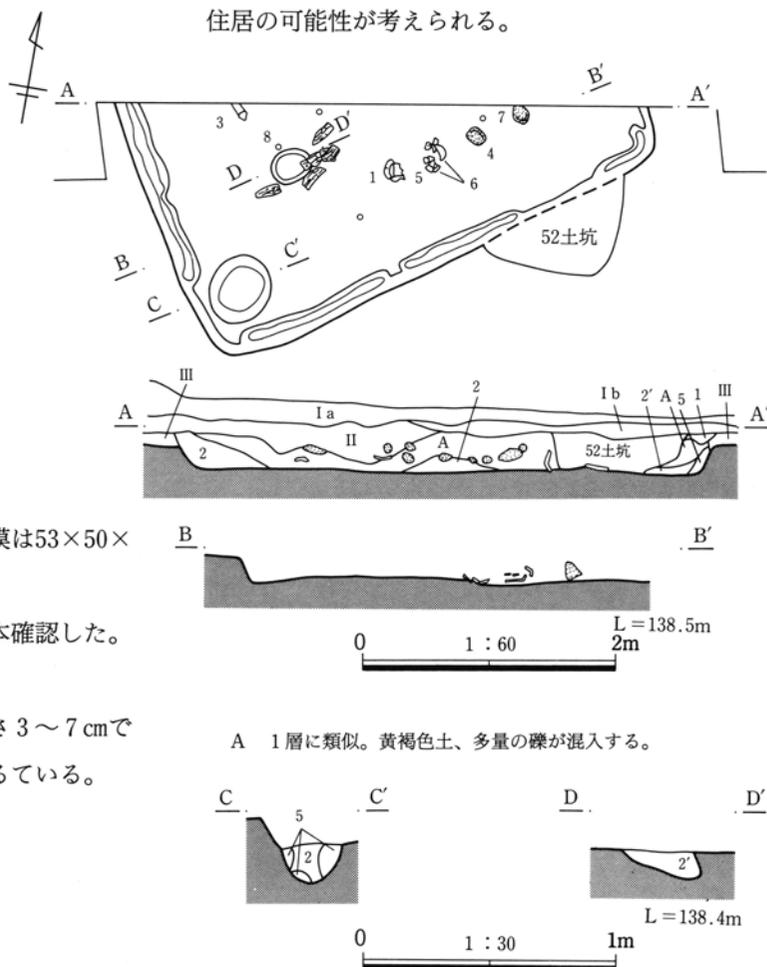
貯蔵穴 南西隅のものを貯蔵穴としたが、不明瞭である。円形を呈し、規模は53×50×32cmである。

柱穴 不明瞭ではあるがピットを1本確認した。規模は32×11cmである。

周溝 壁面に沿って幅6~14cm、深さ3~7cmで巡る。貯蔵穴周辺などで部分的に切れるている。

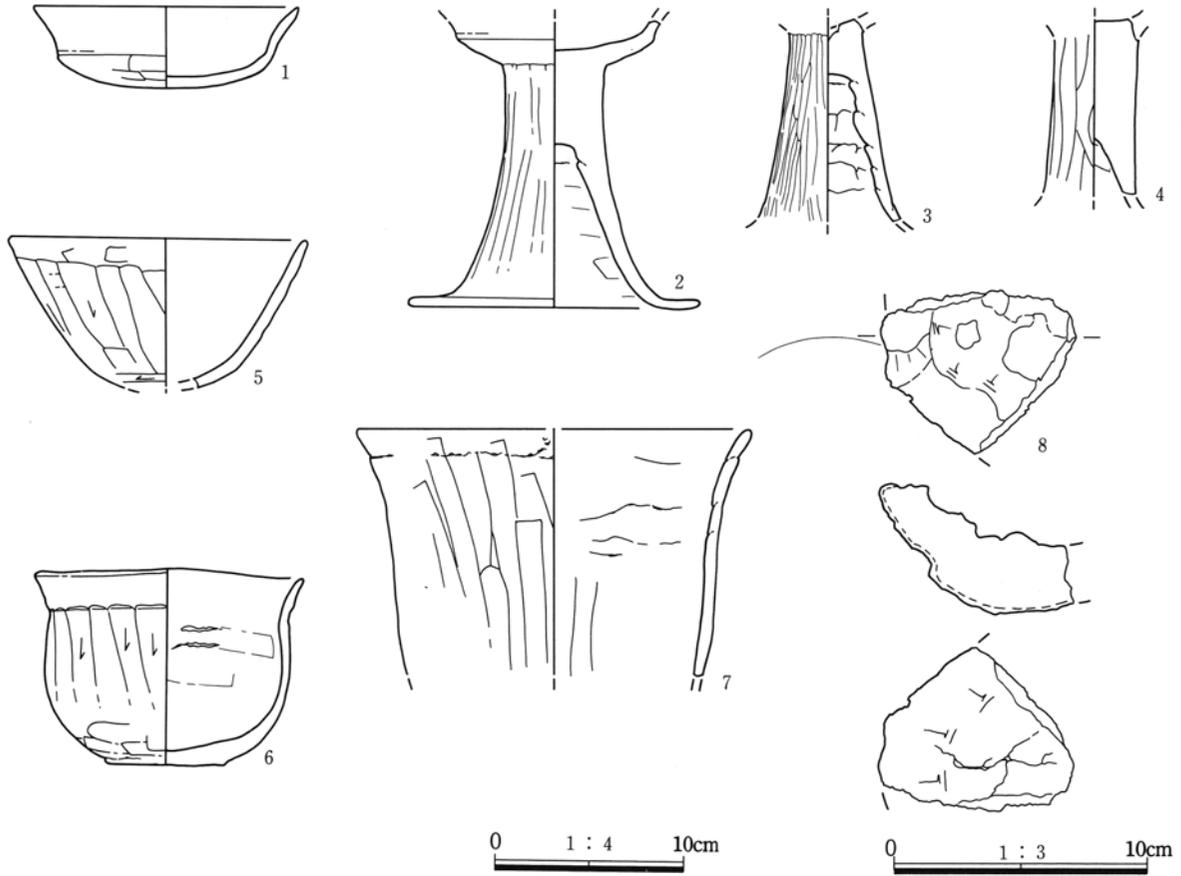
遺物 遺物は確認された住居範囲全体に散在していた。図示したもの以外に572gの土器片が出土している。

備考 本住居跡は南壁側を中心に壁面付近が被熱により焼土化しており、炭化物の混入も多い。また、床面からの炭化材等の出土などもあることから焼失住居の可能性が考えられる。



A 1層に類似。黄褐色土、多量の礫が混入する。

第167図 21号住居



第168図 21号住居出土遺物

22号住居 写真 PL-51、73

位置 N-64G

形状 南北に主軸をとる長方形を呈する。規模は4.66×4.23mである。

面積 17.08㎡ **方位** N-1°-E

床面 礫混じりの土を4~13cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 砂礫を含む黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

竈 北壁のほぼ中央に住居内に燃焼部を有する竈が付設されていた。両袖焼き口部には部材と考えられる、左袖には29×16×7cm、右袖には23×12×7cmの礫が立石状で残存していた。また、焼き口前方部には、焼き口天井部材と考えられる礫が出土している。燃焼部は床面より若干掘り込まれて形成されており、奥部では住居壁とほぼ同位置で立ち上が

る。煙道部は最大幅30cm、深さ1~3cmで住居壁より外へ38cm延びていた。

貯蔵穴 竈の東側に位置する。楕円形を呈し、規模は63×52×29cmである。

柱穴 支柱穴4本を確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

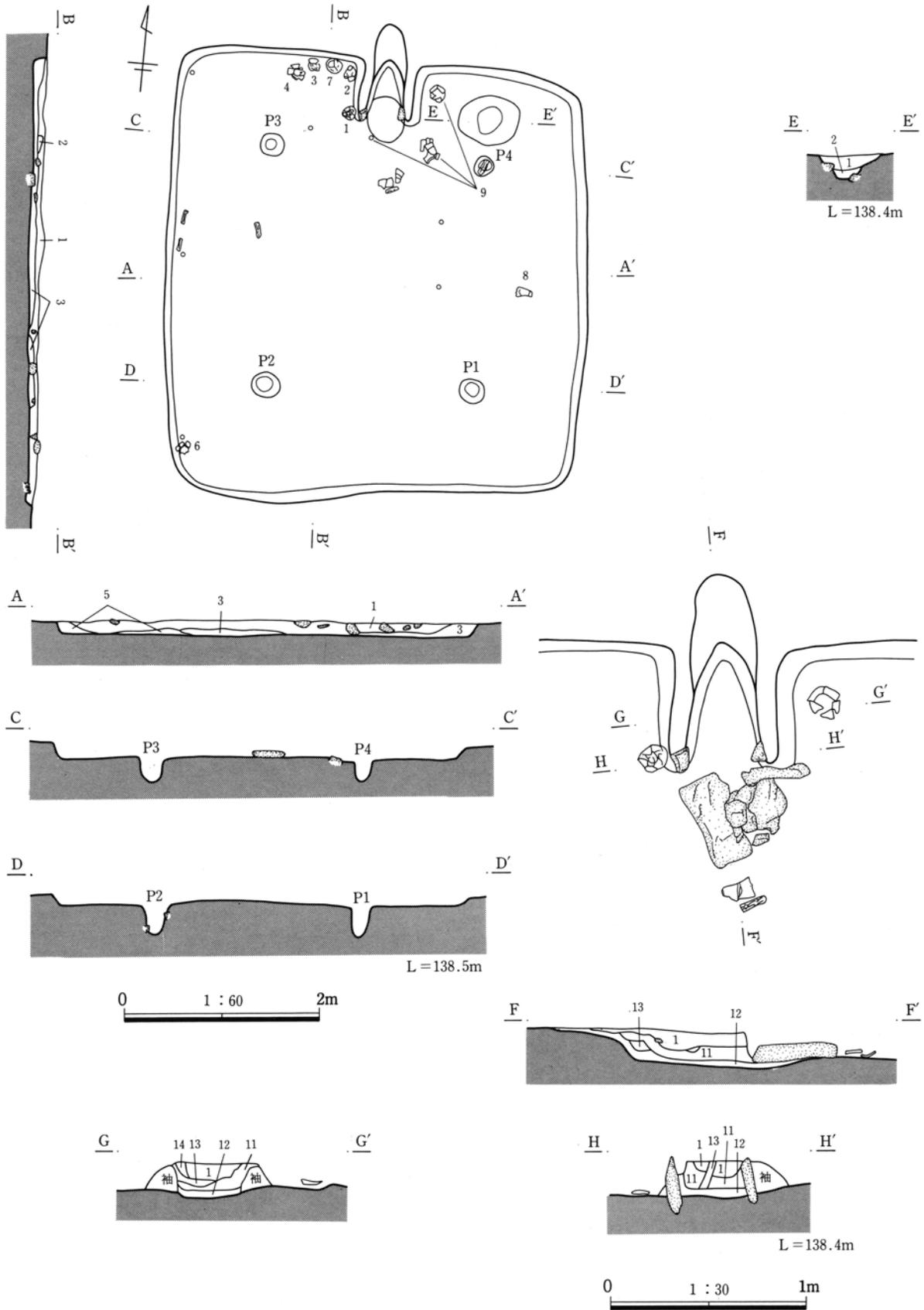
P 1 : 25×32cm P 1~P 2 : 2.17m

P 2 : 30×28cm P 2~P 3 : 2.48m

P 3 : 25×26cm P 3~P 4 : 2.25m

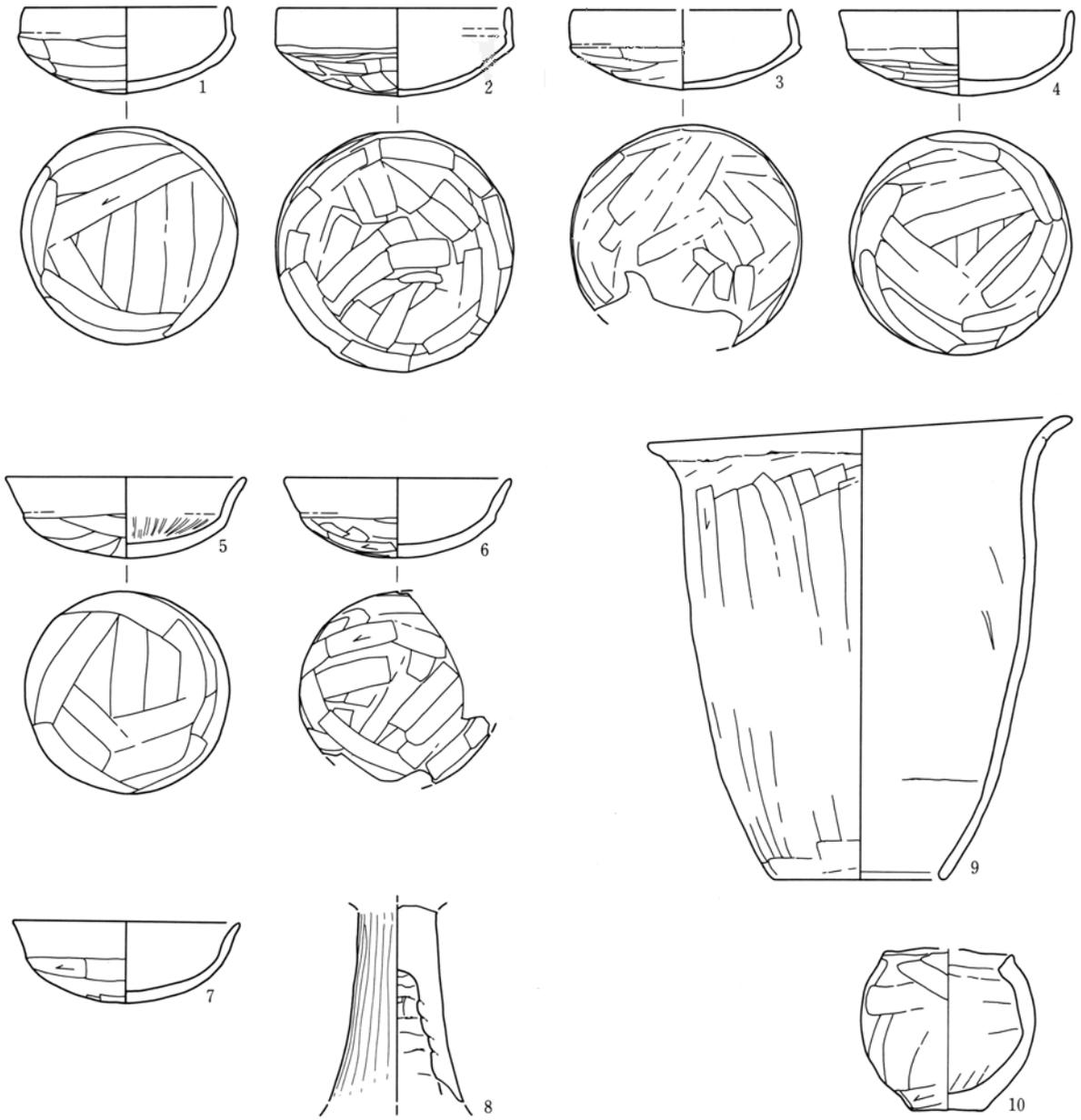
P 4 : 22×30cm P 4~P 1 : 2.31m

遺物 遺物は竈周辺に偏在している傾向があった。1から4および7の杯は竈西側、床直上より出土し、整然と配置されている感じであった。10はミニチュア土器である。図示したもの以外には1,023gの土器片の出土があった。



第169図 22号住居

1-1 竖穴住居



第170图 22号住居出土遗物

23号住居 写真 PL-51、73

位置 Q-62G

形状 ほぼ正方形を呈するが、北東角、南東角は緩やかに湾曲する。規模は4.92×4.74mである。

面積 21.59m² 方位 N-13°-W

床面 礫混じりの土を5~17cm掘り込んで床面としている。

埋没土 As-C軽石を混入する黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

炉 住居北より中央部に位置する。規模は42×

35×3cmである。

貯蔵穴 住居南西隅に位置する。円形を呈し、規模は78×70×27cmである。

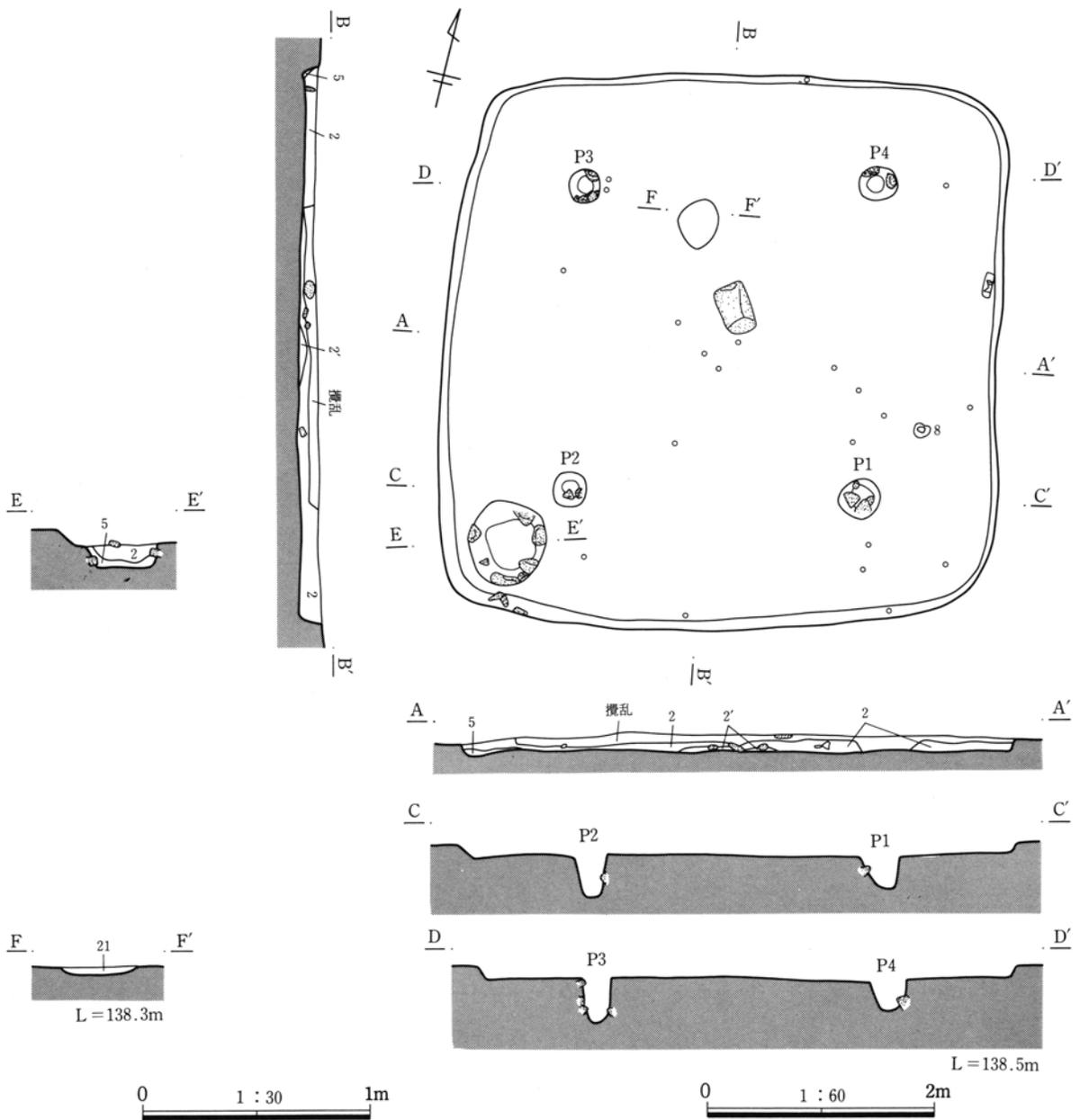
柱穴 支柱穴4本を確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

P1 : 38×30cm P1~P2 : 2.60m

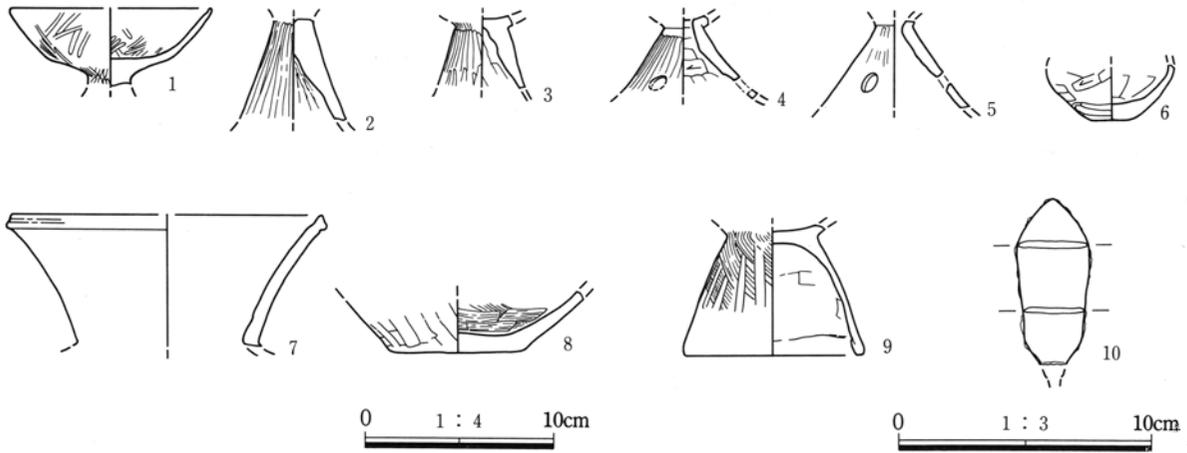
P2 : 32×38cm P2~P3 : 2.68m

P3 : 30×40cm P3~P4 : 2.59m

P4 : 33×27cm P4~P1 : 2.76m



第171図 23号住居



第172図 23号住居出土遺物

遺物 遺物は住居全体に散在していたが、小破片が多かった。9点の土器と1点の鉄鏃を図示したが、

すべて、埋没土中のものである。図示した以外には4,185gの土器片の出土があった。

24号住居 写真 PL-51、73

位置 O-62G

形状 ほぼ正方形を呈するが、東壁がやや外側に、西壁がやや内側に湾曲する。規模は4.18×4.03mである。

面積 14.65㎡ **方位** N-11°-W

床面 礫混じりの土を2~9cm掘り込んで床面とし、南から北にかけて若干の傾斜がみられる。

埋没土 As-B軽石を混入する黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

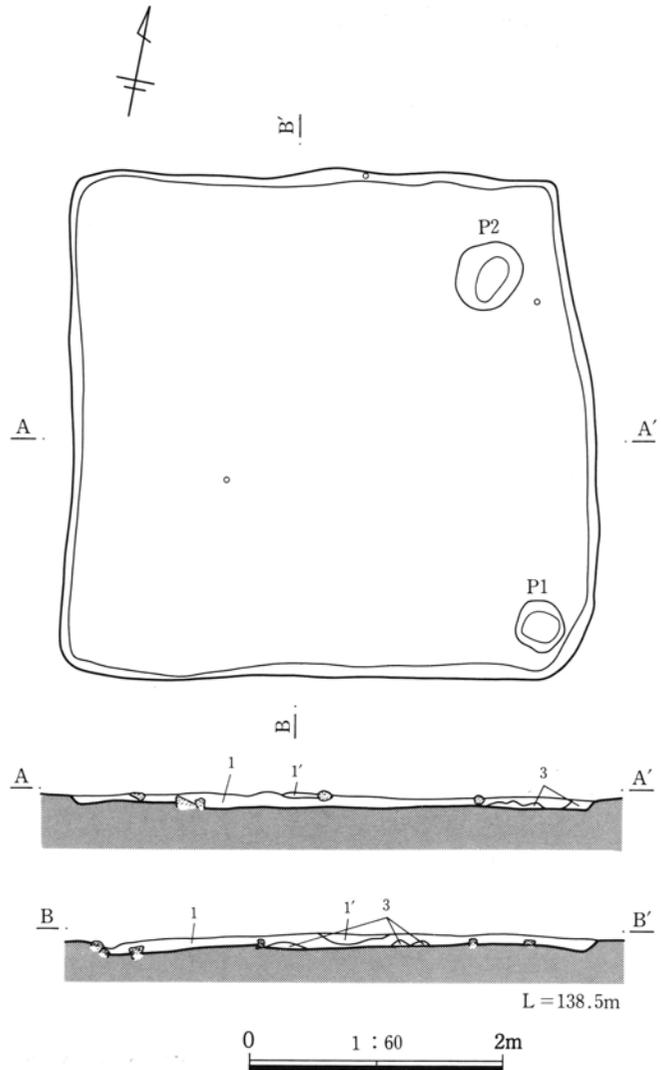
炉 確認できなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。

柱穴 南東隅及び北東隅に2本のピットを確認した。それぞれの規模は以下のとおりである。

P1 : 41×16cm P2 : 57×20cm

遺物 遺物の出土は少なく、小破片で639gの出土があるのみである。



第173図 24号住居

第4章 福島駒形遺跡

25号住居 写真 PL-52、73

位置 N-60G

重複 57土坑に先行する。

形状 ほぼ隅丸正方形を呈するが、南辺が北辺に比してやや長い。規模は4.87×4.72mである。

面積 20.60m² 方位 N-11°-W

床面 礫混じりの土を9~18cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 As-B軽石を混入する黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

炉 確認できなかった。

貯蔵穴 住居南西隅に位置する。楕円形を呈し、規模は76×54×23cmである。

柱穴 支柱穴4本を確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

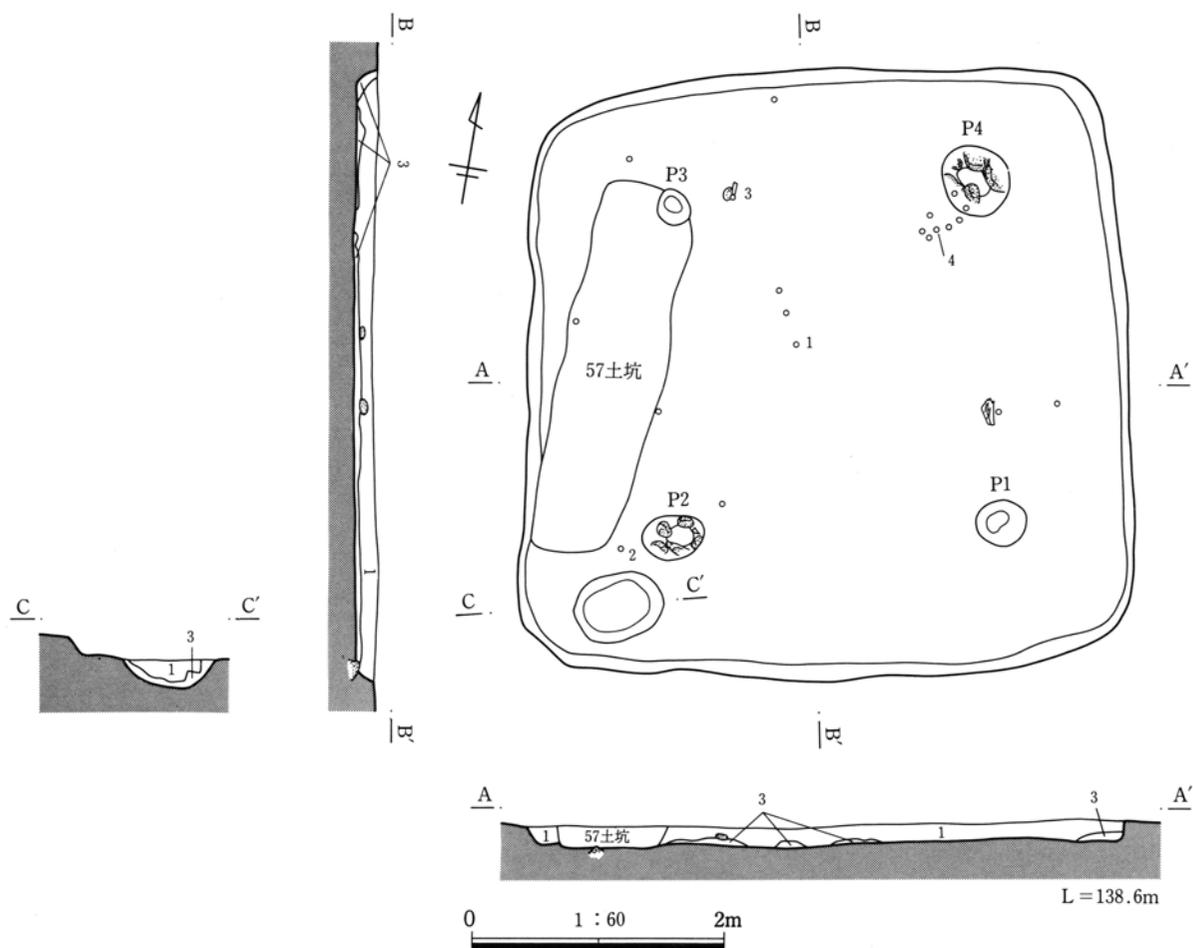
P1 : 39×51cm P1~P2 : 2.58m

P2 : 50×40cm P2~P3 : 2.63m

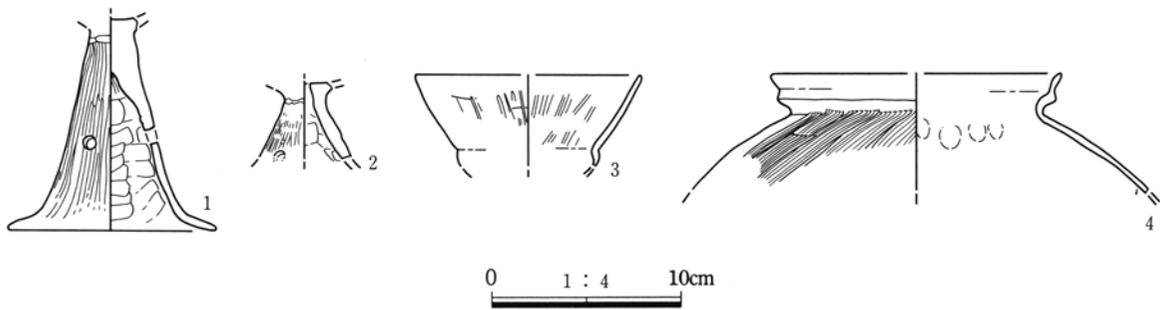
P3 : 30×34cm P3~P4 : 2.45m

P4 : 57×30cm P4~P1 : 2.72m

遺物 遺物は住居全体に散在していたが、小破片での出土が多かった。4点を図示したが、全て床直上ではなく、床上4~7cmでの出土である。図示したもの以外に2,009gの土器片の出土があった。



第174図 25号住居



第175図 25号住居出土遺物

26号住居 写真 PL-51、73、74

位置 M-56G

重複 10号掘立に先行する。

形状 ほぼ正方形を呈するが、東壁に比して西壁がやや長い。また、周壁の掘り込みにはかなり蛇行した部分がみられる。規模は5.46×5.18mである。

面積 22.75㎡ 方位 N-5°-W

床面 礫混じりの土を12~33cm掘り込んで床面とし、北に向かって若干の傾斜がみられる。

埋没土 上層は砂礫を含む黒褐色土、下層には黒褐色土に黄褐色土が混入する。自然埋没の状態を示す。

炉 確認できなかった

貯蔵穴 住居南東隅に位置する。壁面には地山の礫が残る。円形を呈し、規模は78×76×27cmである。

柱穴 支柱穴4本を確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

P 1 : 46×32cm P 1~P 2 : 2.42m

P 2 : 51×32cm P 2~P 3 : 2.85m

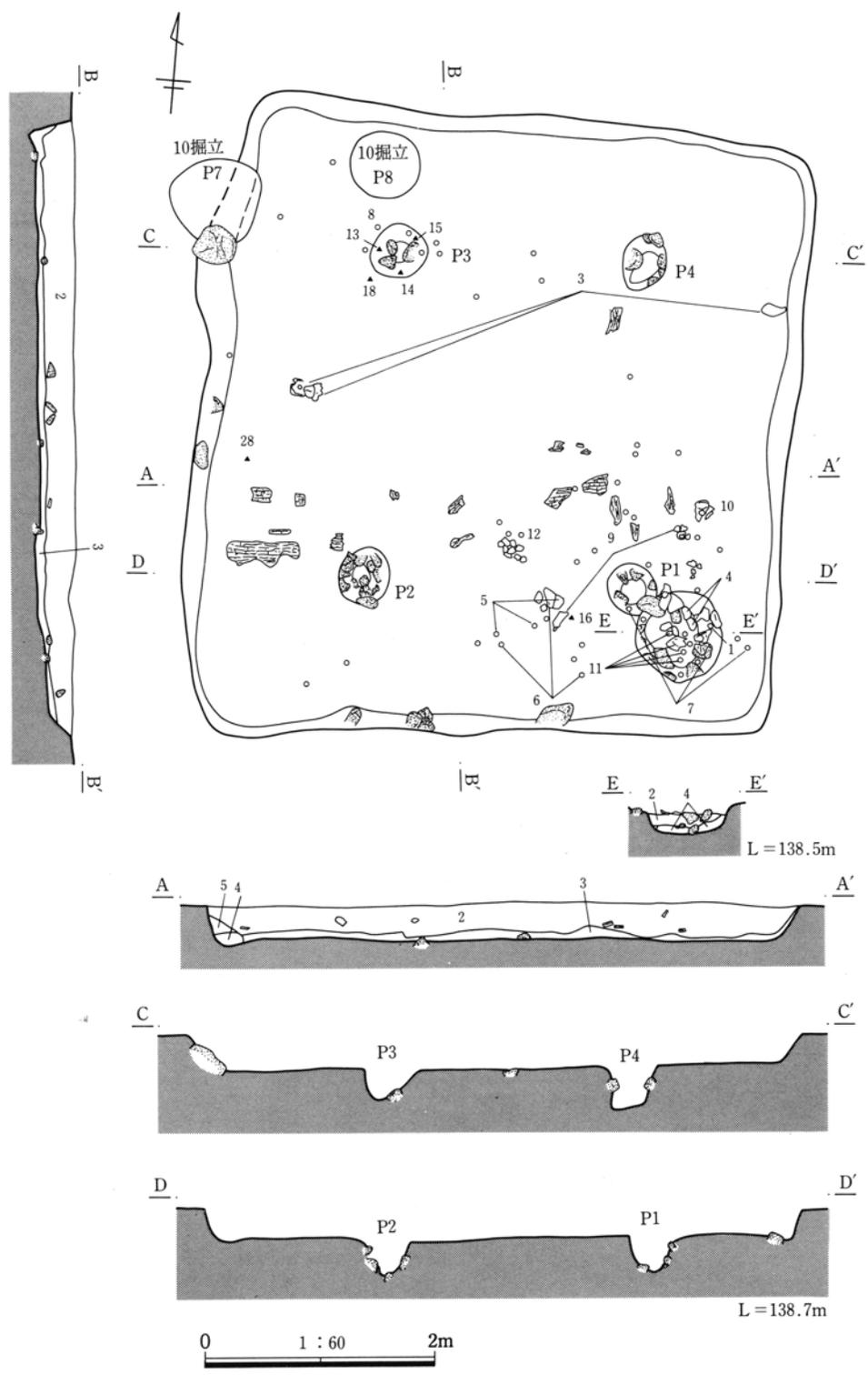
P 3 : 51×25cm P 3~P 4 : 2.18m

P 4 : 52×37cm P 4~P 1 : 2.80m

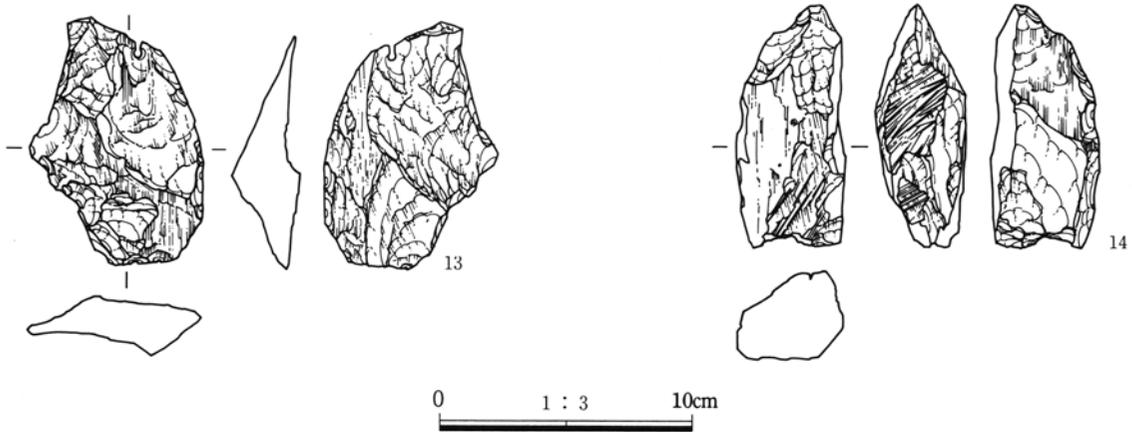
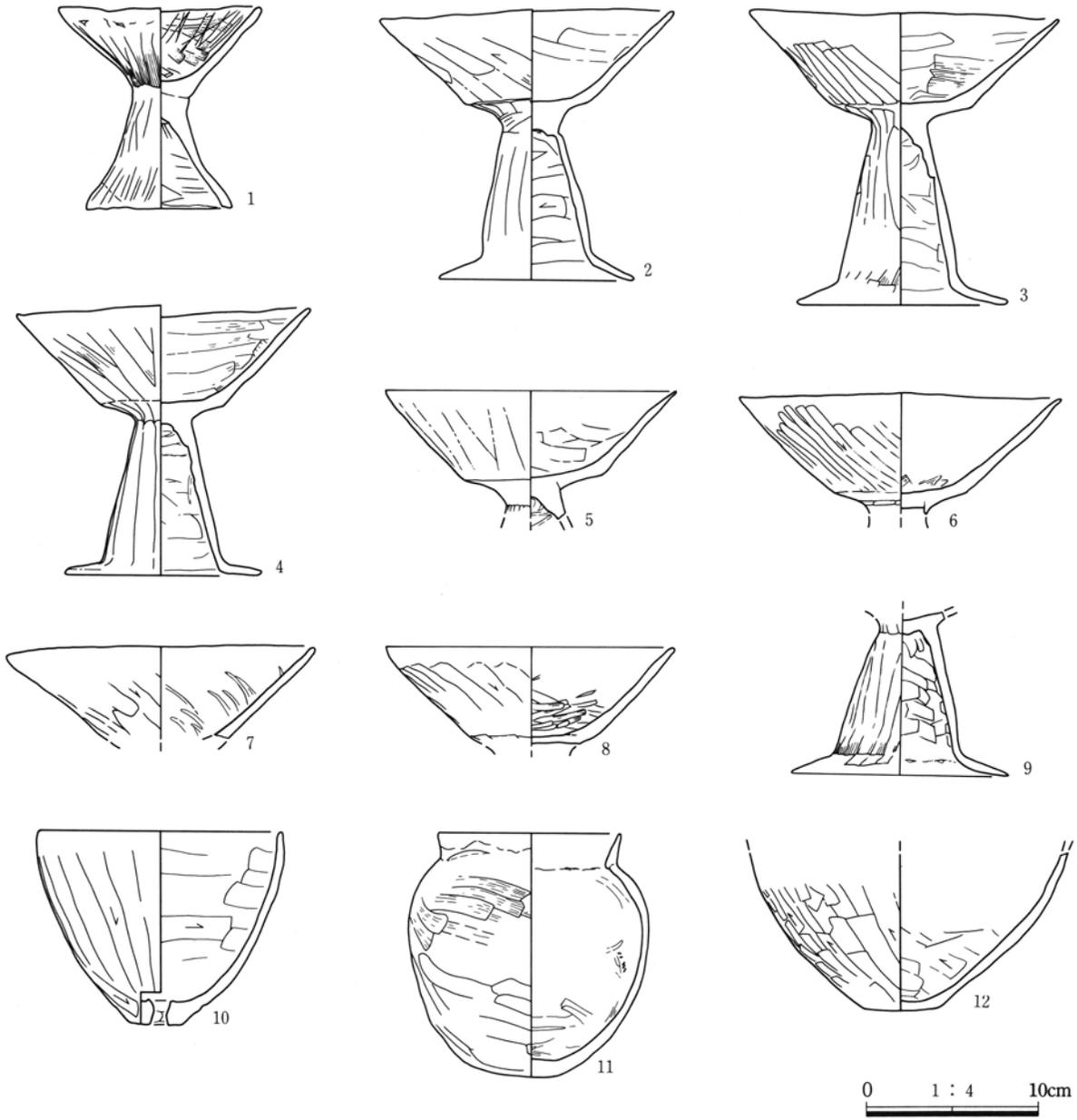
遺物 滑石製品工房跡と考えられる住居であり、土器の他に多量の滑石未製品等が出土している。土器は住居全体に散在していたが、貯蔵穴周辺にやや偏在している傾向があった。貯蔵穴内からの出土も多く、図示した内の1、4、5、11は貯蔵穴内からの出土である。図示した以外には553片、4,340gの土器片の出土があった。

滑石製品に関しては住居東側からの出土が多くなっている。ただし、西側に関しては調査の際に見落としがあった可能性も有る。出土した滑石製品は、そのほとんどが白玉の未製品であり、完成品は28の紡錘車のみである。他に原石、砥石(29)なども出土している。また、滑石以外の石材で蛇紋岩製のものもある。出土した滑石類は図示したものを含め、総量はおよそ2,200gになる。

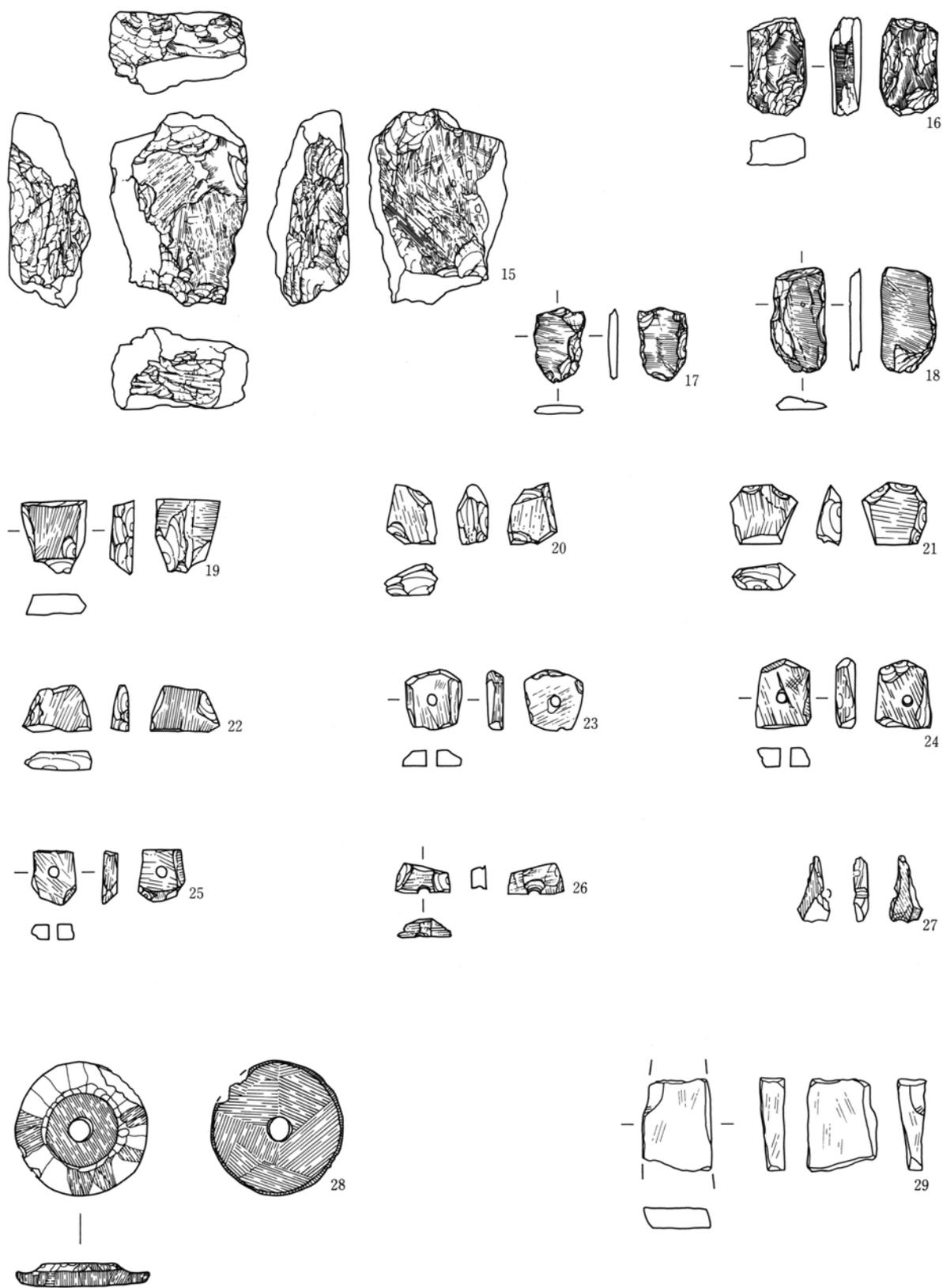
備考 滑石製品工房跡と考えられる。



第176図 26号住居



第177图 26号住居出土遺物(1)



第178図 26号住居出土遺物(2)

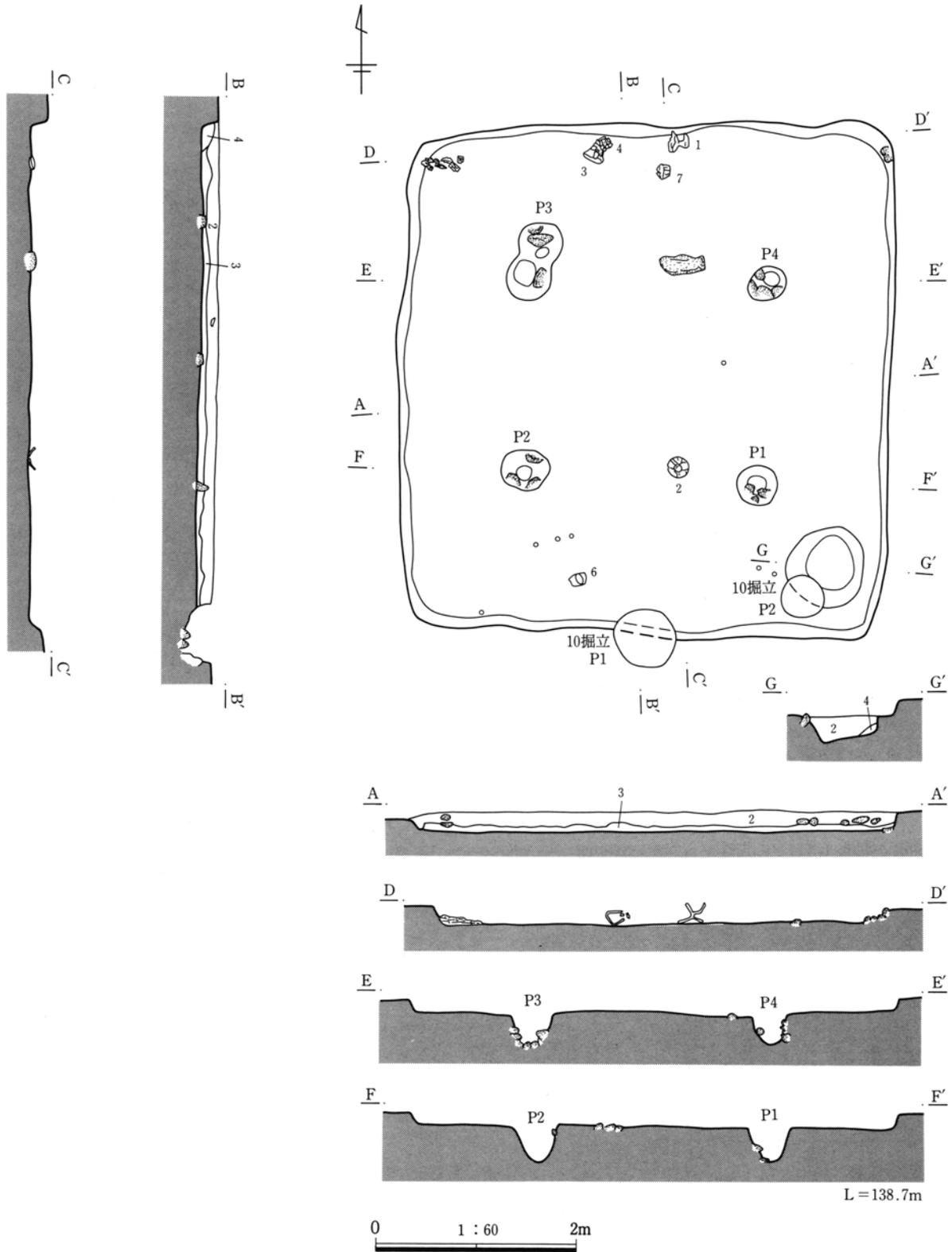
27号住居 写真 PL-52、74

形状 ほぼ正方形を呈する。規模は5.05×4.92m
である。

位置 O-54G

面積 22.64m² 方位 N-2°-E

重複 10号掘立に先行する。



第179図 27号住居

第4章 福島駒形遺跡

床 面 礫混じりに土を12~24cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 上層は砂礫を含む黒褐色土、下層には黒褐色土に黄褐色土が混入する。自然埋没の状態を示す。

炉 確認できなかった。

貯蔵穴 住居南東隅に位置する。円形を呈し、規模は80×76×44cmである。

柱 穴 主柱穴4本を確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

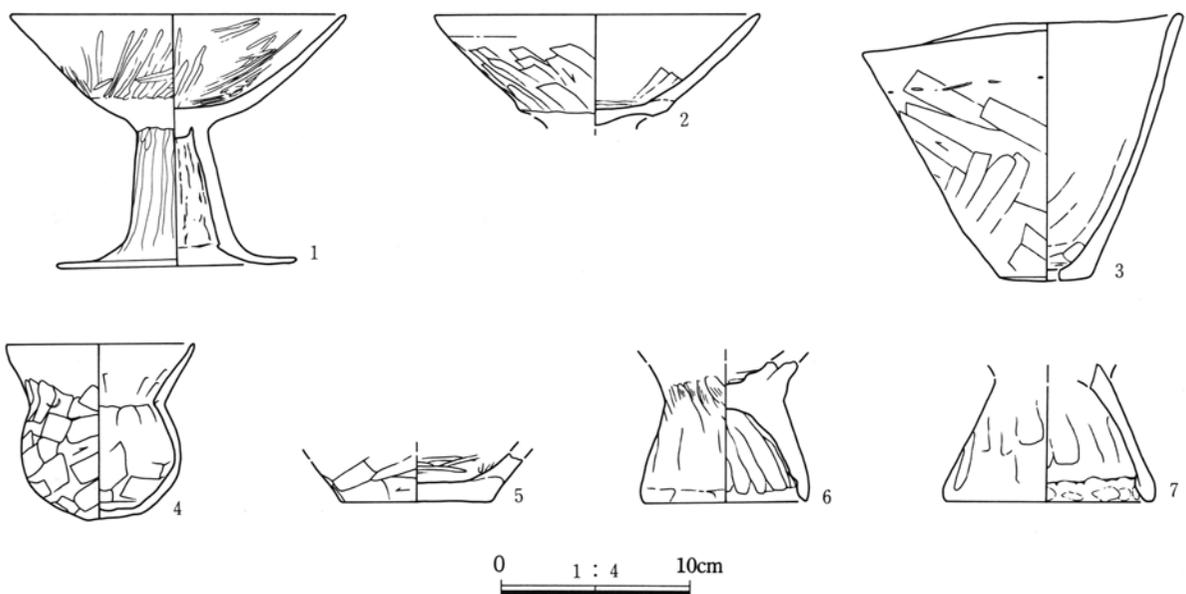
P 1 : 41×34cm P 1~P 2 : 2.35m

P 2 : 48×35cm P 2~P 3 : 2.16m

P 3 : 83×30cm P 3~P 4 : 2.42m

P 4 : 40×27cm P 4~P 1 : 2.06m

遺 物 遺物は住居全体に散在しており、図示した7点の内、5、6以外は床直上の出土である。3の甑と4の小型甕は出土状態などから併置された可能性がある。図示した以外には321片、1,706gの土器片が出土している。



第180図 27号住居出土遺物

28号住居 写真 PL-52、74、75

位置 O-53G

形状 大半が調査区外となり不明瞭である。確認できる南東及び南西の角は湾曲している。規模は南壁で4.24mである。

面積 不明 方位 N-15°-E

床面 礫混じりの土を19~33cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 As-C軽石を含む黒褐色土が中心。下層には炭化物粒を少量含む。自然埋没の状態を示す。

炉 確認できなかった。

貯蔵穴 不明瞭ではあるが、柱穴の項に記したP3が貯蔵穴の可能性はある。

柱穴 4本のピットを確認したが、P3は貯蔵穴

の可能性もある。また、P1、P2は支柱穴と考えられる。それぞれの規模は以下のとおりである。

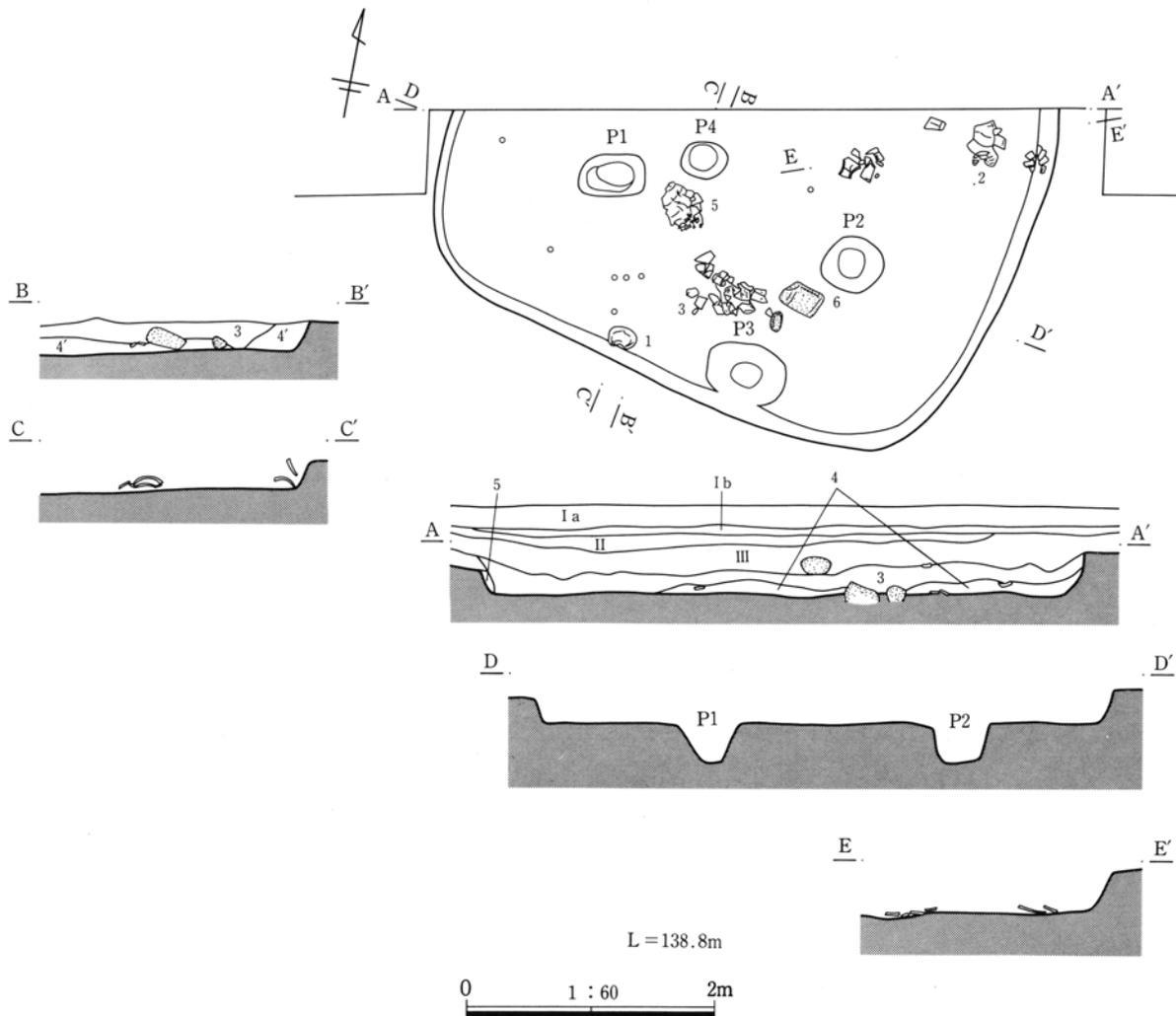
P1 : 55×31cm P1~P2 : 2.10m

P2 : 51×32cm

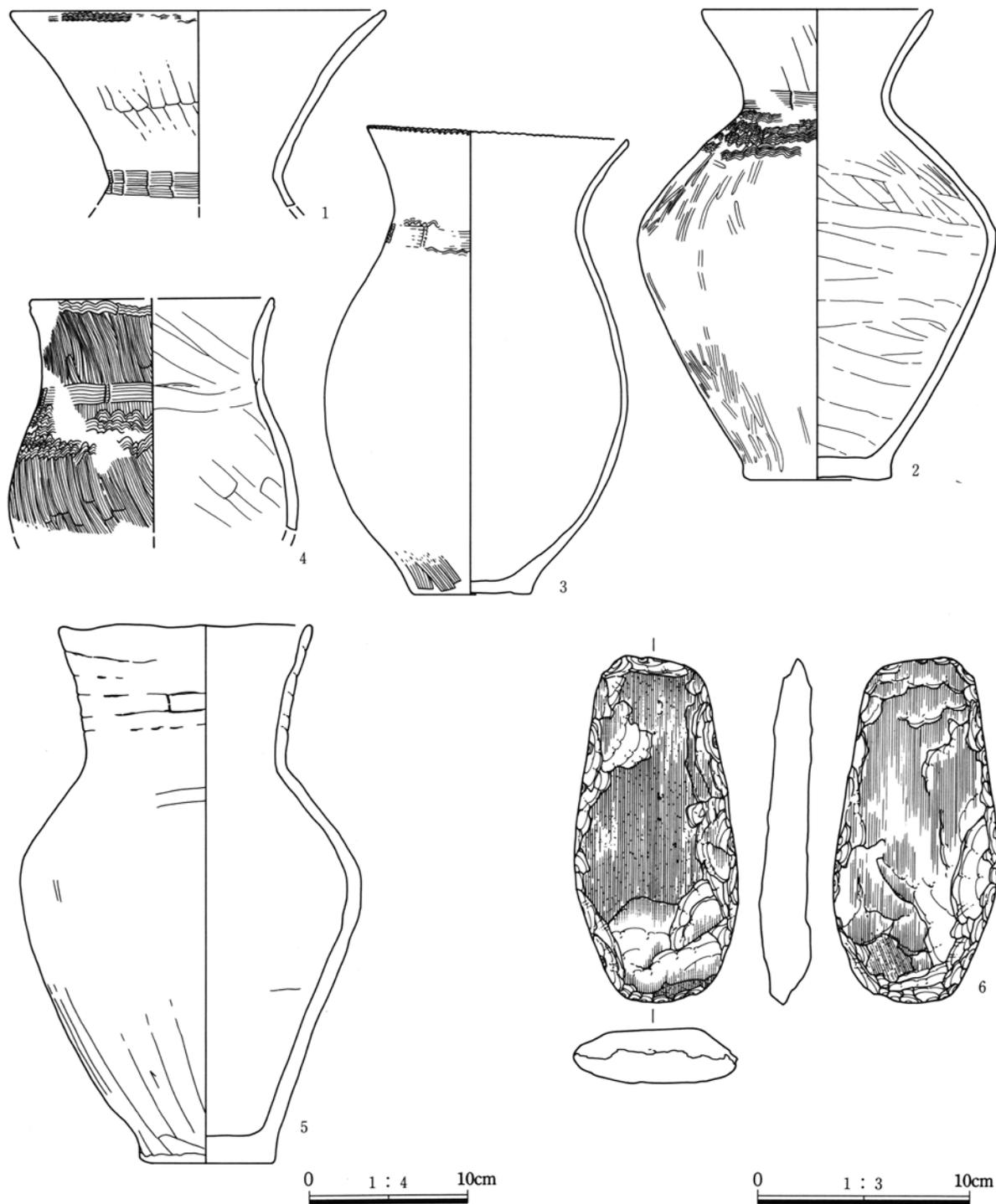
P3 : 68×27cm

P4 : 40×25cm

遺物 遺物は住居確認範囲内で全体的にみられたが、やや南寄りに偏在している傾向があった。壺・甕を中心に5点の土器と1点の石器を図示した。図示した以外では2,510gの土器片の出土があったが、坏類の破片等は僅かであった。



第181図 28号住居



第182図 28号住居出土遺物

29号住居 写真 PL-52、75

位置 M-52G

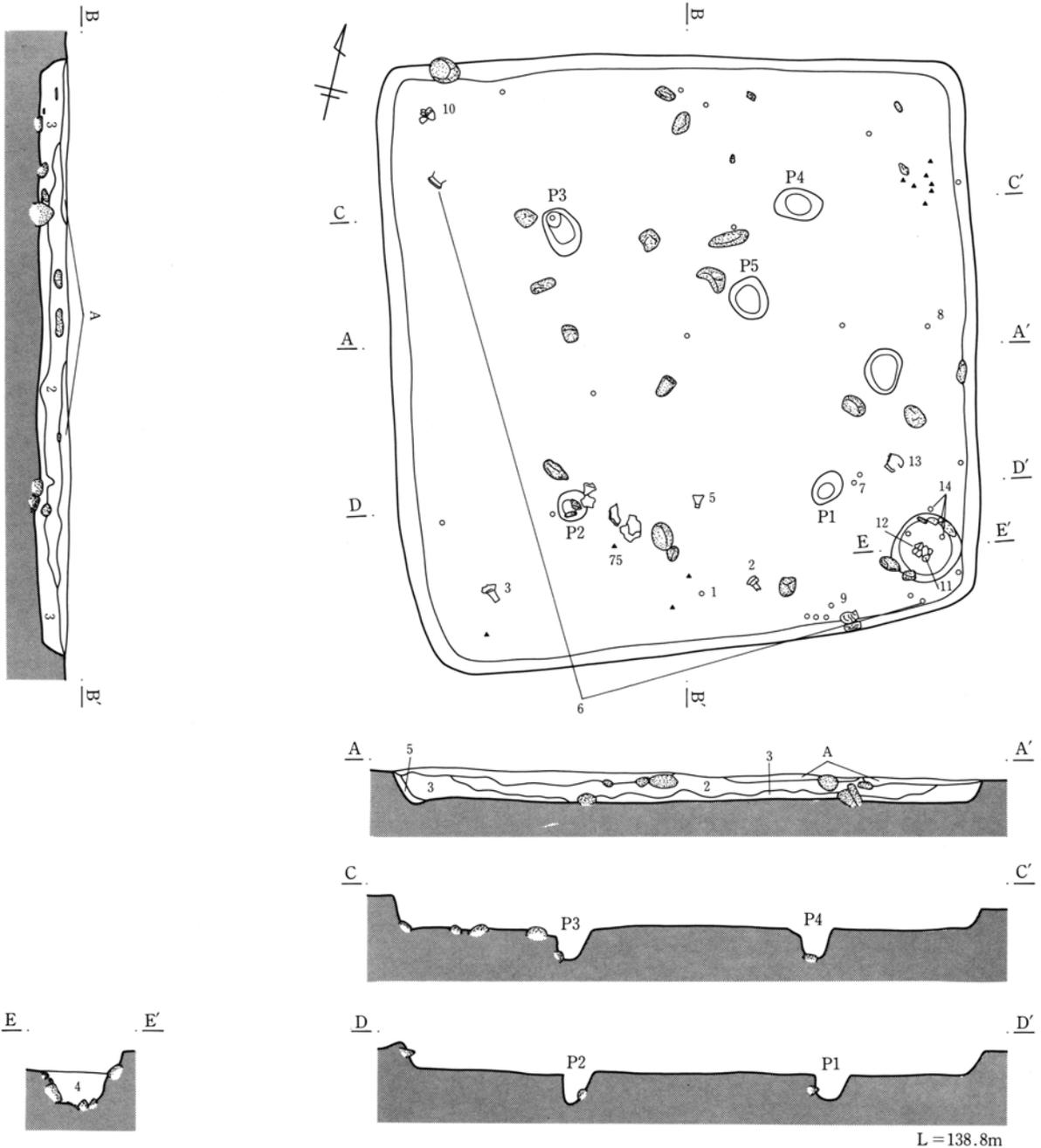
形状 正方形を呈し、規模は5.58×5.38mである。

面積 25.63m² 方位 N-18°-W

床面 礫混じりの土を12~31cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 As-C軽石を含む黒褐色土が中心。自然埋没の状態を示す。

炉 確認できなかった。



A 2層に類似。色調がやや明るい。

0 1 : 60 2m

第183図 29号住居

第4章 福島駒形遺跡

貯蔵穴 住居南東隅に位置する。円形を呈し、規模は63×61×39cmである。

柱 穴 支柱穴4本を含む5本のピットを確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

P 1 : 34×25cm P 1～P 2 : 2.35m

P 2 : 27×36cm P 2～P 3 : 2.55m

P 3 : 44×26cm P 3～P 4 : 2.23m

P 4 : 45×27cm P 4～P 1 : 2.65m

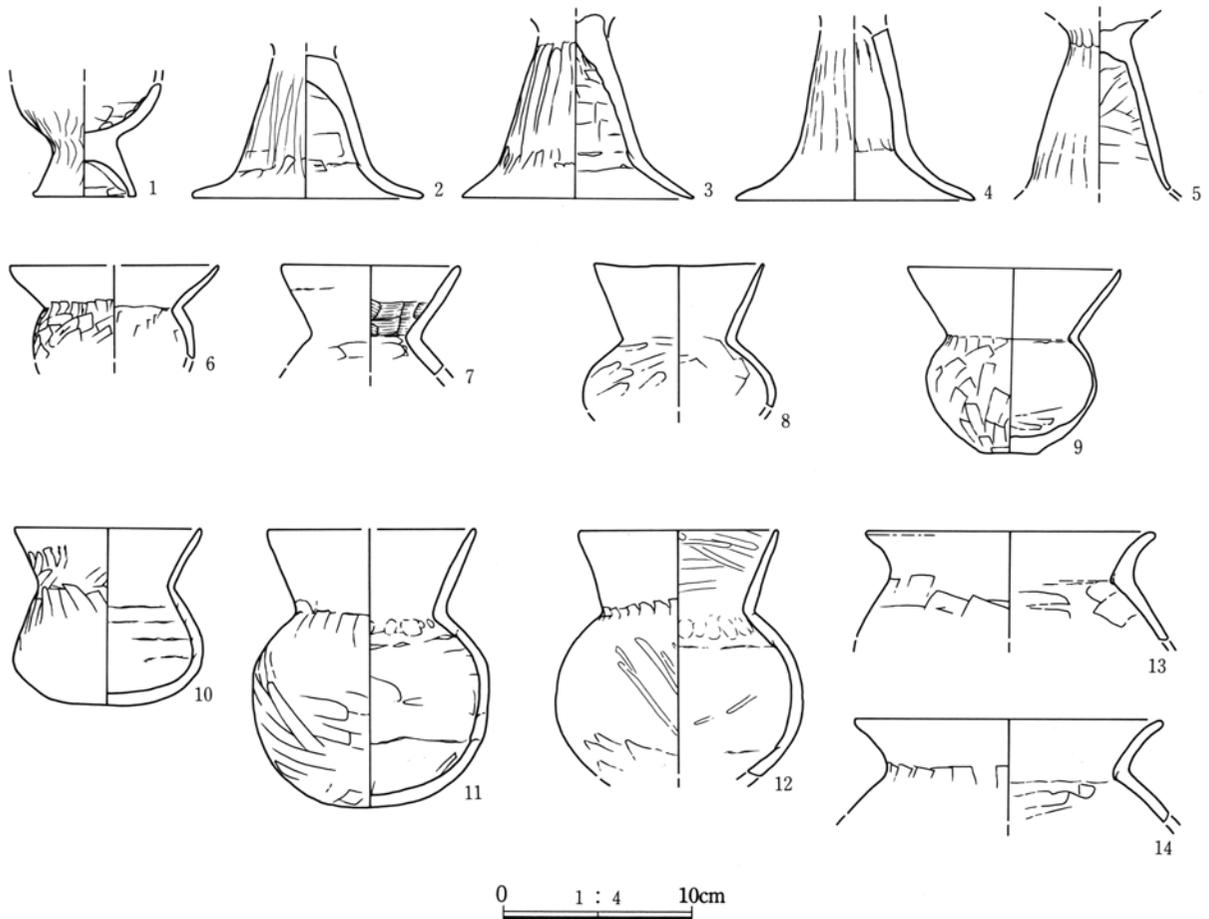
P 5 : 40×12cm

遺 物 滑石製品工房跡と考えられる住居であり、土器の他に多量の滑石製品が出土している。土器は住居全体に散在していたが、やや貯蔵穴周辺に偏在する傾向があった。11、12の甕は貯蔵穴内底面の床直上からの出土であり、14の甕は貯蔵穴内と周辺の

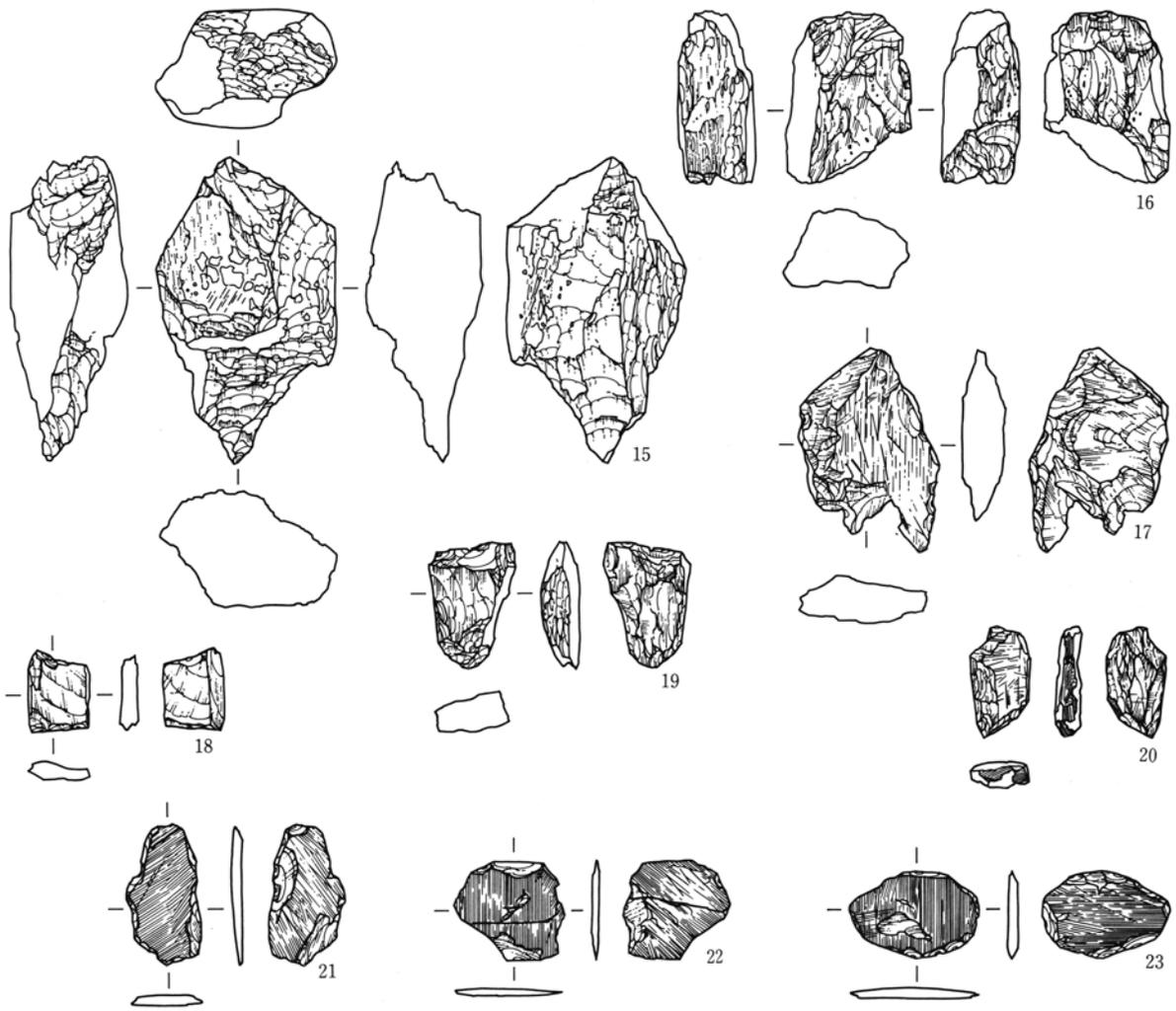
床直上破片が接合したものである。図示した以外には、壺・甕類が405片、3,026g、杯類が147片、833g出土している。

滑石製品は、石核からほぼ完成品まで多量に出土している。そのほとんどは白玉の未製品でほぼ完成のものまで含めて297点出土している。また、勾玉は欠損品等を含めて4点、有孔円板1点、刀子1点などが出土している。また、滑石以外に、滑石質蛇紋岩、蛇紋岩が使われている。

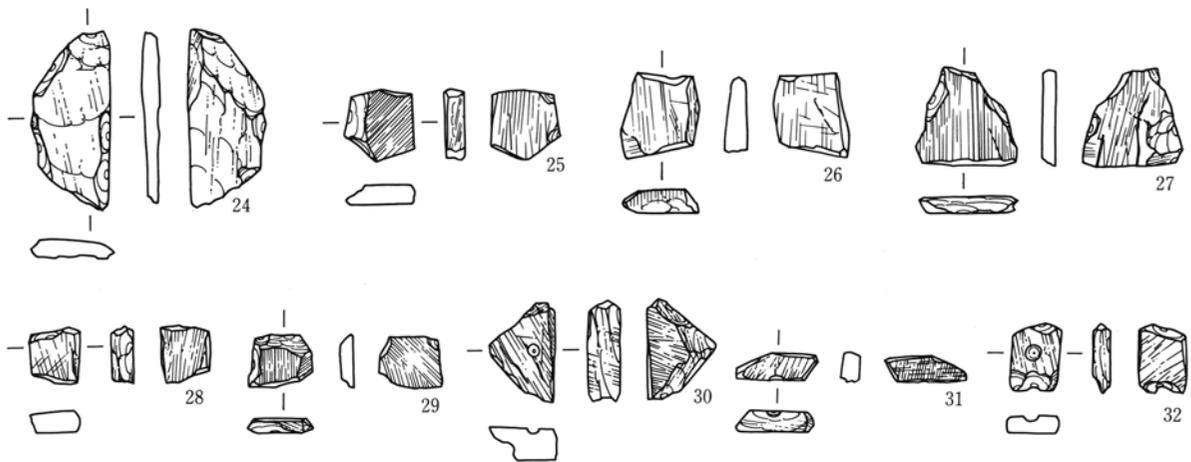
備 考 滑石製品工房跡と考えられる。



第184図 29号住居出土遺物(1)



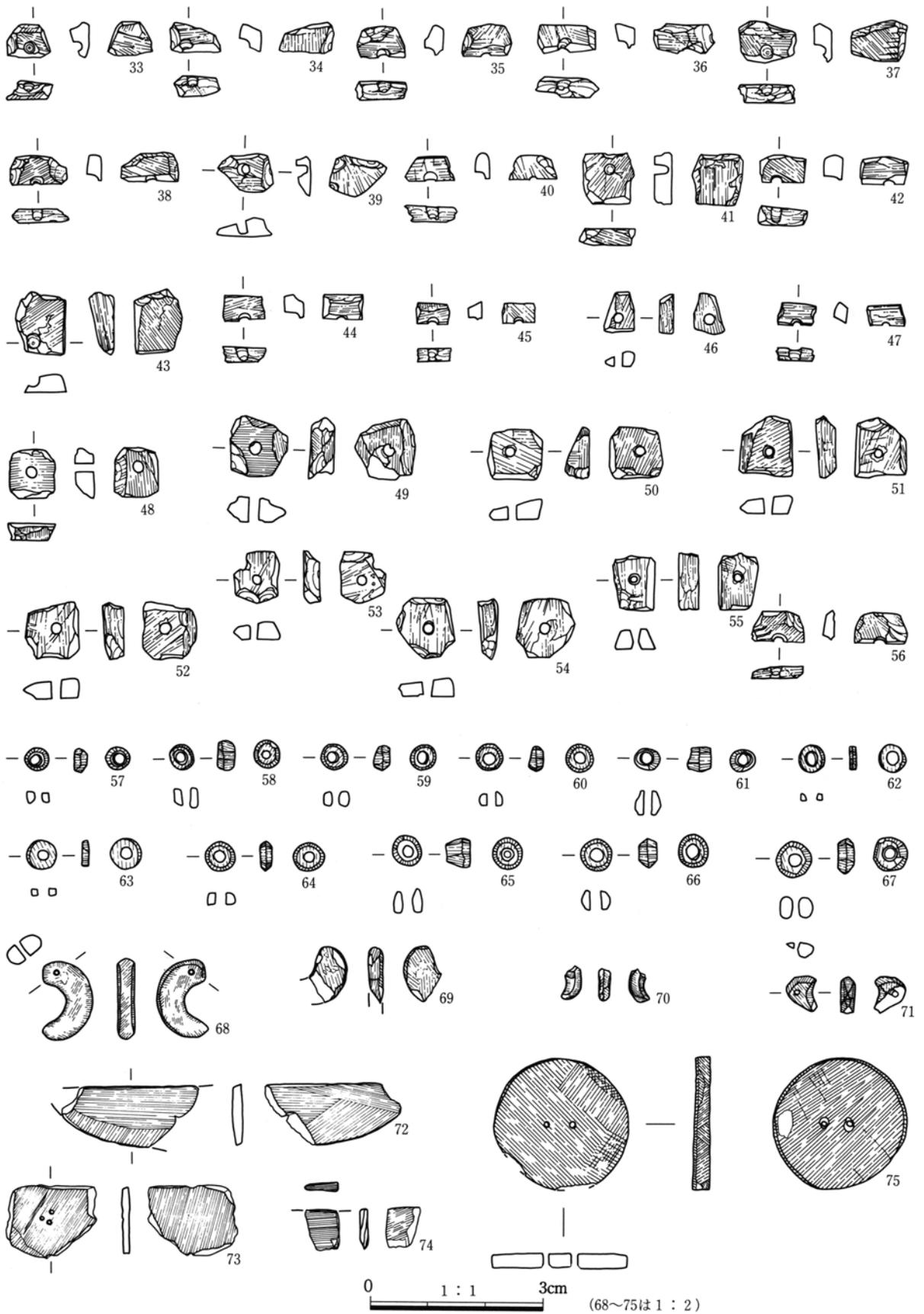
0 1 : 3 10cm



0 1 : 1 3cm

第185图 29号住居出土遺物(2)

第4章 福島駒形遺跡



第186図 29号住居出土遺物(3)

30号住居 写真 PL-52、76

位置 J-47G

形状 長軸を東西にとる長方形を呈する。規模は5.16×4.26mである。

面積 19.15m² 方位 N-70°-E

床面 礫混じりの土を13~20cm掘り込んで床面とし、北に向かって若干の傾斜がみられる。

埋没土 As-C軽石を含む黒褐色土が中心。下層には黄褐色土が混入する。自然埋没の状態を示す。

炉 炉は確認できなかったが、北西部床面に不整楕円形で54×45cm程の範囲に焼土が確認された。

貯蔵穴 住居南西隅に位置する。円形を呈し、規模は70×62×22cmである。

柱穴 支柱穴4本を確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

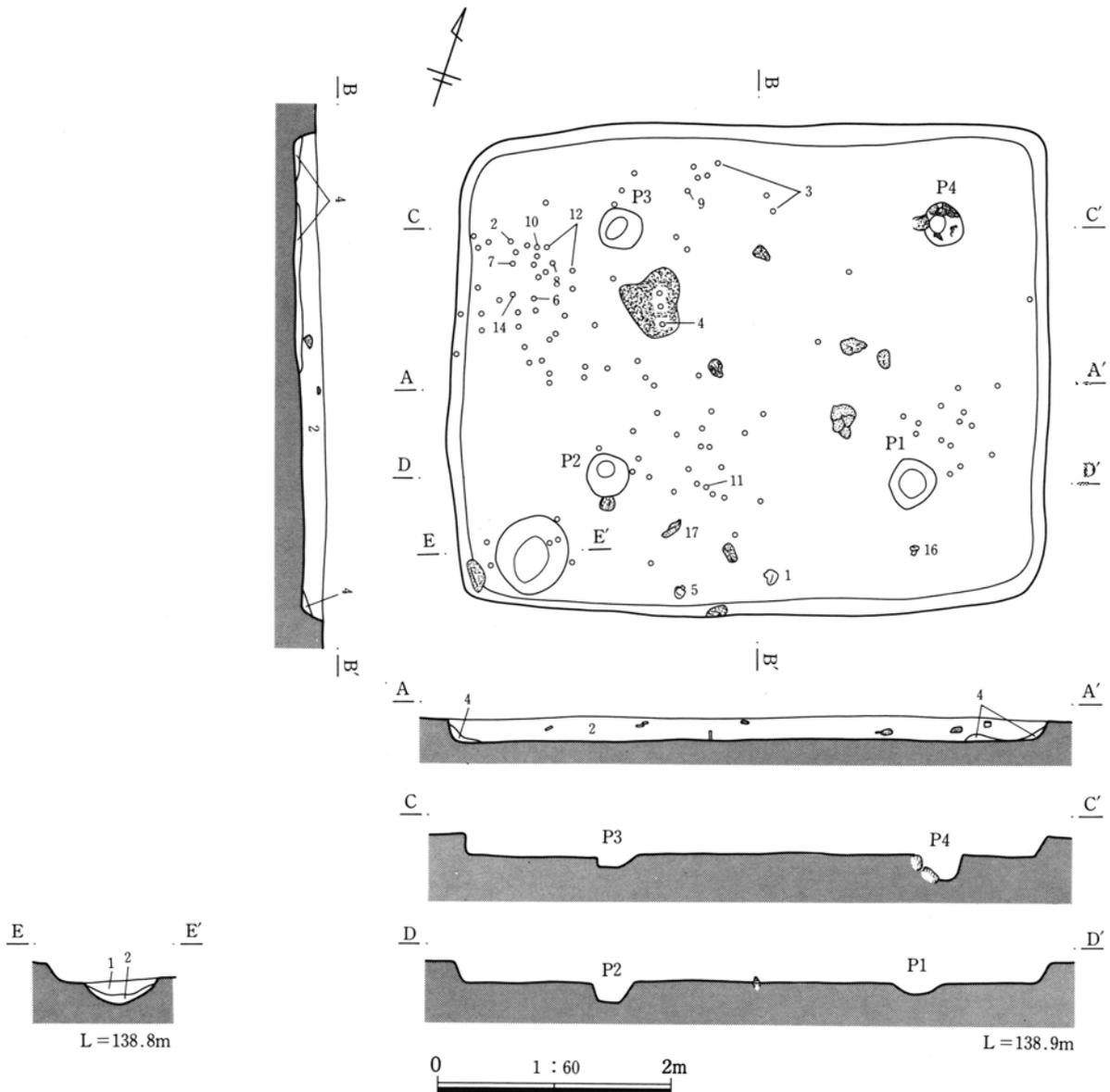
P1 : 40×9cm P1~P2 : 2.65m

P2 : 36×18cm P2~P3 : 2.10m

P3 : 36×11cm P3~P4 : 2.76m

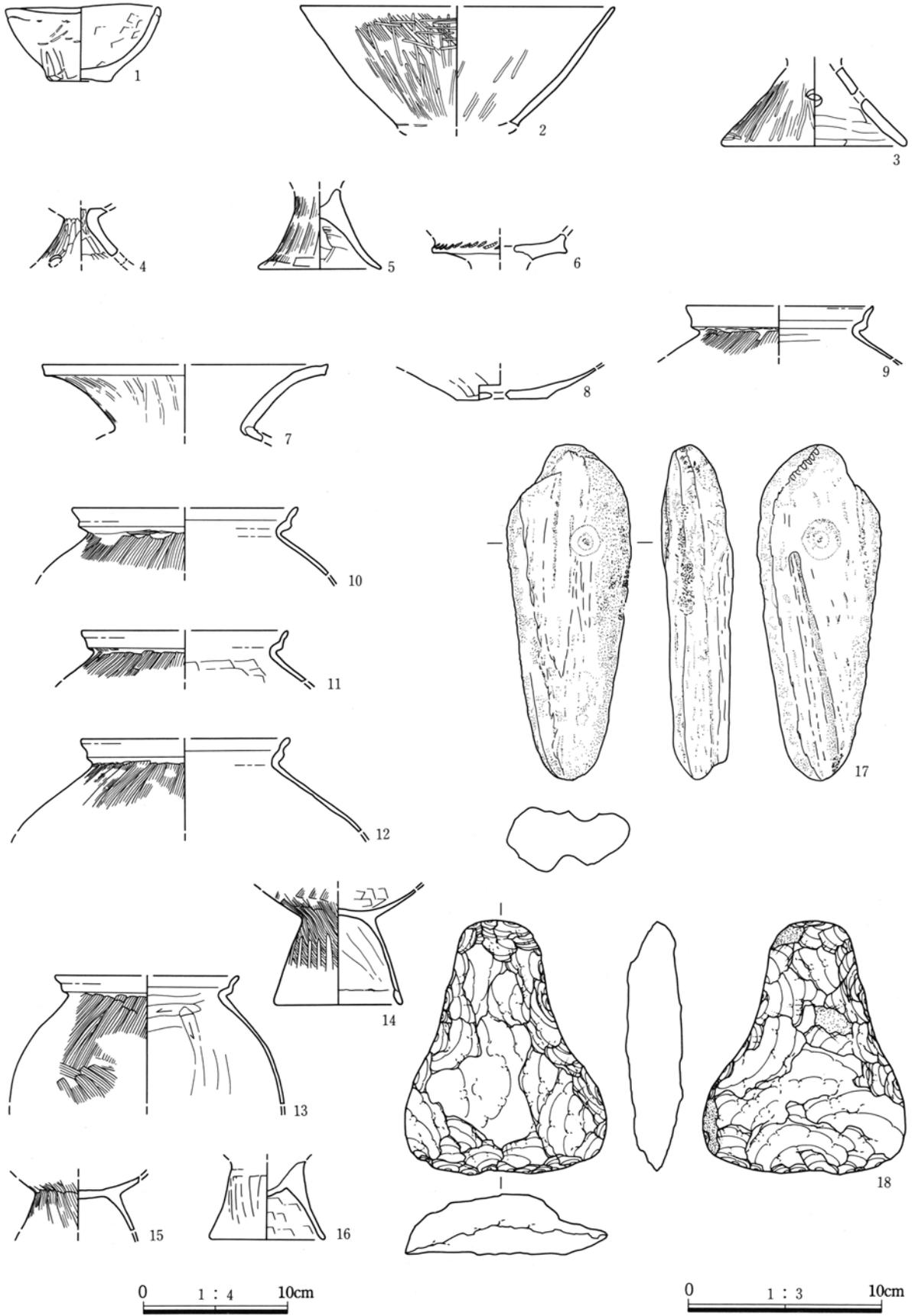
P4 : 35×21cm P4~P1 : 2.25m

遺物 遺物は住居全体に散在しているが、やや西側に偏在する傾向がみられた。図示した以外に10,632gの土器片の出土があった。



第187図 30号住居

第4章 福島駒形遺跡



第188図 30号住居出土遺物

31号住居 写真 PL-53、76

位置 J-46G

形状 主軸を南北にとる正方形を呈する。規模は3.66×3.62mである。

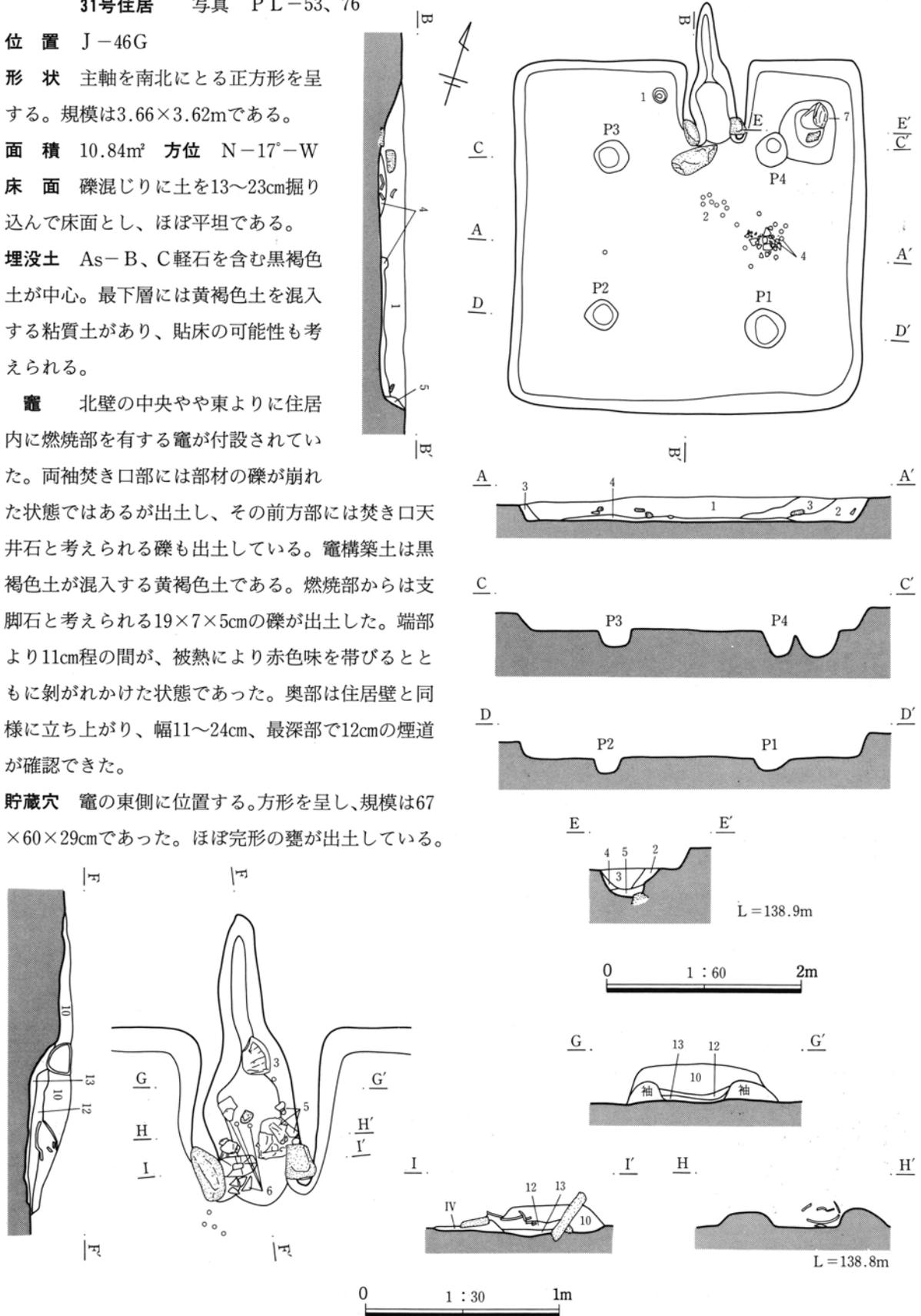
面積 10.84㎡ 方位 N-17°-W

床面 礫混じりに土を13~23cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 As-B、C軽石を含む黒褐色土が中心。最下層には黄褐色土を混入する粘質土があり、貼床の可能性も考えられる。

竈 北壁の中央やや東よりに住居内に燃烧部を有する竈が付設されていた。両袖焚き口部には部材の礫が崩れた状態ではあるが出土し、その前方部には焚き口天井石と考えられる礫も出土している。竈構築土は黒褐色土が混入する黄褐色土である。燃烧部からは支脚石と考えられる19×7×5cmの礫が出土した。端部より11cm程の間が、被熱により赤色味を帯びるとともに剝がれかけた状態であった。奥部は住居壁と同様に立ち上がり、幅11~24cm、最深部で12cmの煙道が確認できた。

貯蔵穴 竈の東側に位置する。方形を呈し、規模は67×60×29cmであった。ほぼ完形の甕が出土している。



第189図 31号住居

柱 穴 支柱穴4本を確認した。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

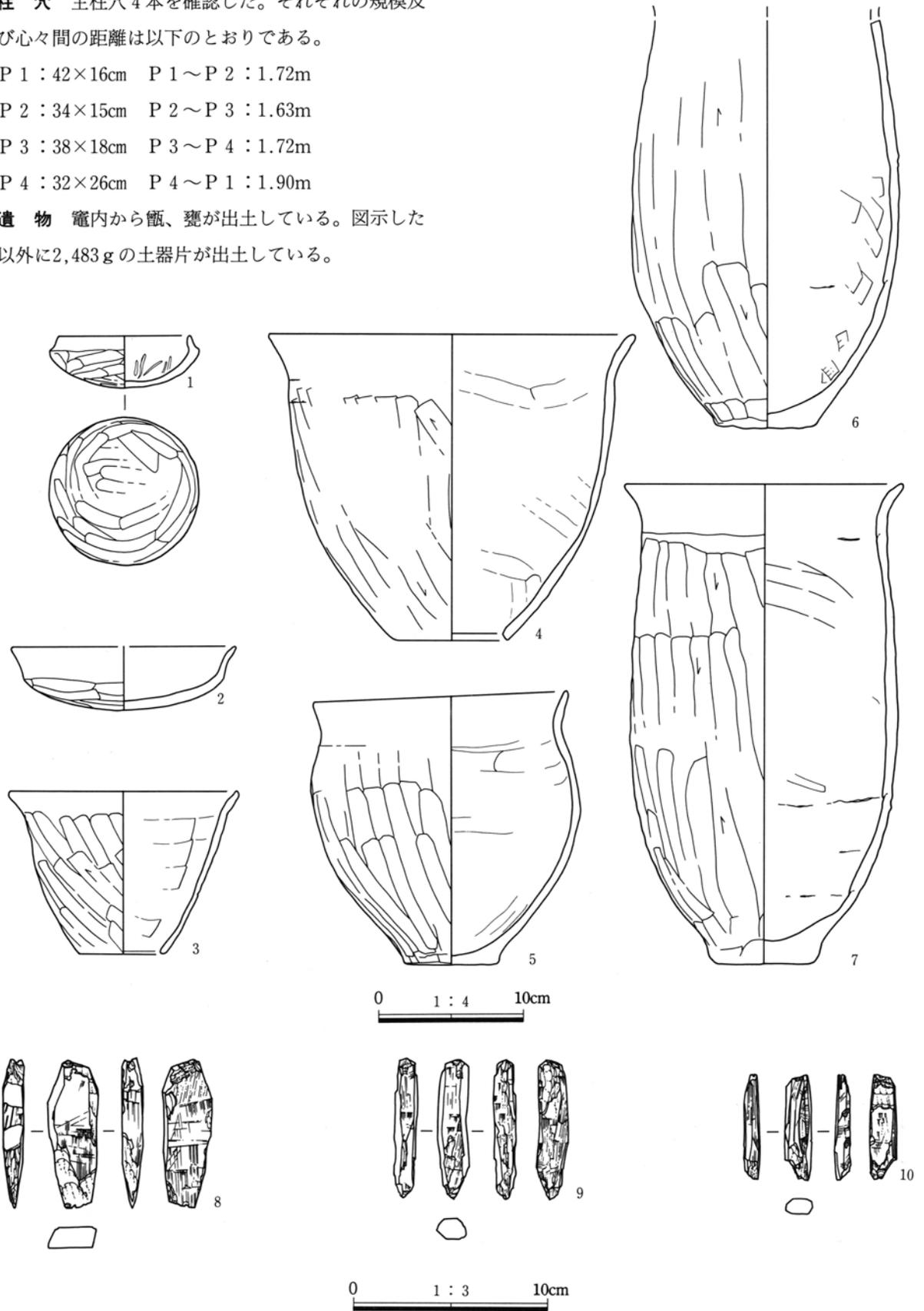
P 1 : 42×16cm P 1～P 2 : 1.72m

P 2 : 34×15cm P 2～P 3 : 1.63m

P 3 : 38×18cm P 3～P 4 : 1.72m

P 4 : 32×26cm P 4～P 1 : 1.90m

遺 物 竈内から甑、甕が出土している。図示した以外に2,483gの土器片が出土している。



第190図 31号住居出土遺物

32号住居 写真 PL-53、77

位置 N-47G

形状 北東隅が調査区外となるが、ほぼ正方形を呈し、南東角がやや湾曲する。規模は3.72×3.40mである。

面積 (10.8)m² 方位 N-28°-E

床面 礫混じりの土を23~30cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。

埋没土 上層にはAs-C軽石を混入する黒褐色土が堆積し、下層には焼土粒や炭化物粒混入土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

炉 炉は確認できなかった。住居中央部に焼土の広がり確認された。

貯蔵穴 住居南東部に位置する。東西に長軸をとる楕円形を呈し、形状規模に比して深度は浅く、最深部で6cmであった。138×68×6cmを計る。

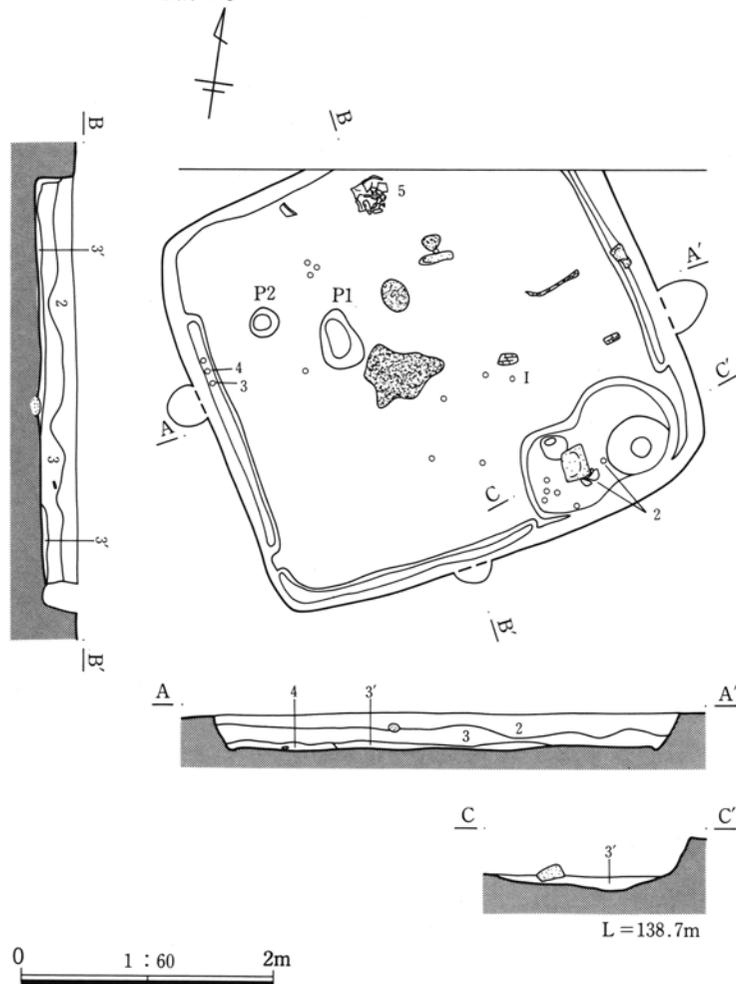
柱穴 住居内に2本のピットを確認した。また、住居壁面にある3本のピットは、周辺の掘立と同時期のピットであり、本住居に後出するものである。

P1 : 48×14cm

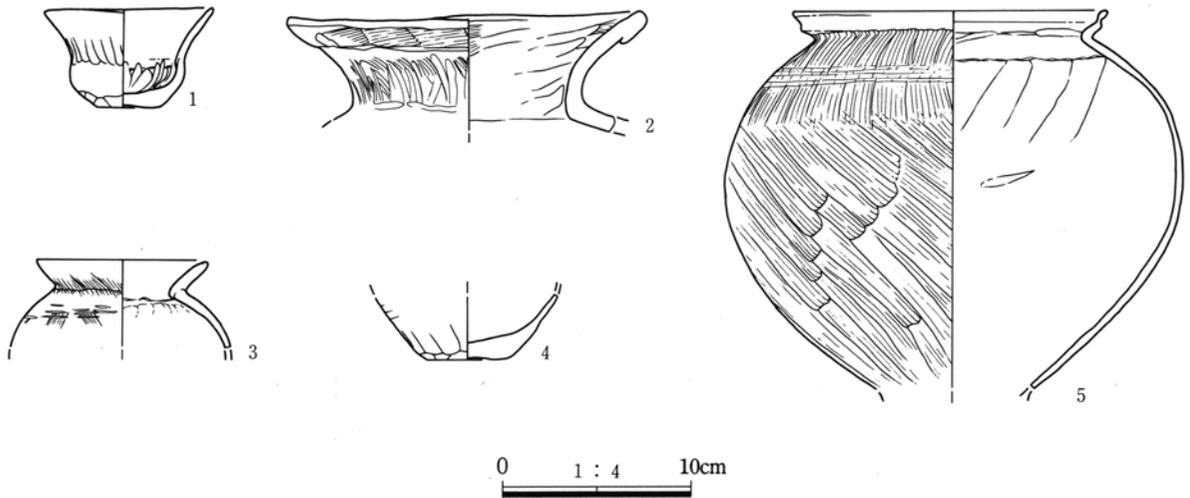
P2 : 23×6cm

周溝 壁面に沿って最大幅12cm、最深部6cmの周溝が確認された。調査区内の北壁面にはみられず、また、西壁面の一部にも切れている部分があった。

遺物 遺物は住居全体の散在していたが、比較的小破片が多く、図示したものは5点である。5の台付甕は、外面にスス状の付着物がみられた。図示した以外では壺・甕類を中心に2,946gの土器片が出土している。



第191図 32号住居



第192図 32号住居出土遺物

33号住居 写真 PL-53、77

位置 R-70G

重複 81号土坑に先行する。

形状 大半が調査区外となるため不明瞭である。確認できた南壁部で8.83mを計る。

面積 不明 **方位** 不明

床面 礫混じりの土を10~36cm掘り込み、暗黄褐色土で6cm程の貼床を施し床面としている。

埋没土 上層にはAs-B軽石、下層にはAs-C軽石含む黒褐色土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

炉 確認できなかった。

貯蔵穴 住居南東隅に位置する。楕円形を呈し、規模は112×93×35cmである。

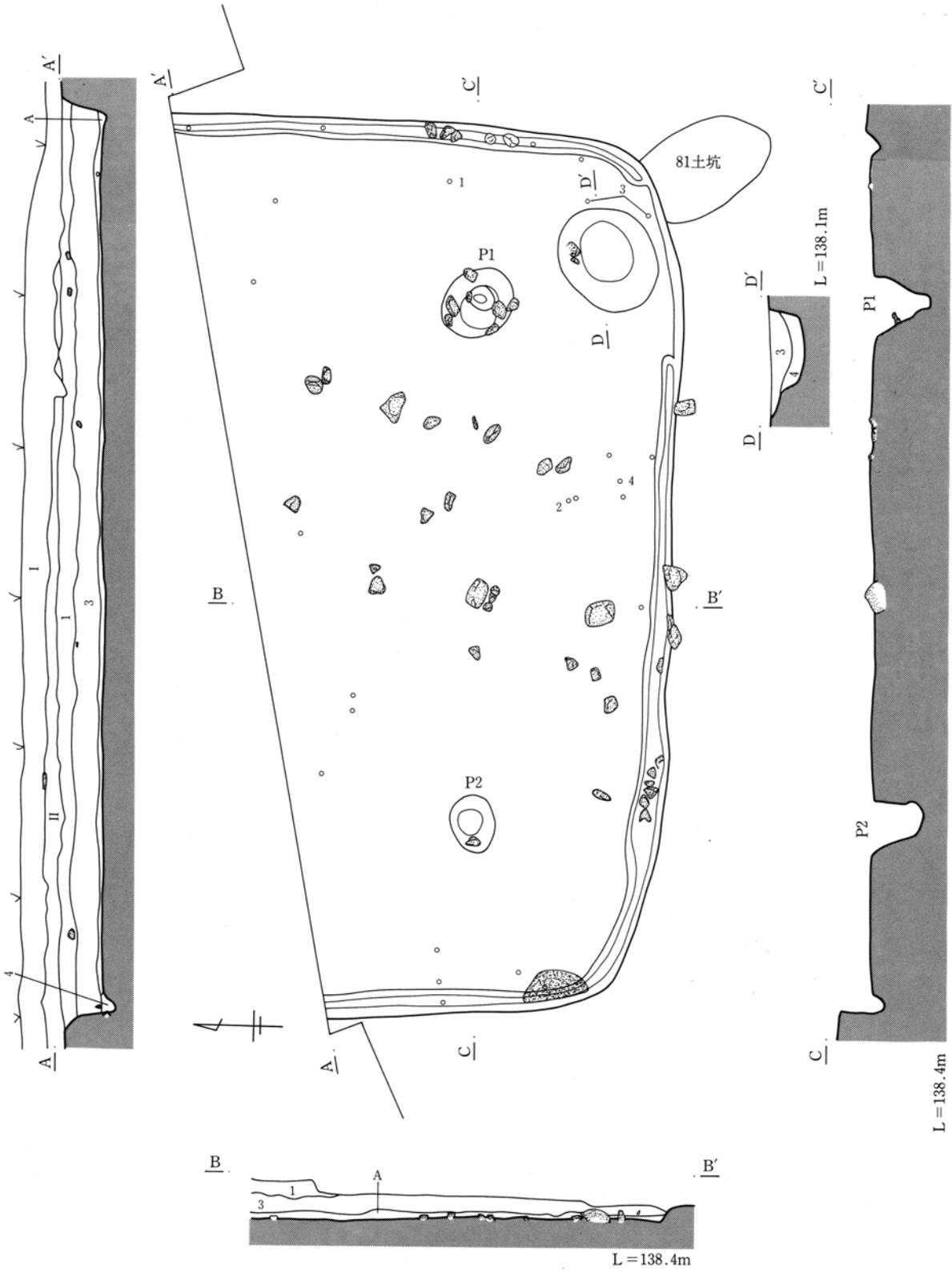
柱穴 2本のピットを確認した。支柱穴と考えられる。それぞれの規模及び心々間の距離は以下のとおりである。

P 1 : 78×49cm P 1 ~ P 2 : 5.18m

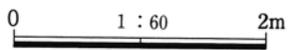
P 2 : 59×47cm

周溝 壁面に沿って、最大幅18cm、最深部10cmの規模で巡る。貯蔵穴周辺部にはみられない。

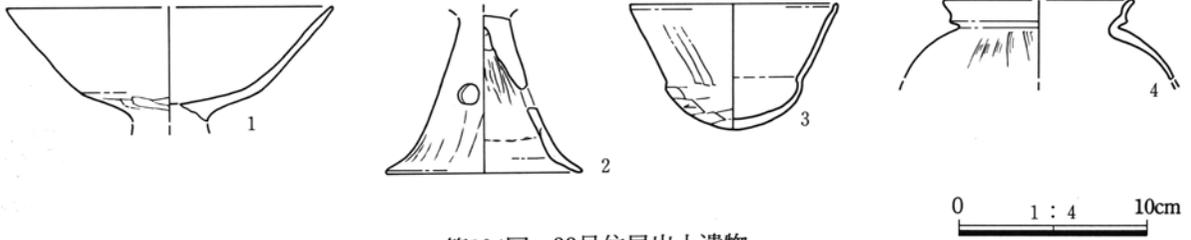
遺物 遺物は住居全体に散在していたが、比較的小破片が多く、図示したのは4点である。2の高杯と4の台付甕は床直上よりの出土である。図示した以外には壺・甕類846片、4,002g、杯類、8片、198gが出土している。



A 暗黄褐色土。締まりよい粘性土。



第193図 33号住居



第194図 33号住居出土遺物

34号住居 写真 PL-53、77
位置 L-59G
重複 3号溝に先行する。
形状 主軸を南北にとる長方形を呈する。規模は4.43×2.34mである。
面積 10.22m² **方位** N-3°-E
床面 礫混じりの土を4~10cm掘り込んで床面とし、ほぼ平坦である。
埋没土 As-C軽石を混入する黒褐色土が中心。下層土には黄褐色土が混入する。自然埋没の状態を示す。

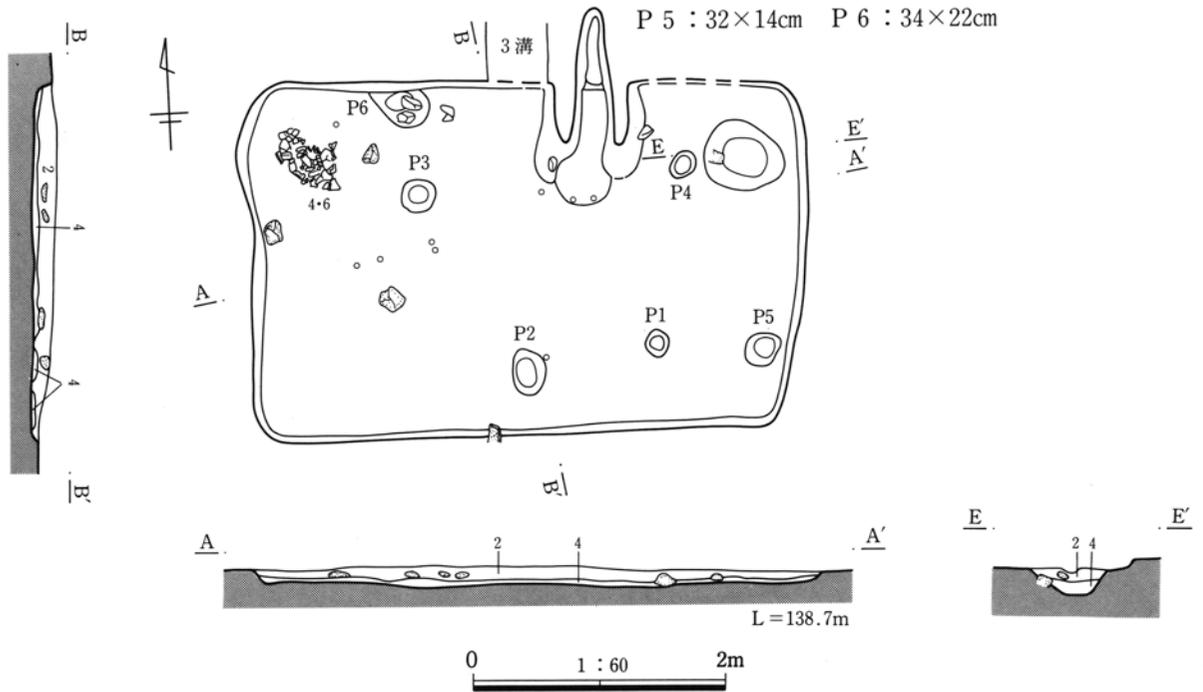
竈 北壁のやや東よりに住居内に燃焼部を有する竈が付設されていた。竈構築土は黒褐色土を混入する黄褐色土で、左袖焚き口部には部材の礫が立石状に出土した。また、焚き口天上石と考えられる礫が2つに割れた状態で出土している。燃焼部からは

支脚石が立石状に、ほぼ使用時の状態で出土した。21×7×5cmの礫で、端部より13cmの範囲が被熱により赤色化していた。また、直上ではないものの支脚石の上部より甕が出土している。燃焼部床面は若干の掘り込みをもち、緩やかな傾斜で煙道へと続く。他住居の竈のように、住居壁部分での顕著な立ち上がりはなかった。

貯蔵穴 竈の東側に位置する。楕円形を呈し、規模は65×55×46cmである。

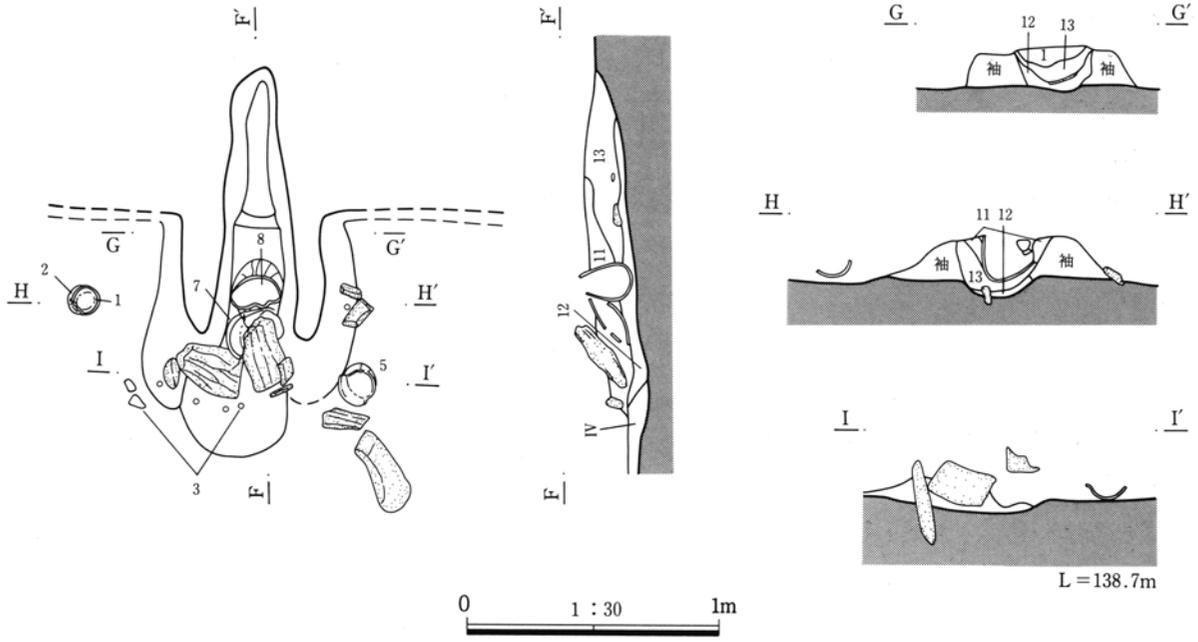
柱穴 6本のピットを確認した。それぞれの規模及び支柱穴と考えられるP1、3、4の心々間の距離は以下のとおりである。

- P1 : 19×16cm P3~P4 : 2.15m
- P2 : 38×15cm P4~P1 : 1.42m
- P3 : 28×9cm
- P4 : 24×7cm
- P5 : 32×14cm P6 : 34×22cm



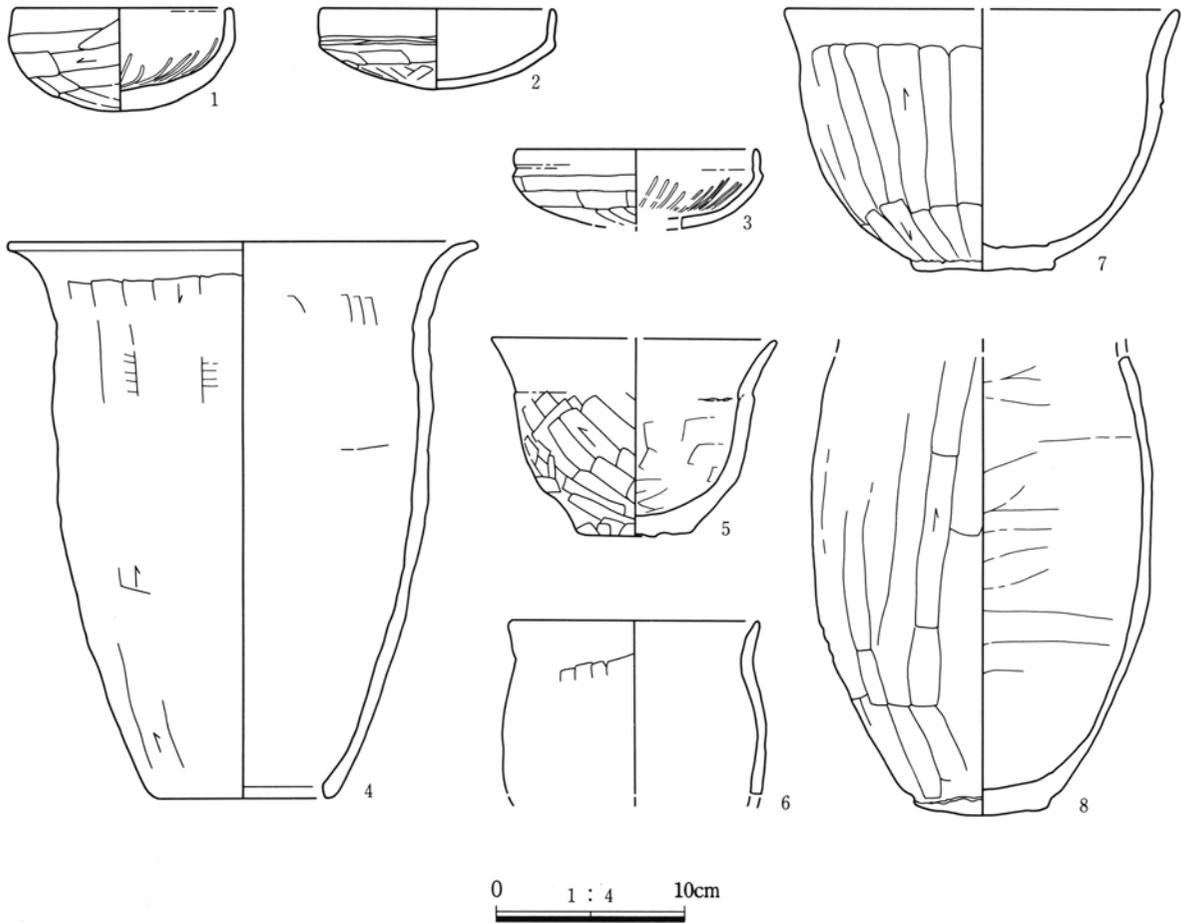
第195図 34号住居

1-1 竪穴住居



遺物 遺物は住居北西部、竈周辺及び竈以内に多くみられた。8の竈内出土の甕はスズ状附着物が顕

著であった。図示したもの以外に2,237gの土器片が出土した。



第196図 34号住居竈及び出土遺物

2. 古墳

1号古墳（富岡市第25号墳）

調査前の現状と調査経過（第197図）

遺跡地の西端に軽石を積み上げられ、葦石が畑との境界石に使用されていた。現況では、南北径が11mで、東西径が7mで長楕円形を呈していた。特に、東側の墳丘部は削平・変形が著しく、段丘状になっていた。また、東側の側部には葦石であったと思われる丸石が石垣状に組まれていた。調査過程において、古墳の周りの軽石を墳丘部に積み上げている状況がよく分かった。第197図の断面図をみてわかるように地表面から0.5～1mまでは積み上げられた軽石層となっている。この軽石層を排除すると、葦石を主体とした丸石が動かされた状況で出土した。この動かされた石を外すと生きた面が出てきた。天井石もはずされた状況で、石室の中には、盗掘の時に

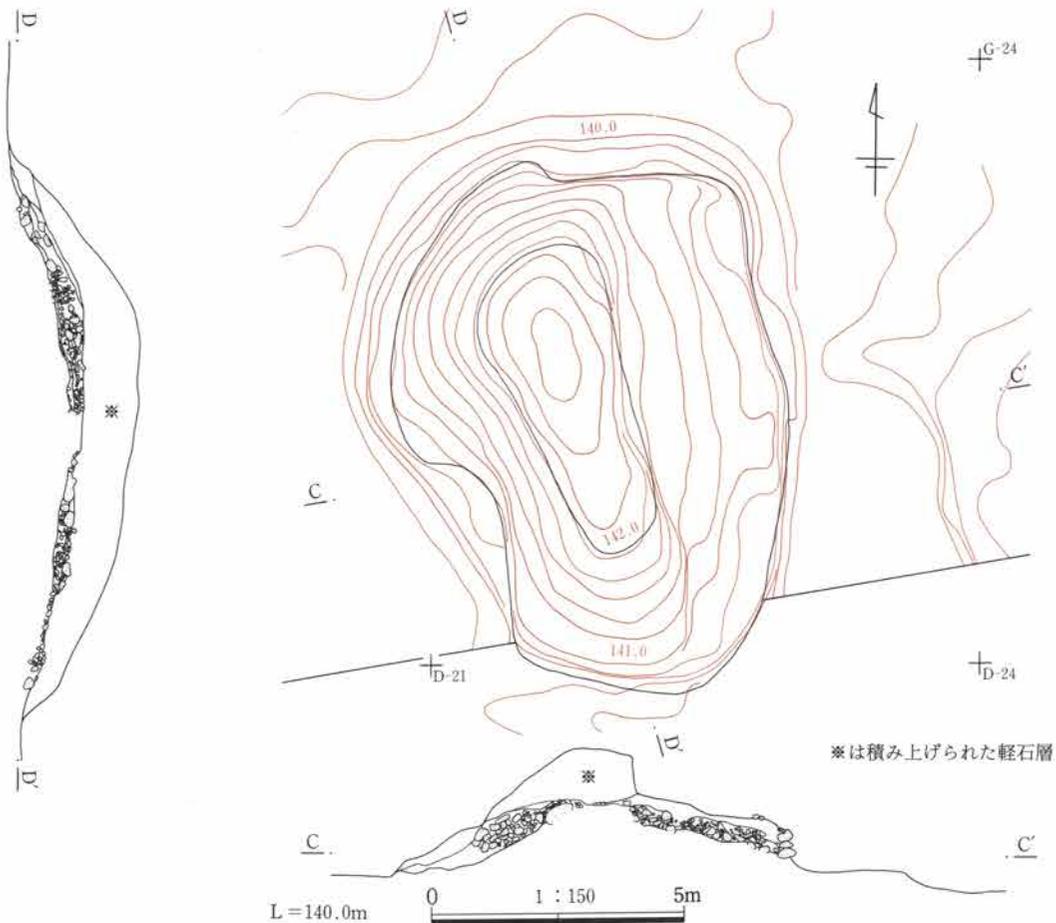
破壊された天井石が細片となって出土した。

古墳は江戸期に畑の耕作により特に西側が削平されており、As-A軽石に覆われた畑のうね跡が検出されている。

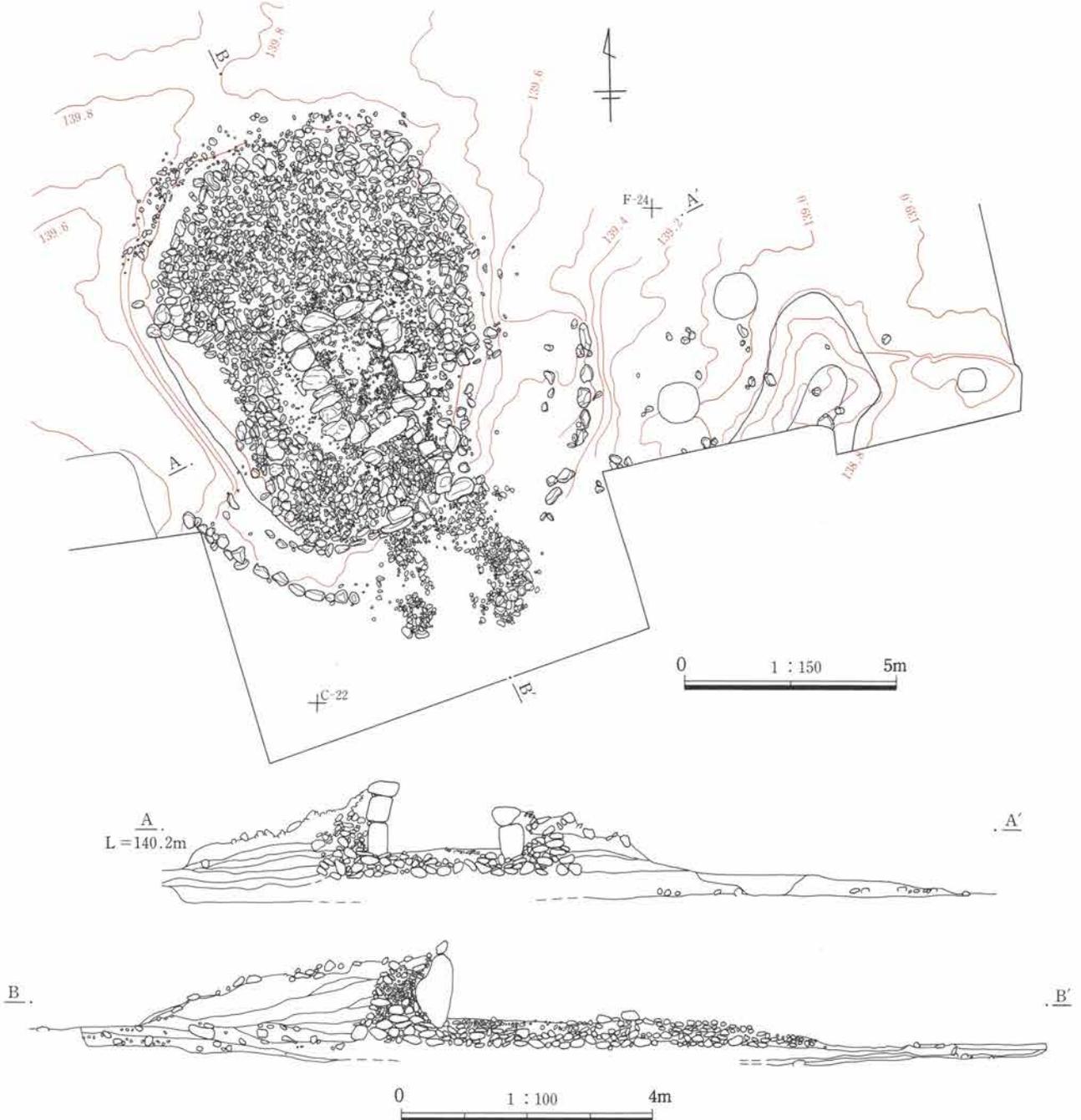
墳丘（第198図）

古墳はかなり削平を受けており、天井石は、羨門の石を除いては全て動かされている。第198図の墳丘平面図の葦石のように表現されている石も、上部の本来の葦石を取り外された後の面での石の表現であり、葦石の状況を示したものではない。

墳丘の構築は第198図の断面図を見て分かるように、石室の基礎の部分に旧表土を整地した後、石室の石の重さに耐えられるように約30cmほどの厚みでもって径5～30cm程の川原石が敷き詰められていた。この上に石室の石を乗せ、さらに側壁の裏ごめに小石



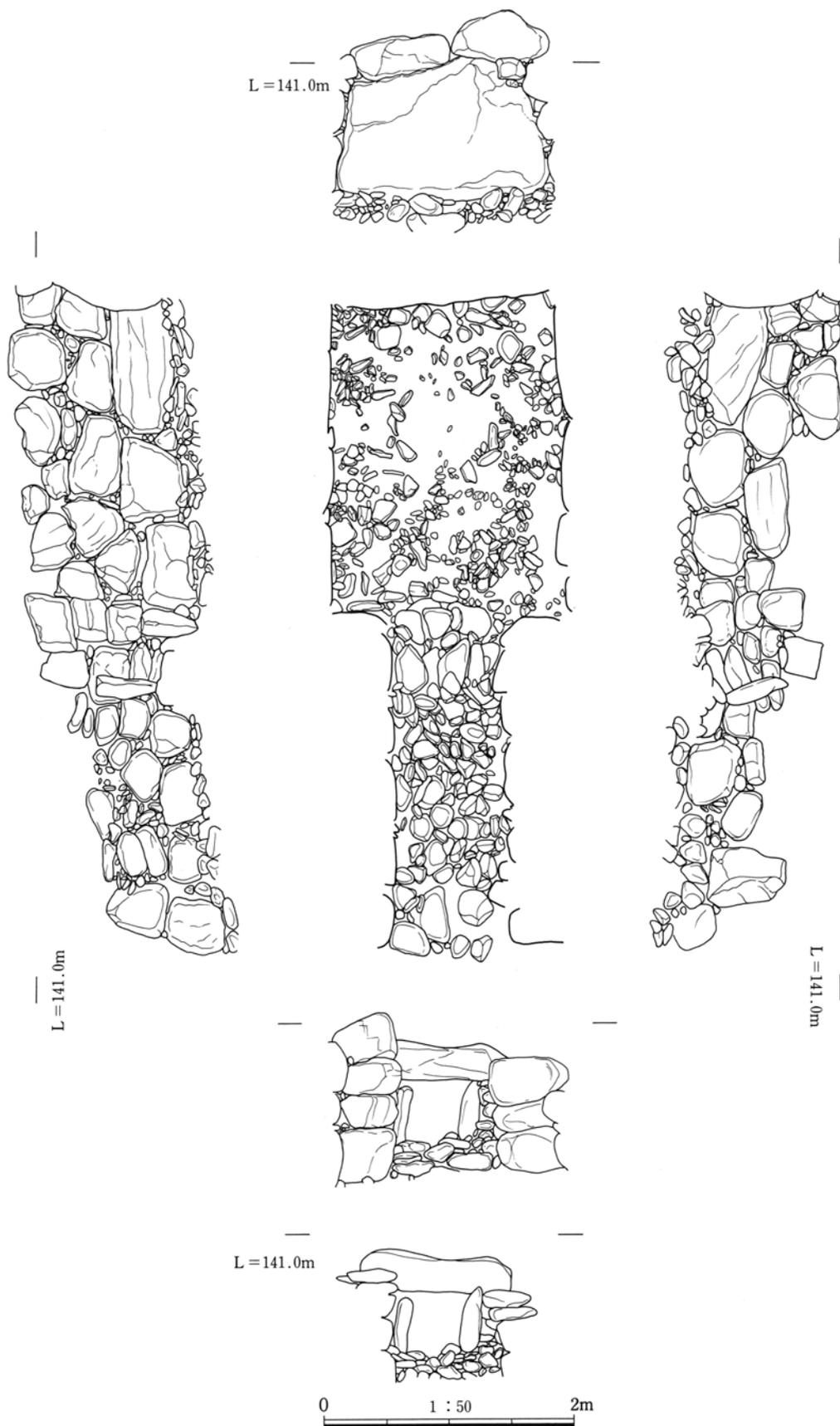
第197図 1号墳現況図



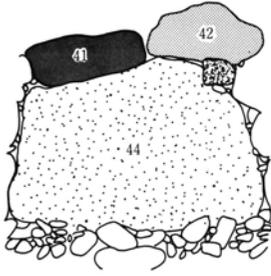
第198図 1号墳全体図

を押さえに使いながら墳丘の盛土を黒色土とローム土の互層で積み上げていき、現状では、側壁2～3段目の石が積み上げてある所まで遺存していたものである。古墳の墳丘部は第198図の平面図にあるようにやや長円形をしており、西南部には、墳丘の基礎としての列石が残っている。そして、この墳丘の外側に幅約1～1.5m程の平坦面を有しており、その

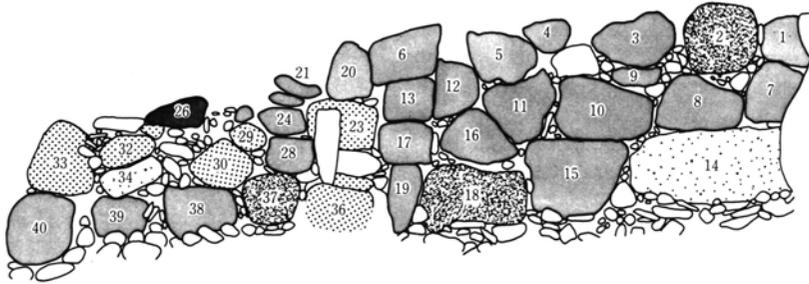
平坦面の外側にも平坦面の境界石となるべき列石が特に石室袖部・前庭付近に据え置かれていた。平坦面とこの境界石は墳丘周りを全周していたものと推定される。この平坦面から約3m程離れた東南部から周堀の一部が出てきた。この周堀は墳丘を全周していたものではなく、現状のように石室・前庭の前面の南面にのみ掘られたものと考えられる。深さは



第199図 1号墳石室展開図



番号	石材	長さ	幅	厚さ	備考
41	C	36.0	40.0	76.0	
42	I	88.0	32.0	52.0	
43	E	20.0	27.0	32.0	42下
44	F	180.0	61.0	125.0	



第200図 1号墳石室使用石材(1)

番号	石材	長さ	幅	厚さ	備考
1	M10	77.0	31.0	23.0	
2	E	57.0	62.0	45.0	
3	M7	58.0	78.0	35.0	
4	M10	61.0	40.0	31.0	
5	M9	44.0	54.0	35.0	
6	M9	47.0	61.0	32.0	
7	M9	44.0	35.0	39.0	
8	M9	54.0	50.0	37.0	
9	M9	35.0	46.0	13.0	
10	M9	70.0	47.0	41.0	
11	M9	52.0	65.0	46.0	
12	M9	50.0	65.0	40.0	
13	M9	38.0	54.0	28.0	
14	F	132.0	30.0	51.0	
15	M10	76.0	39.0	56.0	
16	M9	51.0	61.0	40.0	
17	M9	40.0	77.0	28.0	
18	E	73.0	35.0	48.0	
19	M9	29.0	85.0	57.0	
20	M7	122.0	35.0	31.0	

21	M9	23.0	45.0	11.0	
22	M9	28.0	39.0	13.0	21下
23	A	42.0	45.0	38.0	
24	M10	36.0	50.0	20.0	
25	M9	17.0	47.0	12.0	29上
26	C	54.0	33.0	23.0	
27	A	20.0	42.0	13.0	26左下
28	M9	40.0	40.0	25.0	
29	A	26.0	41.0	29.0	
30	A	46.0	50.0	31.0	
32	A	38.0	39.0	20.0	
33	A	46.0	67.0	48.0	
34	F	39.0	52.0	23.0	
35	A	40.0	41.0	17.0	
36	A	53.0	50.0	42.0	36上
37	H	38.0	67.0	45.0	
38	M9	50.0	55.0	37.0	
39	M9	44.0	55.0	44.0	
40	M12	56.0	93.0	49.0	

単位 cm

堀の端の部分しか確認できなかったので本来の堀底までの深さは不明であるが、現状の確認部分では約20cmである。

石室 (第199~203図)

石室 (第199図) は、天井石は外されているが、本来の天井は、この現状の側壁の上へすぐ載っていた可能性が高い。その事は羨門の上に架構している梁

石の存在からも想定される。以下、石室のデータを提示する。

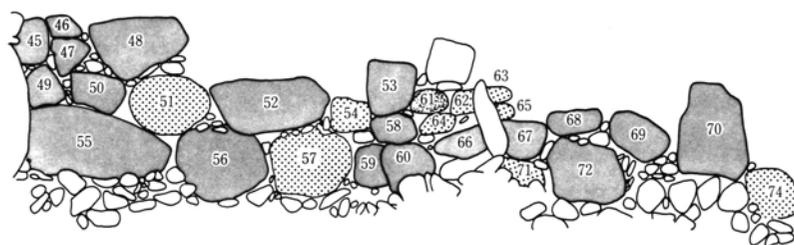
石室長 (中央部) 5.15m

玄室長 (中央) 2.5m (右) 2.5m (左) 2.6m

玄室幅 (奥壁・中央) 1.8m (玄門) 1.9m

羨道長 (中央) 2.65m (右) 2.6m (左) 2.7m

羨道幅 0.9m



第201図 1号墳石室使用石材(2)

番号	石材	長さ	幅	厚さ	備考
45	M9	40.0	60.0	30.0	
46	M10	29.0	54.0	17.0	
47	M9	29.0	53.0	30.0	
48	M10	65.0	60.0	48.0	
49	M9	33.0	54.0	32.0	
50	M10	43.0	63.0	28.0	
51	A	53.0	47.0	38.0	
52	M10	72.0	60.0	35.0	
53	M9	31.0	66.0	37.0	
54	A	42.0	58.0	26.0	
55	M1	117.0	38.0	58.0	
56	M8	67.0	41.0	50.0	
57	A	55.0	38.0	45.0	
58	M10	36.0	75.0	29.0	
59	M9	34.0	59.0	42.0	
60	M10	45.0	91.0	54.0	

61	J	25.0	38.0	14.0	
62	A	24.0	31.0	17.0	
63	A	21.0	39.0	13.0	
64	A	29.0	45.0	15.0	
65	A	31.0	38.0	14.0	
66	M9	40.0	38.0	24.0	
67	M9	33.0	35.0	24.0	
68	M10	36.0	42.0	17.0	
69	M9	40.0	43.0	25.0	
70	M9	52.0	41.0	64.0	
71	A	53.0	45.0	39.0	
72	M10	45.0	34.0	62.0	
74	A	46.0	79.0	51.0	

単位 cm

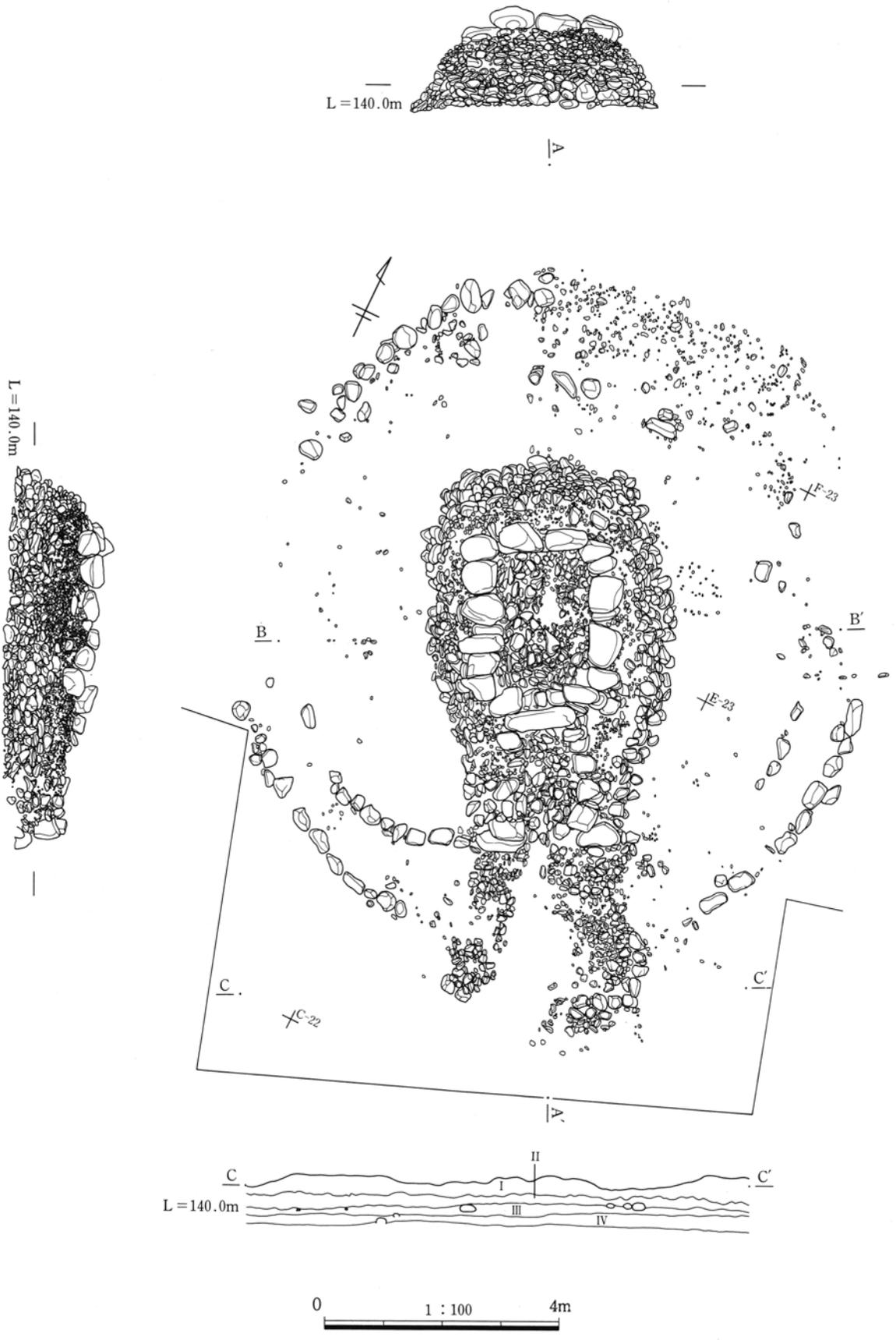
石室開口方向 S-27°-E

奥壁には高さ約1m、幅約1.5m、厚さ約0.5mの巨石を据え置き、その上に2つの小石を置いている。側壁は左右側壁とも玄室部は3段構成である。奥壁に接する側壁は左右ともに巨石を配し、安定させている。第一段目は比較的大きい石を置き、第2段目も大き目の石を配し、第3段目は天井石との兼ね合いも考えた小石を織り込んだ置石をしている。袖部は長石を4段に積み上げたもので構成している。石室の構築であるが、まず玄室を決定することから始まるので、奥壁と袖部の配置によりその玄室が決定される。この玄室の場合、袖部に使用された袖石は小さく、これを全体の基点にするには無理があるので、まず奥壁を設置したのとする。次に、左側壁第一段目には袖部に接して調整石である合石があるので、その無い右側壁奥壁側から構築されたものとする。第一段目は右側壁を仕上げた後、左側壁第一段目を同じく奥壁側から構築し、第2段目

も同じく、石の重なり具合等から見て、やはり、右側壁奥壁側から構築していったものとする。第3段目も左側壁に関しては途中から崩落しているため、断定はできないが、右側壁三段目の様子から、右側壁の奥壁側から構築していったものと考えられる。

羨道であるが羨門の巨石を配置して羨道の長さを決定し、その間を側壁の石で埋めていったものと考えられる。石の状況から見ると左側壁はいずれも羨門に近い部分は小石を積み上げており、側壁の長さにあわせるための調整石である合石である。故に、右側壁、それも袖部との関連から袖部側から構築していったものと考えられる。裏込め石の平面・立面図からも分かるように、玄室の周囲はかなり厚めの裏込め石を配しているが、羨道部は簡単な裏込めですましている。天井石にかかる重さに耐えるための構造と考えて良いが、玄室を先行して構築して次に羨道を構築したと考える証拠ともなるものである。

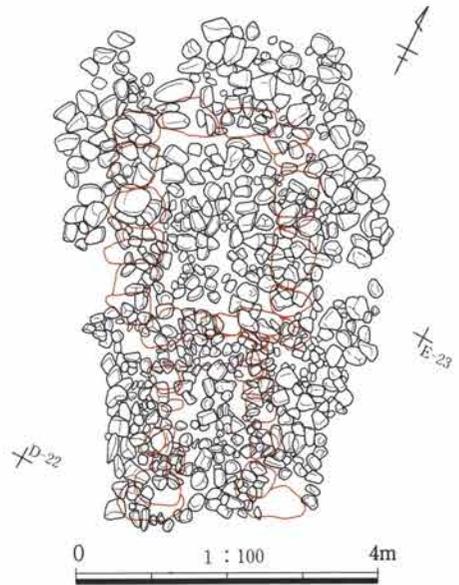
石材(第200・201図)をみると奥壁には砂岩系の



第202図 1号墳石室裏込め、列石平面及び前庭断面図

石を据え置き、天井石も現状では無いが、破壊・盗掘時に破碎された破片からみるとやはり砂岩系の石である。巨石は片岩系の石は無く、加工しやすい砂岩系の石を切り出して持ち運んだものと考えられる。側壁は玄室・羨道ともに結晶片岩系の石が圧倒的に多いが、安山岩も目立つ。その中で袖部より50cm程羨道寄りに立つ板石状の石は深緑色の特徴的な石材を使用しており、明らかに色合いを意識した選択をしていることが分かる。

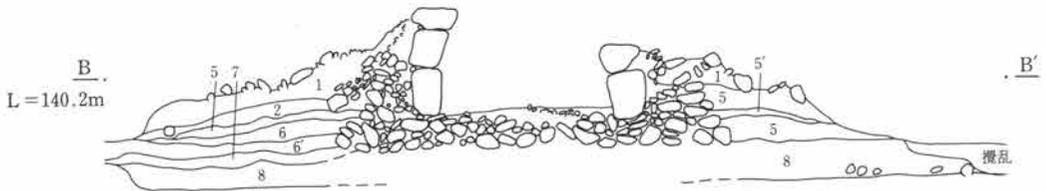
石室断面図・石室下敷石平面図(第203図)をみると明瞭に分かるが、石室を築く範囲より一回り大きくした範囲に小石を敷いており、石室の石の重さや湿気対策として考えられたものであろう。側壁を構築する際にその第一段目の石の構築に際してかなり細かい単



位で性質の異なる土を積み上げ、石の傾斜を考慮した調整石を下に噛ませながら、裏に土を交えた小石を詰めていっている。第2段目以降の側壁に関してはあまり裏込めはしっかりとせず、若干側壁を内傾させて築いていったことも第203図の断面から読みとれる。

前庭(第202図)

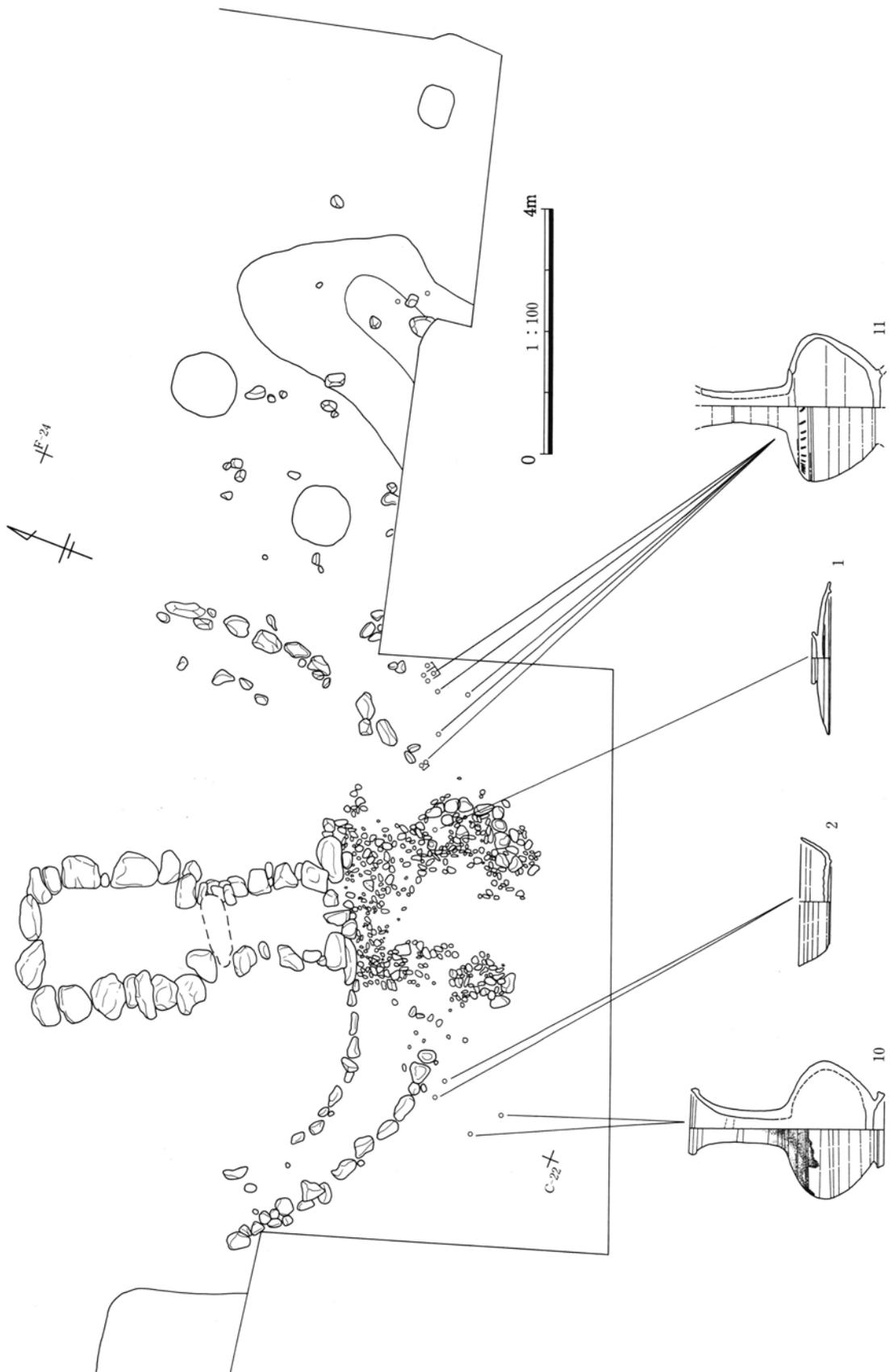
前庭は羨門の前面にやや扇形に開くような形で薄く小石を敷いて構築している。前庭の輪郭部にはやや大き目の石を選んで敷いているようであるが、かなり前庭の石も動かされており詳細は不明である。本来、羨門前面に扇形に万遍なく一重に敷いたものと考えられる。



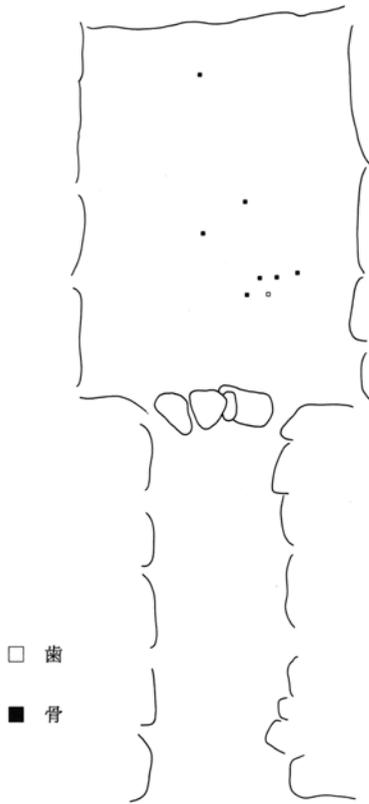
- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1 におい黄褐色土。小礫を含む。 | 6 黒褐色土。3層土に類似。 |
| 2 褐色土。小礫を含む。 | 6' 6層に比してやや黒味が強い。 |
| 3 黒褐色土。小礫を含む。 | 7 黒褐色土。色調やや明るい。 |
| 4 黒褐色土と黄褐色土の混土層。 | 8 黒褐色土。他の黒褐色土に比して黒味が強い。 |
| 5 黄褐色土。黒褐色土少量含む。 | 9 IV層への漸移層。 |
| 5' 5層に比して黒褐色土の量が少ない。 | |

0 1:80 20m

第203図 1号墳墳丘、石室断面図及び礫敷き平面図



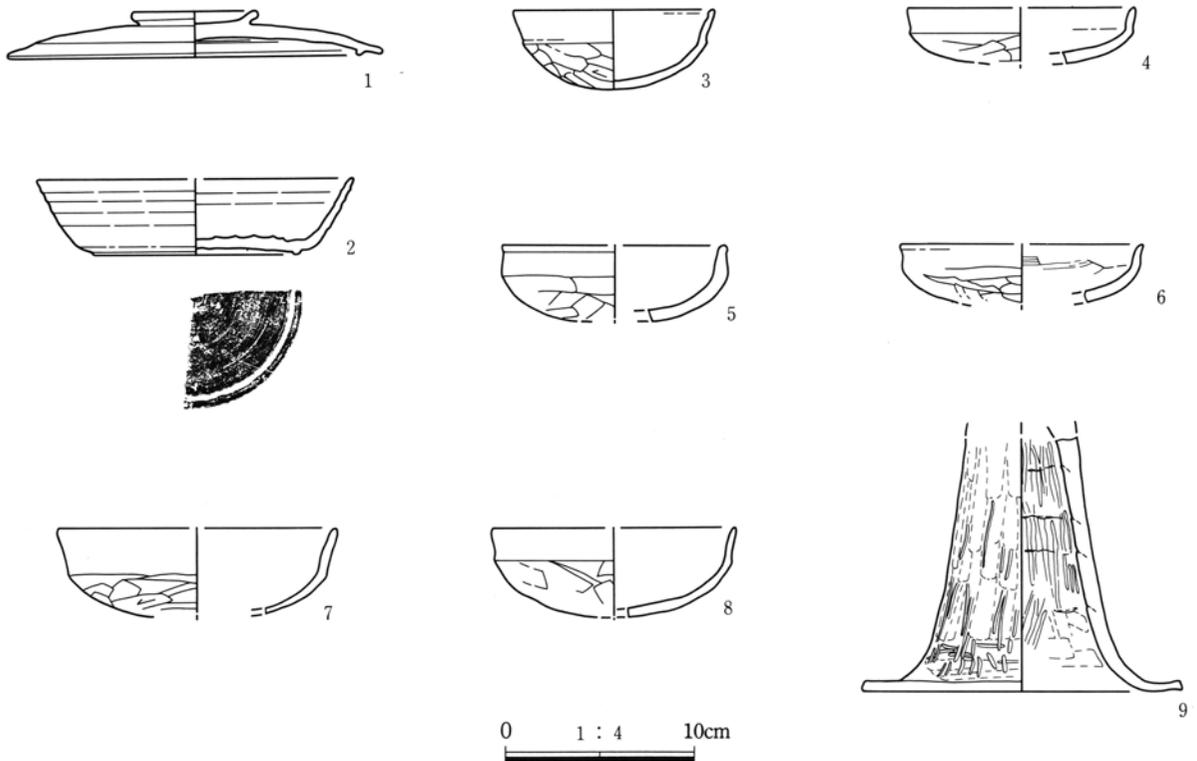
第204図 1号墳遺物出土状態



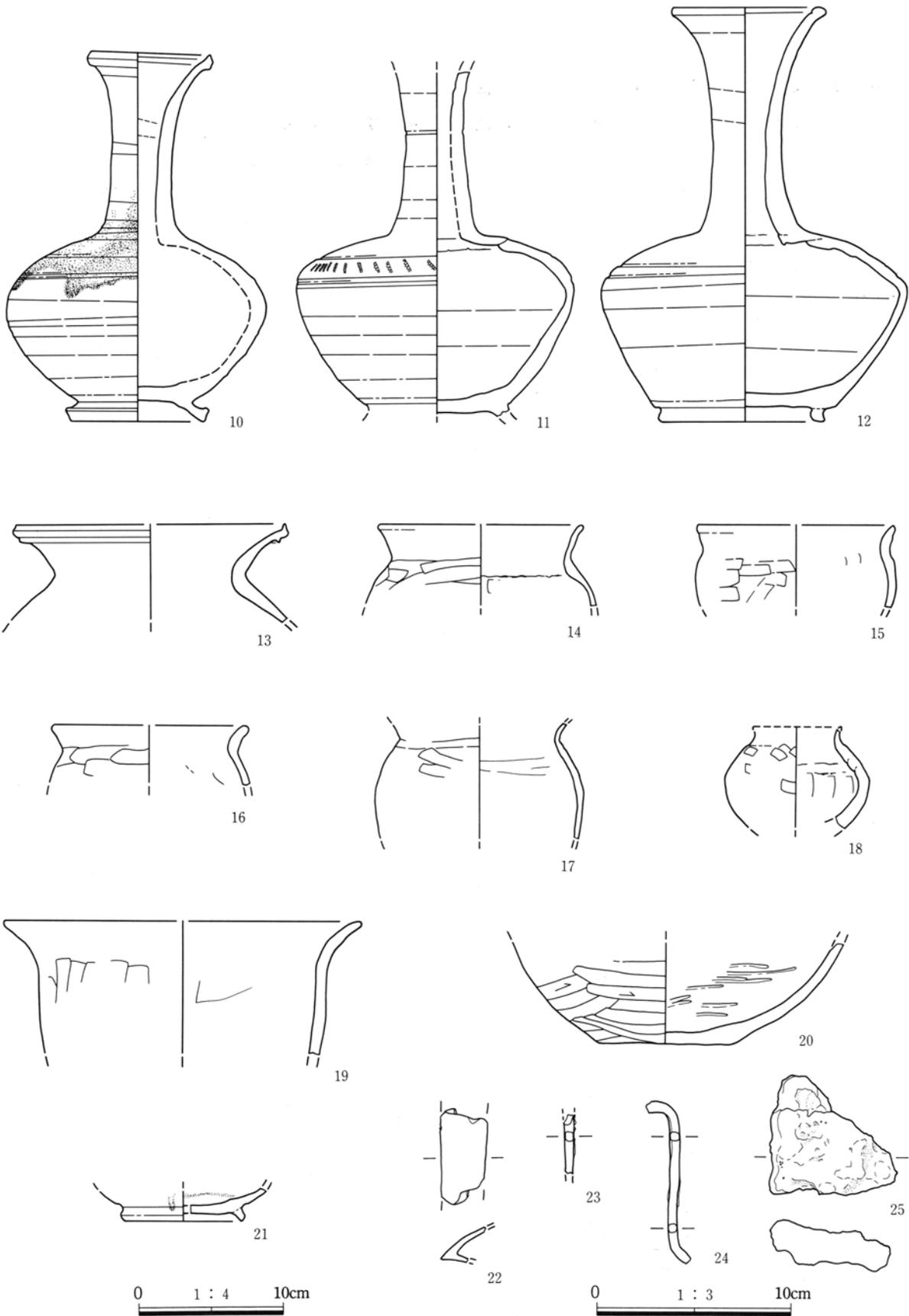
遺物出土状況 (第204・205図)

遺物は、玄室内からは人骨破片・歯のみで、その他の金属製品・土器類とも出土しなかった。徹底的な盗掘が行われたのであろう。人骨破片や歯は玄室中央やや東南寄りの地区より固まって出土している。動いた形跡があり本来の位置の確認はできない。

対照的に豊富な遺物が出土したのが石室前面と堀内である。石室前面からは、羨門の左右、平坦面と堀の境界石の基点やや南寄りの地点に対称的に長頸壺が出土しており、意図的にこの位置に据え置いた可能性が高い。その他、須恵器の皿や蓋・土師器の壺・皿などが出土しているが、いずれも破片が多い。全体としては前庭を中心に土器類が出土しており、前庭に土器を使用したお祭りをした可能性が高い。土器類の構成として、壺と皿が多いのがひとつの特徴である。鉄器類として釘と考えられる製品2点と鋤先の破片かとも考えられる製品1点がそれぞれ破片であるが、出土している。



第205図 1号墳石室内遺物出土状態及び出土遺物(1)



第206図 1号墳出土遺物(2)

2 その他の遺構

1 掘立柱建物

本遺跡では、IV区及びV区から11軒の掘立柱建物跡が確認された。周辺には他にも多数のピットが確認されている。

1号掘立柱建物 写真 PL-57

位置 O-69G

重複 2号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は不明瞭である。

形状 東西棟建物で2間×1間である。心々間寸法は、桁行寸法北列(P1~P3)で2.06m-2.24mの4.30m、桁行寸法南列(P4~P6)で2.25m-2.01mの4.26mを計る。それぞれの間口で20cm前後

の違いがあり、また、向かい合う間口でなく、対角する間口で近似値を計る。梁行寸法は西列(P1・P4)で4.25m、東列(P3・P6)で4.30mである。

面積 18.40㎡

主軸 N-26°-E

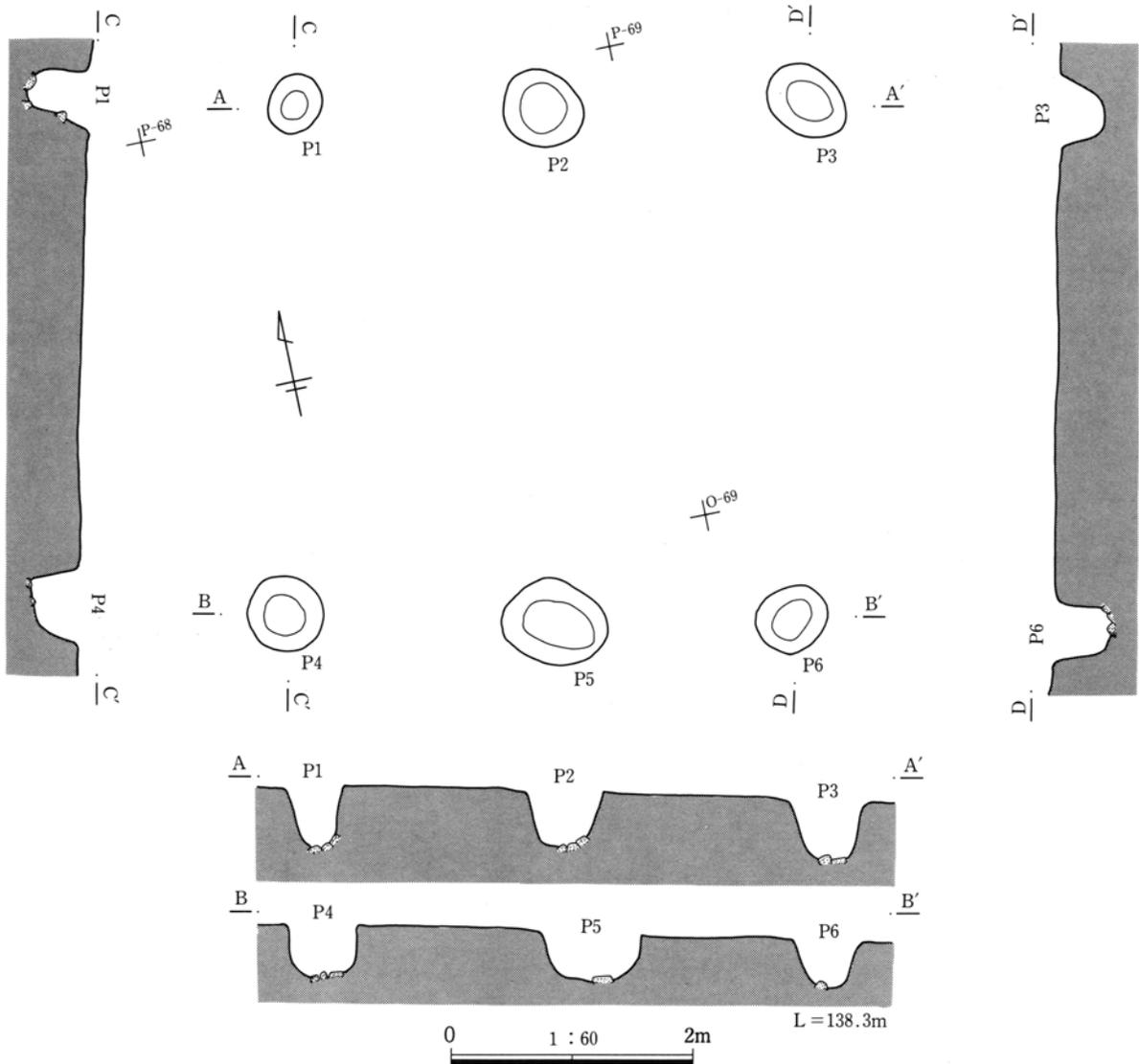
柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で50~86cm、深さ39~50cmの円形あるいは楕円形を呈する。明らかな柱痕は確認できなかった。

P1 : 50×43×47cm P4 : 63×62×38cm

P2 : 70×61×45cm P5 : 86×66×-cm

P3 : 71×52×47cm P6 : 60×53×35cm

備考 遺物の出土はなかった。



第207図 1号掘立柱建物

2号掘立柱建物 写真 PL-57

位置 P-68G

重複 1号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は不明瞭である。

形状 南北棟建物で3間×1間と考えられるが、西列ではP7がライン上よりずれた位置で確認された。心々間寸法は、桁行寸法東列(P1~P4)で1.50m-1.54m-1.48mの4.52m、桁行寸法西列(P5-P6-P8)で1.62m-2.92mの4.54mである。また、前述のとおりP7はラインから外れているが、ライン上で考えるとP6~P8間はそれぞれ1.48m、1.44mとなる。梁行寸法は北列(P1・P5)で3.78m、南列で3.90mである。

面積 17.27m²

主軸 N-81°-E

柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で29~48cm、深さ24~43cmの円形あるいは楕円形を呈する。柱穴底面や側面には、地山の礫がみられた。明らかな柱痕は確認できなかった。

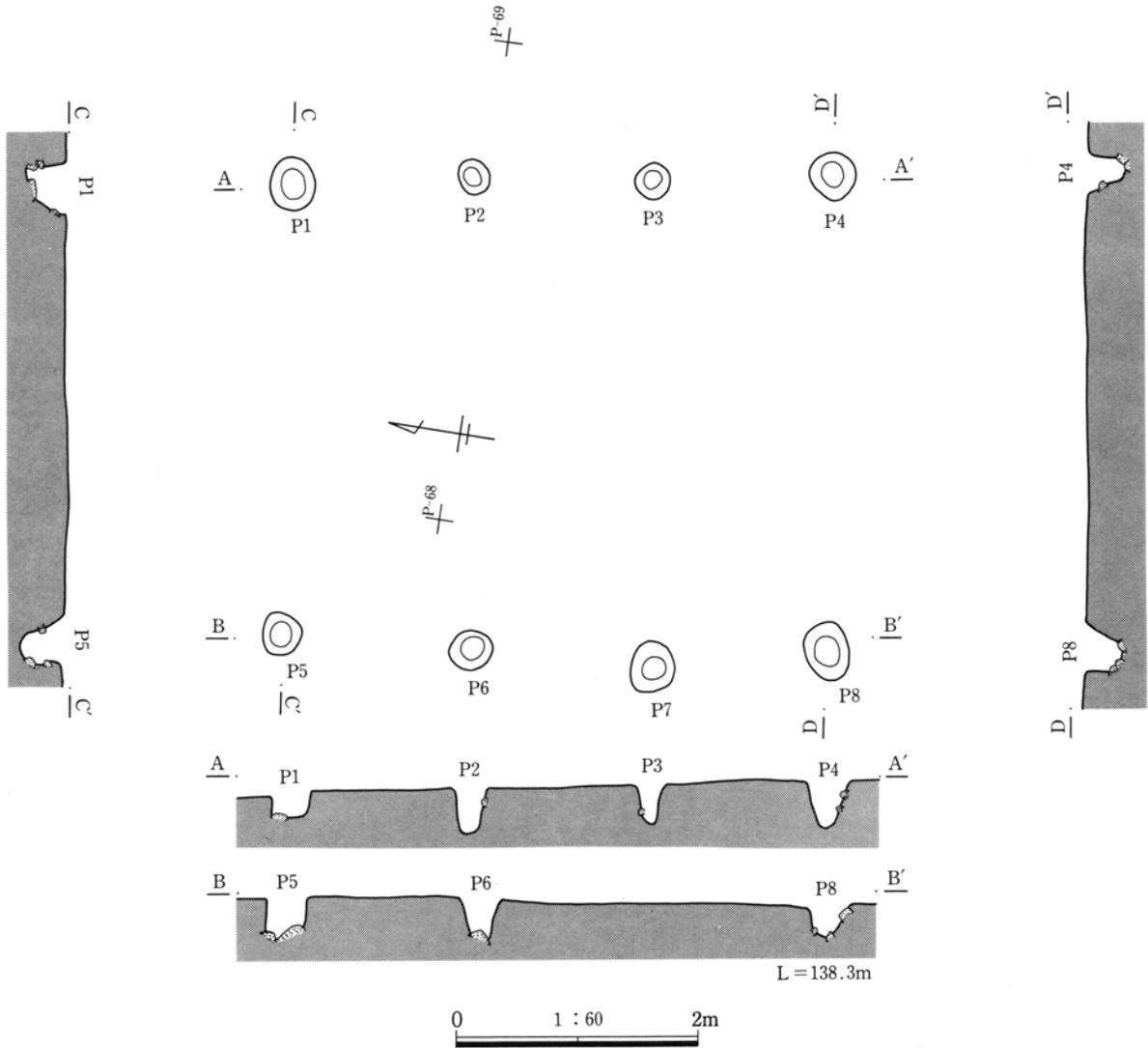
P1 : 44×37×31cm P5 : 35×32×-cm

P2 : 29×24×-cm P6 : 36×32×-cm

P3 : 31×28×32cm P7 : 40×38×-cm

P4 : 40×38×33cm P8 : 48×35×-cm

備考 南西に位置する3号掘立柱建物とは、主軸がほぼ直交する関係にある。遺物の出土はなかった。



第208図 2号掘立柱建物

3号掘立柱建物 写真 PL-57

位置 M-66G

重複 38号、39号、46号土坑に重複する。46号土坑には切り合い関係から先行していることが明らかであり、38、39号土坑の覆土が46号土坑に類似することから、それぞれの土坑にも先行するものと考えられる。

形状 東西棟建物で2間×1間である。心々間寸法は、桁行寸法北列(P1~P3)で2.18m-1.99mの4.17m、桁行寸法南列(P4~P6)で2.09m-2.10mの4.19mを計る。北列では西側間口がやや広がっており、南列ではほぼ同寸である。梁行寸法は西列(P1・P4)で3.38m、東列で3.36mを計りほぼ同寸である。

面積 14.19m²

主軸 N-8°-W

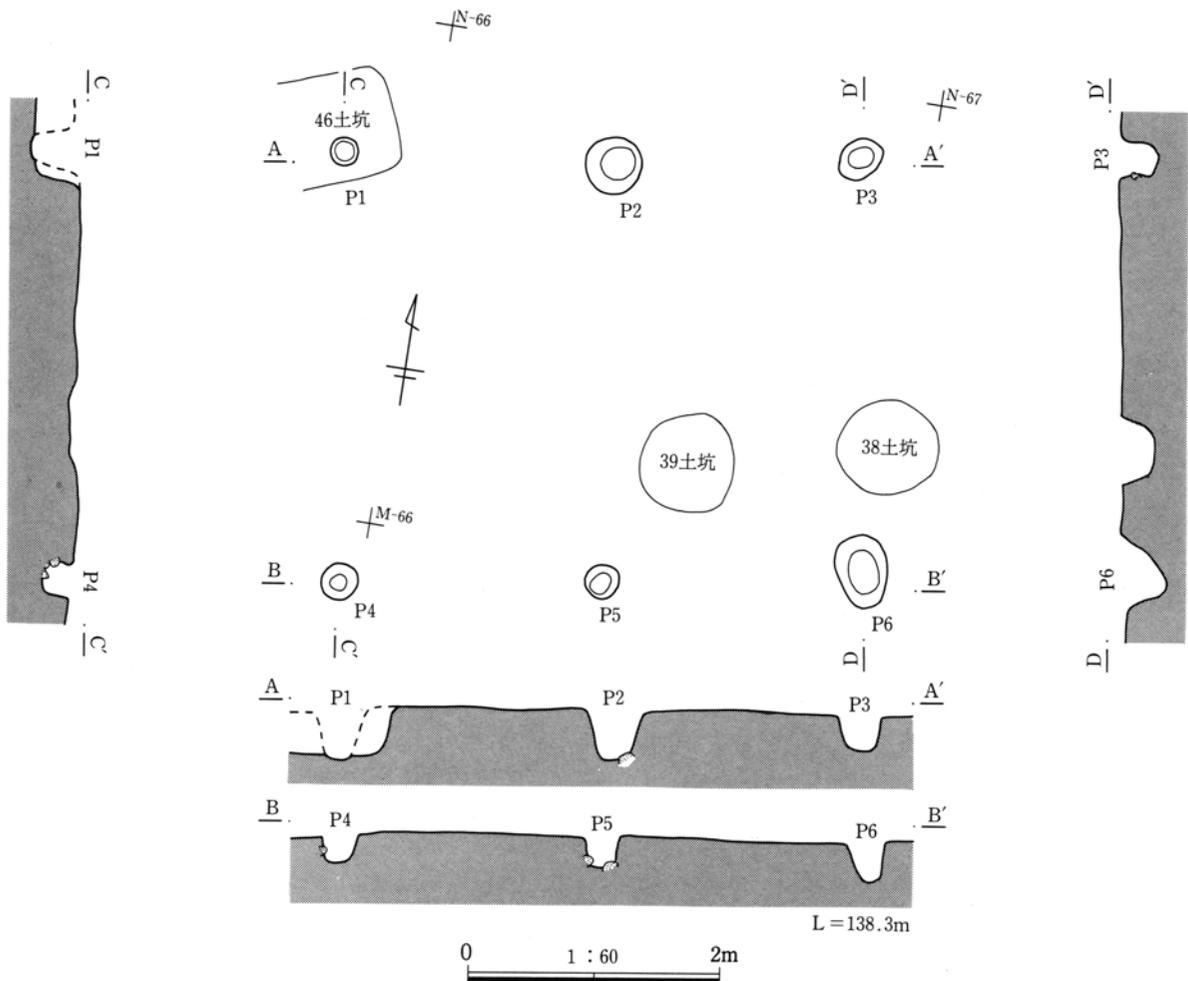
柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で21~58cm、深さ25~41cmの円形あるいは楕円形を呈する。明らかな柱痕は確認できなかった。

P1 : 21×21×18cm P4 : 30×28×24cm

P2 : 46×46×37cm P5 : 28×26×25cm

P3 : 38×28×-cm P6 : 58×40×-cm

備考 北東に位置する2号掘立柱建物とは、主軸がほぼ直交する関係にある。遺物の出土はなかった。



第209図 3号掘立柱建物

4号掘立柱建物 写真 PL-57

位置 O-63G

重複 54号土坑に先行し、22号竪穴住居に後出する
と考えられる。

形状 東西棟建物で2間×1間である。心々間寸法は、桁行寸法北列(P1~P3)で1.51m-1.43mの2.94m、桁行寸法南列(P4~P6)で1.55m-1.51mの3.06mを計る。梁行寸法西列(P1・P4)で2.95m、梁行寸法東列(P3・P6)で3.18mである。東西の列で23cmの差異がみられ、東側が広がった形状を成す。

面積 9.24m²

主軸 N-15°-E

柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で30~50cm、深さ27~46cmの円形あるいは楕円形を呈する。明ら

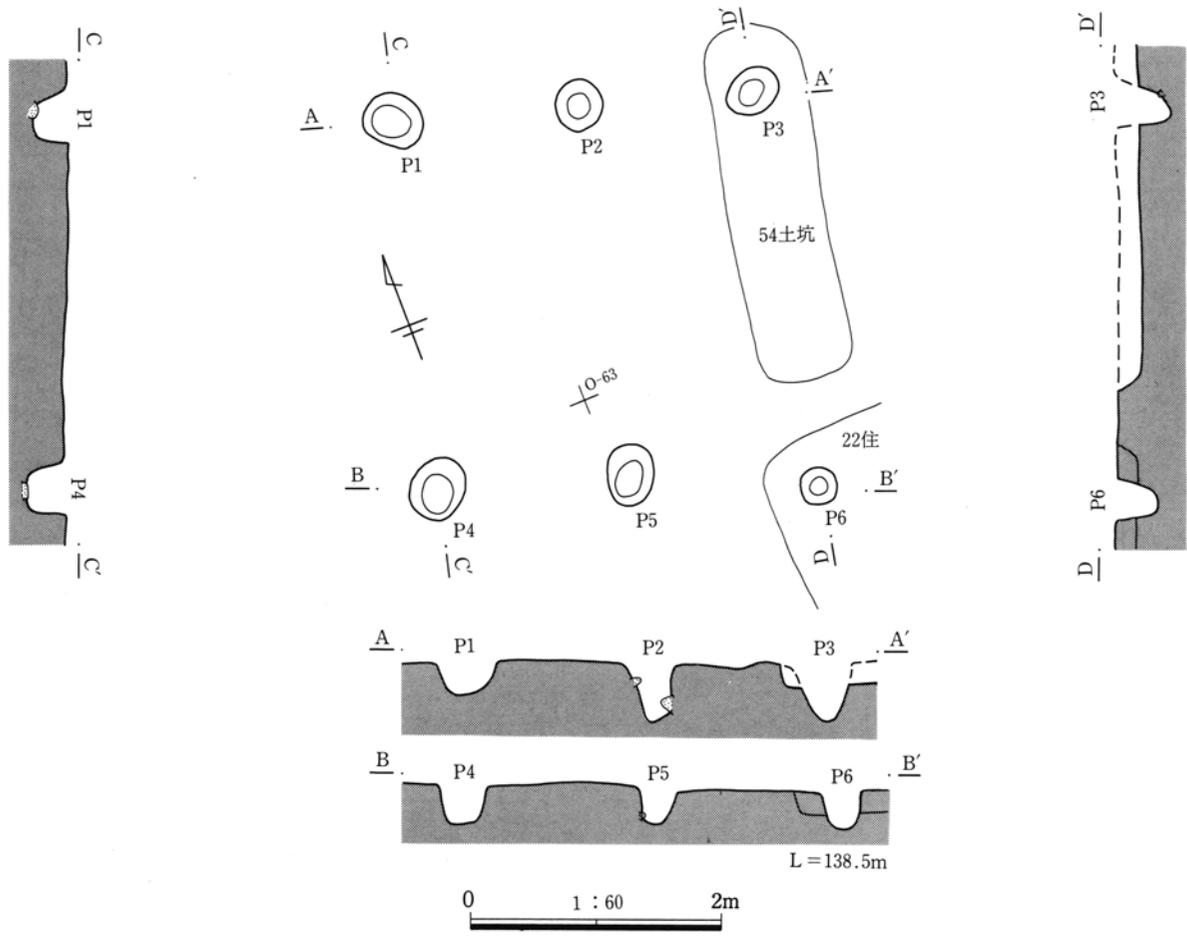
かな柱痕は確認できなかった。

P1 : 47×42×25cm P4 : 50×43×30cm

P2 : 42×37×44cm P5 : 49×36×—cm

P3 : 44×34×45cm P6 : 30×29×32cm

備考 遺物の出土はなかった。



第210図 4号掘立柱建物

5号掘立柱建物 写真 PL-57

位置 K-56G

重複 66号、67号、68号土坑に重複する。67号土坑は、覆土等により明らかに本遺構に後出する。66、68号土坑は本遺構覆土にも類似しており、調査時において切り合いも不明瞭であった。

形状 3間×2間の総柱の東西棟建物である。心々間寸法は、桁行寸法北列(P1~P4)で1.72m-1.89m-1.86mの5.47m、桁行寸法南列で1.89m-1.80m-1.92mの5.61mを計る。梁行寸法は西列(P1・P5・P9)で2.00m-1.99mの3.99m、東列(P4・P8・P12)で2.01m-1.89mの3.90mで

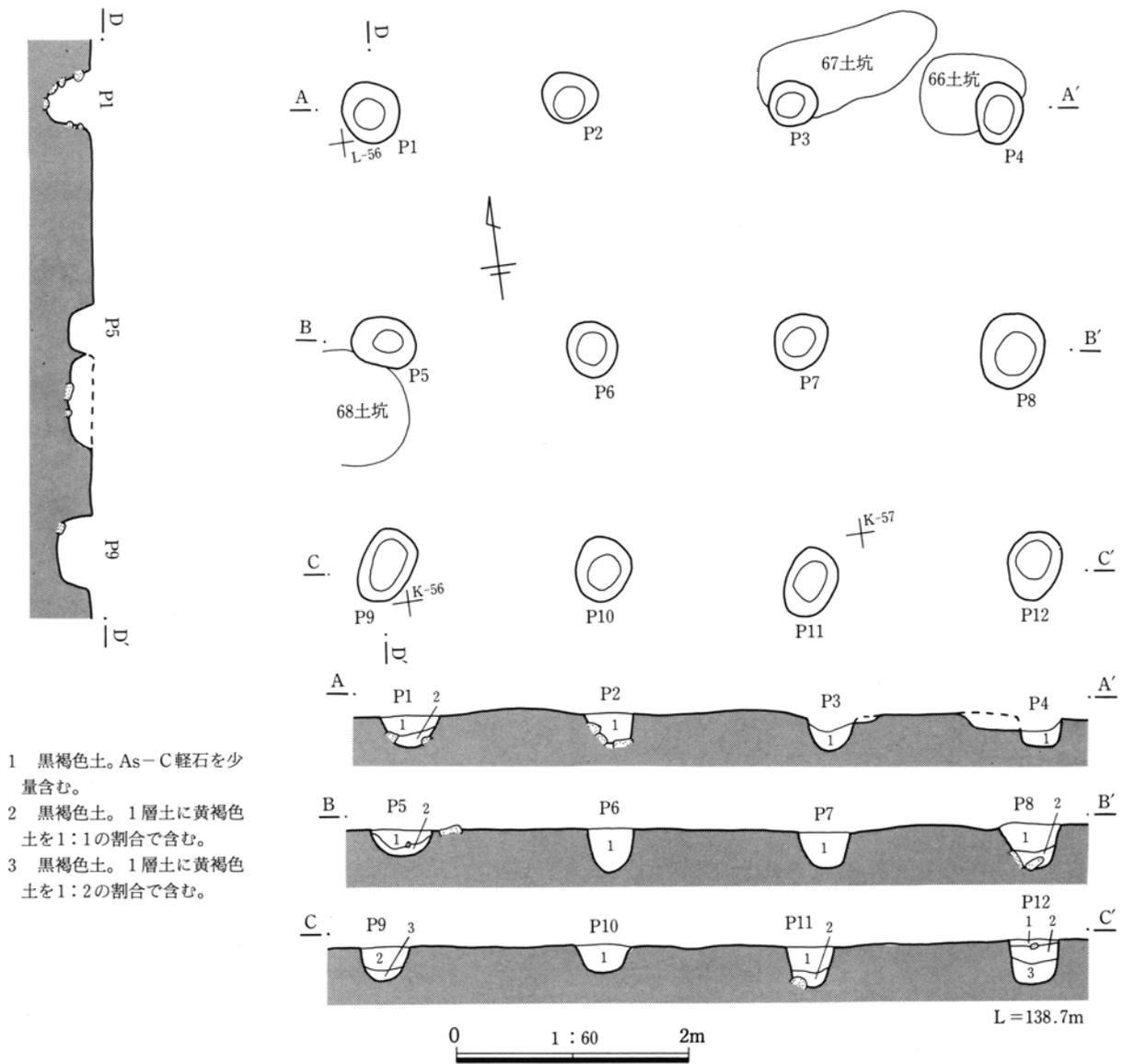
ある。

面積 22.24m²

主軸 N-8°-E

柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で41~64cm、深さ21~38cmの円形あるいは楕円形を呈する。覆土には、As-C軽石を含む黒褐色土やその黒褐色土に黄褐色土が混入する土がみられ、これらは竪穴住居の覆土に類似する。明らかな柱痕は確認できなかった。

備考 本遺構北西側に位置する6号、7号掘立柱建物は主軸方位が近似する。遺物の出土はなかった。



第211図 5号掘立柱建物

6号掘立柱建物 写真 PL-57

位置 L-53G 南東に5号、北西に7号掘立柱建物が位置し、その中位置にあたる。

形状 東西棟建物で2間×2間である。心々間寸法は、桁行寸法北列(P1~P3)で1.45m-1.25mの2.70m、桁行寸法南列(P6~P8)で1.28m-1.48mの2.76mを計る。各間口で20cmの差異があり、また、対面する間口でなく、対角する間口で同数値をとる。梁行寸法は、西列(P1・P4・P6)で1.12m-1.36mの2.48m、東列(P3・P5・P8)で1.08m-1.38mの2.46mで、ほぼ同寸である。また、桁、梁の各列ともに、中央のピットがややラインの外側にずれる傾向がみられた。

面積 6.98m²

主軸 N-8°-E

柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で34~51cm、深さ16~22cmの円形あるいは楕円形を呈する。覆土には、竪穴住居の覆土にもみられる、As-C軽石を含む黒褐色土がみられた。明らかな柱痕は確認できなかった。

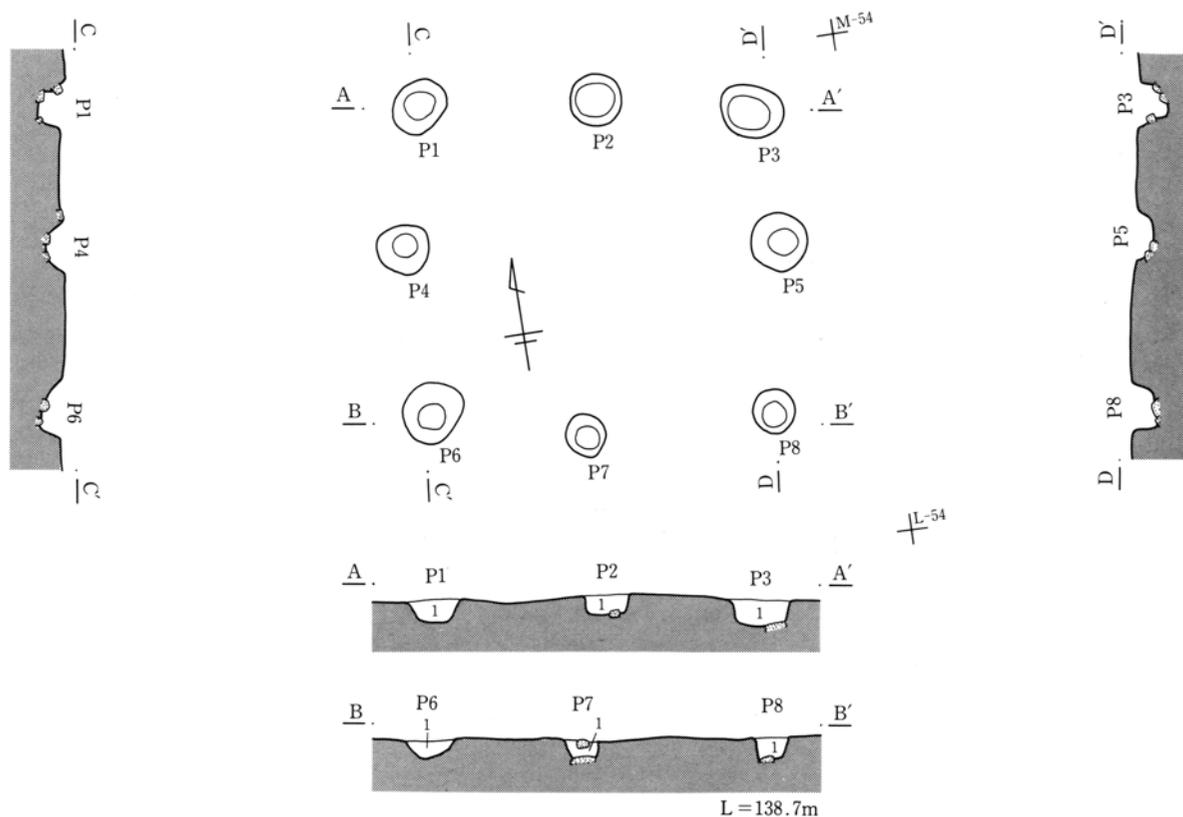
P1 : 46×36×22cm P5 : 46×45×-cm

P2 : 40×40×-cm P6 : 51×44×13cm

P3 : 51×40×21cm P7 : 36×32×-cm

P4 : 40×38×-cm P8 : 34×34×-cm

備考 本遺構南東に位置する5号、北西に位置する7号掘立柱建物は主軸方位が近似する。遺物の出土はなかった。



1 黒褐色土。As-C軽石を少量含む。

0 1 : 60 2m

第212図 6号掘立柱建物

7号掘立柱建物 写真 PL-57

位置 N-51G 6号掘立柱建物の南東、8号、9号掘立柱建物の西側に位置する。

形状 東西棟建物で2間×2間と考えられる。心々間寸法は桁行寸法北列(P1~P3)で1.70m-1.55mの3.25m、桁行寸法南列(P6~P8)で1.62m-1.43mの3.05mを計る。南列に比して北列がやや幅広になっている。梁行寸法は西列(P1・P6)で2.54m、東列(P3・P5・P8)で1.24m-1.16mの2.40mである。西列のライン上に位置するP4は、掘り方等も他のピットに類似するが、プラン的にみて本遺構に伴うものとは考えがたい。

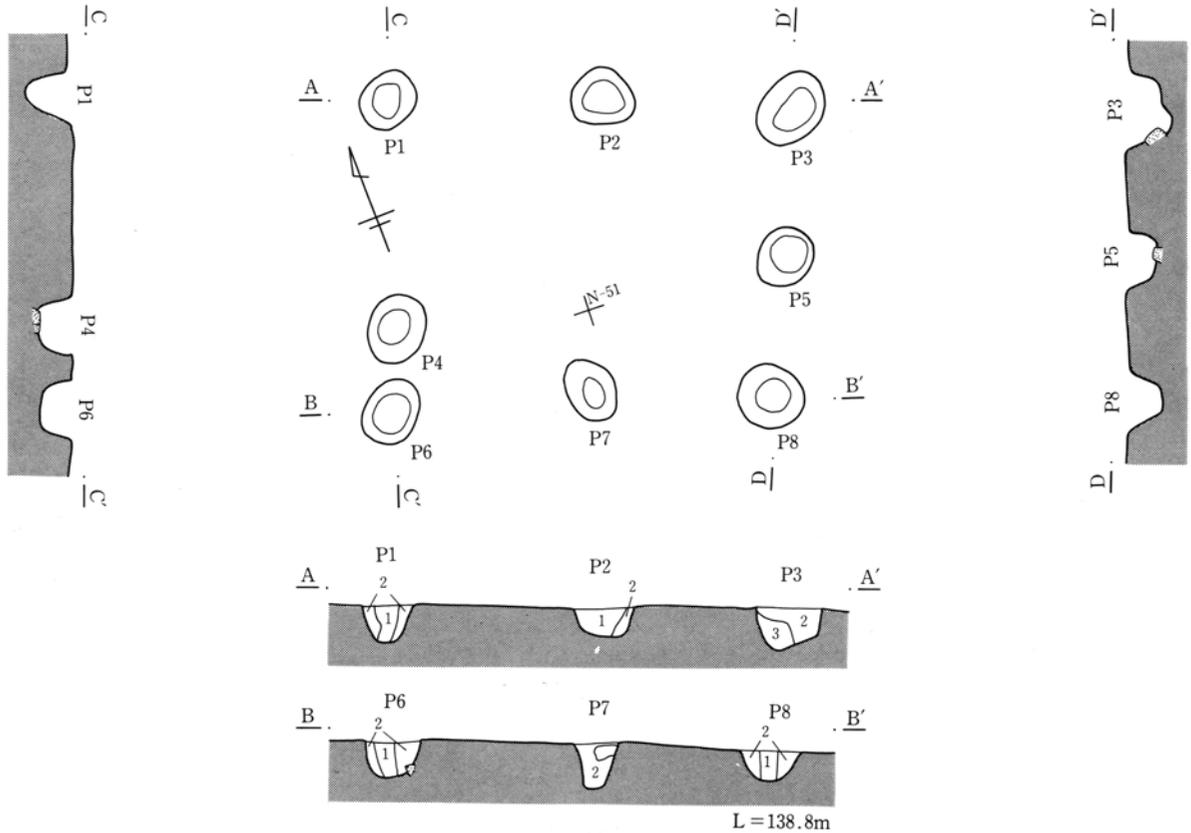
面積 7.40m²

主軸 N-18°-E

柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で48~64cm、深さ25~36cmの円形あるいは楕円形を呈する。覆土には竪穴住居覆土に類似する、As-C軽石を含む黒褐色土、黒褐色土と黄褐色土の混土がみられた。また、P1、P3、P4には中央縦に黒褐色土が入り込む様相がみられ、柱痕の可能性も考えられる。

P1 : 48×40×29cm	P5 : 50×42×24cm
P2 : 50×48×22cm	P6 : 54×41×25cm
P3 : 64×46×-cm	P7 : 53×38×-cm
P4 : 56×45×27cm	P8 : 54×52×24cm

備考 本遺構南東に位置する5号、6号掘立柱建物は主軸方位が近似する。遺物の出土はなかった。



- 1 黒褐色土。As-C軽石を少量含む。
- 2 黒褐色土。1層土に黄褐色土を1:1の割合で含む。
- 3 黒褐色土。1層土に黄褐色土を1:2の割合で含む。

0 1:60 2m

第213図 7号掘立柱建物

8号掘立柱建物 写真 PL-57, 77

位置 N-49G 7号掘立柱建物の西側、9号掘立柱建物の北側に隣接して位置する。

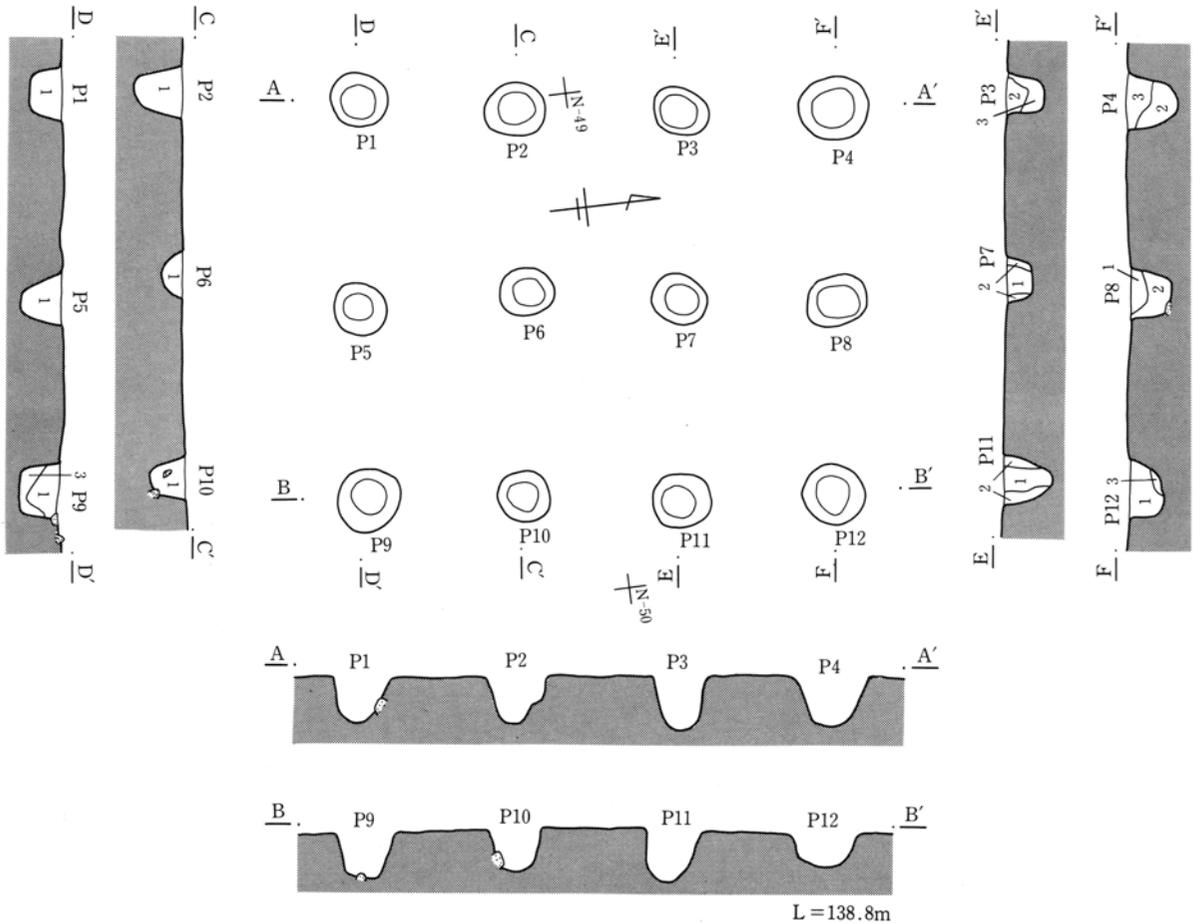
形状 3間×2間の総柱の南北棟建物である。心々間寸法は、桁行寸法西列(P1~P4)で1.26m-1.28m-1.27mの3.81m、桁行寸法東列(P9~P12)で1.24m-1.24m-1.28mの3.76mを計る。梁行寸法は南列(P1・P5・P9)で1.64m-1.50mの3.14m、北列(P4・P8・P12)で1.59m-1.49mの3.08mである。桁、梁共に対面する列はほぼ同寸を計る。

面積 11.99㎡

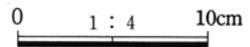
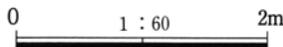
主軸 N-84°-W

柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で41~54cm、深さ21~43cmの円形あるいは楕円形を呈する。覆土には竪穴住居覆土に類似する、As-C軽石を含む黒褐色土、黒褐色土と黄褐色土の混土がみられた。また、P7、P11には中央縦に黒褐色土が入り込む様相がみられ、柱痕の可能性も考えられる。

備考 南に位置する9号掘立柱建物とは、主軸がほぼ直交し、11号掘立柱建物とは主軸がほぼ一致する。また、P8の覆土中より坏が1点出土しているが、本遺構に伴うものかは不明瞭である。



- 1 黒褐色土。As-C軽石を少量含む。
- 2 黒褐色土。1層土に黄褐色土を1:1の割合で含む。
- 3 黒褐色土。1層土に黄褐色土を1:2の割合で含む。



第214図 8号掘立柱建物及び出土遺物

9号掘立柱建物 写真 PL-57

位置 N-49G

形状 東西棟建物で3間×2間である。心々間寸法は、桁行寸法北列(P1~P4)で1.06m-1.76m-1.37mの4.19m、桁行寸法南列(P7~P10)で1.35m-1.38m-1.50mの4.23mを計る。北列の各間口に、かなりの差異がみられる。梁行寸法は西列(P1・P5・P7)で1.99m-2.01mの4.00m、東列(P4・P6・P10)で1.77m-2.08mの3.85mである。

面積 16.89m²

主軸 N-4°-E

柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で37~49cm、

深さ23~35cmの円形あるいは楕円形を呈する。覆土には堅穴住居覆土に類似する、As-C軽石を含む黒褐色土、黒褐色土と黄褐色土の混土がみられた。また、P7には中央縦に黒褐色土が入り込む様相がみられ、柱痕の可能性も考えられる。

P1 : 42×40×33cm P6 : 48×38×40cm

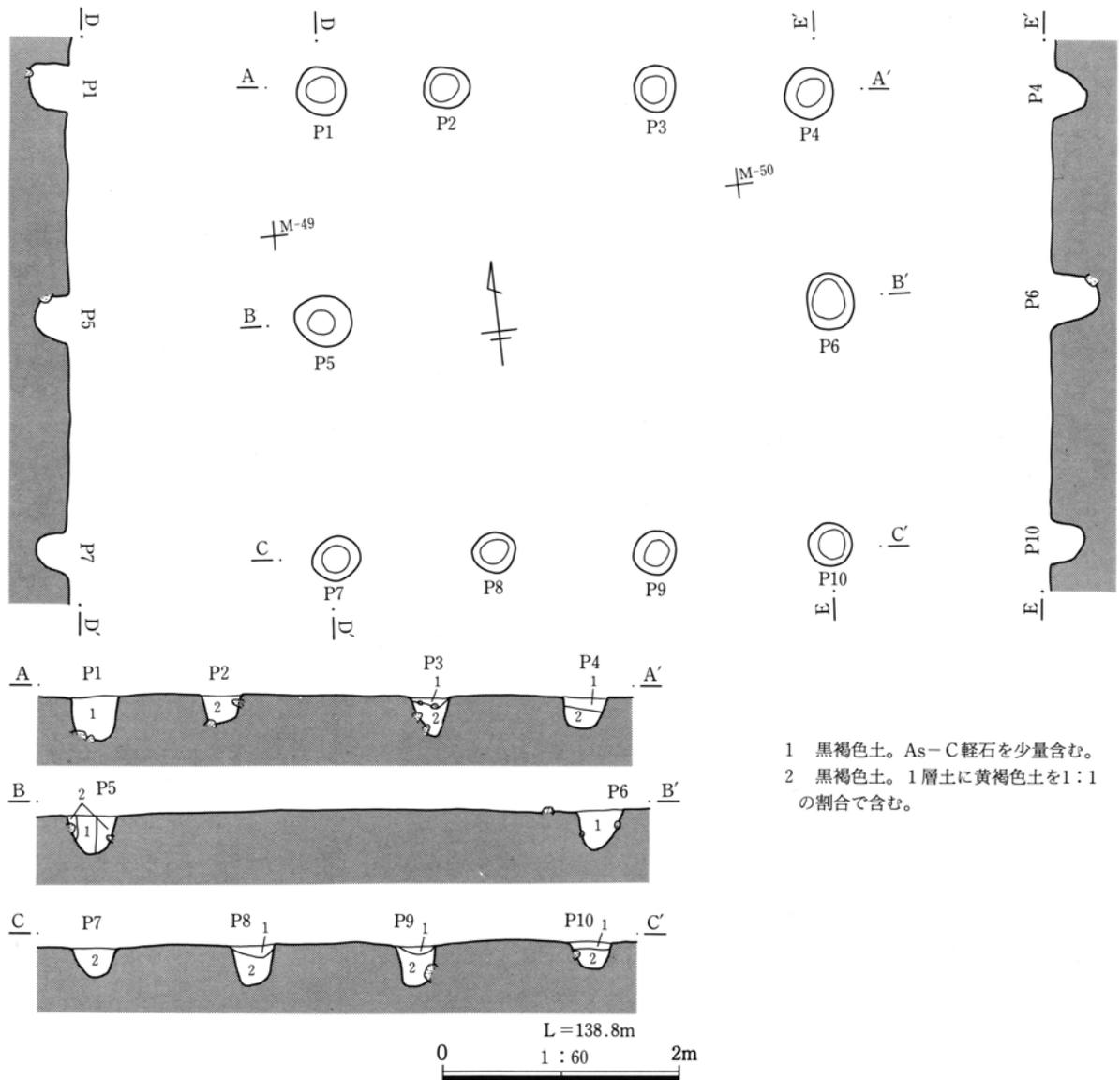
P2 : 40×38×23cm P7 : 40×37×28cm

P3 : 40×34×31cm P8 : 38×35×34cm

P4 : 44×40×25cm P9 : 38×34×35cm

P5 : 49×42×36cm P10 : 37×36×23cm

備考 北に位置する8号掘立柱建物とは、主軸がほぼ直交する関係にある。遺物の出土はなかった。



- 1 黒褐色土。As-C軽石を少量含む。
- 2 黒褐色土。1層土に黄褐色土を1:1の割合で含む。

第215図 9号掘立柱建物

10号掘立柱建物 写真 PL-58

位置 N-55G

重複 26号、27号竪穴住居に重複する。それぞれの住居に後出するものと考えられる。

形状 東西棟建物で3間×1間である。心々間寸法は、桁行寸法北列(P1~P4)で1.64m-1.78m-1.62mの5.04m、桁行寸法南列(P5~P8)で1.69m-1.78m-1.56mの5.03mを計る。対面する間口は近似値をとる。梁行寸法は西列(P1・P5)で4.12m、東列(P4・P8)で4.3mである。西列に比して東列は若干広がり、その差異は20cmである。

面積 20.83m²

主軸 N-28°-W

柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で52~86cm、深さ50~62cmの円形あるいは楕円形を呈する。明らかな柱痕は確認できなかった。

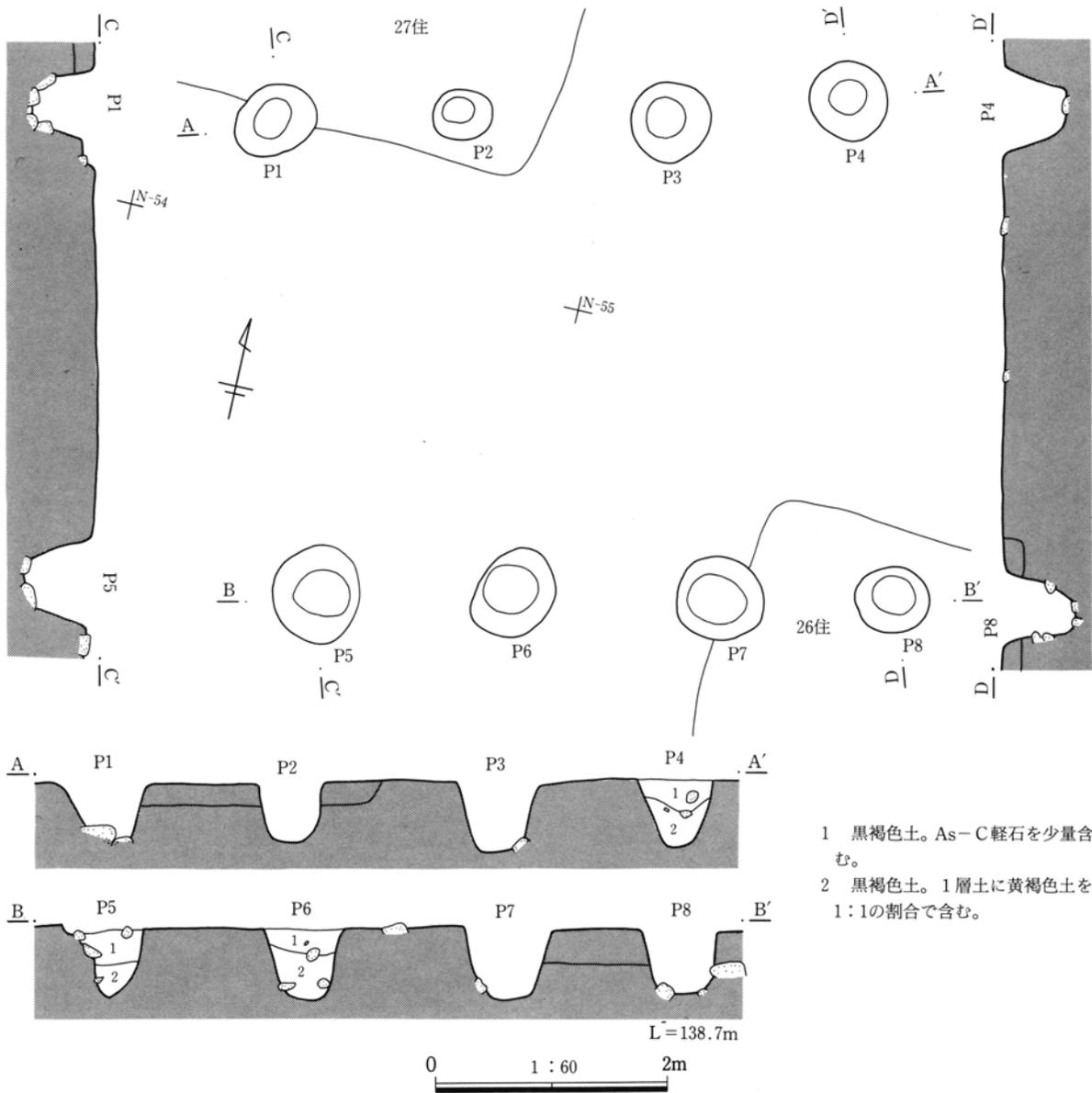
P1 : 72×59×—cm P5 : 86×76×—cm

P2 : 52×42×—cm P6 : 81×66×—cm

P3 : 71×66×—cm P7 : 79×73×60cm

P4 : 69×65×55cm P8 : 64×57×56cm

備考 遺物の出土はなかった。



第216図 10号掘立柱建物

11号掘立柱建物 写真 なし

位置 K-51G 9号掘立柱建物南東に位置する。

形状 2間×2間の総柱の南北棟建物である。心々間寸法は、桁行寸法西列(P1~P3)で1.25m-1.70mの2.95m、桁行寸法東列(P7~P9)で1.45m-1.54mの2.99mを計る。西列では各間口の差異が顕著である。梁行寸法は、南列(P1・P4・P7)で1.45m-1.32mの2.77m、北列(P3・P6・P9)で1.18m-1.41mの2.59mである。

面積 8.03㎡

主軸 N-86°-W

柱穴 柱穴掘り方は、直径または長軸で34~47cm、深さ15~28cmの円形あるいは楕円形を呈する。明らかな柱痕は確認できなかった。

P1 : 46×42×12cm P6 : 38×34×-cm

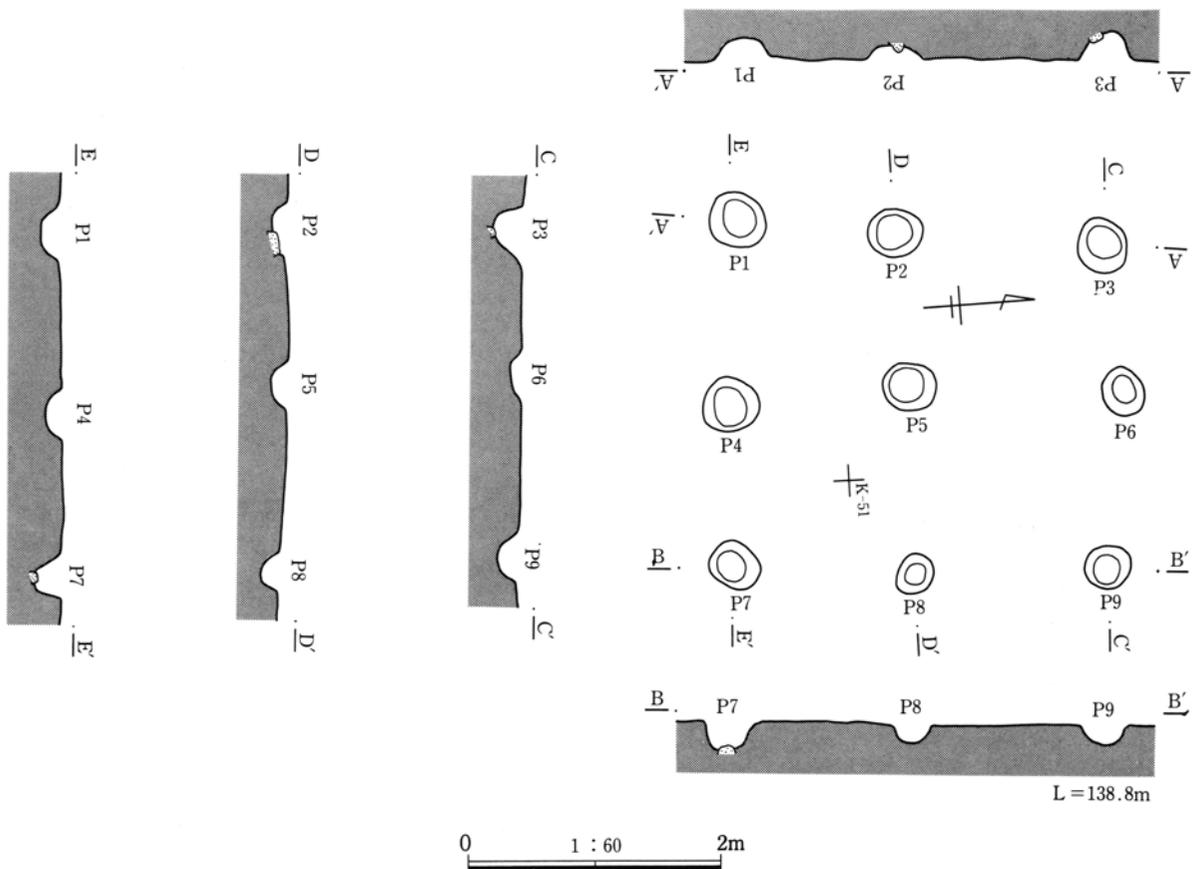
P2 : 44×38×11cm P7 : 40×34×20cm

P3 : 44×40×21cm P8 : 34×28×11cm

P4 : 47×44×15cm P9 : 38×34×17cm

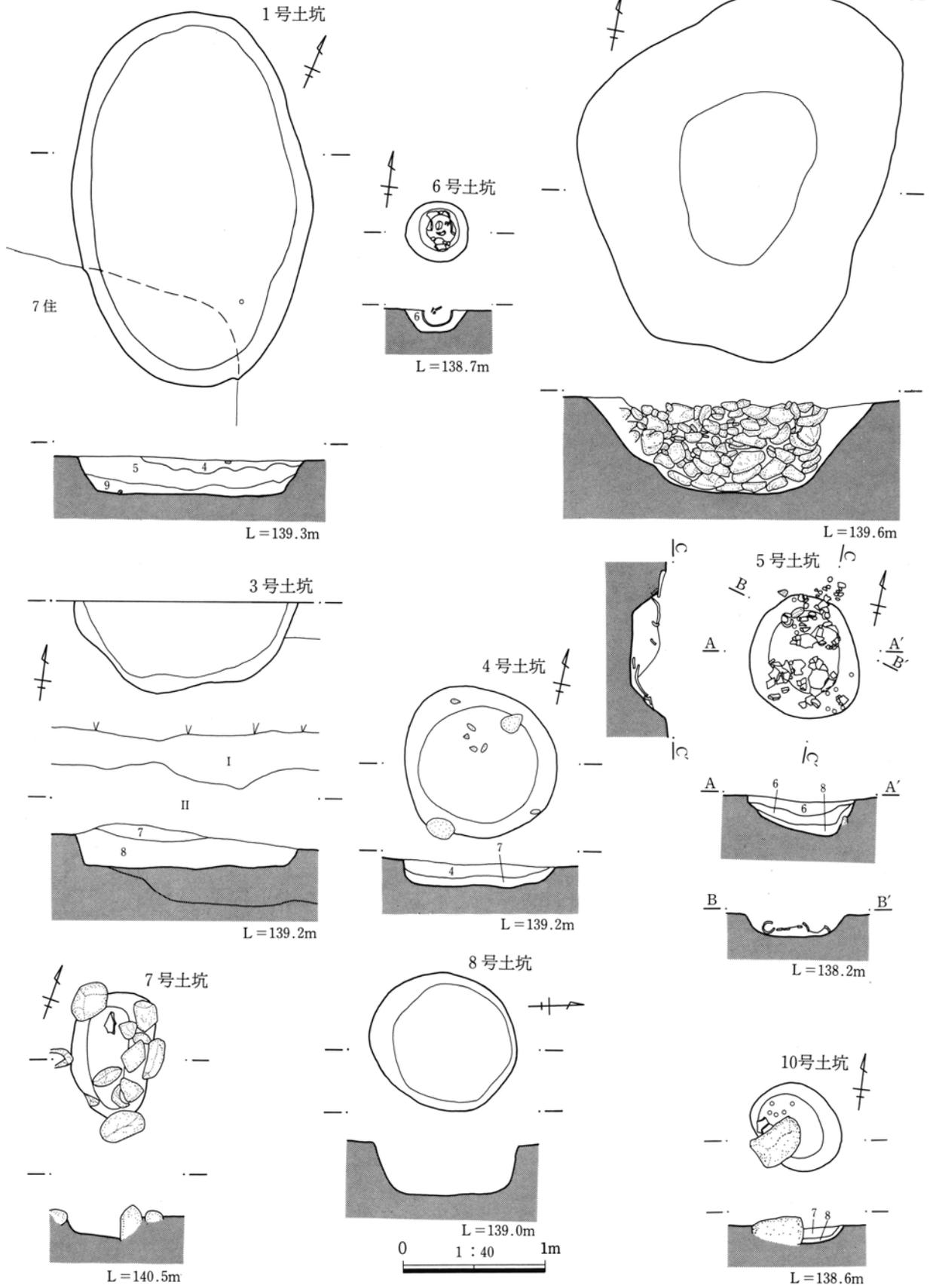
P5 : 43×37×10cm

備考 北西に位置する9号掘立柱建物とは、主軸が直交する関係にある。また、8号掘立柱建物の主軸とは、ほぼ向きを同じくする。遺物の出土はなかった。

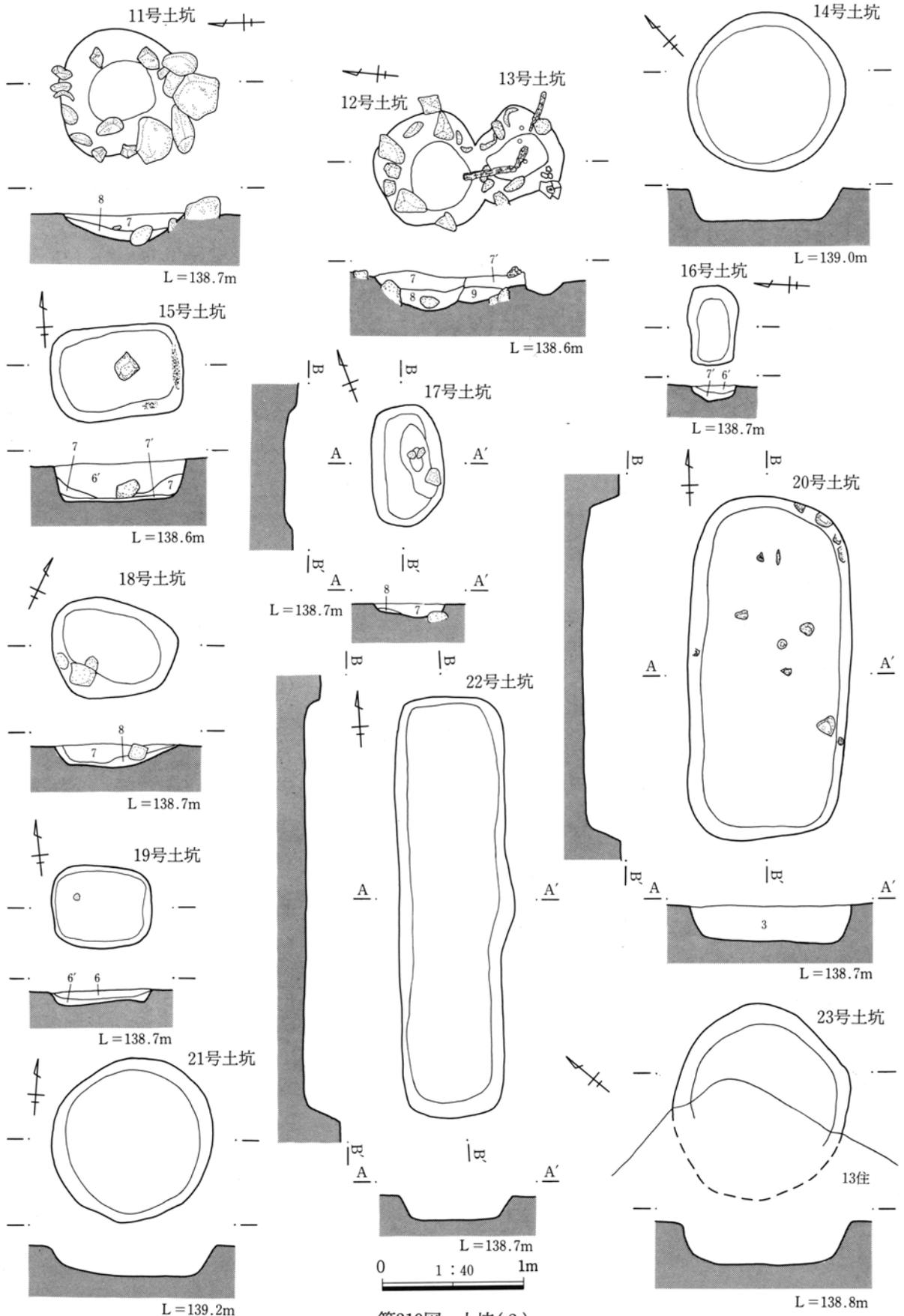


第217図 11号掘立柱建物

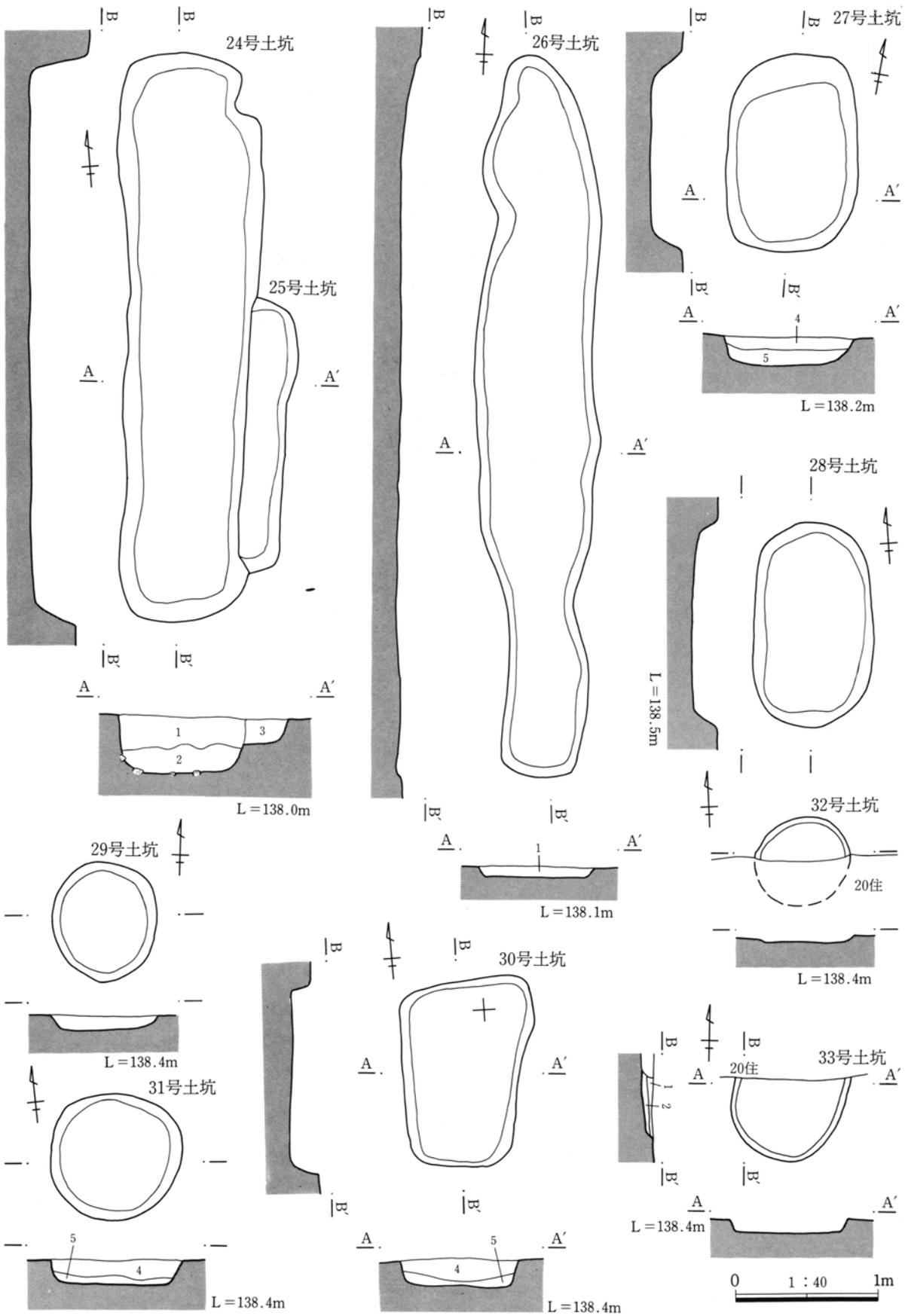
2 土坑 写真 PL-58~64



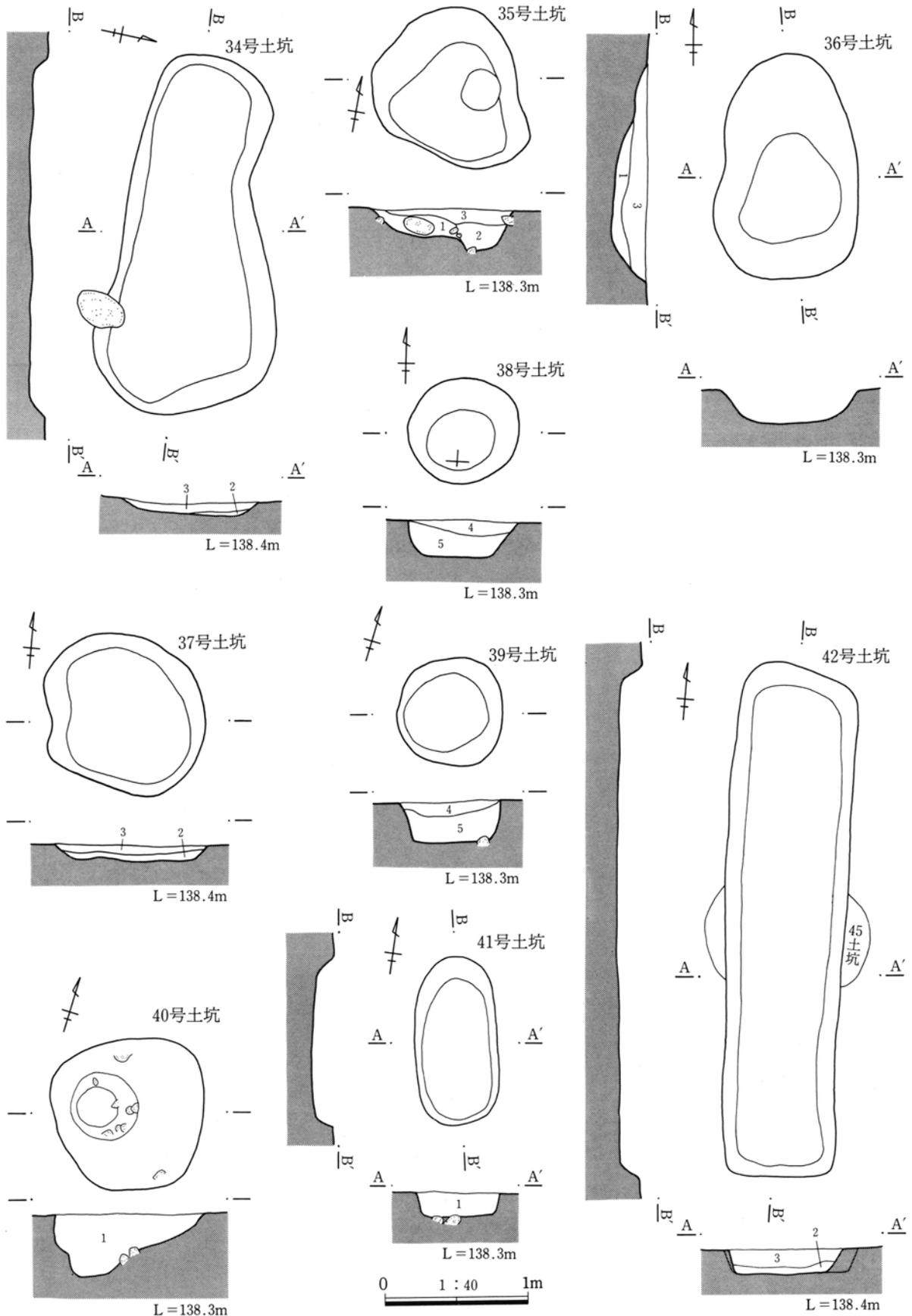
第218图 土坑(1)



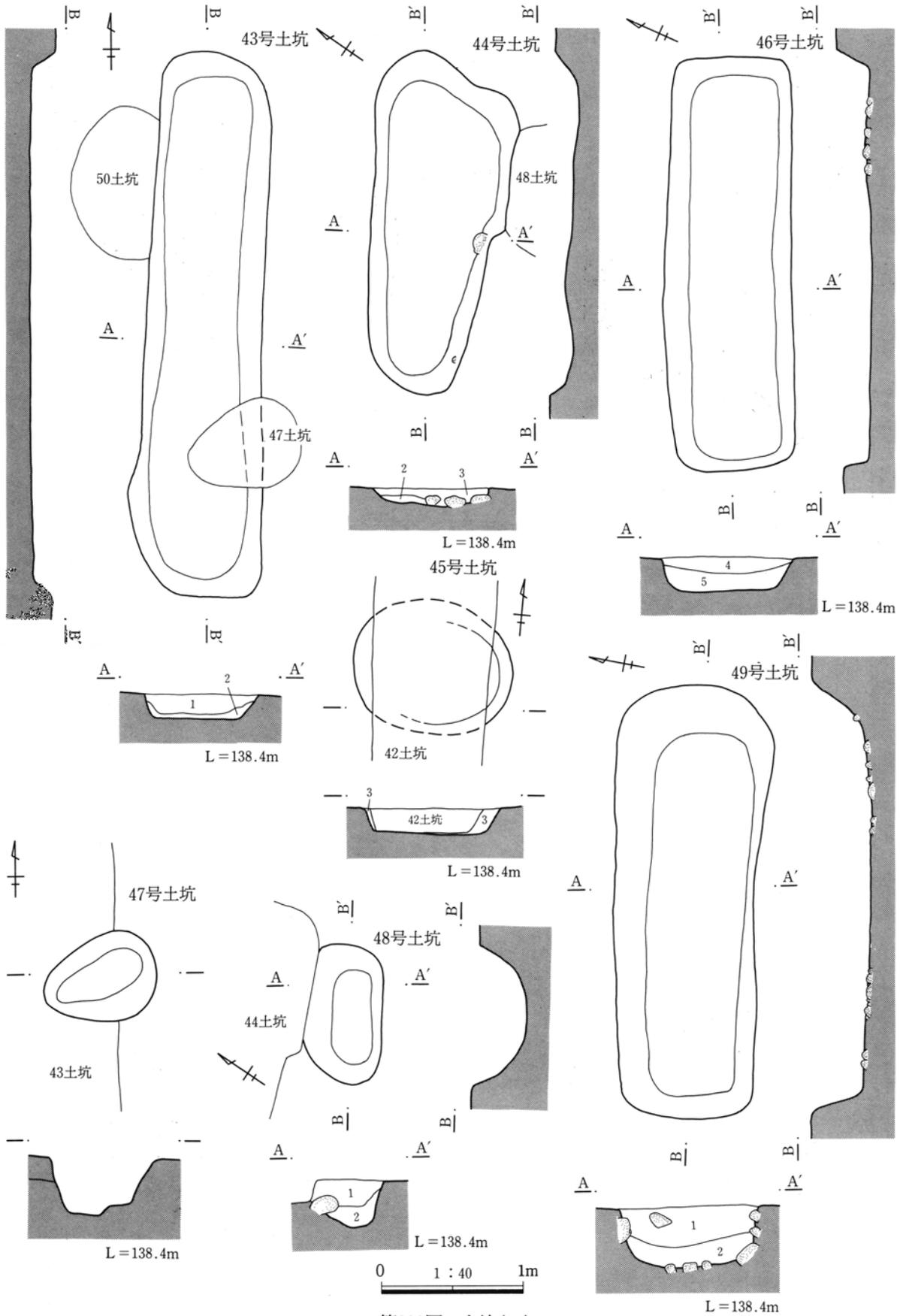
第219図 土坑(2)



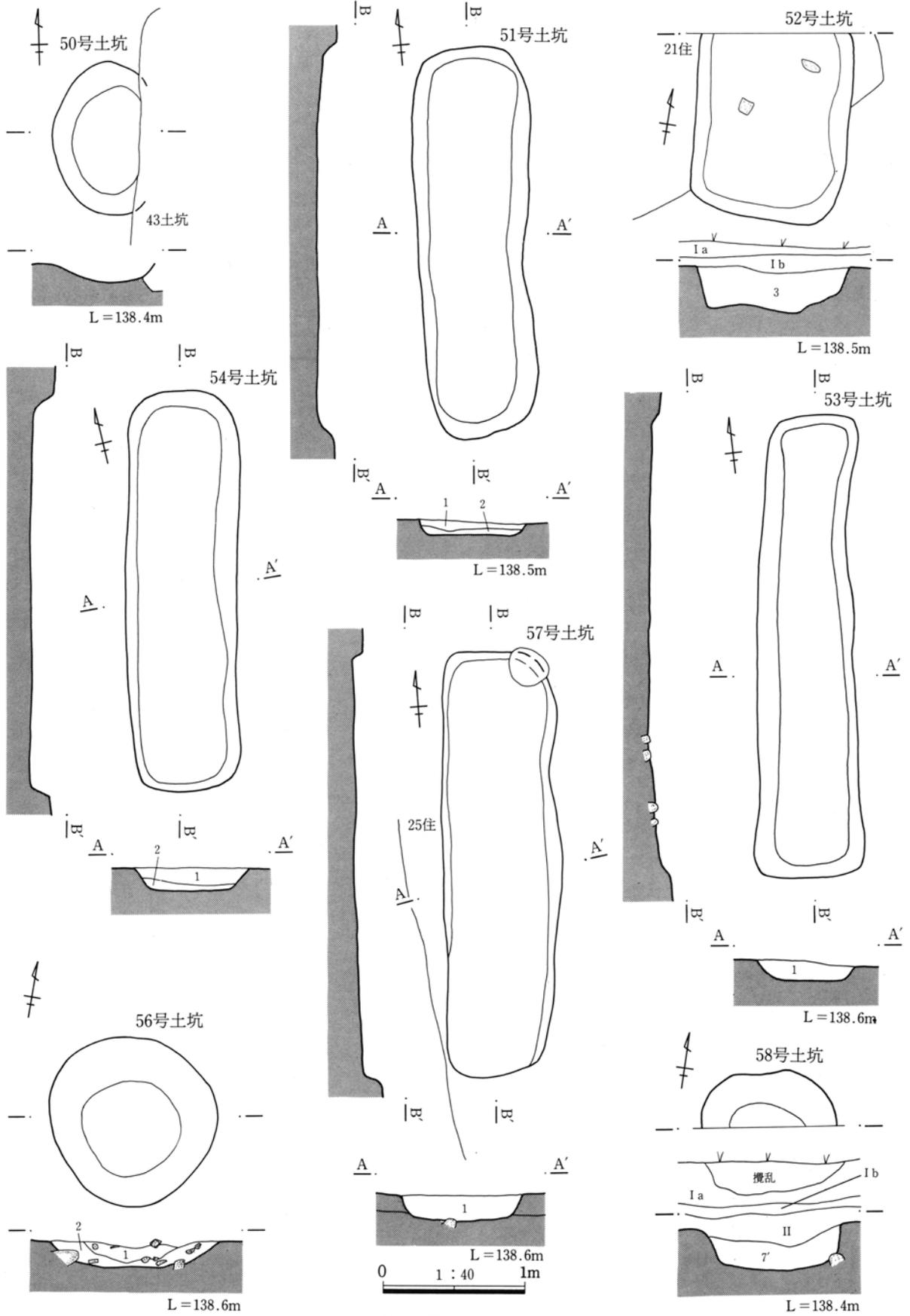
第220图 土坑(3)



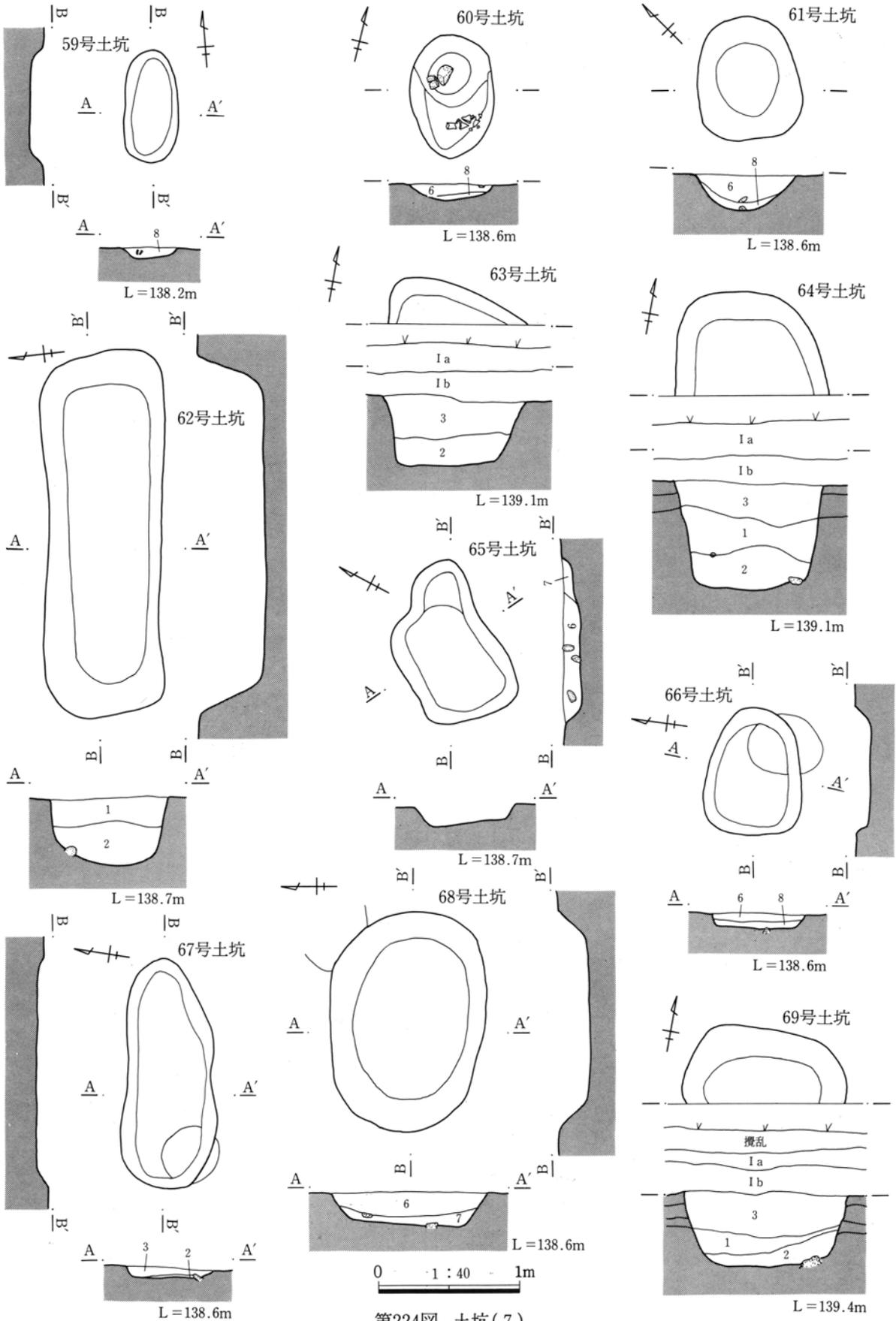
第221図 土坑(4)



第222图 土坑(5)

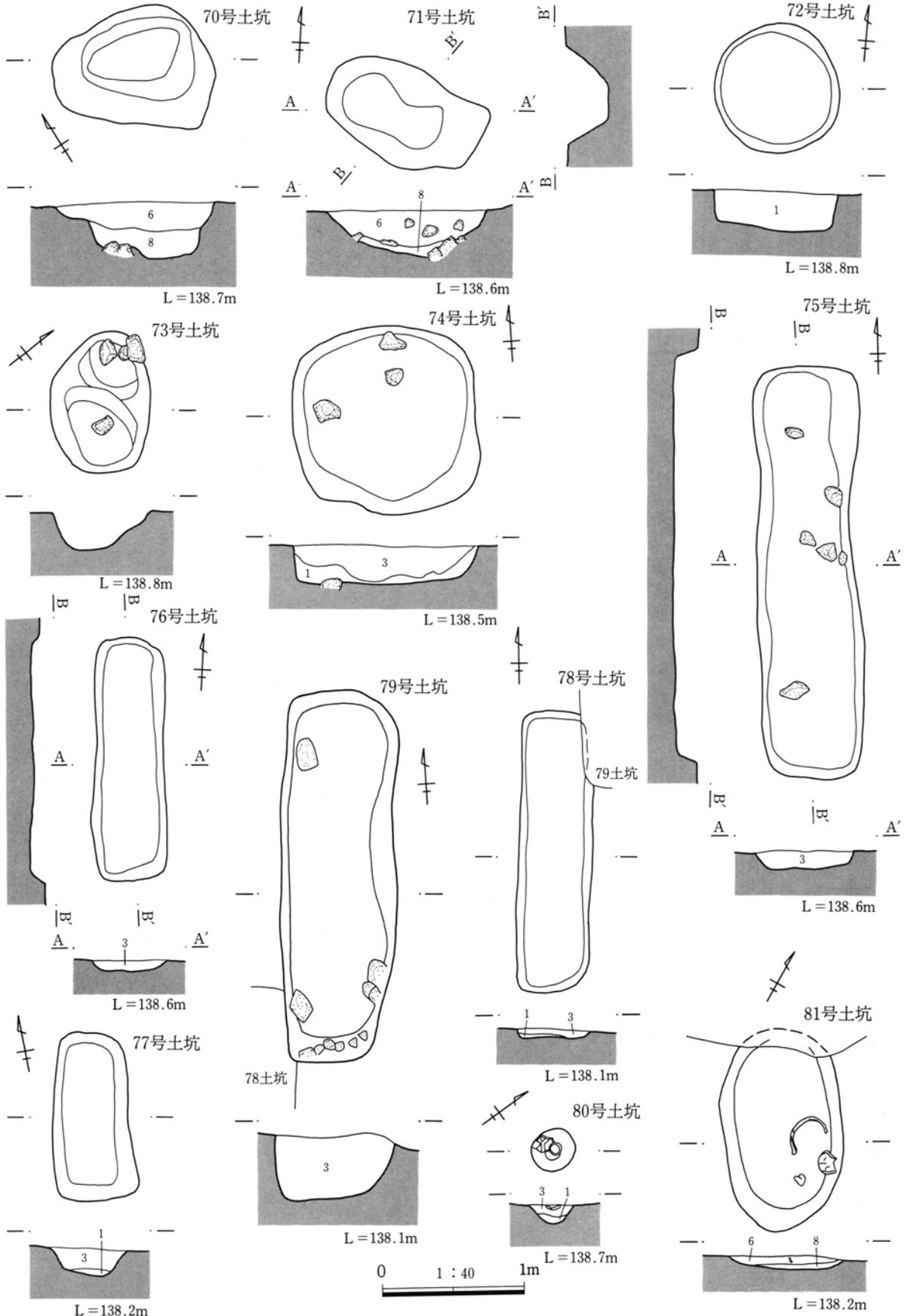


第223図 土坑(6)



第224图 土坑(7)

第4章 福島駒形遺跡



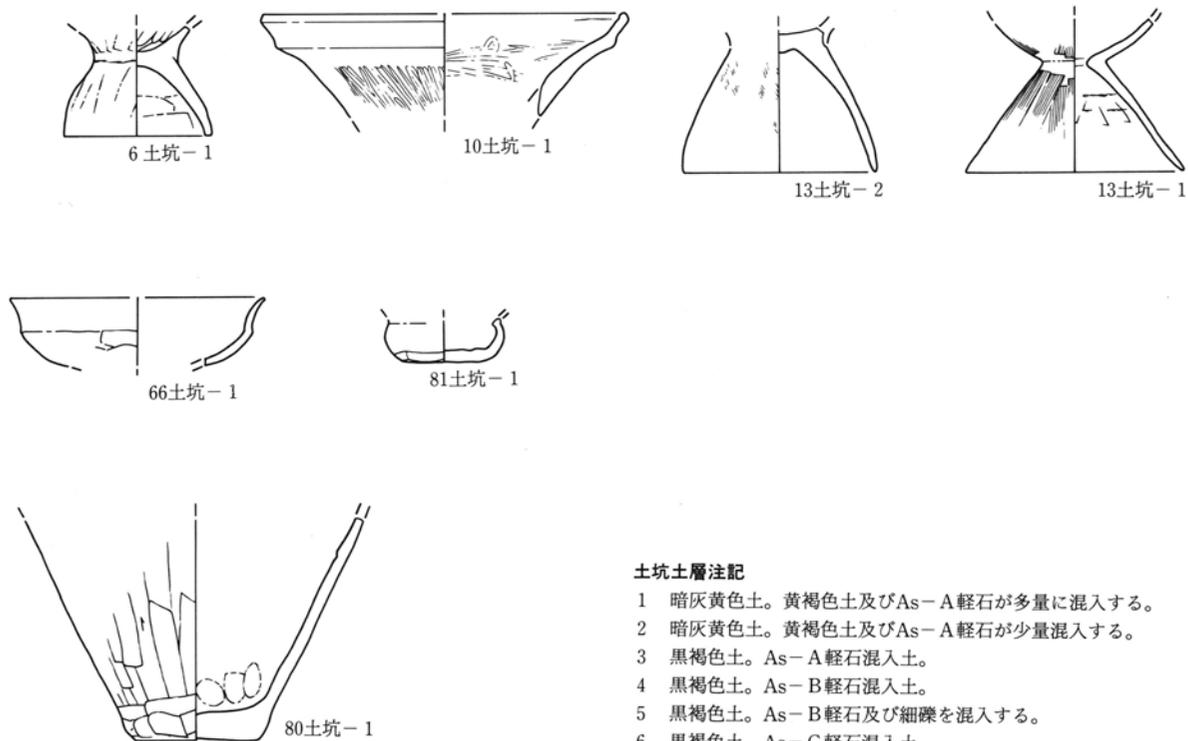
第225図 土坑(8)

福島駒形遺跡 土坑一覧

No	グリッド	平面形	長軸	短軸	深さ	長軸方向	遺物	備考
			cm	cm				
1	F-27	楕円形	266	170	31	N-26°-W	土師器23片	7号住居に後出
2	H-23	不整五角形	260	220	67	N-0°	須恵器1片	
3	K-27	不明	-	-	36	-		10号住居に後出
4	D-24	不整楕円形	112	102	27	N-55°-W	土師器4片	
5	L-36	不整楕円形	88	80	26	N-45°-W	弥生土器1片、土師器5片	
6	L-41.42	円形	44	40	15	-	[図示1]、土師器96片	
7	F-21	不整長方形	(94)	(54)	22	N-27°-W	須恵器1片	
8	J.K-36	円形	102	98	37	N-0°	弥生土器11片、土師器2片	
10	J.K-32.33	楕円形	66	(24)	12	N-50°-W	[図示1]、弥生土器1片、古式土師器16片、不明5片	
11	K-33	不整円形	94	86	23	N-0°		
12	K-33	不整円形	(80)	78	27	N-90°-E		13号土坑に後出
13	K-33	不整方形	(60)	55	24	N-56°-W	[図示1、2] 古式土師器1片、不明5片	12号土坑に先出
14	J-31.32	円形	120	112	27	-		
15	K-33.34	長方形	94	64	27	N-93°-E		
16	K.L-32	長方形	56	34	10.5	N-0°		
17	K-32	不整長方形	88	50	16.5	N-18°-E		
18	J.K-32	不整長方形	88	72	16	N-0°	弥生土器7片	
19	J-33	長方形	72	58	9.5	N-90°-E	土師器1片	
20	K-40	隈円長方形	242	114	29	N-10°-E		
21	E-24	円形	116	114	28	N-0°		
22	J.K-33	長方形	298	80	24.5	N-0°		
23	L-37.38	円形か	-	-	28	-		13号住居に先出
24	O.P-71	長方形	400	90	49	N-0°	弥生土器11片、土師器4片	25号土坑に後出
25	O.P-71	長方形か	190	28	21	N-7°-E		24号土坑に先出
26	P-70.71	不整長方形	500	84	16	N-0°		
27	M-67.68	隈円長方形	140	92	20	N-10°-W		
28	Q-67	隈円長方形	154	84	20	N-18°-W	土師器1片	
29	Q-67	円形	84	76	12	N-0°		
30	P.Q-66.67	台形	140	80	20	N-7°-E	土師器1片	
31	P.Q-66	円形	94	92	18	N-45°-E	弥生土器1片	
32	P-66	円形か	-	-	5	-		20号住居に先出
33	O-66.67	楕円形か	-	-	8.5	-		20号住居に後出
34	O.P-66.67	不整方形	254	-	28	N-5°-W		
35	N-67	不整台形	104	100	28	N-26°-W		
36	N-66.67	不整楕円形	158	94	25	N-11°-W	弥生土器2片、古式土師器1片	
37	N-66	不整楕円形	120	98	22	N-24°-W		
38	M-66.67	円形	79	75	25	-	弥生土器2片	
39	M-66	円形	76	73	29	-		
40	K-23	不整方形	113	110	43	N-0°		
41	K-64	不整楕円形	117	58	16	N-5°-W		
42	N.O-65	長方形	357	85	12	N-0°	土師器14片、古式土師器3片	45号土坑に後出
43	N.O-65	長方形	384	82	16	N-0°	土師器5片	47号土坑に先出 50号土坑に後出
44	N-65.66	不整長方形	243	-	17	N-55°-E	土師器11片、古式土師器2片	50号土坑に後出
45	N-65	楕円形	114	-	18	-		48号土坑に後出
46	M-65	長方形	292	90	24	N-65°-E	土師器1片	42号土坑に先出
47	N-65	卵形	83	61	40	N-70°-E	須恵器1片、不明1片	
48	N-66	不整方形	97	(53)	35	N-57°-E		42号土坑に後出
49	L.N-65.66	隈円長方形	306	97	29	N-57°-E	土師器8片、陶器1片	44号土坑に先出
50	N.O-65	楕円形か	-	-	13	-		
51	N.O-65	長方形	274	73	13	N-24°-E		43号土坑に後出
52	Q-65	長方形か	(128)	108	25	N-6°-W		
53	O-61	長方形	325	68	15	N-7°-E		21号土坑に後出
54	N.O-63	長方形	279	79	16	N-43°-E		
56	P-59	円形	117	116	17	N-0°	土師器44片、陶磁器1片	
57	N.O-59.60	長方形	304	80	9.5	N-9°-E		
58	K-62	不明	-	-	32	-		25号住居に後出
59	M-68	楕円形	78	38	-	N-4°-W		
60	M-57	楕円形	84	82	20.5	N-0°	弥生土器49片	

第4章 福島駒形遺跡

No.	グリッド	平面形	長軸	短軸	深さ	長軸方向	遺物	備考
			cm	cm				
61	M-57	不整楕円形	87	83	22	N-0°		
62	J.K-56		257	80	48	N-83°-W	土師器 8 片	
63	J.K-57		—	—	49	—	弥生土器 1 片、土師器 3 片	
64	J-56		—	—	74	—		
65	M.N-55		110	69	15	N-50°-E	土師器 1 片	
66	N-57		89	65	10	N-90°-E	[図示 1] 不明 4 片	
67	N.L-56.57		160	60	8	N-80°-E	土師器片 2 片	
68	K-55.56		154	110	27	N-90°-E	弥生土器 13 片、土師器 48 片、古式土師器 13 片、須恵器 1 片	
69	J-54	長方形か	—	—	50	—		
70	M-52.53		114	82	40	N-75°	弥生土器 4 片	
71	L-55	不整長方形	113	67	31	N-73°-E	弥生土器 2 片	
72	L-45	円形	90	88	25	—		
73	M-50.51		100	70	26	N-52°-W		
74	L.M-59	不整形	135	132	27	N-13°-E	弥生土器 1 片	
75	N.O-58.59	不整長方形	284	72	18	N-13°-E	弥生土器 7 片、土師器 1 片	
76	M.N-58.59	長方形	168	48	10	N-0°	弥生土器 1 片	
77	P.Q-70	長方形	116	54	17	N-0°		
78	P-70	長方形	196	50	4	N-0°		
79	P.Q-70	不整長方形	260	84	43	N-0°		
80	O-54.55		32	28	13	N-0°	[図示 1]、弥生土器 2 片	
81	Q-70	楕円形	(143)	82	13	N-26°-W	[図示 1]、弥生土器 57 片、古式土師 1 片、不明 1 片	



土坑土層注記

- 1 暗灰黄色土。黄褐色土及びAs-A軽石が多量に混入する。
- 2 暗灰黄色土。黄褐色土及びAs-A軽石が少量混入する。
- 3 黒褐色土。As-A軽石混入土。
- 4 黒褐色土。As-B軽石混入土。
- 5 黒褐色土。As-B軽石及び細礫を混入する。
- 6 黒褐色土。As-C軽石混入土。
- 7 黒褐色土。少量の黄褐色土及び、As-C軽石を混入する。
- 8 黒褐色土。多量の黄褐色土及び、As-C軽石を混入する。
- 9 黄褐色土。黒褐色土を混入。

第226図 土坑出土遺物

3 溝・畝状遺構 写真 PL-65

1号溝

位置 C-12~17G

形状 幅30~74cm、最深部で約40cmを計る。断面形は逆台形を呈する。

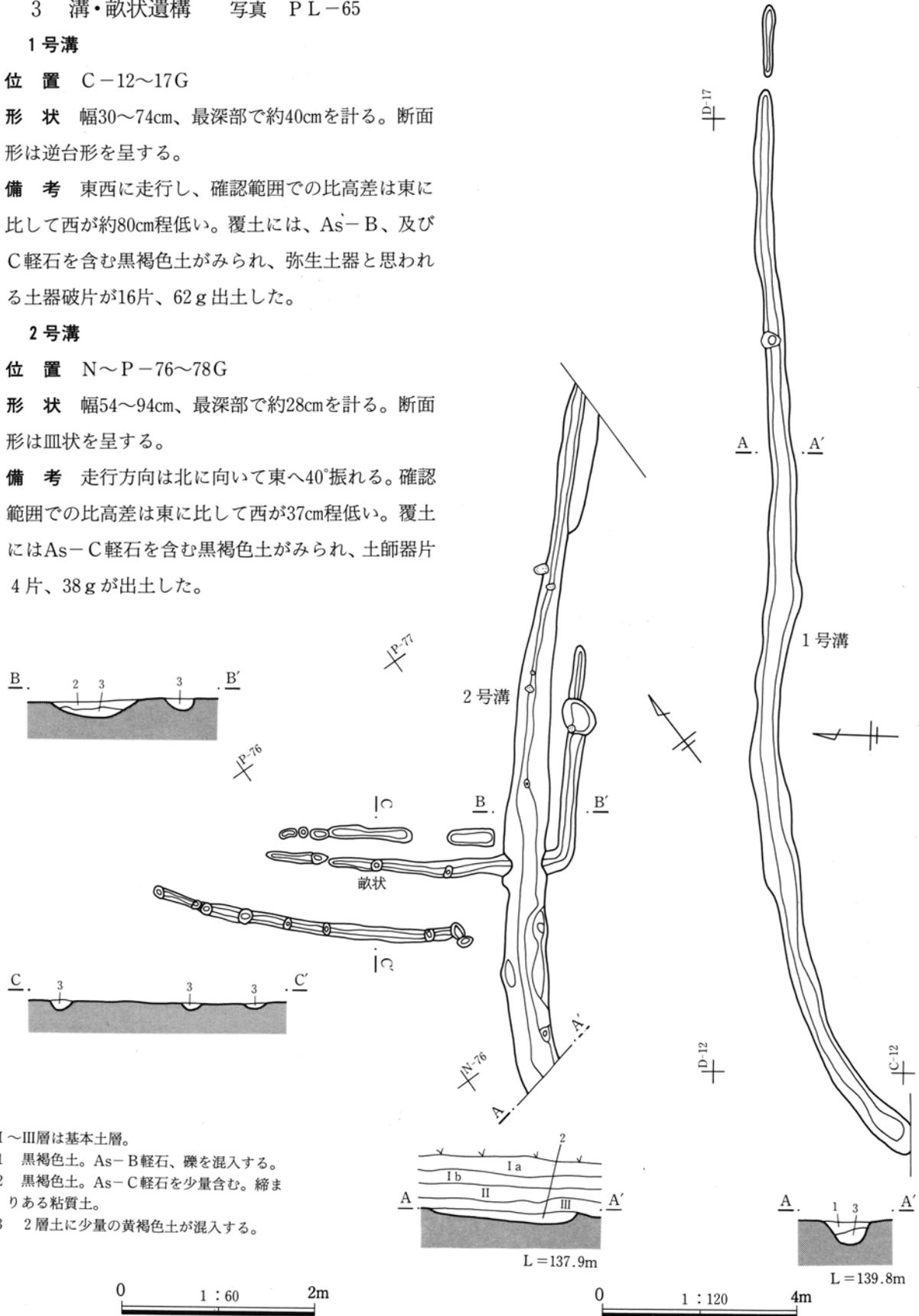
備考 東西に走行し、確認範囲での比高差は東に比して西が約80cm程低い。覆土には、As-B、及びC軽石を含む黒褐色土がみられ、弥生土器と思われる土器破片が16片、62g出土した。

2号溝

位置 N~P-76~78G

形状 幅54~94cm、最深部で約28cmを計る。断面形は皿状を呈する。

備考 走行方向は北に向いて東へ40°振れる。確認範囲での比高差は東に比して西が37cm程低い。覆土にはAs-C軽石を含む黒褐色土がみられ、土師器片4片、38gが出土した。



I~III層は基本土層。

- 1 黒褐色土。As-B軽石、礫を混入する。
- 2 黒褐色土。As-C軽石を少量含む。締まりある粘質土。
- 3 2層土に少量の黄褐色土が混入する。

第227図 1・2号溝及び畝状遺構

畝状遺構

2号溝周囲より4条の畝状遺構が確認された。3条は南東から北東に、1条は前述のものに直交するように走行する。2号溝によって切られている。

3号溝

位置 M~P-57・58G

形状 幅30~94cm、最深部で25cmを計る。断面形は椀状を呈する。

備考 ほぼ南北に走向し、確認範囲での比高差は約10cm程で、南の方が低い。覆土にはAs-C軽石を含む黒褐色土がみられ、およそ850g、114片の土師器片が出土した。また、本条は34号住居を切っており、それに先行するものである。

4号溝

位置 M・N-56・57G

形状 幅22~52cm、最深部で14cmを計る。断面形は皿状を呈する。

備考 南西方向から北東方向へ走行する。覆土にはAs-C軽石を含む黒褐色土がみられた。

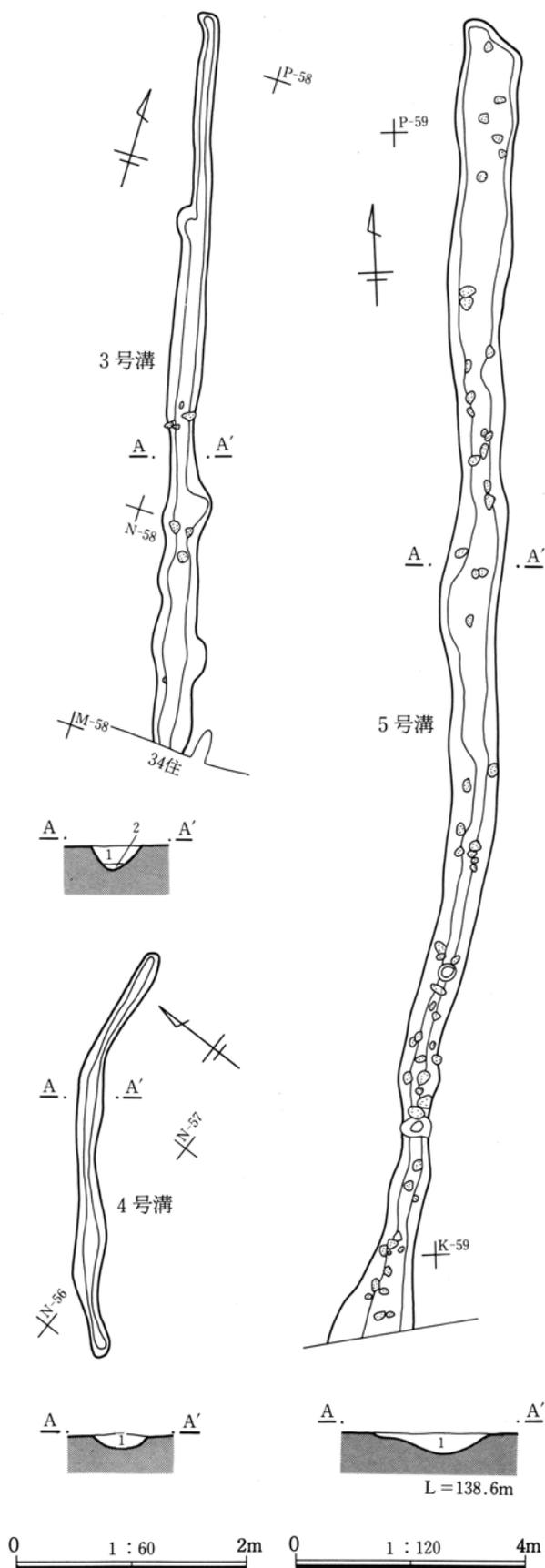
5号溝

位置 J~Q-58・59G

形状 幅45~108cm、最深部で21cmを計る。断面形は皿状を呈する。

備考 ほぼ南北に走向し、比高差はあまりみられなかった。覆土にはAs-C軽石を含む黒褐色土がみられ、土師器片4片、19gが出土した。

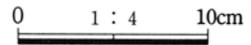
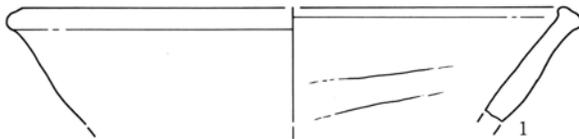
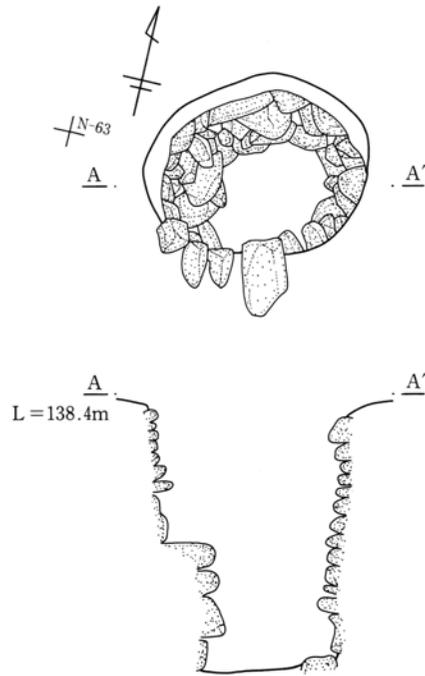
- 1 黒褐色土。As-C軽石、黄褐色土を少量含む。
- 2 1層土に多量の黄褐色土が混入する。



第228図 3・4・5号溝

4 1号井戸 写真 PL-66

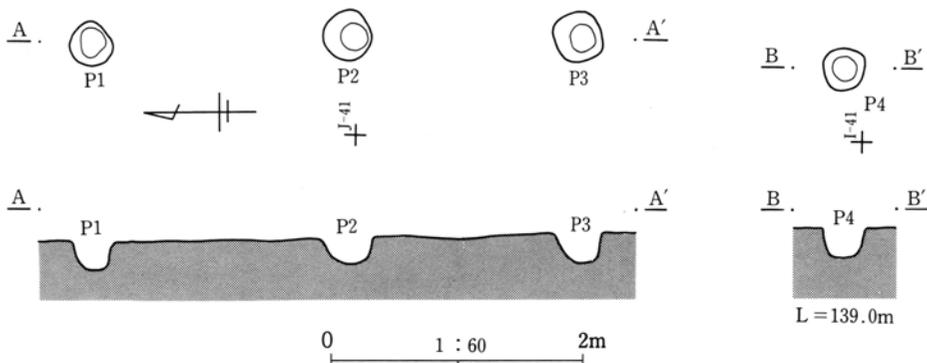
本井戸跡は、N-62グリット(V区)で確認された。上部は東西に長軸をとる楕円形を呈し、底部もほぼその相似形である。規模は上部の長軸で、約150cm、底部で約90cmを計る。また、深度は208cmであった。井戸内部の側面は、およそ25~60cmの安山岩系の河原石を小口積み状に構築している。底面からの傾斜角はおよそ95°であるが、西側では部分的に礫が張り出している。調査時において、底面よりおよそ15cm程の滞水があった。出土遺物として、図示したものが2点、土師器片、磁器片がそれぞれ数片あるが、本遺構に伴うものかは不明瞭である。また、本井戸跡の時期は、埋没土の状況からAs-A軽石降下以前と思われる。



5 柱列状遺構 写真 PL-66

本遺構はI~J-41グリットに位置する。ピット4本がほぼ南北に走向するが、P4のみ、ラインよりやや西へずれる。各ピットの形状は不整形円形、もしくは方形に近いものである。それぞれの規模及び心々間の距離は以下に示すとおりである。なお、規模は長軸×短軸×深さを示す。

- P 1 : 36×34×22cm P 1~P 2 : 2.09m
- P 2 : 40×37×20cm P 2~P 3 : 1.84m
- P 3 : 39×38×26cm P 3~P 4 : 2.10m
- P 4 : 34×32×23cm

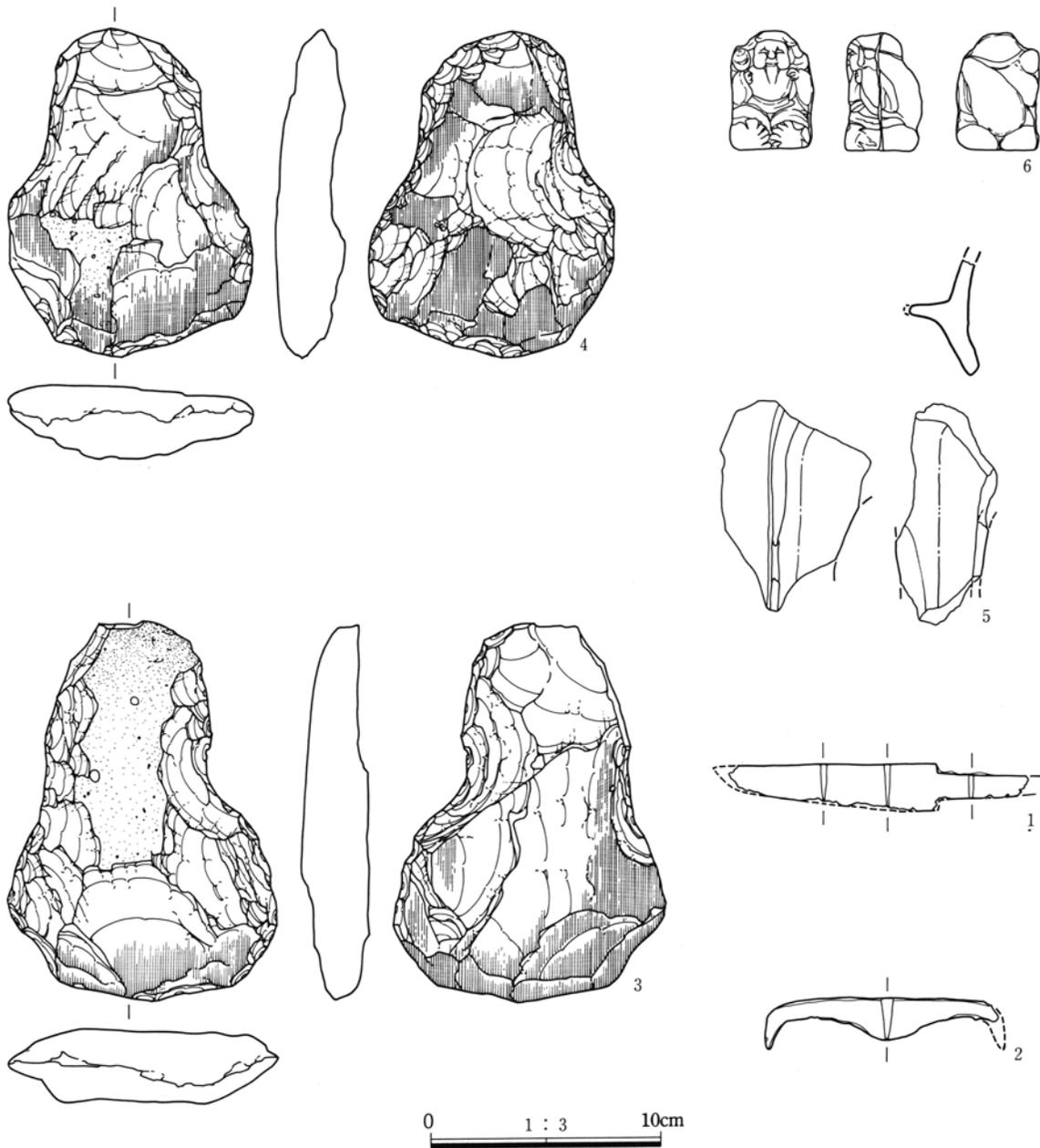


第229図 1号井戸及び柱列状遺構

6 1号集石遺構 写真 PL-66、79

本遺構はE~G-14~19グリットに位置する。耕作の妨げとなる軽石や地山の礫を積み上げる、又は寄せ集めることにより形成された集石遺構と考えられる。遺構内部には石垣状に組まれた部分が数ヶ所あり、長年に渡って形成されていったことが窺える。各層に渡って、As-A軽石が混入していることから、As-A軽石降下以降に集石が始まったと考えられる。形状は長軸を東西にとる台形で、規模は長軸

で約19m、最大幅約8m、最小幅約3m、最大高約0.6mを計る。遺物として置き竈破片、石鍬など出土している。



第230図 1号集石遺構出土遺物

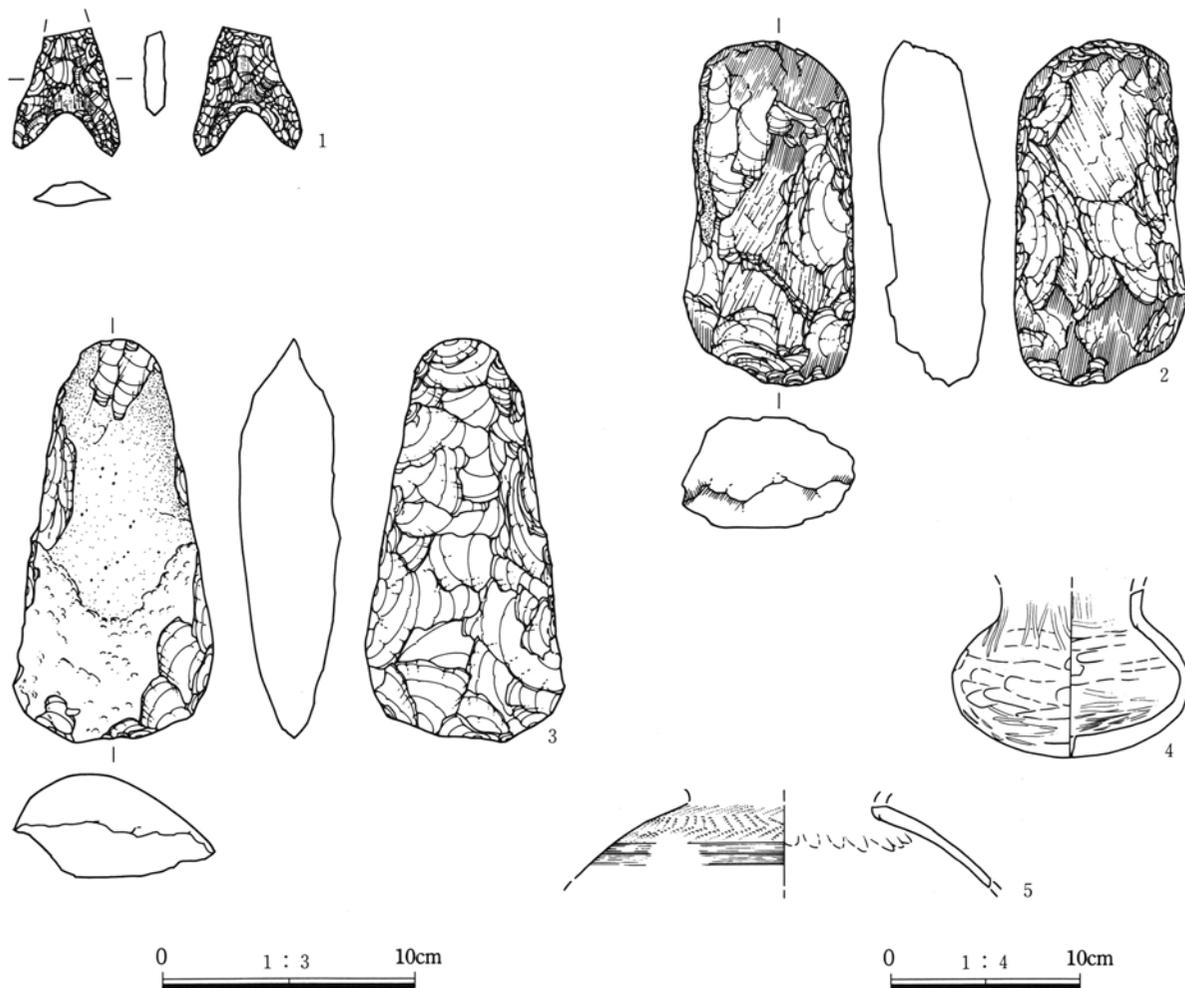
7 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物や、遺構からの出土であっても明らかに時期の異なる遺物についてこの項で一括して扱う。

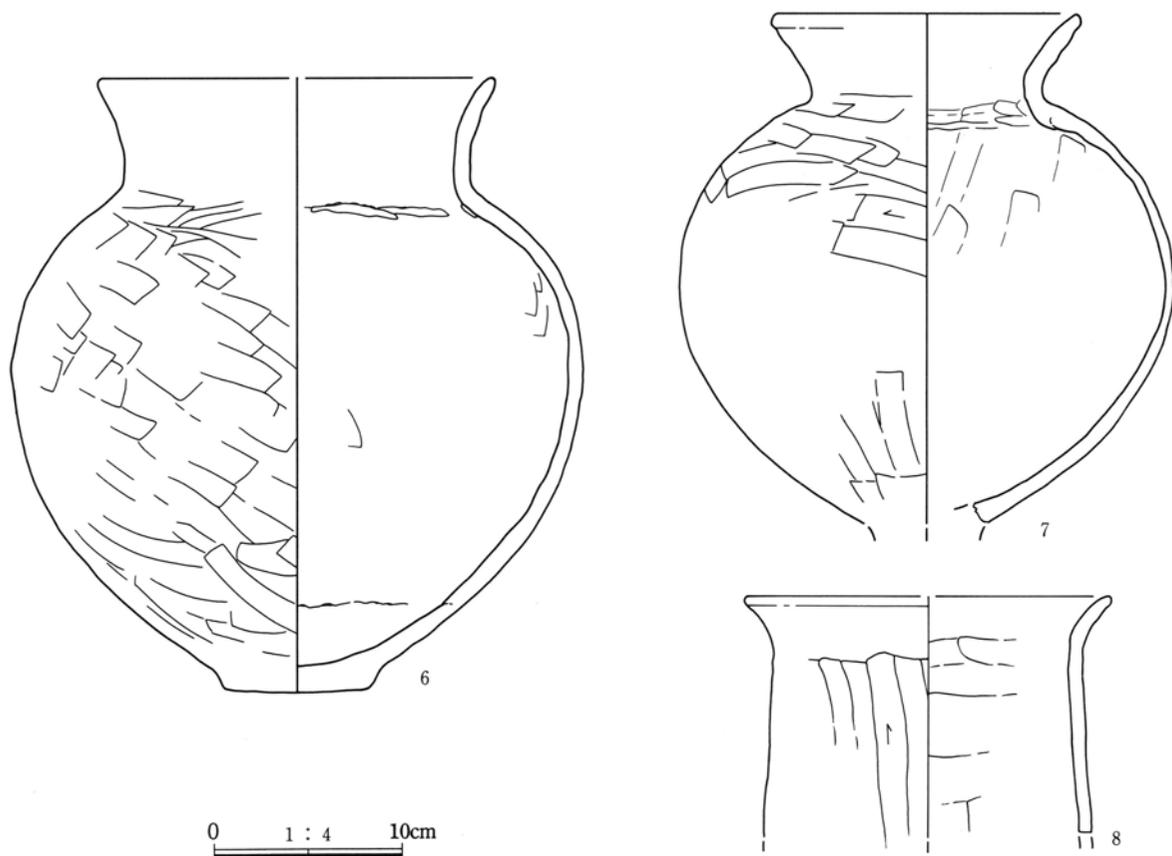
1の石鏃は黒曜石製で、19号住居埋没土中より出土している。黒曜石はその他に剥片が1片出土しているのみである。打製石斧は2点を図示したが、他にも2点が出土している。その他石器類は、使用痕ある剥片等が数点出土している。

土器は古墳時代のもを5点図示した。4、6、7は出土地点は異なるが、それぞれ集中した状態で出土した。遺構に伴うものかと思われ精査したが、遺構は確認できず、遺物のみを取り上げた。その他

図示できなかった土器類は古墳時代のもが多く、古式土師器から後期のもまでである。また、弥生土器の出土もやや多くみられたが、陶磁器類の出土は少なかった。



第231図 遺構外出土遺物(1)



第232図 遺構外出土遺物(2)

遺構外出土遺物観察表

No	器種	計測値 cm	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土②焼成③色調④その他
231図-1	石鉢	長 (1.6) 幅 1.35	17住埋没土	凹部無茎。両面の中央に局部磨製と思われる縦位擦痕。	①黒曜石。④先端部欠く。
231図-2	打製石斧	長 13.4 幅 6.7	1号墳周堀内	厚手。刃部不明瞭。	①珪質頁岩。④完形。
231図-3	打製石斧	長 15.9 幅 7.7	表採	自然面広い。刃部摩滅し不明瞭。全体にやや風化している。	①硬質泥岩。④完形。
231図-4	小型壺	頸 (7.6) 胴 (12.6)	1号墳上層8片 図示部1/2	器面摩滅し整形痕不明瞭。ヘラ磨き痕僅かに残る。内面仕上げ丁寧で平滑。	①F。微細な雲母粒目立つ。②普通。 ③橙5YR6/6。内外面ほぼ同様。
231図-5	壺	頸 (10.6)	J-34G 8片 図示部1/4	肩部に綾杉状の列点文のち、7本一単位のハケ目状沈線二単位。	①A。混入物小粒で少ない。②やや硬調。 ③橙5YR6/6。内面彩度欠き、断面灰色おびる。
232図-6	壺	口 (21.3) 頸18.3 胴30.4 底 7.6 高32.7	土器集積内の約60片 2/3個体	外面削りは細かく強い。内面不明瞭だが比較的平滑。頸部に磨きに近いナデ。	①C。混入物荒い。②普通。 ③にぶい黄橙10YR6/4。ほぼ同様。
232図-7	壺	口16.4 頸23.4	土器集積内37片 口1/2 胴1/3	底部が厚い台付きではなさそう。内面頸部に接合痕残る。	①B。②普通。 ③にぶい黄褐10YR5/4。内面淡い。
232図-8	甕	胴(26.2) 口 (19.6)	E-25G 5片 図示部1/8	外面やや強い削り。内面比較的丁寧なナデで平滑。	①C。混入物は雑多。②やや軟調。 ③にぶい赤褐5YR4/4。④破損後に二次被熱。

第5章 福島鹿嶋下遺跡

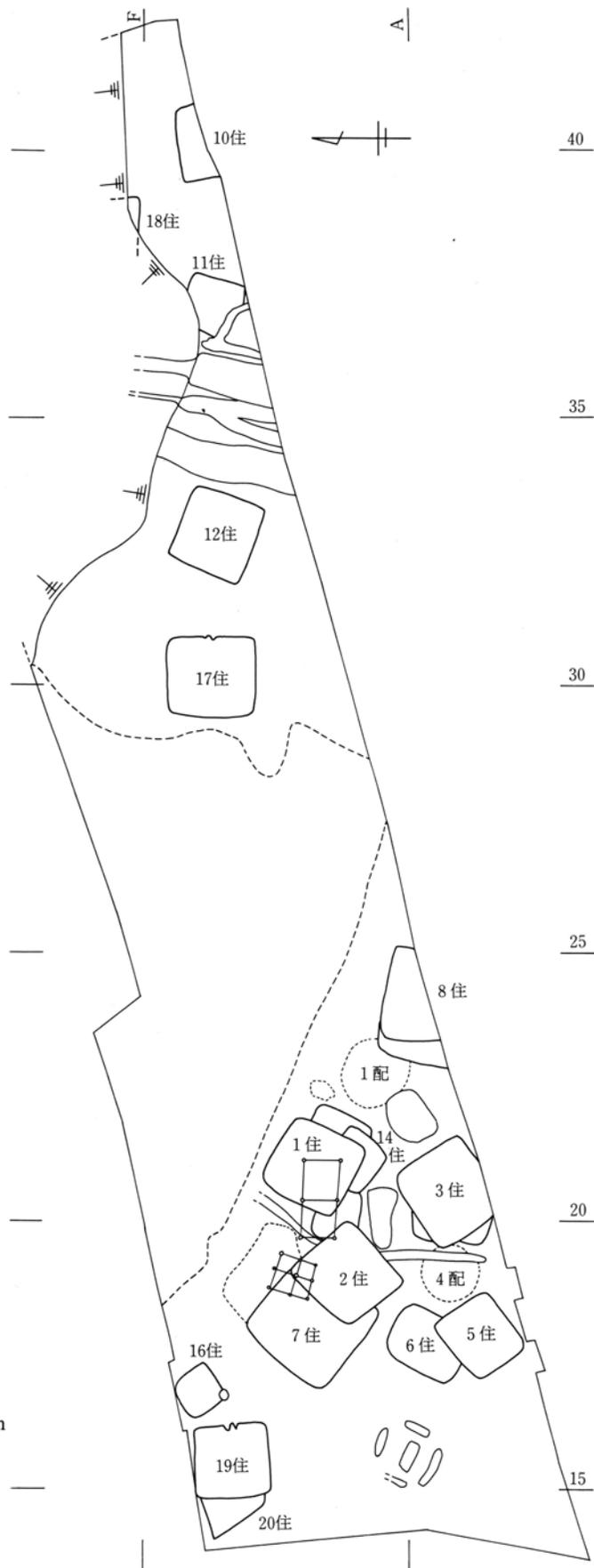
1 遺跡の概要

遺跡は北側を東流する鑓川の段丘崖線直上付近にある。西側は小さな谷地形を隔てて福島駒形遺跡に接している。遺跡付近は数回の洪水にみまわれているようで、調査した以外にも多数の遺構が流されて消失したものと思われる。第233図の破線内は洪水で堆積した礫まじりの土砂で覆われていた。調査範囲は集落のある台地から東側まで連続した範囲であったが、10号住居以東は洪水層によって削平されており、遺構は確認できなかった。

縄文時代と弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落が主な遺構となる。田篠塚原遺跡や福島駒形遺跡で古墳が築かれた時代に集落が途切れるのは、福島駒形遺跡と同じ様相である。

縄文時代の遺構・遺物は後期が中心で、5基の配石遺構を調査したが、この中には敷石住居が含まれるようだ。弥生時代以降の集落の埋没土中に縄文時代遺物の混入が多く、調査した以外に多数の遺構が後世に壊されたものと思われる。

弥生時代以降の集落は20軒の竪穴住居を調査した。弥生時代には磨製石鏃、古墳時代には滑石製品の工房跡が含まれており、福島駒形遺跡の古墳時代滑石工房跡を合わせ、鑓川流域の古代集落の様相を示す良好な資料が発見できた。



第233図 福島鹿嶋下遺跡全体略図

2 縄文時代の遺構と遺物

1 配石遺構

縄文時代の遺構には不明瞭のものが多かった。配石遺構と名付けて5基を調査した。整理・報告段階でも調査時の名を継承したが性格は一様でない。

1号配石 (第234~236図)

礫の集中部分として調査を開始した。この段階で1号配石と名付けたものだが、炉の存在より竪穴住

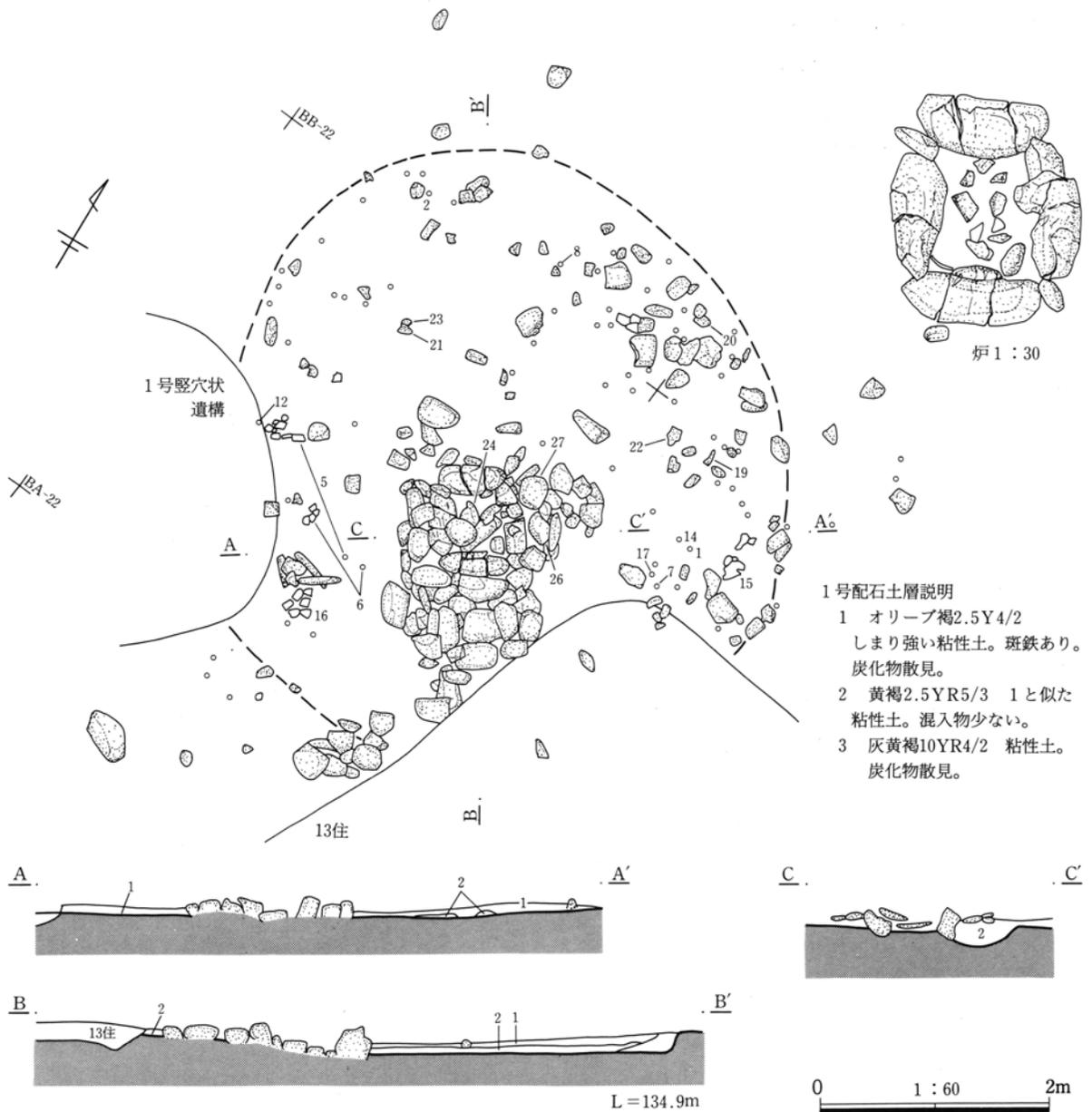
居と考えられる。

位置 BB-23グリッド

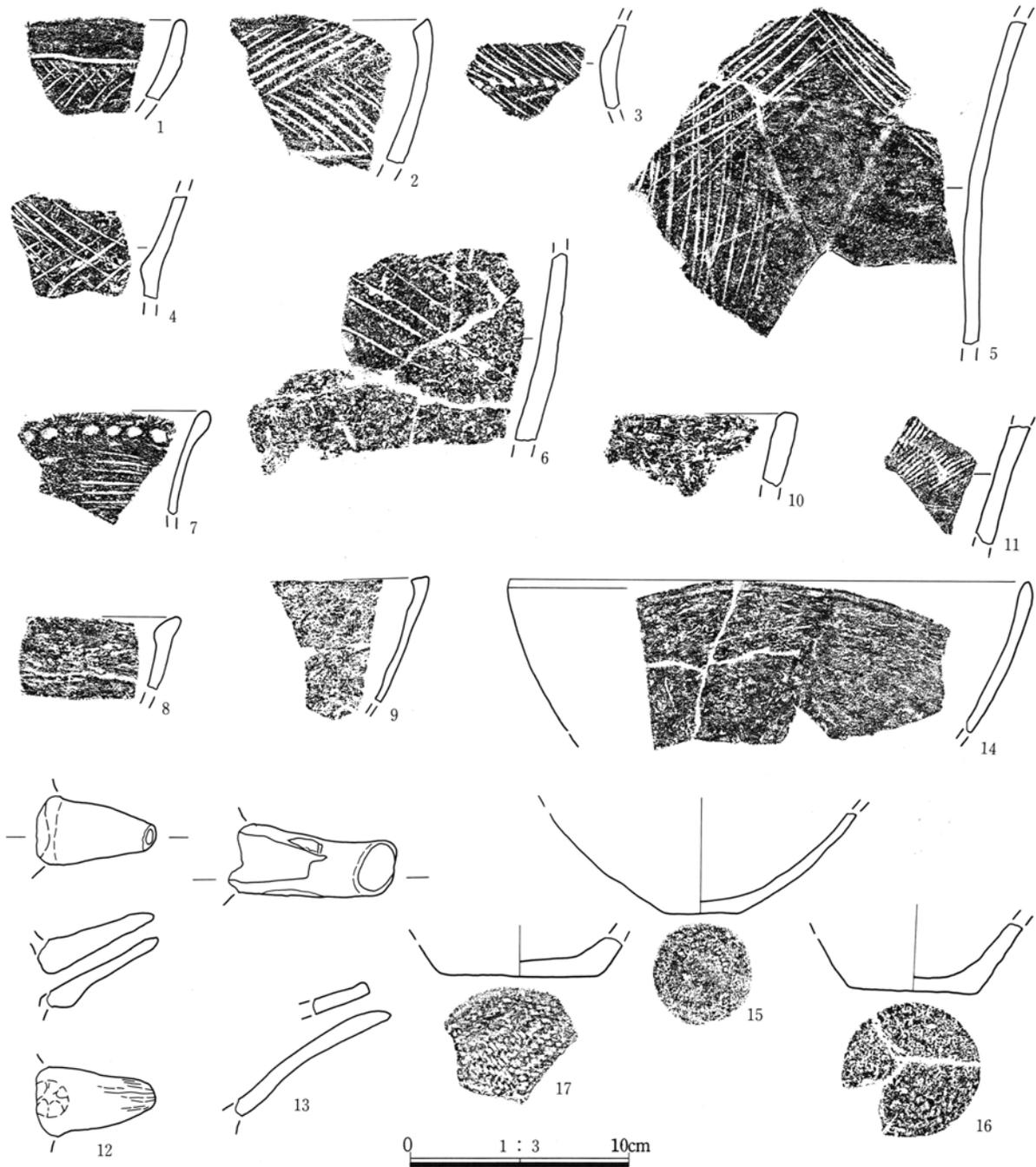
規模 礫の分布範囲より楕円形のプランを想定した。

軸方向 N-31°-W (炉)

炉 4個の長細い自然石を長方形に組んだ炉が、想定される住居プランの中央やや南東寄りにある。炉石は被熱により著しく赤変劣化し、すべて割れていた。炉の東側に不明瞭な落ち込みがある。炉床部分は床面と同一レベルであった。



第234図 1号配石



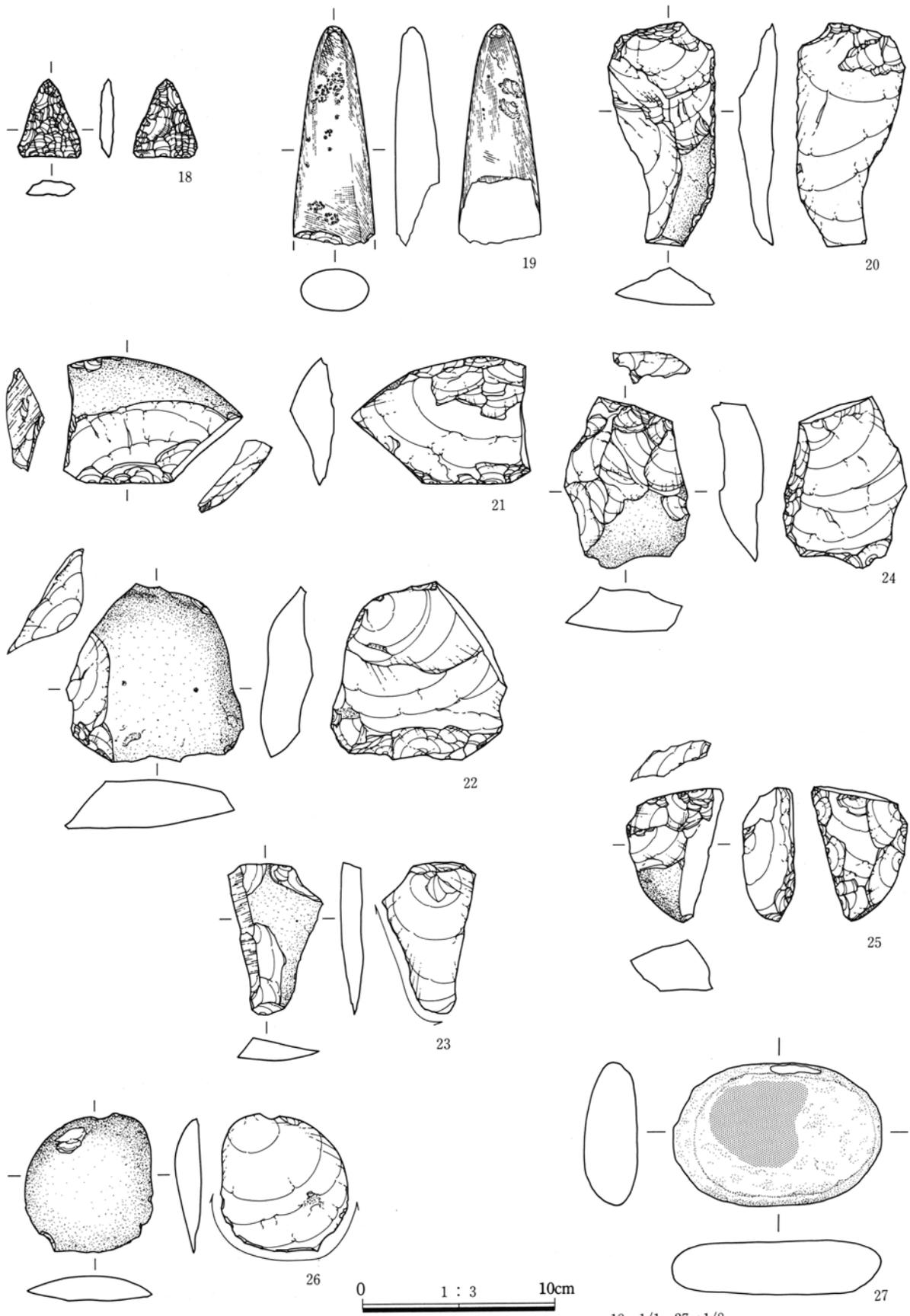
第235図 1号配石出土土器

床 面 ローム状土中にあるが、礫下でも礫のない部分でも、踏み固めや床の汚れ等は確認できず、不明瞭なものである。礫や遺物の分布位置からレベルを想定した部分が多い。

その他 柱穴、壁溝等は発見できなかった。なお、重複する7・13号住居には縄文時代の遺物や礫の出土が多く、本住居から流れ込んだものと考えられる。

遺物の出土状態 想定住居域の全体に散在していた。

土器17点、石器類10点を図示した。土器では完形近くに復元できるものはない。埋甕や炉体土器も確認できない。7・13号住居から出土した縄文時代遺物には石棒（P L247-15）等がある。図示した以外にも剥片23点、加工痕や使用痕のある剥片4点などが出土した。



第236図 1号配石出土石器

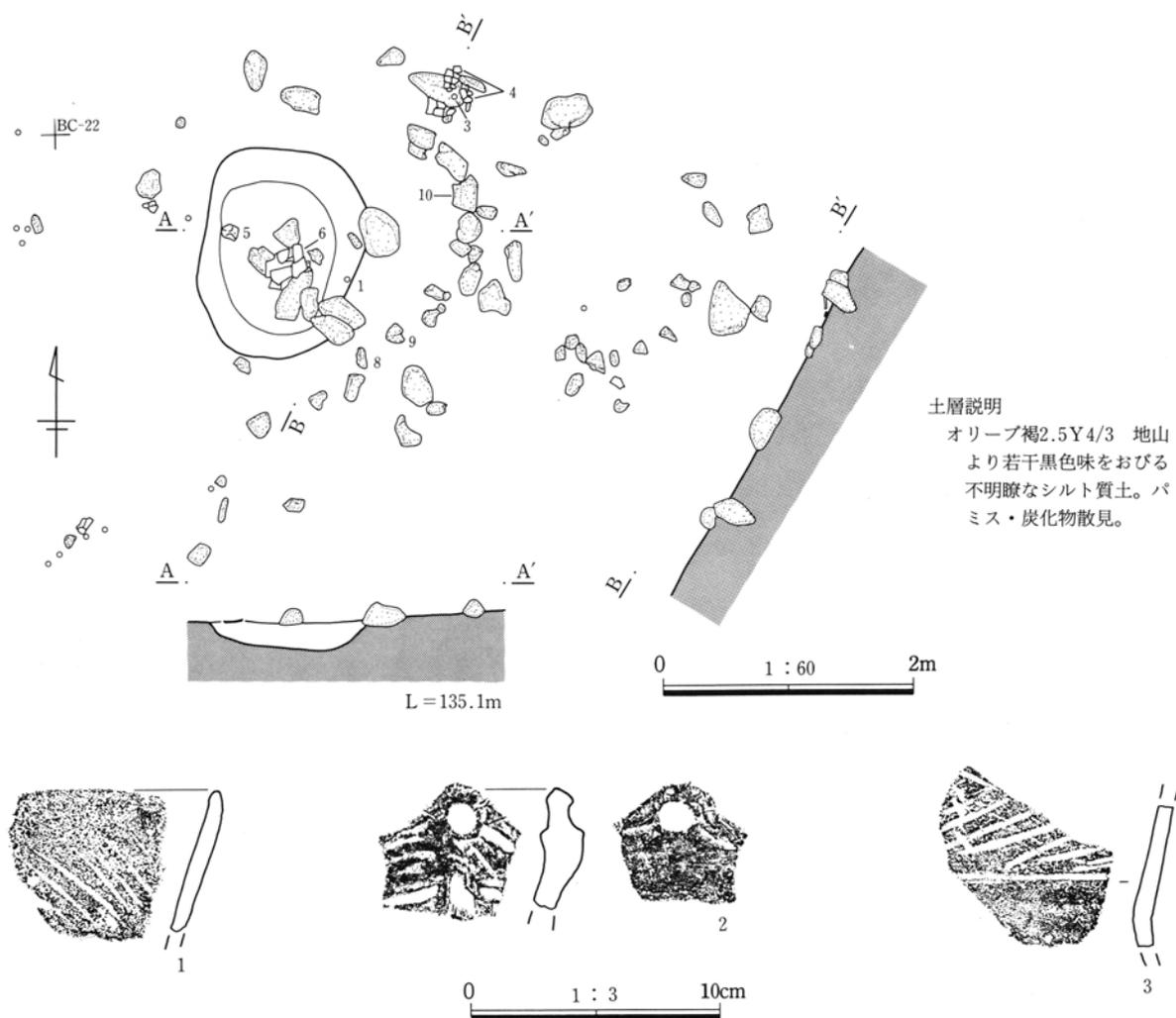
2号配石 (第237・238図)

直径4mほどの環状石列の一部となる可能性のある遺構として調査した。この付近はすぐ北側まで流路による攪乱を受け、地山の礫の多い所でもあり、全容を明確にできなかったが、弧状に並ぶ石列は人為的なもので、環状に並んでいた可能性もあろう。

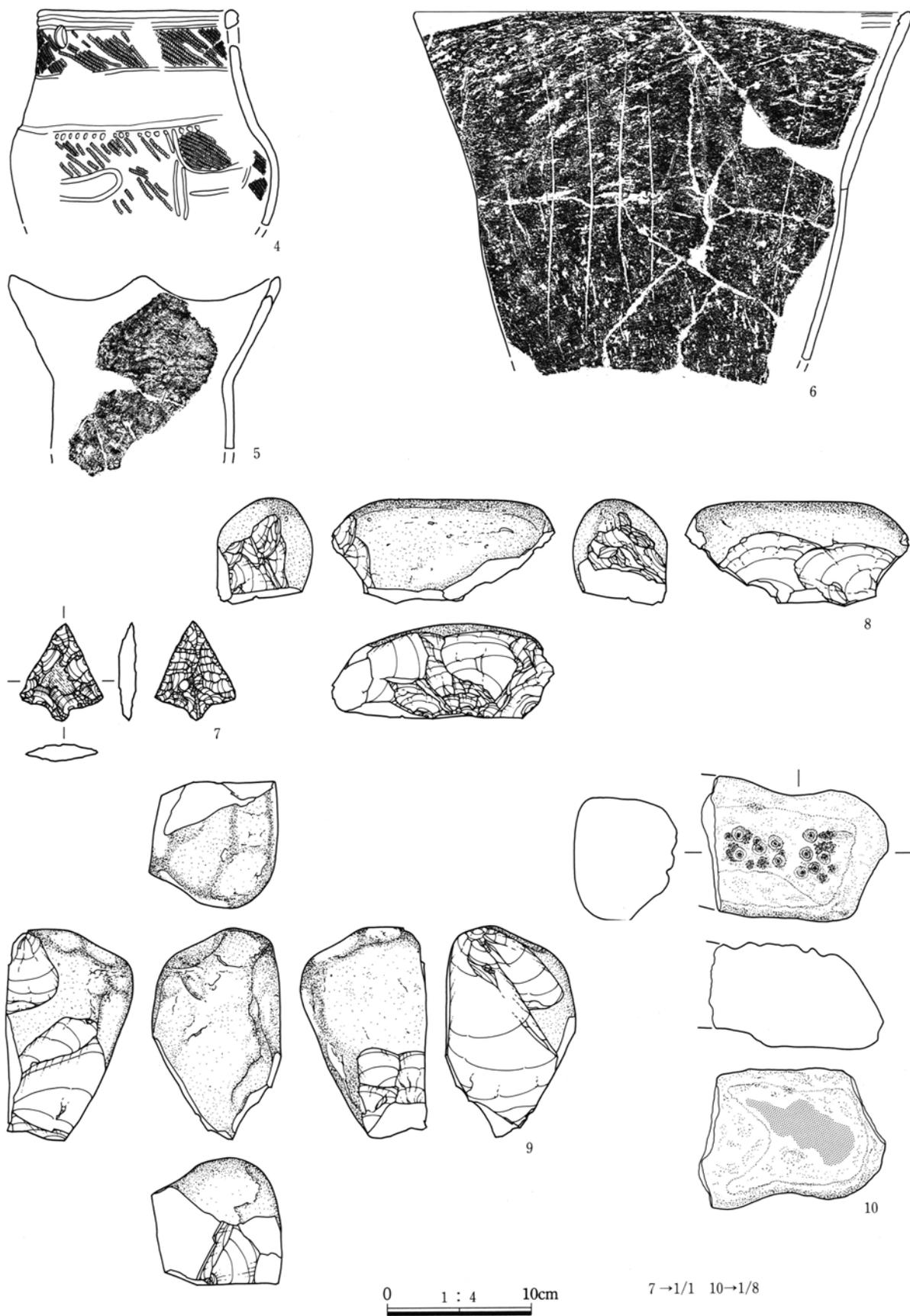
位置 BC-21グリッド

その他 石列の中央付近に径168×132cm、深さ25cmの土坑状掘り込みがある。埋没土内には炭化物粒もみられたが、炉に見られるような焼土・灰は含まれていない。柱穴、壁溝等の施設は一切確認できなかった。南側に性格不明のピット群があったが、本遺構に伴うものとは思われない。

遺物の出土状態 耕作土除去後すぐに確認できた遺構で埋没土はほとんどない。遺物も本遺構に確実に伴うものか不明瞭であるが、想定遺構範囲の遺物として土器6点、石器4点を図示した。土器は他の遺構に比べて大きな破片の出土が目立つ。石器では10の多孔石は石列内に組み込まれていたものである。図示した以外には磨石の可能性のある拳大の円礫が出土している。



第237図 2号配石および出土土器(1)



第238図 2号配石出土土器(2)・石器

3号配石 (第239~241図)

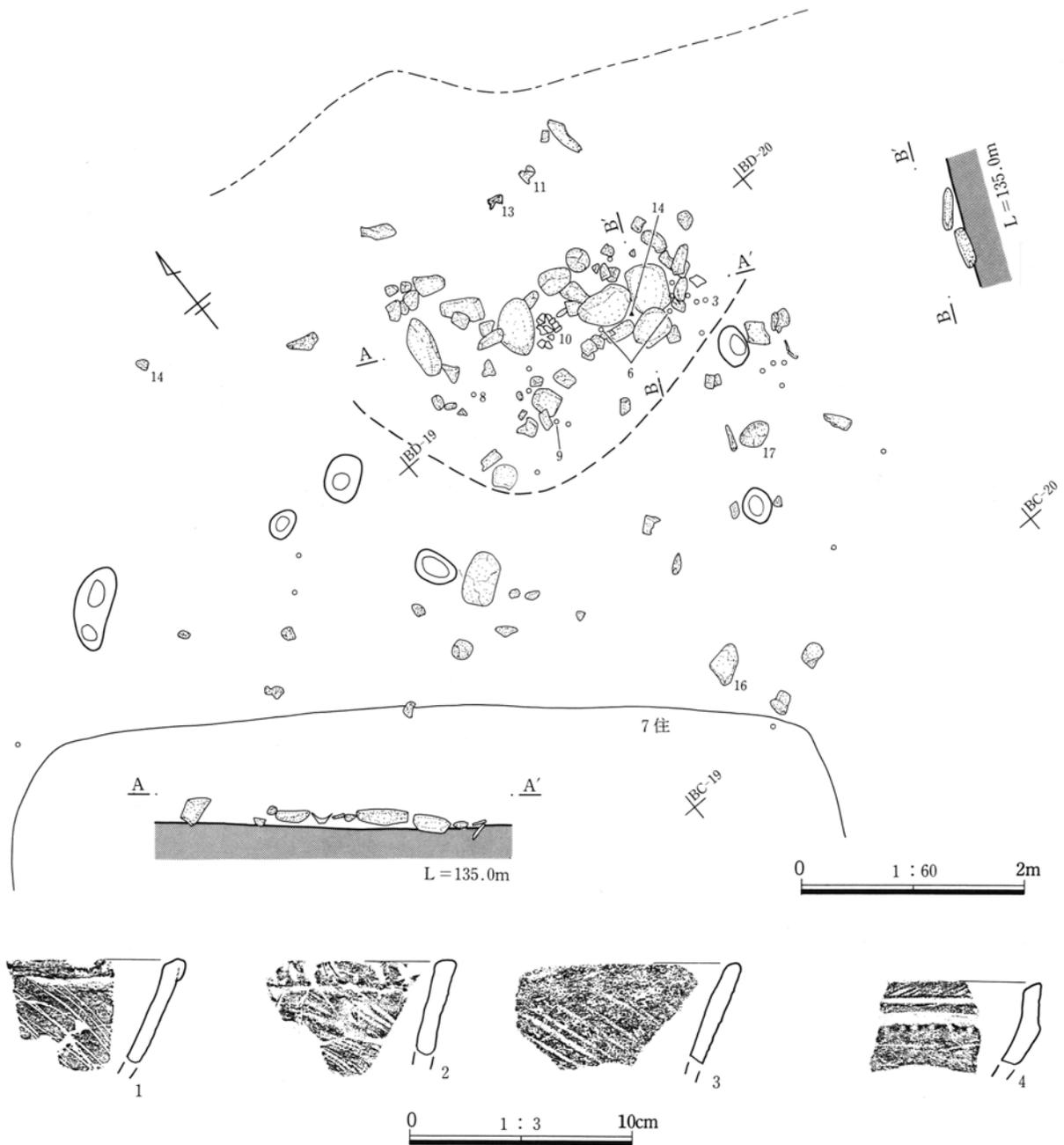
扁平な自然石の平坦面を並べた遺構として調査した。北側は旧流路によって削られている。

礫の間や周辺から縄文時代の遺物のみがややまとまって出土しており、縄文時代の敷石住居を想定したが、床面の踏み固めや炉・柱穴等の施設は確認できず、きわめて不明瞭なものである。図中の破線部分は遺物出土の多い範囲を示したものである。

位置 BD-15グリッド

その他 周辺から時期や性格の不明な小ピットが発見されたが、柱穴状の配置となるものでもなく、性格は不明である。

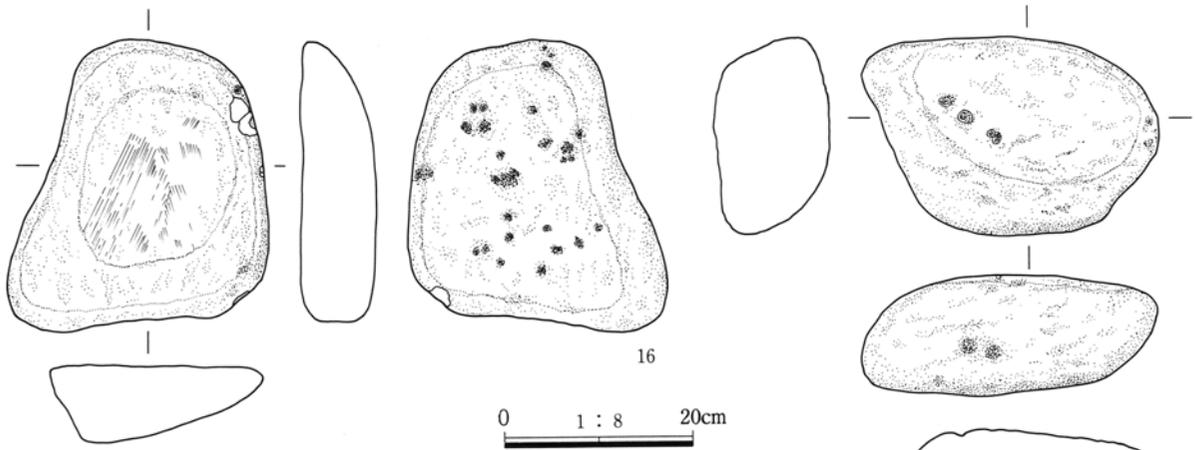
遺物の出土状態 土器10点、石器4点を図示した。土器は2号配石同様にやや大型破片が出土している。図示した以外にも剥片28点等、出土遺物は多い。



第239図 3号配石および出土土器(1)



第240図 3号配石出土土器(2)・石器(1)

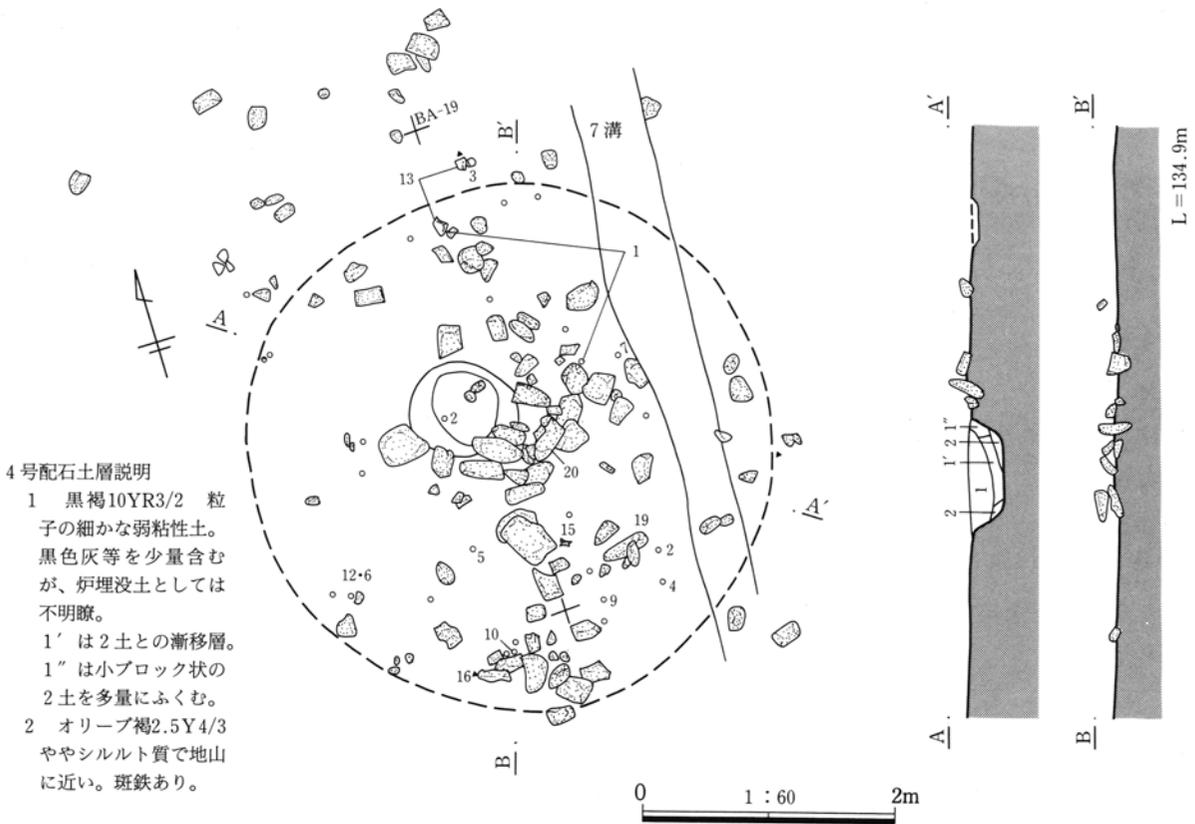


第241図 3号配石出土石器(2)

4号配石 (第242~244図)

礫の集中部分として調査を開始した。遺物と礫の分布範囲から直径約4.2mの円形に近いプランを想定し、竪穴住居の可能性のあるものと考えた。礫は敷き詰めた状態ではなく、不明確なものである。

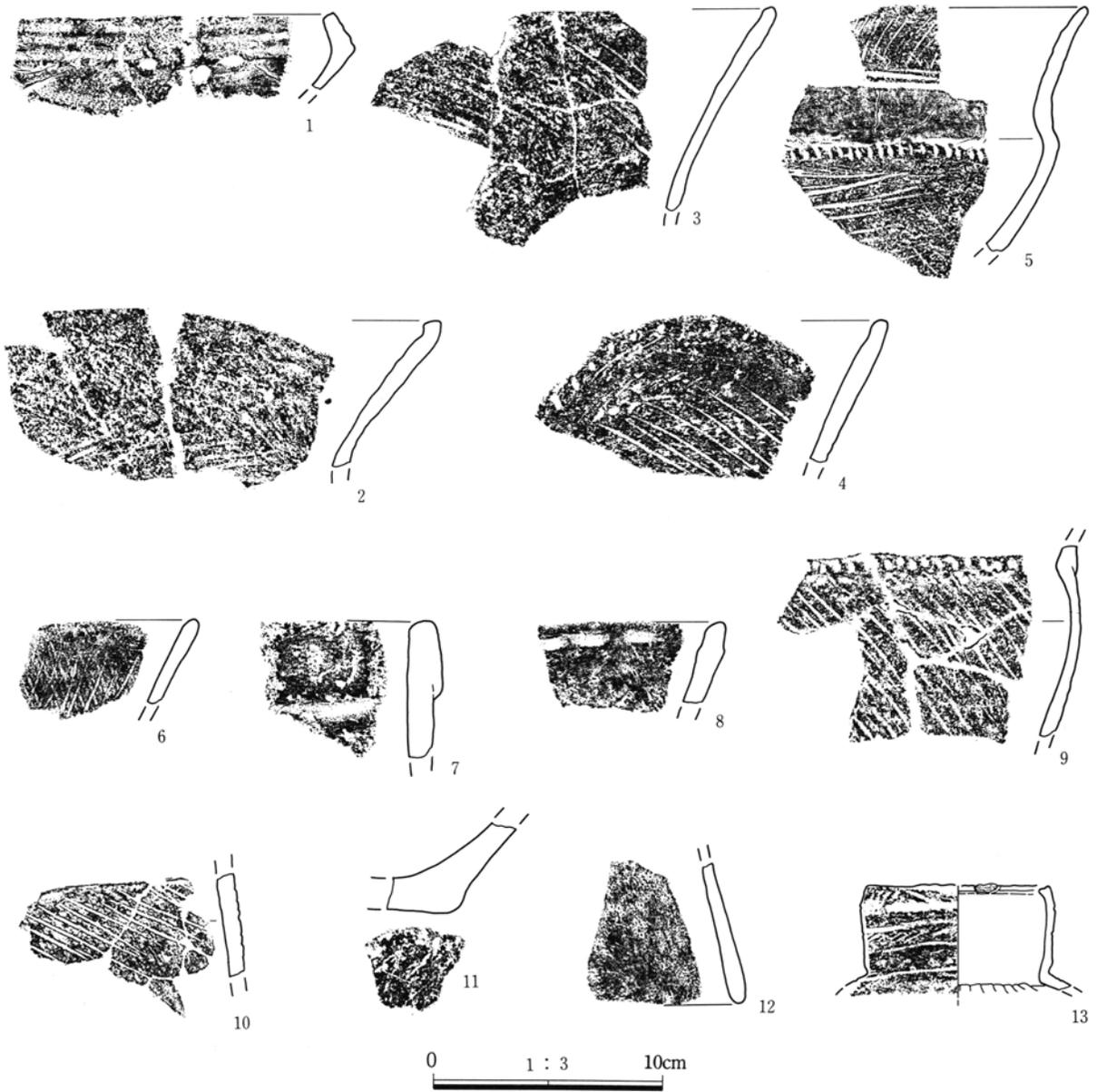
位置 BY-19グリッド



4号配石土層説明

- 1 黒褐10YR3/2 粒子の細かな弱粘性土。黒色灰等を少量含むが、炉埋没土としては不明瞭。
- 1' は2土との漸移層。
- 1'' は小ブロック状の2土を多量にふくむ。
- 2 オリーブ褐2.5Y4/3 ややシルト質で地山に近い。斑鉄あり。

第242図 4号配石



第243図 4号配石出土土器

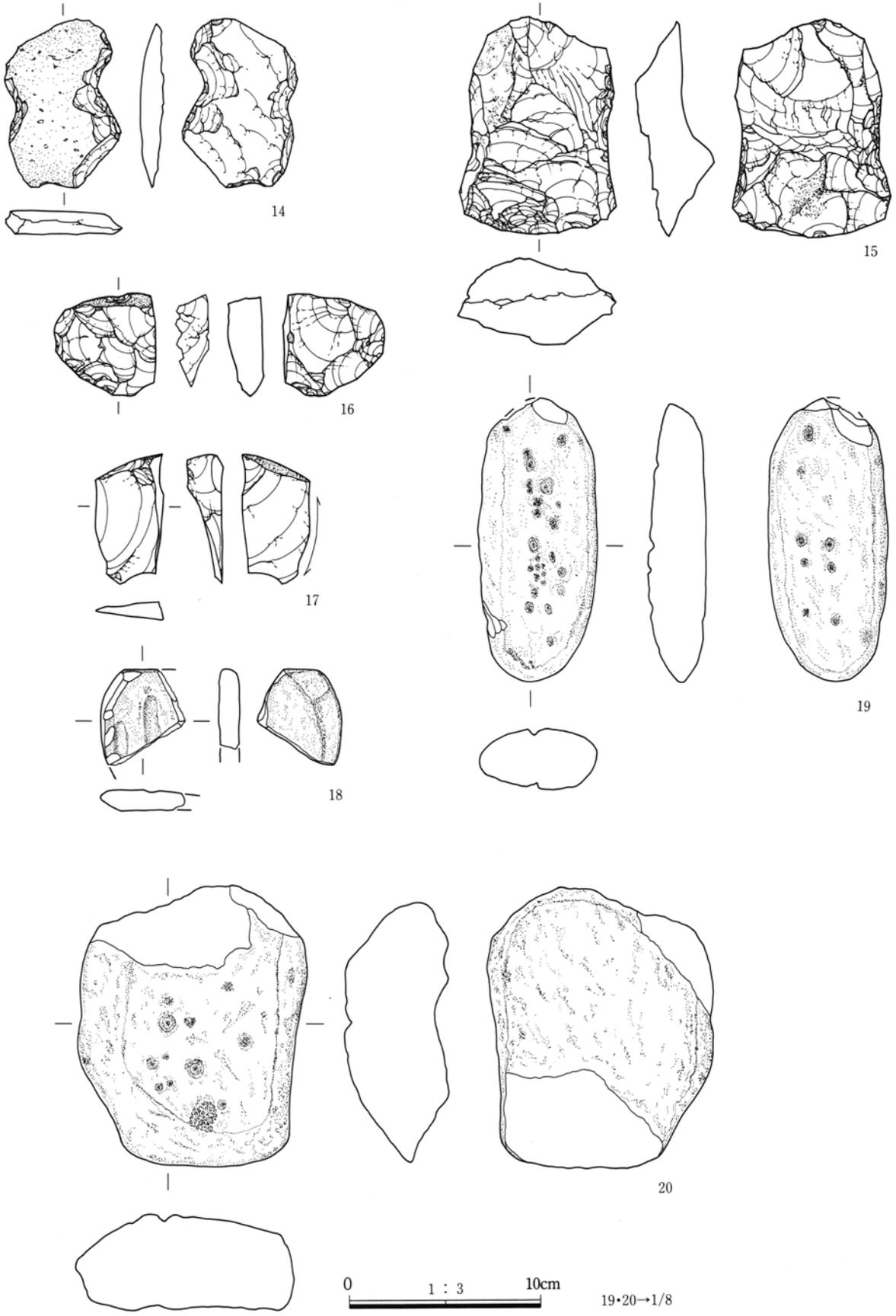
主軸方向 N-40°-W (炉)

炉 想定したプランの遺構中央やや北寄りに炉となる可能性のある径90×75cm、深さ28cmの掘り込みを調査した。埋没土に焼土や炭化物の集中は見られず、明瞭なものではない。周辺にやや扁平な礫が多く、炉石の可能性もあるが、被熱の痕跡はあきらかではない。

その他 明瞭な床面を確認することはできなかった。また柱穴、壁溝等の施設も発見できなかった。

遺物の出土状態 遺物は想定した住居のほぼ全域に

散乱するようにして出土した。このうち土器13点、石器7点を図示した。土器類はいずれも小破片である。縄文時代後期掘之内式期のものである。図示した以外では土器は少なく、石器類には22点の剝片、多孔石破片1点などがある。



第244図 4号配石出土石器